

六花、欠けることなく

ふみどり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

警察学校組との友情もの。彼らのなかにひとりオリ主が加わります。

基本能力値と顔面偏差値は素晴らしいけど色々とワケありの柊木旭が主人公。この主人公は「子どもは大人が守るもの」という主義です。そういう意味で原作キャラとぶつかることもあります、後味の悪いものにはしません。思いつきり原作を改変しますのでご注意ください。

支部にて完結済みですが、劇場版などの情報を加味して書き直し。でもやつぱり捏造過多。基本のストーリーは支部のものと同じです。警察ほかあらゆる組織について、現実に即していない部分が多くあります。ご了承ください。

ドラマ「相棒」とのクロスオーバーではありますが、たぶん知らなくとも読める。

どうか一生仲良くしていてほしい。

続編：桜の矜持（<https://syosetu.org/novel/296875/>）

確率1%のif話：ある奇跡の話（<https://syosetu.org/novel/296871/>）

他ジャンル自作品とのクロスオーバーを含む番外：<https://syosetu.org/novel/300029/>

目

次

序 警察学校

2

8 1

再会

3

4

5

6

7

8

9

9.

10

11

12

13

14

15

16

17

1

2

3

4

5

6

出逢い

閑話

閑話

閑話

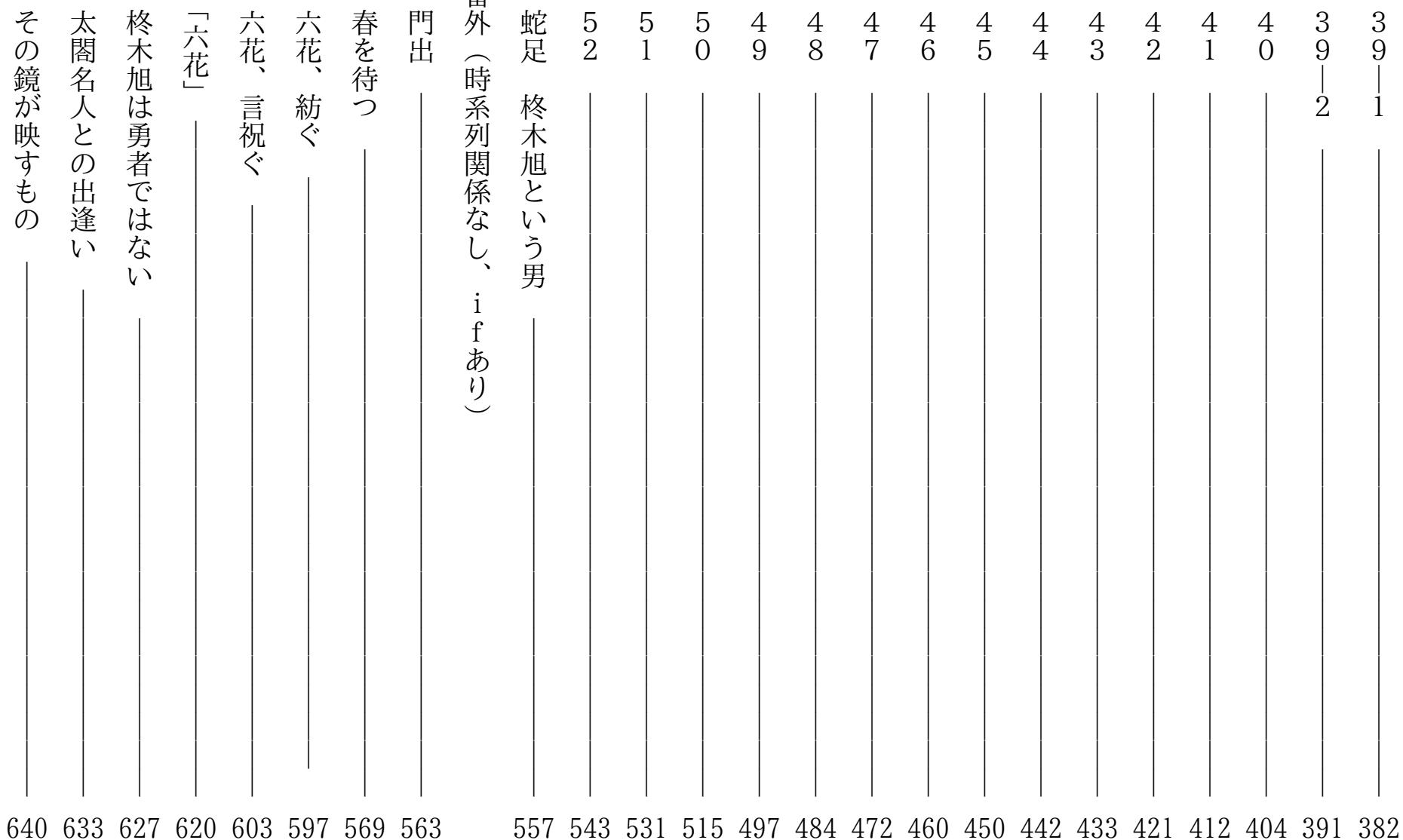
夏の六花

幸福論・裏

幸福論・表

164 161 153 147 138 134 125 118 107 99 92 89 70 65 53 43 33 25 19 8 1

3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	対 組 織	3 1	3 0	2 9	緋 色	閑 話	2 8	2 7	2 6	2 5	2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	2 0	1 9	1 8
371	365	352	344	334	324	314		306	296	286		279	271	262	249	239	220	214	207	200	191	184	178	170



遠慮のかたまり

柊木旭襲撃事件

深夜パトロール実習の話

泣き虫の鬼

次なる事件

六花、惚氣る

髪を切る話

いつか、その隣に並ぶ日まで

宵の一幕

今を生きる

答えなき問い

系譜

ポケモンクロス①

ポケモンクロス②

個性『柊木旭』

たすけろください

のこされたもの

大晦日

どうか、貴方に幸福を

墓参り I F

運命の王子様

柊木本丸① とうらぶクロス

序 警察学校

1

よく晴れた空に流れる春一番。運良く見頃の重なった桜の花びらが、風に乗つて空を流れしていく。入校式の日に桜が見られるなんて、何とも幸先が良い。

できる限りの準備は重ねてきた。警察官として、社会正義を守る一員として、為すべきことを為すために。理不尽のなかを生き抜き、自らの目的を果たすために。

「……楽しみだ」

どうせ、背負うものは少ない身だ。

精一杯、自分の思うままに咲いてみようじゃないか。

*

警察学校には男が多い。女性ももちろん在籍しているが、男女比はすさまじかった。あっちを向いてもこっちを向いても男ばかり。そもそも恋愛禁止ということもあって、特に意味のないやりとりでも男女の交流には気を使うところがある。正直なところ、俺としては非常にありがたい環境と言えた。

「柊木、今日の授業でやつたところなんだが、少しいいか?」

「ああ」

学習室ごとに割り振られる班にも男しかおらず、何とも気楽なものだつた。話しかけてきた降谷のテキストに目をやり、今日の授業を頭の中で振り返つた。

「あ、待つて柊木、そこ俺も聞きたい」

ひよいつと降谷の肩口からのぞき込んできた諸伏に続き、何だ何だと周囲も続く。連なつている様子がカルガモの親子のようで、何だか面白かつた。

「ああ、そこ俺もよくわかんなかったんだよ、柊木わかんのか?」

「おせーておせーて」

「俺も教官に質問に行こうと思つてたんだよ」

松田に萩原、それに伊達。それぞれが得意な分野をもつてゐる、頼りになるチームメイト。俺なんかにも気軽に接してくれる気の良いやつらだ。

同じ班になつたのが皆で良かつたと、俺は心から思つてゐる。

*

最初に話したのは降谷だつた。

五十音順の関係で部屋が隣になり、荷運びのときに目が合つたのがきっかけだつた。金糸の髪と褐色の肌は外国の血を思わせたが、警察学校に入ってきたのだから日本国籍をもつてゐるはず。たぶんあまり気にしないほうがいいだろうと思ひながら、俺は笑顔を向けた。にこり、と同じように笑顔を返される。

「ああ、隣の部屋の。俺は降谷零だ、よろしく」

イントネーションに違和感はない。やはり日本育ちなのだろう。その華やかで整つた顔立ちを見ると、きっと彼も苦労があつただろうと勝手な同情をしてしまう。

「柊木旭、よろしく。荷運び手伝おうか？ 俺はもう終わつたんだ」

そう言つて握手に応えると、一瞬だけ降谷は意外そうな顔を見せた。が、すぐに元の笑顔に戻つて頷いた。たいした荷物もないのに頷いてくれたのは、きっと俺が話すきっかけを作ろうして手伝いを申し入れたことに気づいてくれたからだろう。よく気のつくやつというのが第一印象だつた。

ちなみに後になつて最初の意外そうな顔の理由を聞くと、外見が外見だから物珍しげに見られることのほうが多く、ナチュラルな対応をされることが少ないからだと苦笑していた。やはり苦労は多いようだ。

「諸伏景光、よろしく」

無表情気味の自己紹介だったからクールなやつなのかと思ひきや、ただの人見知りと無表情だと猫目が目立つからそう見えただけらしい。慣れてくるとよく話すし笑うし、少し控えめなところのある気遣い上手のフォロー役だ。火の付きやすい幼馴染をいつも上手く宥めているのを見ては大変そうだなど思っていたのだが、本人的にはたいしたことではないらしい。

「慣れてるし、実は結構楽しいんだ」

そう本心から言っている様子の諸伏は、控えめなだけでなく実は結構面白がりであるのかもしれない。これは愉快犯の素質があると見えた。

その次に話したのが伊達班長だつた。

「よう、お前細いな！ ちゃんと食つてんのか？」

「術科始まつたらその言葉撤回させてやる」

食堂で早々に喧嘩を売られたのも、もはやいい思い出と言えるだろう。本人曰くそんなつもりで言つたわけではないらしいが、どうも見た目で侮られことが多いだけに流せなかつた。名誉のために言つておくと、俺はちゃんと鍛えているし華奢なわけではない。単純に着やせするだけだ。

そして宣言通り、俺は術科の柔道が始まつて早々に伊達に背負い投げを決めて拍手をもらうことになる。撤回する、とちゃんと謝つてくれたので許した。俺もちょっと過敏に反応しすぎたと反省している。別に伊達の恵まれた体格を羨ましく思つてむきになつたわけではない。断じて違う。

最後に話したのが、松田と萩原。学習室が開放され、班の振り分けが決まつたときに顔を合わせた。

「松田だ」

「萩原研二～ヨロシク！」

言葉が足りなそうなやつと余計なことまで言つてしまいそうなやつ、と対照的な第一印象だつた。この二人も幼馴染だという話を聞いて妙に納得したことを見えている。

アウトローっぽく見えて実際ガラが悪いくせに情に厚く筋を通す

松田と、ゆるく振舞うが周囲のことをちゃんと見て動ける萩原は、お互い欠けているところをうまく補つて見るように見える。

しかしこの二人、片方がストッパーになるわけでもなく結構普通にやらかしてくれるのを、適当なところで止めてやる必要があるのが何ともはや。罰則が連帶責任だつてことをもう少し考えてくれないかな、と笑つて言えば自主的に正座をして説教を聞く姿勢に入るあたりは、まあ、可愛いと思えなくもないのだが。

「さすがにそろそろ懲りてほしい」

「いや萩原^{ハギ}が」

「だつてほら、陣平ちゃんがさ！」

反省の色が見えない二人に少し目を細めて見せると、スミマセンデシタ、と綺麗にそろつた声が返つてくる。仲良いのは大変よろしいのだが、自重はしてほしい。俺はこの二人のこともすごいやつだと思っているし、これからもできたら仲良くしていきたい。だからこそ、ちゃんと釘をさす必要はある。

なるべく優しい笑顔を取り繕い、言い聞かせるように声を紡ぐ。

「俺、ルール破るやつ嫌いなんだ」

即座に二人は顔色を変え、流れるように土下座を決めた。素直でよろしい。

*

零^{ゼロ}が紹介してくれた、柊木旭という男。

遠慮しがちに笑うやつ、というのが第一印象だつた。そつと招かれた人の輪に入り、馴染んでくると安心したように笑い、さらに慣れると馬鹿騒ぎもできるやつ。俺も人見知りな自覚はあるけれど、柊木だつて結構なもんだと思う。そのくせ教官や大勢の前では堂々と発言ができるのだからよくわからない。

柊木と零^{ゼロ}が席を外しているときにそう仲間内でぼやいてみると、萩原がけらけら笑いながら言つた。

「あれは多分、ひとを選んだ人見知りなんでない？」

「……どういうこと?」

「いや見た感じ、仲良くなりたい相手にだけ人見知り発揮してるぽいからさ。仕事上の付き合いでイイやつには別に嫌われてもいいから結構普通にしゃべるし、むしろすばすばモノ言つてる。けどコイツとは仕事離れたどこでも仲良くしたいなー仲良くしてくれる力ナ一つてやつにはおそるおそる近づいて相手の出方見てる感じがすんだよね」

そう言われて今までの柊木の様子を思い返す。確かにしつくりくるものがあった。

「……そう、かも?」

「うん」

「でもそれさ、」

「うん?」

「すぐ可愛くない?」

全員で噴き出し、だよな、と笑つた。

柊木はどちらかというと仲間内の馬鹿を説教するポジションのやつだが、それでもどこか弟気質で可愛いところがある。

「すっぴーしつかりしてるくせにどつか抜けてんだよな」

「びっくりするくらい何でもできるやつなんだがなあ」

「しかも超イケメンなのに」

それ、と再び全員の声がそろう。今まで言うに言えなかつたが、皆同じことを思つていたらしい。

「零^{ゼロ}もキレイな顔してつけど柊木も相当だろ」

「確かにあのふたりは並んでるだけで目を引くな」

「降谷ちゃんが王子様系イケメンなら柊木ちゃんは騎士系のイケメンつつーか」

何その例え、と萩原の言葉に噴き出したが、言いたいことはわかる。零^{ゼロ}は俗にいう「甘いマスク」という感じなのだが、柊木はまだ幼さが残るながらも凜々しい顔立ちをしている。これから歳を重ねていけばさらにそうなつていくだろう。

「……しかし柊木つて、頭良くて頬良くて強くてタッパもあるし性格

もいいとか設定盛りすぎじゃねえか。わかりやすい欠点ねえし」「漫画やドラマに出てきたら夢見すぎつてボツにするレベルだろ」「こんな言い方するとあれだけ、零並み? もしかしたら零以上? に完璧なやつ、多分オレ初めて会ったよ」

幼馴染として長年零の傍にいたが、そんなやつはほかにはいないと思つていた。やはり世間は広いなと思うと同時に、いやでもやつぱり零と柊木は特殊枠だと思いなおす。あんなのが世間に何人もいたら凡人のこちらとしてはたまつたものではない。

「あいつらふたりともすげーもんな。成績いつもデッドヒートなんだろ?」

「降谷は負けず嫌いでめらめら燃えてんのに、柊木は苦笑いで流してるのが面白い」

「柊木ちゃんつてプライド低いわけじゃないんだろうけど、他と比べてひけらかすことはしないよね」

「自分が満足できるレベルに達していればいいって感じかな。大人だ」

大人だなーと声を揃えて四人で笑う。

負けず嫌いな零を温かく見守り、適度に相手をして上手く煽つているところを見ると柊木は確かに人間ができると思う。まあ実際、それだけ零を気に入っているからというのが大きな理由なのだろうけれど。

「ま、同期に面白いやつがいるのはいいな。そのうち皆で酒でも飲みたいもんだ」

「お、いいね。外出できるようになつたら行こうぜ」「柊木つて酔つたらどうなると思う?」

「面白エこと言うじゃねえか諸伏」

あんな完璧なやつも、酒に酔うと意外な一面を見せてくれたりするのだろうか。皆でにやりと顔を見合させたところで、かちやりと学習室のドアが開いた。

「ただいま。なんだよ、楽しそうだな?」

「ただいま。……お前らちゃんと自習してたのか?」

教官に呼ばれて席を外していた、笑顔の柊木と呆れた顔の零。^{ゼロ} おかえりとふたりを迎える。話の流れで気になつた質問を投げる。

「なあ、柊木つて酒強いか？」

「え、弱いけど」

よし飲ませよう、と四人の心の声がそろつたのがわかつた。うつかり素直に答えてしまつた柊木は失敗したと頭を抱え、その肩を慰めるように零^{ゼロ}が叩く。完璧に見える柊木が、時折こうして可愛いところを見せてくれるのは結構嬉しかつたりした。

六人そろつた学習室に、いつも通りの笑い声が響く。

「苦手なんだ。自分でも困つてんんだけど」

眉尻をゆるく下げ、それでも柊木は笑つた。

そんなことを言うときまで笑う必要はないというのに。

*

それは、規律正しい警察学校の生活にも慣れてきたころ。幼馴染の景光^{ヒロコ}のほかにも気のいい友人ができ、今更ながら良かつたと思う。何より、どの分野においてもいい勝負をしてくれるライバルの存在はとても嬉しい。

柊木は能力だけでなく人格も申し分ない。頭に血が上りやすいところがある自分とは違い、いつも穏やか且つ冷静に物事の判断ができる。正直なところ本当に同い年なのか疑わしい。

しかしそんな柊木も、たまに拳動不審になることには気づいていた。それについて本人に確認するべきか、それとも知らないふりをしておくべきか、少しばかり悩んでいる。話したくないことを無理に言わせるつもりはないが、話してくれればサポートできることだつてある。たとえお節介でも、力になれるならなつてやりたかった。

「……降谷、何かあつた？」

と、思つていたのを本人に見破られてしまつたのだから気まずい思いは否めない。最近何か考え込んでるだろと図星を刺され、情けなく思いながら苦笑いで誤魔化す。

「いや、何でもない。少しほうつとしていただけだ」

「ふうん？」

そつが、と柊木は一旦受け止めた。それから一瞬だけ視線を落とし、すぐに顔をあげて困つたように笑う。誤魔化せなかつたか、と反射的に思つた。

「気になつてることがあるんだろ？ 後で話そう」

何となく、何を悩んでいるのかまですでに見通されているような、そんな気がした。

「……僕の思い過(が)しだつたら悪い。あと話したくなかったら話さな
くていい」

「なに、と返した柊木の声は穏やかだった。

「柊木は、……女性が苦手なのか?」

数が少ないとは言え、警察学校にも一定数の女性は存在する。もちらん同期にもいるし、先輩や教官、それに入りの職員。決して警察学校は男だけの場所ではない。

柊木は、女性とすれ違うときはなるべく距離をとるように道をあける。会話をするときはすっと表情が消え、言葉少なに切り上げていた。その外見ゆえに女性の視線を集めることもあるが、そつと隠れるようになんかの影にまわる。要領のいい柊木だから注視していないと気づけないが、ひとつ気づいてしまえば芋づる式にすべてに気づいた。

柊木は、明らかに女性と関わることを避けている。

「……まあ、うん、気づくよな。そのうち言うつもりではあつたんだ」
そして、冒頭に戻る。

僕だけではなくほかの四人もやはり、という顔をしている。どうやら柊木の様子に気づいていたのは僕だけではなかつたらしい。

柊木は言いたくないというよりは少し困った様子で、何から話せば良いのやら、とゆらゆらと頭を揺らしている。

「えーと、……ひとにも言われたことがあるんだけど、俺、どうも死ぬほど女運というものが悪いらしく、……この顔、自分で言つてなんだけど、」

「イケメンだよな」

「イケメンだよ謙遜すんな」

「うんうんイケメンだから自信もつて!」

「……ありがとう」

即座に肯定されてしまい、何とも言い難い顔の柊木は肩を落とすしかない。それだけ整った容姿をもちながら謙遜するほうが嫌味だと

柊木は知つたほうがいい。

「……とにかく、言つてなんだが、うん、モテる。好意をもつてくれれるぶんにはありがたいと思うんだけど、……好意が過剰になつてしまふひとに好かれることが多くて」

「ストーカーでも大量発生したか？」

「陣平ちゃんお口チャツク！」

「ああ、いいよ萩原、うん、そういう感じ。被害者の意味で警察の皆さんのお世話になつたことも一度や二度じやなくて、……三度でも四度でもないというか」

はは、と乾いた笑いが静かな学習室に響いた。笑つてているのはもちろん柊木ひとりだけ。三度や四度でも足りないとは、いつたい今までどれだけ被害に遭つてきたのか。

「ストーカー以外にも、まあ、いろいろあつて」

「……詳細聞いたままずいやつ？」

「詳細話して皆が女性不信に陥つても俺は責任取れないけど」

「すまん言わんでくれ」

「うん、彼女さんがいる伊達の前では特に言いたくないし聞かないほうがいい」

もちろん女性が全員そうだなんて思つてないけど、と慌てたように付け加えるが、伊達はわかつてゐるから気にするなど言わんばかりに首を振つた。僕も長くご両親の事件を引きずつてゐる景光を見ていたからわかる。理屈でわかつていても反応をしてしまうものなのだ。「具体的にいうと、手が届かない程度の距離はほしい。極力会話も避けたいし、過度な視線を感じるのもちよつと辛い。近寄りすぎると貧血起こすし、若干の接触でも震えが止まらない。抱きつかれようものなら号泣、嘔吐、下手すれば失神」

「それはちゃんと病名つけてもらつたほうが」「自己暗示かければ仕事中は何とかもつから」

景光の言葉に首を振る柊木はあくまでも軽い調子。確かに、過度の恐怖症を抱えていれば警察官としての適性がないと判断される可能性もある。気合で誤魔化せる間は病名をつけるようなことはしたく

ないのだろう。

「実際、これでも少しはマシになつてるんだ」「……それで？」

「俺の女性苦手は小学校入る前から始まつてピークは高校だつた。ひどいときは女性が視界に入るだけでパニック起_こしたから」

あまりに歴が長すぎる。いつたいどれだけ不憫な生活を送つてきたのかと目頭が熱くなる。外見については僕もいろいろあつたが、柊木ほどではない。

そんな僕たちの様子を見て、柊木はまた眉尻を下げて笑う。

「いや、頼むから笑つてくれ。むしろ笑い飛ばせよ。妙に同情されるほうが俺は辛い。もうネタとして使え。事情知つてるやつにネタにされるぶんには俺は何とも思わない」

その、少しそよんぼりとした情けない顔。そんな顔をさせたいわけではない。何か言おうと口を開きかけたが、萩原がなるほどと膝を打つほうが早かつた。

「つまり柊木ちゃん、その顔で童貞?」

「よし萩原そこになおれ」

「」^{（）}き、といい笑顔をした柊木の指が鈍い音を鳴らす。

即座に萩原を押さえつけた松田に、天を仰ぐ伊達、頭が痛そうな目元を隠す景光^{ヒロ}。深刻な雰囲気は一瞬で崩れ、学習室にいつもの空気が戻つた。

ぎりぎりと萩原を締め上げる柊木の笑顔に、もう暗さはない。いつもの調子で僕も軽口を投げた。

「大声はまずいから静かに頼むぞ、柊木」

「それは萩原次第かな」

「助けてはくれないんだ!! 同期が薄情で俺哀しい！」

すまないが尊^{はぎわら}い犠牲は黙つていてほしい。

*

そんな柊木のカミングアウトからすぐ、逆に言葉を選んだように見

事に柊木の地雷を踏みぬいた目の前の同期を俺は真剣に殴りたかった。

「どうせそのお綺麗な顔で華々しい生活送ってきたんだろ！」

警察官になるのに顔は関係ないからな、今日は俺たちが勝つからな、と言葉を投げ続けるそいつは、どうも気づいていないらしい。柊木がその言葉を聞いた瞬間、笑顔のまま硬直したということを。

今日行われている教場対抗の体育祭では、日頃の鬱憤を晴らすように白熱した勝負が繰り広げられている。特にうちの教場とある別の教場が僅差でトップを争つており、しかもうちの教官とその教場の教官が積年のライバル同士ということで、ついつい皆熱くなっているところがあった。

目の前のそいつもどうやらそのライバル教場に所属しており、しかも自称その教場のエース、らしい。根っから性格の悪いやつというわけではなさそうだが、いくら勝負事が好きで盛り上げたかつたといつてもそんな言葉を吐いていいはずもない。

さすがに無神経が過ぎる言葉に前に出ようとするが、硬直を解いた柊木の腕がそれを阻んだ。

「……ああ、顔は関係ないな。こつちも負けないよう頑張るよ」

俺よりいくらか背の低い柊木の顔は見えないが、声色的にはいつも通りの笑顔を浮かべているのだろう。そして満足そうに領いた馬鹿が自分の教場の集合場所へ戻つていったのを確認すると、柊木はそのままゆっくりとこちらを振り返る。

「なあ、伊達班長」

「……お、おう」

いつもと何ら変わらない笑顔と声が、何故だか今はものすごく怖い。

「休憩後の競技、確か騎馬戦だったよな」

「そ、そうだな」

「トーナメント方式だつたと思うけど、あの教場と当たるのはいつだつけ？」

「……確か決勝まで残らないと当たらないんじゃなかつたか？」

そつか、と一言呟いた後、柊木の足はゆるやかにうちの集合場所へと戻る。

柊木は確かにいつも通りだ。いつも通りの穏やかな笑顔と声を保っているが、それでも俺にはわかつた。まだ柊木とは数か月の付き合いだが、嫌というほどわかる。

「おーい、騎馬戦に出るやつ、ちょっと来てくれー」

呑気そうな声で、いかにも自分はいつも通りですという顔をして皆を集め柊木。なんだんだと気づかない仲間たちがわらわらと集まつてくるが、正直逃げろと言つてやりたかった。言えない俺をどうか許してほしい。

にここにこと笑顔を絶やさない柊木は、仲間に向けて口を開く。

「俺の事情で悪いんだけど、皆に協力してほしくて」

「柊木がそういうこと言うの珍しいな」

「何、どうしたんだよ」

「ああ、ちょっと叩き潰したいやつがいてさ」

は、と誰もが柊木の口から出た言葉が信じられずに硬直する。無謀にも聞き直そうとした勇者は、柊木の絶対零度の視線を受けて凍り付いた。何人かの視線が助けを求めるように俺に向くが、俺はただ首を振るしかない。

「手伝つて、くれるだろ？」

完全にブチ切れた鬼の姿が、そこにはあつた。

*

「真ん中、騎馬の堅い組を配置してあつたよな。先陣きつて飛び込んでくれ。ただし横並びは絶対に崩さずに、後ろはとられないように注意な」

「左翼は一旦様子を見て、正面の敵がまつすぐ突っ込んでくるなら少し退き気味で。だけど敵が一の足踏んでるようなら思いつき飛び込んでいい」

「右翼、真ん中で突入してる味方の背後を取られないように防御メイ

ンで動こう。もちろん狙える隙があれば躊躇わざいつてほしいけど」「俺が後ろのほうから全体を見て指示を飛ばすよ。……ごめんな、偉そうなこと言つてるのはわかつてるんだけど、従つてくれるかな」少し申し訳なさそうな顔を作つているが、副音声で「従わなきやどうなるかわかつてるよな?」と聞こえたのはおそらく俺だけではない。全員がひきつった顔で柊木の指示を頭の中に叩き込んでいるのがわかつた。

俺は自前の癖毛をくしやりとかきわけて、ひとり遠い目をしている伊達にそつと近寄つた。同班の連中も気になつたのかこつそりと近づいてくる。

代表して俺が柊木に聞こえないよう小声で尋ねた。

「……おい、何があつた」

「松田……いや、俺も無神経な言葉だと思つたんだが、俺が思う以上に柊木にとつては地雷だつたというか……」

「なんだよ歯切れ悪いな」

そして伊達から事情を聞き、全員でうなだれる。

馬鹿か。馬鹿だ。馬鹿なのかな。馬鹿なんだろう。馬鹿なんだろうなあ。見事なほどに意見が一致した。馬鹿の五段活用。

そいつもまさかその「お綺麗な顔」をしたやつがその顔のためにさんざん苦労してきて女性恐怖症まで抱えているとは思いもしなかつたのだろう。とはいって、知らなかつたから許されるわけでは決してない。

本当に余計なことを言つてくれた。背中に冷たい汗が流れる。

「……誰がブチ切れた柊木の騎馬やると思つてんだよ」

これで俺がしくじつて騎手の柊木を落としでもしたらどうなるか。あれだけキレた柊木を見たのは初めてだ、何をされるかわからないところが逆に恐ろしい。

「……生きて帰つてね陣平ちゃん……」

「他人事みたいに言つてんじやねえぞ萩原イ^{ハギ}」

幸か不幸か、この騎馬戦にうちの班全員が出場する。そして柊木は俺たちのことを認め、能力を買つてくれていることくらいは理解して

いる。普段なら照れ臭くも嬉しいことだが、今はその事実がひたすらに重い。

柊木は「やればできる」やつが「やらない」ないし「失敗する」ことに厳しいのだ。

「……絶対に柊木は落とさねえ」

「うわー。気合い入れますか」

「俺らもハチマキ取られたらアウトだな」

「いや、生き残つても敵のハチマキ取つてないとアウトな気がする」

「柊木だからな。求められるハードルも低くはないだろう」

ぼそぼそと話す俺たちのところに、作戦の説明を終えた鬼がひょっこりと顔を出した。

「何してんのお前ら。ちゃんと話聞いてたか？」

にこ、と張り付けたような笑みを浮かべる柊木だが、まるで猛獸に睨まれたように背筋が凍つた。いつもならあざとくすら見える首を傾ける仕草でさえ、恐怖をあおるものでしかなかつた。

「まあ、お前らなら大丈夫だよな」

信頼という名の脅迫に、俺たちはひきつった笑顔で頷くしかない。

「——ああ、言い忘れたけど俺の言う勝利は『全員がハチマキを死守』し、『敵のハチマキをすべて奪取する』ことだから。万が一ハチマキ取られるやつがいたら、そいつら次の逮捕術の授業で俺とペアな。敵のハチマキの取り逃がしは、その辺にいたやつら……そうだな、俺の決め技の稽古に付き合ってくれ」

わかるよな、と鬼は柔らかな笑顔で続ける。

「完全勝利以外は勝利じやねえぞ？」

騎馬戦の開始直前にそう言い放つた柊木の目は、少しも笑っていない

かつた。全員の頬に冷たい汗がつたつしていく。

「じゃあ皆、頑張つて優勝しよう」

そして俺たちは、騎馬戦最強の教場として警察学校の歴史に名を刻むことになる。数々の若い警察官を見送つてきた教官たちですら「騎馬戦最強の」と言えば通じてしまうほどに語り継がれることになるのだが、それがひとりの鬼による私情だけの恐怖政治の結果であるこ

とは知られていない。知らないほうがいいこともある。

*

勝負に負けた悔しさなのか、ぶちぶちと独り言を垂れるそいつを呼び止めた。一応伊達に目線をやると、こくりと頷かれる。そいつで間違いないらしい。

「……何だよ。勝利宣言でもしにきたのか？」

「まあ、間違つてはいないな」

煽るような降谷の言葉に、そいつはぐつと眉を引き上げた。

怒りのオーラをまとわせてはいるが、さつきまでの柊木の怒りに比べればほんの僅かも怖いとは思わなかつた。所詮はガキの癪癩、そんなもの付き合う暇はない。

「残念だつたな、『お綺麗な顔』したやつにボロ負けしてよ」「ね、今どんな気持ち？『お綺麗な顔』で『華々しい生活送つてた』なんて言つちやつたやつに負けちやつてさ」

俺の言葉に、萩原^{ハギ}が続いて嫌味を投げる。普段は絶対に嫌味なんぞ言わない萩原も、今回のことにはだいぶ苛立つてているのは気づいていた。普段誰とでも軽く付き合つこいつも、こいつなりにちゃんと柊木のことを気に入つてているのだ。

「な、んだよお前ら……！」

「ああ、ごめんな、別に嫌味を言いに来たわけじゃないんだ」

たださ、と諸伏は言葉を切る。すつと細められた瞳は刃のように鋭く、その表情は氷のように冷たかつた。

「警察官になるなら、その無神経さは何とかしたほうがいいって忠告したくて」

「ああ。顔だの過去だの、デリケートな部分に土足で踏み込むのは感心しねえな」

何がそいつの地雷かわからねえだろ、と言葉を選んではいるが、伊達も拳を強く握り込んでいる。言葉を聞いたときはつい殴りそうになつたとは言つていたが、どうやら誇張ではなかつたらしい。

そしてとどめのように、ライバルへの侮辱を許せなかつたそいつが前に出る。

「相手の気持ちも考えられないようなやつが、警察官なんて目指すなよ」

言葉を投げつけられたそいつはまだいまいち意味をわかつていな様子だつたが、こちらの怒りだけは伝わつたらしい。何を言い返すでもなく完全におよび腰になつてゐる様子を見ていると、ひたすらに馬鹿らしくなつてきた。もう時間を費やすのももつたいなくて、戻ろうぜ、とさつきと後ろを向く。

言いたいことは言わせてもらつた。後のことは知らん。

*

「ああいたいた、お前らどこ行つてたの？」

両腕にたくさんペツトボトルを抱えた柊木は、だいぶいつものテンションに戻つたようだつた。騎馬戦で優勝した後、誰もがこいつの顔色を窺つていたが、本人だけはけろりとしていた。恐怖政治の結果を見て「まあ、こんなもんかな」と言い放つただけ。完璧な指揮で優勝を勝ち取つた感想がたつたそれだけかよとは思つたが、たぶん柊木にとつては至極当然のことだつたのだろう。というかお前の憂さ晴らしに巻き込んだ俺らにまず感謝と謝罪を言えよと思う。言わねえけど。

「ちよつとな。お前こそ、そのスポドリはどうしたんだ？」

「ほら、騎馬戦も完全勝利したし総合優勝もうちの教場がもらつただろ？ 教官がたまにはつてご褒美くれたんだよ。はいひとり一本」「やりい！」

「でもどうせなら甘いものが良かつた！」

「スポドリ一本でケチ〜！」

そうやつてげらげら笑う時間が、実は妙に楽しかつたりする。汗まみれ砂まみれの身体を引きずりながら飲むスポドリが不思議なくらいに美味しい。

「誰がケチかお前らア！ 口を慎め腕立て百回！」

と、油断したところで罰則というものは飛んでくる。反射的に返事をしてその場で腕立てを始めるのももはや慣れたもの。体力を使い切つたあとの身体にはなかなかきついものがあったが、それでも俺たちの口元は緩んだままだった。まったく、こいつらといふと退屈することがない。

ただしケチだと口に出した萩原^{ハギ}、お前はあとで締める。

再会

3

それを目にしたとき、あまりに鮮やかな思い出が蘇つた。

あの騎馬戦はなかなか楽しかった。個性のはつきりした奴らだから作戦も組みやすかったし、皆も指示通りに動いてくれた。あの完全勝利は皆の協力あってこそだつた。

ああ、そのすぐあとには全員が俺の家に泊まりにきたこともあつたつけ。よくあんな言い訳で教官も許可してくれたものだが、まあ降谷と俺がいかにもそれっぽい顔してそれっぽいこと言つたのがよかつたのだろう。みんな買い物も掃除も模様替えも手伝ってくれて本当に助かつた。遠慮なくこき使つたからへとへとになつてたけど、そのお詫びとお礼にと思つて大学時代関西で仕込まれたお好み焼きとたこ焼きを振舞つたんだつけ。どこの掃除機かと思うほどのすさまじい吸引力だつたな。何枚何個焼いても全然足りなかつた。俺も意地になつて作り続けたが、結局どれだけ作つたんだろう。相当量の小麦粉を消費したことは覚えている。ことあるごとにまた作れつて言われたけど、結局振舞つたのはあれきりだつた。

皆で少し遠くに買い物に出たときは、降谷と並んでたせいか逆ナンにあつて目を回したのも最早いい思い出……ではないな、あれは情けない思い出だ。伊達が貧血起こした俺を支え、萩原が上手いこと言って女の子たちを追い払い、諸伏が飲み物を買ってきてくれた。かつとなつて女の子たちを怒鳴りつけそうになつた降谷に松田は「もつとうまくやれ」なんて説教をしていて、説教するポイントが違うんじやないかと思つたが口を出す余裕もなかつた。面倒を掛けてしまつたと謝る俺にあいつらは「気にするな」と笑い、遊び慣れてない俺をゲーセンに連れ出してくれた。シューTINGゲームで最高点をたたき出した諸伏はさすがだつたし、リズムゲームでは松田無双。降谷とエアホッケーで接戦を繰り広げた後負けたことは、未だ悔しい記憶として残つている。いつか絶対リベンジしよう。

術科大会では、運動会で叩き潰したアイツに再度喧嘩を売られ……あれはまあいいか、大したことではない。三回目はないことを教えてやれたと思うのでよし。

それから、——それから。

「——柊木君？」

「、はい」

「どうした、呆けていたようだが」

「失礼いたしました。いえ、自分の警察学校時代を思い出しまして」
気持ちはわかるよ、と懐かしそうに上司は笑う。

警察庁の窓の外に真新しい制服の集団が見える。警察学校の生徒が見学に来ているのだろう。俺もかつてはあの中にいたのだと思うと少し感慨深い。

あの日々は、本当に楽しかった。たぶん、俺の今までの人生のなかで、一番。

「君は警察学校でも優秀だつたんだろう？」

「眞面目には取り組んでいたつもりですが、そこそこのいろいろやりましたよ」

「ほう？ 気になるね」

「おつと、失言でした。もちろん眞面目に学んでいましたとも」

後ろ暗いことでもあるのかい、と言う上司に、まさか、と笑つて見せた。ただいろいろとやらかしてくれる同期たちがいただけだ。俺は巻き込まれただけで主犯ではないので、断じて後ろ暗いことはない。

いい同期にも恵まれましたしね、と心からの言葉を口にすると、上司は微笑ましそうに頷いた。しかし、だからといつてゆっくり休憩させてくれるほど生やさしいひとではない。

さて、思い出に浸るのもそのあたりにして、仕事に戻るとしようか。ああ、その書類の山の整理と処理、それからそちらの過去の警備記録も目を通して頭に入れておきなさい。午後の会議までには終えておくように」

「承知しました」

うーん、容赦がない。もちろんそう思つてもおくびにも出さない。

警察庁警備局警備課に配属されてまだ二年ほど。まだまだ新米として雑用をする一方、少しづつ仕事も任されるようになってきた。警備課のやることは主にディフェンスのサポートだ。機動隊が動くような犯罪や災害への対策や緊急事態発生時の指揮、大規模なイベントでの警備、そして要人の警護などの業務管理が管轄になる。全国の機動隊の上役と言つていい。

もともと現場に出るよりはその指揮管理をする方が向いている自覚があるだけに、やりがいのあつた。過去の機動隊の警備記録を見るのも非常に勉強になる。

配属が決まつたとき、上司だ敬え、と伝えたときの機動隊二人の顔を思い出すと今でも笑えてくる。あいつらに無茶をさせないよう、あいつらに危険を押し付けることがないように、しっかりと勉強しなければならない。

「柊木君、こつちの書類も頼む」

「はい」

「これもついでに」

「じゃあこれも」

「……喜んで」

感傷に浸る間もないほどの仕事量だが、これもまた勉強か。ひとつ苦笑を零してから、目の前の仕事に気合いを入れた。

*

定時をだいぶ過ぎた時間に上がり、帰路につく。

いい加減車買わないととも思いつつ、駅からの夜道を歩くのは嫌いではなかつた。デスクワークがメインの現状、多少は身体を動かさないと鈍る。

女性苦手はまだ健在なので公共交通機関は好きではないが、完全に女性に近づかない今までいてはいつまでも治らない。リハビリも兼ねてなるべく人の少ない時間帯に利用するようにしている。さすが

にこの歳になるとストーカーに狙われることもなくなつたのか、この数年はとても平和だ。

なるべく早く克服しないと、と考えていたとき視界の隅に知つた顔を捉えた。

「……お前らまたうろついてたのか」

「げつ」

「うわ、見つかった」

警察庁勤務になつてから今日のように帰りが遅くなる日も増えた。そういうときに見つけてしまつた、深夜にうろつく未成年たち。自分の職分でないことは重々理解しつつも、時には小言、時には強制的に家まで送還しているうちに交流をもつようになつた。

「いい時間だぞ、早く帰れ」

「まだ十一時じやん」

「もう十一時、だ。そろそろ見回りも来る時間だろ」

こういう者だ、と警察手帳を見せた当初は警戒されたが（警視庁か警察庁かの違いなんて一般人には関係ない）、懲りずに話しかけていとだいぶ懐かれたと思う。

一度は殴り掛かられたことも今では笑い話だ。殴えてもないガキの拳などに殴られる俺ではないし、ましてこいつらは深夜にふらついてはいるだけで喧嘩とは無縁の平和主義なアウトローだった。マメやタコのひとつもない綺麗な拳にそう指摘してやると、彼らは気まずそうに黙つた。

「ひーらぎさんこそ、またこんな時間まで仕事してんの」

「今日は立て込んでてな。ほら立て、全く明日も平日だつてのにこんな時間までうろつきやがつて」

「どうせ学校いってねえし」

「行けよ。勉強はしといて損はねえぞ」

ひーらぎさんまでそういうこと言うのかよ、と拗ねる子どもに苦笑を返した。

「勉強は出来なくても何とかなるが、出来た方が得なのは確かなんだよ。損得の問題」

「……ひーらぎさんて変な説教の仕方するよな」

「なんだよ。上つ面の説教してもお前らは聞く耳持たないだろ」

「確かにそんなんだけどさ」

ホント変な人、とけらけら笑うそいつらを帰路に追い立て、その後ろ姿にまたひとつ苦笑を零す。根は素直で可愛い奴らなのだ、伊達あたりと引き合わせてみれば懐くかもしないなんて考えながら、俺もまた帰路についた。

*

帰宅し、適当に食事と入浴を済ませて寝る支度を整える。
明日も早いのだ、早めに睡眠をとらないといけない。そう思つてマグカップを片手にベッドに座ると、ふと写真立てが目に入った。昼間見た警察学校生たちの姿が脳裏に浮かぶ。

警察学校卒業の日、六人で撮った写真はベッドサイドに大切に飾られている。あいつらとの生活は、本当に楽しかった。基本的に友達の少ない俺にとって、あれほど気心知れた友人が出来たのは初めてだった。こんな気の抜けた顔で笑う自分を初めて見たかもしれない、との写真を見て思う。

「……また、酒でも誘つてみるか」

酒は強くないが、別に全く飲めないわけではないし嫌いでもない。こいつらとなら多少の酒の失敗も許されるだろうという甘えもある。

警視庁の花形、捜査一課を目指して走る伊達に、希望していた機動隊でおもに爆発物処理に当たる松田と萩原。諸伏と降谷は――忙しいのだろう、滅多に連絡は取れないが。

最近なかなか会う機会も作れなかつた。明日にでも連絡を入れてみようと決めて、俺はベッドにもぐりこむ。

その日、久しぶりに警察学校時代の夢を見た。あまりに懐かしく、心地よく、夢が覚めるのが惜しかつた俺は、――これまた見事に寝坊した。

「遅刻ギリギリとは珍しいね」

「夢見が良すぎまして……申し訳ありません」

「本当に焦つてきたんだな。寝癖がとれてないよ」

「……。……鏡を見てきてもよろしいでしょうか」

「いや、面白いからそのまま仕事してなさい」

「その日一日、上司先輩にからかい通され、俺はなかなかに恥ずかしい思いをすることになる。」

「たまにはそうやつて間の抜けたところを見せた方が可愛げあるよ?」

「ははは、嬉しくないです」

「悪い、遅くなつた！」

「お、柊木」

「先始めてるぞー」

今日は珍しく松田から飲みの誘いを受け、仕事帰りに巣廻の飲み屋に向かつた。この店は個室が完備されているからありがたい。伊達は仕事が詰まつていて不参加、あの馬鹿ふたりは相変わらず連絡が取れないので今日は爆処組と三人だ。

「飲み物は?」

「とりあえずビール」

「はいよー」

注文したビールが届くと改めてグラスを合わせ、乾杯をする。お疲れうと萩原が呑気に音頭を取るが、今日はその萩原のための会だ。自分があまり酒に強くないのは自覚している。酔いが回る前に真面目な話は片づけてしまおう。

「さて萩原」

「ん? 何よ改まつて」

「ああ、真面目な話だから心して聞け」

きよとんとした後に萩原は姿勢を正した。

警察学校ですっかり説教を受けるときの態度は学んだらしい。お前そういうところは素直なのに、と小さくため息をつく。

「どこかの馬鹿に爆弾を目の前に油断する悪癖があると通報があつた」

ぎくりりと、わかりやすく萩原の肩が揺れる。

隣に座る松田は素知らぬ顔でグラスに口をつけた。

「……俺はな、萩原。お前のことすごいやつだと思つてるよ」

「……え」

「まだ入庁してそんなに経つてないのに第一線で爆弾処理をするくらい、その能力を評価されてる。普段も軽いふりして誰よりも周囲を見てるし、いつも自分のペースを崩さず、どんな状況にも即座に対応で

きる。誰にでもできることじゃない」

「ひ、柊木？」

「だからこそ」

萩原が何か言おうとしたその声を遮つた。さすがに笑顔も作れない。

「だからこそ、驚いたし失望した。どんなに優秀だろうが、爆弾目の前に防護服脱ぐだの一服するだの、お前がそんな馬鹿だとは思わなかつた。……なあ、萩原」

俺、殉職を希望するような奴と友達やりたくない。

殉職と口にした瞬間、口の中に苦い味が広がつた。その一言は、俺にとつてあらゆる意味でひどく重い。どうか、萩原にとつてもそうであってほしい。それだけのことをしているのだと、わかつてほしい。

萩原、ともう一度名前を呼んだ。目の前のそいつが息を呑んだのがわかつた。

「……柊木」

「何だ」

「……ごめん」

そんなこと、お前に言わせて。

笑顔を消して真剣な顔になつた萩原が、そう言つた気がした。

「……で？」

一応反省したことは見て取れたので、ついでに言質ももらつておこうとにつこり笑いかける。いろいろと察した萩原は顔をひきつらせた。

「……チャント、ボウゴフク、キマス」

何で片言なんだ、と突つ込むのも面倒で、そのまま続きを促す。

「それから？」

「バクダンノマエデ、ユダン、シマセン。カイタイヲサイユウセン、シマス」

「慢心は自分と仲間を殺すぞ。殺人者になりたくなきや肝に銘じとけ」

「わかつた！ わかつたからもうやめて！ 何お前怖すぎんだけど

！」

「何て？」

「申し訳ございませんでした！」

涙目の萩原がぱつと頭を下げたとき、笑いをこらえていた松田がとうとう噴き出した。さつきからぶるぶると堪えていたが限界だったらしい。

「やっぱ柊木に説教頼んで正解だつたわ！」

「ちよつと陣平ちゃん、柊木使うのは卑怯でしょ!? こいつの説教マジで怖いんだから！」

「怒鳴るわけでもねえのに何をそんなに怖がんの? 伊達のが怖くない?」

「笑つてねえ笑顔が怖いんだよお前のは! 無表情も怖かつたけど! てかわざとだろ、わかつてんだぞお前がさりげに腹黒いのは!」

怒らせる方が悪いんだろう、と軽くあしらつたところで、ふと気づいた。確かに、こいつらのいる隊の隊長は。

「……ちよつと待て。その悪癖、上司は止めてないのか」

ぴく、とふたりは一瞬動きを止める。萩原は少し気まずそうに目をそらし、松田は不満そうに鼻を鳴らした。

「……止めてないねえ、現状」

「止めてねえな。むしろ煽つてる。『お前らなら大丈夫だろ』ってな」

「……ほー?」

ふたりの上司は長年機動隊に勤めてきたベテラン中のベテランだ。上層からの評価も高く、警察庁でも名前が通っている。ベテランなら爆弾処理の危険性もよくよくわかつていてははずなのに、諫めるどころか獎励とは。そしてその上司の煽りを受けて乗せられやすい萩原は慢心し、用心深い松田は反感を抱いている、と。

よく監査が見逃しているものだ。上層からの信頼が仇になつたのだろうか。

「ベテランも過ぎれば老害か」

「……ノーコメント」

「早く偉くなれよお前ら。死人が出る前に」

そこまで言うと萩原に苦笑を返された。ホントに旭ちゃんてば容赦ない、と萩原に枝豆に手を伸ばし、松田はだが間違つてねえ、とまた酒を呷る。

「……本当頼むよ、二階級特進とか贅沢言わないでこつこつ出世してくれ」

命を投げ捨てた出世なんて、祝つてやれないだろ。

そう言つて苦笑いとともにグラスを掲げると、萩原は少し気まずげに、そして松田は満足げに、泡の消えたビールを掲げた。

「任せろ、萩原^{ハギ}は見張つとく」

「反省したつてば……」

がちん、と三つのグラスが鈍い音を立てた。

そしてこの一週間後、俺は松田から萩原が爆弾処理に失敗したという連絡を受けることになる。

* * *

看護師の静止の声も聞かず、病院の廊下を走り抜けた。

ほんの一週間前、萩原は元気に酒を飲んでいた。自分の慢心を反省し、真面目に職務にあたると約束してくれた。そう言つた矢先に起きた卑劣な爆弾事件。

電話をくれた松田の声は、震えていた。

「松田！」

「……柊木」

病室前で松田は椅子に腰かけていた。声にいつもの覇氣はなく、顔色は蒼白に近い。

「……萩原は、」

「今手術が終わつたところだ。……お前に説教されて防護服はきつちり着てたからな、近距離での爆破にも関わらず命に別状はないらしい」

「、そうか」

安堵の息が漏れる。ちゃんと防護服はあいつの命を守ってくれた。

そんな俺とは裏腹に、松田の顔は暗いままだ。いや、暗いというより虚ろというべきか。眉をひそめて声をかける。

「……松田？ どうした、萩原は無事なんだろ」

「……ああ、生きて、る」

「松田、……どうした？」

声が震えている。いや、声だけじゃない、全身が震えだした。これは安堵ではない。恐怖だ。

「爆破の直前、萩原に電話をかけたんだよ。萩原は防護服を着てたら出られなくて、近くにいた隊員がかわりに出た。……いつになく萩原が眞面目に解体にあたっているから、もうすぐ終わるから心配するなって、そいつは答えて。柊木に説教してもらつて良かつたなんて、そう思つたんだよ。……そしたら、急に、電話口が騒がしくなつて、タイマーが、とか、爆弾が、とか、……総員退避つて声と、一斉に走り出す足音がして、それから、……それから、」

「、もういい！ やめろ松田！」

「電話口で、すげえ音が、……萩原が、仲間が、……爆弾で、」

「落ち着け松田！ 萩原は生きてる！ お前の仲間も死んでない！」

松田の目は虚ろで、俺の声は届いていないようだつた。どう見ても普通の精神状態ではない。とにかく落ちさせなければ、と直後に俺と同じように駆けつけた伊達に看護師を呼んでもらい、そのまま松田も病床に叩き込んだ。

*

「……とにかくまづは、萩原が無事でよかつたな」

「ああ。……本当に」

松田が眠つたことを確認し、包帯だらけの萩原の顔をそつと覗き見て、伊達と病院の中庭に出た。投げ渡された缶コーヒーのプルタブを開け、ベンチに座る。

「外傷は多いが手術は成功、後遺症も残らなさそうつてどんな奇跡だつて感じだよな」

「防護服は偉大だよ」

伊達の言葉に軽く相槌を打つ。本当に、これで防護服を着ていなかつたらどうなつていたか。考えただけでぞつとする。

「まつたくだ。……まさかちよつと今まで防護服なしで爆弾解体にあたつていたとは思わなかつたが」

「ああ、元気になつたら一発殴つてやつてくれ。俺はもう説教したから」

「そうさせてもらう。……柊木の説教のおかげであいつ、命拾いしたんだな」

やめてくれ、と苦笑を返した。俺の説教よりむしろ、上司にかわつてその危険性をしつこく言い続けた松田の功績だろう。俺はそれを後押ししたに過ぎない。

それだけ松田は萩原のことを心配していたのだ。だからこそ、萩原が爆発に巻き込まれる場面を見て、そして聞いてしまつたその衝撃は。

「……松田のアレ、……後に響かねえといいんだけどな」

一過性のパニックならまだいいが、あれが慢性化したらまずい。もし爆弾そのものがトラウマになりでもしたら、爆発物処理班として致命的だ。こういうものは心が強いとか弱いとかそういう問題ではないだけに、先ほどの松田の様子を思い出すと心配になる。誰よりも情に厚い松田だからこそ、ショックは大きかつたはずだ。

「……なあに、萩原が目を覚ませばきっと松田も落ち着くだろうよ」「……そうだな」

どうか、そうであつてほしい。

松田は自分の職務に誇りを持つていた。おそらく今回の一件で萩原は機動隊にはいられなくなる。せめて松田だけでも残つていらればいい。

「……萩原の処分はどうなる」

同じことを思ったのか、小さく伊達が言葉を落とした。

その言葉に、機動隊絡みの似た案件をいくつか思い浮かべる。

「……まあ、……事情はどうあれ、爆弾解体に失敗し、隊の仲間を爆発

に巻き込み重傷を負わせたことにかわりはない。前例から考へるなら……異動か退職か選べつてところじゃねえかな」

法が絡む組織は例外を嫌う。たとえやむにやまれぬ事情があつたとしても、為した結果がすべてだ。例外という前例を作ればいくらでも抜け道が作られてしまう。

「……そうか。……そうだよなあ」

「……、ればっかりは、な」

「だが、きつとそれでも萩原は警察辞めねえよ。あいつは機動隊以外でも十分にやつていける」

「ああ。……まずは、元気になつてもらわないとな」

きつと、萩原なら。そして、松田も。

あいつらなら大丈夫だと、お互い自分に言い聞かせてているのがわかつた。

「……ところで柊木」

「何だよ」

「俺とお前に連絡が来たなら、あいつらにも連絡いつてると思わねえか？」

「降谷と諸伏か」

警察学校卒業以来、ろくに連絡も取れないふたり。

一度だけ警察庁内で降谷らしき影を見かけたことならあるが、それも一瞬だけ。おそらくそういう部署に行つたのだろうと予測はしているが、それにしてもここまで連絡が取れないと疑念が残る。そういう部署に行つただけでなく、そういう職務に就いているのだとしたら。

「……松田はたぶん連絡してるとと思うけど、……まあ、来れないんだろ」

「……今頃何してんだかな。お前も連絡とれねえんだろ？」

「ああ。何となくメールは送り続けてるんだけどな」

「俺もだ」

送り続けているメールは届いているはずだし、きっと見てくれていると思う。それを無視するだけの事情があるのだとしても、連絡先を

変えていない以上は縁を切つたということではないはずだ。

きっとまた会うことは叶うと何となく思つてゐる。何故だか確信に近い予感があつた。ただ、そのときどうか――無事でいてほしい。俺が思うのは、それだけだ。

「……萩原と松田が元気になつたら、写真でも送つてやろうぜ。きっとあいつらも安心するだろ」

「……ああ、いいな」

いつかまた、六人で写真を撮る日が来ればいい。皆が元氣で、笑顔で、馬鹿騒ぎしている写真がいい。

何だか感傷的になつてしまつて、横に立つ伊達の顔を見ずに言った。

「……お前くらいは普通に元気に警察官やっててくれよ」

「こつちの台詞だよ。俺がそう簡単にやられるか」

「……ああ、そうだよな」

思考によぎつた不穏な影は見ないふりをして、飲み干した缶を軽く投げる。それは綺麗な弧を描き、ゴミ箱に吸い込まれていった。

あれから間もなく、萩原は目を覚ました。

数か月の入院を強いられはしたもの順調に回復しており、後遺症も特に心配はいらないとのこと。元気になつたら一発殴らせろよ、と軽口を投げる伊達にお手柔らかに頼むわ〜といつも通りの返事を返せるくらいには元気になつていた。

内勤の俺が一番時間の都合をつけやすいので、ちょくちょく俺は萩原のところに顔を出すようにしている。現状世話をしてくれるように彼女はいないらしいので特に気兼ねはしていない。

「……なー終木、事件の話何か聞いた?」

「いまだ進展ナシだ。亡くなつた犯人の身元の洗い出しはほぼ済んだらしいが、それでも共犯者の影は見えないらしい」

「……そつか〜」

しゃりしゃりと林檎の皮をむきながら答えると萩原は困つたように笑つた。

萩原が負傷した爆弾事件には、犯人がふたり以上いるものと判断されている。公衆電話から爆弾の解除法を教えようとした結果、事故に遭い亡くなつた男と、少なくとももうひとり。萩原が解体に当たつていた爆弾を、解体終了直前でタイマーを操作し爆弾させた人物だ。

「……言つとくけど俺油断してないかんな！ ちゃんと防護服来てたからそりやいつもより解体のペースは遅かつたけど、タイマーは先に切つてたから無事解体できるはずだつたの！」

「わかつてるよ。お前はその時のベストを尽くしたけど、犯人がタイマーをいじつたんだろ。説教するつもりはないよ」

そう言うと見るからにほつと安堵の息をつく萩原。あまりにわかりやすく安心したのが癪に障り、その口に林檎をつつこんでやつた。ごほ、と萩原がむせる。ざまあみろ。

普段から防護服着てちゃんと訓練してれば解体のペースももつと早かつたのではないかと思わぬもないが、さすがにそれを口に出す

ほど俺は冷酷ではない。たらればの話をしてもきりがないし、事実として萩原は生還した。そして自分が機動隊から外される事実を受け止め、自分なりに消化している。萩原はマイペースな分、逆境に強い。しつかりと反省はしても、後悔に漬されることはないだろう。

むしろ、萩原よりも心配なのは、

「……陣平ちゃん、どーしてるか知ってる?」

真っ青な顔で取り乱していた、松田の方だった。

「……顔は見れてない。メール送つても、『問題ない』『大丈夫だ』の一
点張り」

「……あちゃー」

「見舞いにも来てねえのか」

「たまに来るんだけど、……どつか危なげというか。俺は大丈夫だつ
て言つてんのに、何か通じてないみたいでさ」

松田は一晩病院で休むと表面上はだいぶ調子を取り戻し、退院し
た。目を覚ました萩原を見たときは心底安心したような顔をしてい
たが、それでもどこか思いつめたような顔は戻らない。機動隊の仕事
には問題なく戻っているらしいのでPTSDはなさそうだが、いつも
通りとは言い難かつた。

「……その松田だがな」

「何?」

「転属を希望した。刑事部捜査一課特殊犯係にな」

萩原は包帯のない左手を額にあてて頃垂れた。何やつてんのあい
つ……と口から呟きが零れる。正直、まったく同感だった。

「まあ、却下されたけど」

「だよな。機動隊から一課つて何、普通ないだろそんな転属」

「まつたくないわけじゃないけどな。……しかも、諦めてなさそ
うなだよあいつ

「マジで?」

納得した様子ではない、と聞いている。萩原という優秀な隊員を
失った機動隊は松田を手放したくはないだろうし、どう考えてもこの
爆破事件の犯人を捕まえるために希望した転属だ。はいそうですか

と希望を通すほど警察は甘くない。

「……そう簡単に希望は通さないだろうが、松田が何度も懲りずに転属を願い出れば、上層も根負けするかもな」

「え、ダメでしょそんな私情の絡む転属」

「松田は優秀だ、上からの評価も高い。希望を蹴り続けて辞められたら困るだろ。今あいつ野に放つたら自分で無茶な捜査しかねないし」

否定できない、と渋い顔をする萩原を前に、俺も溜息をつく。特殊犯係の皆さんには松田が馬鹿やる前にぜひとも爆弾犯を捕まえてほしいものだ。

「……ちなみに柊木って俺のお左遷先聞いてる？」

「左遷言うな、転属先に失礼だ」

「はいスマセソ」

萩原の質問をとりあえず切り捨てる、もうひとつ溜息をついた。
「左遷どころか栄転になりかねないぞ」

「え？」

「お前の上司が口利いてる。とりあえず閑職にはいかないだろ」「……ありやー」

「確かあの人、刑事部長と同期のはずだ。刑事部のどつかつてどころじやないか。それこそ一課の特殊犯係とか、下手すれば強行犯係とか」

何とも言えない顔をして萩原は黙った。いろいろと思うところはあるらしい。

デスクワークの向かない萩原の配属先なんて現場メインのどこかだろうとは思っていた。機動隊として鍛えてきたものを無駄にする手はないし、今まで活かす機会はなかつたが萩原は取り調べが上手い。人の懷に潜り込むのが早いのだ。

「……まあ、何にせよとにかく身体を治してからだな」

「……ん。わかつてる」

じやあ俺はこの辺で、と鞄を持つと、萩原はありがとねーとへらつと笑う。相変わらずの気の抜ける笑顔に俺もひとつ笑い、軽口を投げ

た。

「退院しないと酒にも誘えないな」

「こつそりお土産に持ち込んでくれてもいいのよ？　あと煙草も」

「馬鹿言え。禁酒禁煙してろ怪我人」

「そろそろ限界なんだけど」

堪えろと笑うと、萩原もひでえと笑う。その笑顔に少しだけ安堵して、病室を後にした。

*

結局、萩原の異動先は刑事部捜査一課特殊犯係だった。

爆破事件などその名の通り特殊な事件を扱う、松田が異動を希望した部署。それを聞いてさらに若干荒れ氣味だった松田も、時間とともに落ち着いてきたように見える。しかしどうも、爆破事件があつた十一月が近くなるとだめらしい。

「陣平ちゃんてば本当に俺のこと好きだからさー」

そう言つて困つたように萩原は笑つた。笑つてはいるが、本当に松田が暴走すれば洒落にならないことをよくわかっているのだろう、ちよくちよく俺や伊達に「松田の様子見てきて！」なんて連絡を寄越している。

相変わらず当の爆弾犯は捕まつていないし、松田も繰り返し異動の希望を出すことをやめはしない。……なかなかまらないものだ。

そういうままならないことを考えている時に限つて、良くないことは起つる。

「……幸人が捕まつた？　どういうことだよ」

『俺が知るかよ！　なんか、ショーゲイがどうつて連れていかれたらしくて！』

「傷害？　……あいつ喧嘩したとか聞いてるか？」

『聞いてないよ！ つか幸人がそういうことしねえのひーらぎさん
だつて知つてるだろ！』

オフの日の朝、珍しく深夜徘徊常連の悪ガキのひとりから連絡があつたと思えば、何と仲間がひとり警察に連れていかれたという。あの喧嘩と無縁の悪ガキが傷害なんて、笑い話でも有り得ない。

相良幸人は悪ガキの中でも古株で、あいつが中学生のころから俺も知つている。どちらかというと曲がつたことが嫌いで融通が利かないがゆえに反抗期になつたタイプで、少なくとも平氣で人を傷つけるような奴じやない。

「……わかつた、調べてみる。いいか、他の奴らにも伝えとけ、お前らは、何も、するな。落ち着かないのはわかるが、今下手に動く方が幸人のためにならない。わかるな？」

『つ……わか、た』

「よし。……学校にもちゃんと行けよ？」

『……ん』

咄んで含めるように言い聞かせ、電話を切つた。とにかくまずは、状況の確認からだ。あいつらがよく連んでいる近辺を管轄にしている署には、くわえ楊枝がトレードマークの同期が配属されている。すぐにその連絡先を呼び出せば、相変わらず伊達はすぐに電話に出てくれた。

『はい、伊達』

「柊木だ。悪いな、仕事中か？」

『ああ、何だよ緊急か？』

「相良幸人つて奴、知らねえか。傷害絡みらしいんだが」

『何だ、知り合いか？ ちようど今、取り調べしてたところだ』

何と伊達がいる班が担当だつたらしい。運がいいんだか悪いんだか。いや、情報が手に入りやすいことを考えれば運がいいと思うべきだろう。

「相良幸人とは個人的な知り合いなんだ。答えられる範囲でいいから教えてほしい。幸人の状況は？」

『重要参考人で事情聴取だ。一応送検はまだだな』

「……聴取の様子は？」

『連行した当初は俺じゃねえの一点張りだつたんだがな。……何分状況証拠が揃いすぎる。で、それを相良も察したんだろう、今はもう何言つてもだんまりだ。何言つても信じてくれねえんだろと言わんばかりだな』

ああ目に浮かぶ。本当そういうところガキなんだよ、いやガキなんだけど。

伊達が説明してくれたところによると、事件の発生は昨日の深夜。見回り中の警察官が明らかにリンチ後で虫の息の男子高校生と、その傍にいた相良幸人を発見。被害者の男子高校生はここらでの有数の名門校の制服を着ていて、対して幸人は一応学校には行っていたのか、自前の学ランを着崩していたという。

幸人には悪いが、確かに勘織りとなる状況ではある。

『相良曰く自分は殴られた被害者を庇つただけで、犯人は被害者と同じ制服を着ていた男子学生。そいつは声をかけると同時に逃走。追いかけようかとも思ったが、被害者が今にも死にそうに見えたので慌てて救急車を呼ぼうとしていたところだつたそうだ』

「……幸人ならそうだろうな。それで？ それなのに重要な参考人で聴取つてのはどういうことだ」

『目を覚ました被害者が証言した。自分をリンチしたのは相良だと』

「……何だと？」

助けられたはずの被害者が、相良を犯人だと証言した、と。

『被害者は随分と怯えた様子で、あまりきちんと話を聞けてはいいんだが……被害者が証言した『犯人』は、どう考へても相良なんだよ。同じ制服を着た人間なんていなかつたと証言している。……状況証拠に加えて被害者の証言まで揃つちまつたら、被疑者がだんまり決め込もうが送検できちまう』

「……」

『……柊木？』

「伊達、お前やお前の先輩たちの所感は」

意図せず堅い声が出る。伊達は少し考えて、言つた。

『……正直すつきりしねえ。上層がやけに送検させたがるのも気に入る』

「上層が？ きなくさいな」

『被害者がボンボンの通う高校の生徒だから、早めにケリをつけたいだけかとも思つたんだけどな。下手すれば何か圧力がかかつてのかもしれねえ』

「ほー……伊達、これはもしもだけど」

俺は警察庁の人間だ。直接捜査に参加はできないし、してはならぬ。しかし、俺は自分の人を見る目に自信を持っている。幸人は絶対に、そんなことをする奴じやない。

「もしも俺が手掛かり持つて来たら、裏付け捜査動いてくれるか？」

『……あてはあるのか』

「なくはない。ところで伊達、リンチって言つたよな。つまり殴る蹴るの素手の暴行か？ 幸人が武器を持ってたとは思えないんだが』

『ああ。被害者の服にゲソ痕はなかつたから『殴る』だけだな。素手での犯行だ』

それならわかりやすい証拠をまずひとつ。あいつはそもそも喧嘩慣れしていない人間なのだから。

「相良幸人はな、素行こそ悪いが喧嘩とは無縁な不良なんだよ。あいつは右利きだ、拳見てみろ。絶対怪我どころかマメもタコもない綺麗な手してるぞ。慣れてない人間がリンチと言えるほど人殴れば、まず自分の手も無事じや済まない」

伊達ははつと息をのんで、すぐ確認する、と答えた。証拠としては弱いが、本当に幸人が犯人なのか疑念を抱かせる材料くらいにはなるだろう。

「とりあえず今はそれだけだけど。これから幸人の知り合いのツテ使つて目撃証言がないか洗つてみる。有力そうなのがあればすぐ連絡するから確認してほしい」

『……お前、それどういう繋がりなんだ？』

『深夜うろつく迷える青少年たちに帰れ帰れ学校行けと言い続けた結果、懲かれた。あいつら何か見てても素直に警察に情報提供するとは

思えないし、俺の方から聞いてみるよ

『……たまに俺お前がわかんなくなるわ……』

乾いた笑いを漏らす伊達にうるさいと返す。俺もそんなつもりはなかつた。

「あと、幸人に伝言頼みたいんだけど」

『何だ?』

伝言の内容を告げると、お前らしいな、と電話口で伊達は笑つた。

*

「すいません、戻りました」

「長え電話だつたじやねえか」

「ちよつとタレコミがありまして。少し替わつてもらつてもいいですか?」

聴取室に戻り、面倒を見てくれている先輩刑事に被疑者前の椅子を譲つてもらう。相変わらず相良幸人は、だんまりを決め込んでいた。机の上に無造作に置かれた彼の右手には、確かに怪我ひとつない。

「……柊木旭、知つてるか?」

「……!」

何を言つても無反応だった相良が、ぱつと顔を上げる。

「柊木とは同期でな、よく一緒に酒飲んだりする仲なんだ。その柊木から今連絡があつた。お前が傷害事件の被疑者だなんてあるわけがない、手がかり探してくるから裏付け捜査をしてほしい、とよ」

「……ひーらぎさんが」

「ああ。そんで、その柊木から伝言だ」

『疑いを晴らす努力を怠るんじやねえ。釈放されたら説教だ』

『それから。日本警察、舐めんじやねえぞ』

相良が目を瞠つた。ごくり、と息を呑んだのがわかる。

「あいつの説教は怖えぞ。覚悟しとくんだな」

そう笑つてやると、大きく見開かれた目から涙が零れ落ちた。ずっと堪えていたのだろう、強がついていてもただの高校生だ。

震えだした肩を自分の手で押さえながら、その少年は口を開く。

「けーじさ、……俺、……やつて、ねえ……！」

「……ああ」

「やつて、ねえよ……っ！」

本当に、—— 桜木の人を見る目は確かだと思う。

*

結果として、次の日には相良は釈放された。

桜木からもたらされた目撃証言をもとに近隣の監視カメラの映像を洗い直し、事件発生直後に走り去る該当の制服を着た男子学生の姿と、すでにリンチが発生しているであろう時刻に近くの道を歩く相良幸人の姿が確認された。

何より、被害者の生徒の証言が翻されたのが決め手だつた。

「犯人が誰なのかは聞かねえ。だが、本当にそれは彼だつたか、もう一度教えてほしい」

事情を察していることをわかってくれたのか、彼もまた罪悪感から目を潤ませ、小さな声で「その人ではありません」と答えてくれた。やはり、「真犯人」への恐怖から事実とは違う証言をしていたらしい。怯え切つた彼に感謝を伝え、無理にそれ以上の証言を聞き出すことはしなかつた。

ただ、彼のクラスメイトにはあまり性格が良くないらしい有名議員の御曹司がいることはわかつていてる。その議員が、警察上層部と仲が良いことも。俺にできたのは被害者のご両親にそれとなく彼の転校を勧めることだけだつた。

「報告書まとめたので確認お願ひします」

「おう」

これまでの経緯を上に報告すべく、紙面にまとめる。プリントアウトして先輩刑事に渡すと、忌々しそうに鼻を鳴らされた。

「……どつか不備ありました？」

「違えよ。……胸糞悪い事件だつてだけだ」

「……はい」

おそらく、真犯人は捕まらない。捜査を打ち切るよう上から指示が出た。そして俺たちは、それに逆らうことができない。悔しいと、言うほかなかった。

警察も一枚岩ではないし、潔癖なわけでもない。わかつてはいたが、こうもその現実を叩きつけられると苦いものがある。

「報告書は問題ねえ。提出しとけ」

「はい」

「……そりや、伊達、その同期だとかいう柊木？　はどここの部署の奴だ？」

「……はあ？」

「警察庁です。警備局警備課だとか」

そんなエリートと知り合いなのかよ、と先輩刑事は血相を変えて叫ぶ。

その反応を見てそういうや柊木ってエリートなんだよな、と今更ながら思い出した。立場や権力を振りかざすヤツではないだけに、時折柊木の立場というものを忘れそうになる。そうか、あいつはエリートなのかと改めて頷いた。

まったく、ルール破りが嫌いな柊木みたいな奴がさつさと出世して上にいってくれれば、現場を走る俺たちももつと動きやすくなるだろうに。

そんなことをふと思つたのは事実だが、まさかこのあと本当に出世の階段を駆け上るとは。さすが柊木だな、と俺は苦笑するほかなかつた。

幸人が釈放されてからしばらく。

あのあと幸人には懇切丁寧な説教をプレゼントし、夜中に出歩かないことを約束させた。詳細？ 足の痺れでしばらく幸人の足が使い物にならなくなつたとだけ言つておく。しかし本人も何やら思うところがあつたらしく、学校に行くから勉強を教えてほしいと自分から頼んできた。これにはさすがの俺も涙腺が決壊寸前。どんな心境の変化かは知らないが、喜ばしいことだ。

事件の経緯は伊達から聞いた。自分の無力を噛みしめつつも、せめて幸人を冤罪から救つてやれて本当に良かつたと思う。情けない話だが、今の俺にできる精一杯がこれだつたと思うしかない。今はとにかく、もつと自由に動けるよう地道に努力して出世していくかなくては。警察内部でのこんな不正、許していいはずがない。絶対に、許さない。

そう思つた矢先の、急な呼び出しだった。

「……私が、監察官、ですか？」

「ほんんど見習いの扱いにはなるがね。何せ経験が浅すぎる」

呼び出された先にいたのは、警視庁警務部人事第一課主任監察官、その人は大河内と名乗つた。長い名称だが、つまりは監察官の中でも偉い人。監察官とは警察官の不祥事を取り締まる、言うなれば警察の中の警察だ。同時に 出世が約束された人が通るエリートコースのひとつとも言える。

まだたいした結果を残したわけでもない俺が見込まれる理由もわからぬ。

「……恥ずかしながら、光榮に思う以上に戸惑うところです。不躾は承知ですが、理由をお伺いできますでしょうか」

「つい先日の、高校生傷害事件」

「！」

「君も関与していたと聞いたが？」

口止めはしていないのだ、情報が流れてもおかしくはない。ひとつ呼吸を置いた後、言葉を選びながら説明した。

「……当初疑われていた高校生と、個人的な付き合いがありまして。彼がそういうことをするようには思えなかつたこともあります。彼の友人たちから話を聞きました。その中に有力と言える証言があつたので、捜査にあたつていた刑事に報告したまでです。関与と言えば関与でしようが、違法な捜査と言えるほどではなかつたと記憶しております」

「ああ、非常にうまく立ち回つたと言えるだろう。確かに一般人の協力レベルと言つて差し支えなく、その結果無実の者を救つた」

未だ真犯人の逮捕には至つていなかつたがな。

その人によつて付け加えられた言葉に、奥歯をかみしめる。

「……優秀な方々が捜査に当たつていると伺つております。きつとすくに逮捕されることでしょう」

「いいや、捕まらない。そして君もそれをよく理解している」

「仰つていることがよくわかりません」

「賢いな」

ぶつけ合うような言葉の応酬と、静まりかえるような沈黙。

改めて、大河内監察官は口を開く。

「私は君を高く評価している。眞面目で熱心な勤務態度もさることながら、能力の高さをひけらかすことなく内部へ侵入する人心掌握術、状況を瞬時に理解し目的に至る段取りをたてる理解力と構想力。何より、潔癖なまでの警察官としての誇りと、感情に流されることなく法を順守するその堅い意志」

そこまで言つて彼はその唇の端をほんの少し上げた。少し声色を明るくして言葉を続ける。

「……そうだな、この近辺の不良たちをまとめ上げ、更生へと導くだけでなく協力者にまで仕立て上げたその手腕も評価に入れるとしよう。故に私は君を監察官に相応しいと考える。これでは理由にならないかね？」

思ったよりも俺のことは調べられているらしい。落ち着け、冷静に

なれ、と自分に言い聞かせる。おそらく今俺は試されている。本当に今後目をかけるべき人材であるか否か、テストされている。

だからこそ、迂闊に餌に飛びつくべきではない。

「……なりませんね。少なくとも、『今』である理由が欠けています」俺もさすがにペーぺーと言えるほど新人ではなくなったが、それでもまだ若手の範囲だ。監察官は人を見定める仕事、下手をすれば上層にだつて喧嘩を売れる。そんな仕事をまだ若手にさせる理由がわからない。見込んでくれたにしても、他でもつと経験を積んでからでもいいはずだ。

俺の言いたいことが伝わったのか、大河内監察官はまたほんの少し頬を緩めた。

「では、もうひとつ。優秀な人材には、早めに権力を手にしてもらいたい」

「と、言いますと?」

「君は入庁以来、その役職に相応しくない人間をどれだけ見た?」

思わず、硬直した。一瞬で取り戻したが、悟られただろう。動搖を表に出すなどあつてはならない。失敗した。

役職に相応しくない人間? そんなもの、山ほど見たに決まっている。

「警察組織に絶望して辞表でも出されれば貴重な人材の流出だ。そうなるよりはその貴重な人材に権力を持たせ、その力を発揮させる場を用意したい。先日の事件で、君は見たくもないものを見ただろう。それゆえに『今』、打診をしている」

「……なるほど」

「受ける気はあるかね? 監察官は嫌われ者だ、恨まれもある」

——上等だ。俺のやりたい仕事は、そこにある。俺が真っ当に仕事をしている限り、支えてくれる友人もすでに得た。

「若輩ではございますが、謹んでお受けいたします」

敬礼とともにそう答えると、大河内監察官は満足げに頷いた。

「よう、出世頭！」

「ぐ、……この馬鹿力、勘弁しろよ！」

すつぱーんと伊達に背中をひつぱたかれた。絶対赤くなつてゐるぞ
ゴリラめ。

あれから数か月して、正式に辞令がおりた。警視庁へと出向し、大河内さんの直属の部下として監察官業務にあたることになる。それをどこから聞きつけたこいつらは、祝いだと言つて山のような酒を抱えて俺の家に乗り込んできた。そんなことを言つて、実のところただ酒を飲みたいだけだろうと。

「出世するだろうとは思つてたが、こんなに早いとはな」

「監察官とか出世コースだろ？ さすが旭ちやーん」

「はは……俺が一番驚いてるよ」

苦笑とともにそう漏らすと、よく言うと萩原につつかれた。

「柊木は人を見る目あるし、向いてるんでない？ 能力的には警備案とかそういうの考えるのも向いてるんだろうけど、性格的には監察官のが合つてるかもね」

「そうか？」

「お前、見た目以上に潔癖だし頑固だし冷徹だし、能力ねえのに権力振りかざす奴許さねえからな」

「褒められた気がしない」

そう言うと皆笑いながらビールを呷つた。冷蔵庫からつまみにと見繕つたきゆうりの浅漬けを口に放り込みながら、呆れた目で三人を見る。

「……まあ、監察官やる以上は建前よりも原則通すけど。お前らも頼むぞ、さすがに同期つるし上げるような真似はしたくないよ」「ばつかお前、俺らを何だと思つてんだ」

「ああ、心配はしてないけど」

なんだかんだ真面目な奴らだ。かつて防護服を着ないという馬鹿をやつた萩原も、今では油断なく職務を遂行していると聞いている。こいつらのことを查問にかけるようなことにはならないだろう。

も「も」ときゅうりを噛みながら、自分の「やるべき仕事」を思い浮かべる。

「松田」

「何だ？」

「多分そう遠くないうちにお前に聴取を頼む。よろしくな
「……どういう意味だ？」

お前の仕事について話を聞きたいわけじゃないと付け加えると、当たり前だと憮然とされた。松田が実は本当に眞面目な奴だつてことくらい俺もよく知っている。

狙うのは松田じやない。その上だ。

「お前の上司、反省してないみたいだな」

ぐ、と松田は息をのみ、萩原は硬直する。唯一伊達だけが、変わらない様子でビールを飲み、言つた。

「やる気か？」

短く何気ない一言だつたが、静かになつた部屋にはやけに響いた。やる気か、だと？ 決まつている。

「監察官の話の打診を受けたとき、まず頭に浮かんだのがそれだったんだよ」

上層からの信頼がある？ しかも刑事部長を始めお偉いさんに同期がいる？ そんなこと俺には関係ない、むしろ上等だ。別に処罰を与えたいたわけではないが、自分が何をしているのかは認識させなければならぬ。

「殉死者を出す前に何とかしなきやならない」

たとえ誰に止められようと、必ず。監察官ならそれができる。そう言うと萩原はちよつと複雑な顔をし、松田はただわかつた、とだけ返した。

「あ、ちなみに」

「ん？」

「俺仕事場では謙虚で物腰柔らかでいつも笑顔だけど、お前ら笑うな
よ」

「笑うだろそんなん」

「笑うわ」

「やめろ想像しただけで無理」

お前猫かぶつてたのかよと指をさして笑われたが、警察庁のエリートというのはそんなものなのだ。猫かぶるのが当たり前の職場にいたのだから、そのあたりは笑わず見ないふりをしてほしい。俺もちょっと恥ずかしい。

監察官という職務を任せられてしばらくは挨拶回りに必死だつた。人の顔と名前を覚えるのはさほど苦手ではないが、派閥や微妙な力関係など、気を遣うことがとても多い。綱渡りのような人間関係に慣れるにはしばらくかかりそうだ、と内心で溜息をつく。

「疲れたかね」

「いえ」

晴れて上司になつた大河内さんは、多分基本的にいい人だ。仕事となると冷徹だが、それ以外のところでは部下にも気を遣ってくれるし、指導も論理的で丁寧だ。俺が問題なく職務にあたれるよう、自ら手本を示してくれようとしているのがよくわかる。この人が上司なのは運が良かつた。

「これで上層の紹介はほぼ済んだだろう。顔と名前と階級は覚えたかね」

「はい、問題ありません」

「記憶力はいいようだな」

「失礼があつてはいけませんから。必死ですよ」

にこりと笑つてみせると、俺の内心を察したように少しだけ唇の端をゆるめた。ではもうひとつ、と新たに歩き出す。

「上層ではないが覚えておいた方がいい部署がある」

「部署、ですか？　人でなく」

「ああ。違法捜査の常連だ」

「それは……」

「よく覚えておきなさい。……そして、上手く使うように」

どういう意味だそれ、と放心する俺に構わず大河内さんは廊下を進んでいく。案内されたのは組織犯罪対策部のさらに奥にある小部屋だった。

「失礼」

「いや、お珍しい」

「あれ、大河内さん。どうしたんですか？ そちらは？」

そこにいたのは、品よく歳を重ねてきた温厚そうな紳士と、エリー
ト然とした頭のよさそうなハンサムな男性。ふと、過去の記憶が蘇
る。胸の奥がトクリと音を立てた。

大河内さんは彼らに構うことなく、俺の方を見て話し出す。

「警視庁特命係。人材の墓場と呼ばれる窓際部署だ。そちらが室長の
杉下右京警部、そして部下の神戸尊警部補だ。捜査権もないのに捜査
に乗り込んでくる、違法捜査の常連だ。よくよくマークしておくよう
に」

「……わざわざご本人方の目の前で言わなくとも良いのでは？」

「酷い当てつけだ」

くすくすと神戸警部補は笑みを零し、杉下警部も気にした様子はない。言われ慣れているということなのだろうか。

「大河内さん、もしかして彼が噂の？」

「噂の、かは存じ上げませんが、つい数日前より大河内監察官の部下と
なりました、柊木と申します」

「そうでしたか。特命係の杉下です」

「神戸です。大河内さんから部下自慢は聞いてるよ」

「それは光栄です」

ですが、と一言挟んで笑つてみせる。

「同じだけ悪口も言われている気がするのですが、いかがですか？」

「それはノーコメント」

「ああ、やはり」

悪戯っぽく笑つてくれた神戸さんにさらに笑い返す。この人はどうやら本当に大河内さんと親しいようだ。ノリも良い、楽しい人の

かもしねない。

す、と一瞬考え込んだそぶりを見せた杉下さんが、改めて俺をまつすぐ見た。

「……恐れ入りますが、もしやフルネームは柊木旭さんでしようか」やはり、と口元に笑みがこぼれる。俺が見間違えるわけがないと思つていたけど、やつぱりこの人は、――あのときの。

「もう二十年も前の事件をよく覚えていらつしやいましたね。改めて、お久しぶりです杉下さん。申し訳ありません、まさか覚えて頂いているとは思わず」

「やはり！ 大きくなりましたね」

「お陰様で。……あの時は本当に、お世話になりました」

杉下さんは感慨深そうに、いいえと一言返してくれた。不思議そうな顔をした大河内さんが問い合わせる。

「知り合いなのか？ ……事件とは」

「私が小学生になる前のことが、誘拐されたことがあります」なるべく何でもないように言つたつもりだったが、それでも大河内さんと神戸さんは息をのんだ。

「その時に私を助けてくださったのが杉下さんでした。よく覚えていきます」

「あの頃から貴方はとても頭のいい子でしたねえ。自分の状況を外に伝えるためにあんな方法を使うだなんて、小学校に入る前の子供は普通考えつきませんよ」

「そんな。あんな子供の悪戯じみたもの、正直本当に通じるとは思つていませんでしたよ。杉下さんが読み取つて救出に来てくださつて、むしろ驚きました」

「恐れ入ります。……そう、ですか、警察に。……なるほど、きっと貴方は、……監察官という職務、向いているでしょうねえ」

少し嬉しそうに、少し悲しそうに微笑んでくれた杉下さん。

そこに込められた思いなど――少しも察していないという風に、俺も笑つてみせた。平気な顔で、その一言を返す。

「恐れ入ります」

*

「……まさか杉下警部と知り合いだつたとは」「私も驚きました。警察官になつたときから、いつかどこかでお会いできればとは思つていましたが」

「しかし、……君のことは一通り調べたが、誘拐事件の被害者という情報は出てこなかつたが？」

当然の疑問に、一瞬どう答えたものかと思つたが、まあいいだらうと頷いた。

俺には何も後ろ暗いことはないし、大河内さんもそれを言いふらすことはないだろう。何せこうして俺を引き抜いた張本人だ、そんなことをしてもデメリットこそあれどメリットはない。

にこりと笑つて、俺は嘘偽りなく真実を口にした。

「上層からの圧力で、立件されていませんからね」

「……何？」

びたりと動きを止める。驚愕するその顔に笑顔を向けたまま、続けた。

「私を誘拐したのは、ある警察官僚の娘さんでした」

俺の女性苦手のスタートであり、一番大きな原因となつた人。

俺は杉下さんによつて救出され、彼女も犯人として確保された。ほとんど現行犯で、状況証拠も物的証拠も、何なら俺という被害者の証言まで揃つていた。

しかし、握りつぶされた。書類上、俺はただの家出少年として処理されたのだ。

「ちなみに当の警察官僚の方はすでにご勇退されておられます」

「……柊木君」

「警察に恨みはありませんよ。仕事に私情を持ち込むつもりもありません」

「……君ならそうだろう。しかし、……それでよく、警察を志したな」
込み上げてきた黒い感情にまたしつかりと蓋をして、奥底へとしますい込む。

そう、俺は警察官になつた。そうなろうとずっと決めていた。俺はこの組織で生き抜いていくために、今まで努力を重ねてきた。

俺はこれから、この組織でのし上がっていく。

「……そうですね。私も、そう思います」

この内心は、悟られるにはまだ早い。

カチコチと秒針が時を刻む。

静まりかえった部屋には、ページをめくる音と紙の上をペンが走る音が流れていた。秒針の音に急き立てられるようにペンの音はどんどん早まっていくが、さて、間に合うか。

ペンの音を聞きながら、俺は手元の小説のページをめくつた。ちょうどきりのいいところまで読み終わつたその時、部屋の中にアラームが響く。

「よし、そこまで」

「つあー！　あと一問！」

「俺はギリセーフ！」
間に合つた！

それぞれの前から答案用紙を抜き取つてざつと目を通す。

幸人に勉強を教えてほしいと頼まれてから、ちよくちよく俺の家で面倒を見てやつていた。最初は幸人だけだったが、最近は他の奴もくつづいてきたりする。良い傾向なのでからかうことなく面倒を見てやることにしていた。中高レベルの勉強くらい苦ではないし、俺としてもいい気晴らしになつている。

「……うん、だいぶ解けるようになつたな。採点するからちょっと待つてろ」

「へーい」

きゆぽんと赤ペンのキヤップを抜いて、ひとつひとつの問題を辿つていく。

高校生のくせに少し前までは中学レベルの問題も解けなかつた奴らにしては上出来の結果のように見えた。解答のスピードは問題をこなせば自然と上がつていくものだし、もう少し問題のレベルを上げてもいいかもしねない。

「ひーらぎさん、そつちの部屋つて何？」

「ん？ 寝室」

「よつしや」

俺が採点に気を取られている間に、そいつは景気よくドアを開けた。別に良いけどまず家主の許可をとつてほしい。

「……」の際勝手に開けるのはどうでもいいが、よつしやつてなんだ」「え、こういうときつてまずエロ本探さねえ？」

「クソガキ。ないよ」

「嘘は良くないよひーらぎさん」

男なら持つてるだろ普通と面白そうに言われ、そういうえば女苦手の話ををしていなかつたことを思い出す。まあやましいものは特にないので気にすることなく採点を続けることにした。

その様子に俺よりも幸人の方が気になつたらしく、そいつの後を追つて首元をひつつかむ。

「お前な……その辺にしとけよ」

「何だよ幸人ー、だつて気になるじやん、ひーらぎさんの趣味」

「いやむしろ知りたくない。……ん？　ひーらぎさん」

「うん？」

答案用紙に赤をいれる手を止めて、顔を幸人の方へ向けた。

「これつてひーらぎさん？」

幸人の手にあつたのは同期との記念写真だつた。六人分の笑顔がこちらに向けられる。

「ああ、警察学校卒業した時の写真だな」

「……全然顔変わつてねえじやん」

「数年で早々老けねえだろ。一応俺まだ二十代だからな？」

「あ、もしかしてこの人、伊達さんだ？」

「ああ。一緒に写つてる奴らも同期だ」

ヘーとじつと写真を見つめるふたり。

そんなに珍しいものも特に写つてないと思うのだが、と思つて顔を上げると、ふたりはやけに真剣な顔をしていた。

「……警察官つてイケメンしかなれねえの？」

しみじみとそんなこと言う馬鹿に思わず噴き出す。やばい赤ペンが滑つた。答案用紙に歪んだ赤線が浮かぶ。

「皆タイプ違うけどイケメンだよな腹立つ」

「特にひーらぎさんとこの金髪の人並んでるとやべえな」

「他の人も普通にモテるだろ。伊達さんは男にモテそうだけど」

よし、今のは伊達に伝えておこう。

伊達が無理やり連絡先を渡したらしく、幸人とは交流があるらしい。せいぜい次会ったときに締められるといい。

「ほら、採点終わつたぞ。いい加減戻つてこい」

「へーい」

写真立てを置いて戻つてきたふたりに答案を返し、そのまま解けなかつた問題への解説へとうつた。難しい顔をして解説を聞くそいつらの顔を見ていると、口元が緩む。

根が素直なだけに、こいつらは考えていることがすぐに顔に出る。普段腹の中の読み合いばかりしているこちらとしては、この素直さは眩しくて好ましい。

先日、松田の上司の査問会を開いた。俺が主導で査問を起こすのはこれが初めてで、出席する上層にとつては俺の手腕を見極める場だったともいえる。

長年機動隊で職務を果たしてきた経歴から慢心し、部下に対しても防護服の着衣、速やかな作業の執行の指導を怠るなど、任務遂行の妨害ならびに部下の生命を危機にさらす行為を行つていているとして俺は処罰を求めた。実際に記録を洗い、松田をはじめ部下や関係者からも聴取をとつた。死者こそ出でていながら彼の隊の負傷者は少なくなく、松田以外の隊員はどうも職務に対して意識が低い。上司の悪い点をしつかり受け継いでしまつてはいるのは明白だ。

その上司自身は確かに能力が高いため、ともすれば多少の危機は乗り越えられるのかもしれない。しかし、まだそこまでの実力がない部下が同じように慢心して職務に当たつていれば、いつ何があつてもおかしくはない。機動隊の一員として以上に、機動隊で指導にあたる立場の人間として相応しい態度ではない。これが俺の主張だ。

そしてそれは案の定、「功を焦つた若手」の「青臭い正義感」として解釈された。もちろん上層の全員が全員そうであつたわけではないが、特にその上司と個人的に親しいと言われる何人かは俺の主張を鼻

で笑った。確かに彼の指導には不備があつたのかも知れないが、それは処罰に値するほどのものではない、と。

結果、その査問は表向き「厳重注意」、実際には「その場での口頭注意」程度で終わり、俺としては惨敗だったと言えるだろう。

その結果については予想の範囲内だったが、そのあと当の本人に呼び止められ、いきなり礼と謝罪を述べられたのにはさすがに面食らつた。

『部下を、殺していてもおかしくなかつた』

査問会で俺の口上を聞いていた当初から顔色を悪くしていたその人は、そのときも思いつめた顔をしていた。

実際、この人は別に悪い人ではないのだ。少々楽観的な構えがあったところが悪く作用していただけであつて、広く慕われている人柄だと聞いている。その職務態度に対しても苦言を呈した人たちからも、それだけはわかつてほしいと再三言われていた。

『今回の処分は覆らないだろうが、俺は職を辞そうと思う。少なくとも俺は、機動隊で職務にあたり指導をする者として、相応しくない』自分が部下を殺す前にそれを指摘してくれたことをありがたく思う、と頭を下げられた。なかなかに、潔い。思うところがありつつも、萩原が慕っていた理由もわかるな、と苦笑を零して、どこかで小耳にはさんだ話を思い出す。

『……貴方ほどの方が職を辞されるというのは、さすがにもつたいないでしよう』

『しかし、』

『機動隊に身を置くことが気に病まれるのであれば、どうでしょう、せめて今思い出されたものを後進に伝える職務に当たるというのは』
『……というと?』

確かに警察学校の教官に、もうすぐひとつ枠ができるとどこかで聞いた。機動隊で培ってきた能力、そして慢心や油断が自分や仲間の命を奪うかもしれないという実感を伴つた危機感。それらはどちらも、現場を走ってきた人にしか伝えられないものだ。ベテランと言つてもまだまだ働き盛りのこの人には、少々物足りない職務かも知れないけ

れど。

『やりがいはある仕事かと思ひますよ。これからを支えていく警察官の卵たちに、貴方が今再認識されたものを伝えていくのは非常に重要なことだと思います』

『……ああ、それもいいかもしれないな……』

考えてみるよ、とその人は笑つて言つた。

もともと絶対に何かしらの処罰を与えるべきと思っていたわけではなかつた。この人が自分の姿勢を省み、改めてくれるのであれば処分など必要はない。そういう意味で、査問会を開くだけの価値はあつた。そのあと松田から「上司に頭下げられたんだが」と連絡も入り、俺としては上々の結果だつたと思っている。

俺が落ち込んでいるとでも思つたのか、大河内さんからは不器用な慰めの言葉も頂戴したが、想定内ですのでご心配なくと返したら微妙な顔をされた。

『査問会の流れも把握できましたし、ご本人にはきちんと伝わつたようなので』

『……上層からの評価は悪くしたかもしれないぞ』

『過分な評価を頂く方が心苦しいですし、私の実力がまだまだどうのは私が一番よくわかっていますよ。今後取り戻せるように励むまでです』

大河内さんにまでご迷惑をおかけしているようであれば申し訳ありませんと頭を下げれば、大河内さんの口から零れたのは大きな溜息。

『……まあ、堪えていないのであればいいが
『お気遣いありがとうございます』

そうにこりと笑つて見せた。実際全く落ち込んではいない。

査問会を開いた甲斐は十分にあつた。査問の流れの把握や、ご本人に自身を省みて頂くことができたのはもちろん、「青臭い若手」の主張に対して上層に含まれる役職者がどういった反応を示すかも見ることができた。自分より格下の者の失態への態度というのは人となりが出やすい。励ますか、庇うか、馬鹿にするか、そもそも関心をもた

ないか。今後俺が上層を利用する必要があつたとき、それぞれの人格を把握しておくことは非常に重要になる。

また、功を焦る馬鹿だと思つてもらつた方が俺としても動きやすい。能力をひけらかしすぎれば無駄に警戒される。引き抜かれて注目されている今だからこそ、やりすぎるのには得策ではない。馬鹿にされている方が動きやすいというものだ。

つまり現状として、悲観すべき点は何もない。これからひとつずつ積み重ね、警察内部に入り込んでいくだけのこと。

薄暗い思考の底に沈んでいた俺は、幸人の声で現実に引き戻された。

「ひーらぎさんてば！」

「！　ああ、悪い、ぼーっとしてた。どうした？」

「これわかんないんだけど……何、疲れてんの？」

「いや？　本当にぼけつとしてただけだよ。どこ？」

幸人が指さした設問を解説しながら、綺麗とは言えない自分の思惑をまた奥底にしまい込む。

素直でまっすぐに俺なんかを信頼してくれる愛すべき馬鹿たちと接している時くらいは、仕事のことは思い出さずにおこう。策略と打算にあふれた俺の頭の中ほど、彼らにとつて悪影響なものはない。

＊＊＊

いつも通りの仕事を終えた後、珍しく大河内さんに声をかけられた。

「柊木君、この後時間はあるかね？」

「はい、特に予定はありませんが」

「神戸と飲む予定だが、君も来るか」

「神戸さんと」

大河内さんにも神戸さんにも、もちろん酒の場にも苦手意識はないので飲むこと自体は全く構わない。が、そういえば重要な話を大河内

さんにしていなかつた。今後も考えれば、伝えておいた方がいいだろうか。この人はそういうのを茶化したり言いふらしたりするタイプではないし、俺としても秘密にしているわけではない。

「……大河内さん」

「何だ。無理にとは言わないが」

「いえ、あのですね、……恥を忍んでお話が」

*

「……女性不信か？」

「それに類するものと言えるかと。ですからその、店員にしろ客にしろ、女性が多い場所はちよつと。仕事中は頭が切り替わるので問題はないのですが、プライベートになると、……まだ克服には至らず」

「……そういえば過去の誘拐事件の犯人は、女性だつたな」

明らかに気を遣つてくれているその態度に、申し訳なくなつて苦笑を返す。

「まあ、それだけではないんですが、理由のひとつでしようか」

「わかつた、心得ておこう。今日の店はそう人の多い場所ではない」

「では、是非。お付き合いさせてください」

杉下さんの部下であるという神戸さんとも、是非お話をしてみたかった。普段ではなかなか聞けない話も伺えるかもしれないし、楽しい飲み会になりそうだ。

*

「お邪魔します、神戸さん」

「やあ、君も来たんだ」

神戸さんは快く俺の同席も許してくれて、むしろ楽しそうにメニューを見せてくれた。

連れてこられたのは普段の俺ならなかに入らない高そうな店。外で飲むと言えば気軽な居酒屋しか経験がないだけに少々身構えて

しまう。

神戸さんに見せられたメニューには洋酒やワインの名前が気取つたレタリングで並んでいる。

「お酒は飲める方?」

「ほどほど、でしようか。普段はビールばかりで、恥ずかしながら洋酒は全く詳しくないんですけど」

それなら、というと神戸さんはいくつかカクテルを見繕つてくれた。

その様子を見て思う。この人、慣れてる。洋酒にも、洋酒が慣れてない人間に酒を勧めることにも。まあこれだけハンサムでスマートな対応できる人ならそりやモテるか、とこつそり邪推した。

大河内さんは大河内さんで、メニューも見ずにさらりとワインをオーダー。この人も酒には詳しいらしい。

「お待たせいたしました」

そうして注文した酒が運ばれてきたのを見たとき、思わず息を呑んだ。

酒を持つてきてくれた店員は運悪く女性で、震えそうになる手をこらえながら酒を受け取る。大河内さんは一瞬心配そうな目線を寄越し、神戸さんはそんな俺と大河内さんの様子を見てすつと目を細めた。

「……君、もしかして女性苦手とか?」

「、神戸」

「ああ、大丈夫です大河内さん」

大声で話したいわけでもないが、必要以上に隠すつもりもない。むしろ信用できる人であれば知つていてもらつた方がありがたい。

そう考えて、苦笑しつつ簡単に事情をかいづまむ。

「誘拐事件の犯人も女性……うわ、ごめん、同情する」

「ははは……」

氣を遣いすぎてはむしろ俺も困ると思つたのか、軽い調子で神戸さんは言つてくれた。大河内さんは難しい顔をしているが、俺としてもそれくらいのノリの方が話しやすい。

「友人曰く、私はどうも『女運が死ぬほど悪い』そうで。ストーカーは数知れず、目の前でキヤットファイト繰り広げられるのは日常茶飯事、私が一声挨拶を返しただけの女の子がいじめられるなんてこともあつたんですよ。誘拐のことだけなら乗り越えられたと思うんですが、そこまでくるとさすがに」

「うん、無理もないね」

「ああ、仕方がない」

もう笑うしかできないという感じの神戸さんと、本気で同情してくれた様子で頭を抱える大河内さん。まったく、いい人たちだと思う。「もちろん、世の女性全てがそうではないことも頭では理解はします。克服もしたいと思つてはいるのですが」

「感情面が追い付かない。そりやそうだ」

「……無理をすることはないんじゃないかな」

無理せずゆつくり克服しようと思つてもう二十年経つんですよ、と遠い目をしながら言うと、そつとふたりは俺から目線を外した。

「でも君、これから付き合いもいろいろあるだろうし、お見合いだってあり得るよ?」

「見合いだけなら耐え抜きますが……結婚は現状無理ですね。吐きます」

「……言葉通り?」

「吐きます。あるいは号泣、失神します」

真顔でそう言うと、大河内さんは眼鏡を外して目元をマッサージしながら絞り出すように言つた。

「……私の部下であるうちはそういう話は断るようにしておこう」「本当に私は大河内さんの部下でいられて幸せです」

にこつとそう笑つてみせると、神戸さんはまた乾いた笑いを漏らし、大河内さんは一息にワインを呷つた。

*

「へえ、神戸さんも元は警察庁に」

「ま、今はしがない特命係だけどね」

「それなりに楽しんでいるようにみえるが？」

「そう見えます？……まあ、退屈はしませんかね？」

ふ、と笑う神戸さんが少し羨ましい。閑職だと言わわれてはいるが、杉下さんと一緒にならちよつと配属されてみたい気がしなくもない。まあ周囲には全力で止められるだろうが。

「大河内さんも警察庁からの出向組ですよね」

「そうだな」

「……。……ではおふたりに、雑談として聞いていただきたいことがあります」

今まで話していた様子を見ても、このふたりは信用できるし、おそらく口も堅い。俺よりずつと長くこの警察組織で生きてきた人たちだ。できることなら俺の疑念を考えすぎだと笑い飛ばしてほしい。そう思つて口を開いた。

「私の同期に、警察学校を卒業して以来ほとんど連絡が取れなくなつた者がふたりいるんです」

「何、辞めたつてこと？」

「いえ、そう言つた話も、全く。正義感も強く、ずっと警察官になることが夢だつたと言つていたようなふたりです、私としては辞めたとは思えません。病気や怪我にも縁のないような、頑丈な奴らでした。仮に辞めたとしても、まったく連絡が取れないのが気にかかります。それなりに親しかつたつもりでいますし、そんな不義理なふたりではなかつた」

「……そのふたりは、優秀だつたかね」

「非常に。片方はオールマイティに、片方は射撃に特化していました」
神戸さんは特に表情を浮かべないままグラスに口を付け、何でもないようになに言つた。

「じゃあ、そういう部署でそういうことをしてるんじゃない？　あまり首を突っ込まない方がいいと思うよ、君のためにも、彼らのためにもね」

「そうだな。ない話ではない」

大河内さんもワインに口を付け、チーズをつまんだ。「そういう部署」「そういうこと」、それは察している。ただ俺が気になつてているのは。

「その可能性も考えました。ただそう考えたとき、……嫌な考えが浮かんでしまつて」

「嫌な考え方って？」

「彼らは確かに優秀でした。ですが、その『そういう部署』は、かなりの秘密主義で、配属される人間も相当に厳しく選抜されるはずでしょう。いくら警察学校で優秀だつたといつても、所詮は学校での成績です。実際に警察官として職務にあたつたことがない人間を、おいそれと引き抜くものなのでしょうか」

大河内さんと神戸さんがぴたりと動きを止めた。俺は構わず続ける。

「実務経験のない人間を引き抜き、……もし潜入任務にあたらせていいんだとしたら、その理由は何なのか。警察学校を卒業したばかりの彼らを、潜入任務に就かせるメリットとは? ……私の頭で考えつくのは、彼らの顔と立場がまだ知られていないという点しかありませんでした」

どこにも顔が知られていない。そう、相手組織にも、——警察内部にも。

もしそうであるとしたら、それだけ危険な組織が、警察の内情を知る手段を持ち得ているということを意味する。警察内部に情報を流している者がいるのか、すでに対象の人間が入り込んでいるのか。

警察の中に鼠がいる。それこそ、俺がもつとも懸念していることであつた。

「……考えすぎですかね、やつぱり」

そう言つて手元のカクテルに口をつける。

さすがは神戸さんチョイス、慣れていない俺でも飲みやすい。

「……考えすぎだらう」

「……うん、考えすぎじゃない?」

そう繰り返してもふたりの表情は硬い。笑い飛ばしてくれること

を期待してこんな話をしたというのに、どうもそう上手くはいつてくれないらしい。

そうですかと小さく言うと、ワイングラスを揺らしながら大河内さんが低い声を落とした。

「……思うところがあつても、不用意に探るような真似はしないように」

「もちろん、心得ています」

ぼそりとつぶやかれた大河内さんの忠告に、苦笑しながら頷いた。もちろん、不用意に探るようなことはしない。

もし探るならば、入念に準備をしてから、慎重に。絶対に、へまなとしてやるものか。

返事をしていないメッセージが降り積もつていく。意外とマメなやつらなんだよなと呆れる反面、どうしたつてそれは嬉しかった。いつ切れてもおかしくない繋がりを、一生懸命に繋ごうとしてくれるのが有り難くて。

正直を言えば、連絡のすべてを禁じられているわけではなかつた。公安に配属され、随分と早くから潜入任務に就いていいるとはいえ、最大限の注意を払うならば個人的なやりとりの少しくらいは問題はない。ましてなんだかんだで優秀なあの同期たちなら、僕やヒロが不利になるようなことは絶対にしない。それはよくよくわかつてている。

それでも連絡を躊躇つてしまふのは——何故だろう。決して会いたくないわけでも話したくないわけでもないのに。

連絡を返せなくて申し訳ないと思う。それでも連絡をくれるのが有り難いと思う。だからこそ、だろうか。だからこそ、——せめてもう少し、明確な成果を得たと自分で思えるときまでは、という気持ちがあるかもしれない。彼らに、お前らとの連絡を絶つていただけの成果はあつたぞ、と。

明確な成果——組織の幹部たちを蹴落とすか信頼を勝ち取るかして、より組織の中核に入り込むくらいの。酒の名前コードネームをつけられる程度ではまだ弱い。何かと言えば銃を持ち出す気難しい酒にも口を出させないくらい、もつと核心に近いところへ。

ネクタイを緩め、警視庁の休憩所の壁によりかかる。細く長く息を吐き、紙コップに入った珈琲に口を付けた。あまりに安っぽい味の珈琲は、かえつて氣を抜くのにはちょうどよかつた。

こういう気分のときは、よく彼らからのメッセージを見返していく。近況報告や、「一回くらい返事しろ」という文句やら、日々の愚痴やら、どうでもいいことまで。それらをひとつひとつたどつていくこの時間は、僕が「降谷零」であることを忘れないために必要な行為だつた。

ふと、画面上部に新たなメッセージの通知が浮かんだ。やはりとい

うか、同期の中でも一番の筆まめからだ。彼からのメッセージはいつも、僕に向けられたものというより日々の雑記に近い。彼の半生から察するに、おそらく「親しい友人にメッセージを送る」という行為そのものに慣れていないのだろうと思う。たまに夕飯の買い物メモを送つてくるのには笑つてしまつた。

しかし、どうやら今回のメッセージはそんな平和的な内容ではないようだつた。

「、ゼロつ格木のメッセージ見た？」

革靴が床を叩く音が近づくと同時に、幼馴染みの少し焦った声が飛ぶ。今日はヒロも所用を片付けに警視庁に登庁していた。

珈琲を飲み干し、カップをゴミ箱に放り捨てて視線をヒロに向ける。

「相変わらず格木のメッセージは落差が激しいな。日常のことも重要なことも同じテンションで送つてくるところがらしいというか」

「それは本当にそう」

格木からのメッセージは、とうとう上層が根負けしやがつた、と恨みたつぶりの一文から始まつていた。

萩原や松田の因縁の一件については知つている。同期たちからも次々とメッセージが送られてきたり、警察側の発表も耳に入つてきた。

マンションに仕掛けられた爆弾、交通事故で亡くなつた犯人、解体途中で突如爆発した爆弾に、巻き込まれた萩原、何よりも未だ捕まつていらないもうひとりの犯人。

大怪我を負つた萩原が無事復帰したと聞いたときには胸をなで下ろしたものだが、萩原よりもむしろ松田のほうが危ういということも聞いている。絶対に犯人を捕まえてやると、幾度となく捜査一課への転属届を出しては蹴られ続けていると言ふことも。

しかし耐えかねたのか、上層もどうとう折れてしまつたらしい。まあ爆破事件を担当する特殊班係でなく強行班係だつたのは、折れてはやるけど少しほとんど頭を冷やせという上層の配慮だろうか。とはいへ、因縁の日である十一月七日に送られてくるカウントダウンFAXが

ちようど来るタイミングでの辞令とは。

だつたらせめて伊達の捜査一課への異動も同じタイミングにしてほしかつたと、柊木にしては珍しい愚痴のような一文も添えられる。今の部署で数々の功績をあげた伊達も、捜査一課への異動が内々に決まつたらしい。

「……伊達班長の栄転を素直に喜んでやれないのが申し訳ないな」「特殊班に萩原がいるとはいえ、ひとりで松田を抑えきれるかわからぬもんな。いくら萩原が一番松田の扱いをわかつてるって言つても、随分荒れてるみたいだし」

「そうだな、特に松田は頭に血がのぼりやすいから、……変に暴走しないといいんだが」

つい言葉が深刻になる。が、だからと言つて自分で動こうとは思わなかつた。不安はあるが、反面で大丈夫だろうという妙な確信をあつたからだ。

何せメッセージの一番最後、近況報告としていろいろ書いたけど、とかつて僕と首席を奪い合つた男はさらりとこう言つている。

『勝手な行動をとる可能性が高い警察官をマークするのは俺の仕事。何とかするから心配しないで自分の仕事に集中しろよ』

ヒロも同じことを思つてゐるのか、口では心配だと言いながらも顔は苦笑してゐる。迷いはあるにしろ、自分で動こうとは思つていないようだつた。

「……結局は柊木や皆に任せらしかったんだけどね」

「ああ。……きっと大丈夫だ」

柊木はやると言つたらやるやつだ。萩原だつて松田が馬鹿する前に爆弾魔を捕まえるべく奔走するだろうし、伊達もきっと松田を無理矢理でも気晴らしに連れ出して氣を逸らすくらいのことは絶対にやつて いる。

友人の危機も知れないのに、手を出してはならない今の状況がもどかしい。しかし、自分が手を出さなくともきっと何とかしてくれる友人たちがいることは、誇らしくもあつた。

また手元の端末の画面が明るくなる。今度はメッセージでなく着

信だった。画面に表示されているのは、プラチナブロンドを揺らす性
悪な酒。

「……呼び出した」

「ベルモットか。今日はオフじやなかつたのかよ……」

「よくあることだ、仕方ない。ヒロ、お前も通知来てるぞ」

「ん？ ……俺も呼び出した」

やれやれ、と一人して息を吐き、頭を切り替える。

「すぐに準備しないとな」

「方向同じなら送つていこうか」

「お、助かる。……安全運転で頼むぞ？」

「当たり前だろう」

僕はいつも安全運転じゃないかと返すとヒロに生温い目を向けられたのが気になつたが、今は時間がない。さつきと格好と性格を「黒」に変え、僕たちの職務を果たさなければ。

——だから、そつちは頼む。

内心でそう呟いて、頭を「バーボン」に切り替えた。

* * *

相変わらず音信不通の同期たちにメッセージを送りつけ、自宅のソファに深く腰掛けてゆらゆらと頭を揺らす。

何とかすると大口を叩いた以上、何とかしなければならない。

萩原に松田の見張りを頼むにしても、班が違えば当然限界はある。あの頑固でひとの言うことを聞かない松田のことだ、どうせ命令違反でも何でもして十一月七日に贈られてくるだろうFAXは意地でも見る。そしてきっと、勝手な行動に出る。

さて、ならば俺にできることは。いくつか行動パターンを考えるが、やはり当日の犯人の動きがわからない上に、動かせる駒が自分ひとりではできることが限られる。せめていくらか手足が欲しい。できることなら言わずともこちらの意図を汲んでくれて、自分の行動には自分で責任を取り、何より俺が信頼できるような。

そこまで考えたとき、脳裏に大河内さんの言葉が蘇つた。

『上手く使うように』

——ああ、なるほど。ふと射し込んだ一筋の光明に、口角が上がるのを感じた。

運命の十一月七日は、いつそ嫌味なほど晴天だった。

あらかじめ休みを取つておいた俺は、そつと自分の仕事場に顔を出
す。

「おはようございます」

「おはよう。どうした、今日は休みだつたはずだろう」

「うつかり財布を忘れてしまいました。ああ、あつた」

引き出しからあらかじめ残しておいた財布を取り出し、少し恥ずか
しそうに掲げて見せる。

「では、私はこれで失礼します」

「ああ」

ほんの小芝居だが、俺が今日と言う日に警視庁にいてもおかしくな
いための理由付けだ。何かことを為そうというときは、こういう細か
いところも手を抜かない方がいい。

そして俺はその足で、ある部署へと向かう。事件が起きると外出す
ることも多い。そうだが、他の部署の様子を見る限り特に大きな事件が
起こっている様子はない。ならばきっといつも通り、暇でいてくれる
はずだ。

「おはようございます」

実はここに顔を出すのは挨拶の時以来になる。

その小部屋にいたふたりはちょっと驚いた顔をして、それでも快く
俺を迎えてくれた。

*

捜査一課に送られてきたFAXには、数字でなく犯行予告と受け取
れる暗号文。

爆弾は正午と十四時のふたつ。「円卓の騎士」に「七十二番目の席」、「戦友の首」とはまた……この犯人、世に言う中二病という奴だろう
か。ナルシシズムをこじらせたガキの作る文章かと思う。

FAXからひとつめの爆弾は杯戸町ショッピングモールの大観覧車にあることを導き出した松田は、案の定そのFAXを手に荷物を取る。

完全に予想通りの展開に、俺はやれやれとその前に立ちふさがつた。

「どうも」

にこりと笑つて見せると、わかりやすく顔を引きつらせた松田。

俺の存在に気づいていなかつた捜査一課の刑事たちも驚いた顔をしている。気配を消してたとはいえ、普通にさつきからここにいたのだけれど。視界の端で萩原も驚いた顔をしているのが見えた。

「ひ、柊木監察官？」

「何故こちらに……」

「まあ、勘でしょうか。来なければいけない気がしましたので」

そのまま、呆けた松田の手からさつとFAXを抜き取る。

「！」

「爆弾事件の担当は特殊犯係です。萩原巡査部長、これを」

「はい！」

「柊木！」

「敬語。貴方に捜査権はありませんよ、松田巡査部長」

俺の言葉にかつときだらしの松田は、そのまま拳を振り上げる。ここまで計算通り。

ちなみに俺は現場に出ることのない完全なデスクワークの人間だが、それでも完全に頭に血が上った奴の拳を受けるほど鈍ってはいな。もちろん、そんな奴の隙を見逃すほども。

くわえて見た感じ今ここに俺の弱みを見せても利用できそうな階級の人間はおらず、捜査一課には人情味溢れる昔ながらの刑事が大半を占めることも調査済み。ついでに言うと、この角度なら防犯カメラにも写らないし俺の右手の動きなんて後ろにいる二人にしか見えない。

これは正当防衛だから、と内心で言い訳した俺は松田の拳を軽くかわし、逆に松田の腹に拳を叩き込んだ。

「……ありやう」

絶句する捜査官たちの中、萩原のマヌケな声だけが部屋に響いた。声もなく崩れ落ちる松田を片腕で支え、いつも通りの調子で言う。

「ああ、どうやらお疲れのようですね、彼は。確か彼の上長は日暮警部でしたか」

「い、いかにも」

「彼を早退させたいのですが、構いませんか？ ちなみに彼の早退理由は体調不良ですし、皆さんは何も見てはいない。よろしいですね？」

混乱していた日暮警部はひとつ呼吸をして自身を落ち着かせると、まっすぐとこちらを見つめた。

「……彼がこういう行動に出ることを存じだつたのですかな？」

「松田は警察学校時代の同期で、個人的に親しいんです。そのFAXのことは聞いていましたし、無茶をすることは予想できましたので、一応と思いまして。先ほどの彼の解釈は正しいと思います。すぐに大観覧車に捜査員を送るべきかと」

後半は特殊犯係の警部、萩原の現上司に向けて言つた。即座に頷いたその人は矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「では、私はこれで。あ、ちようどいいところに特命係のおふたり！」

俺の後ろでずっと待機してくれたおふたりに、ようやく声をかける。呼ぶだけ呼んでずっと待たせていたのだから、申し訳ない限り。

「恐れ入りますが神戸さん、少し手を貸して頂けませんか？ 彼を病院に連れて行かないと」

「あ、そういう役回りね。了解了解」

意識を失った松田を受け取った神戸さんはおもつと声を漏らして抱えなおした。俺は軽く笑つて言う。

「細身に見えますが、元とはいえ機動隊でも生え抜きのゴリラですか。訓練真面目にやつてたぶん重いんですよ、この筋肉ダルマ」

「ねえ、ときどき同期に対しても必要以上に口が悪くなるのやめよ？面白いけど」

ひよこつと俺の傍にきた萩原がため息交じりに笑う。

「敬語」

「はいはいすいません。FAXください」

「はい、どうぞ」

FAXを手渡すと、萩原がそっと顔を寄せて小声で言う。
「……来てくれて助かつた」

「いや。……萩原」

同じく俺も声を潜めて言う。これを言つたことがバレたら俺は監察官ではいられない。

「ん？」

「俺も動く。何かあつたら連絡してくれ」

「……了解」

「あと車貸して」

「……んもくくいいけどさくくく」

小声でやり取りをして、萩原から車のキーを受け取る。無理するな
よ、とかけられた声にああ、と笑つて、俺は刑事部を後にした。
心の中で、自分の言葉に多分、と付け加えながら。

*

萩原の車を拝借し、助手席に松田を詰め込んでハンドルを握った。
特命係のおふたりも、躊躇いを見せせず後部座席に乗り込む。

「柊木さん。病院に行くと仰いましたが、どこの病院か見当はついて
いるのですか？」

「え？」

「先ほどの松田刑事の推理は見事なものでした。彼の言う通り、ひとつめの爆弾は杯戸町ショッピングモールの大観覧車でおおよそ間違
いはないでしょう。問題は、もうひとつ別の爆弾です」

「……もうひとつ別の爆弾は、どこの病院にあると？」

よく呑み込めていない神戸さんに、もう一度あの暗号文を譖んじ
る。そして、俺の推測を言葉にした。

「文中にあつた『我が友の首』です。円卓の騎士の時代、たいていの騎士は十字がデザインされた仮面をつけているんですよ」

「……病院の地図記号？」

「私も同意見です。こじつけじみてはいますが、可能性はあるでしょう」

「お言葉ですが、都内だけでも病院がいくつあると？」

そう、数ある病院の中からひとつの「あたり」を探しだすのは困難を極める。どれだけの人員を投入したとしても不可能だろう、そしてその動きを察知された瞬間に遠隔操作で爆破される可能性が高い。だから犯人の思考を読み、行動を読み、「あたり」に見当をつけて、そこから爆弾を探し出さなくてはならない。

俺は呼吸を落ち着かせつつ、思考の道筋を言葉に直した。

「犯人は四年前の爆弾事件と同一犯とみてほぼ間違いない。ならば、警察に対して強い怨恨を抱いているはずです。爆弾を『花火』と表現していることを考えても、その爆弾はおそらく甚大な被害をもたらす、それなりに目立つ場所に設置されていると読みます。この子供のような気取った文章から幼稚かつ短絡的な性格がうかがえますし……子供なら、自分が作つた花火が打ちあがるところを見たがるでしょう。そして、爆弾の時間差はたつた二時間」

「つまり……それなりに規模が大きく、この時間は診療時間内で多くの患者がいる病院。加えて、観覧車とそう遠くない距離にあるところ？」

神戸さんの言葉に頷き、杉下さんが言葉を引き継ぐ。

「ええ、個人経営のクリニックは除外してもいいでしようね。入院患者もいるような大型の総合病院のほうが人も死角も多く、爆弾も設置しやすい」

「それからもうひとつ。少し前にニュースになりましたよね」

元警察官という異例の経歴を持つ、大物代議士の入院。

そう口にすれば、後部座席のふたりは息をのんだ。

「入院先まではニュースで流れませんでしたが、少し調べれば一般人でも簡単にわかります。警察に怨恨を抱くなら標的のひとつとして

数えてもおかしくないし、そうでなくとも代議士を爆弾の危機にさらしたとなれば警察の面目は丸つぶれ。それなりに大きく取り上げられたニュースです、犯人が考慮に入れてもおかしくないと思いませんか」

証拠は何もない、憶測の域を出ないが、何もないよりずつといい。信号に引っかかるつて舌打ちをする。いや、落ち着け、焦るな、時間はある。

なんとか平常の声を装つて、言つた。

「入院先は、米花中央病院です。幸いにも警視庁からも近い。……お二方、松田巡查部長を病院に連れて行くついでに、少し院内を散歩しようと思うんです。恐れ入りますが、お付き合いいただけませんか？」

「ええ、喜んで」

につっこりと笑う杉下さん。対して神戸さんは、苦笑して言つた。

「……素直に爆弾探すつて言えばいいのに」

「私がそんな職務外の行動をとるわけがないでしよう?」

大河内さんに怒られてしましますと続けると、神戸さんは声を上げて笑つた。

*

気を失つたままの松田をいつたん目立たないよう、病院のロビーに転がし（声をかけてくれた看護師さんには神戸さんが「よく寝てるでしよう?」で押し通した）、観覧車の方向から見える場所を中心に病院内を見て回る。

すぐに杉下さんから連絡が入つた。松田を拾つて指定の場所に走る。

「杉下さん！」

「杉木さん、こちらです」

待合室の隅に設置してあるベンチの下。明らかに怪しいとわかる黒い箱が置かれている。箱の存在を確認して、引きずつってきた松田を

その辺に転がした。

「松田を叩き起こして爆弾処理に当たらせます」

「ええ、確か彼は元爆発物処理班でしたね。僕と神戸君は病院側に事情を説明してきます。ここはお任せしても？」

「もちろんです。よろしくお願ひします」

ふたりを見送った後、一応軽く松田を揺さぶつてみたが、まあ起きない。そんなに強く殴つたつもりはなかつたんだけどな、と思いながら思い切り松田の頬を平手で殴つた。

「ぶ!？」

「よし、起きたな」

「ひ、……いらぎ？ テメエよくも！」

「こつちこそ説教は後だ寝坊助！ 見ろ！」

爆弾を見た瞬間、松田の目の色が変わつた。

すぐに周囲を見て自分の鞄を確認し、引き寄せる。その中には愛用しているであろう工具類。予想の範囲内ではあるがよくもまあ後生大事に持ち歩いているものだ。

いくつか工具を取り出し、注意深く爆弾をチエックする。

「……柊木、上着貸せ」

「？ 何だよ」

「やけに密閉されたつくりになつてやがる。感光起爆装置がついている可能性が高え。上着で光を遮るからその分厚い上着とつとと寄越せ寒がり」

「るつせえほらよ。……待て、お前その手に持つてんの何だ」

松田の手にはどこをどう見ても機動隊爆発物処理班御用達の赤外線暗視スコープ。松田は特に気にした風もなくしれつと言ひ返した。

「私物」

「嘘つけ。お前さては古巣離れるときになつぱらつてきたな？」
「型が古くなつたから処分予定だつた奴なんだよ。見逃せ」

これが片付いたら絶対機動隊に引きずつてつて頭を下げさせる、だから今は何も見てない聞いてない、そう自分に言い聞かせていると、特命係のふたりが戻ってきた。

「避難指示は出してきたよ」

「ええ、幸いにもこちらの爆弾の爆破まで時間があります。問題はないでしょ?」

「そうですか、ありがとうございます。松田、どうだ?」

「爆弾の形状から考えても四年前の犯人に間違いないねえな。五分で余裕」

「そうか、それなら……」

と、その時、俺の携帯が着信を告げた。相手は萩原。嫌な予感がする。

「失礼。……はい、松木」

『あ、旭ちゃん? 実は今、観覧車で爆弾とランデブー中なんだけど』

「……お前つくづく運がないね」

いやホントにね」と笑っているが、観覧車と言う狭い空間に爆弾と閉じ込められ、しかも電話を掛けていることは、当然防護服を着用していない。四年前のあのときより、状況は悪い。

状況説明の手間を省くために携帯をスピーカーに切り替えた。

『どうやら犯人は最初から観覧車に警察官を閉じ込める予定だつたっぽい。さつき爆弾の液晶パネルに文字が流れた』

観覧車に乗ることになつた経緯の説明と、その液晶パネルに表示された内容に怒りで目の前が赤くなる。それでも何とか平静を保つべく深呼吸。爆弾から顔を上げようとした松田を抑え込み、解体を続けさせた。

『爆破三秒前にもうひとつ別の爆弾の場所教えてくれるらしい。警察官的にこれ死ななきやと思うんだけど、できりや死にたくないんだよね。何か策ない?』

『……まず、萩原。盗聴器は?』

『確認済み。ないよ』

『よし、そななお前に朗報だ。今もうひとつの爆弾を松田が解体中』

電話口で、萩原が息をのんだ。

「松田、その爆弾を仕掛けたのは四年前と同一犯で間違いないな?」

萩原に聞かせるために、あえて再度確認をいれる。松田はにつと口元をあげて大声で答えた。

「萩原ア、お前の目の前にある爆弾、水銀レバーついてねえか」

『おー陣平ちゃん、起きたんだ。ついてるよ』

「こつちもだ。まず間違いなく同一犯とみていい』

他の形状も手癖も一致する。松田がそう断言したことを踏まえ、ゆらりと頭が揺れた。思考を走らせ、この状況における「最適解」を弾き出す。

「柊木さん」

「」

「僕たちは観覧車に向かいます。よろしいですね?」

「……よろしくお願ひします」

さすが杉下さん、判断が早いし的確だ。

萩原の車のキーを受け取り、杉下さんは足早に去っていく。神戸さんもどうやら何をすべきか理解しているらしい、ウインクをひとつ残して杉下さんに続いた。特命係のおふたりを呼んだのは本当に正解だった。

お二人がそちらに向かってくれるなら、何も問題はない。

「萩原」

『何?』

「お前は解体作業を続行しつつ、すぐに上司に連絡を。二つ目の爆弾の処理が進んでいることを報告し、目の前の爆弾を解体する許可を正式にどれ」

『え、それ必要?』

「必要だ。ただし、それを絶対に上司以外の人間に悟らせるな。上司にも顔に出さないよう前置きしてから説明しろ。おそらく爆弾犯はその観覧車のすぐ傍にいる」

『な、』

「正午になるその瞬間まで、犯人に自分の思い通りにことが進んでいくと思いませろ』

正午になつても爆弾が爆破しないことを悟ったとき、犯人は初めて

こちらの爆弾に意識を向けるだろう。そのときにはすでに松田が解体を終えている、これがベストだ。

「萩原、松田、いけるか」

『問題なし』

『余裕』

「よし。じゃあ萩原、切るぞ。ちゃんと上司に許可取れよ?』

『りょうか〜い。……また後でな』

萩原の上司の警部は念には念を入れるタイプのひとだと聞いている。爆弾犯が観覧車のすぐ傍にいることを知れば、杯戸町ショッピングモールの完全閉鎖くらいまでは手を回してくれるだろう。最悪、居合わせたひと全員に身体検査するか監視カメラを全チェックするかすれば犯人は特定できる。

増援として杉下さんと神戸さんも現場に向かっている。ここからショッピングモールまで車なら数分。おそらく犯人確保は問題ない。後はもう、元爆処組を信じるだけだ。さて、俺は俺にできることをするとしよう。

「松田、俺は一応、避難状況の確認していく。パニックになつてないか心配だ」

「おー。解体ももう終わるから、終わつたら連絡する」

避難は危険から遠ざかればいいというものではない。逃げてきた先で落ち着いて行動できてるか、逃げる途中に怪我はしていなか、逃げ遅れた人はいないかななどメンタルケアも含め気を配らなければならぬ部分がたくさんある。特に怪我人病人の避難というのはより注意が必要だ。

災害時の対応なども管轄になる警察庁警備局警備課で勉強したことが、こんなところで活かせるとは。

「松田、あと頼むぞ」

「……誰に言つてんだ、バーク」

松田にそう一言残し、俺も病院の廊下を走った。

*

『解体完了♡』

『終わった』

どちらがどちらからのメールかなんて一目瞭然だろう。あのふたりらしいメールの文章に、思わず笑ってしまう。

そして、神戸さんからの連絡。

『犯人確保したよ。特殊犯係に引き渡した』

感謝のメールを送り、とりあえず安堵の息をつく。何があつたと騒ぐ例の代議士の相手も適当にこなしつつ、引き続き医師や看護師に避難について指示を飛ばしながら、まだまだあるやるべきことを頭の中に思い浮かべていた。

爆弾犯との因縁との決着は完了、だがこの事件を片づけたというにはまだ早い。自分がかつてない窮地に追い込まれているにも関わらず、不思議と今の状況を楽しんでいる自分がいる。

この程度の大勝負、いちいち怖気づいてはいられない。

* * *

査問会には慣れてきていたが、まさか「こちら側」に立つことにはうとは。内心苦笑をしつつ、ずらりと並んだ上層部の視線を正面から受けた。

「では、今回の爆弾事件における松木旭監察官および松田陣平巡查部長の対応について、査問会を執り行います」

大河内さんがいつもと変わらぬ声で査問会の開催を宣言する。

まあ、こうなるだろうと覚悟はしていた。犯人が捕まろうと爆弾処理が成功しようと、俺も松田も自身の職分を逸脱した行動をとつている。

本来ならば病院で不審物を発見した瞬間、俺たちは速やかにその旨を警視庁に報告し、爆発物処理班を呼ばなければならなかつた。それを怠つて、その権利と義務をもたない者が、しかも装備もなしに爆弾処理にあたつたのだ。病院内的一般人を危機にさらしたと言わされて

も仕方がない。まして、俺は監察官としてそれを奢めなければならぬ立場。それなのに問題行動を見逃すどころか、ほとんど俺がその状況に持つて行つたようなものなのだから問題視されて当然、監察官としての素質を疑われる行動と言える。

松田には今回の爆弾解体は俺の許可があつたと証言するようになり酸っぱくして言つてある。別に庇うつもりがあつて言つているのではなく、こういう場に慣れていない松田より俺が弁明をするために。

ちなみに萩原は呼ばれていない。権利と義務をもたず、装備なしで爆弾解体を行つた点では松田と同じだが、爆破まで時間がない状況でゴンドラに閉じ込められたこと、また解体にあたつて事前に上長に報告し許可をもらつていることから無罪放免。上司の許可を取りと言つたのはこういう意図があつてのことだ。

もうひとつついでに言うと、特命係のおふたりの行動はもはやいつものことなので、見ないふりがされている。あのふたりはよほど問題行動を起こさない限り、良くも悪くもいなものとして扱われるのだ。羨ましいと思うべきか憐れむべきか大変微妙なところ。

大河内さんが事件の経緯を説明し、俺たちの行動の問題点を列挙していく。その内容はほぼ予想通りのもの。

「まずは状況の説明を聞こうか」

「では、私から」

す、と一步前に出た。

まず間違いなくこの査問でお咎めなしはありえない。だが、あの爆弾解体に緊急性があつたこと、爆処を呼ぶ余裕がなかつたことを認識させれば処分を軽減することは可能だろう。

まだ警察をクビになるつもりはない。そつと息を吸つて、口を開いた。

「まず、今回米花中央病院において爆弾を発見したことは、全くの偶然です。爆弾予告については警視庁を出発する際に耳にしており、発見した爆弾は予告文で提示されていた『ふたつめの爆弾』の可能性が高いと判断したのです」

建前上、松田は体調不良で早退したことになつていて。それなら松田と俺が病院にいること自体は何もおかしなことではない。米花中央病院をわざわざ選んだ理由？　松田のかかりつけの病院だからです。嘘も方便だ。

「また、四年前の爆破事件に関わっていた松田巡査部長から、当時の事件と同一犯の可能性について説明されました。もし本当に同一犯であれば爆弾は遠隔操作が可能なタイプである可能性が高く、犯人の意志ひとつでいつでも爆破されてしまう。しかし、予告状の文面を考えれば、ひとつめの爆弾の処理が完了するまで犯人はこちらの爆弾に意識を向けてこない。ならばひとつめの爆弾の爆破時刻までに解体してしまうのが最も安全な道であると考えました」

そこで改めて隣にいる松田を手で指す。ぴくりと松田の肩が震えた。

「幸いにも松田巡査部長は少し前まで機動隊において爆弾処理を任せていた人物であり、かつ、本人もその義務感から防護服のない状態でも爆弾処理を買って出てくれました。爆発物処理班を呼べるだけの時間ががあればよかつたのですが、ひとつめの爆弾の爆破まで一刻を争う状況であつたため、彼の爆弾処理を許可しました。私は監察官たる立場以上に警察官である立場から、彼に爆弾を任せ、一般市民の避難に尽力した次第です」

まったく長台詞は疲れる。嘘と本当を混ぜ込みながら、それらしい説明を作つた。そして申し訳なさそうな顔を見せ、上層の表情を探る。

ああ、近日中に査問にかける予定のひとりが、にやにやと氣色の悪い笑みを浮かべてこちらを見ている。少しは隠す努力をすればいいものを。

「そして結果、爆弾は解体、一般市民にも影響は出ず、犯人も確保された、と」

「結果良ければすべてよし、などと申し上げるつもりはございません。己の職分を忘れ、彼の解体を許可したことは事実です。そして松田巡查部長もまた、人命のかかった緊急の事態であつたとはいえ、その権

利もない状況で、しかも十分な装備もなく爆弾解体にあたりました。
どうぞ、厳正な処罰を」

上層の印象のなかで俺は「青臭い正義感を振りかざす若手」のまま。
ならばこの程度の嘘ならそう疑われることもないだろう。

さりげなく「人命のかかった緊急の事態」を強調し、頭を下げる。俺
に続いて、松田も頭を下げた。こういうときは形だけでも反省を態度
で示すものだ。

「ふむ……」

難しい顔で黙る警視庁のトップに対し、表情を隠すことも知らない
馬鹿はにやにやと言ひ募つた。

「結果がどうあれ、職務を忘れたことに変わりはない。相応の処罰が
あるべきでしょう。経験があろうと処理班でもないものが解体など
！ しかも防護服のない状態で！ 杉木君、それは一般人のみなら
ず、松田巡査部長すらも危険に追いやる行為だと理解していたはずだ
ね？」

ほう、そう来たか。松田の処罰をさて脇に置いてでも、とにかく俺
を追い詰める方向に持つていきたいらしい。それも、一般人のみなら
ず松田の命すらも危険に晒したという点で。

その馬鹿さ加減には呆れずにはいられない。俺を追い詰めるつも
りで、まさか自分の首を絞めにくるとは。口元が緩みそうになるのを
必死に抑えた。

「まあ、義務感故の行動に懲戒はさすがに気の毒だ。依願退職あたり
が妥当では？」

喜色満面の顔を視界に入れないと努力しつつ、発言の許可をとろ
うと口を開きかけた、そのときだつた。

「……しかし、いつぞや防護服を着ずに解体に当たらせていた者に対
して、厳重注意で済ませることに強く同意したのは貴方ではなかつた
かな？」

他のお偉いさんからの指摘に、そいつはびたりと黙つた。俺が言お
うとしたことを先に指摘されたことに少し驚く。指摘したひとの隣
に座っている高そうなスーツも完全に呆れた顔で頷いていた。

そう、指摘されたのは萩原と松田の元上司の査問の件だ。その方の名譽のために言つておくが、決してこのニヤケ面は彼と懇意だつたということはない。こいつは俺という若手が偉そうなことを言うのが許せなかつたらしく、「厳重注意」という処分に強く同意していた。つまり俺が気に入らないが故に押し通した処分に、今こうして自分の首を絞められているというわけである。

法の下では皆がフェアだ。「甘い処分」という例外は、一度作つてしまえばそれ以降ずっと「前例」として記録に残る。その後同じことをして処分を受ける者が出ても、基本的にその「甘い処分」を参考に处罚が決められるのが常だ。何事にも例外をつくるべきではないとうのはそういう点にある。

彼と親しかつたが故に厳重注意で済ますべきと主張した人たちも、気まずげな顔をしていた。

「しかも今回は急を要する状況であつたが、それはただの怠慢だつた。怠慢への処分が厳重注意で、義務感故の行動が依頼退職とは、いささか公平性に欠けるだろう」

その声に、次々と賛同の声が上がる。

「同感ですな。確かに褒められた行為ではないが、このふたりが多くの人命を救つたことを軽視すべきではない。病院で爆破なんぞ起こつたらとんでもない被害になつていたはず。しかも柊木くん、元警察庁警備部警備課の人間らしい、見事な避難指示だつたと聞いとるよ。入院されていた代議士の先生からもお褒めの言葉を賜つた」

「恐れ入ります」

「松田くんの爆弾解体技術も素晴らしいと。現役の隊員ですら真似できるかわからんほどの技術だとか」

「……恐縮です」

松田も戸惑つたように返事をした。よし、流れが変わつた。

「しかも柊木くんがすぐに特殊犯係に連絡してくれたおかげで優秀な警察官を殉職に追いやらずに済んだわけだ。警察官ならば確かに時には一般市民のためにその身を投げうたねばならん。しかし、無事に帰還してくれるならそれに越したことはない」

「状況を正しく把握したうえで人命を最優先し、義務感から起こした服務規程違反と言えるでしょう。事態に緊急性があつたこともよくわかりました。もちろん表立つて褒めることはできませんが、私としては褒めてやりたいくらいの気持ちですね」

正直なところ、意外と皆味方についてくれたことに少し驚く。

確かに俺も松田も間違つたことをしたとは欠片も思っていないのだが、それが警察組織として許されるかは別物だ。意外と人間らしい感性をもつてているひとは多いんだなど、到底口にはできない感想が浮かぶ。

じつと皆の話を聞いていた警視総監は、そこでようやく口を開いた。

「格木監察官、松田巡査部長」

は、とふたりで姿勢を正す。

「これから警察の未来のためにも、今回の件を不問にするすることはできん。だが、今回の君たちの行動は警察官として正しい行いであつたと、わしは思う。今後も日本警察の一員として、よく職務に励むように」

はい、と敬礼を返して、査問会は終了した。詳しい処分は後日知らされるというが、この分ならそう酷いことにはならないだろう。

*

「……お前いつもあんなことしてんのか」

査問会後、ぐつたりと警視庁内のベンチに座る松田に苦笑して、缶コーヒーを差し出した。よろよろとそれを受け取る松田。慣れない場はよほど堪えたらしい。

「まあ、追い詰められる側は初めてだけど

「お前な……。……ここまで読み通りか？」

「いや？ もつと絞られると思ってたよ。まあ、お前については俺が解体の許可出したって体にしたわけだし、そう重い処分にはならないと踏んでたけど」

ぱきゅつと缶コーヒーのプルタブが軽い音を立てた。

「……お前の方は？」

「クビにはならないだろ。俺、優秀だし。せいぜい出世コースから外れるくらいかな」

「問題じやねえか」

「お前をひとりで暴走させるのに比べれば大したことない」

そう言うと松田はぐ、と黙った。一応自覚はあるらしい。

「すつきりしたか。犯人逮捕はさせてやれなかつたけど、萩原と一緒に爆弾解体できただ、それでよしとしてくれ」

「……心配かけて悪かつた」

「わかつてんじやん。仕方ないから許してやるよ」

ふ、と笑うと、松田は気まずげな顔をして不貞腐れた。

これであの爆弾事件の妄執からは解放されただろうか。すつきりとした顔をしているから、きっとそうだと思いたい。しばらくはまた隈ができてないか見張るとしよう、その横顔を見ながら思う。

そう思つていたとき、「いた！」と声を上げて萩原が駆け寄つてきた。俺たちが査問を受けるという話を聞いて、一番青い顔をしていたのはこいつである。

「査問は？ 大丈夫なの？」

「……あれ、どうなるんだ？ 株木」

「ま、悪くて減給かな。少々出世には響くかもしねえが、その程度だろ」

伸びをしながら答えると、松田はうげ、と声を上げた。

「ただでさえ安月給なのに減給かよ……」

「心配すんな、その間は萩原が援助してくれる」

「……何か結構大丈夫そうつてこと？ まあメシくらい奢るけどさ」

「ああ、心配しなくても大丈夫だよ」

多少今後に響いたところで、俺も松田もそんなことを気にするタイプではない。第一、るべき仕事をきちんとやっていれば、これくらいの失敗はいくらでも取り戻せる。松田だって優秀な警察官だ、危惧するほどのことじやない。

そんな空気を察したのか、萩原はようやく安心したような笑顔になつた。

「……柊木の減給の面倒は誰が見んの？」

「減給つたつて多分俺お前らよりもうつてるぞ」

「よし次の飲みは柊木の奢りな」

「よつしやー！」

「お前らな……」

呆れた顔で言うが、ようやくこの馬鹿ふたりの呑気な顔を見られて嬉しく思う。

警察学校時代から温氣た顔が似合わない奴らだ。ふたりがそろやつて馬鹿をやつてくれないとこちらも調子が出ない。

「あ、そうだ柊木、俺飲みもいいけどアレ食べたい、柊木のお好み焼き！」

「おお、いいな。たこ焼きも頼む」

「ええ……お前ら昔より食う量増えてるだろ……一体どんだけ焼けばいいのか想像もつかないんだけど」

「材料買いこめるだけ買いこんで、なくなるまで焼けばいいじゃん?」「それでも足りなかつたら追加で買つてくればいいだろ」

早速いつもの傍若無人を發揮しだしたふたりに、ため息をつきながら苦笑を返す。結局俺も、説教だの何だのしながら同期には弱いのだ。

「そのうち、……わかつたよ、近いうちにな。今年中には時間つくるから」

そう言つてやるとおう、とふたりは元気よく返事をする。その返事の良さも息の合い方も、本当に昔から変わらない。まつたく、とついつい俺も笑つた。

とりあえずずっと心配していた伊達にもさつさと連絡をしてやろう。きっと結果報告のメッセージを今か今か待つ正在してくれ、降谷や諸伏にも。粉ものの焼くつて言つたら返事くれないかななんてのんきなことを考えつつ、俺は携帯に手を伸ばした。

まさか今度は諸伏に危険が迫つているだなんて、そんなことは考え

もせ
ず
い
。

あの事件からしばらく、また彼はひょっこりと特命係に顔を見せた。査問にもかけられたと聞いたが、全く堪えてなさそうで少し安堵する。

「お礼に伺うのが遅くなつて申し訳ありません。あと賄賂と思われたら困るので手土産はナシです。すみません」

杉下さんはくすくす笑いながら構いませんよ、と返した。
真面目ながらも茶目っ氣を忘れない彼のことは、僕もわりと気に入っていた。ユーモアのわかる有能な人間というのは、話していくとても楽しい。

「査問会お疲れ様。お咎めはきた?」

「処分自体は軽く済みましたよ。それよりも……」

「それよりも?」

「柊木くんはす、と深刻な顔を作る。

「……大河内さんから、深い深いため息をひとつ頂戴してしまいました」

ゆっくりと首を振りながら「私としたことが……!」と言わんばかりの芝居がかつた雰囲気に、思わず吹き出す。キヤリアで出世街道を邁進しているくせに、気取ることなくこういう会話ができる子は珍しい。是非偉くなつてもそのまままでいてほしいものだ。手綱を握らなくてはならない大河内さんは苦労するかもしれないけれど。

「しかし、素晴らしい推理でしたね。貴方も、松田刑事も」

「恐れ入ります。松田にも伝えておきますよ、素直じやないんで喜んだ顔は見せないでしようけど」

「ああ、彼とは仲良いんだつけ」

「ええ、警察学校の同期なんです。悪友ですかね」

捜査一課に配属されたばかりの松田刑事のことはよく知らないが、ワイルドで一匹狼なタイプに見えた。一見優等生タイプの柊木くんと仲が良いのは少し意外に見えるが、柊木くんは柊木くんでぶつ飛んだところがあるようだから気は合うのだろう。

いろいろと抱えるものが彼にあるのは何となくだが察している。だからこそ彼にも心を許せる人がちゃんといるという事実は、年上の

お節介ながら喜ばしく思えた。

そんな軽い雑談をして彼が部屋を去つてからすぐ、入れ違いに珍しい人物が特命係に顔を出した。

「……どうも」

不愛想、というよりは、少々気まずそうに彼はやつてきた。トレードマークのサングラスは胸ポケットにひつかけ、落ち着かなさげに指でいじつている。

「ついさっきまで杉木くんも来てたよ」

それを聞いて、松田刑事はさらりと気まずげな顔をした。ああ、彼は杉木くんほど素直なタイプではないのだろう。何となくちよつかいかけたくなる可愛い奴なんです、とさきほど杉木君が言つていたのを思い出す。こうしてみると、ワイルドな一匹狼というよりは懐かしい子猫に見えてきた。なるほど可愛いかもしれない。

「……ありがとうございました」

きちんと礼を言うために、気まずさを抱えながらも特命係に顔を出したのだろう。見た目に似合わず律儀で真面目な性格というのは本当らしい。それを微笑ましそうに見ながら、杉下さんが答えた。

「僕たちは杉木さんの散歩にお付き合いしただけですから」

「そうそう、爆弾見つけたのもただの偶然」

僕も杉下さんに続いて軽く言葉を付け足した。表向き、あの爆弾の発見はあくまでも「偶然」だ。

それを聞いた松田刑事は、ほんの少しだけ表情を緩める。

「そういうことになつてるのは聞いてますが」

「ええ。それにしても、……本当に、仲がよろしいのですねえ」

「あんなんですが、……いい奴なんで」

そう言つた松田刑事の顔は、どこか自慢げにも見えた。

彼が部屋を去つた後、しみじみと呟く。

「……いいもんですね、男同士の友情つてのも」

「ええ、本当に」

同期の桜とは言うが、あれほど仲が良いのも珍しい。聞けば、今回の事件で大きく貢献をした萩原刑事も同期なのだという。

優秀ながら癖のある若手たちが、今後警察組織をどう生き抜いていくのかと思うと、少し胸が躍つた。まず間違いなく、あの破天荒さは上層を悩ますことになるだろう。

「……彼らが出世するの、ちょっと見てみたいですね」
「それは同感です。きっと、

愉快痛快な職場になるでしょうね。

杉下さんの言葉に、確かに、と心の中で大きく頷いた。

実をいうと、休日に外出することはあまりない。

食料品など必要な買い物は仕事上がりに済ますし、そもそも男のひとり暮らしだ、生活必需品もたかが知れている。下手に出歩いてうつかり女性とぶつかりでもしたら大変なのだ、誰つて俺が。街中で卒倒するなどという失態だけは避けたいので、極力ひとりでの unnecessary 外出は避けている。自分で言つて情けない。

しかし今日は幸人たちに参考書を選んでやる約束をしていた。無事に外出を終えられることを祈りながら、少しでも人目を避けられるよう帽子をかぶつた。今日は冷えるしちょうどいい。待ち合わせ場所はすぐ近くの本屋。腕時計を見てそろそろ出ようと靴に手を掛けたとき、スマホが着信を告げた。

「幸人？……はい、どうした？」

『あ、ひーらぎさん？　あのさ、今約束してた本屋に向かつてたところだけど』

「？　ああ」

『ほら、ひーらぎさんの家に警察学校卒業したときの写真あつたじゃん。伊達さんも写つてる奴』

玄関で靴を履きながら、ベッドサイドに置いてある写真立てが頭に浮かぶ。

それがどうしたと続きを促せば、えーっと、と幸人は精一杯記憶を探るように唸る。

『あの写真の、……えっと、背が高くて茶色っぽい髪の人。ほらあの、……ひーらぎさんの左隣にいた、ちょっと灰色っぽい色の目した』特徴的にも諸伏のことだろうか。いやなんで音信不通のあいつの話になる？

嫌な予感がして先を急かすと、何と諸伏らしき人物とすれ違つたのだという。

『何かみよーに足早でさ。まわり気にしてたし、あれ多分何かから逃げてんじゃないかな。考えすぎ？』

「……幸人」

『うん?』

「接触はしてないな? あとそいつどつち向かつた?」

『すれ違つただけ。方向的に廃ビル群の方じやねえかな、あそこ人目
ないし』

こいつ、優秀かよ。

徒歩の予定を変更して、玄関口においてあるバイクの鍵を取つた。
単車もいいけどやっぱ車にしようよ」と萩原には散々文句言われた
が、こうなるとやっぱ買つといてよかつた小回りの利く移動手段!
「幸人、悪いけど参考書はまた今度な。皆にも伝えといてくれ」

『やっぱやばい系?』

「お前はすぐにその場を離れて、見たことは忘れる。誰にも言うな。
いいな」

『……へいへい』

「幸人」

何、と相槌を打つたそいつに、頬を緩める。

「対応百点満点。ありがとな」

そう言うと、電話口で幸人が息をのんだのがわかつた。

日常の中で感じた違和感に、下手に首を突っ込むことなくすぐに誰
かに相談する。これは平穏無事な生活を送る上で非常に大切なこと
だ。平穏を守る立場としても非常に有難い。

「じゃあ切るぞ」

『……ん。……気を付けて』

少し前まで反抗期をこじらせていた幸人がひとの心配までできる
ようになつたとは。

その成長を噛みしめながら、俺は急ぎバイクにまたがつた。

*

廃ビル群の地理は把握している。バイクの排気音を響かせながら、
考えろ、先を読め、と必死で頭を回転させる。

仮定として、諸伏は何者かから逃走中。おそらくひとり。街中の方からこちらに向けて逃げてきたのなら、人目のつかない奥に向かつていくはず。ならばと先に廃ビル群の奥までバイクで乗り込み、路地裏を走つた。あいつが徒步でここに向かつたなら、おそらく先回りはできているはずだ。

通る可能性の高い道に当たりをつけ、そつと気配を隠す。慌てた足音が聞こえてきた。音からして成人男性、しかも走り慣れた音。ちゃんと鍛えている人間が走つている音だ。

タイミングを計り、走つてきた男の姿を確認して路地裏に引きずり込んだ。

「諸伏、俺だ！」

すぐに暴れて反撃しようとした諸伏の口元を抑え込み、小声で叫ぶ。諸伏はすぐにぴたり、と動きを止めた。口元を押さえている掌の下で、諸伏の口が「ひいらぎ」と動く。

拘束を外すと、ぱつと振り向いた諸伏は信じられない顔をして俺を見た

「おま、……何で、」

「話は後だ、すぐにこの場を離れるぞ」

「！」

「バイクで来てる。こっちだ」

*

とりあえず尾行に気を付けつつ諸伏をうちまで連行した。未だ混乱した様子の諸伏に、落ち着かせようと珈琲を渡す。

「誰に追われてるのかは知らないが、お前の事情に無関係な俺のところにいるとは思わないだろ。尾行もなかつたし」

「あ、ああ……」

「……まあ、うん、久しぶりだな」

「ああ、……警察学校を卒業して以来か」

「随分メッセージ無視してくれたもんだな。俺は悲しい」

う、と諸伏は気まずそうな顔で黙る。一応悪いとは思つてゐるらしい。

「まあ、そういう部署にいつたんだろうとは思つてた。それで?」

「え?」

「事情を知らない俺にできるのはお前をあの場から連れ出すことくらいだ。お前、これからどうするんだ?」

「……俺は」

「一時的にお前を匿うくらいはできるが、問題の根本的解決にはならないだろ?まさか単独任務で切り捨てられたとか言わないよな」

諸伏は黙つた。おいマジか。

「……正直、俺にもよくわかつてないんだ。何が、どうなつてているのか」

これは埒が明かないと踏んで、ひとつ賭けに出ることにした。

諸伏と同じタイミングで姿を消したあいつなら何か知つていても仕れない。誰が味方かわからぬいうときに無闇に人に頼るのは得策とは言えないが、あいつと諸伏が敵対しているとは考えにくい。諸伏が警察を裏切るとは思えないし、降谷もまた、志を同じくする奴を、まして長年の付き合いがある幼馴染を裏切るはずがない。他人に見られる可能性だけはちゃんとと考え、文面を作成した。送信した数秒後、着信音が鳴り響く。この反応の早さ、どうやら俺は賭けに勝つたらしい。

「はい」

『今のメッセージはどういうことだ!』

痛む耳を押さえながら、通話をスピーカーモードに切り替えた。聞こえてくる降谷の声に、諸伏もびくりと反応する。口元に人差し指をたてて諸伏に声を出さないよう指示をしながら、言葉を続けた。

「言葉のままだ。俺はお前の幼馴染の所在を知つてゐる。いいか、これからいくつか質問する。イエスかノーで答える、いいな?」

『つ……何だよ!』

これだから頭に血がのぼりやすい奴は。

相変わらずの同期に少々呆れながら、盗聴の危険も考えつつ言葉を

選んだ。

「お前はここ数年のお前の幼馴染の事情を知っているな?」

『……イエス』

「現在、そいつがどんな状況に置かれているかも」

『イエスだ』

想定通りの答えに安堵する。それならばと、面と向かって言つたら殴られるだろう愚問を投げかけた。

「お前は、俺が知つてゐる『お前』だな?」

かつて一緒に馬鹿騒ぎをして、警察官になるべく競い合つてきた仲間のままかと、言外に問いかけた。決して、幼馴染を裏切るような奴ではなく。

降谷は低い低い声で答えた。

『……いくらお前でも殴るぞ?』

『イエスかノーで答えるつづつてんのに。相変わらず気が短い』

『うるさい! もう質問はいいだろ!』

『俺が昔お好み焼き作つてやつたの覚えてる?』

は、と降谷は氣の抜けた声を出した。おそらくマヌケ面を晒しているだろう想像がついて、つい笑つた。

俺が同期たちにお好み焼きを振舞つたのは一度だけ。記憶力のいい降谷なら忘れてはいないだろう。

「そこ」にいる。尾行されるなよ

『すぐに向かう!』

ぶちつと電話が切れて、いつきに部屋が静かになる。ひとつ溜息をついて、諸伏に笑いかけた。

「降谷も相変わらずだな?」

「……ああ。変わらないよ、……何も」

ようやく口元に小さな笑みを漏らした諸伏に、少し安堵した。

*

それにしていきなりのピンポン連打と遠慮のないノックは本当

にやめてほしい。

鍵開いてるぞ、と言つた瞬間に、そいつは玄関のドアを蹴破らんばかりの勢いで侵入してきた。見慣れた金髪は、諸伏の姿を確認してそのまま、安堵の息とともに膝をつく。

「良かつた……」

「……心配かけたな、ゼロ。柊木に助けられたよ」

「柊木……」

「ん、改めて久しぶり。お前も顔変わらないな」

につと笑つて見せると、降谷は少し潤んだ目で、ぎこちなく笑い返した。

「人のこと言えないだろ」

「お前よりはマシだ。そういえば諸伏、俺はあごひげ剃ったほうがいいと思う」

「えつ」

挨拶代わりの軽口がひどく懐かしい。

少しだけ笑つた後、降谷は表情を改めた。

「柊木、お前はこちらの事情を知つているのか？」

「いや、何も。今日のも完全な偶然だよ」

「偶然？」

寝室にあつた写真立てを取り、ふたりに見せる。

「いろいろあつて俺はこの近辺の悪ガキたちと知り合いでな。そのうちひとりが教えてくれたんだよ、この写真に写つてた奴……諸伏が、やけに人目を気にしながら逃げるようになビル群の方へ向かつたつて。それで俺はまさかと思いつつバイク飛ばしたつてわけ。あ、通報くれた本人にはきつちり口止めしてあるから問題はない」

しかし、この写真だけでしつかり顔を覚えていたとは、幸人の奴なかなか覚えがいい。うすうす察していたが、本当に将来有望なのかもしない。

過ぎた偶然に降谷はどこか納得しきれない様子だったが、本当のだから仕方がない。俺を疑うよりは諸伏の運の良さを疑つてほしい。

「……とりあえず納得しておく。柊木、……俺たちは」

「お前らの所属だの事情だのは、まあ聞かせてくれるなら聞くけど、言えないならそれでもいいよ」

ぎくり、とふたりは肩を揺らす。

そんな素直な反応ができるくらい、気を抜いてくれている事実が嬉しい。

「ただ、まあ……そうだな。俺の所属の話はしただろ?」

「、

「……え?」

即座に俺の言いたいことを理解した降谷の目がきらりと光り、混乱が抜けきっていないらしい諸伏は戸惑ったよう瞬きをした。

降谷の様子を見るに、俺がずっと抱いていた懸念はあながち間違いでもなかつたらしい。

「俺の立場が使えるなら、使つてもいい」

俺としても、このタイミングは悪くない。

内心でお好み焼きとたこ焼きは年明けに延期かなと元爆処組たちに謝りながら、俺は楽しい楽しい年末大掃除に励むことを決めた。

「ね、お願ひ！」

「無理」

「そこを何とか」

「無理」

しつこく食らいついてくるそいつを軽くあしらって新聞に目を通す。

例の爆弾犯が逮捕され、俺が捜査一課に来た目的は達した。が、だからといって機動隊に戻してくれなどとは言えるわけもなく、俺は腹をくくつて強行犯係として職務に従事していた。

新聞の見出しを眺めながら、犯罪事件多すぎねえかこの町、と呆れたようになため息をつく。

「もう、松田くんてば！」

「いい加減諦めろ」

「本人に聞いてくれるだけでもいいから！」

さつきからしつこく話しかけてくるのは、交通部の宮本由美だつた。俺の指導係の佐藤と仲良いとかで、何度か話す機会があった。別に悪い奴ではないのだが、とにかく「この手」のことになるとしつこい。

「柊木監察官の同期なんでしょう？」

「無理」

あいつに女を紹介なんてしたら最後、冗談抜きで息の根を止められる。お前のこと友達だと思つてたんだけどな、と笑つていらない笑顔を浮かべる魔王の顔が脳裏に浮かんだ。俺に自殺願望はない。

「……つーか何で交通部のお前がんなこと知つてんだよ」

そういうと宮本はさつと後ろを親指で示した。そこには手を合わせる佐藤の姿。お前かよ。

「もしかして彼女持ち？ あんな超優良物件だもの、女のひとりふたりいてもおかしくはないわよね」

いた方が健全なんだろうけどな、と内心でひとりごちる。あれだけ

イケメンでハイスペックな野郎に女ができたことがないなんて、誰に言つても信じないだろう。俺だつてあいつの女性恐怖症を知らなかつたら信じるわけがない。

逆ナンを食らつて貧血を起こしていた姿が脳裏に浮かび、思わずため息がでる。

「彼女がいようがいなかろうがあいつの紹介はしねえし、合コンに連れ出しあしもしねえ。わかつたら柊木のことは諦めな」

ついでにハギに言つても無駄だぞ。

そう付け加えると、宮本は目に見えて膨れた。

「何、呼んだ？あれ、宮本ちゃんじやん」

ふらりと戻つてきた萩原に、宮本はこれ幸いと飛びついた。話を聞いた萩原は、あー……と苦笑をする。

「……ちょっと無理かな？」

「は、萩原くんまで……！」

萩原の口が音もなく殺されちゃう、と動いたのがわかつた。同感。困つた顔であいつだけは勘弁してやつてと言ふと、さすがにまずいと思つたのか佐藤も止めに入つた。

「もう、その辺にしどきなさいよ由美」

「美和子まで」

「こ」までダメだつて言われるのは、それなりの理由があるつてこと。そうじやなくとも監察官つていう立場なんだから、あんまり近づこうとすると迷惑になるかもしれないじゃない」

「悪いけど、そーいうこと。あ、合コンなら俺が行きたいな誘つてね？」

？」

むーとむくれながらも、そろそろ休憩が終わるらしい宮本は交通部に戻つていく。全く、ようやく嵐が去つた。

「……ごめんなさい、つい口が滑つて」

「別に隠してはねえよ」

「そうそう。むしろ佐藤ちゃんにも気を遣わせて悪いね！」

あいつ本当にそういうのダメでさ、と萩原がそう言ふと、佐藤は申し訳なさそうな顔をしつつ笑つた。

「……本当に仲が良いのね」

「同期で同班、共同生活送つた仲だからね」

「柊木監察官はその時から優秀だつたの？」

何気ない佐藤の問いに、かつてを思い出し少々遠い日になる。

優秀、いや確かに優秀だつた。それは間違いない、のだが。

同じことを思つたのか、萩原も遠い目をしている。

「……もはやあれを優秀なんて言葉で片づけていいのかねえ……」

「あれはあのふたりがおかしい」

「ふたり？」

「柊木と、もうひとり。そいつも俺らと同班だつたんだが、とんでもねえ化け物だつたんだよ。他を寄せ付けずはずつとふたりでトップ争い繰り広げてた」

座学では同点一位が基本。普通に満点とか取りやがる化け物どもだ。術科では柔道でも逮捕術でも接戦を繰り広げ、時間を延長しても決着がつかないなんてこともざらにあつた。勝ち負けには大して拘りないと言つていた柊木も、勝ちを譲つてやるほどプライドは低くない。

見ていて面白くはあるし両方を応援もするが、あそこまで行くと

「よくやるわあいつら……」という呆れの方が大きくなる。

「そういえば、松田君のお腹に一発入れてたわよね……？」

「あつはは、あれ小気味よかつたわ！」

「うるせえ。人のことゴリラだの筋肉ダルマだのさんざん言つてくれたらしいが、こっちからすればあいつの方が断然ゴリラだ」

まだ俺の腹にはでかい青あざが残つてゐる。それを見た柊木は反省や申し訳なさなど欠片も見せず、「良かつた俺鈍つてないな！」の一言。反射的にまた拳を作りかけたが、今回ばかりは俺が悪いのでやめた。ちなみに「もつと止め方あつただろ説得とか」と苦し紛れに言うと、「だから説得したんだろ？ 物理的に」としつと返された。本当にあいついつか殴る。

「でも、あれ見て柊木監察官の印象変わつたつて人、多いのよね」

謙虚にいつもにこにこしながらも、デスクワーク派の内勤エリート

には違いない。しかも柊木は見た目だけなら優男で、着やせすることも相まって腕っぷしが強いようには見えないのだ。現場を走つてゐる人間からすれば悪い印象こそなかつただろうが、見くびられていたというのが本当のところだろう。そこであの暴挙だ。

「無茶をやろうとした友人を力づくでも止める、実は熱いところのある人なんだって。しかも自分の職域を越えてでも事件解決のために尽力したんだもの、見直した人は多いみたい」

当の「無茶をやろうとした友人」としては非常に複雑な気分だが。顔に出ていたのだろう、そんな俺を見て萩原は我慢できずに噴き出した。とりあえずその頭を一発ひっぱたく。

「まだまだ監察官としては見習いでも、きつとすぐに実力を付けて出世するんだろうって」

その言葉につい瞬きをして萩原と顔を合わせた。

そういえばあの柊木がまだ「監察官」としても舐められている状況だということは小耳に挟んでいた。本人もそれでいいんだとか何とか笑っていたが、あれはたぶん「本当のことだから」という意味でなく「そのほうが都合が良いから」という意味だ。

猫かぶり野郎の嘘くさい笑顔が脳裏に浮かび、くつと肩が揺れる。「なうに笑つてんの陣平ちゃん」

「うつせ、お前も顔が笑つてんだよ」

数日前にしばらく忙しくなるからお好み焼きは年明けで許して欲しいなんてメッセージを送つてきたあの野郎は、たぶんそろそろかます気なんじやないかと察している。

何せ、こちらがドン引くくらいにはさしまじく機嫌が良かつた。何かあつたのかと伊達が尋ねても、すぐにわかるの一点張り。

「いつまで『見習い』で誤魔化す気なんかねえ、うちの出世頭は」「そう長くはねえだろ。あれは絶対やる気だぜ」

それも、相當にタノシイことを。

証拠は十分、根回しも完璧。おまけに天気も良いとくれば、何て良い査問会日和だろう。今日と言う素晴らしい日に、今まで好き勝手やつてきた報いを存分に受けてもらおうじゃないか。

俺は自分にできる最高の笑みを浮かべながら、数々の証拠を並べ立てる。

「以上がこちらの調査結果です。随分と罪を重ねておいでのようで」
パワハラセクハラなんて可愛いもの、重要機密の漏洩、備品の窃盗および横流し、横領、恐喝、いやこれはパワハラ超えて傷害もつくな。
もうふしあるが危機に瀕することを承知の上で情報を流していたことが立証されればもう少し罪状がつくかもしれない。その辺りは査問後の聴取と裁判で頑張つて頂こう。

真っ青な顔に脂汗を浮かべるそいつは、警視庁内でもそれなりの地位にいたが、普段は大して目立つこともない大人しい男だつたといふ。どうせ不正がバレない様に大人しく振舞つていたのだろうが、その気になればそんな化けの皮を剥ぐくらい容易いものだ。

「わ、かぞうが……！」

「その若造相手にへまをやらかしたのはご自身では？」

「柊木」

「失礼いたしました」

大河内さんの諫める声に素直に謝罪をするが、笑顔は崩さない。

警察から情報が流れているという前提の上で調査を始め、また警察庁所属の降谷の情報が流れた様子がないことから、おそらく犯人は警視庁にいると睨んだ。加えて漏洩した情報は諸伏の顔のみで、氏名や経歴など他の情報は流れていらないという。となると諸伏が直接関わったことのある人間はどうだろう。たとえば、諸伏の所属の情報もわずかに入ってくるであろう、警視庁の事務方や総務、經理に関わる部署で、それなりの地位にいる人物ならば。そこまで当てを付け、給料のわりに金回りの良い人物がいないかを調べてからは早かつた。

そいつの背後についても全て調べはついている。こいつが誰と癒着し、誰に賄賂をおくり、どうやってそれだけの罪状を隠してきたの

かも。

まつたく馬鹿の振りをしておいて良かつた。俺の前だと皆さん油断してぽろぽろ手がかり落としてくれる。あまりにも気軽に喋つてくれるので公安の手を借りるまでもなかつた。手がかりさえもらえば、俺程度の権力でもある程度の調べはつく。

「弁明は聞くまでもないかと思いますが、いかがでしよう」

事前に話を通してあつた警視庁のトップに目を向けると、その人は重々しく口を開いた。

「……残念だよ」

「け、警視総監！」

その声を合図に会議室の扉が開いた。何人もの捜査官がそいつを取り囲み、その腕に手錠をして引っ立てていく。何とも晴れ晴れした気分だ。ハンカチでも振つて見送りたい。

そいつは捜査官に引きずられながら、何とかその首をこちらに向け、血走った眼で捨て台詞を叫んだ。

「後悔するぞ、必ずな！」

何て無様で、汚い声だろう。

確かにこれでこいつの背後にいた人間は俺を危険視しだすだろう。馬鹿の振りが通じなくなるのは残念だが、俺としては情報を得る手段がひとつ減るだけのこと。

何より、すでにあらかた調べは済んでいる。その「背後」たちが、今後俺に牙をむいてくるのだとしても。

「……それごと踏みつぶしてやるよ」

警察官の身で汚職を働いたばかりか、諸伏を危険な目に遭わせた奴らに容赦などしてやるつもりもない。

誰にも聞かれないように、そう呟いた。

*

査問会から数日後、改めて降谷と諸伏がうちを訪ねてきた。
簡単に査問会であつたことを説明すると、降谷は満足そうに領き、

諸伏は少しひきつった顔で笑う。

「……それまた随分と容赦のない……」

「当たり前だろ。罪状が多すぎる」

「本当に。……しかし、助かったよ柊木。警察内部の不正となると俺も煙が違ってくるから手を出しにくいんだ」

降谷は警察庁警備局警備企画課「ゼロ」に、諸伏は警視庁の公安にいるということはすでに聞いている。言わなくていいと言ったのに、協力してもらうなら話すのが筋だと押し通したこいつらは、どこかすつきりとした顔をしていた。

「それが俺の仕事だからな。まあまた何かあつたら言えよ」

もう連絡を絶たないでくれるなら、だけど。

そう付け加えると、ふたりはさつと目をそらした。

「で、今後どうなるんだ？ 俺は一応他言するつもりはないけど」

「……俺は引き続き潜入任務にあたり、景光には当分内勤で俺のサポートをしてもらう。連絡を絶つつもりは、……その、ない。上にも、今回のこともあって協力関係を結ぶ許可をもらつた。……今更かと思ふかもしれないが」

「……俺も。任務のためとはい、メッセージ無視してごめん」

ふたりの言葉に、良かつたと笑う。

本来潜入任務にあたる人間と接触するのはタブーなのだろうが、ふたりの邪魔になるようなへまをするつもりはないし、今回のように役に立てることがあるかもしれない。

どこか知らないところで勝手に危ない目に遭つていてるくらいなら、同じ危険に巻き込んで立ち向かわせて欲しい。直接手を貸せることは少なくとも、きっと何かできることはあると思うから。

どちらにしろしばらく東都が拠点になるからどこかで顔を合わせるかもしれないしな、と降谷は苦笑して言う。

「ただ、俺は今、安室透と名乗ってる。基本的に外で遭遇したらそっちの名前で頼む」

「了解。……けど、東都が拠点なら俺に話すだけじゃ足りないんじやないか？ むしろ外に出るあいつらのほうが遭遇の確率高いと思う

けど

部屋に沈黙が落ちた。降谷の褐色の頬に冷や汗が流れる。

あいつらとは言うまでもない、ずっとこのふたりの安否を案じながら返事のないメッセージを送り続けていた残り三人の同期たちだ。

「……。……上手く言つといってくれないか……？」

ふむ、と考えるふりをする。同じ警察組織に属する人間としては、それくらい協力してやるべきなのだろう。が、それは別に本来の俺の職務ではないし、降谷のかわりに殴られそうな案件なんて引き受けたくないし、何より——降谷と諸伏が苦戦するような相手と対峙しているのであれば、協力する人間は多い方が良い。

そういうわけで、俺の答えは考えるまでもなく決まっていた。

「やだよ」

「……柊木」

「嫌だ。大人しく事情説明して口裏合わせとけ。なあに、運が良ければたったの三発ずつ殴られるだけだ。あいつら立派なゴリラに成長してから鼻の骨くらい折れるかもしけねえけど、まあ死にはしないって」

本気で頭を抱えだしたふたりに肩を震わせつつ、これたぶんお好み焼きとたこ焼きの焼く量がさらに増えるやつだな、と遠い目をした。

あまり呆けて硬直することなどないやつらだけに、この反応はちよつと面白かった。

年も明けて何とかそれぞれの仕事を調整し、材料という材料を買い込んで集まつたその日。早く焼けとうるさい欠食児童どもに「待て」と言い聞かせ、そろそろかなと時計を見ていたそのとき。

控えめなノックのあとに返事を待たずに開いたリビングのドア。鍵は開いているから勝手に入つてこいと伝えていたふたりは、さすがに少々気まずげに見える。

「……えーと、久し振り？」

「……相変わらずみたいだな、みんな」

誤魔化すようにへらつと笑つた諸伏と、少し硬い笑顔ながらも嬉しそうな声音を隠しきれていない降谷。

驚きが許容量を超えたらしい三人はしばらく無言で目を瞠つていたが、いち早く我に返つたのは伊達だった。ふたりから目をそらさないまま、横にいた俺にぼそりと言う。

「……柊木」

「うん？」

「この部屋の両隣、それに上下に住人はいるか？」

伊達の意図がわかつた俺は、にんまりと笑う。騒音問題まで気にしてくれるあたり、伊達はどこまでも「班長」だなとこつそりと思つた。「いないこともないけど、ここ防音しつかりしてるとから気にしなくていいよ」

「そうか、なら良かつた。……確保オ!!」

その言葉には頭より身体が先に反応してしまう刑事の性。伊達の言葉に即座に反応した松田と萩原は、瞬時に降谷^{ひぎ}と諸伏^{しや}に飛びかかつた。

*

「で、どういうことか説明してもらおうじゃねえか」

一悶着どころか三悶着ほどあつたあと、被疑者ふたりは床に正座。その正面に伊達が仁王立ちをし、松田は隣で面白そうにふたりを見め、萩原は降谷の前にしゃがんでその頬をつんづんとつづいていた。降谷が苛立ちで震えているのでそろそろやめた方がいいと思う。

ちなみに俺は少し離れたソファで騒動を眺めながらビールを飲んでいた。同期の馬鹿騒ぎを肴に飲む酒が美味しい。

「……いや、何で俺たち正座……？」

「説教聞くときは正座するもんだつて旭ちゃんもよく言つてたつしょ？」

いや、俺のせいにしないでほしいけれど。確かに警察学校時代にそんなことを言つた覚えはあるが、そのときに正座をしていたのはおもに萩原おまえと松田だ。

諸伏はすでに足に来たらしく、ぷるぷると震え始めている。

「く……！ 杉木、お前は何で他人事みたいな顔でビール空けてるんだ！」

「いや他人事だろうよ。俺何年も連絡無視したりしてないし」

ぎくつとふたりは肩を震わせる。だらだらと冷や汗を流すふたりにため息をついて、伊達は言い聞かせるように言つた。

「この際、お前の所属だと今まで何してたとかは聞かねえよ。俺たちも警察だ、察するもんもあるしな」

ぱつとふたりが顔を上げる。

その顔を見ながら、だけどな、と伊達は言葉を続ける。

「だがな、このタイミングで俺たちに顔を見せた理由は説明してもらはず。杉木、俺の勘じや、それにお前が関わってる気がしてならねーんだが？」

「へえ、刑事の勘つてやつ？」

「あ、捜査一課への異動おめでと班長」

「ありがとうだが今じやねえんだわ諸伏」

杉木、と松田にも疑り深い視線を向けられ、ビールをテーブルに置いて両手を開く。別に隠すつもりはない。今日はそのつもりで皆を

集めたのだから。

「せめて俺たちが今後の対応に困らねえ程度の事情説明はしてくれるんだろうな。この感じだと柊木の年末大掃除、まじで関係してんだろう」

「うんうん、れーくんひろくん、ちゃんとお話ししような」

真面目な話なんだと声色を変えた萩原に、降谷と諸伏も表情を改め、しつかりと頷いた。

*

ことの経緯を聞いた三人は、揃つて両手で目を覆つた。

「……柊木が上機嫌で大掃除した理由はよーくわかった

「むしろナイスというか。懲戒免職まで行つたんだつけ？」

「俺が懲戒程度で許すかよ。逮捕送検までこぎ着けた」

ただの身内の不正として処理されかねなかつたのを阻止して刑事事件として立件。我が身に火の粉が飛ぶことを恐れてか立件を阻もうとしたやつもいたようだが、そうはなるものかと手を回した。傷害までやつといて立件なしじゃない。

そんな俺に松田と萩原は拍手。当たり前だろうと言いたい。

「……それについては本当に助かつたよ柊木。ほとんど柊木ひとりで証拠を集めただろう？ それもあんな短期間で」

必要なら自分が動かせる捜査員も使つて欲しいと降谷も申し出てくれたが、本当に必要になつたら頼らせてもらうからと断つた。引き続き潜入任務にあたつている捜査官やそのサポートに余計な仕事を増やすわけにはいかない。

「それが俺の仕事だから。監察官つて肩書きは意外と動きやすいんだよ」

「けど、下手をすれば握りつぶされてもおかしくないくらいの案件だつただろ。さすが、上手くやつたんだな」

「ああ、握りつぶそうとしたやつらのぶんも証拠握つたからな」

感心したような諸伏の言葉にこりと笑うと、部屋の空気が音を立

てて凍つたような気がしたが別に気にはしない。今後を考えるついつい顔がにやけた。

「ひとりあぶり出したら他の不正の証拠も出るわ出るわ、あとは查問会開くだけのやつらが順番待ちしてると。さすがに上層何人も一斉に首すげかえるのはまずいつてんで上司に止められたけど、数年掛け全員入れ替える。いやあ氣の毒に、みんないつ俺に呼び出されるんじやないかと戦々恐々してんじやないかな」

今後が楽しみだな、と言葉を締める。何か全員顔が青いような。降谷までドン引いた顔をしていることには驚いた。お前も同類だと思つっていたのに。

「知つてた……俺実は旭ちゃんのお腹ん中がまじで真っ黒だつて知つてた……」

「柊木お前、そこまで楽しそうにひと苛めるやつだつたか……？」

「違うぞヒロ、怖いのは監察官じやないんだな……」

「いや、ああ……俺の同期は心強エわ……」

めそめそしたふりしながら松田の後ろに隠れるな萩原。松田、俺は別に心は病んでないので心配そうに言わないで欲しい。それにしみじみと頷く諸伏はともかく、生真面目に訂正する降谷、お前は後で殴る。伊達、お前にドン引かれるのは一番心に来るからやめてくれ。

いや、俺別にもうお前ら相手に猫被つていたつもりはなかつたんだけど。

「……俺が不正の類い嫌いなのも、まして優秀なのも、今に始まつたことじやないだろ」

「それをいつそ不思議そうに言えるお前はすげえよ」

「うん、さすがゼロと渡り合う男」

「それはどういう意味だヒロ」

頬を引きつらせた降谷ががつしりと諸伏の足を掴む。正座が限界にきていたらしい諸伏は無言のまま倒れ伏した。しごれきつた足にそれは辛い。合掌。

「で、話戻すけどよ。諸伏の身の安全は保障されたのか？」

「現状はとりあえずな」

「情報漏洩の程度は？ 本当に顔だけか？」

「ああ、本名も流れてない。死亡偽装も上手くいった。これ以上調べられることはないだろう」

「どんだけ危険などこに潜り込んでんだよ……」

うわあという顔で言う松田に、悶絶していた諸伏はかろうじて苦笑を浮かべた。

流出したのは顔と、警察官である事実のみ。思つたより被害は少なく済んだと考へるべきだろう。本名や経歴が流れなかつたのは本当に運が良かつた。

「それならむしろ、下手に隠れるよりも普通に過ごしてたほうが良さそうだな」

「柊木？」

「本名がバレてないなら偽名を使う必要もないし、諸伏の情報流した元凶も檻の中。だつたら現状対策を考えなきやいけないのは素顔だけだろ。よっぽど訓練受けた人間でもない限りひとの顔なんて曖昧なもんだし、髭でも剃れば十分に誤魔化せるんじやないか。変装を重ねた方が違和感が出て怪しまれる可能性がある」

「おお、逆転の発想」

同意見、と頷いた降谷の横で、おそるおそるといったふうに手が上がる。ようやく復活した諸伏はこれ以上なく真剣な顔で言つた。

「髭……そらなきやだめか？」

「そこかよ、と。

全員の呆れた顔を受け、俺は仕方なく立ち上がる。洗面所に繋がるドアを開け、持ち帰ってきたのはごくごく一般的な髭そり。灯りを受けてきらりと光つたそれに、諸伏はさつと顔色を変えた。

「……ちょっと待つて、まさか」

「はい、マル対確保」

それだけですべてを察した刑事たちが即座に諸伏を拘束する。さすがに公安で鍛えられただろう諸伏も、ゴリラ三人の前では無力だったらしい。

「ちよ、本当に待つて、冗談だろ?」

「往生際が悪いな。じゃあ皆、『諸伏景光は自身の安全確保のために髭を剃るべき』について決議をとる。賛成者挙手を」

さつと三人分の手が上がった。それでも少しも拘束が緩む様子がないのはさすがと言つておこう。

絶望的な顔をした諸伏は、縋るような視線を降谷に向ける。いつもならこの視線に負けてしまう降谷も、今回は静かな目をしていた。ひとつ呼吸をおき、意を決したように手をあげる。同時に諸伏は驚愕に目を見開いた。いや何でこんな真剣な顔してるんだろう、一いつら、端で見ている分には完全な茶番である。

すまない、と降谷は絞り出すように言つた。

「気の毒には思うが、ヒロのためだ。このところの腑抜けっぷりもひどかつたし、気分転換にもなるだろう。……それに、ヒロ、ずっと言えなかつたが……僕も個人的にその髭はないほうがいいと思う……！」

「え、……ええ!? 励めたの皆なのに!?」

「はい、では全会一致で判決が出ました。剃ります」

「ま、待つて！ まずは本人の意志を聞こう!?」

「却下。動くなよ、怪我するぞ」

勧めたのは松田だけだし普通に悪ふざけだつたんだよなあと内心で呴きつつ、俺は手の中のソレを握り直す。髭そりが低く唸り始めたと同時に、諸伏の哀れな叫び声が部屋に響いた。

ゴリラたちの拘束のおかげもあり、刑の執行はすぐに完了した。

しきしきしくと純潔を奪われた乙女のごとくすすり泣く諸伏を余所に、俺たちは夕飯の支度を再開する。慰めるように降谷がその肩を叩いているが、髭とかどうでもいいから手伝えと心底思う。

全員分の取り皿を運びながら、それにしても、と伊達はしみじみと言つた。

「随分と若返つたな、諸伏」

「悪かつたな童顔で！」

「え、実は気にしてたの？」

「は、ンな氣にすんなよヒロの旦那ア、お前以上の童顔がふたりもいるだろ？」

「殴るぞ」

いや誰も降谷のこととは言つてない、と口に出そうとした瞬間にハツとする。

今松田は童顔がふたりと言つた。当然諸伏のことでもなければ松田のことではないだろうし、伊達はどうちらかというと老け顔で、萩原はまあ年相応。実年齢より下に見られるという雰囲気ではない。そしてふたりの童顔のうち、ひとりは降谷。

ということは、だ。

「……え、もうひとりの童顔つてもしかして俺？ 嘘だろ俺年相応だと思つてるんだけど！」

「お前は勤務中こそ年相応だが、プライベートは雰囲気がガキ」

「顔関係ねえし！ 松田こそサングラスで童顔隠してるくせによくひとのこと言えるな！」

「よーしその喧嘩買つたア！」

ついついヒートアップしてぎやーギャーと言い合いを重ねていると、何かに堪えきれなくなつたらしい諸伏が噴き出し、それにつられて皆が笑い始める。諸伏と降谷の目が少し潤んで見えたが、たぶん笑いすぎたせいだと思う。

笑いがおさまった頃には警察学校時代とまったく変わらない、気の抜けた顔を見せていた。

* * *

じゅうじゅうと焼ける音に、食欲をくすぐる香り。俺もずいぶんと久しぶりだ。

そろそろかと景気よくひっくり返せば、綺麗に焼けた生地が顔を見せた。おお！と腹をすかせた大きなガキどもが歓声を上げる。

「よし。ソース取つて」

「ほい！」

さつと差し出されたソースを丁寧に塗つて、マヨネーズ、そして鰯節と青のり。もういいだろと視線で訴えるそいつらに苦笑を返しつつ、ざつくりと格子に切り分けた。俺のお好み焼きは関西仕込みなので切り方も関西流です。

「もういいぞ」

「いただきますッ！」

OKを出せば声を揃えると同時にのびてくる箸。熱い熱いと言ひながらお好み焼きに食らいつくそいつらに、本当に俺は今日何枚焼くんだろう、と少し気が遠くなる。

二枚目、三枚目と仕上げを終えると、松田が期待したまなざしを俺に向けた。はいはいお前はたこ焼きだつたなど、温まつたたこ焼き器にサラダ油を塗り、生地を流し込んだ。わざわざ業務用スーパーまで行つてカツトしてあるタコの大袋を買ってきただが、はたして足りるだろうか。足りないとか抜かしやがつたら自分で買いに行かせるけれど。

「そうか、それで処分も軽く済んだのか」

もごもごと口を動かしながら降谷が言う。

話していたのは松田が大暴走した例の爆弾事件、そしてその後の查問会のことだった。たいしたお咎めがなかつたことくらいは連絡をしていたが、さすがに詳細を説明するには文字数が足りなかつた。「状況的に対応としては間違つてなかつたと思うが、本来ならもう少し重い処分になつていてもおかしくなかつただろ」

「実際運が良かつたよ。査問に馬鹿がいてくれて助かつた」

「まあ見事に墓穴ほつてたわな」

「ああ、例の柊木を目の敵にしてるつて奴のこと？」

ああいうのを無様つて言うんだろうとしみじみ言う松田に、思わず大きく頷いた。俺が気にくわないなんて限りなくアホらしい私情で動くからそういうことになる。

ぽりぽりとセロリを咀嚼しながらたこ焼きの焼け具合をチェックした。よし、いい色だ。

「そつちも近いうちに鉄槌は下す」

「……ああいう場で格木に締めあげられるとか絶対嫌だわ俺」

「お前そんなに査問会怖かつたの？」

俺らみてえな現場の人間はお偉方と渡り合うのに慣れてねえんだよ、と松田は不貞腐れたように言う。確かに、現場メインはなかなか上層に会う機会はないか。

「じゃあまあ、お疲れさんということで」

ひよいつと松田の皿にたこ焼きを入れてやると、目が輝く。

最近よく眠れるようになつたというこのでつかいガキは、一時期落ちていたらしい食欲まで回復させ、今は周囲が引くくらいすさまじい量を食べているというのは晴れて同僚になつた伊達情報。たくさん食べるのはいいことだが、これは冗談でなく買い足しが必要なんじやないだろうか。

「それにしても、特命係だつたか？　よく協力してくれたよな」

「窓際部署だつて聞いたけど、実際どうなんだ？　今の話じゃ相当優秀なように聞こえるけど」

諸伏と降谷の言葉に、あー…とある程度「特命係」の現状を知つている刑事部三人は、遠い目をした。刑事部、特に捜査一課とは微妙な関係を築いているという話は聞いている。

事件現場に乗り込んできて勝手に捜査をしているかと思えば、急に呼び出して「犯人がわかりましたので逮捕をお願いします」。一応自分たちの手柄にはなるが、気分的には相当複雑なのだろう。

「……まあ、上に嫌われて窓際にいるだけだから、優秀は優秀だ。特に杉下警部はな」

「あの人、一を知つたら十どころか百まで推理しそうだよな」

「そういうや何でお前が特命係と一緒にだつたのか聞いてねえ。知り合いなのか？」　格木

ごもつともな質問に、うーんと少し首を傾けた。まあ、いいか、下手に誤魔化すより言つてしまおう。もう警察学校にいたときとは違う。警察組織の現実くらい全員すでに飲み込んでいるとこだらう。

「杉下さんは、俺の恩人なんだよ」

「恩人？」

「ああ。俺、誘拐されたことがあるんだ。俺のトラウマ人生のスター
ト」

時が、止まつた。

*

俺なりにかいつまんで事情を話せば、五人はそろつて頭を抱えていた。それでもお好み焼きを食べる手を止めないのだから器用なものである。

「……女性苦手の本当の理由つて、それか？」

「いや、ストーカーっていうのも本当だよ。正確に言うとその誘拐が大元で、立ち直ろうとしてたときにストーカーだのキヤツトファイトだのでトドメ刺されたというか」

「泣けてきた」

「たこ焼き食うか？」

「食べる……」

目頭を押さえながらも諸伏は皿を出してきた。さすが、警察学校にいたときより数段強かになつたと思う。俺はとても良いことだと思います。

「それに、……警察官僚の、不正」

「さすがに警察官になろうとしてるときにそんな話するのは気が引けでな。だから警察学校のときは言わなかつたんだよ」

「それで、よく……」

警察官になつたな、と。降谷はそう言いたかつたようだが、ぐつと口を閉じた。

そういえば大河内さんにも同じことを尋ねられたことがある。おそらく、杉下さんも内心では同じことを考えて いるだろう。

まあ俺が警察官になろうと思った理由はいろいろあるが、今この場で言えることがあるとするなら、それは。

「……俺の思う『警察』は、杉下さんだよ。そうあるべきだとも思つて
る」

かつての忌まわしい記憶。縛られて身動きも取れず、薄暗い部屋に閉じ込められた。そんな俺をじつと見つめる、おぞましい笑顔の女性。

あの空間から救い出してくれたのは、優しくて力強い手。その手は、もう大丈夫ですよ、と頭を撫でてくれた。

どうして忘れられるだろう、あのときの気持ちを。

「ま、実は俺の父親も警察関係者だし、今はお前らもいるからな」警察への恨みが全くないとは言わない。けど、「警察」に憧れをくれた存在もまた、強烈すぎた。

だから俺は、――だから。

「……あ、焼きすぎだ。お前ら早く食え」

ホットプレートの温度を落とすと、さつと箸が飛んでくる。

これ以上この話を続ける気がないことを理解してくれたのか、そのまま皆お好み焼きを口に詰め込んでいた。熱ツと猫舌の松田が悲鳴を上げる。馬鹿め。冷えたお茶を差しだしてやると、松田はいつきに飲み干した。

そんな松田の様子に苦笑しながら、伊達が空気を変えるように明るい声で言う。

「柊木、お前も食べろよ。じゃないと食べつくしちまうぞ、俺たちが」

「お前らの食いつぶり見てるだけで胸焼けしそうなんだけど」

「食わなくともいいんだぞ柊木、その分俺が食う」

「お前は少し遠慮しろ大食らい。機動隊の時並みに食べてたら太るぞ」

そんなヘマはしねえ、と適温になつたお好み焼きをまたばくばくと口に入れる。そんな松田に苦笑と溜息をひとつ漏らすと、俺も箸をとつた。

嗚呼、この空気は久しぶりだ。賑やか過ぎる夜が、ゆっくりと更けていく。

自分のデスクで端末と向かい合い、ひとつ小さく息を吐いた。

とつぐに終業時刻は過ぎており、先ほどまで残っていた上司や先輩たちもすでに帰宅している。俺が遅くまで残ることはそれほど多くないせいか、からかい混じりの心配の言葉を頂戴したが、近く俺が開く予定の査問会の資料の確認だといえば疑うひとはいなかつた。もちろん嘘である。そんなものの就業時間内にと完璧に仕上げている。力チ、力チ、とマウスをクリックしながら過去の資料を読み進めていく。

画面に映っているのは、これまでに行われた査問会や調査の詳細。どんな警察官がいて、どんな不正を疑われ、どんな結果に終わつているのか。それからこれまで警視庁が受け持つてきた犯罪事件の数々。どんな事件が発生し、誰が捜査を行い、犯人はどうなつたのか。

どれも特段極秘の資料ではない。別に昼間に見ていても大きな問題があるわけではないのだが、年末に執行した大掃除以来、さすがに周囲の目がうるさい。

ただでさえ睨まれやすい監察官という立場、過去を探つてているのを見られるのは必要以上に警戒心を煽るだけだ。全力で上層に喧嘩を売つたとは言え、あれが「実力」なのか「まぐれ」なのかを周囲が決めかねている今、熱心すぎるさまを見せるのは悪手だろう。

『相当噂になつてんぞ』

そうこつそりと俺の耳に入ってくれたのは、捜査一課にきて早々頭角を現している伊達だつた。

『普段にこにこして謙虚な姿勢を崩さない優男が、嬉々として上層いたぶつてたらしいつてよ。お前のイメージ戦略大丈夫か?』

そうからかい混じりに言われては苦笑するしかなかつたが、実際に周囲の反応は顕著だつた。

いくら嫌われ者の監察官とは言え俺はほとんど見習いの扱いだつたし、謙虚に振る舞つていればさほど避けられることもなかつた。そのせいで女性も怯まず近づいてくることには頭を抱えていたが、まあ

仕事とわりきつて失礼にならない程度に何とか逃げていたのだ。

それなのに、査問会後の周囲の反応と言つたら。

「……考えてみれば、久し振りか」

あの、動物園にいる動物になつたかのような気まずさ。檻もないのに間に何か阻るものがあるような、近づくのは気が引けるが注目はせざるを得ないという、あの感じ。学生時代は毎日がこんな状況だった。あのときはそれなりに辛く感じたものだが、今は違う。

女性を含め、誰も近づいてこないのはかえつてラク。強がりでなくそう思えるのは、そうやつてこの状況を笑い飛ばしてくれる存在があるからだということは理解している。

——あの頃の俺には、そんな存在はいなかつた。
ゆっくり息を吐きながら目を閉じる。今日確認したかつたものはすべて目を通した。あまり遅くなつて明日に響くようなことになつてはならない。こきりと首をならし、目を開ける。今日はここまでにしようと再びマウスに手をやつたところで、傍においていたスマホの画面がついた。

メツセージの通知とともに表示されていた名前は、その「得がない存在」のうちのひとり。つい自分の目元が緩んだのを感じた。

* * *

「スーツにまで気をつかわなきゃいけないなんて大変だな」

「いや柊木だつて気をつかつてるだろ？ 体裁的な意味で」

降谷からの連絡を受け、今日は諸伏の日用品の買い出しに付き合つていた。

潜入から離脱してはや数か月、いまだ諸伏の外出は制限されているそうで、プライベートでも出来るだけひとりで出かけることは避けているらしい。ストーカーに慣れていて気配や視線に敏感なお前ならヒロの付き添いに適任だと抜かした降谷、言いたいことはわかるけどちよつと歯に衣着せろと思う。

申し訳なさそうな顔で待ち合わせ場所に現れた諸伏に気にするな

と手を振り、いくらか日用品を買ってまわった。これで最後だと案内されたのがこの洋裁店だ。

公安捜査官は潜入時などを除き、基本的にはスーツで仕事をしている。が、何せ被疑者を追いかけて全力で走ることもあるれば拳銃を上着の中に吊り下げる必要もある仕事だ。身体に合っていないスーツでもし動きに支障が出れば文字通りの命取り。だから毎日の戦闘服であるスーツはきちんと採寸して縫つてもらうことにしているのだという。

諸伏がもつ布地のサンプルを横目に見ながら、どうかなと首を傾けた。

「そりやまああんまり貧相なのは着ないけど、無駄にいいの着て目工付けられるのもな。俺自身は大してこだわりないし、一応『気取らないエリート』っていう設定でいるし」

「設定つてな……」

「どうせ良くな思われない立場だけど、自分から印象を悪くしに行く必要はないだろ」

何の気なしにそう言うと、ふと諸伏が押し黙る。不思議に思つて視線をやると、何だか妙に困った顔をしていた。

「……柊木つて、意外とというか、人からどう見られてるかよく考へてるよな」

「……余計なトラブルは回避したいと思うのは普通だろ。面倒ことが多い人生送つてきてるし」

「ああ、だから自分の演出も上手いし演技も出来る」

「……諸伏？」

「俺さ、正直不思議だつたんだよ。ゼロと俺に配属先から声がかかつたのは警察学校にいたときだ。……ゼロはわかるよ、あいつは本当に優秀だから。だけど、何で俺だつたんだろうって」

ゼロとずっと張り合っていた、お前じやなく。

わずかに細められたまなじりに、その言葉が本心であることを理解した。

「柊木の目立つた欠点なんて女性苦手くらいだろ。しかもそれは俺た

ちしか知らなかつたはずだ。なのに、

「……諸伏」

「……悪い、そんなこと言われても困るよな。ただ本気で不思議だつたんだよ、ずっと」

そう言つて諸伏は苦笑し、布見本に目を戻した。

俺ではなく、諸伏が公安に選ばれた理由。そんなもの考えるまでもなく明白だと思うのだが、意外と本人は気づかないものらしい。

「諸伏」

「うん？」

「わかりやすいところから行くぞ。第一に、前も言つたと思うけど俺の父親は警察関係者だ。俺自身に警察官の知り合いはそんなにないけど、俺の顔はそこの父に似てるらしいし、どつかで父が俺の写真とか同僚に見せてるかもしれない。つまり俺が潜入していた場合、身バレの危険はお前より高かつた」

「……え、」

「第二に、俺は不得意な分野こそ少ないが、お前の狙撃ほどわかりやすい特技はない。お前、警察学校のときに射撃のセンスと目の良さを見込まれたんだつて？ 訓練を重ねたらやつぱり優秀な狙撃手に化けたんだつて降谷が自慢してたよ。それだけ秀でた技術があれば潜入先で重宝される可能性も高いだろうな」

「え、えっと、」

急に慌てだした諸伏に構わず、言葉を続けていく。諸伏が自分をどう評価しているのかは知らないが、俺からすれば十二分に優秀なやつだと思う。友人としての顛願目を抜いても、安心して背を任せられる捜査官だ。

思えば、こういうことを口に出したことはあんまりなかつたかもしれない。言わなくても伝わつていてると思つていたというのは甘えだつたか。反省するとしよう。

「第三、お前は相手の警戒を解くのが上手い。誰とでも仲良くなれるし、少し話すだけで相手の懐に潜り込める。萩原もそういうの上手いけど、お前だつて相当だよ。それから第四、使命感と忍耐力かな、普

通の人間がこんなに長期間行動制限されて正気でいられると思うなよ。バレないためつづつたつて、外出制限されて仕事仕事仕事、気晴らしすらなかなかできない環境なんだろ。堪えられる人間はそう多くないよ」

「ひ、柊木、」

少しづつ諸伏の顔が赤くなっていく。

別に一生懸命褒めているつもりはない。俺にとつてはただ思っていることを口に出しているだけなのだが、やはり諸伏にとつてはいい薬のようだ。

「第五、お前らの仕事は成功したところで一切表にでない。世間的に評価されることなんてほほないし、それを誇りとする組織だ。他人からの評価を求めることがなく、やるべきことを迷いなく遂行できる人間じやないと務まらない。つまり、だ。——長年何をやってもトップレベルの結果を示す奴の隣にいながら、腐ることなくずっと努力を続けてきたお前以上に公安に相応しい奴、どこにいるっていうんだよ」

そう言つたときの諸伏の顔と来たら。

耳どころか首まで真っ赤、目は真ん丸に見開かれ、口は半開きのままわなわなど震えている。是非とも写真に残したいものだが、たぶんレンズを向けた時点でバレてしまうだろう。何とも残念なことだ。

やれやれ、とつい顔が苦笑をつくる。

「……そういう意味では降谷が羨ましいな。俺にはそんな奴いなかつた」

嫉妬にも羨望にも、特別扱いにも慣れている。降谷と違つて俺には何かと事情があつたのも事実だけれど、俺を俺としてみてくれる友人なんて、まして一緒に努力してくれる友人なんて俺にはいなかつた。少なくとも、お前らに出逢うまでは。

「納得できたか、諸伏」

にやりとそう言つてやると、耐え切れなくなつたらしい諸伏はもう勘弁してくれと蹲つた。別に勝負をしていたわけではないが、何となく勝つた気分だ。よきかな。

「お前の仕事ぶりは知らないけど、優秀な奴しか所属できない場所で

ずっと戦ってるんだ。何でとか余計なこと考えてんなよ、ただでさえ
酷使してる脳がオーバーヒート起こすぞ」

「今現在お前のせいでオーバーヒート起こしてる……」

「見りやわかる。ここまでわかりやすく赤面するやつ久々に見た」

うるさい、と弱弱しい声が落ちる。

それにまたつい笑うと、恨みがましい目線がこちらに向けられた。
諸伏にしては珍しい、ふてくされた顔。

「……じゃあ、ゼロがスカウトされた理由は何だと思う？」

「日本が好きすぎるから」

「納得しかない……」

わかりきつたこと聞くなよと付け加えれば、諸伏はようやくいつも
のようすに声をあげて笑つた。

*

採寸を終え、スーツをオーダーして店のドアを開ける。

店に入る前までとは違い、何となく気楽そうな諸伏の表情に少し安心した。無自覚なのか、出かけ始めの諸伏は本当にピリピリしていた。仕方がないと言えばそうなのだが、外出るたびにそれでは本当に精神が参ってしまう。

「これで俺の用は終わつたけど、柊木はどこに行きたいとこある？」

「ああ、じゃあスーパー付き合つてくれ」

「スーパー？ 夕飯の買い物？」

「まあそれもあるけど。せつかくだから今日はお前と一緒に行きた
い」

我ながら完璧な笑顔でそう言つた瞬間、即座に察した諸伏は盛大に頬を引きつらせた。

「……米？ あと何の大瓶？ 醤油？ 酒？ みりん？」

「あと砂糖と塩。何でああいうのつて同じタイミングで残り少なくな
るんだろうな？ さすがに重いし順番に買い足そうと思つてたんだ
けど、諸伏がいるなら遠慮するほうが失礼だよな。頼りになる友人を

もつた俺は本当に幸せだよ。ありがとう諸伏、お前がいてくれて嬉しい

い」

「そういうセリフはもう少し別の場面で聞きたかったかな！」

まあ気にするなど歩き出せば、ハイハイと苦笑した諸伏の足が自然と続く。なんやかんやで諸伏も嫌がつていなければわかつていた。

「もうわかつてるいいいんだけどさ、本当に本性隠さなくなつたよな。柊木が控えめな性格だと思つていた時期が俺にもありました」「何言つてんの、俺はずつと変わらないだろ」

「嘘つけ。全然違う」

「嘘じゃないって」

そんな軽口を叩きながら歩く道が、ただただ楽しい。

柊木にヒロを任せた次の日、いつものように警視庁で端末と向かい合う幼馴染みは久しぶりにすつきりとした顔をしていた。

「おはよう」

「ああ、おはよ。あれ、今日はこっちに来る日だつたか?」

「少し書類の確認がしたくてな」

「そつか、お疲れ」

につと笑うヒロの顔に、陰りはない。じわじわと安堵が胸に広がつていく。

「昨日は気晴らしになつたか?」

「おかげさまで。けどひどいんだぜ柊木の奴、俺の用事が済んだ後どつか行きたいかつて聞いたらすぐえいい笑顔で『スーパー』つづて」

「……さては荷物持ちか」

「正解、腕痛くなるくらい持たされた。料理酒だの醤油だの、果ては米まで買つたんだぜあいつ! しかも十キロ! そのうえにさらに塩に砂糖に小麦粉まで乗せて!」

手があるうちにまとめて買いしとかないとなと笑う柊木は紛れもなく魔王だつたとヒロは切々と訴える。容易に想像ができる笑えた。柊木は気を許した相手に対しても良くな悪くも遠慮をしない。最初の猫かぶりが嘘だと言うくらい堂々と手伝わせるので、もはや一周回つて許せてしまう。

なんだかんだと楽しそうに昨日の話をするヒロを見て、いい気晴らしになつたようだとそつと息をついた。

組織から離脱して以降、ヒロの消耗具合は本当にひどかつた。何の経験もない俺たちが例外も例外として潜入任務に送られたときからずっと、無茶ばかりしてきた。常に命の危険と隣り合わせ、目的のためならばと罪を重ねる。ましてヒロはスナイパーとして潜入したのだ、俺よりもずっとやりたくもない罪を重ねただろう。それでも任務のために、公安のために、日本国家のためにと尽くしてきたというの

に、任務は失敗に終わった。

決して「スコッチ」がミスをしたわけではない。俺も、公安の仲間たちもよくわかつてゐる。情報の扱いには細心の注意を払っていたのに、まさか全く関係のない部署の人間から情報が洩れるとは誰も想定していなかつた。厳格で知られる彼の上司さえ、悔しさと安堵に身を震わせてヒロを迎えた。

『すまない、……すまない！　よく、……生きて帰つてくれた……！』絞り出すように響いた上司の言葉は、今でも耳に残つてゐる。しかしそれにも、ヒロは上手く応えられていなかつた。声をかければ反応はするし会話もするが、どこか上の空で地に足がついていないようだ。きっと時間が解決してくれるだろうとは思いつつ、俺はとにかく声をかけ続けた。

柊木が元凶の罪をすべて暴き、さんざんいたぶつて懲戒どころか送検まで持つて行つたと聞いたときは、公安の関係者が皆歎声を上げた。ちなみにこの一件のおかげで公安内でも柊木の評価は非常に高い。接触が許されるのもそれゆえだ。

その後はヒロもだいぶ元の明るさを取り戻し、久しぶりに同期たちと再会した時には昔のように笑つていた。

もう大丈夫だと、そのときは思つていた。甘かつたと言わざるを得ない。

『……ヒロ？』

『うん？　どうかしたか、ゼロ』

『大丈夫か』

『……何がだ？　強いて言うならお前の器物損壊のおかげで寝不足だけど』

『それについては本当にすまん』

表面上は元通りだ。よく笑うし、よく喋る。要領よく仕事をこなし、自分のペースを見失わない。だが、これでも長い付き合いだ。他の誰にわからなくとも、俺にはわかる。

ヒロの灰色の瞳が、ずっと空虚なままだということに。

もともと人一倍忍耐力に優れ、取り繕うことも上手い男だ。心に抱

えるものがあつても、そう簡単に口にはしないし、まして弱音を吐くタイプでもない。いまだ潜入を続けている俺に対して引け目を感じていることも察していた。きっと俺では、何もしてやれない。

それならばと、買い出しと気晴らしだと言つて、柊木にヒロを連れ出してくれた。ひとの機微に敏い柊木なら何か察してくれるかも知れないし、ヒロも柊木にだつたら少しくらい心の内を吐露するかもしない。そつのない柊木だ、少なくとも悪化はしないだろうと踏んで。

そして今、実際にヒロの瞳に光が戻っている。きっと何かあつたのだろう。さすが柊木、期待以上の成果だ。……幼馴染としては、ちょっと悔しい。

「……何だよゼロ、にやけた顔で。いいことでもあつたのか？」

それは、お前の方だろ。

そう思いつつも口には出さず、何でもないと答えた。

心理状態は身体機能にも影響を及ぼすというが、こうも顕著だとは。

柊木と氣晴らしに出てからしばらく、俺は今日も気持ちのいい目覚めを迎えた。

「……、こうも極端だと我ながら呆れるというか……俺も単純だな」

誰も聞いていない独り言と苦笑を零して、俺はベッドからおりた。言うつもりは全くなかつた、かねてからの疑問を口にしてしまったときは本当に失敗したと思った。あんなのはただの八つ当たりだ。だというのに、柊木ときたら。

「……あいつ、わりと恥ずかしいこと普通に言うんだよな」

生来の素直さなのか、柊木は人を褒めることにも、自分が思つたそのままを口に出すことにも抵抗がない。好意は素直に示すし、照れることも意地を張ることもほとんどない。

当分ない話だろうが、もし柊木の女性恐怖症が治つて恋人でもでき

れば、一切照れることなく惚氣るのだろう。それも多分、無意識で。

珈琲を淹れ、簡単に朝食の支度をする。近頃味をあまり感じながら食事も、ようやく味わう余裕ができた。いつたいどれだけ消耗していたのかと自分で呆れる。

『——長年何をやつてもトップレベルの結果を示す奴の隣にいながら、腐ることなくずっと努力を続けてきたお前以上に公安に相応しい奴、どこにいるっていうんだよ』

そんなことを言われたのは初めてだつた。確かにゼロと一緒にいれば比べられることもよくあつたし、一緒に何をやつても俺よりずっといい結果を出すのがゼロだ。誰かに褒められるのも、認めてもらうのも、全て。

嫉妬がなかつたとは言わないが、そんなすごい奴が俺のことを幼馴染だ親友だと言つてくれるのは嬉しかつたし、俺は俺として頑張ればいいと思つていた。ゼロに勝つために努力をするわけでもないし、誰に評価されなくてもいいと。だけど。

「……あれは失態だ……」

いくら仕事中ではないとは言え、平常心を失つて表情のコントロールも全くできなかつた。職場であんな姿見せたら間違いなく異動待つたなし。

終木は必要のない嘘はつかない。あれもただ、心から思つていてることを口にしただけ。表情と声色から、それくらいはわかる。わかるからこそタチが悪いんだと言いたいあのタラシめ。

悔しさ半分恥ずかしさ半分で内心叫びながら、ぬるくなつた珈琲を喉の奥に流し込む。そろそろ身支度を整えて家を出なければいけない。

潜入の失敗は、正直だいぶ堪えた。しくじつた覚えもないのに俺の身分が明らかになり、自決を考えながらもとにかくスマホを処分しなければとただ走つた。俺は誰を、何を信じていいのかわからなかつた。

何があつた？ 僕が失敗をしたのか？

それとも誰かが俺の情報を？ —— 誰、が？

頭の中に疑問符が飛び、混乱が過ぎてそれまで俺のサポートをしてくれていた公安の仲間さえ疑つた。経験に乏しい俺を、あんなに支えてくれていたのに。

俺の情報を流した奴が捕まり、これでひと安心だなと同僚に肩を叩かれても心は晴れず、俺はそんな自分自身に絶望すら感じていた。

『外的要因があつたとは言え、重要な潜入任務に失敗した』

『きっとよく組んでいたバー・ボンにもN.O.Cの疑いがかかつただろう。俺はゼロの任務遂行の邪魔をしてしまった』

『命がけで任務にあたる公安の仲間意識は強い。その仲間に、疑いを抱いてしまった。俺の生存をあんなに喜んでくれた仲間を疑つたなんて』

『こんな俺は、公安にいていいのだろうか』

そんな暗い思考があれ以来ずっと俺の中で渦巻いていた。たぶん、もともとそんなに持つていなかつた自信というものを根こそぎなくしていたのだと思う。

そんな俺に、気遣いでも何でもない、柊木の心のままの言葉は響いた。

『人を見る目が確かなお前が、そう言つてくれるなら』

『俺はまだ、公安で頑張れるかもしれない』

我ながら本当に単純だ。ずっと抱えていた黒いものがこんなに簡単に消えてしまったのだから。そんな自分自身に苦笑を零しながら、ジャケットを羽織る。柊木に選ぶのを手伝つてもらつたネイビーのスーツは、ひどく身体に馴染んだ。

「……あ、また柊木にお好み焼き作つてもらおう」

いまいち味の分からぬ状態で美味しいとわかっているものを食うほどむなしく、悔しいことはない。先日の荷物持ちの代金がわりにたかりに行こう。ゼロに相談して予定を調整しなくては。

支度を終えて鞄を持った俺は、いつものように玄関のドアを開け、一步を踏み出す。さて、今日も火が付きやすい幼馴染の補佐に励むとしようか。

ようやく今日の分の仕事を終え一息ついたとき、スマホの着信音が自室に鳴り響く。手に取り相手を確認すると、柊木だつた。

『ああ降谷、今いいか?』

「大丈夫だ。どうした?」

柊木とは定期的に連絡をとつてゐる。もちろん他の奴らとも雑談のようなやり取りを交わしたりしてゐるが、頻度は柊木がダントツに多かつた。

『悪ガキどもが変なもん見たらしい。杞憂かもしれないが、ちょっと気になつてる』

「詳細頼む」

柊木の言う「悪ガキ」、仲間内ではふざけて「非行少年ネットワーク」なんて呼んでいるが、彼らの存在はまったく馬鹿にできない。その働きはまさにホームズの手足であり目や耳となつた「ベイカーストリートイレギュラーズ」そのもの。偶然とはいえヒロの逃走を助けただけでなく、柊木がため息をつく程度には優秀な諜報員になりつつあつた。

彼らは街に溶け込み、どこにいても特に怪しまれることはなく、常にそつと耳をそばだててゐる。まあたいていは伊達がどこで仲睦まじくデートしていたとか、伊達が照れくさそうに結婚情報誌を購入していくとか、そういういた情報らしいのだが（伊達は真剣に頭を抱えていた）、たまに妙に引っかかる情報を持つてくることがあるらしい。柊木としては協力者のような使い方はしたくないようだが、せつかく得た情報を渡さないのもどうかということで、こうして報告を上げてくれてゐる。

その情報の精度と量は現役捜査員顔負けのレベルで、いつそ全員公安に引き抜くかと言つたら冗談でもやめろと怖い顔をされた。

「……なるほど。確かにそれは妙だ」

『もうその辺には近づかないよう釘刺してあるから』

「ああ、その方がいいな。わかつた、後はこつちで調べる」

『よろしく』

いつもながら優秀だと笑いながら言うと、優秀すぎて困つてんだよと心底困った声で柊木が返した。

『何なのあいつら、街で迷子見つけたら保護者のところまで送り届けてやつてるし、大荷物抱えたご老人がいたら家まで運んでやつてるし、こないだなんかコンビニで万引き犯捕まえやがったんだぞ。凶器持つてるかもしけねえのに喧嘩のやり方も知らない奴らが手エ出しながら締め上げたけど。今や近所でも評判のいい子たちだよ』
「……それはもう不良と言つていいのか？」

『俺もそう思う』

怒つていいか褒めていいかわからなくなつているらしい柊木に、つい噴き出す。どう考へても柊木の影響だろうに、本人にその自覚がないのだから面白い。

『そういうえば柊木、ヒロと出かけた日、何かあつたか？』
『何かつて？ 特に何もなかつたけど。俺が諸伏をこき使つたくらいで』

『こき使つた自覚はあるんだな。……いや、ヒロの顔色が良くなつていたから』

そう言うと柊木は、あー……と声を漏らした。何か心当たりがあるらしい。

『いや、無理には聞かないが。……良かつたと思つて』

『……まあ、もう大丈夫なんじやないか、たぶん。俺もよくわかつてないけど』

本当に柊木もよくわかつていないらしい。無意識にひとを立ち直らせらるなら、お前のそれはもう才能だ。苦笑するしかない。

まあ、と柊木は軽い声で続けた。

『ひとにメシたかれるようになつたらだいたいもう大丈夫だよ。萩原や松田もそうだつた』

『何だそれ』

『あいつら皆してお好み焼きとたこ焼き食べたがるんだよ。気に入つてくれんのは嬉しいんだけど、またあの量焼くのかと思うとちよつと

気が遠くなる』

何でもないよううそう言う柊木に、そういえば前のお好み焼きは松田の事件の直後だつたな、と少し遠い目をした。

僕の同期たち、わりと大変なことに巻き込まれてゐるわりに少々呑氣すぎやしないだろうか。いや、確かに柊木のお好み焼きは美味いけど。うん、……食べたいな。

「……柊木」

『うん?』

「今僕が取り組んでいる、大きい仕事」

『うん』

「それが無事片付いたら、そのときもまたお好み焼き頼む」

『お前もかよ』

仕方ねえなあ、と呆れたように言うその声を聞いてると、不思議と安心した。本当に柊木は、変な奴だ。お前がそうやって笑つてゐるうちは、大抵のことは何とかなるような気がしてくるのだから。

『降谷』

『何だ?』

『お好み焼きくらいいつでも焼いてやるから、早く外でも降谷つて呼べるようになつてくれよ』

「……ああ」

柊木の柔らかい言葉は、耳に心地いい。……ああ、ダメだ、瞼が下がつてきた。

『……降谷? 起きてるか?』

『おきてる……』

『ほとんど寝てんじゃねーか。疲れてたんだろ、長話して悪かつたな』

「ひいらぎ……」

『何だよ』

お前がいてくれて、よかつたよ。

そう口を動かし、そのまま俺は眠りについた。

*

「……え、何寝たの降谷……？」

あんな最大級のデレを投下しといて寝落ちとは。

本当に寝落ちしているなら多分最後の言葉は覚えていないだろう。

録音していなかつたことを心から悔やみつつ、通話を切った。

「……諸伏のことばつか心配してたけど、お前だつて精神やられてたんだろうに」

諸伏といい降谷といい、公安組は顔に出にくいから厄介だ。

松田くらいわかりやすく荒れてくれればフォローもしやすいといふのに、全く可愛げがない。思うところがあるなら少しくらいは何かしてやりたいと思うのに、なかなか隙を見せてくれないと何というか。

俺がこれだけ堂々と迷惑を掛けにいつているのだから、あいつらも同じくらい堂々と迷惑を掛けにくればいい。……こういうことも言わないと伝わらないのか。我ながら人付き合いの経験値がたりなすぎて手探り感が否めない。こういうことが得意なのは萩原だ、そのうち話を聞いてもらおう。

まだまだ努力しなきゃいけないことだらけだな、と苦笑してスマホをベッドサイドに置いた。といつても、別に悲観はしていない。

今できないなら、これからできるように努力すればいい。今できることのなかから、やるべきことを見つければいい。たいていのことはこのふたつに尽きる。

とりあえず、お好み焼きでもたこ焼きでも、あいつらのためにできることがあるのは誇らしく思えた。大学時代に作り方を叩き込んでくれたバイト先のおっさんたちに感謝をしつつ、電気を消してベッドに潜り込む。

「……頑張ろ」

ふと口から零れた小さなつぶやきは、ベッドの中ではどけて消えた。

「はは、そういうことちゃんと考えるのすげー旭ちゃんって感じだわ」「……貶されてる?」

「何でよ。褒めてるって」

考えないやつよりずつといいつしょ、と萩原は上機嫌でビールに口を付ける。

今日はしばらく追っていたようやく事件が片付いたという萩原から誘いを受け、俺の家でふたり酒を飲んでいた。ほかのやつらにも一応声を掛けたそうだが、まあ二十四時間体制で仕事にあたる人間の身体がそう空いているわけもなく。

実は飲み会で六人揃うことなんて稀も稀で、こうしてサシ飲みしたり数人だけ集まることが多かつたりする。それでも数ヶ月に一度の楽しみとして、何とか六人で集まる時間を設けている辺りにはものはや皆の執念すら感じていた。

のびてきた後ろ毛を適当にくくつた萩原は、ふは、と景気よく缶を空にした。

「確かに公安組は顔に出ないいつづーか隠したがるからな！」

「下手なこと言つたらかえつてプライド刺激しそうだし……」

「うんうん。でも旭ちゃんはその辺うまいことしてると思うけどね？」

「……そうか？」

適当なテレビ番組をBGMに、並んでソファに座り酒とつまみを広げる。

萩原とふたりならちよどいと思つて公安組のことを話題にしてみたのだが、萩原は軽い調子を崩さない。しかし自分の言葉にはちゃんと自信があるように見えた。

「ぶち、と口の中では枝豆が弾ける。

「この前序内で偶然ヒロくんと顔あわせてさ。ちょっと立ち話したけど、ほんともう大丈夫そうだったよ。憑き物が落ちたような顔してた」

ヒロくんが元気になつたんなら降谷ちゃんも大丈夫だろうし、と萩原は軽く手を振つた。

確かに諸伏は何となく元気になつたような氣はしていたが、まあ俺よりその辺に鋭い萩原が言うのなら本当に大丈夫なのだろう。

それなら良かつたと小さく息をつく。萩原はそんな俺に苦笑し、気にしそうだつてと肩を叩く。

「旭ちゃんてみよーに人間関係に苦手意識もつてるよねえ。そんな心配しなくて旭ちゃんはちゃんとしてると思うよ？ 僕らだつて別に旭ちゃんにやなこと言われたとかそんな覚えないし、職場の猫かぶりも上手くいってんだろう？」

「経験値不足の自覚があるんだよ……職場の猫かぶりはお前らの真似」

「真似？」

「諸伏五割、萩原四割、伊達一割くらいの割合で参考にしてる」

「ははつ数字が具体的すぎ！ 降谷ちゃんと陣平ちゃんは？」

「参考にしたら多方面に喧嘩売り歩くことになるだろ」

「わかってる！」

やつぱちゃんとしてんじやん、と萩原の手の中で新しい缶があけられる。

俺たちのなかで対外的な人当たりの良さで言うならその三人になる。コミュニケーション能力という意味なら萩原が一番なのだろうが、少々軽さが目立つので職場向きなのは諸伏のほうだと思ってその割合になつた。

降谷もちゃんとするとときはしているのだろうが、俺が見てきたのはわりと頭に血が上りやすくて慄懾無礼も普通に吐く感じの「降谷零」なので。いつか職場での立ち振る舞いを見る機会があつたらまた観察してみよう。松田については残念ながら論外だ。職場で大きな喧嘩を起こしてないのは奇跡と言える。

うーん、と萩原は少し考えるように視線を浮かせた。

「旭ちゃんが自分のレベルで納得できないってんなら頑張るしかないけど、何でも必要以上に極めることはないんじゃない？ 職場内のこと

はともかく、普段のことなら俺らでもカバーできるかもしないしさ。んで、旭ちゃんも俺らが困つてるとときは助けてよ。ダチつてそういうもんじやん?」

「……適材適所?」

「そゆこと。旭ちゃんは旭ちゃんで他にいっぱいすごいところあるんだし。ほら、人を見る目とかすごいじゃん? 警察学校時代、ヒロくんのご両親の仇、あのひとに最初に目エ付けたのも旭ちゃんだったよねえ?」

「あれは別に……」

正直を言えばほとんどの勘に近いそれ。数々のトラブルに巻き込まれてきた経験から、腹に一物ある人間は何となくわかるというだけだ。

確かにそれに助けられたことは多くあるが、きちんとした根拠があるわけではないだけに何となく特技とは言いがたい。

「なーに言つてんの、勘でもあつてりやいーんだってそういうのは。にしても旭ちゃん、言つていいのかわからんけど実は女性関係で得たスキル多いよね?」

「まあ、ストーカーのおかげで視線には敏感になつたよな。尾行にも絶対気づける自信ある」

「うわあ。……ひよつとしてあれ、作戦立てるのが得意なのもそう?」「ごく、どビールを飲み込んだ喉が音を立てる。

何でそういうことが得意になつたのかと言われば、確かにそれは長年の積み重ねだと言うほかない。

「……萩原、小中高どれでもいいから、通学路思い浮かべて」

「え? うん」

「家出て道を歩いて学校に着いて、自分の席に着くまで。その間、一切女性と接触しないことは可能だと思う?」

「……え、無理じやん……?」

「俺は毎日考えてた」

もちろん、下校時もだ。そう遠い目で言えば、萩原はさつと目元を押さえた。

家を出るタイミング、歩くスピード、通るルートはもちろん、道のどの辺りを歩けばいいのか。曜日や日、その当時に視線を感じていた相手の思考・行動パターンも含め、ありとあらゆる情報から必死に知恵を絞った。言わば毎日がミッション・インポッシブル。それを何年も続けていれば多少は頭も鍛えられるというものだ。

なるほど、そう言われば確かに女性苦手から得られるものは多かったのかも知れない。ははは、と乾いた声が口から漏れると同時に、口にちくわきゅうりを突っ込まれる。

「おつけー旭ちゃん、もういいよ。言わせてごめん」

「別に。昔の話だ」

どんな経緯で身についたものであれ、役に立つならそれでいい。俺だけでなく、皆の役にも立てるなら尚のこといい。

そうだな、とちくわきゅうりを咀嚼して飲み込んだ。

「俺もできることするし、頼れるとこは頼らせてもらう」「ん、それでよし！」

「で、さつそく頼りたいことがあるんだけど」「

「お？　いよいよ研一おにーさんに言つてみなさい。今度はどこ の女の子？」

「女性問題を前提に話聞こうとすんのやめてくんない？」

いや、あつてるところが哀しいんだけど。

結局何だかんだと萩原に話を聞いてもらつているうちにとつぶりと夜は更けていく。こういう萩原の聞き上手はまだ真似できないなと、すっかり酔い潰れた萩原に毛布を掛けながら思った。

憧れだつた念願の部署に配属が決まった。

警察の花形と言つていいだろう捜査一課は、殺人や強盗などの凶悪事件を管轄とする。そこにいるのは相応に評価されている優秀な刑事ばかり。まだまだ半人前の自分では力不足だうけれど、精一杯尽力したいと思う。

きゅつとネクタイを締めて、よし、と気合いを入れた。

「俺が教育係の伊達だ。よろしくな」

「た、高木と申します！ よろしくお願ひいたします！」

教育係として紹介されたのは、刑事という職を絵に描いたような強面の男性だった。大柄で威圧感があるが、につと笑う目元は優しげで。元気がいいな、と僕の肩を叩いた伊達さんは、いかにも頼り甲斐がありそうだった。

「まあ、氣負わざいこうや」

これから僕は伊達さんについて、刑事のいろはを勉強することになる。

*

配属されてしまらく。

ようやく職務について基本的な事柄をおさえ、たまに事件にも同行させてもらえるようになつた。目の当たりにする現実の事件は、やはりフィクションとはくらべものにならない。冷静に被害者のご遺体と向き合い、現場や証拠を調べることに慣れるにはまだまだ時間がかかりそうだ。

「まあ、誰も最初はそんなもんだ。初めて事件現場を見て吐かねえ奴の方が珍しいんじやねえか」

「そ、そういうのですか……？」

「普通、見る機会ねえからな」

そりやそうだ。

誰かの手によつて命を奪われるのと病気や寿命でお亡くなりになるのでは訳が違う。無理やり命を奪われた場というのは、何とも言ひ難い陰惨な空氣があつた。

現場を思い出して少し気が重くなりながらも、コンビニで買つてきたパンを警視庁のまづい珈琲で胃の中に流し込む。

「報告も終わつたし、午後は聞き込みいくからな」

「はい」

午前中に現場検証を行い事件性が認められたため、午後からは現場周辺の聞き込みだ。伊達さんの聞き込みの仕方をよく見ておかなくては。何より、少しでも早く手掛かりをつかんで犯人を逮捕し、被害者の無念を晴らさなくてはならない。

む、と気合を入れる僕を見て、伊達さんはふと笑つた。

「お前、意外と根性あるな」

「？ そうですか？」

おう、と伊達さんが頷いたとき、後ろから伊達さんを呼ぶ声が飛んできた。

「伊達、ちょっといいか」

「松田。どうした？」

伊達さんの同期だという、松田さんだ。

癖のある黒髪とサングラスがトレードマークのワイルドなイケメンで、元機動隊という珍しい経歴をお持ちだとか。その経歴にそぐわず、細身ながらしっかりと鍛えられた体躯をもち、犯人確保においては非常に有難い戦力なのだと噂を聞いていた。先日腕相撲したら延々と勝負がつかなくて引き分けになつた、と伊達さんが笑つていた。

「ふたりとも休憩中なのに仕事の話～？ 真面目だねえ」

そこにひよいつと乗り込んできたのは特殊犯係の萩原さん。

この人もおふたりの同期だと伺つた。普段はのんびりとマイペースに振舞うが、ひとたび事件となれば人が変わるというのもつぱらの評判。前にあつた事件で懲りたから仕事中は気を抜かないことにしたんだよね」と笑つて言い、伊達さんと松田さんに当たり前だと頭

をはたかれていた。

伊達さんと一緒にいるせいかよく話しかけてくれて、係こそ違うがとても話しやすい人だ。

「ハギお前ニンニク臭えぞ」

「マジで？ ゴメンゴメン、ラーメン食べたんだよね。後で煙草吸つて消してくるわ」

「それは消してねえ、上書きだ」

呆れた顔で言う松田さんに大して変わらないつと萩原さんは笑つた。

この人たちの気安い会話は、年上の先輩に対しても非常に失礼ながら、仲が良いのが伝わつてくるので微笑ましい。

「相変わらず仲が良いですね」

僕の思いを代弁するかのように、近くにいた白鳥さんが言う。周囲の諸先輩方も、苦笑を浮かべつづどこか微笑ましげだ。

「何度も言わせんだよ、腐れ縁だ」

「やだ陣平ちゃんたらつ・れ・な・い、いでつ」

「うぜえ。殴んぞ」

「いやもう殴つてるだろ」

悪ノリする萩原さんに容赦なく拳を振るう松田さん、そして苦笑しつつ見守る伊達さん。それを見て、俺の同期たちもどうしてのかなと少し懐かしく思う。もう少し落ち着いたら連絡をしてみるのもいいかもしれない。

「ここに柊木監察官が加わつたらどうなるのか、見てみたい気もします」

「……わしにはうまく想像できんな」

白鳥さんの言葉に、日暮警部は苦笑した。

柊木監察官、初めて聞く名前だ。つい好奇心に駆られて聞き返した。

「柊木監察官というのは？」監察官つて、あの監察官ですよね」

警察官の不正を取り締まる、警察の中の警察。エリート街道のひとつで警察庁からの出向の人が多く、優秀かつ将来有望な人が配属され

る部署とか。身内のあらを探すという職務上、あまり好かれない立場だというのも聞いている。

僕の言葉に、周囲にいたいろんな人からぽんぽんと答えが返ってきた。

「伊達たちの同期なんだ。異例の引き抜きで若くして監察官になつた人だ」

「エリートですさまじく頭が切れるとか。腹が立つレベルのイケメン」

「ばっさばっさと上層の不正を暴いて査問会でいたぶつてるつて評判だよ。品行方正な優男に見えるんだけどな」

「ああ、最初はただのエリートの優男だと思ってたんだけどな？」
にやり。そう音がしそうなくらい先輩方が笑つたとき、松田さんがぎくりと肩を震わせた。伊達さんと萩原さんもにんまりと悪い笑顔になる。

「例の事件は、もはや伝説だよなあ松田？」

苦虫をかみつぶした顔というのはこういう顔を言うのだろう。サングラスの奥の瞳は心底嫌そうな色を浮かべている。そのまま松田さんは自分のデスクにあつた煙草の箱をさつと掴み歩き出そうとしたが、萩原さんと伊達さんが松田さんの両肩にぽん、と手を置いて阻止した。

「自分の黒歴史の話になりそだがらつて逃走することないんでない？」

「まあ煙草吸いに行くのは後にしとけや。せつかくだから可愛い新人にお前と柊木の伝説的事件の話をしてやろうぜ？」
「お前ら……！」

さつと萩原さんが羽交い絞めの体勢にうつる。ばたばたと松田さんは暴れているが、確か萩原さんも元機動隊、松田さんと言えど逃れられないらしい。

「ま、俺もそんときはまだここにいなかつたから聞いた話なんだけどな」

「伊達テメツ、オイこら離せ萩原ア！」

「はいはい落ち着こうね！」

伊達さんが話してくれた事件の話は、僕が今まで見てきたファイクションよりもずっとドラマチックで、そしてリアルだった。

*

かつての事件を話して聞かせている間、高木の目はずつと輝いていた。ヒーローものを見る子どものような、純粋な憧れを浮かべた顔。これは話し甲斐がある。

後ろで殺氣立つた獣がとんでもない目つきでこっちをにらんでいるが、軽く無視をして事件の流れをたどっていく。萩原が重傷を負った爆破事件の話から、例の観覧車と病院の爆破未遂事件、そしてその後の査問会の話まで。

特に松田の暴走と柊木の拳一発の件については事細かに語った。爆笑した萩原に十回は聞かされたので詳細まできつちり頭に入っている。

「す、すごい、本当にドラマみたいな話ですね！」

「そうだろそうだろ」

「事件は刑事ドラマみたいですが、暴走する友人を拳で止めるところはまるで青春ドラマ、」

「マジでやめろ！」

耳を真っ赤にした松田が叫ぶ。いまだ羽交い絞めの腕を緩めない萩原は音もなく爆笑。周囲の同僚たちも皆笑っていた。

たまにこうやって事件の話をしては、皆で松田をからかっている。それは最初のうち勝手な言動から反感を買っていたという松田が皆に受け入れられた証拠とも言えるだろう。あの事件以降、人が変わったように眞面目に職務にあたるようになつた松田を誰もが認めていた。まあ根は眞面目な松田だ、こちらからすれば元に戻つただけなのだ。

「あの事件以来、まあ松田も変わったわけだが」

「うるせえです」

「はは、柊木監察官もなあ。かなり印象変わったというか、なあ？」

エリートという立場を鼻にかけることなく、謙虚で、礼儀正しくて、誰に対しても敬語で、どんな状況でも笑顔を崩さない、完璧を絵に描いたような男。しかも超がつくイケメンで、若くして監察官に引き抜かれたということもあり、警視庁内でも有名人だつたらしい。

中身を知っている俺たちからすれば笑えることこの上なかつたが、柊木なりの世渡りなのだろうとその本性を言うようなことはしなかつたし、同期であることすらあまり公にしないようにしていた。別に言いふらすことでもない。

しかしこの事件で柊木へのイメージはかなり変わつたと言つていいだろう。もちろん良い方にだ。

『一発で松田を沈めたぞ』

『機動隊あがりの奴を、内勤のエリートが？』

『あいつら同期で友人だつてよ。想像つかねえ』

『しかも偶然爆弾見つけて松田に解体させたつて』

『それ監察官としてまずいだろ……』

『でも、そのおかげで特殊犯係の萩原が助かつたらしい』

松田を一発で沈めた腕っぷしも、その容赦のなさも。病院で偶然爆弾を見つけた際にとつた行動も、その決断力も。

刑事ドラマにあるような現場とキヤリアの確執は実際あれほどあるわけではないが、やはり現場の人間には自分たちこそが実際に事件を解決しているのだという自負がある。現場を走る人間だという、誇りがある。だからこそ、柊木の行動は衝撃だったのだろう。

そして、事件の詳細を知れば知るほど柊木が何を思つてそういう行動に出たのかが理解できた。人命を最優先し犯人の思考を読んだ結果、職務に反してしまつたのだと。現場を知り尽くした人間だつて、爆弾を目の前にしてそこまで冷静に判断ができるか怪しいものだ。

『現場を知らん若手だと思つていたが、大したものだ』

これが話を聞いた大半の人間の感想だろう。

しかも査問会においては自分の行いについてろくに言い訳もせず、自ら厳重な処罰を求めたらしいというのも噂になつていた。どれだ

け正しいことをしていても、ルール違反に違ひはない。そう態度で示した潔さも、見た目に似合わない男氣も、柊木の評判を高めるのに一役買っていた。

さらにこの直後に諸伏の件で大きな不正を暴いてみせたのだから、その後の柊木の評判たるや、言うまでもない。

「すごい人なんですね、柊木監察官て」

「うんうん、旭ちゃんすごいんだよね〜」

本性アレだけどね、と萩原が心の中で付け足したのが察せられて思わず笑つた。実際すごい奴でいい奴なのだが、何せたまに魔王でたまに鬼でたまに暴君なのでこちらとしては素直に褒め難いところがある。あの笑顔の裏に隠されたものをいつか話してみたいものだが、多分誰にも信じてもらえないだろう。あいつの擬態は完璧だ。

「監察官の方に恐れ多いですけど、いつかご挨拶してみたいです」「やめとけ、本来監察官なんてやばいことしねえ限り関わらねえ奴なんだからよ」

けつ、とようやく羽交い絞めから解放された松田が不機嫌そうに言う。さんざん暴れる松田を押さえつけていた萩原はいたーい、と軽く腕を振つていた。

「まあどつかで見かけたら挨拶したらいーよ。警視庁内でも有数のイケメンだからすれ違つたらすぐわかるんでない?」

「そんなに格好いい方なんですか」

感心したように言う高木に、萩原はすつと真顔になつて言つた。

「柊木が制服着て立つてたるだけで、防犯相談や道案内を頼みたがる女の子が集まつて長蛇の列ができる」

「……それは冗談でなく?」

「冗談だつたら良かつたよね」

実習から戻つてきた柊木が学習室に入つた瞬間号泣したことよく覚えている。仕事の時間は堪え切れたが、気が抜けるとだめだったらしい。もはや無意識で涙が流れるらしく、音もなく泣き続けた柊木はとにかく哀れだつた。

ただ、俺たち六人で使う学習室に入ると気が抜けるという事実が

ちよつとだけ嬉しかったのは秘密の話。

「……それ本人的には相当な黒歴史だからやめてやれ」「あーごめんごめん。皆さんも秘密にしといてやつてくださいねー?」

さすがに本人本気で落ち込んでたんで

軽く萩原が言うと、皆苦笑して頷いてくれた。

こうやつて好意的に噂話をされるようなエリートはなかなかないな。徐々に柊木の味方が増えてきてるということだろう。監察官という立場上、癒着を疑われる馴れ合いはよろしくないが、味方が増えること自体はきっと柊木にとつていいことだ。

「ま、そんなんだからぐいぐい来る女基本的に嫌がるんですけどねえあいつ」

びく、と近くにいた女性たちの幾人かが動きを止めた。
なるほど、萩原の奴、それを言いたくてその話をしたのか。同じく
察したらしい松田も、さりげなく続く。俺も乗つておこう。

「露骨なアピールは萎えるだろうな」

「仕事場で言い寄つてくる奴も眼中にないだろ。それに応えるそぶり
でもみせようもんなら即刻左遷だ」

だから、下心で柊木に近づくのはやめろよ?
言外にそう言えば、どことなく女性陣がしょんぼりしていた。悪い
が諦めてほしい。

「俄然お会いしてみたくなりました」

好奇心を全開にした高木が意気込んで言う。

今のところ紹介する気はあまりないが、どこかですれ違つたら教えてやるくらいのことはしてやろう。松田も言つたが、本来あんまり馴れ合つてはいけない奴だ。

その後、俺が知らないうちにどこかで柊木とすれ違つたらしい高木は、芸能人と遭遇したがごとく興奮していた。本当にびっくりするくらいイケメンさんですね、と男の後輩にまで言われるあいつの顔面の出来栄えはいつそ恐ろしい。

まあすれ違つたくらいならいいかと軽く流していたのだが、後日心底不思議そうな柊木の言葉を聞いて俺は綺麗にビールを噴き出すこ

となる。

「何かお前の部下だつていう……高木巡査？　に挨拶されて握手求められたんだけど、いつたい俺のことどう説明したの？」

高木お前、挨拶もあれだが握手はねえだろと。

肩を落として頭を抱えた俺の横で、柊木はひたすらに首をひねつていた。

始めた頃は欠伸を連発していた俺も、最近は目覚ましがなくとも起きられるようになつた。

鳴り響く前にアラームを切り、ひとつ伸び。顔を洗い、警察官にしては少し長い髪を軽くゴムでまとめた。簡単に胃に水とエネルギーを放り込んで、トレーニングウェアに着替える。同じくトレーニング用のシューズを履き、軽くストレッチをして走り始めた。

早朝の空気は気持ちがいい。柔らかく冷えた空気が肌を撫で、わずかに残っていた眠気を奪ってくれる。ペースよく走りながら、よくランニングコースに使っている公園に向かつた。

ただでさえ激務に就いているというのに、誰に言われるでもなく早朝に走るだなんて。毎朝そう自分に苦笑しながら、なんだかんだと結構長い間続いている習慣だ。

俺は自他ともに認めるマイペースである。頑張るときはもちろん頑張るが、人と自分を比べて成果に焦るようなことは決してなかつたし、俺は俺としてやつていけばいいと思っていた。だから周囲にいるやつらがどれだけすごいやつらでいようと、俺は俺のペースを乱すこともなかつたし、頑張りすぎることもなかつた。

それがほんの少しだけ変わつたのは、いつからだろう。

やはりきっかけはあの爆弾処理の失敗だろうか。公安組を除いた三人が、揃いも揃つて泣きそうな顔をしていたのにはさすがに驚いた。

『心配、かけやがつて……！』

『この馬鹿、治つたらまず正座で説教三時間は聞いてもらうからな』

『そのあとは俺から鉄拳だこの野郎……本当に、良かつた……！』

心配、かけちやつたな、と。三人の声で自分が生きていることを実感し、俺までちょっと泣きそうになつたのはばれていないとthought。

それに、誰にも言つてないことだが、深夜にこつそり病室を覗き込んでくる奴がふたりいたことを俺は知つていて。俺が寝たふりをし

ていたことに気づかなかつただろうそいつらは、小さな咳きだけを落としていつた。

『……堂々と見舞いに来れなくてごめんな』

『無事でよかつた……』

そのころはその音信不通だつた友人ふたりの事情なんて知らなかつたが、きっと面倒な仕事をしているであろうことだけは予測していた。そんな中でも俺の顔見に来てくれるつて、俺ちよつと愛されすぎでは。お前ら本当に俺のこと大好きね。

そりや仲は良いし気が合う自覚もある。けど、ここまで俺のこと気にかけてくれるなんて、ときすがに胸がくすぐつたかつた。

そのあとももう大変、この事件のせいで陣平ちゃんは荒れるし、刑事部来て馬鹿やろうとするし、俺はまた爆弾とデートする羽目になつたし、解決したと思ったら今度は何か諸伏が危ない目にあつたらしいし、柊木は查問で魔王発揮して出世するし、公安組とまた会えるようになるし、……いや俺の警察官人生、十年もたつてないのに激動過ぎでは。俺もうちよつと平和的に警察官やるはずだつたような、と思つてももう後の祭り。

きつと今後もさらなる騒動に巻き込まれたりするのだろう。けどやつぱり、気の良いあいつらと縁を切る気になんてさらさらなれなくて。

それならせめて、生き残るためにも少しくらいは対策をしておいた方がいいだろう、と。俺に出来ることは限られているかもしけないが、せめて鈍らない程度には身体を鍛え、気晴らしも含めて人付き合いちゃんとして人脉作つて、柊木の防波堤も兼ねつつ合コン行つてコミュニケーション能力も鍛えて。

自分にできるちよつとしたことくらいは、やつておこうと思つた。何かが起きたとき、少しでも力になれるように。自分にできることを、増やしておきたかった。

まーそれで朝練なんて安直だけど、なんて自分に苦笑しながら走り続けていると、視界の端に見知った顔が見えた。

「……あれ、伊達班長に高木くん?」

「おお、萩原じやねえか」

「萩原さん、おはようございます」

どうやら張り込み帰りらしいふたりは、明け方にも関わらず元気な顔をしている。

「お前こそ走り込みか？ 珍しいことしてるじゃねえか」

「俺だつて身体が鈍らないように考えてるんですよ。機動隊に比べたら全然運動量足りないし、三十路を前に太つたら嫌じやん？」

いつものようにへらつと笑つて言つて見せると、そりや確かに、と伊達も苦笑した。

さすがに素直に頑張つてるのだというのは気恥ずかしくて、そういう俺たち、もう今年二十八だかんね、いつまでも若いと思ってると急に太りだすからね、と続けると伊達も納得したようだつた。

「毎日走つてるんですか？ 激務の最中にトレーニングまで……すごいですね」

「気が向いたときだけだつて。高木くんもあと数年たつたらわかるよ、三十路近づいたら身体鈍るのすぐだから」

「おい悲しくなるからやめろ」

その渋い顔の後ろに、随分とスピードを出して走る車が見えた。あれはどう見てもスピード違反——というか、おいちよつと待て、何でこつちに、

「危ねえ!!」

ブレーーキ音は最後まで聞こえなかつた。

* * *

「……居眠り運転の車が突つ込んで交通事故」

「しかも例の婚約者さんの両親にご挨拶に行くその朝に……」

「どうする伊達、お祓い行く？」

「うるせえんだよお前ら！」

もはや若干涙目の伊達は、その左足に大きなギプスを付けていた。病室で騒ぐなど奢めるが、これはさすがに気の毒だ。伊達は泣いてい

い。

車が突っ込んできたところを萩原に助けられたという伊達は、からうじて直撃は免れたものの躊しきれず、数か所の打撲と骨折。命にこそ別状はないものの、しばらくの入院を強いられた。いや、これは運が良かつたと言うべきだろう。

「大したことなくて良かつたな。珍しい萩原のファインプレー」

「珍しいってひどくない？ いやあさすがにびびつたわ！」

「伊達の部下だつていう刑事は無事だつたのか？」

「うん、高木くんは避けたときにできた擦り傷程度だつて」

高木くんと言えば前に握手求めてきた彼のことだろう。実直そうな顔が脳裏に浮かぶ。

あれ以来彼はすれ違うたびにしつかりと挨拶をしてくれる。そしてそのたびに伊達がひどく微妙な顔をしているのが非常に面白い。大した怪我がないのなら良かつた。

「ま、命があつただけ良かっただろ」

「それはそうなんだけどな……」

松田の言葉に、伊達は暗いまま声を返した。

「何だよ、どうかしたのか？」

「……彼女のご両親が」

「ご両親が？」

伊達がぼそぼそと言うところによると、彼女のご両親はさすがにこのタイミングで起きた事故に不安を抱いたらしい。しかも伊達は、張り込み帰りとは言え半分勤務中に事故に遭つたようなもの。大事な娘を預けるのに、刑事と言う危険の大きい職に就いている人はどうなのか、と。

とはいえる、その人格は娘からも聞いているし、娘も結婚をやめる気はないと言っている。ならば、と条件が付けられた。

「……俺が現場復帰して、三年間大きな怪我無く刑事として務められたら、結婚を許すと」

「……事故は仕事と直接関係はないが、まあ不安に思う気持ちはわかるくないか。危険が多いのは事実だし」

とにかくタイミングが悪かつたなど降谷が言うと、伊達はがっくりと肩を落とした。その肩を萩原がにまにま笑いながら叩く。

「あと三年は独身だねえ。ドンマイ」

「萩原ア……！」

「え、命の恩人にそういう態度とっちゃうく？」

「ぐつ……！」

歯噛みする伊達に苦笑して俺は言つた。

「まあ、逆に言えば三年無事に仕事してれば結婚許してくれるんだろ？ 真面目に働いてりや三年くらいすぐだよ」

別れるつもりはないんだろうと付け加えれば、伊達は当然だと頷いた。それなら何も問題はない。

「なら大人しく、その美人の婚約者に看病でもしてもらえよ」

「あ、急に同情する気が失せた」

すつと真顔になつた諸伏の言葉に、俺も、とそれぞれしらけた声が零れる。お前らな、と伊達が言うとまた皆で笑つた。

「そういうやその婚約者さんは？」

「仕事行つてる」

「え、俺、挨拶したかつたなあ」

誰が会わせるか、と伊達が不貞腐れたように言う。なんでだよ、と松田が言うと、さらに伊達は渋い顔をした。

「お前ら絶対あることないこと彼女に吹き込むだろ」

「何言つてんだお前、嘘は言わねえよ」

「そうそう、あつたことしか言わないって、お前の警察学校時代の話とか」

「だから嫌なんだろが！」

萩原や松田ほどではないとはい、伊達だつて過去何もやらかしないわけじやない。さすがに彼女にそれを知られるのは嫌なのだろう。

う。

そしてそう言わればやりたくなるのが俺たちだ。

「伊達の婚約者さんなら俺も話せるかなあ」

「お、格木チャレンジすんの？」

「だつて俺しか詳細話せない伊達の黒歴史とかあるだろ？」

「頑張れ柊木、応援してる」

「お前ら本当にやめろ」

伊達の大事な人なら、俺だつて挨拶くらいはしたい。きつといい人だろうから、他の女性よりは大丈夫。多分。正直自信があるわけではないが、話す努力くらいはしたいと思う。もちろん、どうやらべた惚れらしい伊達が許してくれるならだが。

「止めたかつたらさっさと退院しないとね。このまま入院してたらいつ俺たちと彼女が鉢合わせするかわからんないぞ？」

面白そうに諸伏が言うと、伊達は苦笑して頷く。ふと思いついたように戸原が口を開いた。

「どうかお前ら顔見せていいの？」

「俺は大丈夫。所属の話さえしないでくれれば」

「紹介の必要ができたら俺のことは『安室透』で頼む。警察関係者だとは言わないように。適当に『友人』くらいで誤魔化してくれ」

お前らもな、と降谷に言われ、了解とそれぞれ頷いた。すると諸伏が面白そうに言葉を続ける。

『安室透』の性格はゼロとは全く違うから、その辺も気をつけて」「何、潜入用の性格？」

〔敬語で物腰柔らかいふりして、本性は嫌味つたらしく性格が悪いっていう設定〕

「つまり猫かぶりの時の柊木と、魔王の時の柊木みたいな感じか」「よーし松田その喧嘩買うぞ」

「ヒロもな」

俺は松田の、降谷は諸伏の頭を掴み力を籠める。誰が魔王だ。いでででと悲鳴をあげるふたりをよそに、伊達と戸原は愉快そうに肩を揺らす。

「ま、早く退院しろよ、伊達」

「仕事は山積みなんだ、休んでる暇はねえぞ」

入院中もくわえ楊枝をやめないタフな友人は、すぐ復帰してやるよ、といつものように頬もしい笑顔を見せた。

閑話 幸福論・表

最初は、萩原だった。

爆弾解体の現場において、何と解体途中に防護服を脱ぎ煙草で一服。タイマーは止めていたようだが、犯人は遠隔操作によつて爆弾を爆破。至近距離から爆破を受けた萩原は、そのまま帰らぬ人となつた。

それから、松田。

萩原の敵討ちのために因縁の爆弾事件に挑んだ。爆破予告の暗号を解読して爆弾をいち早く発見するも、復讐心や己の命よりも多くの民間人の安全を優先し、解体を中止。多くの人命と引き換えに、観覧車の中でひとり散つた。

次に、ヒロ。

潜入捜査中、公安警察であることが組織に露見し、その逃走中に自ら心臓を撃ち抜いた。俺や他の仲間、家族のデータが入つたスマホとともに。俺はその場に居合わせたあの男を、心の底から憎んだ。お前ほどの男なら自決だつて止められたはずなのに、と。

そして、伊達。

捜査一課強行犯係として数々の事件を解決し、美しい婚約者とも出会つた。しかし、その彼女のご両親に挨拶に向かうはずだつた朝、居眠り運転の車に轢かれる。自分の手帳と、そこに挟まれた指輪を部下に託し、眠りについた。

では、もうひとり、あいつは？ 警察学校でずっと競い続け、誰よりも努力家で誰よりも優しくて誰よりも頼りになつたあの男は、いつたいどこに？

場面が切り替わる。いつの間にか雑踏の中にいた俺は、視界の端で彼を捉えた。

「ひいら、」

しかし名前を最後まで呼ぶことはできなかつた。

彼は俺に気づかないまま、いつものように優しい笑顔を浮かべて歩いてゐる。誰とも知らない女性と、手をつけないで。

「、あ……？」

その瞬間、唐突に理解した。

彼は俺の知っているあいつじゃない。あいつは女性と手をつないで歩くなんてことはできない。まして、あんな心からの笑顔を向けることなんて絶対無理だ。

だから彼は、俺の知っているあいつじゃない。彼はきっと、——そう、女性恐怖症にならなかつた、「誘拐事件に遭うことのなかつた柊木」だ。

あいつはきっと、誘拐事件に遭わなければ女性恐怖症になんてならなかつた。そしたらきっと、あんなふうに愛する女性を得て、当たり前の幸せを手に入れることができる。俺たちがいなくても、笑ついてくれる。

——ああ、よかつた、柊木だけでも、幸せなら。他は皆、死んでしまつたけれど、お前だけでも、笑つているのなら。

俺は何があつても、命に代えてだつて、お前やお前の大事な人が笑うこの国を守り抜こう。たとえお前が、俺たちのことを知らなくても構わない。俺たちと出逢うことがなくとも、構わない。お前までいつもらのように死んでしまうくらいなら。

どうかお前だけでも、幸せに。おれはさみしいなんて、おもわないから。

* * *

「……で、それが休日の朝つぱらからピンポン連打して俺を叩き起こした理由?」

「……」

滝のように汗を流しながら正座をする降谷を前に溜息をつく。

ようやく朝日が昇り始め、鳥の声が聞こえだす。俺は基本的に早起きだが、さすがにこの時間に起きることはない。

つい十数分前、連打される玄関のチャイムに飛び起きた。ドアスコープからおそるおそる外を確認すると、そこに立っていたのは死ん

だような顔をした降谷。何があつたのかとドアを開けた瞬間、そいつは飛びついてきた。それほど体格差はないとはいえ、相手は見た目以上に鍛えている生粋のゴリラ。その重さを支え切れずに尻もちをつく。

『……降谷？ 何かあつたのか』

『格木』

『何だよ』

『お前は警察官だな』

『はあ？』

『俺たちと警察学校で出逢つたよな』

『……お前とは個室が隣だつたな』

『女性と手をつないで歩けるか』

『お前は俺に死ねと言つてんのか』

『言うわけないだろ、と強い口調で返された。そしてそのまま、ぐく小さな弱い声で、言うわけがない、と繰り返した。何かわからんが地雷だつたらしい。

わかつたわかつたと言いながらその背をぽんぽんと叩いた。

『よくわからんが深呼吸して落ち着け』

そう言うと、降谷は素直に深呼吸を始めた。吸つて吐いてをゆつくりと繰り返し、少しほして降谷はそつと俺から離れ、無言のまま靴を脱いで部屋に上がつた。廊下を過ぎてリビングにつくと、降谷はくるりと俺の方に向き直つて、唐突にその場に正座した。

そして、——俺はこんなに折り目正しい土下座、初めて見たかもしない。

*

土下座をしたまま降谷が話したところによると、どうもとんでもなく夢見が悪かつたらしい。しかも目を覚ましても夢と現実の境が曖昧で、ついうちまで乗り込んできてしまつたそうだ。

とりあえず俺は正気に戻つたらしい降谷に頭を上げさせる。

「俺とお前以外全員死んだ挙句、俺は誘拐事件にも遭うこと、お前に逢うこともなく生きていた設定で幸せそうに笑つてた夢、ねえ」「少なくともお前だけは夢の中でも生きてたからとりあえず柊木の家に来た」

「時間考えろよ。せめて連絡いれろ」

「悪かった」

自分でも何をやっているのかと落ち込んでいるらしい。降谷がここまで暴走するとは、本当にリアルすぎる夢だつたのだろう。やれやれと首を振りながら、金の中に沈むつむじを見下ろした。

「……で、その夢、その『幸せそうに女性と手をつないで歩く俺』を見た後は？」

「？ そこで終わりだ。目が覚めた」

「……終わり？」

「ああ」

「お前馬鹿なの？」

何を考えるよりもまず口から零れ落ちた言葉に、降谷はきょとんとしていた。

「何お前その『俺』をそのまんま見送ったわけ？ 何やつてんだよ、そこはお前、そのゴリラ的腕力をぞんぶんに発揮して『俺』を殴り飛ばすところだろうが。鼻骨や歯の数本くらい遠慮なくもらつとけよ、自分の夢ん中で可愛い子ぶつてどうすんだハニーフェイスゴリラのくせに」

「誰がハニーフェイスゴリラだ後で絶対殴るからな。……殴り飛ばすつてお前」

「殴り飛ばせよ。何ひとりで幸せな顔してんだつて」

そう言うと、降谷は鳩が豆鉄砲を食らつたような顔。

心底呆れた俺は、もうため息をつくしかない。

「俺だけ幸せになつてどうすんだよ」

ほかの皆が全員殉職し、お前も「ゼロ」として日本国家のために独りで必死に戦い、なのに俺はそれを知ることすらなく笑つていろと。そこに何の意味があるのか、お前ちよつと言つてみろと思う。

「俺そこまで薄情じゃねえわ」

たとえどんな苦難があろうと、お前らと出逢わなきやよかつたなんて絶対思わない。何が起ころうと、それだけは有り得ない。俺が、どれだけお前らを頼りにしてるか。どれだけお前に助けられているか。

「どれだけ、お前らに感謝しているか。

「……お前の夢で言うと、俺は誘拐事件に遭遇しなきやお前に逢うこともなかつたつてことになるんだろうけど」と

「だと言うのなら、俺は。

「誘拐事件の犯人にだつて感謝してやるわ」

まあそんなもん絶対に認めないけど、と最後に付け加えると、降谷はきゅつと堪えるように唇を噛みしめた。全く、この強情め。

「俺もお前もあいつらも生きてるよ。だつたら皆で笑つて皆で幸せになりやいいだろ。誰かだけなんて小せえこと言つてんなよ、それでも俺と首席を奪い合つた男か」

「……お前は本当に、普段どうやつて謙虚の仮面をかぶつてるんだ？」

「お前ほど自信家で強欲な男、僕は見たことないぞ」

「褒め言葉として受け取つとく」

寝癖のついた頭をがしがしひとかき、時計を見る。まだ夜明けを過ぎてほんの少し、普通なら朝からの出勤でもまだ寝ている時間だ。

「何か腹立つから全員にモーニングコールして起こしてやろ。俺だけ起こされるなんて納得がいかない」「だから悪かつたつて、」

スマホを手に取り、とりあえずあいうえお順で電話をかけてやろうと伊達の電話番号を選択した時、ピンポーン、と玄関のチャイムが鳴つた。だからこの早朝に、何なんだよいつたい。というかこのタイミングの良さはまさか。

硬直した俺と降谷が動けないと、チャイムの主は俺が寝ていると思ったのかピンポンピンポンとどこかのゴリラのように連打を始めた。これはもうゴリラのうちのひとりだな、ハニーフエイスゴリラの仲間のどれかだな。よし殴ろう。

外の様子を見るのも諦めてドアを開けると、そこにはひとりどころかゴリラの一団が揃っていた。

「あ、おはよう旭ちゃん、寝起き～？」

「はよ」

「ごめんな、朝に。あれ、もしかしてその靴、ゼロが来てるのか？」
「チャイム連打して悪かつたな、一応止めたんだが」

言葉の上では謝りつつも、実は少しも悪いと思つていないそいつらを前に、俺はいつもの笑顔を作つて言つた。

「全員正座して頭差し出せ。ちゃんと歯ア食いしばれよ」

*

頭にこぶを作つて正座する四人を前に、俺は仁王立ちをしていた。ちなみに降谷は俺の後ろで呑気に珈琲をしばいでいる。

「一応言い訳は聞いてやる」

早朝からうちに乗り込んできた理由を聞いたところ、何と全員降谷とほぼ同じ夢を見たのだという。それぞれ自分が死に、そしてまだ生き残っている者を見守る夢。違うのはそれぞれの視点から見ているというだけで、内容自体は本当に同じだつた。一体どんな偶然なんだそれ。

「俺ア張り込み終わりに本庁で仮眠とつてたら魔されてたらしくてな。事故から復帰したばかりだし、あんまりにも顔色が悪いってんでも帰れつて言われてよ」

「今日休みだし二度寝しようと思つたんだけどさ～。まあ、目が冴えちゃつたからついていうか？」

「俺も似たようなもんだ。今日は遅出なんでな、ちつと顔見てから出勤しようと思つただけで」

「いやあ、夢で最後に生き残ったのゼロと柊木だけだけど、俺がゼロの家行くわけにはいかないだろ？ いくつもある隠れ家のどれにいるかわからんし、なら確実にいるだろう柊木の方に乗り込むかなーつて。ちなみに出勤は午後から」

他の奴も生きてるのはわかってるけど、ほら、な？

そう言つて曖昧に諸伏は笑つた。夢の中で死んだ奴らが万が一にも現実でも死んでいたら嫌だから、とりあえず夢でも現実でも生きてる方の顔を見て現実を確認したかつたということだろうか。

揃いも揃つてリアルな悪夢を見るつて、お前らどんだけ仲が良いんだ。俺だけ除け者か。うるさい、さみしくなんかない。さすがにそんな夢見たくない。

「……お前らは生きてるし、俺は誘拐事件の被害者で女性が苦手だし警察官だし、お前らとも腐れ縁続いてるよ。何なお前ら、そんなに俺を薄情にしたいの？ 降谷に独りで働くかせて俺はのうのうと彼女つくつて笑つてるような男だとでも言いたいの？ もっぱつ殴るぞ」半ばうんざりしながらそう言うと、そいつらは失敗を誤魔化す子供のように笑う。

「ああくそ、無駄に早起きしちまつた」

「ごめんつて〜」

「欠片も謝る気ねえだろうが。……お前ら、一応言つておくが、俺確かに女性苦手は治したいけどそれは別に誰かと付き合いたいとか結婚したいとかいう意味じゃないからな」

え、と降谷も含めてゴリラどもは固まつた。

夢の内容的にもしやと思つて言つてみたが、どうやら図星だつたらしい。

「自分に苦手なもんがあるのにいまだに克服できてねえのが悔しいだけだよ。あと女性だからって理由だけで人を遠ざけるのが失礼だと思うだけだ。仮に治つたとしても、現状誰かと付き合いたいとか思つてない」

よほど好きな人ができれば付き合いたいとか思うのかもしれないが、ただ恋人という存在がほしいとは思わない。今はとにかく仕事に集中したいし、何より。

「お前らと馬鹿騒ぎしてる方が楽しい」

そう言つてやると、揃いも揃つて目をまんまるにして、破顔した。ホントもーそういうところだよ旭ちゃんてばーと笑う萩原を一発

ひつぱたき、こきりと肩を鳴らした。

「お前らどうせ朝飯食つてねえんだろ。降谷、俺の分も珈琲いれて」「やつた、作ってくれんの？」

「馬鹿言え、お前らが作るんだよ。諸伏いるしサンドイツチくらい作れるだろ。ハムとレタスと卵とチーズの使用を許可する。買いだめしたパン冷凍してあるから」

俺の睡眠削った分くらいは働け、と背を向けるとブーリングが飛ぶ。無視して顔を洗いに洗面所に行くと、諸伏が指示を飛ばす声が聞こえてきた。致命的な不器用がいるわけでもなし、料理上手が陣頭指揮を執るなら相応に食べれるものが出来上がるだろう。

「柊木、オリーブオイルある？」

「戸棚の下。お好きにどーぞ」

この後食べたハムサンドは、ちょっと驚くくらいに美味しかった。

閑話 幸福論・裏

これは、夢だ。

目の間にはいつも通りの日常がある。いつも通りでないのは、俺の目の間には何故か透明な壁があるということだけ。熱くも冷たくもない、透明なのに触れば存在は確かにある、そんな壁だ。軽く叩いてみたがなかなかに硬そうだ。

目の前の日常が色を変えていく。見慣れた五人の姿が映つた。少し幼い気がして、よくよく見れば制服を着ていた。ああ、これは警察学校にいる時の。

いつも通りじやれあう彼らを見つつ、ふと違和感を覚えた。これは、——俺がいない。学習室には五人分しか椅子がなく、降谷の隣の部屋では知らない顔が寝起きをしていた。

夢だとわかりながらも何となく不審で、嫌な予感がしながらも呑気に笑うあいつらの姿を見ていた。

と、場面が切り替わる。機動隊の隊服を着た、萩原がいた。どうやら仕事中らしい。……おい、待て、解体は終わつていないので、何故。轟音と、目もくらむ光、そして黒煙に、燃え盛る炎。

それが何を意味するのか、わかつてしまつた。はぎわら、と俺の口が動く。言葉になつたのかはわからない。

そして続く、あいつらの「その瞬間」。観覧車と、松田。拳銃と、諸伏。トラックと、伊達。——やめろ、夢でもそんなもの見たくない。また場面が切り替わる。雑踏の中に独り佇む降谷がいた。ああ、良かつた、お前は無事か。少し安堵した瞬間、気づく。その瞳にある、絶望と諦念、そして安堵。はつとして、降谷の視線の先を追つた。

そこには、俺がいた。誰とも知らない女性と、手を繋いで。

その時、唐突に理解した。あいつらが揃つて見たという悪夢、そうかこれが。激情が胸の中で暴れだす。ふざけるな、と勝手に口が動いた。

力任せに世界を阻む壁に拳を叩き込む。何を呑気に笑つてているんだ、何で自分だけ幸せな顔をしているんだ、あいつらを、なせておい

て、降谷にあんな顔をさせておいて。殴つても殴つても壁はぴくりともせず、俺の声は届かない。

また場面が切り替わる。今度は、見慣れた自分の家だつた。ただいま、と目の前の「俺」が言つた先にいたのは、――何の冗談だ。聞き覚えのある「おかえり」と、聞き覚えのない「おかえりなさい」。悪趣味にもほどというものがある。

そこには、俺の知らない「三人家族」の姿があつた。

一心不乱にその「幸せな世界」に拳を叩きつける。やめろ、そんなに幸せそうに笑うな、何で、やめろ、俺は！

「俺は、」

お前はそれでいいのかもしれない、けど、俺は。

少なくとも、「現実」を生きる俺は。

「俺は、……そんなもの、望まない！」

世界に、ひびが入つた。

*

乱暴に肩が揺らされる。馴染んだ声が、耳に届いた。

「……起きろつつてんだろう柊木！」

「……松田？」

目を開けると、訝し気な松田の顔があつた。その後ろで他の奴らも心配そうにこちらを見ている。

「珍しく転寝していると思つたら、麁されてたぞ」

「疲れてんじやないの？ なかなか起きなかつたし」

「無理はしない方がいいぞ。眠いんならせめてベッド行け」

萩原や伊達も声を掛けてくれた。諸伏の手にはブランケット。俺のために引っ張り出してきてくれたのだろう。降谷は湯気の立つマグカップを差し出してくれた。珍しい、この家にハーブティなんかあつただろうか。

「……ありがと」

まだどこか頭がふわふわしている。いつたんマグカップを口へ

テーブルの上に置き、近くにあつた松田の顔に手を伸ばした。

「あ？ ……いつ！」

「……良かったやつぱり夢か～」

「そういうのはてめえで試せこの野郎！」

松田が仕返しと言わんばかりに容赦なく頬をつねつてくる。いたいと笑いながら、溢れそうになる涙を誤魔化した。

あれは、夢だ。父さんも母さんも、もういない。それで、——それで、いいんだ。そう思つてしまふ親不孝な子供でごめん。

どうか、ふたりは俺の希望と共に逝ってくれ。俺は、ふたりの死と共に生きていく。あつたかもしれない幸福で残酷な夢より、今日の前にある残酷で幸福な現実を選ばせてほしい。

よく伸びるな、といつそ感心しながら俺の頬をつねる松田に苦笑しながら、俺は罪悪感を心の奥にしまい込んだ。

閑話 夏の六花

暑い夏にはやっぱりビールがいい。

個人的には枝豆とちくわキユウリがあればつまみはOK。でもそれだけではこの大食らいたちは満足しないので、今日は唐揚げも添えて。

「やっぱ夏はビールだねー！」

「俺たちは年がら年中ビールだけどな」

上機嫌にビール缶を空にする萩原と、やっぱり機嫌よく唐揚げを口に放る松田。同じく諸伏も唐揚げをぱくりと口に入れ、美味しい、と笑顔になつた。

「やっぱり柊木の料理は美味しいな。自分で作つたのより美味く感じる」

「お前俺に胃袋掘まれてどうすんの」

そう言うと諸伏ははつとして、これはもう柊木と結婚して飯を作つてもらうしかないと真剣な顔で宣うので思わず吹き出した。

「いや待て、そういうことなら俺がもらう。柊木のたこ焼きは俺のもんだ」

「え、ちょっと待つてよ、俺だつて旭ちゃんのお好み焼き大好物なんだけど〜？」

「はは、相変わらずモテモテじやねえか柊木」

「俺は自分より稼いでないやつと結婚する気はねえけど？」

けらけら笑う伊達の言葉をそう切り捨てるど、三人はがつくりと肩を落として見せた。すると黙つてビールを呷つていた降谷が不敵に笑う。

「つまり僕しか無理だな、柊木」

「え、降谷のとこつてそんなに儲かるの……？ 階級同じなのに……？」

特殊な部署にはいろいろあるんだよと降谷が言うと、三人は世の中金かと嘆いてみせた。お前らそろそろその茶番やめろ、おもしろいだろーが。

「まあお前ら柊木は諦めていい相手探せ?」

「うつせーお前は黙つとけ!」

「さりげに指輪見せつけんな腹立つ!」

「伊達にも婚約者がいるのになんで俺には……!」

何と言われようと伊達は揺るがない。余裕ではつはつは、と笑つて見せるそいつに苦笑を漏らす。結婚こそ延びてしまつたが、順調に交際を続けているようで何よりだ。

「でも悪いな柊木、いつも料理作らせて。集まるのもいつもお前の部屋だし」

「いいよ別に。料理は苦じやないし、場所的にもここが一番集まりやすいだろ」

俺の家は警察庁、警視庁からもそう遠くなく、皆の家からもほぼほぼ等距離だ。帰るにしろ呼び出されて出動するにしろ、ちょうどいい場所にある。

「何よりも綺麗だしな!」

「お前は部屋を掃除しろ」

掃除が苦手だという萩原の部屋は結構に酷いらしい。

顔に似合わず綺麗好きの松田が「あいつの部屋で酒飲むのは無理」と真顔で言いきつた。確かに捜査一課の萩原のデスクも、ものが多くて綺麗とは言い難い。たまに見かねて松田が軽く整理しているそうだ。お前ら本当に仲良いな。

「萩原は松田と結婚した方がいいんじゃ……?」

「やだよ、口うるさいし尻に敷かれる」

「いい度胸だハギイ……!」

お前がちゃんとしてりや俺だつて言わねえよと、そう言ひながら松田はぎりぎりと萩原を締め上げる。ギブギブと萩原は叫ぶが松田は意にも介さず、俺たちも面白いので放置。松田の言つていることは九割九分間違つてないので止める氣にもならない。

「萩原、あんまり松田の手を焼かせるなよ。お前の面倒見続けて松田が一生独身貫いたらどうするんだ」

「何それやめて、ないと言えないあたりが怖いから」

「だからお前がちゃんとすりや済む話なんだつづーの！」

「いでででででごめんつて！」

その時はきっと萩原も一生独身だな、と諸伏が言うと、萩原は嘘と叫ぶ。

そんな軽口に笑っていると、ふと降谷が外に目をやつた。

「どうかした？」

「いや、向かいのマンションの部屋、まだ七夕飾り出してるんだなと」「ああ、あの部屋は旧暦の七夕まで出してるみたいだ。去年もそうだつたよ」

なるほど、と降谷は頷く。

もう八月に入つたが、地方によつては旧暦で数えて八月に七夕祭りをするところもあるらしい。そこの住人ももしかしたらそういうところの出身なのかも知れない。

「七夕ねえ。昔短冊書いたな」「彼女ができますようにつて？」

「何でわからんの？」

図星かよ。今も同じことを書くだろう萩原はへらつと笑つた。

「伊達が書くなら『安全第一』『無病息災』か？」

「少なくとも三年は怪我できねえからな」

からかうように松田が言うと、伊達は苦笑して返した。諸伏ならなんて書くんだと伊達が降ると、諸伏は少し考えて答えた。

「気軽に外を歩きたい」

「何かすまん」

「いや、違うわ、ゼロの暴走癖が治りますように、だな」

俺昨日まで三徹してたんだ、おもにゼロの尻ぬぐいで！

そう諸伏が元気よく答えると、さつと降谷は目をそらした。オイお前今度は何壊して誰を怒らせたんだ。

「俺ホント諸伏尊敬する……」

「ああ、このバーサーカーの後始末なんて仕事、続けられるだけすげえ

わ」

「よせよ照れるだろー」

にここにこと笑う諸伏と、だらだらと冷や汗を流す降谷。

この幼馴染ズは、基本的に降谷が優勢なように見えるが、やつぱり最終的には諸伏に軍配が上がる。というか諸伏じやないともう降谷のコントロールなんてできないのだろう。

「松田の願い事は？」

「ん？ ……たこ焼き食いたい」

「それは柊木に直接言えよ」

彦星も織姫も多分困るぞそんな願い事。

伊達がそういうと、松田はくるりと俺の方を向いた。

「たこ焼き食いたい」

「繰り返すな面白いから。はいはいそのうちな」

「いつもそう言つて流すだろうが」

「じゃあ次回な」

「よし」

「えつ旭ちゃんそれはたこ焼きだけじゃなくてお好み焼きも焼いてくれるよね？」

ばつとこつちを向いた萩原にはいはい、と適当に頷くとやつたーと

萩原は両手をあげた。ああ、こいつもだいぶ酒が回ってきてている。

「松田の食い意地も相当だな」

「機動隊のとき」に胃袋拡張してから戻んねえんだよ。食つても食つても足りねえ

「それで太らないんだからさすがというか……」

「運動はしてるからな」

そう言つてまた松田は唐揚げをつまむ。いや待てよ、ちょっと見な
い間に唐揚げ減りすぎでは。松田この野郎。

「降谷と柊木は何て書くんだよ、短冊」

松田にそう言われ、ふと降谷と目を見合させた。そのまま数秒考
え、口を開く。

「降谷にエアホッケーでリベンジできますように」

俺がそういうと降谷以外はそろつて噴き出し、降谷は呆れた顔で俺
を見た。

「……それ警察学校時代の話だろ……お前実は根に持つてたのか……？」

「いや、そういうえばリベンジしてないなって」

「いつでも受けて立つぞ。次も僕の勝ちだがな」

「いや、次は俺が勝つ」

実は結構悔しかったのね旭ちゃん、と笑う萩原をよそに、俺はビールを呷った。

降谷ほど度を越した負けず嫌いなつもりはないが、楽しかったのでもう一度やりたいし、そりや負けるよりは勝ちたい。

「で、降谷は？」

「……そうだな」

何やらと考へながら、降谷はぐるりと俺たちを見まわした。それからひとつ、うんと頷く。

「自分で叶えるから短冊はいい」

またこいつはそういうこと言う。

全員で一斉にため息をつくと、降谷は何だよと驚いたように言った。何だよってそりや、お前は本当にそういうところあるよなという話だ。

「降谷つてばまたそうやつてかつこつけるんだから～」

「今抱えてる案件を無事終える、に一票」

「いや降谷だからもつとこう、日本平和的な」

「待てよ伊達、それだと俺たちを見まわした理由が説明できない」

「お前ら本気で當てにかかるな」

苦笑する降谷をよそに、諸伏がしつと爆弾を落とした。

「甘いな皆、ゼロの願いなんて『外でも俺たちに名前を呼んでもらいたい』に決まってるだろ～？」

「ヒロ！」

「あれ、違う？　じゃあ『気兼ねなく一緒に出掛けたい』？　それとも

『十年後も二十年後も一緒に酒飲みたい』？」

「それ以上言わなくて良いから！」

顔を赤くした降谷に俺たちは三秒ほど固まってにやりと笑った。

そんな俺たちを見て、降谷はひくりと頬を引きつらせる。

「そーかそーか、察してやれなくてごめんなれーくん」

「うんうん、俺たちも一緒に気兼ねなくお出かけしたいよれーくん」

「三十年後も一緒に酒飲もうなれーくん」

「早く外でも名前呼べるように頑張ってくれよれーくん」

「うるさい！」

そんな可愛い願い事、俺らが叶えてやるに決まってるだろうが。

褐色の肌を赤く染めた同期を全力でからかいながら、また皆でビールを呷つた。

数か月に一度、いつも要領よく仕事をこなす同僚兼後輩が、いつになく熱心に仕事を片づけ帰る日がある。決まってその日の次は休みか午前休を取り、また元気そうな顔をして仕事場にやつてくるのだ。

同時に彼の幼馴染だという俺の上司も、急な案件は端から片づけて時間を空けている。何をしているのかは知っていた。

「よく休めたか」

「風見さん。はい、お陰様で」

にこりと人好きのする笑顔を浮かべたそいつは、機嫌も体調もよさそうだった。

一時期の消耗具合を知っている身としては、その顔を見ると安心する。警察学校を卒業してすぐに危険な組織への潜入を命じられ、果ては身内の裏切りで死にかけたひとつ下の彼とはそれなりに親しい。自分の上司と彼が個人的に親しいというのも大きかった。

「それは何よりだ。ではこれが追加の書類」

ぱさりと紙束をデスクにおいてやると、笑顔を崩さないまま目だけ遠くなつた。ずいぶん器用なことをする。

そつとその書類を手に取つて目を通すと、あちゃーと目元を覆つた。

「……今度はビル壊したんですか……」

「……状況的に、仕方がなかつた、とは思う」

「上司だからって庇わなくていいんですよ風見さん。どうせ何の躊躇もなく壊したんでしょ」

うわーこれ徹夜だな、とその紙束を未処理の書類の山に乗せた。

危険な組織に顔がバレている以上、諸伏はあまり表だつて動くことはできない。それゆえ警視庁に閉じこもり、降谷さんの書類仕事のほとんどを肩代わりしている状況だ。その仕事量も内容もどれだけの

ものか知っているだけに、うずたかく積まれた書類を見ると本気で同情してしまう。

「……手伝うか？」

「ありがとうございますけど、風見さんだつて寝てないでしょう」

「まだ一日徹夜しただけだ」

「徹夜してんじゃないですか。いざというときにひっぱわり回されるのは間違いない風見さんなんですから、体力は温存しといてくださいよ」

それを言われると反論はできない。黙ってしまった俺を見て諸伏は面白そうに笑った。

「大丈夫です、昨日しつかり休みましたから」

「……飲み会は楽しかったか？」

「あれ、オレ飲み会だつて言いましたつけ」

「お前が定時で上がつて次の日休むときはたいてい飲み会だろう。決まってその日は降谷さんも仕事いれないようにしているしな」

それは確かにバレバレですね、と諸伏は笑い、楽しかつたですよ、と続けた。

「学生のとき並みに馬鹿騒ぎできるので、何も気兼ねせずに済んであります」

「それはいいな。しかし、そんなに仲が良い同期も珍しい」

「そうですか？ まあ気は合うんですかね」

その同期の話は聞いている。

諸伏、降谷さんと、警察学校時代に同班だったという彼ら。

警視庁刑事部捜査一課強行犯係の伊達刑事、松田刑事、同じく特殊犯係の萩原刑事。そして、警務部人事第一課の柊木監察官。それぞれ優秀と聞いているが、この柊木監察官に関しては特に公安内でも評価が高い。

何せ、諸伏の情報を流した犯人を突き止めたのは彼だからだ。

『降谷さん、諸伏の情報を流した犯人については……』

『そちらは別の人間が動いている。しばらく様子見だ』

『別の人間？ 我々公安以外の人間ということですか』

『ああ。……心配するな、あいつならやつてくれる』

『……と、いうと?』

僕がもつとも信頼する仲間のひとりが珍しく本気で怒つていてな、という電話口の降谷さんの聲音は、少し笑っていた。

『そういう職務に就いている人間が調べている。問題ない』

『……わかりました』

降谷さんにそこまで言わせる人物がいるとは、とそのときは驚いたが、それからひと月も経たないうちにその件で査問会が開かれたと聞いたときにはもつと驚いた。

たつたそれだけの期間で犯人を探し当て、逮捕の段取りを立てたというのか。しかも、警視庁内でも地位のある人間を査問会に引きずり出した結果が。

『……懲戒どころか、逮捕、送検……?』

警察上層部の主だつた人間に十分すぎる根回しを行い、ありとあらゆる証拠と証言を揃え、犯人と癒着していた者の妨害など意にも介さず握りつぶし、犯人に一言の反論も弁明すらも許さなかつた。逮捕する捜査員まで待機させていた彼の手腕には舌を巻かざるを得ない。何という徹底した潔癖すぎる正義だろう。

後から彼が降谷さんと首席を争つた同期だと聞いたときには、いっそ納得するしかなかつた。俺が心から畏怖している上司のライバルならば、なるほど優秀に違ひない。

「諸伏」

「何ですか?」

「前々から気になつていたんだが、柊木監察官はどういう人物なんだ?」

「柊木ですか? うーん……」

諸伏は少しだけ視線を彷徨わせて、口を開いた。

「魔王?」

「……ん?」

「鬼とか悪魔とかいろいろ言つてるんですが……いや、暴君? あ、しつくり來た。暴君ですね」

「……格木監察官のことを聞いているんだが？」

「だから格木の話ですよ」

確かに聞いた話では、容姿端麗品行方正、常に敬語で謙虚な姿勢を崩すことなく、笑顔を絶やさない好青年だつたはずだ。確か、完璧が服を着て歩いて^{そとづら}いるような男だと。

「ああそれ外面です。自分の有能さを知つてゐる奴なので、面倒ごとに巻き込まれないように猫かぶつてるんですよ」

さらりと諸伏は言つたが、それは俺が聞いていい話なのだろうか。風見さんは言いふらしたりしないでしよう、と諸伏は軽く笑い、続けた。

「いい奴なのは本當ですけど、親しくなればなるほど一切の遠慮をしなくなる奴で。隙あらば俺たちをこき使う暴君です。自分のテリトリーに入れた人間は全員好きなように使つていいと思つてますねきつと」

「……それでも『いい奴』なのか」

「いい奴ですよ」

全力でこき使う代わりに、自分のテリトリーに入れた人間に手を出すのは許さんんです。

そう言つた諸伏の顔はどこか嬉しそうで、自慢げで、なるほどいい友人なのだと察せられた。口ではあれこれ言つてゐるが、やはり信頼しているのだろう。

「あ、警察官的な部分を言うなら正義感は人一倍です。特に不正の類やらかす奴に対しては慈悲も容赦もなく蹴落として高笑いしますね」「高笑い……」

「デスクワーク中心の内勤のくせに腕っぷしも強くてですね。見た目からは一切想像つきませんけど降谷と並ぶゴリラです」

「ゴリラ……」

俺の中にあつた「格木監察官」が音を立てて崩れていく。

「……なかなか、……愉快そうな同期だな」

「いつか紹介しますよ。きっと風見さんには懐くと思うので」

格木の言うことなら降谷も聞くから味方につけとくといいですよ

と軽く笑う諸伏にさすがに頭を抱えた。

降谷さんに、お前に、柊木監察官、そして未だ名前しか知らない彼ら。さぞ彼らの教場を担当した警察学校の教官は大変だったことだろう。心の底から同情する。

「あはは、それはもうたくさん正座させられましたね」

「そこは一回で懲りろ」

*

「……ああ、柊木の話か」

「諸伏曰く、『暴君』だと」

警視庁に登庁した降谷さんへの報告を一通り終え、たまにはと缶コーヒーを渡された。ありがたく受け取つて軽い雑談を交わす。ふと、降谷さんにも柊木監察官のことを聞いてみようと思つて話を切り出すと、降谷さんは少し噴き出し、なるほどと笑つた。どうやら異論はないらしい。

「まあ、信頼故の言葉だろう。いい奴だよ」

「そう伺っています」

「能力的にも人格的にも非常に頼りになる。いつそ引き抜きたいくらいだ」

「多分、そう簡単には引き抜かせてくれないだろうが。

そう言う降谷さんは、本気で残念そうだつた。彼がいてくれれば、降谷さんの仕事も少しは楽になるのだろうか。そうであれば是非とも来ていただきたい。

「性格的には監察官という職務が合っているんだろうが、そもそもあいつの一番の特性は群を抜いた作戦立案能力だ。そういう意味でこちらの仕事もあると思うんだがな」

「作戦立案、ですか」

「自ら現場で走るよりは人を動かして目的を達成する方が向いている奴なんだ。警察学校の運動会で、騎馬戦があるだろう?」

「はい」

「うちの教場は柊木が全指揮を執つてな。誰ひとりハチマキを取りられることなく、敵の騎馬全員のハチマキを奪つて優勝したよ。何回戦かあつたが、全てだ。いまだに語り継がれているらしい」

「それは……」

たかが騎馬戦、されど騎馬戦。運動会の一種目のことであろうと、それほどの完全勝利はそうやすやすと掴めるものではない。

ちなみに僕は先陣を切つてハチマキを取つた、と降谷さんは得意げに笑つた。

「目立つことが基本的に嫌いな奴だし、ゼロでも十分やつていけるだろうに」

「……十分目立つ方のように思いますが」

「本人的には不本意なんだよ。今、警察のイメージを上げようと広報課が躍起になつていてるのを知つているか？」

「ああ……はい」

このところ活躍している、難事件をいつもやすく解決するという探偵たち。

ズバ抜けた頭脳に加えてかなりのイケメン揃いで、事件を解決してくれるのは有り難いと言えなくもないが、完全に警察の立場がない。しかも成人した大人ならまだしも、最近は未成年の高校生探偵とかいうのも話題になつてているとか。メディアも喜んで取り上げていて世間も完全に芸能人扱い、そして我が物顔で現場に乗り込んでくるのだから頭が痛いことこの上ない。

彼らが重んじられるにつれて、警察はどんどん軽んじられていく。警察とはそもそも社会における犯罪の抑止力でなければならない。イメージ悪化は致命的だ。

「上層もイメージアップに頭を悩ませていると」

「ああ。そこで考えられた案のひとつに、警察の広告塔を立てるといふのがあつたらしい」

「広告塔？」

「顔のいい探偵がもてはやされるなら、こつちも顔のいい警察官を出せばいいんじゃないか、という安直な案だよ」

そこで柊木に白羽の矢が立つたらしいが全力で断つたそうだ、と降谷さんは堪え切れないと言うように笑いだした。

「飲み会で延々愚痴られたよ。断つても断つても食らいついてくる広報の連中に辟易していたところに、とうとう上層からも半分命令として広告塔になるよう要請されて、そこまで言うならパワハラで査問会開いてやるとブチ切れたところを上司に止められたんだと」

「……本気で嫌だつたんですね」

「初めて辞表を書くことを考えたと真顔で言つていた」

「結局どうやつて断つたんですか？」

「彼の上司が口を利いてくれたそうだ。何とか穩便に断つたらしい」そのまま放つておいたら本当に柊木が辞めると思ったんだろうな、と降谷さんは軽く笑う。しかし、そこまで広告塔に推されるという彼の姿勢はいつたいどれほどのものなのだろう。ここまでくるといつそ気になる。目の前にいる上司も相当に顔が整っている方だと思うが、柊木監察官はそれより上なのだろうか。

「しかし、その話を一緒に聞いていた刑事部の同期たちは渋い顔をしていたよ。よほどその名探偵たちに手を焼いているんだろうな」「刑事部にとつてみれば、彼らの活躍は自分たちの無能の証明も同然ですかね。それなら探偵より先に事件を解決しろという話ですが」「まあ、そう言つてやるな。実際、必要な捜査手順を守つている刑事部にとつてみれば、それらをすべて無視して勝手に動く探偵より早く事件を解決するのは至難の業だ」

必要な捜査手順を守つて得た証拠でないと、証拠能力は認められないんだけどな。

そう言つて、降谷さんは空になつた缶をゴミ箱に落とした。

「……ああ、話がそれた。柊木や刑事部の同期についても機会があれば紹介しよう。彼らは僕の『協力者』という扱いだ、頗くらいは知つていた方がいいかもしない」

「わかりました。素性だけは把握しておきます」

「そうしてくれ」

同期のことを語る降谷さんの顔には、いつもの厳しさが一切なかつ

た。

代わりにあつたのは、確かな信頼と、友愛。諸伏と同じく警察学校を出てすぐに潜入任務に就いた降谷さんにとつて、彼らの存在がどれだけ大きいものなのか、その表情だけでわかつたような気がした。俺は降谷さんの右腕として、彼のサポートを任せられている。彼らが降谷さんにとってかけがえのない存在ならば、俺もできる限り彼らを気にしておくことにしよう。

公私のすべてを国に捧げていると言つても過言ではないこの人が、これ以上「私」を捨ててしまわないように。その両肩に国を背負うその背中を見つめながら、そう思つた。

「ところで風見」

「はい」

「先日差し入れたたこ焼き、あれは松木の手作りだ」

「……冗談ですよね？」

あの美味さは絶対に老舗の店のこだわりの味だと思つたのに。

このおふたりのおかげでだいぶ洋酒にも慣れてきた。ビールほど気軽に飲めるわけではないけれど、たまに飲む分には美味しいと思える。

「刑事部の方はどうだ」

「殺氣立つますね。まあ、当然でしょう」

直属の上司である大河内さんが話題に出したのは、最近の刑事部について。

探偵とはいえ民間人が捜査現場に乗り込んでくる現状を、やはり刑事部は快く思っていないらしい。神戸さんは肩をすくめながら答えた。

「特に昔気質の刑事さんというか、ベテランほど嫌そうですねえ。俺たちが事件を解決するんだっていう意識が強い人たちはもう怒り心頭」

「だろうな」

「まだ僕たちは現場で出くわしたことはないんですけど、杉下さんもさすがに困った顔をしていましたよ。危険も大きいですし、証拠壊されたりしたら大変ですしね」

公務執行妨害になりかねないのに、無茶をする人たちがいるものですね、と紅茶を片手に零していたと聞き、確かにと俺も頷く。

「私の同期たちも苦い顔をしていました」

「ああ、そういうしいね」

最近荒れ氣味だから見ててわかる、と神戸さんは苦笑を漏らした。

「でも、そのおかげというか、君の同期三人とも最近検挙率すこいいらしゃいよ?」

「そうなんですか?」

「うん、何が何でも民間人より先に犯人捕まえるつて意地になつてるらしくてさ。片つ端から事件を解決してるんだって。あ、もちろん無理な自白とかそういうことはさせてないよ?」

「させてたら私が責任をもつて鉄槌をくだしますよ。しかし、そうですか。頑張ってるんですね」

仕事の愚痴は聞いていたが、そこまで成果をあげているとは知らなかつた。

まあそれぞれ優秀な刑事には違いない。自分の特性を生かして、事件の解決に繋げているのだろう。同期として鼻が高い。

「確か松田刑事と萩原刑事は昇任試験受けるつて話じゃなかつたかな。この分ならいけるんじやない? 確か伊達刑事は一足先に通つてたよね」

「ええ。……ああ、道理で」

「道理で、とは?」

「彼らとの飲み会はたいていうちで宅飲みなんですが、先日の飲み会以降、うちの本棚から何冊か法律関係の本が消えていたので」

何の気まぐれかで誰かが持つて行つたんだろうとは思つていたが、あいつらが勉強用に持ち出したのだろう。試験のために勉強するとは言いにくかつたのかもしれない、特に松田は変なところで照れる奴だ。

「……竊盗罪……」

「はは、構いませんよ。試験後こつそり返されているでしよう」

ため息交じりに一言絞り出した大河内さんに、軽く笑う。

「……まあ、彼らのような刑事が上に行つた方が良いのは事実だな」

「おや、珍しく素直に褒めますね、大河内さん」

「実際、若手のわりに優秀だろう。……事件捜査に民間人を交えることに前向きな刑事よりずつといい」

「……何ですつて?」

同期が褒められたことよりも、そのあとの言葉の方が捨て置けなかつた。さすがにあいつらもそこまでは言つてなかつた。

「……進んで民間人の力を借りて事件を解決しようとする動きがあると?」

「まだ噂に過ぎん。こちらも大きく動くつもりはない」

「あー……もう大河内さんの耳にまで入つてるんですね」

不服そうにワインに口をつける大河内さんに、神戸さんが困ったようには笑つた。しかしその目には確かに、冷めた色が見える。

「ま、うちの上司も結構正義感で暴走する人だけど、彼らもそういうやないかな。ベクトルは全く違うけどね」

「……事件解決のために手段を採らないのは表に出ない警察だけで十分でしよう」

「同感だよ。困つたものだね」

これがエスカレートしたら、捜査一課総入れ替えだつてあり得るのにね。

何気なく神戸さんは言つたが、最悪それだつてあり得る。部署そのものに問題があると判断されれば、人員の刷新は当然だ。

「……柊木、しばらくは様子見だ。わかっているな」

そう大河内さんに釘を刺されでは、さすがに俺としても動くわけにはいかない。ちよつとだけ口をとがらせ、わかりましたと返すと、くすくすと神戸さんが笑つた。

「良かった、きみ一応大河内さんの言うこと聞いてるんだね」

「上司のお言葉を聞くのは当然じゃないですか。まして大河内さんならなおさらです」

「警察の広告塔になるところを救つた貸しは大きいはずだな？」

「生涯御恩は忘れませんとも」

きりつと大真面目な顔を作つて返すと、大河内さんは唇の端だけでも笑い、神戸さんは遠慮なく吹き出した。大河内さんが止めてくれなかつたら、冷静でなかつた俺は本気でパワハラ容疑の査問会を開いていた。早まらなくてよかつた。

「せつかく君、相当レベルのイケメンなのに」

「この顔は目立つ代わりに犯罪を誘発しますので」

別に自分の顔が嫌いなわけではないが、この顔目当てにストーカーが大量発生した過去があるのは事実だし、そもそも広告塔になるということは俺の存在が広く知られるということだ。万が一にも過去俺をストーキングしていた女性に俺の現在を知られるようなことはしたくない。

「……しかし、大河内さん。いくら様子見と言われても、万が一その現場を目撃してしまった場合は、さすがに黙つているつもりはありますよ？」

「ああ、それで構わん」

黙認しろと言つてゐるわけじゃない、という言葉を聞いて、安心した。話が話なだけにあまり大事にはしたくないが、見逃すつもりはないということだろう。機を待てということなら、俺も少しくらいは我慢できる。

「……」これは好奇心として聞くけど、その『万が一』のときは君、同期のことも吊るし上げるの？

「当たり前じゃないですか」

本人たちは過ちを犯してこそいなくとも、「過ちを犯す同僚を止められなかつた責任」というものがある。そりやできることなら俺だって進んで罰則を与えたくはないが、それは俺の私情に過ぎない。「私が仕事に私情を挟まないことを誰よりも知つてゐる奴らです。そんな私に付け入る隙を与える方が悪いんですよ」

何の気なしに手元の洋酒に口をつけると、神戸さんが苦笑したのがわかつた。大河内さんは当然と言わんばかりの態度でチーズをかじつて いる。

「うん、愚問だつた。ごめん」

「いえ」

俺としても、そうならないことを祈つてゐるのは事実ですから。

そう続けると、神戸さんもひとつ頷き、大河内さんは小さくため息をついた。

「……もう一杯どう？　付き合うよ」

「では、お言葉に甘えて」

どうも今日の酒は、いつもよりほろ苦い。

*

飲み会の帰り道、終電をホームで待ちながら松田と萩原にメツセー

ジを送る。

『窃盗犯に告ぐ。持ち出した本は試験終了後に返却するように』
ふたりとも手が付いていたのか、すぐに既読がついた。ぴこんと軽い音がして返信が届く。

『バレたか』

『ごめーん♡』

ちつとも悪びれない様子に苦笑しながらメッセージを作った。

『昇任できたら許してやる』

実際本当に、優秀な奴らだと思うのだ。

松田は現場の状況や証拠を、論理的につなぎ合わせていくのが得意だ。事件現場という「結果」に向けて状況がどう動いてきたのかを推理する力がある。

萩原は状況より人を見て動くタイプだ。関係者の表情や目線、仕草から情報を読み取り、それぞれの関係性や隠し事の有無を見抜いて真相に近づいていく。

もちろんすでに警部補になつた伊達も、経験値からか目の付け所が良く、常に正しい方向に着実に捜査を進めていく。関係者から重要な証言を引き出すのも上手い。

上に行くなら、ちゃんと能力と正義感を兼ね備えた、彼らのような警察官がいい。

『わかってる』

『ちゃんと勉強するつて〜』

座学も別に苦手な奴らではない。面接も何とか上手いこと取り繕うだろう。

しかも最近の活躍ぶりがめざましいというのなら、過去のいろいろを差し引いてもおそらく昇任は難しくない。

『お礼にビールと小麦粉と豚肉つけて返すね おまけにイカもつけちやう♡』

『仕方ないから俺もビールと小麦粉とタコつけて返すわ』

『お前ら露骨にもほどがあるだろ』

作れつてか、俺にお好み焼きとたこ焼きを作れつてか。どこまでも

ブレンの彼らに、思わずひとりで苦笑する。

『昇任できたら作つてやるよ』

『やつた！』

『任せろよ』

彼らが上に進み捜査一課の暴走を止めてくれることを祈りながら、俺は終電に乗り込んだ。

「まず、これを見てくれ」

珍しく降谷に警視庁の会議室に呼び出された。

何があつたのかと来てみれば、顔をそろえた同期たち。スーツに身を包んだ降谷に渡された書類にざつと目を通し、なるほどと膝を打つ。

「安室透の生い立ち設定か」

「ああ」

降谷が潜入に使っている『安室透』。

諸伏曰く降谷とは似ても似つかない性格だそうだが、降谷としてはそれなりに使いやすく、重宝しているという。

「これから僕は、『安室透』として毛利小五郎に接触し、しばらくはその近辺で潜入を続ける」

「毛利小五郎って、あの毛利探偵か」

思わずと言つたように、伊達が口を挟んだ。

最近高校生探偵が鳴りを潜めたと思ったら、急に台頭してきた名探偵『眠りの小五郎』。卓越した推理力で次々と難事件を解決し、その推理ショーのスタイルがまるで眠っているかのように見えることからそんな風に呼ばれているらしい。

伊達と松田は面識があるようで、あのおっさんかと少し困った風に零している。

「ああ。間違わないでほしいのは、僕が潜入している『組織側の立場』からさらに毛利探偵の付近に潜入するということだ」

つまり、組織側が毛利探偵に目を付けている、と。

どういう関係なのかは知らないが、民間人の立場であんなに派手に立ち回つているんだ、相応に恨まれたり変な情報を握っていたりしてもおかしくない、が。

「つまりその組織的に、お前が毛利探偵の付近に潜入することによつてメリットがあんの?」

「詳細は言えない」

「別に毛利探偵が黒だと言つておると、苦笑した諸伏が一応と言う感じで口を挟んだ。

「別に毛利探偵が黒だと言つておると、苦笑した諸伏が一応と言う感じで口を挟んだ。

「別にあのおっさんが黒だとは思っちゃいねえよ」

「まあ、いろいろ言いたいことはあるが、悪い人じやねえんだよなあ」

不満そうに言う松田と、苦笑する伊達。

以前騒がれた高校生探偵に比べれば、きちんと公安委員会に認可された職業探偵である毛利探偵に活躍された方がまだマシといつぞや漏らしていたのが思い出される。民間人は民間人だし推理ショーや頂けないが、それ以外は比較的にまともな人だと伊達も言つていた。

それで、と萩原が口を開いた。

「毛利探偵の付近に潜入つて、具体的にどうすんの？」

「いくつか候補はあるんだが、話の流れもあるからな。確定したらまた連絡するが、この設定は基本的に変わらないからしつかり頭に入れておいてくれ。というかその書類は回収するから今ここで覚える」「うえ、マジで？」

「しつかり頼む。何せ、」

失敗したら僕が死ぬからな。

冗談になつてない冗談を言う降谷の頭を、すっぱーんといい音をさせて諸伏がひつぱたく。

「笑えない冗談はさておき、よろしく頼むな？」

「ヒロ……！」

「何？」

にこつと笑う諸伏に、降谷はうつと言葉を詰まらせた。今のはお前が悪い。苦笑しつつ目を通した書類を降谷に返した。

「もういいのか？」

「ああ、覚えた。で、肝心の俺たちとの関係性はどう説明する気なんだ？」

「数か月前に僕の『探偵の仕事』の関係で遭遇した、で十分だろう。そうすれば守秘義務が発生するからお互いに詳細は言わずに済む。そ

れで友人関係に発展した

「表向きはそれで充分だろうが、お前の潜入してゐる組織的に大丈夫なのか？」

松田の指摘に、軽く降谷は首を振つて答える。

「組織には『日本警察の情報を手に入れるため』とでも言えば済むさ。組織内での僕の立ち回りは情報収集役だからな。むしろそういう意味では、警察官の友人をもつていることはメリットにすらなりえる。……まあ当然、僕の正体がバレればお前たちにも危険が及ぶ可能性はあるが」

「何をいまさら」

「同感」

「お前がバレなきやいい話」

「そういうことだな」

何の気なしに揃つて答えると、降谷も諸伏も笑つた。お前たちの所属を聞いたときからとつくに覺悟はできている。

「また、詳細が確定次第連絡する。頼むから本名で呼んだり、僕と『安室透』のギヤップで笑わないでくれよ。特に萩原」

「何で俺だけ名指しなのよ降谷ちゃん」

「お前は気分で僕たちの呼び方変えるから」

「そりやそうだけど間違わねーわ！ ねえ旭ちゃん！」

「はいはいそうだな」

何やら訴えてくる萩原を片手で止めながら、今後のことを考える。毛利探偵は確か元刑事という話だ。軽く調べておくことにしよう。

『安室透』潜入成功の連絡が飛んできたのは、それから二週間後のことだった。

* * *

この喫茶ポアロで一番お客様が少ないので、ちょうどティータイムが終わる今くらいの時間。もう少し時間がたつと、少し前に入つたイケメンスタッフを目当てに立ち寄るJKの皆様が来店されてまた賑

やかになる。

今のうちに店内の片づけを済ませておかなければとテーブルを拭いていた時、かららんと来店を告げるベルが鳴つた。

「あ、いらっしゃいま、せ」

お客様に目を向けて、思わず一瞬固まつた。

無造作ながらも整えられた黒髪に、すっと通つた鼻先。意志の強そな瞳はよく見れば長い睫毛に縁どられ、ゆるく結ばれたうすい唇が理知的な印象を与えていた。手足も長くスタイルもいいが、何より姿勢と所作の美しさが品の良さを感じさせていた。

まさに安室さんに並ぶイケメン。何この人すつごいかっこいい。

「……？」

初めてのご来店なのか、店の中を軽く見渡して不思議そうな顔をされていた。何とか頭の中を仕事モードに切り替え、笑顔でお客様をお迎えした。

「一名様ですか？ カウンターにどうぞ」

「……どうも」

少しそつけない声で返事を返し、目が合わないままカウンターに座つた。そのままブレンド、ホットで、とぼそりと咳き、持つていた鞄から文庫本を取り出す。

そんななんてことない動きまで様になるつていケメンすごい……とい感心しながら、ご注文をお受けしてポアロが誇るイケメンに声をかけた。

「安室さん、ブレンドひとつお願ひします」

「はーい」

倉庫から補充の珈琲豆を持つててくれた安室さんの愛想のいい返事が響く。ひよいとカウンターに顔を出し、お客様の顔を見て笑みを深めた。

「いらっしゃいませ。来てたのか」

「ああ。お疲れ」

どう見てもお知り合いであるようで、なるほどイケメンの友達はイケメンなのかと奇妙なほどの納得感。ついおふたりを眺めていると、

安室さんと目が合った。

「？」

どうかしましたか、と言わんばかりの態度で首をかしげる安室さん。そうだ、お客様がどんなにイケメンだらうといつもと変わりなく仕事しなくては。

無理やりふたりから視線を外し、気になる心をおさえながらまたテープルを拭く作業に戻る。

結局そのお客様は、小一時間ほど珈琲を片手に読書をされてお帰りになった。

時折一言二言安室さんと言葉を交わしていたようだけど、できる限り耳に入れないように心掛けたので内容はわからない。お客様の話を聞こうとするなんて店員失格。いつもと同じように働くよう心掛けたけれど、ちゃんとできただろうか。

「すみません梓さん、お掃除お任せしてしまつて」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

「さつきの、友人なんです。僕が働いていることを聞いて、来ててくれたみたいで」

「そうだったんですね」

安室さんがどことなく嬉しそうな顔をしているので、きっと本当に仲の良いお友達なのだろう。あまり私生活の見えない人の意外な一面を見たようで、少し嬉しい。

「特定のお客様にこういう言い方、あんまり良くないのかもしれませんけど……ものすごいイケメンでしたね……」

真剣な顔でそういうと、安室さんも真剣な顔で答えてくれた。

「多分、僕が人生で出逢った中で一番のイケメンだと思います。正直、芸能人やモデルも目じゃないですね」

「むしろモデルと言われた方が納得します」

「ははは、彼、あれでも公務員ですよ」

「公務員」

あのルックスに公務員なんて、さぞおモテになることだろう。そんな考えが顔に出ていたのか、安室さんは苦笑して言った。

「いろいろお察しの通りだと思います」

「あ、ごめんなさい。……けど、この時間帯で良かつたですね。もう少し遅かつたら安室さん目当てのJKたちが……」

「ええ、だからこの時間に来たんだと思いますよ。彼はあまり騒がれることが得意じゃないので」

安室さんの言葉に、確かにと頷く。あまり愛想のある人ではなかつたし、女の子に囲まれてにこにこするタイプには見えなかつた。

「……最初、あまりのイケメンに動搖してしまつて……店員失格です」

「そんな。しつかりお仕事されていたじゃないですか」

「イケメンは安室さんで慣れていると思つていたのに……！」

「はは……光栄ですが」

彼も気にしていませんでしたよ、という安室さん。

「多分また来てくれると思うので、その調子でお願いしますね」

「はい！ 次は絶対『いらっしゃいませ』をどもつたりしません！」

「さすがは梓さんです」

む、と決意表明をすると、安室さんはどことなく嬉しそうに、安心したように笑つた。

やはり、この人は真面目で仕事熱心な女性だ。おおよそ予想通りの展開に、内心安堵する。

あえて柊木には、このポアロに女性の店員がいることを伝えていたかった。あの女性恐怖症がどれだけひどいものかはよく知っていたが、梓さんは（自分で言つてなんだが）僕の顔の良さを理解しながら特に興味をもたない稀有な女性だ。仕事熱心で、勤務中に特定の客に何かしらのアプローチを起こすこともまずない。

つまり、柊木のリハビリにちょうどいい相手なのだ。

『……せめて心の準備くらいさせといてくれないか……』

小声で泣きごとを漏らした柊木に、「安室透」の顔を崩さないまま何のことかわからないという風に笑顔を向ける。不貞腐れたように唇

の端を下げる柊木が面白い。何とか微笑みは保つたまま珈琲を差し出したが、内心で笑っているのを察したのか柊木はさらに苦い顔。気を抜いた柊木の表情筋は、実はわりと素直だ。

『心配するな、俺の顔にも動じない珍しい女性だよ』
『自分で言うか。……まあ、きやーきやー言う人じやないのはわかつたけど』

『そのあたりは保証するよ』

そう言うと、柊木は自身を落ち着かせるように珈琲を口に含んだ。そして少し驚いたように瞬きをひとつ。どうやらお気に召したらしい。

『まあ、ゆっくりしていけよ。店が賑やかになるまでもう少し時間があるから』

『……そうさせてもらう』

少々居心地悪そうにしながらも、柊木は持っていた本を開いた。家の外で安らげる場所が少ない柊木も、とりあえず僕がいる間はこの店に通ってくれるだろう。お節介は重々承知で、自身の女性恐怖症を治そうと細々と努力を続けていた柊木の助けになればいい。柊木にポアロのことを教えたのは、そういう思惑もあつてのことだった。「あ、安室さん、そろそろJKの皆さんがいらっしゃる時間ですよ！ハムサンドの仕込みお願いします！」

もう柊木から頭を切り替えて仕事を考えている彼女に感心しつつ、わかりましたとカウンターに引っ込んだ。

あれ以来安室さんのお友達だという超絶イケメンさんはふらりとポアロに来てくれるようになつた。決まって安室さんが出勤の日の、人の少ない時間帯。ブレンンドを一杯だけ頼んで、本を片手にのんびりと過ごされている。

相変わらず少しそつけなくて目も合わないけれど、決して邪見にはされないし使った後のカウンターはいつも綺麗。それにお帰りになるときは必ず「ごちそうさま」の一言。ちゃんと話したことはないしお名前も知らないけれど、間違いないいい人だと思う。

もちろんお客様に対して個人的に親しくなりたいなんて思わないけれど、ここまで来たらファンというか目の保養。ご来店されたらちょっとだけ嬉しくなるのは仕方がないと思う。

仕事の帰り道にそんなことを考えていたら、思い浮かべていたその人によく似た後ろ姿が視界の端をよぎつた。

「……あれ……？」

スースを着たその人のすぐ傍には、見知らぬ女性の姿があつた。

かららん、と軽やかな音が店内に響く。

入ってきたのは梓さん曰く「目の保養」の同期だった。

「いらっしゃいませ」

「あ、いらっしゃいませ！」

僕の声に続いて梓さんも柊木に入店の挨拶をする。

いつもなら目も合わせないままブレンンド、とだけ言ってカウンターに座るのだが、今日は違つた。意を決したように梓さんに目を向けて、口を開く。

「……先日は、ありがとう」

あの柊木が、プライベートで、ぎこちないとはいえ自分から女性に

笑いかけた。

あの、「あえて言うなら好みのタイプは俺に興味をもたない人」「俺を合コンに巻き込んだ瞬間本気で縁を切る」と真顔でほざいていた柊木が。

ここで手に持っていた皿を落とさなかつた僕は偉いと自分で思つた。

「そんな、お気になさらないでください。カウンターどうぞ」

「……ブレンドで」

「はい！」

どこか嬉しそうな梓さんに安室さんお願ひします、と言われてやつと僕は正気に戻つた。今見ていた光景はなんだ、夢か。

「は、い。……梓さん、彼と何か？」

「大したことではないんですけど、先日偶然外でお会いして」

「いえ、大したことないわけがないんです。僕は彼がプライベートで女性に笑いかけるのを初めて見ました」

「そんなんに？」

梓さんが驚いた顔を見せるが、事実だ。

もちろん何とか取り繕わなくてはならない事態の時は別だが、柊木が自分の意志で女性に笑いかけたのは僕が知っている限り初めてだ。

氣まずそうな顔をした柊木は、拗ねたように口を開く。

「……情けないことには助けられたんだ。礼儀くらい心得てる」

「助けられた？」

「…………逆ナン」

項垂れるようにうつむいた柊木に全てを察した。普通の野郎相手であればそれくらい自分で何とかしろと思うが、柊木なら仕方がない。

「……友人がご迷惑をおかけしたようで、すみません、梓さん」

「いえ！ こういう言い方するのもなんんですけど、結構……その、しつこい人だつたみたいですし。お酒も飲んでたみたいで、なかなか諦めてくれなくて

「それで見かねて助けてくださったんですね。……だつたら菓子折り

のひとつくらい持つてこないか

「もう、安室さん！ こうしてまた来てくださいただけで十分ですよ！」

気まずそうな顔をしつつも、柊木の顔に嫌悪感は見えない。

なるほど、梓さんとの接触はリハビリになるかもと思っていたが、本当に良い方向に進んでいるらしい。それならここらでネタ晴らしをしておいた方がいいだろう。

「梓さん、改めて、僕の友人の柊木旭です。ちゃんと紹介していませんでしたね」

「……柊木です」

「あ、榎本梓です。柊木さんて仰るんですね」

「ええ。以前柊木について、騒がれるのが苦手、とお話したと思いますが、正しく言うと女性が苦手なんです」

え、と固まる梓さんに、安室、と慌てる柊木。

騒ぐ柊木を無視し、僕は「安室透」の笑顔のまま続けた。

「ナンパの類は特にダメでして。助けて頂いてありがとうございます」

「そ、それはいいんですけど、それじゃ私あんまり接しない方がいいんじゃないや……！」

「いえ、梓さんはちゃんと店員とお客様としての距離を考えてくださいでしょ？ だからリハビリにもなると思って、彼をポアロに呼んだんです」

勝手なことをしてすみません、と頭を下げる梓さんは頭をあげてください、とわたしと手を振った。

「私は構いませんけど、むしろ何かご不快なことを……！」

「それはない。……安室」

「何か失礼がある前に伝えておいた方がいいと思わないか？」
「……せめて伝え方ってあると思うんだが」

苦々しい顔の柊木を笑顔で黙らせる。

「柊木も梓さんにはだいぶ慣れたみたいですね。懐かない犬だとでも思つて気軽に接してやつてくださいね」

「誰が犬だ」

「えええええ……」

「榎本さん、ごめん、安室の言うことは気にしないで」

おつと、また柊木から梓さんに話しかけた。これは経過も上々、あとであいつらにも連絡しておこう。

「あの、本当にご不快じやありませんか？」

「不快だつたら店に来てない。……あんまり距離が近かつたり、触れたりしない限りは、大丈夫。苦手なのは……たとえば安室目当てに通つてるつていう学生さんたちとかの、そういう感じだから」

「ああ……」

納得したように、そして少し同情したように梓さんは頷いた。モテすぎるのも考え方のよねとか考えているんだろう。大正解です。

「……目を合わせるのも、得意じゃなくて、……申し訳ない」

「いえそんな、お気になさらないでください。……でももし何か不手際がありましたら、遠慮なく仰ってくださいね」

「そんなことは今後もないと思うけど……お気遣いありがとう」

とりあえず次の課題は、そのぎこちない笑顔を取り繕うところだろうか。

ちなみにこの後、柊木が誤解を生む連絡を回したらしく、俺のスマホには四人からのメッセージが届いていた。

『柊木から降谷がいじめるつてメッセーージ来たんだが、お前何やったんだ?』

『いじめかっこ悪い』

『せんせー！　れいくんがあさひちゃんをいじめてまーす！』

『いくら疲れてるからつて柊木に八つ当たりはよくないよ？』

どうやら俺が今日のことをこいつらに報告することを見越して先手を打つたらしい。若干苦笑を漏らしつつ、俺は返信のメッセージを打ち込んだ。

『断固として無罪を主張する』

後で詳細を伝えれば、多分こいつらも面白がつて柊木をポアロに引

きずつてくるだろう。女性とともに会話をする素の柊木なんてレアすぎる。

他の同期たちがポアロに乗り込んでくる日も近そうだと笑みをこらえつつ、俺はスマホをポケットにしまい込んだ。

＊＊＊

「梓さん！ 何で教えてくれなかつたの？」

「ど、どうしたのいきなり」

店に飛び込んできた元気なお客様に、思わず後ずさる。

その後ろに常連のお友達と、いつもの男の子。ポアロの上の階に住んでいる彼女たちはよくこの店にも顔を出しててくれる。その親友だという彼女もすでに顔見知りだった。

「もう、園子、迷惑でしょ！」

「だつて蘭！」

いつも元気なお客様ではあるけど、今日は何やらあつたようで。教えてくれなかつたって、いつたい何のことを指しているのだろう。

「ほら梓さん、これ見て！」

ずい、と目の前に出されたのは、彼女のスマートフォン。

表示されているSNSには、誰ともわからない咳き声ひとつ。

『ポアロに超絶イケメンがふたり！ 店員さんは知つてたけど、お客様らしきもうひとりも超イケメン！ 店員さんと仲良さそうに話してたし、友達かな？』

さすがに写真はついていなかつたが、誰のことかすぐにわかつた。

さあつと血の気が引くのを感じる。柊木さんがいらっしゃるのはいつもほとんどお客様がいないときだつたけど、もしかしたら店の外からでも見ていたのかもしれない。

おそらくこれこそ、柊木さんが本気で嫌がる類のもの。

「これ、誰のこと？ 梓さんなら知つてるでしょ？」

「え、えつと……。……と、とにかく、お席にどうぞ？」

園子ちゃんは決して悪い子ではないのだが、イマドキの子らしいと

いうか、イケメンが好きでミーハーなところがある。暴走しがちなどころもあるから、うまく誤魔化さないと柊木さん目当てで店に通いかねない。

何と説明したものかと考えていたところ、安室さんが休憩から帰つてきた。

「ああ、皆さん。いらっしゃいませ」

「安室さん！　こんにちは！」

「はい、こんにちは。今日もお元気ですね」

にこりと安室さんが笑うと、園子ちゃんはまたきやあきやあと歎声を上げる。

ここは私よりも安室さんに何とかしてもらおう。柊木さんの友だちならきつとベストな対処もわかっているはず。

「あ、安室さん……！」

「？　どうしたんですか？」

「ねえ安室さん、これ見て！」

またずいっと突き付けられた眩きを、安室さんの目が辿る。そして納得したように苦笑した。

「なるほど」

「安室さんの友達？」

「多分、そうだと思います。参ったな、こんな風に情報が出回るなんて」

「……へえ、本当に安室さんのお友達なんだ！」

それまで興味なさそうにしていたコナン君が、驚いたように声をあげた。抑えきれない好奇心が顔に出ている。

「酷いなコナン君、僕にだつて友達くらいいるよ」

「えへへ、ごめんなさい」

まあコナン君の気持ちもわからなくはない。

安室さんは探偵という職業もあつてか、自分のことはあまり語ろうとしない。いつもにこやかでスマートに仕事をこなす姿を見ているだけに、柊木さんと親し気に話している姿を見るのは何だか新鮮だった。

「その友達って本当にイケメン？ ポアロにはよく来るの？」

「まあまあ、落ち着いてください園子さん。顔は整っていると思いますよ。ポアロにもたまに来てくれます。けど、いつも人の少ない時間帯を見計らって来るので、なかなか皆さんと会うことはないかもしませんね」

「そんなあ……！」

がつくりと肩を落とす園子ちゃんに、蘭ちゃんはもう、と少し怒った顔をする。

「ダメだよ園子、ポアロにもその人にも迷惑になっちゃう」「だつて超絶イケメンって気になるじゃない……！」

「……そんなにかつこいい人なの？」

ぽろりと零れたコナン君の疑問に、思わず安室さんと目を見合わせた。そんなにかつこいいというか、何というか。そんな言葉で片づけていいのか疑問だというか。

「……安室さん」

「ええ、正直に言つて構いませんよ」

「下手な芸能人やモデルなら目じやないくらいかつこいいの」

ええつと園子ちゃんと蘭ちゃんは声を揃えた。

彼女たち的好奇心を煽るようなことは言わない方がいいのだろうけれど、安室さんの許可も得たから！ 正直に！ だつてあんなイケメン絶対そうそういない！

「正直、安室さんとあの人人がお店にいるだけで絶対ポアロの売り上げが違うと思うんです。絶対ご本人には言えませんけど」イケメン相乗効果ですさまじい客数になるに違いない。いやでも、皆テーブル占領してお店の回転が悪くなるからむしろ売り上げダウンか。難しいところ。

「まあ、もし機会があれば紹介しますよ」

そう苦笑する安室さんに、園子ちゃんは絶対だから、と鼻息を荒くしている。柊木さんに遭遇したら大変なことになりそうだ、と少し頭が痛い。

「ねえ梓さん、その安室さんのお友達って、どんな人なの？ お仕事は

？」

「うーんコナン君、あんまりお客様のことはお話しできないなあ」

「あ、そつか。ごめんなさい」

「ごめんね、と笑いかけると、コナン君も僕もごめんなさい、と笑つてくれた。

お客様の個人情報を簡単にお話するのは店員として失格。というか私も公務員つてことしか知らない。

「気になるのかい？ コナン君」

「え、あ、……う、うん！」

「じゃあ特別に教えてあげよう。彼はね、」

警察の人だよ。

安室さんがこりと笑いながらそう言つた瞬間、コナン君がぴたりと固まつた気がした。

「警察の人って、刑事さんですか？」

「いえ、彼はあまり現場には出てこない部署の人なので、蘭さんたちとも面識はないと思いますよ」

「そうなんですね」

イケメン警察官かく会つてみたい、と叫ぶ園子ちゃんに苦笑しつつ、私はすっかり取るのを忘れていたオーダーを尋ねた。

＊＊＊

梓さんが持つてきてくれたオレンジジュースに口をつけながら、考える。

ベルツリー急行の一件で、安室さんが黒ずくめの組織の仲間、バーボンだということはわかっている。その安室さんの友人と言うだけでも怪しいのに、まさかの「警察の人」。どこまで本当のことかわからぬが、調べる価値はある。

「せつかくの手がかり、逃してたまるかよ……！」

ぼそりとそう呟くと、ささやきを拾つた蘭に聞き返される。何でもないよと子どもらしく笑つて、俺はその人に接触する術を摸索し始め

七

安室さんの友人だという警察官と接触を図ろうと、それから折を見てはポアロに足を運ぶようになつた。学校の帰りに必ず窓の外からそれらしき人がいないか覗き込んで確認するが、なかなかターゲットは現れない。

さりげなくその人のことを聞いてみるが、やはり来店しているのは平日の昼間。さすがに学校をサボるわけにもいかず、俺は頭を抱えていた。せめて名前がわかれれば調べようがあるのだが、梓さんは客の個人情報を漏らすようなことはしない。

手詰まりかと思っていたところに、チャンスが降ってきた。

「コナン君、確かに来週学校の創立記念日よね？」

「！　うん」

そうか創立記念日、平日なのに堂々と休める日がある。

「悪いんだけどその日、私は学校だしお父さんも仕事があるみたいだから、お昼はポアロで食べててくれる？」

「うん、わかつたよ蘭姉ちゃん！」

「外に遊びに行つてもいいけど、ちゃんと夕方には帰つてくるのよ？」
「はーい！」

よし、しかもポアロに行く口実までできた。その日にターゲットが現れるかはわからないが、少しでも希望があるなら賭けるしかない。俺は決意を込めてぐつと両手を握りしめた。

＊＊＊

かららん、とドアベルが鳴り響く。

最近たまに会話ができるようになつた目の保養のお客様が、少し眠そうな目をしながら店に入つてきた。

「いらっしゃいませ。あれ、今日安室さんいませんよ？」

「知つてゐる。最近忙しいみたいだな」

ブレンンドよろしく、と言を落として柊木さんはカウンターに腰かける。

安室さんがいない日に来店されたのはこれが初めてだ。それだけポアロに親しんでくれたのかと思うと、何だか嬉しくなる。

「そうだ柊木さん、SNSのこと聞かれました？」

「ああ……安室に聞いた。気にしないで、こう言つてなんだけど、慣れてる。盗撮もなかつたし名前が広まつてるわけでもないから」

「慣れて……るんですか……」

「残念ながらね」

柊木さんは少し肩をすくめて文庫本を取り出した。

おつと、長話は厳禁。すつとカウンターに引っ込んで、ブレンンドの用意を始めた。

するとまた、かららんとドアベルが鳴る。入ってきたのは、最近特によく姿を見かける好奇心旺盛な男の子だった。

「あらコナン君、いらっしゃい」

「ここにちは！」

「今日、学校は？」

「創立記念日でお休みなんだ。だからポアロでごはん食べなさいって蘭姉ちやんが」

「そうだったの」

道理で今日は道を通る子供さんが多かつたわけだ。

今日はポアロで本読んでもいいかな、と尋ねるコナンくんにもちらんと頷く。この子はお店で騒ぐようなこともしないし、いざ店が混みだしたらそつと家に帰ってくれるとても頭の良い子だ。たまに本当に小学一年生なのかと思うほど察しのいい子なので、私も安心してOKを出せる。

「ありがとう！ 横オレンジジュース飲みたい！」

「はーい。お好きな席に座つてね」

うん、と店内を見渡したコナン君は、ふと柊木さんに視線を向けてぴしりと固まる。うんうん、わかる。小学一年生の男の子が見ても絶対かつこいいよね柊木さんは。

その視線に気づいたのか、柊木さんも本から視線を外し、コナン君に顔を向けた。

うわ、本当にすごいイケメン。その人を見た第一印象はそれだつた。

カウンターの端に座つて文庫本を開くその姿は、一枚の絵画かといふくらい様になつてゐる。ただそこにいるだけで目を引いてしまう造形と存在感には圧倒されるものがあつた。

同時に、直感する。きっとこの人が、安室さんの友人の「警察官」。このチャンス、逃すわけにはいかない。

「ここにちはつ」

「……ここにちは。坊や、ひとりか？ 学校は？」

「今日は学校の創立記念日で休みなんだ。家人出かけちゃつて、ポアロでござはん」

「ああ、なるほど」

うん、と元気に返事をすると、梓さんが苦笑して間に入る。

「こーらコナン君、お客様のお邪魔しちゃダメでしょ？」

「構わないよ。……ひとりでいるのもつまらないだろ。座るか？」

梓さんを制して笑みを浮かべたその人は、本当に優しそうな人に見えた。

わーい、と言つてその人の隣の席に飛び乗るが、その人は気にした様子もない。

「僕、江戸川コナン。この上の小五郎のおじさんに預かつてもらつてるんだ」

「へえ、毛利探偵の。俺は柊木旭。いい名前だな、コナン君」

ひいらぎ、あさひ。

ありがとう、と答えながら、その名前をしつかりと脳に刻み込む。次にいつ顔を合わせができるかわからない以上、できるだけ情報引き出さなければならない。

「ねえねえ、柊木さんてここで働いてる安室さんのこと知ってる?」

「? 友達だよ」

「やつぱり!」

俺のこと知ってるの、と柊木さんは不思議そうに尋ねた。いや、あんたのことは超絶イケメンとしてすでに知られてるぞとはさすがに言えない。

「安室さんがお話してくれたよ。すっごくかつこいい、警察のお友達がいるって!」

柊木さんのことだよね、と反応を窺う。

しかし柊木さんは、特に動搖も見せずじやあ俺のことかな、と苦笑した。「警察」を否定はしなかった。どうやら本当に警察関係者らしい。

「どんなお仕事してるの?」

「……そこで仕事の中身聞くあたり、警察に詳しいのか? たいていの子は、警察官って言つたら刑事か交番のおまわりさんを思い浮かべるのに」

「僕、ミステリー大好きなんだ。警察の人が出でくるお話も読んだから、少しあはわかるよ」

そつか、たくさん本を読んでるんだな、と柊木さんは淡く微笑んだ。つまり刑事でも交番駐在員でもないらしい。警察と一口に言つても相当幅は広い。いつたいこの人は、どういう立場の人なのだろう。さらに聞き出そうとしたとき、背後で来店のベルが鳴った。

「コナン君、ちょうど良かつた」

「え、……高木刑事と佐藤刑事!」

「突然悪いね、こないだの事件で預かつた証拠品を返そと……ひ、柊木監察官!」

俺の隣にいる人を見た瞬間、高木刑事は文字通り顔色を変えた。佐藤刑事とふたりでばつと敬礼の姿勢に入る。

監察官、とつい口の中で繰り返した。

「……あー、いえ、私は今日休みなので。そうかしこもらないでください」

「し、しかし……」

「と言ふかやめてください、民間人の前ですよ」

困つたように言う柊木さんは、特に慌てることなくふたりを窘める。

失礼いたしました、とふたりは敬礼を解くと、柊木さんはやれやれと言わんばかりに首を振った。

「……柊木さんって、監察官なの……？」

「まあね」

「こ、コナン君、柊木監察官とお知合いかい……？」

「今日初めてお話したよ」

そ、そうなの、と佐藤刑事にしては珍しく歯切れの悪い返事が返ってきた。

とにかく、と高木刑事は以前の事件の関係で警察に預けていた証拠品を俺に渡し、お休みのところ失礼いたしました、とまたひとつ敬礼をしてポアロから出て行つた。

ぽかんとしていた梓さんが、思わずという風に口を開く。

「……監察官つて、どういうお立場なんですか……？」

「警察官の不祥事を取り締まる仕事。まあ警察の警察というか警察の警察！　へえ、そういう部署もあるんですね！」

「エリートの人がいるところだよね？　柊木さん、偉いんだ」

そうでもないよ、と柊木さんは軽く流すが、そんなことはない。

出世を約束された人が通る道だし、見たところ柊木さんは二十代からせいぜい三十代前半。普通そんな若い人が配属されるような部署ではないはずだ。

「高木刑事も佐藤刑事もあんなに畏まつてたのに？」

「あのふたりは階級も歳も下だから。警察は上下関係にうるさいんですよ」

「ふたりのこと知ってるんだ」

捜査一課に同期がいるから噂くらいはね、とそう言つて珈琲を飲みほした柊木さんは、ちらりとポアロの時計を見る。

一瞬考えるそぶりを見せ、そのまま伝票を手に取つた。

「そろそろお暇するよ。またな、コナンくん」

そう言つてぽん、と俺の頭に手を置いた柊木さんは、会計を済ませてポア口を出て行つた。追うに追えないまま背中を見送り、改めてカウンターに座りなおす。頭の中の情報を整理するよう目を閉じた。あまりきちんと話はできなかつたが、収穫はあつた。

あの若さで、監察官。相當に警察内で評価されているということだろう。そして監察官なら、警察内部について得られる情報量は他よりも多いはず。ある程度の機密情報も得やすい立場だ。そんな人が、バーボンと「友人関係」。

いくつか可能性は考えられる。まず、バーボンの正体を全く知らないまま黒ずくめの組織に警察の情報を流してしまつてている可能性。それから、バーボンの正体を知つていながら警察の情報を流し、黒の組織に与しているという可能性。この場合、柊木さん自身が組織の一員ということもあり得る。逆に柊木さんがバーボンを探つているという可能性は……いや、監察官という立場上、さすがに考えにくい。

とにかく、高木刑事や佐藤刑事は柊木さんのことを知つてることもわかつた。機会を改めて、そちらからも話を聞いてみよう。

「はい、コナン君、ケーキどうぞ」

「え、僕頼んでないよ?」

「柊木さんが、お近づきのしるしに、だつて」

お昼ご飯のあとにお腹に余裕がありそうだつたら出してあげつて、と笑う梓さんがふふふと笑う。よく見たら俺が飲んでいたジュースの伝票もない。もしかしてと改めて梓さんを見ると、につこりと微笑まれた。

つい、力が抜ける。考え方を取られていたとはいえ、あまりにもスマートに奢られてしまつた。ささやかながらも優しさが滲む微笑みが脳裏に浮かぶ。

柊木さんの正体はまだわからないが、あの優しい笑顔は偽りではないと思いたい。柄にもなく、そう思つた。

「……あれが例の、江戸川コナン君、か」

伊達と松田がたまに口にする、毛利探偵にくつついてくる小学生。隠してはいるが、どうやら子供には似合わない卓越した推理力と知識を兼ね備えていて、自ら事件現場に飛び込んでくるという。その能力自体はたいしたものだが、警察から見れば危なくて仕方がないと、特に子供好きの伊達はため息をついていた。事件捜査が本来どれだけ危険なのか、何とか教えられればいいんだがとぼやいていたのを覚えている。

その話を聞いたときはどんな問題児かと思ったが、話してみれば意外や意外、確かに少々子供らしく振舞つていたようだが、人の話をきちんと聞けるし、ちゃんとものを考えられる子のように感じられた。なのに伊達や松田の静止を聞かず捜査に飛び込んでくるというのは、どういうことなのだろう。

「……事件捜査になると人が変わりでもするのか……？」

実際その姿を見てみないと何とも言えないが、そんなに馬鹿な子には見えなかつたが。何となく釈然としない気持ちを抱えながら、念のため奴らに報告をすべくスマホを取り出した。

とある穏やかな昼下がり。

休日の午後のティータイムも終えて、ポアロの店内もだいぶ落ち着いてきた。人が少なくなつたころを見計らつてか、最近よく来てくれる男の子に声をかけられた。

「あ、ねえ安室さん！ 僕安室さんのお友達に会つたよ！」
「ああ、とその言葉に目尻を下げた。その報告はすでに本人から上がつてている。

予想はしていたが、彼は持ち前の好奇心で自分から柊木に話しかけにいったという。当たり障りのない程度の話で終わつたようだが、さて、この小さな探偵君は柊木との接触で何を思つたのか。

「彼から聞いたよ。仲良くしてくれたんだって？」

「ジュースやケーキをご馳走してもらつちゃつたんだ。お礼を言いたいんだけど、連絡先がわからなくて」

「僕から伝えておくよ。わざわざありがとう」

にこりとそう笑つて返すと、だよなーという顔をされた。もちろん、そう簡単に連絡先を教えたりはしないとも。

「ちょ、ちょっと待ちなさいがきんちよ、それ例の超絶イケメンの話じゃないの？」

ぱつと身を乗り出したのはいつも元気な鈴木財閥のご令嬢。コナンくんとの接触よりも、彼女との遭遇の方が正直怖かつた。

その様子にちょっと呆れた目を向けつつ、コナンくんは軽く頷く。「そうだと思うよ。びっくりするくらい格好良かつたから」

わかる。男の目から見ても柊木は相当なイケメンである。こんな子供にまでそう言わせるのだから、そのルックスの良さがわかるうというものだ。

「僕、カウンターに座つてゐるだけで絵になる人初めて見た」

「もー！ 会つたならすぐ園子お姉さまに連絡しなさいよ！」

「創立記念日でおやすみだつたときだよ。だから園子姉ちゃんは学

校

「きいいいい！ 私だつて超絶イケメンに会いたい！」

そんな園子さんを窘めつつ、蘭さんがこちらを向いた。

「すみません、コナンくん」馳走してもらつちやつて聞いて……本当なら私からもお礼を言いたいんですけど

「お気になさらず。彼もコナンくんと話せて楽しかったと言つていましたから」

これも別に嘘ではない。普通にいい子そうに見えたけど事件になると人が変わりでもするのか、なんてメッセージで零していたおり、柊木としてはコナンくんに対して悪い印象はもつていないう�だつた。よく監察官なんて立場知つてたよなどのんきに宣つた柊木は、少なくともコナンくんを「警戒すべき対象」とは見てはいない。

警察でも偉いひとなんだつて、と子どもっぽくコナンくんを見ながら、さすがにちよつと油断しすぎじゃないのかと思う反面、柊木がそういう思うならそれでいいとも思つた。

何せ、柊木の人を見る目は理屈では語れないところがある。

「え、……イケメンでしかもエリート？ 最高じゃない！」

「はは、とても優秀な人なんですよ」

適当に相槌を打ちながら、もちろんこれも嘘ではない、と内心で呴いた。柊木は間違いなく優秀だ。未来の警視総監なんともつともらしく噂されているとも聞く。

まだ二十九の柊木には気の早い話だろうが、もしそれが実現すれば警察はもつとクリーンな組織になるだろう。監察官という職務がなかつたとしても、基本的に筋の通らないことは嫌がる奴だ。ぜひとも順調に出世の階段をあがつてほしい。

「それにしても安室さん、そんなひとどうやって知り合つたの？」

「少し前の探偵の仕事でちよつとね。守秘義務があるからあんまり教えてあげられないけど、ある事件で出会つて意氣投合したんだよ」

「そなんだ」

にこにことコナン君と笑顔をかわす。しかし本当に、好奇心の強い子だ。そんなに探られると、俺としても君を探りたくなつてくるのだ

が。

コナン君が知り合いの捜査一課の刑事に柊木のこと尋ねたこともわかつていて、どうやら話を聞いたのが柊木に憧れている刑事だつたとかでほとんど柊木を褒めたたえる内容で終わつたようだが、それも当然だ。

柊木は探つたところで何も出てこないし、そもそも「バー・ボン」相手だろうが「降谷零」相手だろうが機密情報は漏らさない。同期で集まる酒の席でも絶対にだ。少々の仕事の愚痴をこぼしたとしても、誰ひとりとして「言つてはならない情報」は口にしない。

だからこそ刑事部も公安部も警務部も関係なく、今でも付き合いを続けていられるのだ。その一線はきつちり守られている。

「……ねえ安室さん、ちょっと耳貸して」

「なんだい？」

ふと何か思い当たつた様子のコナンくんの横で、すっと膝を折る。耳に掛かる息がくすぐつた。

「——もしかして柊木さんて、女人苦手？」

ああ、そのことが、と苦笑するしかない。

やはりというか、驚いたというか、気づいてしまつたらしい。この子はひどく洞察力に優れているから、梓さんとの応対で察してしまつたのだろう。

一応、迂闊に肯定する前にしゃがんだままコナンくんの大きな瞳を覗き込んだ。

「どうしてそう思うんだい？」

「柊木さん、僕と話をするときはちゃんと目を合わせてくれたのに、梓姉ちゃんのほうは全然見ようとしなかつたんだ。でも仲が悪いって感じもしなかつたし、梓姉ちゃんも気にした風もなかつた。それに、この前柊木さんの話をしたとき、梓姉ちゃんは園子姉ちゃんに柊木さんの話をするの、やけに困つてみたいたから。柊木さんが女の人のことが苦手で、梓姉ちゃんもそれを知つてたんだとしたら迂闊が合うなつて」

柊木さんくらい格好いい人なら今まできっとたくさん女人に

騒がれただろうし、そういうのを嫌がる人もきっといるよね？
続けられた言葉に、もう苦笑するしかない。

「……実はそうなんだよ。それも相当なレベルで、ポアロに通つているのもリハビリを兼ねていてるんだ」

「やつぱりそうなんだ。……じゃあ、園子姉ちゃんに会つたら」

「正直、大変だと思う」

「え、何？ 何よ、私のこと？」

ううん何でもないよ、とコナンくんは元気に返事をし、ええ何でもないですよ、と僕も同じ顔で笑つてみせる。

横目で小さな探偵くんに目を向ければ、綺麗な青もこちらを向く。「……僕、園子姉ちゃんに柊木さんの話しないようにするね」

言わなくとも理解してくれたコナンくんに苦笑しつつ、助かるよと本音で言つた。

そう、この子は事件さえ絡まなければちゃんとひとを気遣えるいい子なのだ。柊木のデリケートな部分を、他に知られないように配慮ができる程度には。

鋭すぎるうえに好奇心が強すぎる、しかもおそらく何か隠し事をしているであろうコナンくん相手に油断はできないが、柊木に關してだけは協定を結んでもいいかもしれない。

「コナンくん

「なあに？」

「彼はね、本当に僕の友人なんだよ。いい奴なんだ」

するりと心から出てきた言葉を、コナン君がどう思つたかはわからぬ。だけど、そなんだ、と言つたその笑顔に、企みや疑いの色は見えなかつたよう思う。

柊木さんについて、灰原や赤井さんにも確認をした。

バー・ボンの「友人」でエリートの「警察官」。その外見的特徴と「柊木旭」の名前も伝えたが、ふたりともその存在に心当たりはないらし

い。

『知らないわ。確かに組織の性質上、警察に組織の一員がいてもおかしくはないけれど。心当たりはないわね』

『聞いたことはないが……もし日本警察に奴らの仲間がいるのだとしたら厄介だな』

結局、まだ柊木さんの正体はわからない。

はつきりしたのは、柊木さんが警視庁内でもかなり評判のいい監察官であるということと、女性が苦手であるということだけ。

高木刑事に柊木さんことを尋ねると、まるで待つてましたと言わんばかりにそれはもう存分に語られた。正直、迂闊に電話したことを中心後悔するほどに。

『本当にすごい人なんだよ！』

さすがに職務の内容が内容だけに詳細は教えてくれなかつたが、どうやら本当に有能な人のようだ。しかも穏やかで謙虚、そのくせしつかり筋は通す人柄から、かなり評判はいいらしい。そのルックスも相まってかなりの有名人なのだと聞いたときには、それならさすがに組織からの潜入ではなさそうか、と胸をなで下ろした。普通、潜入をするならできる限り目立たないように振舞うはず。いや、安室さんを考えればそうとも言い切れないのかもしねりだけど。

女性が苦手なことについても、おそらくあれは偽装ではない。梓さんと目を合わせなかつただけでなく、できる限り近づかないように必ず一定の距離を保つていた。梓さんもおそらく直接接触しないようおつりやレシートをトレイに入れて渡していくが、それ以上に柊木さんがかなり気を張つて距離を保つており、しかも極力自然に見えるよう振る舞っているのはよく観察すればわかる。

安室さんがやけにあつさりとそれを認めたのは意外だつたが、あれは純粹に園子を警戒してのことだろう。

園子ならきっと柊木さんを見かけた瞬間にまっすぐ飛びついていく。普通の人でもあんな勢いで来られたらビビるのに、女性が苦手な人ならなおさらだ。その場面を想像しただけで頭が痛い。多分、安室さんもそうだつたのだと思う。

柊木さんを本当に友人なのだと言つた安室さんの言葉を、俺はどこかで信じようとしていた。柊木さんは安室さんにとつて利害も組織も関係ない、ただの友人なのだと。

組織の一員であるバー・ボンの言葉を額面通りに受け止めるなんていつもの俺なら馬鹿げていると考えるだろう。だけど、そう言つた時の安室さんの笑顔も、柊木さんが俺に向けてくれた笑顔も、どうにも嘘だとは思えなかつた。

『珍しいわね』

柊木さんのこと尋ねたときに、灰原に言われた言葉が蘇る。

いつも通りのちょっと皮肉気な笑みに声を乗せて、灰原は言つた。

『いつもの貴方なら、すぐに盗聴器を仕掛けて尾行しているのに』

『俺を何だと思つてんだよ……』

『あら、事実でしよう?』

さらりと言ひ返され、黙つた。確かに、今までのことを思えば否定はできない。

『それとも何か、思うところでもあつたのかしら』

そう言われて浮かぶのは、やはり柊木さんの淡い笑顔だつた。いきなり見ず知らずの子どもに声をかけられても戸惑うことなく、穏やかに話をしてくれた。俺を子ども扱いするくせに決して軽んじはせず、適当なことも言わなかつた。そういう扱いをしてくれる「大人」はそう多くなくて、ひどく新鮮だつたような気がする。

『……わかんねえけど、あの人にはそういうことする気が起きなかつたんだよ』

『そう。別にどうでもいいけれど、無茶をしてくれなくてよかつたわ。

組織に貴方の正体がバレたら、私まで危険なんだから』

『へーへー、わかつてますよ』

絆された、のだろうか。

心のどこかで、柊木さんは無関係な人であつてほしいと願つていて自分に気づく。同時に、赤井さんの言葉も脳裏に蘇つた。

『ボウヤの目を信じたいところだが、確証が持てるまで信用はしない方がいい。組織はそれだけ狡猾な奴らの集まりだ』

もちろん、赤井さんの言うことは、正しい。でもやっぱり、――
信じたい。

結局のところ、やるべきことはひとつしかない。柊木さんが黒か白
かはつきりするまで、確固たる証拠が見つかるまで、柊木さんを探る
しかない。ありとあらゆる可能性を検証し、ありえないものを除外し
て、残つたものこそが真実だ。

俺は何とか柊木さんともう一度会うために、二度目の接触方法を考
え始めた。

「それじゃ、いつの間にか試験受けてやがつたヒロ萩原松田の昇進を祝つて」

かんぱーい、と軽く声を合わせつつ、完全に拗ねている降谷に笑う。どうやら三人が昇任試験を受けていたことをひとりだけ全く知らなかつたらしい。俺や伊達も諸伏が試験を受けていたのは知らなかつたが、降谷にまで秘密にしていたのか。

「秘密にしてたというより、言う暇がなかつたんだよなあ。だつてゼロ、最近ほんどんぞ警視庁来てなかつたろ?」

「連絡手段はいくらでもあつたはずだ」

「そんな怖い顔するなつて」

じとりと諸伏を見る降谷を諸伏がまあまと宥める。そんな様子に笑いつつ、萩原と松田はたすたすとテーブルを叩いた。

「いじけ降谷はほつといて、ほら早く焼いてよ旭ちゃん。ご褒美ご褒美」

「そうだぞ早く焼け柊木。こちとら限界まで腹減つてんだ」

目の前にはすでに温まっているホットプレートとたこ焼き機。

この窃盗犯二名はしつかりと有言実行をして、小麦粉だの肉だのをしこたま買い込んできた。いや、別に構わないのだが、さすがにちよつと呆れたというか。伊達だけは平和そうにその様子を見ながらけらけら笑っている。

「まあ無事合格して何よりだな。大丈夫だろうとは思つていたが」「やーホント法律とか久々に勉強したわー」

旭ちゃんに本借りて勉強しといよかつたよ、と軽く笑う萩原。

こいつは決して座学が苦手なわけではないのだが、基本的に暗記に向かない。単純に勉強自体そこまで好きではないというのもあって、六割の力で勉強して八割の結果を出すタイプと言うか、要領の良さで点を稼ぐ。

「俺は面接の方が嫌だ」

松田の場合、座学は普通にできる。というか真面目に勉強する。

面接の方も、松田は単純に目上への取り繕いに苦手意識がある分緊張してしまうだけで、そう下手なわけではないと俺は思っている。機動隊でさんざん上下関係を叩き込まれたのか、いつの間にか敬語はちやんと使えるようになっていた。

「まあ、諸伏のおかげで何とかなつたけどな」

「そりやよかつた」

「何だよ、何かアドバイスでもしたのか？」

たこ焼きの生地を流し込みつつ、座学も面接もさらりとこなしたであろう諸伏に尋ねた。諸伏はなんてことないよう、いつもの笑みをさらに濃くする。

「どんな面接官よりも仕事モードの柊木監察官のが絶対面倒だからビビることないよって」

「ああ、どんだけ性格の悪い面接官がきたとしても、笑顔で説教する柊木の方が格段に怖いしえぐいに決まってるからな。そう思つたら全く緊張しなかつた」

「オイそいつらの皿と箸を没収しろ」

させるか、とふたりはしつかりと皿と箸を抱え込んだ。

肩を震わせる伊達と萩原は百歩譲つて許すが、確かにそうだなと真顔で言つた降谷、お前は許さない。

「だつてお前の説教つて的確に責められたら嫌なところ突いてくるだろ」

「あーわかる。切り口がえらいんだよなあ」

警察学校時代、誰よりも俺に説教されたふたりはけらけらと笑いながら言う。くるくるとたこ焼きをひっくり返しながら、俺は苦い顔で返した。

「二度と同じことしないように説得するのが説教なんだから、当たり前だろ」

過ちを犯した相手に正論を叩きつけるのは簡単だが、それではなかなか相手に響かない。特に相手がそれを過ちだと理解しながら行っている場合は、「ダメなことだからしちゃいけない」なんて言われてやめるはずがない。それでは説教をする意味がない。

だから俺は、その行為が自分自身の首を絞めるという方向に、あるいはその行為をしないことで自分自身の得になるという方向に話をもつていい、「その行為をしてはならない理由を相手自身にもたせる」ことが重要だと思っている。かつて学校へ行つていなかつた馬鹿たちに、「勉強しろ」とは言わず、「勉強はできた方が何かと得だぞ。面倒も少なくて済む」と繰り返し唱えたように。

どうやらこのやり方は松田曰く「えぐい」らしい。まあ確かに俺も性格のいいやり方ではないことは承知している。

「ま、その説教のおかげで俺は生きてるんだけどね」

けろつと言ひ放つた萩原に、むしろ松田の方が一瞬凍る。
近距離で爆破に巻き込まれておきながら一切堪えてないその図太さ、本当に松田にわけてやつて欲しい。そう内心溜息をつきながら、ああ感謝しろよと軽く答えた。

「うんうん柊木の説教スキルに感謝」「せめて説得スキルって言つてくれ」

「大して変わんないしょ」

いや、俺の印象が変わる。そう真面目な顔で言うと、また皆笑い出した。

やれやれと焼きあがつたこ焼きをひとつ持ち上げると、さつと松田が皿を出してきた。ぽいっと置いてやるとぱつと松田の顔が明るくなる。お前好物目の前にすると精神年齢二十くらい下がるの何なの、可愛いかよ。

「そういうえば柊木」

「んー?」

「江戸川コナンに接触したんだよな」

じつとこちらを見つめながら聞いてきた降谷の言葉に、お好み焼きの生地を混ぜながら適当に返事をした。

上を向いていた伊達のくわえ楊枝がすつと下を向き、松田の眉がぴくりと動く。

「そう問題児には見えなかつた、だつけか?」

「とりあえず第一印象ではな。確かに小学校一年生とは思えないほど

頭の回転がいいのはわかつたけど。……別にお前らが言つてたことは疑つてないよ。ただ俺のイメージとは違つてたつてだけ

ちよつと声のトーンが下がつた松田に、思つたままを答える。伊達は少し苦笑した。

「まあ、事件がなきやただの頭のいい子どもかもなあ」

「どうか事件に巻き込まれすぎなんじやないの？ お祓い勧めた方が良くない？」

「それは言えてる」

あまり興味のなさそうに萩原はたこ焼きを口に放り込み、諸伏も苦笑して頷いた。

探偵が事件を呼ぶとは言うが、さすがに呼びすぎだろう。そのうちコナンくん自身も事件の被害者になつてしまいそうなのは心配だ。元刑事で俺より年上の毛利探偵相手ならまだしも、さすがに小学校一年の子ども相手に自業自得なんて言葉を使いたくはない。

彼はまだ未成年で、守られるべき子どもなのだから。

「えらくお前のことが気になつてるらしいぞ」

「へえ」

「……興味なさそうだな」

「好きに探ればいいだろ。俺に後ろ暗いところなんか欠片もない」

小学一年生が俺の何をどうやって調べるつもりかは知らないが、俺はどこを探られても痛い腹なんてない。女性苦手の件ですら別に隠してはいないので。

柊木らしい、と笑う降谷の顔が、一転して悪い笑みに変わった。

「まあそれはさておきだ、柊木。お前、俺がいなくともポアロに来れるようになるなんて成長したじやないか」

随分、梓さんに懐いたんだな？

そうにやりと笑う降谷に、ひくりと頬が引きつった。こいつ、コナンくんに接触したことを伝えたときは特に何も言わなかつたくせに。それを聞いた同期たちの目がきらりと光る。

「何、ようやく旭ちゃんにも遅すぎる春到来？」

「てつきり降谷がいる日に坊主と接触したんだと思つてた。お前、そ

んな面白いこともつと早く言えよ」

「良かつたなあ柊木、順調にリハビリ進んでるじゃねえか」「えつに柊木、好きな子できたの？」

諸伏の言葉の最後を切り取るようにざくつと音を立ててお好み焼きにへらを突き刺せば、即座に諸伏は違うのねごめんと両手をあげた。別に俺は怒つません。

「確かに刑事部でもちよつと噂になつてる可愛い子つしょ？」

「何人かその子目當てにポアロ通つてるらしいな。美人なのか？」

「可愛いし愛想も氣立てもいいよ。何より僕や柊木の顔に怯まない」

おお、と降谷の言葉に歓声があがる。ああ全く、頭が痛い。

「……確かにリハビリはさせてもらつてるし助かつてること、特別な感情はない。というか降谷、お前わかつて言つてんだろ」

「わかつてはいるが、プライベートで素のお前と会話が成立する唯一と言つていいく女性だろう。特別になつたら面白いな」と

「面白いで話を進めるな、彼女にも迷惑だ」

きつぱりと言いつけると、つまんなーいと萩原がぼやいた。そういうこと言う奴にはお好み焼きはやらない、というと慌てて謝つてくる。

「しかしさか柊木がそこまで懐くとはな。今度俺も行く」

「あ、俺も俺も。行こうと思つてたけどなかなか時間作れなかつたんだよね」

「確かに興味あるなあ。俺も」

「うーん、ポアロくらいならきっと俺もセーフだよな」

お前ら本当に俺を何だと思つてゐのかと。しかし確かに自分でもリハビリの順調さには驚いてるので口には出さないでおいた。

特別な感情こそなくとも彼女にはちゃんと感謝をしているし、人間として好感を持つてもいる。ぐくぐく自然に配慮をしてくれる彼女の店員としてのスキルは本当に大したものだ。

「……ポアロが騒がしくなるぞ、いいのか」

わいわいとポアロに集まる予定を合わせるそいつらを見ながら悔しまぎれに降谷にそういうと、すつと降谷はトリップルフェイスを切り替え、「安室透」の笑顔を作つて答えた。

「お客様が増えるのはいいことでしょう?」

心底殴りたい、その笑顔。

腹立ちまぎれに俺は手元のビールを一気に飲みほした。

高く飛び跳ねたサッカーボールが、俺の遙か頭上を越えていく。上を向いた瞬間、太陽の光が目に飛び込んで、少し眩しい。

「何やつてんだよ元太！」

「悪い悪い」

えへへ、と笑うそいつに背を向けて、俺はサッカーボールを追いかける。

今日は少年探偵団の奴らと一緒に、少し大きな公園にサッカーをしていました。力任せにボールを蹴りがちな元太のおかげで、さつきから走り回つてばかりだ。

「お、あつた」

少し離れた植え込みに、ボールが転がっているのを見つけた。周囲に人影はないし、植え込みも傷ついた様子はない。よかつた。

ボールを拾つて戻ろうとしたとき、よろよろとベンチに近づき、どっかりと腰を下ろした男性の姿が目に入つた。顔は見えなかつたが、あの動き方からして体調が悪そうだ。しかし周囲に連れらしき人は見えない。気になつてその人に駆け寄つた。

「お兄さん、大丈夫……柊木さん？」

「ん……？　コナンくんか……？」

そつと顔を上げると、ずつともう一度会いたいと思つていたその人だつた。顔色は真つ青で、指先が少し震えているのがわかる。

「柊木さん、体調悪いの？　顔真つ青だよ」

「ああ、いや、……ちよつと人に酔つてね。心配して声をかけてくれたのか、ありがとう」

柊木さんはそう弱弱しく微笑むが、人に酔つたつてこのあたりそんなにひと氣があるわけでもないのに。飲み物でも買ってきてたほうがいいかと周囲を見渡すと、顔に影がかかつた。

「あれ、知り合い？」

「萩原」

いつのまにか傍にいたのは、柊木さんと同じくらいの年齢の男の人

だつた。ゆるく下がつた垂れ目は優し気で、少し長い髪が良く似合っている。ほい、と柊木さんにペットボトルを渡したその人は、どうやら柊木さんの連れらしい。

「お兄さん、柊木さんのお友達？」

「そうだよ。柊木のこと知つてんだ」

「うん。ねえ、柊木さんすごく体調悪そうだけど、病院に連れて行かなくて大丈夫？」

「ん～とりあえず貧血起こしただけみたいだから」

「ああ、少し休めば大丈夫だよ。ありがとう、コナンくん」

柊木さんの言葉に萩原さんはひとつ瞬きをして、まじまじと俺を見つめた。

「そつか、君が江戸川コナンくんか。噂は聞いてる、事件現場うろちよろしちゃダメだぞ～」

「僕のこと知つてるの？」

「伊達や松田知つてるでしょ？　おにーさんこれでも刑事でね、奴らの同期なんだ」

そう言つて萩原さんはぐしゃぐしゃと俺の髪をかき回した。手つきは優しいがその腕は力強くて、しつかり鍛えている人なんだと感じられる。

「伊達刑事や松田刑事の同期？」

「そ。俺は萩原研二、よろしくね。あ、ちなみに柊木も同期だよ」

つまり、柊木さんが前言つっていた「捜査一課にいる同期」というのは伊達刑事や松田刑事のことだったのか。

そういうえば、伊達刑事と松田刑事が同期というのは誰かに聞いた気がする。正直などころ、老け顔氣味の伊達刑事と童顔氣味の松田刑事が同期で同年というのは結構驚いた。

「お休みの日に一緒にいるなんて、仲が良いんだね」

「腐れ縁つて奴かな。お、ちょっと顔色マシになつてきたな」

「ん……悪い、いつも」

申し訳なさそうに言う柊木さんに、いーからと軽く笑つて流す萩原さん。「いつも」という言葉がひつかつて聞き返した。

「柊木さん、貧血気味なの？」

「貧血気味というか……」

「んー、コナンくんつて、柊木の女苦手知ってる？」

「そういえば柊木さんは、「人に酔つた」と言つた。「人ごみに酔つた」ではなく。

まさかと思いつつ、安室さんからちよつとだけ聞いたと答えると、

柊木さんがあの野郎と力なくつぶやいた。

「いやあ、柊木の結構重症だから、近づきすぎると貧血起こしちゃうんだよね！」

「そ、そんなにひどいの？」

「や、貧血で済んだからむしろ良かつたんだけど。よく堪えたね旭ちゃん、リハビリの甲斐あつてマシになつてんじやない？」

「そもそもお前が待ち合わせに遅刻しなきや逆ナンなんて来なかつたんだよ……！」

「ごめんて」

歯噛みするように言う柊木さんに、けろつとした様子で萩原さんは謝つた。どうしよう、これは本当に園子に会わせてはいけない。

「そういうわけだから病院は大丈夫。コナンくんも柊木が女の子に声かけられてたら助けてやつてくれな～？」

「う、うん……？」

困つたように頷くと、だいぶ顔色の戻つた柊木さんが、萩原の言うことは気にしなくていいから、とため息をついた。

そのとき、後ろから俺を呼ぶ声を足音が聞こえてきた。

「あ、いたいた！ どうしたのコナンくん」

「こんなところにいたのかよくおせえぞコナン！」

「なかなか戻つてこないから探しに来たんですよ」

「ああ悪い悪い、体調悪そうな人を見つけたから、ついな」

そう言うと、そいつらの視線がすつと俺の後ろに移る。ぱつと歩美の顔が輝いた。

「わあ、お兄さんすつごくかつこいいね！ 芸能人みたい！」

「そういえば、柊木さんの苦手とする「女性」は子どもも含まれるの

だろうか。歩美や灰原は大丈夫なのかと、そつと後ろを窺う。

「えーと、ありがとう」

柊木さんは特に辛い様子も見せず、困ったように笑うだけ。

これは大丈夫なのかと萩原さんに視線を移すと、俺の視線に気づいた萩原さんはぱちりとウインクをしてくれた。どうやら女性は女性でも子どもは大丈夫らしい。

「体調悪いっていうのはお兄さんですか？」

「うん、少し貧血を起こしてね。もうだいぶ良くなつたから大丈夫だよ。コナンくんを引き止めてしまつてごめんね」

「まだ少し手が震えてるわ。動かない方がいいわよ」

灰原がそう言うと柊木さんは自分の手に目をやり、ぐつと握り込む。ちょっと恥ずかしそうな顔で言つた。

「うん、もう少し休んでるよ。皆は公園に遊びに来ただろう？俺のことは気にしなくていいから、遊んでおいで。連れもいるし、大丈夫だから」

せつかくの偶然だ、この機会を逃したくはない。が、柊木さんは体調不良、萩原さんもいるし、こつちには少年探偵団もいる。探りを入れるのはまた日を改めるしかないかと思つたそのとき、空気を割くような悲鳴が公園に響いた。

悲鳴を聞いた萩原とコナンくんは反射的に走り出し、俺も子供たちにここを動かないように、と声をかけて地面を蹴つた。というか待てコナンくん、君はダメだろ。

悲鳴の元はどうやら公園に併設されていたカフェ。今日は天気がいいから窓を開けていたのだろう、そこから悲鳴が届いたらしい。何があつたのかと驚いた顔をした客たちを尻目に、バックヤードへ飛び込んだ。

「警察です、何かありましたか？」

ばつと一番乗りの萩原が警察手帳を出して声をかけた。

追い付いてみるとそこには真っ青な顔で座り込む女性。彼女が震えながら指さした先には、苦しんだ表情のまま動かない男性が倒れていた。

「つ……！」

俺はすぐに駆け寄って脈拍と瞳孔を確認する。

「……柊木、どう？」

「……死くなってる。蘇生は……無理だろうな」

そう言うと女性がひつと悲鳴をあげて、さらに震えが大きくなる。おそらくこの女性が悲鳴の主で、第一発見者だ。

「萩原、その人連れて行つて落ち着かせてやつて。俺は本庁に連絡する。……コナンくん、この部屋に一步でも入つたら怒るぞ」

「う、」

「了解。さ、いつたん離れましようか。コナンくんもおいで、そこのイケメン怒るとマジで怖いから」

悔しそうに詰まるコナンくんと女性を連れて、萩原は離れていった。

俺もものに触れないようにそつと部屋の入り口に戻る。事件か事故か、それとも病気かは現状わからないが、とにかく人を呼ぶしかない。

できれば殺人でない事を祈りながら、俺はスマホを取り出した。

*

「で、何でお前らがいるんだよ……」

先遣隊である機動捜査隊が到着し捜査を始めて間もなく、捜査一課からも刑事が到着した。やはりというか、臨場したのは目暮警部を始めとする目暮班。昇任後目暮班から外れたという松田も、今日は人手が足りないとかで目暮班のフォローに来たらしい。俺たちを見て苦い顔をする松田に、苦笑を返した。

「やだ陣平ちゃん顔こわーい」

「残念なことにというか、偶然ですよ」

お前も職務中なら切り替える、という思いを込めて敬語で返すと、松田はさらに苦い顔。俺はともかくお前は職務中なのだから敬語を使え。

店のフロアに従業員や店にいた客たちが集められ、それぞれ事情聴取に入る。

被害者はこの店の店長。従業員は第一発見者の女性を含めて四名、それに常連と言える客が二名に、今日初めて来たという客が数名。何気なくそれぞれの話を聞きつつ、犯行現場を思い返した。

事件でなければいいとは思つたが、遺体の様子を見る限り多分あれは薬物による中毒死。毒殺の可能性が高い。それなら、毒あるいは毒をいれてきた容器をもつてているひとが犯人だ。外部犯の可能性も否めないが、ここにいる人の中に犯人がいるのなら身体検査をすればはつきりするだろう。

「では、誰か現場に入つた人は?」

「私が。悲鳴を聞いて駆けつけ、脈拍と瞳孔の確認をするために入りました。すでに手遅れでしたので、そのまま部屋を出ましたが」

「では、状況を詳しくお聞かせ願えますかな?」

「もちろんです。しかしその前に」

ん、という顔をする日暮警部を前に、背後でうずうずしている子供たちの方を振り返った。やれやれと苦笑してみせる。

「どこか空いている部屋はありませんか? この子たちをこのままここにいさせるのはさすがに気が引けます。現時点での殺人の可能性も否めない以上、家まで送つてあげたいので、どこかで別室で待ついてもらいたいのですが」

結局コナンくんの友人たちも我慢が利かなかつたらしく、気づいたときには店の中に入り込んでいた。俺たちで犯人を見つけるぞ、なんて息巻いていて、その横でコナンくんがため息をついている。いや、君も同じ穴の貉だと気づいてほしい。

「あ、そ、それなら、そちらに、従業員用の休憩室が……」

第一発見者の女性が、今だ震える手をおさえながら手を上げてくれた。

「では、そちらをお借りします。ありがとうございます」

「ああ、じゃあ俺がこの子らについてますよ。俺は現場に入つてないし、ずっと彼と一緒にいたので証言できる内容も同じになるでしょうから」

じゃあ皆行こうな」と萩原が朗らかに声をかけると、えー、と子供たちのブーイング。

そういえば少年探偵団を名乗っている子たちがいるという話も聞いていたが、どうやらこの子たちのことらしい。

「歩美達も手伝う！」

「俺たちも犯人捕まえるぞ！」

「捜査に参加します！」

なるほど、これはめんどくさい。

人当たりはいいが別に子供好きではない萩原も、うーん、と困ったように笑った。

「ダメよ」

そこに、ぴしやりとした声が響く。ずっと彼らの後ろの方で黙っていた茶髪の女の子が、無表情のまま切り捨てた。

「貴方たち、刑事さんの言うことを聞きなさい」

「えー……」

「だつてえ……」

「行くぞ、おめーら」

コナンくんがダメ押しをして、ようやくしぶしぶといった感じで子供たちは歩き出した。萩原はあきらかにほつとした顔で、やれやれと歩き出した。

「萩原」

何、と振り返った萩原に、にこりと笑いかける。

その瞬間、萩原の笑顔が盛大に引きつった。

「よろしく」

「……えー……」

「よろしく」

「……はーい」

俺の意図を正しく理解してくれたらしい萩原は、そういうの苦手なんだけどな……とぶちぶち文句を言いつつ、子どもたちを連れて休憩室に向かつていった。

「……柊木監察官、今のは……？」

「子どもたちの面倒をよろしく、という意味ですが？」

不思議そうに聞いてきた高木刑事にそう答えると、ああ、そういうことですか、と頷いた。うーん、君はもう少し人を疑うことを見えた方がいいかもしない。

「では、悲鳴を聞いたときからの説明を」「わかりました」

簡単に説明をすると、フム、と日暮警部は頷いた。

俺や萩原が悲鳴を聞いて駆けつけたことは防犯カメラの映像からはつきりしている。警察官だということを差し引いても、俺たちに疑いがかかることはないだろう。

「では、貴方もしばらく子供たちと一緒に待機していただきたいのですが、よろしいですか？」

「もちろんです。では、失礼しますね」

横目に、松田が警部を始め捜査員を現場に呼んでいるのを見る。何か現場で気になることがあつたらしい。

休憩室に向かつて歩きながら、俺の耳が捜査員たちの会話から漏れる情報を拾っていく。毒殺で確定、やはり殺人。そして店内からは毒物を持ち込んだ容器が見つからない、と。これは捜査が難航するかもしれない、と思ったとき、この店の常連客だという女性の姿を視界の端にかすめ、一瞬違和感を覚えた。

ふと、ひとつ仮説が浮かんだ。つい足を止めかけたが、まあ松田なら気づくだろう。そう思い直して休憩室に向かう角を曲がれば、何故かそこにいるのは休憩室にいるはずの彼。

あきらかにやばい、なんて顔はしないでほしい。やれやれと思ひながら、にこりと笑顔を作った。

「どこに行くんだ？ コナンくん」

「ぼ、僕、ちょっとトイレ！」

「そのわりに君の足が向いていたのは現場の方だな。トイレは向こうらしいよ」

「そ、そりだつけ？」

間違うところだつたと冷や汗を流す小さな探偵くん。確かにトイレと言われば引き止めるわけにもいかないが、何やつてんだ萩原の奴。

おそらくこうやつて普段から事件現場に飛び込んでいたのだろう、松田や伊達が嘆くはずだ。頭の回転が小学生離れしているのは事実であるだけに、子どもが捜査に関わるなどか危険だからやめなさいとか言つても聞かないのだろう。実際、本人も遊んでいるつもりではないのだろうし。

いいだろう、それならもう少し上の子どもに対する扱いで、君に接することにしよう。

「じゃあ、行こうか」

「……え？」

「事件現場。行きたいんだろ？」

*

コナンくんの手を引いて、事件現場となつた部屋の入口前に来る。ドア横にいた捜査員にえつという顔をされたが、笑顔で黙らせた。いや本当に申し訳ない、お仕事ご苦労様です。

現場にはすでにご遺体はなく、日暮警部や松田をはじめとする刑事がそろつて現場検証を行つていた。いち早くこちらを見咎めた松田が、眉を吊り上げる。

「……何やつてんですかね、柊木監察官」

その声で皆俺たちの存在に気付いたのか、皆ぎょっとした顔でこちらを見る。俺はいつもの笑顔を崩さずに答えた。

「社会科見学の付き添いですかね。ああ、こちらのことはお気遣いなく、ここから動きませんから」

「しゃ、社会科見学つて……」

「……柊木監察官」

「お気遣いなく」

重ねて言うと、ものすごく嫌そうな顔の松田はちゃんと捕まえとい
てくださいよ、と言つて目線を現場に戻した。俺が引かないことを察
してくれたらしい。

他の刑事たちも戸惑っていたが、松田にならつて意識を現場検証に
戻した。

「つ……！」

繫いだ彼の右手から、焦る思いが伝わってくる。

そつと目線だけでその顔を盗み見ると、その瞳はまるで燃えている
ようだつた。捜査をしたい、調べたい、話を聞きたい。事件に対する
好奇心以上に感じられるのは、どこか使命感に似たもの。俺がしなけ
ればならないのにと、そんな声が聞こえてくるようで苦笑した。彼の
行動原理が少しわかつたような気がする。

俺はコナンくんの手を一旦離し、目線を合わせるようにしゃがみこ
んだ。現場の方を見つめていたコナンくんがはつと驚いた顔でこち
らを見る。

「前から話は聞いてたよ。毛利探偵の後ろにくつついて事件現場に入
り込んでくる小さな探偵くん」

「え、」

「とても頭のいい子で目の付け所も良く、大人顔負けの推理力を発揮
して事件を解決に導いているつてね。正直、その話を聞いたときはど
んな問題児なのかと思つたんだ。事件をゲームのように思つている
子なんじやないかってね」

「そ、んなこと思つてない！」

反射的に叫んだコナンくんに、頷いた。

そう、君はちゃんとわかっている。犯罪事件にまとわりつく苦しみ
や哀しみも、人の命の重みも、わかっている。むしろだからこそ、君
は事件を捜査するのだろう。しなくてはいけないと思つているのだ
ろう。

だが、俺はそれを止めなければならない。法的な理由、職務上の理

由、もちろん俺個人の主義としての理由で、俺はそれを見過すことはできない。

だから俺は、こういう言い方をしよう。

「……何を言うよりまづ、君に謝らなくちゃいけないな。俺を含め、全警察官が」

「……え？」

「君、自分より頭のいい警察官に会つたことないんだろ」

場の空気が、凍つた。

「君、自分より頭のいい警察官に会つたことないんだろ」

一瞬、何を言われているのかわからなかつた。にこやかな表情とは裏腹に、まっすぐに突き刺さってきたナイフのような言葉。よりもよつて大勢の警察官がいる前で、その言葉はあまりに無慈悲につきつけられた。

「な、……そんな、」

「遠慮しなくていいんだよ？ 情けないよな、同じものを見ているはずなのに、君はその違和感に気づいて、大の大人は気づかない。しかも警察学校でちゃんと捜査手法を学んできているにも関わらず、だ。そりや口を出したくもなるよ」

な、と笑う柊木さんの笑顔は、ポアロで俺に笑いかけてくれた時の笑顔とは全く違つていた。あんなに優しかった笑顔が、今はとてつもなく怖い。慈しみの色は一切なく、その瞳には何の感情も宿つていなかつた。

「俺が代表するのもおかしな話だけど、日本警察を代表して謝るよ。警察に任せておいたら事件は解決しない。犯人は捕まらないし、被害者の無念も晴らせない。だから君は危険を冒してでも捜査をしたがるんだろう？ 本当に申し訳ない」

そう言つてしまがんまま頭を下げる柊木さんに、頭を上げて、と叫んだ。まさかそんなことを言われるとは思わなくて、混乱で頭が回

らない。

「そ、そんなこと、思つてないよ！ 刑事さんたちは優秀な人ばかりなんですよ？」

「そうかな？ じゃあ何で、君は事件の捜査に関わろうとするの？」
探偵小説によく出てくる「名探偵」に頼りっぱなしの「警察官」みたいに、日本の警察も事件は解決できないと思つてるからじゃないのか？

そう問われるが、俺の口はうまく音を紡いでくれない。

そんなことはない、と言いたかつた。だつてあれは、小説の中での話だ。日本警察は世界的に見ても優秀なのは間違いく、日本の平和は彼らの尽力の賜物だ。

しかし、同時に「でも」と頭のどこかで叫ぶ声がある。事件に行き詰まれば小説家の父さんのところに連絡が来た。父さんが海外に出るようになつてからは、俺のところにも。あまりに明白なことを指摘すれば感謝され、さすがだと君だと讃えられる。

いや、でも、とぐるぐると思考がまわりはじめた俺を見て、柊木さんは面白そうに言葉を続けた。

「……まあ、どういう理由であれ、ダメなんだけどね。ところで話は変わるがコナンくん、俺の仕事の話、したよな」

「え、……監察官？」

「そう、ダメなことをした警察官を叱る仕事だ。君が事件現場に一步でも足を踏み入れ、現場にいる警察官が君の存在を黙認したら。俺が何をしなければいけないか、わかるかな」

賢い君なら、わかると思うんだけど。

そうにつっこりと微笑まれて、文字通り血の気が引いた。監察官は「ダメなことをした警察官を叱る仕事」、間違つてはいないがそんな生易しい言葉では表現するのは相応しくない。服務規程違反など、内部罰則を犯した警察官を調べ上げ、処罰することが監察官の仕事だ。つまり、俺がここで動けば。

「君の行動で叱られるのはね、君じゃないんだよ」

俺は自分が休みだからつて見逃したりはしない。

そう笑顔で言いきつた柊木さんを前に、俺の口はもう動かなかつた。そんな俺の様子を見てまた柊木さんはにこりと笑い、わしやわしゃと俺の頭をなでた。

「……信用ならぬかもしけないけど、とりあえずこの事件については心配しないで。今日来てくれている刑事さんたちは皆優秀な人たちだ。これくらいの事件、すぐ解決してくれるよ。……ねえ？」

言葉の最後は、柊木さんと俺の話を聞いていた全員に向けて。

笑顔は崩していないが、その瞳は欠片も笑っていない。今になつてようやくわかつた、きっとこれが、柊木さんの「監察官」としての顔。高木刑事も言つていたじやないか、穏やかで謙虚だが、しつかり筋は通す人柄だと。職務に忠実で、たとえ警察上層が相手だろうが何だろうが、決して不正を見逃しはしない人だと。そう言つた本人も今、真っ青な顔で冷や汗をかいしている。

そのとき、ひとりだけ平然としていた松田刑事が、ふん、と鼻を鳴らした。

「言われるまでもねえよ」

「ま、松田くん？」

「高木、常連客だつていう女連れてこい」

* * *

そこから先は鮮やかだつた。

松田が指名したのは、俺も違和感を覚えたあの女性。この事件のキーになる毒の持ち運び方法。耳に入つた限り、毒はほんの少量で十分で、おそらく粉末状。それを、人目をかいくぐつて持ち込み、持ち出す方法は。

明らかと言えば明らかだ。きちんと身なりに気を遣い、むしろファッショニに拘つていることが見て取れるのに、ひとつだけ不釣り合いな男物の時計。時計の針は動いておらず、裏には真新しいいくつもの傷。

俺ならこんな傷は残さねえけどな、と松田は現場の戸棚に残されて

いた工具を手に取った。聞けばこの女性、かつてはこの店で働いていた経験があるらしい。自分が犯行のために持ち込んだ工具も、もともとこの店にあつた工具類に紛れ込ませれば目立たないと思つたのだろう。

松田の器用な指がくるくると動く。外された時計の裏蓋に、細工された形跡のある内部と、明らかに何かが入つていたらしく空洞。

犯行の流れを松田の明瞭な言葉が辿つていく。言葉が重ねられるたびに女性の顔色が蒼白に近づいていき、もはや事実は明白だつた。松田はかけていたサングラスを外し、女性の目をまつすぐ見つめて言つた。

「時計の中まで調べねえだろうと高をくくつてたか？ 悪いな、おれら警察もそこまで甘くねえよ」

蒼白になつた女性は、そのまま膝をついた。

さすが松田と目線をやれば、同じく目線で当たり前だと返される。どこか戸惑つた様子の刑事たちは手錠をかけた被疑者をパートカーに連れていき、とりあえず事件はひと段落。

それなら今度は俺の出番と、現場に残る刑事たちに笑顔を向けた。それぞれぎくりとした顔で姿勢を正す。わかつてゐるようで何よりだ。

「事件解決、お疲れ様です。ところで、私が皆さんにも聞こえるようにコナンくんとお話した理由、わかりますね？」

果然と松田の推理を聞いていたコナンくんが、びくりと肩を揺らした。

青い顔をしたその人たちは、誰ひとり口を開かない。

「返事」

短く投げつけた言葉に、びくつと肩を揺らしてはい、と声を揃えた。「今日のところは何も見ていません。コナンくんが現場に入ることはなかつたし、事件は松田警部補が解決してくれました。しかし、どこの警察官が事件捜査に積極的に民間人を巻き込んでいるという噂はすでにこちらの耳にも届いています」

誰のことかわかつてんだろうな、と言外に告げればもはや返事をす

ることも出来ない様子の彼らはただただ硬直していた。

「心得ておいてください。今後の職務態度によつては、我々も仕事をしなくてなりません」

それは決して本人たちだけの話ではない。上官には、指導力不足という責任を。同僚には、止められなかつた責任を。

俺が職務を果たすなら、誰ひとりとして見逃しはしない。

「仮にこの案件を私が担当することになれば、個人でも班でもなく、課全体の問題として捉え、然るべき処罰をくだします。……ああ、ご心配なく。松田だろうが伊達だろうが萩原だろうが、等しく容赦はしませんから」

そう言つて、もうひとつ呼吸を置いた。職務としての説教はこんなもんだろう。だから、あとは。

俺の中で何かが切り替わり、笑顔を作つていた顔の力が抜ける。「……監察官として申し上げるべきことは、以上です。そしてここからは、私個人として……いや、俺個人の意見として捉えていただきたい」

俺の言いたいことも、少しだけ。

今日は休みだ。職務中じゃないんだから、少しくらい言つたつていいだろう。これは監察官である以上に、警察官として。

「犯罪事件の捜査に関わることは、少なからず犯人及びその周囲から恨みを買う可能性は否めない。職務として捜査にあたる刑事はそれを覚悟してしかるべきだが、それに民間人を巻き込むのは、違うだろ」そういう職業だと理解したうえで警察官の職務にあたる人間と、民間人は違う。

俺たち警察は「守る側」で、民間人は「守られる側」だ。決して民間人を「守る側」にしてはならない。そのため警察はあると、俺は思う。

「捜査に参加させることは危険に巻き込むことと同義だ。その責任を理解しているか？」百歩譲つて知恵を借りること自体はわかるよ、自身に足りない知識や知恵をもつた専門家に教えを乞うこと、が必要な時もあるだろう。だがその時は力を借りると同時に協力者の身を護

る手段も考えて然るべきだ。そこまで考慮したことがあつたか?」

たとえば知恵を借りた専門家の顔や名前が外に出ないよう情報を統制したり。たとえば捜査に協力することの危険性をきちんと説明し、協力者本人がその事実を大声で言わないよう求めたり。状況によつては警備をつける必要があるかもしない。

それを、理解しているか。

「協力させるだけさせてあとの危険は知りませんなんて、あまりにも無責任だと思わないか?」

俺たちの仕事は、罪を犯した人間を捕まえることだ。

それ以上に、罪のない善良な人々を守ることだ。

「民間人を守るどころか危険に晒してるんだぞ。少しほ警察官としてのプライド持てよ」

それだけ言い捨てると、またひとつ呼吸をおき、俺はにこつと笑つた。切り替えについてこれないのか、また皆びくつと震える。

「とまあ、その噂の方々に会えたらそう言いたいなと思つていました。まさか皆さんのことではないと思ひますが、一応心に留めておいてくださいね」

そして松田の方を向き直り私の聴取は必要ですかと朗らかに尋ねれば、すっかり呆れた様子の松田はハイハイと頭を搔いた。

「聴取は受けてもらいますが、ガキどもを送つていった後で構いませんよ。パトカーと俺の車を出します。ガキどもを送つていって、そのまま本庁に向かうつてことで」

「それは助かります。行こうか、コナンくん」

まだどこかぼんやりしているコナンくんの手を引いて、俺は松田とその場を離れた。

言わなくちやいけないこと、言いたいことはちゃんと言つた。この先のことは、彼ら自身が考えるべきことだろう。

これでも変わらないようなら、本当に容赦はしてやれない。

*

萩原と少年探偵団たちが待つ、休憩室に向かう廊下。

松田に一声かけて、足を止める。俺はもう一度、コナンくんと視線を合わせた。

「！」

びくりと彼の肩が震える。いじめすぎたかなと苦笑しながら、俺は口を開いた。

「もう少しだけ話そうか、コナンくん」

「ひ、いらぎさん」

「俺が言いたいことはわかつてくれたと思う。何での場にいた刑事さんたちに、あんなふうに言つたのかも」

コナンくんへの説教を彼らに聞かせ、彼らへの説教をコナンくんに聞かせた。

ちゃんと人のことを考えられる人間なら、「自分のことで怒られる」とよりも「自分のせいで誰かが怒られる」との方が精神的に辛い。それをわかっていて、あえて聞かせた。我ながら性格の悪いやり方だと思うが、効果的なのは事実だ。

思いつめた顔をしたコナンくんは、小さく頷く。

「やつぱり君は賢い子だな。……君の根底にあるのは、強い正義感だ。それはとても尊いものだし、否定するつもりはないよ。ちょっと発揮の仕方に問題があるけどね」

「！」

「だから、妥協点を見つけよう」

妥協、とコナンくんは繰り返した。

そう、俺は決して君の幼い正義を否定したいわけではない。

「君はきっと何か事件があつたとき、他の誰も気づかないようなことに気づくことができたんだろう。……これは俺の勝手な想像だけど、そういうときに気づいたことを警察に伝えようとしても、『子どもは引っ込んでる』とか言われることもあつたんじゃない？」

少し考えたコナンくんは、こくりと俺の言葉に頷いた。やはり、と苦笑する。

そうして言葉を聞いてもらえたことが、無茶な行動をとるよ

うになつた原因のひとつなのではないかと思う。現場に乗り込むことはどうしても許してやれないうけど、せめてそれくらいなら。

「子どもだらうと誰だらうと、善良な民間人の貴重な意見を聞こうともしないなんて、警察官としてあるまじきだと思わないか？ なあ松田」

「……ソウデスネ」

頷けよ、と言外に伝えつつ松田に話を振ると、しぶしぶ同意してくれた。

「もし今後そんな警察官に出会つたら、連絡してほしい。ちやーんと俺から言つて聞かせるよ。はいこれ俺の名刺。メールはあんまり見れないけど、電話は基本いつでも出るから」

え、と慌てるコナンくんの手に、名刺を握らせる。

名刺と俺の顔を交互に見るコナンくんは、もしかしたら初めて小学一年生の子供らしく見えたかもしれない。

「これでも俺はたいていの現場の刑事さんよりは偉いからね。権力使つても頭の堅い刑事さんに君の言葉を聞くように言い聞かせると約束するよ。もちろんそれ以外の時に電話してくれても構わない。内勤とは言え俺も警察官だから、何か役に立てることがあるかもしないし」

最終的に俺の顔を見てぽかんとしたコナンくんの頭に、ぽんと手を置いた。

「その代わり、事件現場に入つたり、危ないことに首を突っ込んだりするのになしだ。何かあつたら、まず警察に連絡すること。俺でもいいし、松田や、伊達や、萩原だつていいよ」

俺たちは君の言葉をちゃんと聞くし、疑わない。困つていたり、危ない目にあつていたりしたら、絶対に助けてみせる。頼りないかもしれないけど、それが俺たちの仕事だから。

「これが俺にできる精一杯の妥協だ。聞いてくれるかな、コナンくん」少し唇を震わせたコナンくんは、一度口を開いて、閉じた。そしてもう一度口を開いて、しつかりとした口調で言い切った。

「よろしく、お願ひします」

——やつぱり君は、賢い子だね。

そう言つて頭を撫でてやると、少しだけ目を潤ませたコナンくんは、初めて年相応の笑顔を見させてくれた気がした。

子どもたちを見てるなんて言わなきやよかつた。

わいわいと騒ぐ子供たちを見ながら、俺は心底後悔していた。「少年探偵団の出番ですね!」「どの人が怪しいと思う?」なんて話している子供たちを見ていると頭が痛くなつてくる。

子どもが苦手なつもりはないが、別に好きなわけでもなければ扱いに慣れているわけでもない。とりあえず何とか事件が一区切りつくまでやり過ごすかという考えに逃げようとしたとき、柊木のイイ笑顔が脳裏に浮かんだ。

『よろしく』

あれは魔王モードの笑顔だつた。

その「よろしく」の意味はわかっている。わかりたくないけど、わかっている。あいつの指示に従わなかつたらどうなるのかも嫌つてほどわかっている。あれは子どもたちが事件捜査に首を突つ込まないよう説教しておけという意味だ。

いや俺だつて、相手がまだ普通に会話ができる年代の相手なら警察官としてそれっぽいことくらいは言える。だが、小学一年生相手にどういうレベルで言い聞かせたらいいというのか。俺には子どもどころか弟妹も、親戚の子すらないのだ。

どうしろつての、と遠い目をしたとき、以前の飲み会で柊木が「説教は説得」なんて言つていたのを思い出した。

実際、子どもたちに正論を振りかざして言い聞かせて仕方ない。危ないからダメといつても通じないだろう。俺も子どものころはダメと言われたことほどやりたくなつた。

とにかく、「今」事件に関わるのをやめる理由ができればいいのだ。多少めちゃくちゃで筋が通つていらない理由でも、「今」納得してくれればそれでいい。本当の理由はこの子たちが成長していく中で理解していくだろう。

となると、まずはこの子たちのことを知らなくてはと改めて子どもたちを見渡したとき、ひとり減つてることにようやく気付いた。

「え、……」、コナンくんは？」

「たつた今、トイレに行きましたよ？」

「にいちゃん、ぼうっとしてたから聞いてなかつたんだな！」

あつやばいそれ絶対現場に乗り込んでる奴。

さつと顔色を変えた俺を心配してくれたのか、カチューシャを付けた女の子が心配そうに声を掛けてくれたが、うん、大丈夫じゃない、後で魔王に殺される。

「……大丈夫だよ……」

などと言えるはずもなく、俺は無難に頷くしかない。

これは、とにかく今ここにいる子たちにだけでも言つて聞かせるしかない。事件の詳細はわからないにしろ、殺人犯がいるかもしれないこの状況で俺がこの部屋を出て探しに行くわけにはいかない。

一番の問題児はそつちに任せたぜ柊木、松田、と内心やけになりながら、まずはそれぞれの名前を聞いた。歩美ちゃんに、元太くんに、光彦くんに、哀ちゃん。え、哀ちゃんて呼ぶなって？ 灰原さんならいいの？ 大人びた子だ。

「私たち、少年探偵団なの！」

「難事件をいーっぱい解決してきたんだぜ！」

「今回の事件だつて、僕たちの手に掛かればすぐ解決ですよ！」

微笑ましいは微笑ましいが、犯罪事件に巻き込まれて平然としているのは大変よろしくない。事件に巻き込まれすぎて感覚が麻痺している部分もあるのかもしれない。

「へえ、今までどんな事件解決したの？」

と聞いてやると、我先にとその三人は喋りだした。九割くらい盛った内容なのだろうが、俺はうんうんと頷いてやる。

うん、悪い子たちではない。別に誰かを困らせたいわけでもなく、むしろ逆だ。いいことをして、褒められたい。正義の味方になりました。そういう、子どもなら誰でも持っている願望の矛先が、「少年探偵団」として事件捜査に向いているようだった。

「……それでねつそれでねつ、そこでまた、コナンくんが解決したの！」

「いつももずるいんだよなあコナンの奴。ひとりでいいとこ持つて
いつてよお」

「本当ですね……つて、そういうえばコナンくん、遅くないですか？」

はつと気づいた光彦くんに、灰原さんが薄く笑つて言つた。

「ひとりで現場に行つてるのかもしれないわね」

ええつと叫んで三人が立ち上がつた。

いやそういうこと言うとこの子たちも行きたがるのわかるでしょ
灰原さん。さつきはこの子たちに言うこと聞くようについて言つてた
のに今更面白がつて煽らないでほしい。

「こうしちゃいられません、僕たちも行きましょう！」

「はいはいストップ！ 確かにコナンくんは現場に行こうとしたらし
いけどね、柊木に捕まつたみたいだよ」

内心的動搖をおくびにも出さず、スマホを片手に笑つて見せた。
え、と立ち上がりかけた三人が止まる。

「あ、柊木つてのはほら、さつきまでおにーさんと一緒にいた人ね？
アイツも警察官なんだけど。そいつがコナンくんを捕まえて、今お説
教してんんだって」

でまかせだが、十中八九間違つてない。おそらくそれで柊木もなか
なかここに来ないのだろう。聴取自体はそんなに長くからないはずだ。

「あのかつかけーにいちやんか。でもよーあのにいちやんの説教つて怖
くなさそりだよな」

「そう思うだろ？ ……実はめちゃくちゃ怖い」

すつと表情を消して言うと、えつと子供たちは聞き返した。

「……そんなんに？」

「俺も刑事さんだけどね、凶器を持つた殺人犯は怖くないけど柊木の
説教は怖い」

えええつと子供たちは叫ぶ。

残念ながらこれは嘘ではない。武器を持つた殺人犯を捕まえるか
柊木の説教を聞くか選べと言われたら俺は間違いなく前者を選ぶ。
殺人犯は確保すれば終わるが、柊木の説教は本気でやめることを約束

するまで絶対終わらない。多分俺と同じくらい柊木の説教を受けてきた松田も同じことを言うだろう。

「だから大人しくここで待つてような。お説教に巻き込まれたくないだろ？」

はーい、としぶしぶながらも頷いた子供たちは、顔を見合わせてちょっとだけいいじわるそうに笑った。

「ちよつとだけいい気味ですね、いつもコナンくんひとりで行つちやいますから」

「いっぱい怒られればいいよな、俺たちを置いて行つたんだから」「そんなこと言つたら可哀想だよ。……でもやつぱりちよつとズルだよね」

ズル、か。歩美ちゃんの言つたその言葉が、少しひつかかつた。正義の味方に憧れる子たちなら、きっとズルは嫌がるだろう。

そう思つたとき、するりと俺の口から言葉が滑り落ちた。

「でも、君たちもズルしてゐるだろ？」

え、と三人が固まつてこつちを見た。

そして怒涛の勢いで言葉を投げてくる。どうして？ 歩美達ズルくないもん！ 俺たちズルなんてしてねーぞ！ コナンくんはズルかもしませんが、僕たちはそんなことしてません！

その勢いに苦笑しつつ、んーとね、と俺は言葉を選びながら答えた。「だつて君たちも事件に関わつたりしてゐるでしょ」

「だつて歩美達少年探偵団だもん！」

「事件調べるのは当たり前だろ！」

「コナンくんが僕たちを差し置いて捜査をしていることをズルだつて言つてるんです！ 捜査をしていることじやありません！」

だから捜査すること自体がズルなんだつて。

さて、どういえば伝わるか。ふと、子どもたちのサッカーボールが目に入る。

「君たちさ、サッカーの試合見たことある？」

突然全く違う話題を振つた俺に、三人はきょとんとした。代表して光彦くんが答える。

「Jリーグの試合なら皆で何度も観に行きました」

「そつか、サッカー選手つてかつこいいよな。一生懸命練習して、そんで監督とかいろんな人に認められて、ようやくあんな大きなスタジアムで試合できるんだもんな。だから応援したくなる」

「は、はい」

「じゃあさ、その試合の最中に、サポーター席に座つてた人が突然ピッチに乱入してつたらどう思う？『俺、サッカー上手いから一緒にプレーしてやるよ！俺が点を取つてやる！』なんて言いながらさ」

その場面を想像したのか、一瞬で三人は眉を吊り上げた。

「そんなの、絶対ダメ！」

「ずりーぞ！」

「モラルに欠ける行為です！」

うん、ダメだよね、と頷いた。

そして重ねて問いかける。何故ダメなのか、と。

「え、だつて……サッカー選手じやないもん」

「そんなのかつこわるいしょ……」

「ええつと……そりやあ、プロじやないから、でしちゃう？」

「うんうん、全員合つてるとと思う」

そう、外野からプロじやない人が乗り込んでくるのは、「ダメ」で「ズル」し「かっこわるい」んだ。君たちもよくわかってるじゃない？

「おにーさんたちはね、学校でたくさん勉強して試験に合格して、また警察学校でたくさん勉強して、今でも毎日いろんな人に教えられたり叱られたりしながら、ようやく刑事になつていよいよつて、事件の捜査をしてもいいよつて許してもらうんだ」

俺たち刑事にとつては現場がピッチで、事件がサッカーの試合だ。ただし、練習試合なんて一個もないし、絶対に負けることは許されないけれど。

事件をサッカーの試合に例えるなんて不謹慎だと特に降谷あたりから殴られそうだが、この場だけのことだから許してほしい。厳密に言わなくともいろいろ違うけど、とりあえずニュアンス伝わりやいいんだつて！

「そこに警察学校どころか小学校も出でない君たちが乗り込んでくるのはズルじやない？　あ、もちろんこの場にいないコナンくんもだよ？」

俺たちいっぱい勉強していっぱいトレーニングしてようやく許してもらつたのにさーと拗ねたように言つてみせると、今まで考えたこともなかつたのだろう、三人はぽかんと口を開けていた。

「……歩美達、事件解決するのはいいことだつて思つてたけど、……ズルだつたの……？」

ぽつりと、歩美ちゃんのつぶやきが落ちる。

俺の拙いお説教でも、一応感じるところはあつたらしい。

「……そうね」

唯一じつと黙つて俺の話を聞いていた灰原さんが、ようやく口を開いた。

「警察学校つて、すごく厳しいところなんですつて。朝も昼も晩も勉強して身体鍛えて、あまりの厳しさに逃げちゃう人もいるそうよ。そういう試練をクリアすることなく事件捜査だけやるなんて確かに虫のいい話よね、ズルかもしれないわ」

「そ、そんなあ……哀ちゃん……」

じわりと、歩美ちゃんの大きな瞳に涙が滲んだ。

「たとえば皆が、こんな怪しい人を見たよつていう話を聞かせてくれるだけなら、すごく有難いし、それはズルじやないんだけどね。それは俺たちにとつてすっごく嬉しい応援だから。だけど、わざわざ怪しい人を探しに行つたり、事件が起きた場所に自分から行こうとするのはズルかなあ。おにーさんが言つてること、わかる？」

わかります、と呟いたのは光彦くん。

ズルはダメだよな、と元太くんもしょんぼりと頷いた。

とりあえず、伝えたいことは伝わつただろうか。そう思つたとき、ドアをノックする音が響いた。

*

どうやら事件はすでに解決したらしい。

入ってきたのは柊木に松田、そしてコナンくん。やはり一緒にいたらしい。さぞ柊木に叱られてへこんでいるのだろうと思いきや、それでも……ない……？　あれ、説教したんじゃないの、と不思議に思うながらも、パトカーと俺の車でこの子ら送つてくから、という松田の言葉に頷いた。

「じゃあ二つにわかってくれる？　家が近い者同士でくつづいてくれると助かるな」

そう言うと、灰原さんとコナンくん、元太くん光彦くん歩美ちゃんでわかれた。

それなら、俺がパトカーで後者三人を送つていこう。人数的に柊木は松田の車に乗ればいい。

送つてつた後は本序な、と言つた松田に片手を上げて応えたとき、後ろからそつと裾を掴まれた。

「ん？　……あれ、どうしたの灰原さん」

かがんで目線を合わせてやると、灰原さんは裾を掴んでいた手を離した。相変わらず無表情で、何を考えているのかイマイチわからない。

「お説教、もうちよつといいたとえ話はなかつたの？」

「あれ、それ言つちやう……？　おにーさん結構頑張つたんだけど……」

開口一番のダメだしに、俺は苦笑した。どちらかというと慣れないなりに善戦したと言つてほしいところ。

「……でも、あの子たちには響いたみたい。多分これで、少しほは大人しくしてくれると思うわ。……ありがとう」

それだけ言うと、灰原さんはするりと身を返して松田の車の方に走つていった。ほんのわずかに聞こえたお礼と、ちょっとだけ見えた照れた顔はきっと俺の気のせいではない。

何だ、ちゃんとお礼が言えるいい子じやないの。慣れないことをした甲斐はあつたかなと少しだけ笑いつつ、俺もパトカーに向かつて歩き出した。

＊＊＊

それぞれを送り届け、本庁での聴取もひと段落。

休みが休みにならなかつたと溜息をつきつつ、俺は何故かうちに乗り込んできた松田と萩原に飯を食わせていた。

「何で俺がお前らに晩飯作らなきやいけないんだろう」

「え、そういう約束だつたじやない？」

「それは今日付き合つてもらつたらつて話だつたろ。結局一日何もできなかつたじやねえか。というか松田、お前聴取とかいいのかよ」「いいんだよ、俺は今日ただのフオローダつたんだし。第一あんなしょぼくれた顔見ながら仕事なんざしたくねえ」

あー、と遠い目をする。それなりに言うこと言つたので、むしろへこんでもらわないと困るのも事実なのだが。

「結局、日暮班にも問題児にも説教かましたんだよね？」

その割に少年の方は、あんまり落ち込んでなかつたみたいだけど。萩原の台詞に、松田と目を見合させた。

「……まあ、コナンくんにはだいぶ手加減したかな」

「ああ、相當に優しかつた。お前あんに優しい説教もできるんじやねえか」

「えつそな？ てつきり泣いて謝るまで言葉責めするもんだと思つてたのに」

人聞きが悪いセリフを吐いた萩原のおかずを一皿取り上げると、ごめんなさいと言葉が飛んでくる。食を握つてる奴に対して暴言吐くと痛い目見るぞ、いい加減覚えろ。

「頭が良かろうが小学一年生だぞ。子ども相手なら俺だつて手加減くらうするわ」

手加減をしていようと、ちゃんとこちらの言いたいことが伝わればそれでいいのだ。コナンくんにはちゃんと伝わつてゐる。その後きちんと連絡先を交換したが、コナンくんは本当に嬉しそうだつた。隣にいた灰原さんはなぜかその様子を一度見していただけれど。

「……わかつてはくれた感じ？」

「たぶん。日暮班も……まあわかつてくれてねえんなら捜査一課の人員が綺麗に入れ替わるだけだな。ふたりとも、昇任早々悪いけど降格を覚悟しろよ」

「え、俺も？」

「させねえよ」

不機嫌そうに松田は唸つた。どうやら伊達と一緒にもう一度説教をするつもりらしい。毛利探偵のことも含めて、ちゃんと線引きはさせると言つてくれた。それならきっと大丈夫だろう。

「そつちの方はどうなんだ？」

「えー、少年探偵団？ うーん、多分捜査に首突つ込むのがダメなことなんだつていうのはわかつてくれたんじやない？」

なら、とりあえずは良し。

萩原に説教を任せるのは不安もあつたが、何とかこなしたらしい。確かにあの子たちも目に見えてしょんぼりしていまし、うまく話を持つていたのだろう。これから無茶をしないでくれるならそれで十分だ。

「じゃあ今日片づけるべき案件はあとひとつだな」

「え、何？」

「なあ萩原、何で俺は今日、休憩室の『外』でコナンくんと鉢合わせたんだろうな？」

そう言うと萩原はげつと顔色を変えた。

何だあの坊主のこと逃がしたのか、と松田が面白そうに乗つかつてくる。

「俺、よろしくつて言つたよな？」

「え、それ、あの子たちにお説教のしつけつて意味でしょ？」

「面倒見ることも説教することも逃げないよう見張つとくこともまとめて『よろしく』つつたに決まつてんだが。なに子どもひとり見逃してんだ」

「え、あ、……ごめんなさい！」

素直で結構だが、いくらなんでも殺人犯が近くにいる状況で保護対

象の前で気を抜くのは頂けない。

メシ食った後説教な、と笑つてやると、俺ホント今日ついてないと
萩原は肩を落とし、松田はその横で堪えきれずに噴き出した。

優しい声音で紡がれた、刃のような、銃弾のような、鋭い言葉だった。

そんなつもりはなかつた。そんなはずはなかつた。心の奥でそう叫んでいたことは否定できない。だけど、そんな甘えを許さないくらい、あの人の言葉は「真実」だった。

『君、自分より頭のいい警察官に会つたことないんだろ』

『君の行動で叱られるのはね、君じやないんだよ』

俺は、この柊木さんの言葉を、声を、きつと一生忘れない。それだけ強烈で、衝撃で、俺の今までの全てを叩き壊すような「現実」。今も思い返すだけで、自己嫌悪と罪悪感で吐きそうになる。

でも俺は、忘れない。忘れてはならない。そして、繰り返してはならない。そう思う。

『これが俺にできる精一杯の妥協だ。聞いてくれるかな、コナン君』
だつてあの人は、俺の言葉を信じると言つてくれたのだ。

薬を飲まされ身体が縮んでしまつたとき、俺を保護した「警察」は、誰ひとりとして俺の言葉を信じてくれなかつた。それどころか笑い飛ばして、端から相手にもしてくれなかつた。

頭ではわかつてゐる。人が幼児化しただなんて夢物語、誰も信じるわけがない。いくら俺が十七歳だと、工藤新一だと叫んでも、信じる方がおかしい。けど、それでも俺は信じてほしかつた。俺の言葉を、聞いてほしかつた。ただの子どもの戯言だと、考へることすらなく切り捨てないでほしかつた。

柊木さんが俺を信じると言つてくれた時、頭によぎつたのはそのと
きのことだ。柊木さんは、あのとき俺を保護した「警察」とは、違う。
俺の話を、ちゃんと聞いてくれる。

『いつでも連絡しておいでよ』

帰り際にそう笑つてくれた柊木さんに、仮に俺が「工藤新一」だと名乗つたらどういう反応を示すのだろうと思った。きっと、頭から信

じることこそなくとも、考えてくれる。事情を聞いてくれて、そして、納得のいく説明があれば、あの人は、――きっと。

そんな人とかわした約束を、見つけてくれた妥協点を、俺は破りたくない。破りたく、ないのに。

「どうした、新一」

「！」

はつと思考の海から引き上げられる。

心配そうな顔をした阿笠博士が俺の顔を覗き込んでいた。

「あ、……悪い博士、スケボーの調整終わった？」

「それはもう少しかかるが……どうした、この前事件に出くわしてから君の様子がおかしいと、哀くんも心配しておつたぞ」

「灰原が？」

ぼんやりしていて霸気がない、大人しくしていてくれるのは助かるが、何だか気味が悪い、と。博士の言葉に、にやろう、と苦い顔をする。当の本人は、また地下室に籠つて端末と向かい合っているようだ。

「それ心配してねーだろ」

「何を言う、哀君は素直じゃないだけじゃよ。それで、何があつたんじや？ 事件は無事解決したんじやろう？」

「事件は、な」

俺が首を突っ込むよりも早く、松田刑事は真実に辿りついた。そう、俺が動かなくても事件は解決することを、松田刑事はしつかりと証明してみせたのだ。それもまた、俺にとつては衝撃を受けた事実のひとつだつた。それがあの人たちの仕事で、当たり前のことなのに。「何じや、歯切れの悪い。君の言うとつた、あの組織の一員と友人だという警察官も一緒だつたと聞いたが」

「……ああ」

そう、その事実が、今はどうしようもなく重い。

この部屋に盗聴器はない。^{あかい}沖矢さんに聞かれることもないだろう。

「あの人は、絶対に組織と繋がつてたりなんかしない。まだ確たる証拠があるわけじやねえけど、絶対違う」

ぱつりぱつりと、あの日あつたことを辿っていく。いつもの推理なら明快に順序よく話せるのに、何故か今回に限って上手くまとめきれず、要領を得ない説明だったと思う。だけど博士は途中で遮ることなく、ただじつと俺の話を聞いてくれた。

何とか最後まで話しきったとき、博士は少しだけ笑って、柔らかい声で言つた。

「そうか、そうか。……いい警察の人に出逢つたんじゃな。いや、いい

『大人』に、と言うべきかもしれん」

「博士……」

「それで、君はどう思つたんじゃや、新一」

思うところがあつたから、こうして今も考え込んでいるんじゃろう？

そう言われて、何とか説明しようと、自分の中のもやもやしたもの

を言葉の形に整える。

「……日暮警部や、他の刑事さんたちにも迷惑かけたくないし、事件への関わり方はちゃんと見直そうと思う」「うむ」

「頼つていいって言つてくれた柊木さんを、信じたい。危ないことはするなつて……何かあつたら相談してほしいって言われて、……組織のこととか、話したいって、初めて思つたけど、……言えねえ」

組織のことや幼児化のことを話すということは、灰原のこと、そして赤井さんのことを説明するということだ。だが、柊木さんにそれを話してバー Bolton に情報が渡らないという保証はない。ふたりの関係性や、柊木さんの友人を名乗るバー Bolton の目的が見えない以上、柊木さん自身のリスクを考えても、今相談することは得策とは言えない。俺だけならまだしも、灰原や赤井さんの命もかかっている。下手なことは、できない。

「……信じたいし、話したいのに、結局俺は、柊木さんが見つけてくれた『妥協点』を守れねえんだ」

俺の正義を信じると言つてくれたあの人との約束を、俺は守れない。

その事実があまりに重くて、苦しくて、辛かつた。

「約束を守れんことが、辛いのか」

「……うん。柊木さんには……多分、失望、されたくない」

約束を守つてくれなかつたのかと、あの人と言われるところを想像しただけで背筋が冷たくなつて涙が出そうになる。でも、俺が柊木さんに正直に話をして、万が一バーボンにそれが伝わつてしまつたら関係者全員の命が危うい。組織に潜入しているキールの命もだ。

どうしたらいいのかわからない。こんな気持ちは、初めてだつた。

「……わしもその人に会つたわけではないから何とも言えんが、新一、

そう結論を急がなくともいいんじゃないかの」

「え？」

「組織のことや今までのことを、今すぐ説明しろと言われているわけでもない。そのバーボンが気になるなら、ふたりの関係性を見極めながらどうするかを考えても遅くはないじやろう。どうもお前は辛抱が足りん」

昔からそういうじやがな、と博士は笑つた。

「事情が事情だけに慎重になるのは当然じやろう。とにかく今は、信頼できる警察官ができたということを喜んでおいたらどうじや。その柊木さんだけでなく、同期の松田刑事や伊達刑事、それからその日一緒にいた萩原刑事だつたか？　彼らが信頼できるということもわかつたんじやろう？」

きつとお前が本当に困つたとき、彼らはお前が子どもだからと疑うことなく、お前を助けてくれる。そういう存在がいてくれることが、どれだけ有難いことか。

「まずは得たものを喜べ、新一」

そして焦るなど、博士は穏やかに続ける。

ぐるぐると同じところをループしていた思考がゆっくりと落ち着き、もやもやとしていた心が少しだけ軽くなつた気がした。少しだけ呼吸をおいて、また俺は口を開いた。

「……博士」

「ん？」

「灰原は柊木さんのこと、何か言つてたか？」

「む、……組織の気配は感じなかつた、とは言つておつたかな。あと顔がいいと」

付け加えられた言葉に思わず笑つた。灰原から見てもやつぱり、柊木さんは相当なイケメンだつたようだ。

「むしろ萩原刑事のことの方を話しておつたぞ。ふにやふにやして、いて軽く見えたが、子供たちにお説教をするならあれくらい適当な人の方がいいのかも知れないとか何とか」

「ああ……そういう事件に首突つ込まないよう上手く言つてくれたとか言つてたな」

「うむ。あの子たちも学んでくれればいいんじやがのう」

正義感や勇気は大事だが、身の丈に合つた行動と言うのも大事じやからのう、という言葉にうつと詰まりつつ、再びスケボーの調整に戻つていく博士の背中を見送つた。

「……結論は、出ねーな」

ひとつ溜息をついて、俺は呟く。

ここ数日、何度も何度も同じことを考えた。俺はどうしたらいのかと、頭が痛くなるくらい考えた。それでも結論が出ないなら、とりあえずは安全策で現状維持をするしかない。

せめて少しでも前に進めるように、そうだ、柊木さんに連絡して話をしたいと言つてみよう。いつでも連絡していいと言つてくれたあの人、言葉に、甘えてみよう。そしてポアロに呼び出して、運よくそのときに安室さんがいれば、その関係性も多少は見られるかもしれない。そうでなくとも、俺はもつと、あの人、話が聞きたい。俺は少し緊張しながら、スマホの画面をタップした。

*

いつも通り軽快な音を奏でるベルに迎えられ、俺はポアロに足を踏み入れた。

目の前のカウンターにはお目当ての人、その向かいには見慣れた店

員。

「いらっしゃいコナン君」

「やあ、こないだぶりだな」

何よりもまず思つたのは、この光景を目の当たりにしたらSNSに上げたくなるのも仕方ないかもしない、ということだった。タイプの違うとんでもないイケメンがふたり並んで、しかもこつちに向かって笑いかけている。もしかしたら俺は今、非常に贅沢な光景を見るのかも知れない。

今日は休日だが、柊木さんの希望で人が少なそうな時間帯に待ち合わせをしていた。ぱらぱらと何人かテーブル席に座つている客はあるが、運よく女性客はいない。いなくてよかつた、もしいたら絶対黄色い悲鳴が店内に響いていた。

「……どうした？」

固まつてしまつた俺にきよとんとした柊木さんはよくわかつていいようだつたが、その横でそつと安室さんが唇をかんだのが見えた。あれは俺の内心を読んだうえで笑うのを堪えたな、くそ。

「何でもないよ！ ゴメンね柊木さん、遅くなつちやつて」

「時間びつたりじやないか、俺が早く来ただけだよ」

「コナン君、何飲む？」

「アイスコーヒーがいいな」

ひよいつと柊木さんの隣の椅子に飛び乗つた。運がいい、今日は安室さんの出勤日だつたのか。いつものようにかしこまりました、と穏やかな笑顔を残して、安室さんはアイスコーヒーの準備をしていく。「家人にはちゃんとポアロに行くつて言つてきたか？」

「うん。柊木さんことは詳しくは言わなかつたけど……そういえば柊木さん、『監察官』のことは小五郎のおじさんには言わない方がいいって言つたよね？ あれつてどうして？」

電話口で言われたことだ。もし自分のことを尋ねられたら、警察官ということは言つてもいいけど監察官と言つことは言わない方がいい、と。結局特に何も聞かれなかつたので、蘭にもおつちゃんにも「友達と会う」としか説明はしていないが。

「監察官は身内のあらを探して手柄を上げる仕事だからね、あまり好かれる立場じゃないんだよ。毛利探偵も元刑事だろう？　いい顔はしないかと思つてね」

そうか、あまりに柊木さんが慕われているという話を聞いていたから忘れていた。

そもそも好かれない立場なのに、おっちゃんは刑事を辞めさせられた身、つまり監察官の査問を受けて依願退職の処分を受けた身だ。逆恨みをするような人ではないが、確かにいい気はしないかもしない。

「そつか……」

「俺は別にいいんだけど、あえて毛利さんを不快にさせることもないからな」

「うん、納得した」

「そうか、と柊木さんは穏やかに笑う。

本当に、前回見た「監察官」としての顔とは別人だと、改めて思う。こんなに優しく笑う人なのに、あの時の笑顔は背筋が凍るくらい怖かつた。

「はい、アイスコーヒーどうぞ」

「ありがとう」

そつと出されたアイスコーヒーに口をつける。安室さんはそのままにこりと微笑んで、柊木さんに話しかけた。

「そういうえばその毛利先生が零していたけど、先日警視庁の日暮警部が先生に会いに来たそうだよ。事件じやなくて、謝罪のために」

ごく、と俺の喉が大きな音を立てた。

知っている、あれはあの事件の日からほんの数日後のことだつた。学校帰りに事務所の階段を上がっている時、ちょうど日暮警部が事務所から出てきて鉢合せた。

目が合つたとき、俺も日暮警部も一瞬固まつた。俺は気まずさのせいでどういう顔をしたらいいかわからなかつたが、警部は俺のそんな気持ちを察したように苦笑して言つた。

『やあコナン君、学校帰りかね』

そつと俺の傍まで階段を下りて、目線を合わせてくれた。
うん、と頷いて、俺は意を決して頭を下げた。

『「めんなさい。……たくさん、迷惑をかけてしまって』
『……いいんだコナン君、頭を上げなさい』

『ううん、……僕、自分がやつてることの意味、全然わかつてなかつた。
……警部さんたちを馬鹿にしてたつもりなんかない、だけど、……僕
がしていたのは、ダメなことだつた』

『頭を上げなさい、コナン君』

少し強い調子で言われて、おそるおそる頭を上げる。

再び顔を合わせた目暮警部は、やつぱり微笑んでいた。

『そうだな、君が全く悪くないというつもりはない。特に事件現場に
飛び込んでくるところに関してはな。だが、それ以上に、……わしら
の考えが甘かつたんだ』

警察官として、すべきこと。その意義。わかつていたつもりで、わ
かつていなかつた。

『守るべき君たちを危険に晒していた。それは警察官としてあつては
ならぬことだ。その話を、今毛利くんにもしてきたところだよ。
……本当に、すまなかつた』

『目暮警部……』

『わしらに悪いと思う必要はない。毛利くんや、……優作くん、それに
新一くんに頼つてばかりいたのは事実なのだから』

自分の名前が出てびくりと肩が震えた。

目暮警部は特に気にすることなく、言葉を続ける。

『いいかね、君もそれなりに事件に巻き込まれてきて、毛利くんほどと
は言わなくとも顔や名前を知られている。もし何か変わつたことや、
怪しい人物を見かけたらすぐに相談してほしい。狙われる可能性も
ないとは言えんからな』

真剣な顔でそう言われ、俺はうん、と頷く。目暮警部はそこでまた
微笑んで、蘭君によろしくな、と言つて帰つていつた。

その日は小五郎のおつちゃんもなんだか考え込んでいるような様
子で、夕飯の席で一言だけ俺たちに零した。

『蘭、コナン』

『何、お父さん』

『どうしたの？』

『おめーら、何か変なことがあつたらすぐ言えよ』

特に表情を変えず、おつちやんはそれだけ言った。変なことって何よと蘭は返したが、変なことは変なことだよと言つて、それきり何も答えなかつた。そしてその後も、ほんの少しだけ、変わつた。何がとうと難しいが、まず明らかに変わつたのは、依頼人の話を聞く際に、絶対に俺や蘭を同席させなくなつたということ。

日暮警部とどんな話をしたのかはわからないが、おつちやんなりに俺たちを守る方法を考えた結果なのだろう。

「そうか」

特に感情の乗つていらない柊木さんの相槌で、はつと意識が戻つた。柊木さんは特に気にしてた様子もなく、カツブに口を付けている。「僕も詳細は聞いてないんだけど、何かあつたのか、君なら知つてるかい？」

「さあ」

するりと柊木さんがかわしたところで、テーブル席にいた別の客がオーダーを呼んだ。はい、と返事を返して、安室さんがカウンターから離れる。

その隙にと、俺は柊木さんに小声で話しかけた。

「……日暮警部たちに、何か処罰はあるの？」

「とりあえず、俺は今のところ仕事をする予定はないよ。俺が決定的な場面を見たわけでもないし、告発されたわけでもないからな」

「……そつか」

「全部、これから次第だ」

そう言つた柊木さんの言葉を、噛みしめた。

これから次第、どうか。……俺も、気を付けなければ。

そう決意を新たにしたそのとき、かららんとベルが来客を告げ、見知つた声が耳に飛び込んできた。

「あ、コナン君。……あれ、そちらは……」

入ってきたのは、買い物に行っていたはずの蘭と園子だつた。俺の隣にいる柊木さんを見て蘭はきよとんとしていたが、蘭に続いて入ってきた自称イケメンハンターは、さつと目の色を変えた。これは、――ヤバいのでは。

「きやああああ超絶イケメン！ もしかして貴方が安室さんの……！」

いつきに距離を詰めてきた園子を何とか止めようと腰を浮かせたその時、俺は背後から回ってきた力強い腕に、勢いよく持ち上げられた。

「本当に申し訳ありません！ ほら、園子！」

「も、申し訳ありません……」

「頭を上げてください、おふたりとも」

内心必死で笑いをこらえながら、頭を下げる女子高生ふたりにいつもの笑顔を返す。

予想通りというか、「超絶イケメン」を目の前にした園子さんは、柊木に対してもいつきに距離を詰めた。多分、両手をとつて近距離で挨拶をしようとしたのだろう。

当然ながら柊木がそれを許容できるわけでもなく、とにかく必死だつた柊木は、隣にいたコナン君を持ち上げて盾にするという暴挙に出た。

『……へ？』

お互い近距離で顔を合わせ、何があつたかわからずぽかんとする園子さんとコナン君。コナン君という盾を両手で持ち上げ、彼女からできる限り距離を取ろうと腕をぴんと伸ばす柊木。ちなみに園子さんを視界に入れないように顔を背け、若干震えていた。

こんな面白い構図、安室^{ぼく}ではなく降谷^{ぼく}だつたら全力で笑つていたのに！

今も隙あらば笑いだそうとする腹筋を全力でおさえながら、柊木の

女性苦手の話を聞いて謝り倒す蘭さんと園子さんは前に、柊木のかわりに謝罪を受け取る。

「本当にお気になさらず。ちゃんと説明していなかつた僕も悪かつたんです。あ、でも園子さん、初対面の男性に迂闊に声をかけるのはおすすめしませんよ」

「はい……あの、柊木さん？　だつけ？　あ、あれって、体調悪くさせちゃつた……？」

さすがに申し訳なさそうな園子さんは、そつと柊木の方を見て言った。

俺は柊木の姿を確認することもなく、いいえ、と首を振った。

「大丈夫、あれはただの自己嫌悪です」

どうせカウンター席で頃垂れているのだろう、自分に対する呪詛のような柊木のつぶやきと、必死に宥めるコナンくんの声が背後から聞こえてくる。

「いくら何でもコナンくんを盾にするなんて……警察として……いや人としてダメだろ……アウトだろ……情けなさ過ぎる……何やってんだ俺は……」

「ひ、柊木さん、誰だつて苦手なものはあるよ！　今のは園子姉ちゃんが悪いから！」

「守るとか大口叩いといて盾にするとか最低だよな……ごめんなコナン君……俺の方が約束破つてるよな……」

「僕は全然気にしてないから！　本当に気にしてないから！　柊木さん話聞いて！！」

堪える俺の腹筋、そして表情筋。少しでも気を抜いたら全部崩れるぞ、堪えてみせろ降谷零、安室透のキャラクターを守れ、そうでなくては公安など務まらない。

そしてごめんねコナン君、そいつ滅多に落ち込まないけど、本気で落ち込んだら完全にキャラが壊れる奴なんだ。落ち込むところまで落ち込んで、励ましなんて全く耳に入らない奴なんだよ、面倒で面白いだろう？

そろそろかな、と俺はカウンターを振り返り、一通り自分への呪詛

を終えたらしい柊木に改めて声をかける。

「ほら柊木、そろそろ正気に戻つてくれ」

「あ……？　あ、ああ……」

俺の声で柊木はゆるゆると頭を上げ、何とかふたりの方に身体を向けた。

しかし目線は相変わらずふたりの方に向けられない。向けようと努力はしているが、身体のほうが嫌がっているらしい。梓さんでだいぶ慣れたと思ったが、やはりまだ無理なようだ。

「本当に、すみませんでした……」

「いや、……でも、本当に、知らない奴に声をかけるのはやめたほうがいいよ……君の方が危ない場合もあるから……」

「気を付けます……」

園子さんに悪氣があつたわけではないのは柊木もわかっているのだろう。

だがまだ顔色は戻らないし、冷や汗と震えが止まらない。だいぶ取り繕えるようになつた柊木だが、一度取り繕いが崩れるとなかなか戻れないのは変わらずか。さつさと連れ帰つた方がよさそうだ。

「柊木、僕の勤務はあと十分で終わるから、少し待つてくれ。交代の梓さんが来たら送つていくよ」

「いや、俺は……」

「その状態で、人通りの多い休日の街中を歩いて帰れる自信があるのかい？」

「よろしく頼む……」

また項垂れた柊木は、あっさりと白旗を上げた。

來たばつかりなのに、ごめんなコナン君……と柊木が呟くと、気にしないで、とコナン君は苦笑した。

「また、お話してくれる？」

「もちろん、いつでも」

ぽん、と頭に手を置かれたコナン君は、嬉しそうに笑う。

先日の一件で柊木に懷いたことは聞いていたが、どうやら本当だつたらしい。コナン君には珍しい年相応の無邪気な笑顔に、柊木のタラ

シは本当に才能だなとこつそり笑った。

この後梓さんが出勤し、また頭を下げる女子高生ふたりと笑顔の小學一年生を残し、柊木を家まで送り届けた。

ちなみに柊木を愛車に乗せたのはこれが初めてで、張り切ってその素晴らしい走りを体感させてやつたというのに、その感想は「法定速度守りながらあんな危険運転ができるつてお前、いつそ才能だぞ」だつた。解せない。

いつも人が少ない平日のランチ終わりのこの時間、今日もまた最後のひとりのお客様を見送つて、フロアが無人になつた。……む、こういう日は、たいてい。

そう虫の知らせが伝えてきたとき、いつものようにベルと共に入店されたのは、最近たまーに目が合うようになつた、内心ちよつとだけファンのお客様。いつもと違うのは、少しだけ気まずげな顔をされていて、その後ろに楽しそうな一団がついていたこと。

「いらっしゃいませ」

「……今日はテーブル席、いい？」

「はい、どうぞ！ ええと、五名様ですね？」

そうでーす、と軽く返事をしてくれた少し長い髪を後ろでくくつた方に、喫煙席で、と付け加えたサングラスが似合う方。それから猫目を面白そうに細め、本当に柊木が成長してる、と呟いた方と、良かつたなあ、とそれに同意して頷く大柄な方。

それぞれ個性のある方々だけど、とにかく思うのは。

「いらっしゃいませ。本当に来たのか」

「よ、安室。仕事ご苦労さん」

「こちらの方々も安室さんのお知合いなんですか？」

「ええ、柊木を通して知り合つた友人です」

なるほど、やはり。

「やつぱりイケメンのお友達はイケメンなんですね……！」

数秒沈黙の後、柊木さんを除いた四人は揃つて噴き出した。それを見てようやく、内心を口に出してしまつたことに気づく。すみません、と慌てて伝えると、柊木さんは小さくため息をついて後ろの四人に向かつて口を開いた。

「……お前ら、少しば堪える。店の中で騒いだら迷惑だろ」

「い、いや、わかつてんけど、」

「悪い悪い、なるほど、柊木が通うわけだな」

何とか笑いを堪えながら猫目のお兄さんが零すと、柊木さんには珍

しい少し拗ねた顔をして、黙つてテーブル席の方に歩き出した。

あら、いつもの穏やかな顔はとにかくかっこいいけど、ああいう表情をされるとちよつと可愛いかも、なんて思いつつ、お冷の用意を済ませる。

安室さんにそれを差し出すととゆるく首を振られ、梓さんが行つてあげてください、と背中を押された。お友達なら自分で持つていけばいいのに、と不思議に思いながら、ちゃんと接客の笑顔を作つてお冷を運ぶ。

「お冷どうぞ」

「お、ありがとな」

手前に座つた大柄のお兄さんが気を利かせてコップをそれぞれに配つてくれる。さすが柊木さんのお友達と言うか、親切な人だ。

「いきなりごめんね。お姉さんが『榎本梓』さんだよね？」

「え、はい、そうですが」

「安室や柊木から話は聞いてるよ。こいつのリハビリに付き合つてくれてるつて？」

髪を後ろでくくつたお兄さんが、こいつ、と柊木さんを指しながら言う。柊木さんは若干眉間にしわを寄せて、躊躇いなくその指を掴み本来曲がらない方向へぐぐぐと引っ張つた。

「いでででで痛いって旭ちゃん！ 何だよ照れることないだろ！」

「うるさい、仕事の邪魔だ」

「か、構いませんよ柊木さん！ リハビリに付き合つてると言われても、私は本当に何もしてないんですけど」

「この面相を前に普通に仕事してくれただけで十分『してる』んだよ」

サングラスのお兄さんは、面白そうにそう言つて紫煙を吐き出した。

その横で頬杖を突きながら、猫目のお兄さんは続ける。

「言つてなんだけど、柊木相手に普通に接してくれる女の子、そういうないから」

それは、まあ、そうだろう。

詳細は知らないけれど、先日園子ちゃんがとうとうやらかしてしまったと聞いている。柊木さんのルックスのレベルは本当にモデル顔負けというか、そこに座つているだけで絵になるような人だから今までさんざん騒がれてきたはず。それこそ、女性が苦手になつてしまふくらいには。

「だからつい俺たちも気になつて、ついてきちゃつたんだよ。柊木が普通に女の子と会話するなんて、今まで本当になかつたから」「地道に努力してきた甲斐はあつたじやねえか。なあ、柊木」

大柄なお兄さんの言葉に、柊木さんは唇の端を思い切り下げながらも、お陰様でと、小さく返した。さつきと同じ、その拗ねたような表情には皆さんへの感謝と信頼が確かに感じられて、何だか微笑ましい。

「アンタもありがとなあ。これでも本人、相当感謝してるんだぜ」
まだうまく会話ができない分、ちゃんと伝えられてないみたいだがな。

そうお兄さんに言われ、え、と固まる。思わず柊木さんを見ると、やつぱりまだ視線は上手く合わないけれど、少し迷いながらも口が動いた。

「……いつも、ありがとう」

恥ずかしそうにと、いつもありがとうござります」と、葉。

大したことはしていないのだからお礼を言う必要なんてないのでとも思いつつも、接客業においてお客様から頂く「ありがとう」ほど嬉しいものはない。

「……こちらこそ、いつもありがとうございます」

そんな気持ちを込めてそう返すと、ようやく柊木さんと目が合い、まだ少しだけぎこちないながらも、そつと微笑んでくれた。

「……あ、ごめんもう無理……俺ブレンドで……」

「あ、はい！ ごめんなさい！」

さつとメニュー表で顔を隠した柊木さんに、旭ちゃんそこはもうちょい頑張ろ、と一つ結びのお兄さんが柊木さんの肩をぐらんぐらん

と揺らし始めた。さすがに公の場で卒倒したくない、とメニューの裏からか細い声が聞こえてきて、思わず笑う。

「つたく、締まらねえな。……ああ、俺もブレンド。いやもう全員ブレンドでいいぜ」

「ふふ、はい、ブレンド五つですね。少々お待ちくださいませ」
サングラスのお兄さんに言われた注文をさつと書き込み、一礼して席を離れた。

後ろからはまだわいわいと賑やかな声と、約一名分の弱弱しい声が聞こえる。柊木さんには申し訳ないと思いつつ、やっぱりまた笑ってしまった。

「すみません、うるさくて」

「いえいえ、そんなことないですよ。安室さん、ブレンド五つお願ひします」

「はい」

安室さんも穏やかに苦笑しつつも、やつぱり微笑ましげにテーブルを見つめている。この人のそんな表情もなんだか珍しくて、何だか羨ましくなってきた。男の友情っていう奴？ そういうのもいいかもしねない。

「良いお友達なんですね」

そう言うと、安室さんはその大きな目をぱちくりさせ、もう一度彼らの方を見て、それからまた笑った。

「ええ、楽しい人たちなんです」

その言葉はいつも通り安室さんのものだつたが、そのときの表情はいつもと違っていて。何だろう、ちょっとだけ安室さんらしくない、いたずらっ子のような顔をしていた。

* * *

「……何だ、本当に春到来の気配なし？ つまんね」

「萩原、本氣でその指折るぞ」

ゆらりと距離を詰めると、萩原は冷や汗をかきつつヤダヤダ冗談

じゃくん、とホールドアップ。お前は本当に何を期待してんだ。

「でも確かに、本当にいい子みたいだな。だけど……いやホント柊木が普通に女の子と話してるのすげえ違和感」

「わかる」

いつもと変わらない笑顔のまま言い放たれた諸伏の言葉に、松田が深く頷いた。俺は苦い顔をしつつも、今までが今までだけに言い返せない。

まあまあと伊達が苦笑しながら言う。

「素直に成長を喜んでやれよ。とりあえずひとり、ちゃんと話せる相手がてきてよかつたじゃねえか。柊木にとつては大進歩だろ？」

「ま、今まで考えればすごいことだし、ぼちぼち行くしかないよね～」俺なんか食べようかな、と萩原は俺の手元を覗き込む。何かおすすめあるかと聞かれて、ふと思つた。

「……そういうえばブレンド以外頼んだことない」

「そうなの？」

「普段から長居はしていないから」

ああ、と皆が納得したように頷いた。

店が混み始めそうな気配が出たらすぐに退散したいので、いつでも出られるようにフードメニューは頼んでいない。

「俺も腹減ったな、何か食うか」

「……この、メニューに書いてあるハムサンドって、もしかして？」

「ああ、そうらしいよ。前柊木の家で作つたやつ。ゼロにレシピ渡しだんだ」

「確かにあれは美味かつたよなあ。手が込んでたし」

思い出すのは早朝に全員がうちに乗り込んできたあのときの、サンドイツチ。

確かにあれは美味かつた。確か味噌だのオリーブオイルだの使つていたし、きっとこだわりがあるのだろう。

「でも、作るのが安室ならいつでも食べれるね。他にしよ」

「頼んでくれていいんだよ？ いつでもは作つてあげられないからね？」

？」

気配を消して近づいてきたそいつに、萩原はぎくりと肩を揺らした。降谷は「安室」の顔を崩さないまま、にこにことブレンンドをテーブルに並べていく。

「それで、ご注文は？」

につこりとどこか圧を感じさせる降谷に、萩原はメニューの後ろからハムサンドにします……と小さく答えた。かしこまりました、と答える降谷は満足げだ。こいつ本当にプライド高いよな、知つてた。「他はどうする？」

「あー……俺、カラスミパスタ。確か他の班の誰かが美味いって言つてたな」

「ああ、梓さん特製のカラスミパスタは刑事さんたちの間で大人気なんだよ。柊木もたまにはどうかな？」

伊達の言葉を受けて、梓さんも喜ぶよ、とにかくと笑つた降谷。何となく断りづらい。別に、彼女を喜ばせたくて頼むわけじやないけれど。

「……じゃあ、俺も」

何となく気まずいままでそういうと、降谷の笑みが濃くなる。何か癪。

松田も松田でくつくつと笑いながら、俺も食うわ、とカラスミパスタを追加。その横で、じやあ俺は安室特製の方にするかなーと諸伏が朗らかに笑つた。

「それでは、カラスミパスタ三つとハムサンド二つだね。少々お待ちくださいませ」

にこにこと笑いながらテーブルを離れる降谷に、ようやく萩原は安堵の息をついた。わかつてんだけど調子狂うわー……というつぶやきに、苦笑する。あんなに大人しくて礼儀正しい顔の降谷なんてそう見られないでの、その気持ちもよくわかる。

「それはそうと柊木、ここで子供を盾にして女の子かわしたつて？」
「その話をするなら俺は今すぐ帰るぞ」

「顔こつわ」

確信犯で愉快犯の諸伏がけたけたと笑う。あれは落ち込みが過ぎ

て、一週間ほど引きずつた。いや、今でも思い出すだけで死にたくなる。子どもを盾にするくらいなら自分が卒倒したり号泣したりする方がどれだけかマシだ。

降谷から連絡がいつたらしく、あの後同期からもからかい交じりの慰めのメッセージをもらつたが、諸伏からは慰めついでに「ゼロがイケメン崩壊するくらい笑つてた」という密告ももらつたので、降谷のことは許さない。とりあえず道路交通法を無視する白いRX-7を最近よく見かけると交通部にチクつておいた。どうせ偽造した免許くらい持つているだろう。「安室透」として罰金食らえればいい。

「子どもつてあの坊主だろ？ ホントに連絡とつてんのか」

「そんなに頻繁にじやないけどな。一応反省はしてくれたみたいだよ。ああ、少年探偵団の方も大人しくしてるらしい」

まだたまに暴走しそうになるが、そのたびにあの茶髪の女の子がちくりと「ズル、するの？」と言うとぴたりと止まるとか何とか。そう言うと、萩原は少しだけほつとした顔をした。

「そりや良かつた。慣れないことした甲斐があつたわ！」

「まさか萩原が人に説教する日が来るなんてなあ。しかもちゃんと子供たちに言う」と聞かせられるとは

「頭ん中がガキのまんまだから同じ目線で説教ができるんだろ」

「やだ陣平ちゃん、聞き捨てならなーい！」

うんうんと感心したように頷く伊達に、松田はさらりと言つた。萩原はひくりと頬を引きつらせ、俺結構頑張ったんですけどと言葉を重ねる。

その言葉に苦笑しつつ、俺も口を開いた。

「相手の目線に合わせて話ができるのは萩原のいいところだよ、松田」「旭ちゃん……！」

「たとえ説教の中身が『お前それいいのかよ』と思う内容でも、伝わればいいんだ」

「何この上げて落としてくるスタイル」

説教は内容よりも結果つて言つたの終木なのにと萩原はさめざめと泣いてみせる。あれ、俺は普通に褒めたつもりだったのだが。

「お待たせいたしました」

そのタイミングで、降谷が頼んだ料理を順番に運んできた。相変わらず楽しそうだね、と言葉をそえて。

「楽しそうに見えるの？ 僕いじめられてるんだけど！」

「うん、皆で萩原をいじめるのが楽しそうだ」

「あれ安室つてもつと優しい性格じゃなかつた？ もつと言葉選んでくる奴じやなかつた？」

「やだなあ、何を言つてるんだい？ 僕はずつとこうだよ」

設定若干ねじまげてでも萩原をいじめることをやめない降谷にいつそ感心する。

俺の味方なんてどこにもいない、と涙を流す萩原に、松田は吹き出し、諸伏は遠慮なくけたけたと笑つた。

「今日はこの後、また柊木の家？」

「そのつもり。安室も来る？」

「どうしようかな……少し仕事もあるし」

「柊木が車買うっていうからいろいろ店見てカタログもらつてくる予定なんだが」

「行く」

一瞬で降谷の目の色が変わつた。予想通りの展開。

「つまりこれからディーラー巡りかい？」

「ああ。こいつ、見張つてないと適当に目についた軽四で済ませそうでな」

面白そうに松田が言うと、すっと降谷の笑顔が濃くなつた。

オイそれ「安室透」じゃなくて「降谷零」の笑顔だろ、やめろ仕事を中に。

「……軽四。いや、軽四が悪いとは言わない。最近のは形も性能もいいのが多いし、小回りが利くのも素晴らしい利点だと思う」

「……安室」

「だけど致命的に柊木には似合わないんじゃないかな？ ルックスや地位との釣り合いも大事だと思うよ？」

今晚、僕もカタログをもつてお邪魔するね？」

圧を感じる笑顔で言われて、もうどうにでもしてくれと頷いた。致命的に似合わないってなんだ、軽四の何が悪い、どうせ家族つくつて乗せる予定もないし、車なんて動きやいいじやねえかといろいろと思うことはあるが、口に出すと絶対面倒なので言わない。

スポーツカー買わされないように気を付けよう心に決めつつ、カラスミパスタを口に入れた。あ、美味い。

「そういうや柊木、何で車が必要になつたんだ？」

「だつてお前ら出世して前より忙しくなつただろ」

「？　ああ」

「荷物持ちに使えなくなつていろいろ不便でな」

バイクだと積載量に限界あるしと何気なく付け加えると、一拍おいて俺が特によく「使う」三人、松田萩原諸伏が真顔になつた。

「すぐに車買え」

「今日中に車種決めよう」

「次の休みには買いに行けるようにしような」

そんなに荷物持ちから逃れたかったのだろうか。

俺そこまでこき使つたつけ、と首を傾げると、三人からジト目で見つめられた。

「柊木つてそういうとこあるよな」

「うん、もう諦めてるけどさ」

「素で暴君なんだもんなー」

「暴君？　俺が？」

別にお前らを配下なんて思つてないけど、ときよとんとすると、三人は一斉に溜息をつき、伊達と降谷は苦笑した。え、何で？

苦笑した降谷がそうだ、と思い出したように口を開いた。

「そういうえば最近なんだけど

「何？」

「犬を飼い始めたんだ」

「お前どこにそんな暇あんの？」

降谷のおかげで連日寝不足の諸伏の表情が、すつと消えた。

「ゼロ、俺はな、何も犬を飼うと言つてるわけじゃないんだ。ただ、お前はいくつも顔を使い分けて大変な生活を送つているわけだろ？そこにわざわざ犬の世話つて仕事まで加えなくてもいいんじやないかっていう話でな？ 命を育てるんだ、適当な世話なんか許されないし、犬だつたら散歩とかも必要だろ？ 俺としては、その時間をちゃんと自分の休息のために使つてほしいんだよ。そのために俺は毎日身を粉にして書類をさばいてるわけだしな？ いや、犬を飼うことで癒しになるつていう考え方もあると思うし否定はしないよ。だけど、そのために世話に手間のかかる犬を飼うくらいなら、登序して書類の一枚も片づけてほしいっていう俺の気持ちもわかつてほしいというかな？」

最近あんまり見なかつたな、この光景。警察学校時代はたまに見たけど。

何となく懐かしい思いを抱えながら、降谷に正座をさせ、その目の前で仁王立ちをして笑顔のまま言葉を重ねる諸伏を見る。なんだかんだでお互いに甘い奴らなので滅多にないが、ごく稀に降谷が諸伏を怒らせると見られる光景だつた。

外野から下手に横やりを入れると巻き込まれることをよく知っているので、俺たちは遠巻きにそれを見ながらビールを呷る。

ちなみに降谷の横にはちよこんと小さな白い犬が行儀よくお座りしている。お目見えしようと思つたのか、わざわざキャリーバッグにいれてうちまで連れてきていた。

「の、野良犬だつたんだけど、懐かれて……離してくれなかつたんだ」「情が移つたのはわかつたけど、別に自分で飼う必要はなかつたんじゃないのか？ たとえば交友関係の広い萩原に言つて、貰い手を探すことだつてできたはずだろ？」

諸伏のもつともな言葉に、降谷がう、と口ごもる。

完全に犬を拾つてきた「子ども」と元居た場所に返してきなさい、と叱る「母」の図だ。諸伏ママは滅多なことでは怒らない代わりに一旦

怒ると怖い。

降谷が返す言葉を必死に探していたその時、座っていたわんこが立ち上がり、とてて、と諸伏の足元に駆け寄った。

「あ、こら、ハロ」

きゅうん、と諸伏を見上げ、尻尾を振るわんこ。ぴくり、と諸伏が震えた。まるで遊んで、とでも言うように首をかしげてみせる。また諸伏はぴくりと震えた。

「……ヒロ、……可愛いだろ？」

「いや、あのな……」

「可愛いだろ？ ハロつていうんだ」

名前を呼ばれてハロくんは嬉しそうに一声鳴いた。ぱたぱたと振り続ける尻尾は止まらない。ダメ押しとばかりに降谷はハロくんを抱き上げ、あざとくその前足を振つてみせた。

「可愛いだろ？」

「……可愛いけどさあ……！」

はい陥落。諸伏は膝をついて頃垂れた。くつそ可愛い……という声が聞こえてくる。それを見た降谷は勝ち誇った笑みを浮かべた。

ほほほほ予想通りの展開に俺たちも苦笑。そもそも諸伏は動物好きで大好きなのだ。降谷の勝利は最初から目に見えていた。

「卑怯だぞゼロ……そのためにわざわざその子連れてきたんだろ……！」

「何の話だ？ 僕はうちの子自慢がしたかつただけだ」

ふふんと笑つて見せる降谷に、諸伏が歯噛みする。

そろそろいいかと、俺はふたりに声をかけた。

「その辺にしとけよ、諸伏」

「だけどな柊木！」

「気持ちはわかるけど、その子も完全に降谷に懷いているみたいだし、今更引き離すのも可哀想だろ」

「う……」

再び床におろされたハロくんは、見慣れない部屋に来たにも関わらず、特に怯えた様子もなく降谷にくつついている。それだけ降谷を信

頼しているということだろう。

「降谷だつて、お前の気持ちをわかつていないわけじゃない。きっとこれからお前にまわされる書類の量だつて減るはずだ、そうだろ?」
「領けよ、という念を込めて降谷を見ると、降谷は一瞬硬直しつつも頷いた。すまなかつた、ちゃんとお前に無理させないようと考える、とはつきりと言う。降谷は言つたことは守る奴だ、これで少しは諸伏の生活も改善されるだろう。

「……俺はお前に無理をしてほしくないんだ」「わかつてるよ。心配かけてすまない、ヒロ」

降谷が苦笑を返したところで、とりあえず説教は終了。結局のところ諸伏は降谷が心配なだけなので、ある意味ひどい痴話喧嘩を見せられた気分だ。やれやれと手元のビールを呷る。

「諸伏、説教終わつたなんならお前もカタログ見るの手伝えよ」

「旭ちゃんたら本当にどれでもいいとか言うしさー。全く、未来の警視総監様が適当な車とか乗つてたら爆笑通り越して泣けてくるつてのに。せつかくだから格好いいやつ買おうよ格好いいやつ!」

「……え、何、未来の警視総監て」

「一課でのお前の呼び名。期待されてるぞー?」

伊達の言葉に何て返したらいいかわからず、ただ苦笑する。できるだけ出世は頑張るつもりだが、警視庁のトップとはまた気が早い。

そのとき、ぽてつと膝に軽い感触。ん、と下を見ると、ハロくんが俺の膝に両足を置いていた。

「柊木は動物平氣だつたよな?」

「ああ。しかし都内に野良犬なんて珍しいな。しかも人懐っこい」

わしゃわしゃと頭を撫でてやると、気持ちよさそうに耳を倒してくれた。白い毛並みはふわふわとしていて、日ごろしつかりとブラッシングされていることがよくわかる。降谷が抜かりなくシャンプーもしているのだろう。

「賢い子なんだ。柊木のこともすぐ覚える」

「……だからつて、お前が面倒見れないときに預かる気はないからな?」

うつと降谷は詰まつた。やはり。

諸伏の御説教から逃れるためだけではなく、俺の部屋に慣れさせて、仕事が忙しくて帰れない日は預けようとでも思っていたのだろう。いくら俺が内勤で、ある程度勤務予定が予測できるからって人を当てにして生き物を飼うのは良くない。

「拾つたからには自分で面倒見ろよ」

「わかってる……」

気まずそうに頷いた降谷は、それはともかくと鞄から分厚いファイルを取り出した。嫌な予感。

「で、これが僕のおすすめの車のリストと詳細だが」「お前この短時間にどうやつてそれ用意したんだ」

お前は夕方までポアロで勤務、その後そう時間を置くことなくうちにやつてきたはずだ。こんな分厚いデータファイルをまとめる時間なんてあるはずがない。

えつに見せて見せてと車好きの萩原は目を輝かせているが、頭の痛そうな顔をした諸伏は苦々しく言う。

「……ゼロ、風見さん使つたな？」

その低い声に、降谷は顔色を変えることなくしれつと言い返した。

「印刷だけ頼んだ。データ自体は俺が趣味でまとめていたものだ」

「仕事以外のことで部下をこき使うなよ……あの人だつてお前のせい

で結構寝てないんだからな？」

そう口を吊り上げる諸伏の言葉に、ん、とファイルを開いていた萩原が反応する。

「その『風見さん』って、公安部の風見裕也警部補？」

「何だ萩原、知つてるのか？」

「ちよつと前に臨場した爆破事件、テロ容疑があるつつて公安に引き継いだんだけど、その時に顔だけ見た。エリート然とした嫌味つぽい奴だと思つたけど、降谷にこき使われてる部下さんなのか。急に気の毒になつてきたわ」

「常日頃振り回されている可哀想な人なんだ。邪見にしないであげてくれ」

萩原の言葉に深く深く諸伏は頷いた。確かに俺も降谷の部下とか絶対なりたくないもんね、と萩原も頷く。カタログから目を上げた松田と伊達も、そりや氣の毒だと同意した。その様子に降谷は憮然として言い返す。

「お前ら僕を何だと思つてるんだ。僕だつてちゃんと『上司』やつてるぞ」

「ちゃんと『上司』やつてる奴は部下を寝不足にしたりしねえと思うぞ」

うりうりとハロくんの顎元をくすぐりながら俺が言うと、降谷はうつと言葉に詰まつた。部下に無理をさせないのも上司の仕事だよなーと話しかけると、ハロくんはこてりと首を傾げた。可愛い。

「……それはともかく車選びだ、柊木。人任せにしすぎるのは良くない」

「無理やりな方向転換」

「都合が悪くなると逃げるのは良くないぞ、ゼロ」

「うるさい」

とにかく、と降谷は萩原の手からファイルを抜き取り、俺に押し付ける。うわ、おつも。これ全部読む気がしねえんだけど。というかこれ趣味でまとめてたつてお前本当に仕事しろよと思う。

「今後現場にまわされる可能性がないとは言えないだろう。そういうとき、もしかしたら自分の車で犯人を追わないといけないかも知れない。だからちゃんと車は選んだ方がいい」

「カーチェイス前提に車選ぶのやめよ？ 僕もつと平和に出世するはずだから」

「絶対にそうだと切りれるか？」

「真顔やめる、怖くなるだろうが」

脅しにかかる降谷にやれやれと首を振りながらファイルを開く。中の資料は確かに見やすくまとめられているが、量が量だけにやはりげつそりとします。

「お前ならこれくらい一時間からず読めるだろ」

「仕事じやあるまいし、一時間もかかるような車の資料読みたくねえ

よ……降谷、おすすめ上位三点をプレゼンしてくれ。一車種あたり五分な。萩原も言いたいことあつたら補足して」

おつけー、と萩原は上機嫌で手を上げる。諸伏も俺の隣で聞く姿勢に入り、ちゃっかりハロくんを抱き上げてわしゃわしゃと撫でていた。

「上位三点、一車種あたり五分だな。しつかり聞いてろよ」

いきなりのプレゼンに特に怯むこともなく、むしろ嬉々として話し始める降谷に、まるで水を得た魚だな、と少し苦笑した。ちなみにプレゼンは八割方聞き流すつもりだが、とりあえずそれがバレないよう

に車種名だけ覚えておこう。

*

熱のこもったプレゼンを聞き流し、終わつただろうところで拍手を送る。降谷はやりきつたと言わんばかりの笑顔で、萩原と固い握手をかわしていた。

萩原の車好きは以前からだが、いつのまに降谷もこんなにハマつてしまつたのだろう。諸伏に視線を向ければ、RX-7見て以来ハマつたみたい、と耳打ちされた。降谷もわりと影響を受けやすいところがある。

「それで、どうするんだ柊木？」

「とりあえずお前のおすすめ三つを次の休みに試乗してみるよ。それから決める」

「そうか！ また相談に乗るからな！」

「何だつたら試乗も付き合はね！」

ありがとう、と笑顔を返すと、ふたりは満足げに頷いた。よし、聞き流したことにはばれてない。まあ一応乗るだけ乗つてみよう、それから決めればいい。

「じゃあちゃんとといい車買うんだぞ柊木、もう荷物持ちしねえからな」「そこまで念押さなくても……ちゃんと荷物持ち頼んだ後は飯作って埋め合わせしてただろ」

「確かにいつもリクエストしたもん作つてもらえたのは嬉しかつたけど」

米の大袋と調味料の大瓶持たされるのはさすがにちよつと勘弁かな……と萩原が遠い目で続ける。諸伏と松田も全力で頷いた。残念。「どうか何でいつも俺らなんだよ、降谷と伊達にさせた話は聞いたことねえぞ」

「降谷は純粹に予定が合わないし、あんまり外で接触するのもなと思つて。あと伊達は婚約者さんとの時間優先したいかなと」

俺もさすがにお前らに彼女ができたら遠慮するんだけど。

そう続けると、三人そろつて項垂れた。お前らモテそうなのに何で彼女できなんだろうな、と追い打ちをかけようかと思つたがさすがに殺されそうなのでやめた。ドンマイ。

「あー、まあ、俺は予定が合えば付き合うぞ、柊木」「助かるよ、伊達」

苦笑する伊達に笑顔を返す。こういうところが彼女できる奴とできない奴の差なのではないだろうか。そうかもしない。

そのあとも車のカタログをぱらぱらと見たり、ハロくんとじやれて遊んだりしているうちに時間は過ぎていく。いつものように空のビール缶が山になるころ、俺は食べ散らかしたつまみの皿をキツチンで洗つていた。酔っ払いたちがハロくんとじやれる声がリビングから聞こえてくる。

「柊木」

「ん？　ああ、まだ皿あつたか。ありがと」

リビングにいたはずの降谷がいつの間にか背後に立つていた。見逃していた空の皿を持つててくれたのだろう、濡れた手でそれを受け取る。

再び洗い物に戻るも、降谷はその場を動こうとはしなかつた。

「降谷？　どうかしたか？」

「……柊木」

「ん？」

深く考えずに聞いてくれ。

飲み会の夜に似合わない真面目な声に、思わず手を止める。

「警戒する相手から情報を聞き出す場合、お前ならどうする?」

そういうのはどう考へてもお前の方が詳しいのでは。そう思いつ
つも、とりあえず真面目な質問らしいので真面目に答えておく。

「心理的に搖きぶつて、プレッシャーをかけた後に一旦油断させる。
そんで情報を守り切つたと相手が安心した時に罠を張るかな」

二段構え、あるいは三段構えで口を割るように誘導する。監察官と
してもたまに使う手だ。

俺の答えを聞くと、降谷はそうか、と頷いた。安心したような、少
し申し訳ないような、変な顔をしている。

「……何だよ」

「何でもない。特に意味はないから気にしないでくれ」

とてもそれは見えないが、言わないからには言わないだけの理由が
あるのだろう。そう思つてそれ以上質問を重ねることはしなかつた
が、確かにその時の降谷は、何か決心したような顔をしていた。
平和で穏やかなはずの夜が、静かに更けていく。

閑話 ポアロにて

おつちやんが俺や蘭を仕事に連れて行かないようになつてから、ポアロで食事をすることが増えた。部活で忙しい蘭は申し訳なさそうにしていたが、俺は特に気にしていない。おつちやんがなるべく俺たちが学校に行つている間に仕事を片付けようと努力していることも知つていて。むしろ気を遣わせてしまうことを申し訳ないと想いながら、今日も軽快なドアベルに迎えられた。

今日は休日だが、ランチタイムを少し過ぎているためか店内はそれほど混み合っていない。いらっしゃいませ、という声に迎えられて力ウンターの方へ目をやると、見知った顔がカップを傾けていた。

「お、坊主じやねえか」

カウンターを挟んで安室さんと向かい合つていたのは、くわえた楊枝がトレードマークの伊達刑事だつた。にかつと人好きのする笑みをこちらに向けてくれている。

「伊達刑事、こんにちは」

「おお、こんにちは。今日はひとりか?」

うん、と頷いて伊達刑事の隣に座ると、安室さんがさつとお冷を出しててくれる。

「注文はどうする? コナン君」

「じゃあハムサンドとアイスコーヒーで」

かしこまりました、と安室さんは笑つた。伊達刑事はコーヒー飲めるのか、すげえな、とぽすぽす頭を撫でてくれた。

伊達刑事は俺のことを子ども扱いしつつも、以前からよく話を聞いてくれるひとだつた。怪しいものを見た、思いついたことがある、そんなことを耳打ちすればちゃんと考えて動いてくれる、数少ない大人だ。よくよく思い出してみれば、なんだかんだと松田刑事も俺の言葉を聞いてくれる。

今更にしてようやく氣付いた事実に、ちくりと胸が罪悪感で痛んだ。

「そういうや坊主、柊木に手酷く叱られたんだと?」

ぎくり、と肩を震わせる。俺の気まずげな顔を見て取ったのか、伊達刑事は変わらない笑顔でからかうと笑つて見せた。

「まああいつの説教怖えからなあ。一応あいつなりに手加減はしたつもりらしいぞ」

「て、手加減……？」

つまりあの追い詰め方は本気ではなかつたと。

あまり知りたくなかった事実にぎくりと喉が鳴る。絶対に受けたくないけど柊木さんの本気の説教とはどういうものなのだろうか。「柊木のマジ説教氣になるなら松田か萩原にでも聞くといいぞ。あいつら警察学校時代から死ぬほど柊木に説教されてきてるからな。まあそれでも懲りねえんだからすぐえんだが」

「えつ松田刑事も？」

萩原刑事はまださほど話したことないのでひととなりはわからないうが、松田刑事ならそれなりに付き合いはある。少々柄は悪く見えるがとても真面目で頭のいいひとだ。そんな彼でも説教を受けるようなことがあつたのだろうか。想像ができない。

「はは、コナン君、意外と松田はやらかすタイプだよ？」

ハムサンドを俺の前に置いた安室さんが笑う。

「松田も萩原も柊木を通して友達になつたけど、なかなか面白いひとたちでね。さすがに勤務中は真面目だとと思うけど、プライベートでは結構ぶつ飛んでるというか。伊達とも柊木を通して知り合つたんだ」「そうなんだ」

「安室、ぶつ飛び具合についてはお前もひとのこと言えねえだろ」

「ひどいな。皆よりはずつとマシだと思うんだけど」

よく言うぜ、と伊達刑事は苦笑する。親しげに話すふたりに、少し違和感を覚える。柊木さんを通して知り合つたと言うが、そのわりには付き合いの長さを感じさせるような。

少し首を傾げていると、そうだ、と伊達刑事が思ついたように言つた。

「坊主、少し時間あるか？」

「時間？ 大丈夫だよ」

そうかそうかと頷いて、伊達刑事は安室さんに目線をやった。

「安室、少し長居しても構わねえか？ 混んできたら出るからよ」

「構わないけど、何をするんだい？」

その言葉を受けて、伊達刑事は再び俺を見てにんまりと笑った。
「ちと前に、車道をスケボーで爆走してた命知らずがいるって話を聞いてなあ」

ハムサンドを頬張っていた手が、ぴたりと止まる。

「何、メシ食つたあとで構わねえからよ。少しばかり交通安全教室つてやつをやつてみようと思つてな」

とりあえず交通ルールから確認しような？

いい笑顔でそう言つた伊達刑事。背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。

*

正直、道路交通法を含む諸々の法律はほぼ諳んじられるレベルで把握している。

危ないことをしていたのは事実だし、様々な反省も兼ねて大人しく伊達刑事の講義を受けていた。最新の法律事情や実例を踏まえてくれたので非常にわかりやすくはあつたが、申し訳ないことにほとんどのことを見つけていた。

それが顔に出てしまつたのか、伊達刑事は少し苦笑して言う。

「もう知つてるつて顔だな」

「！ あ、ええと……」

「まあだろうとは思つたぜ。下手したら坊主、俺より法律詳しいんじゃねえか？」

そうにかつと笑う伊達刑事に申し訳なさが込み上げる。拳動不審になつてしまつた俺の頭を、まあ気にするなどぐしゃぐしゃかきなでた。

「だがな坊主、お前は法律を知つてはいるが、理解してはいないんだよ」

思わぬセリフに、え、と固まる。視界の端で、安室さんが少し笑つたのが見えた。

だつてそつだろ、と伊達刑事は言葉を続ける。

「理解してゐるなら、何で法律を破るんだ？」

う、と言葉に詰まる。一刻を争う状況であつたから、と言いたいところだが、柊木さんの言葉を聞いた今なら取るべき選択肢が他にもあつたことはわかる。

そんな俺を見て、ひとくち水を飲んだ伊達刑事は優しい声で言った。

「もちろん、坊主には坊主の思うところがあつたんだろうけどな。……そうだな、何つたらいいのか……坊主、法律つてのは、何のためにあると思う？」

「え……」

何のために、法律があるのか。

突然の問いに、ぱつと答えが浮かばない。何のため、といえば、それは。

「……皆が平和に暮らすため？」

同じ国、同じ社会で、より平和に、より安全に、共に生きていくために定められたルール。多くの法学者が頭を悩ませながら築いてきた、人類の偉大な発明のひとつ。

俺の答えを聞いて、伊達刑事は満足そうに頷いた。

「そうだな。皆が笑つて暮らせるように、人間としてよりよく、正しく生きられるように定められているものだ。何せ作つているのは人間だから完璧なものではねえが、それでも完璧に近づこうと皆が頭捻つて考へてる」

じゃあそれを踏まえて、と伊達刑事は続けた。

「道路交通法、いや交通ルールがあるのは何のためだ？」

今度は自然と、口から言葉が漏れた。

「……皆が安全に外を歩くため」

「だな。わかるか？ 坊主。お前は法律を知つてはいるが、何のためにある法律なのかを理解できていなかつた。だからスケボーでどん

でもねえスピードで危険な走行を繰り返した。違うか？」

今度こそぐうの音も出ない言葉に、俯くしかなかった。

法律は知っている。文言も諳んじられる。けれど、本質を理解していないからいざというときは軽んじてしまう。そう言われては反論などできるはずもない。

「ルールってのは内容も大事だが、何故そういうルールがあるのかを考えることも大事ってことだな。……これは俺の持論だがな、ルールはただ守ればいいってもんじやねえと思うんだよ」

俯いた俺の後頭部に、ぽん、とあたたかい大きな手が置かれる。「ルールを守るのはもちろん大前提なんだが、ルールで禁じられていないことはしてもいいのかつったら、別問題だろ？まあゲームとかなら『ルールを利用する』つてこともあるんだろうが、法律っていうルールではそう考えてほしくはねえな」

法律というルールの本質を理解しないまま文言の表面だけを辿り、ルールで禁止されていない部分でそれが勝手に動き始めてしまつたら。

法律の穴をついて、自分のことだけを考えて動くようになつてしまつたら。

「それは、犯罪者の発想に限りなく近いもんだ」

数々の犯罪を相手に日夜戦っている刑事の言葉が、重くのしかかる。

「とまあ、ちつと脱線しちまつたな。もちろんあくまで俺の意見だ。世間にや反論もあるだろうし、これが正しいってわけじやねえ。だが、気が向いたら考えてみてくれ」

頭の上の手のひらが、慰めるように優しく動いた。

うん、と小さく頷くと、よし、と頭上から声が降つてくる。その声に励まされて顔を上げると、伊達刑事の瞳は優しく微笑んでいた。「長々話しちまつたな。安室、ブレンドおかわり頼むわ。坊主にも何かやつてくれ」

「えつ」

「かしこまりました。コナン君はアイスコーヒーおかわりでいいかな

? 試作品のケーキもあるから是非食べてみてほしいんだけど

「あ、安室さん！」

別にいいよ、と言おうとするも、俺の奢りだから気にすんなど伊達刑事に止められる。いや、奢りだと申し訳ないから止めようとしているのだが。

と、思つたところで背後から予想外の声。

「きやーやつだ航クン男前♪ イ俺ブレンドとカルボナーラね」

「こつちもブレンドとミックスサンドな。伊達の伝票につけとけよ」

「萩原刑事に松田刑事！」

「お前らどつから湧いたア！」

いつのまにやら俺たちの後ろにいた二人は、にやりと笑つて手をあげた。驚く俺たちに構う様子もなくカウンター席に座つて、まあ氣にするなど軽く言う。

「ちなみにふたりとも結構最初から話を聞いてたよ?」

「言えよ安室……！」

「せつかくの法律講座に水を差すのも悪いと思つて」

にここにことパスタをゆで始めた安室さんは、どう見ても愉快犯の顔をしていた。

「いやーいい話だつたね、伊達先生の法律講座！」

「うるせえ」

「照れんなよ。まあまあの教師っぷりだつたぞ」

にやにやにやと伊達刑事を見つめるふたりはそれはそれは愉しそうで、そういうえば松田刑事のこんな顔は初めて見たかもしれないと思つた。プライベートではぶつ飛んでいふと言つていたが、なるほどこういう顔もするひとなのか。

「んだよ坊主、俺の顔に何かついてるか?」

「あ、ううん、ごめんなさい」

「あーあれでしょ、陣平ちゃん仕事中いつも仏頂面だから違和感あるよね! だけどホントは普通に喋るし普通に笑ういい子だから、怖がらないで仲良くしてあげてね!」

「よしハギ面貸せテメエ」

わあわあと騒ぎが始まりそうになつたところで、安室さんがにつこりと微笑む。

「マニ、お店だつてわかってるよね？」

はい、すみません。声を揃えたふたりに、思わず伊達刑事と同時に噴き出した。

あまりに自然であまりに愉快な流れに笑いが止まらず、震える肩を何とか止めようとするがおさまらない。

このひとたち、いつもこんな会話をしているのだろうか。そのあたりかさが、伝わってくる信頼感が、傍から見ているだけでもひどく心地いい。

「安室、ちゃんと伝票わけといてくれよ」

「えーっ伊達つてばそんだけち臭いこと言っちゃうの」

「昼飯代くらいで細かいこと言うなよ伊達、男を見せろ」

「お前らが言うな」

軽く交わされるテンポのいい会話に、沈んでいた心が少し軽くなる。

罪の意識も、申し訳なさも、これから自分がやると決めたことへの決意も、俺の心には強く残つてゐる。けれどどうか今だけは。今だけは、この心地のいい空間に浸つていてみたい。

しかしどうしても、安室さんの顔を見て笑うことだけはできなかつた。

『心理的に揺さぶつて、プレッシャーをかけた後に一旦油断させる。そんで情報を守り切つたと相手が安心した時に罠を張るかな』

同感だよ、柊木。僕でもそうする。

そうやつて「楠田陸道」の情報を手に入れた。FBIのちよろさんは好都合だが、ここまで来ると呆れを通り越して同情する。そういうえば「あの男」の潜入がバレたのもFBIの失態だつたと聞いた。ああ、本当に同情するよ。

今回もまた仲間の失態のために、お前は僕たちに捕まるんだから。

*

目の前に座る、ピンクブラウンの髪に眼鏡をかけた男。

夜分の客にも関わらず僕を招き入れ、お茶まで振舞つてみせたのだから驚きだ。よほど自分たちの策に自信があるらしい。……ああ、舐められたものだ。

「ミステリーは、お好きですか？」

確信をもつて並べていく、死体すり替えのトリック。単純だが効果的で、現場を確認した日本警察の目を欺いてみせた。誰がこの策を考えたのかも予測はついている。

おそらくはあの男本人ではなく、彼の小さな協力者。

『まさかここまでとはな……』ですか……。私には自分の不運を嘆いているようにしか聞こえませんが……

「ええ……当たり前にとらえるとね……。だが、これにある言葉を加えると……その意味は一変する……」

君の頭脳には本当に驚かされるばかりだよ、小さな探偵くん。ただの子どもではないことは察していたが、こうも踊らされるとはね。だが、それもここまでだ。

「まさかここまで……『読んで』いたとはな。……そう、この計画を企てたある少年を、賞賛する言葉だつたというわけですよ……」

目の前の男はそれでも顔色を変えない。マスクの下の表情も、変わった様子はなかつた。言葉を重ねながら、そつと自分のスマホをテーブルに置く。

「連絡待ちです……」

俺の読みが正しければ、そろそろカーチェイスに突入しているだろう、来葉峠にいる彼ら。人員は十分に配置してあるし、何より「保険」も用意してある。

「現在、私の連れが貴方のお仲間を拘束すべく追跡中……さすがの貴方もお仲間の生死がかかれば、素直になつてくれると思いまして。でもできれば、連絡が来る前にそのマスクを取つてくれませんかねえ……沖矢昂さん。いや……」

目前の人物を、まっすぐに見据えた。

「FBI捜査官……赤井秀一!!」

目の前の人物は、表情を変えることはない。白いマスクと、その『沖矢昂』のマスク、二重に重ねた仮面の下で、いつたい彼はどんな表情を浮かべているのだろう。

わかっている。きっとおそらくは、策が成功したという、勝利の表情。

「……と、言うと思ったでしょう?」

しかし、そうは問屋が卸さない。

* * *

ああ、来た来た。

俺はただの保険のはずだつたが、どうやら出番がやつてきたらしい。手入れの行き届いた愛用のライフルを改めて構える。たとえ警視庁に缶詰めになつて書類の相手ばかりをしていようとも、こいつの訓練だけは欠かしたことがない。

俺が唯一、あの超人たちに勝るもの。鈍らせるわけにはいかなかつ

た。

「……おおつと、こいつは驚いた」

対象の車をスコープ越しに見つめる。見えた人影は三つ。運転席と助手席に見える影は予測通り、驚いたのは後部座席にいるあの目つきの悪い男。

これは好都合だ。どうやら運まで俺たちに味方しているらしい。

彼がその場に姿を現す可能性も想定はしていたが、それはあくまで天が味方した場合、FBI捜査官たちが自分の車に彼を乗せていることにも気づかないほど鈍かつた場合、そして、それだけ赤井とその協力者が俺たちを舐めていた場合だと、そう考えていた。

「……相変わらずの悪人面だ」

スコープ越しに見る顔にそう笑いながら、耳につけていたイヤホンマイクのスイッチを入れる。そして改めて狙いを定めた。

「裏をかいたつもりなんだろうが、悪いな、ライ」

お前んとこの小さな探偵よりも、うちの策士の方が上のようだぜ？
俺は照準を合わせ、ためらいなく引き金を引いた。

* * *

僕は改めて、目の前に座る男に笑って見せる。ほんの少し、その眉元が動いた気がした。

ここまで来てもその程度にしか動搖を表に出さないとは、さすがと言つておこう。どうやら奥様と同じく、俳優の才能までおありになるようだ。

「マカデミー賞の授賞式はよろしいのですか？ 工藤先生」

彼の背後にあるテレビの中で、最優秀脚本賞が発表される。スポットライトを浴びたのは、工藤優作の姿だった。ふふふ、と堪えきれずに笑ってしまう。

「受賞おめでとうございます、先生。今回の映画は拝見していませんが、僕、ナイトバロンシリーズ好きなんですよ。こんな出会い系でなければ、本や色紙を用意してサインをお願いしたかったんですが」

「僕が工藤優作？　何を言つてゐるんですか、彼なら今テレビに映つてゐるでしよう」

「奥様は変装がお得意だそうですね？　あまり舐めないでください、いくら世界的に著名な貴方でも、出入国の記録までは誤魔化せない」記録によれば、工藤夫妻は昨日日本に帰国し、その後すぐに工藤有希子さんのみがアメリカへ飛び立つてゐる。そう、工藤優作氏は日本を出ていない。マカデミー賞の授賞式に出られるわけがないのだ。「それからこの家……ざつと見ただけでも玄関先に一台、廊下に三台、この部屋には五台の監視カメラがありますね？　目的は録画か……いえ、おそらくは今この状況を、別室で見てゐる誰かがいるのではありませんか？」

状況と事情をすべて把握してゐる「誰か」が、ともすれば貴方に指示を出すために。そしてその「誰か」、僕の読みが正しいならばおそらく。

「江戸川コナンくん。見てゐるんじゃないかい？」

監視カメラのひとつに向かつて、笑いかける。カメラの向こうのことはなどわかりはしないが、向こうの焦りが伝わつてくる気がした。すまないね、コナン君。君の策は本当に見事だつた。もし僕が独立つたら、間違いなく君に裏をかかれていただろう。

そのとき、テーブルの上のスマホが震えだした。

「すみません、失礼します。……はい」

『力モがネギしよつてきたよ』

「……状況報告は端的にわかりやすく」

『ははは、……例のFBI捜査官二名および、赤井秀一を来葉峰にて確保』

く、と唇の端が持ち上がつた。まさか、奴のほうから來てくれるとは。

「被害は？」

『こちら側は特になし』

「わかつた。後は手筈通りに」

『了解』

おそらく、コナン君にはすでに赤井が捕まつたという連絡は入っているだろう。目の前の彼は特にイヤホンを付けている様子もなく、状況をどこまで理解しているかわからない。だが、その頭脳のほどが評判通りなら、ある程度察してはいるだろう。いつたい、どちらに軍配が上がつたのか。

僕は改めて、未だ変装を解かない目の前の男に向き合つた。

「貴方がたが底おうとした男は、すでにこちらで確保しました。大人しくこちらの指示に従つていただければ、決して危害を加えることも、もちろん先生の名声を貶めることはしないとお約束しましょう。しかし、こちらの指示に従つていただけないようであれば、ファンとして非常に心苦しく思いますが、相応の対処を取らせていただきます」

まずはその変装を解いていただけますか、工藤先生？

そこまで言つて初めて、目の前の男は白いマスクを外し、微笑んだ。その穏やかな微笑みは決して赤井のものでも、もちろん沖矢昂のものでもない。

「なるほど、確かにこちらの敗北のようだ。恐れ入つたよ」

そして眼鏡を外し、首元からいつきにマスクをはがす。

現れたのは、よく書籍やテレビでも拝見する、世界的有名な小説家の顔。

「確かに私は工藤優作だ。コナン、お前も来なさい」

すまないね、あの子は上の階にいるから待たせてしまうが、と微笑む工藤先生に、構いませんよ、と僕も笑つた。

「しかし、完全に裏をかかれたよ。こちらの計画もなかなかだと思ったんだがね」

「ええ、よくできた計画でした。こちらに優秀なブレインがいなれば裏をかかれていたのは僕たちの方だったでしょう」「ほう？」

ということは、我々の裏をかいた人物は他にいるのかな？

そう面白そうに言う工藤先生に、につこりと笑つて見せた。「さて、どうでしようか」

小さな足音が階段をおりる音が聞こえてきた。ゆっくりとこの部屋に近づいてきて、ドアをノックする。先生が入りなさい、と声をかけると、躊躇いがちにドアが開かれた。

「こんばんは、コナン君」

「……こんばんは、安室さん。……ううん、……降谷零さん」

なるほど、そこまでたどり着いていたか。いや、名前にまでたどり着いたのは赤井の方だろう。病院で『ゼロ』の言葉に反応してしまったこと、FBI捜査官との関わり方、……いくつもヒントを落としてしまった。あれは失態だった。

「僕のこと、わかっているようだね？」

「……日本警察に、『ゼロ』という俗称で呼ばれるところがあるのは知ってる。降谷零さんの名前を調べだしたのは、赤井さん。貴方の本当の名前は『降谷零』さんで……降谷さんは、『ゼロ』、公安警察の人だよね？」

「やれやれ、反省しないといけないな。君の前でヒントを落としきた」

「確かに降谷さんが『ゼロ』だつて思つたのは病院の事件やジヨディ先生のお友達の事件のときだけ、その前から降谷さんのことは悪い人じやないかもしけないと思つてたよ」

「へえ？ どうしてだい？」

硬い表情をしていたコナン君が、少しだけ頬を緩めた。きゅつと握りしめていたその両手を、少しだけ緩める。

「柊木さんだよ」

「……柊木？」

唐突に出てきた名前に、少し驚く。

確かにアイツは俺の本名や所属を知つていて、どんな状況で誰が相手だろうと僕のことを漏らすはずがない。うつかりヒントを落とすようなことだつて、柊木に限つてあるとは思えない。

「ミステリートレインの一件で、『安室透』さんが『バーボン』……悪い奴らの仲間だつてことを知つた。だから柊木さんが『安室』さんの友達だつて聞いたとき、柊木さんのことも疑つた」

悪い奴の友人で、しかも警察関係者。「降谷零」を知らない者から見れば、「バー・ボン」が情報を抜き取るために近づいたか、それとも「バー・ボン」と協力関係にあるか、考えられるのはそんなところだろう。「だけど、……柊木さんことを知れば知るほど、違うと思つたんだ。柊木さんは決して口の軽い人じやないし、監察官として重要な機密を漏らすことの危険性は誰より知つてゐるはずだ。たとえどんなに親しい友人だらうと情報を漏らすとは思えない。『バー・ボン』だって、情報が目的ならもつと口の軽そうな相手を選ぶよね？……それに」あんなに潔癖な正義を掲げる人が、民間人の平和と安全を守ることこそ警察の仕事だと言い切つた人が「組織」の仲間だなんて、どうしても思えなかつた。

そう強い瞳で言い切つたコナン君に、思わず笑みを漏らす。——その通りだ。そんなこと、絶対にあるわけがない。

「でも、実際に『バー・ボン』と柊木さんは友達だつてふたりとも断言した。だから最初は混乱したけど、……逆なのかもしれないって、考えた」

柊木を「安室の友達」と考えるのではなく、安室を「柊木の友達」と考へるべきなのではないだろうか。つまり、柊木を「黒」と疑うのではなく、むしろ「安室」が「白」だと疑うべきなのではないかと考えたと、コナン君は言う。

「だから安室さんは、本当は悪い人の敵なんじやないかつて、そう思つたんだ」

推理と言つよりは、まるで願望のようなそれ。さすがに参つたな、と前髪をかき上げた。まさか柊木の存在からそんな風に疑われるとは。

「……言つただろう？ 柊木は本当に……僕の友人なんだよ」

「うん。……柊木さんは僕に言つたんだ。俺『たち』は、君の言葉を聞くし、疑わないって」

その「たち」には、降谷さんも含まれてる？

少しだけ不安そうな色をその大きな瞳に浮かべて、コナン君は言つた。そんなことを言つたのかアツ、と少し苦笑しながら、頷く。

「もちろん。というより、君が嫌だと言つても聞かせてもらうし、それが君の真実だというのなら信じるさ。だからコナン君、君も、来てくれるね？」

確保した三人はすでに連行しているはずだ。

君と工藤先生にも、俺たちの巣まで来てもらわなくてはならない。

「……全部、話します。だから降谷さん、もうひとり紹介したい奴がいるんだけど」

貴方を信用するから、そいつのこと守つてほしいんだ。間違いなく貴方たちにとつても、必要な奴だから。

真剣な顔でそう言つた小さな探偵に、僕もしつかりと頷いた。

*

「……久しぶりですね、赤井秀一」

警察庁の、あまり人が立ち寄らないエリアの一室。深夜と言うこともあり、警察庁内はひどく静かだつた。目の前に座るそいつの息遣いが聞こえる程度には。

FBIの三人は後ろ手を手錠で拘束され、椅子に座らせている。もちろん周囲には見張りとして公安の人間を配備。険しい顔でこちらを睨みつけるふたりとは打つて変わつて、赤井自身はいつもと変わらずすました顔をしていた。

「ああ、久しぶりだな。……今は降谷零くんと呼ぶべきかな？」
「どうぞ、お好きなように」

「工藤優作氏と江戸川コナン君は、無事か」
「ええもちろん、……今はね」

僕がそう言葉を付け加えた瞬間、アンドレ・キヤメルは立ち上がりうして周囲に押さえつけられ、ジョディ・スター・リングは動かない手を必死に暴れさせ、激高した。

「あのふたりは一般人よ？ 何をする気なの！」
「やめろジョディ」
「しかし赤井さん！」

「黙れと言つてゐる、キヤメル」

やはりというか、まともに話ができそうなのは赤井だけらしい。FBIの人材不足には本当に同情しよう。そんな思いを込めてひとつ溜息をつくと、もう一度睨まれた。僕を睨む暇があるなら、自分たちの無能ぶりを嘆いたらどうだらうか。

「今は、ということは、交渉の余地はあるということか?」

「ええ、交渉の相手は貴方の上司になるでしょう」

「そうか、ならばいい。ジェイムズは彼らを見捨てるような真似はせんだろう」

現在ジエイムズ・ブラックには迎えを寄越している。もう一時間とかからず警察庁に到着するだろう、交渉はそれからだ。

「俺の身柄も、その交渉次第か?」

こうして拘束されたら、さつさと組織に売られるものと思つていたんだが。

そうかすかに笑つて見せる赤井に、少し眉を寄せた。

「僕としても、そのつもりだつたんですけどね」

いかにも残念、と言わんばかりに、首を振つてみせた。赤井の身柄を組織に売り渡せば、組織における僕の地位はもつと確固たるものになる。「あの方」や「ラム」にももつと近づけるかもしけない大手柄になるというのに。

「もつたいない、と言われまして」

「……もつたいない?」

「ええ」

そいつを敵方に売ることがその案件の決定打になるつていうんなら話は別だけど、そういうわけじやないんだろう?

不思議そうな顔で言い放つた我らが「ブレイン」の顔が、脳裏に浮かぶ。

『お前の生活から察するに人手足りてないんだろう? 敵に売る以外の使い方ができるんならひとまず手元に置くべきじやないか? とりあえず情報搾り取つて走らせるだけ走らせろよ。使えるもんは使つとけ。そんでも他に使い道がなくなつたら売ればいいんじやねえの?』

俺ならそうするけど』

何の気なしにそう言い放つたあいつは、本当に恐ろしい。あいつが味方であつたことは、もしかしたら僕たちにとつて最大の幸福だつたかもしれない。もし敵だったらと考えると、それだけで寒気がする。

目の前の「人間」相手にはどこまでも慈悲深いのに、頭を仕事モードに切り替えて人を「駒」としてしか見なくなつた時のあいつは、人のことは言えないが本当に「ひとでなし」、まさに合理主義の鬼だ。「コナン君も貴方のことを気にしていましたしね。ここで貴方を組織に売つたら、彼の協力も得られなくなりそうだ」

彼は工藤先生、そして一緒に連れてきた二名とともに別室で待機してもらつていて。一応監視はつけているが犯罪者のように扱うつもりはない。とりあえず明日は学校を休んでもらうことになるだろうが、できる限りは元の生活に早く戻れるよう考えるつもりでいる。もつとも、彼が話してくれるという「真実」によつては、そもそもいかないだろうけれど。

「……君に助言をした『ブレイン』と、あの距離から俺の手にあつた拳銃を弾き飛ばし、車をパンクさせた『凄腕のスナイパー』には、是非お目にかかりたいものだ」

く、と赤井は不敵に笑つてみせる。ああ憎たらしい、組織にいるときからコイツのことは気にくわなかつた。FBIだとかそういうことを抜きにしても、多分コイツとは仲良くなれないし、なりたくもない。生理的に無理というのはこういうことを言うのだろう。

「それも交渉次第でしようね。貴方の上司がこちらの不興を買わないことを祈つていますよ」

「せいぜい楽しみにしているさ。ところで降谷君、煙草が吸いたいんだが」

「一生禁煙してろヤニ中毒」

緊張感のない赤井に苛立ちを抱えたまま、もうすぐ到着するであろうジエイムズ・ブラックを出迎えるべく部屋をあとにした。

さあ、これから忙しくなる。

それは、工藤邸に乗り込む前夜のこと。

仕事を終えて帰ろうとしていた柊木を警視庁の一室に呼び出した。
「……いきなり何なんだよ」

仕事後で少しくたびれた様子の柊木は、俺とヒロのほかに誰もいないことを確認して首元のネクタイを緩めた。いつもの品行方正な態度が崩れ、素の柊木が顔を出す。

「俺だけ呼び出すつて、何かトラブルか?」

「いや、ちょっと雑談がしたくなつたんだ」

「意味わからんねえんだけど。諸伏、降谷寝てねえの?」

「うーん、確かに昨日は俺も降谷も徹夜だつたかなあ」

そう苦笑するヒロをよそに、呼び出しどいて雑談つて何なんだよ、俺帰りたいと、遠慮なく文句を言う柊木に少し笑う。ああ、早く帰りたいというならさっさと済ませてしまおう。

「柊木、昔よく戦略立てて遊んだの覚えてるか」

「警察学校の時の? ミステリリーにあつた事件とか実際にあつた事件を題材にして自分ならどう対応するかつて言い合つてた奴?」

「ああ」

一番最初のきっかけは、確かに有名な刑事ドラマの話になつたことだつたと思う。銀行での立てこもり事件を、ドラマの中の刑事たちは鮮やかに解決していた。しかしファイクションはファイクション、まだ卵だつたとはいえ警察官を志していた自分たちからすれば、その制圧には抜けも多かつた。

『あれじや人質が危険だよな』

『ああ、拳銃を所持している犯人に対してあの行動は無謀だと思う』
『犯人側との会話も成立してんだから、もう少し粘つてもいいと思うんだよ』

『確かに、交渉の余地があるなら時間をかけてでも安全策に出るべきだろう』

ああだこうだと話し合い、いつの間にか白熱して、それから他のミステリーや事件においてもそんな話をするようになつた。時には他の同期たちも巻き込んで議論を重ね、そのたびに感じる、柊木の作戦立案能力の高さ。

日ごろの見せる優しさとは裏腹に、どこまでも冷静に冷徹に容赦のない策を練る柊木に、正直なところコイツの本性はどこにあるんだと、二面性を疑いもした。だが、いつだつて被害者だけでなく制圧にあたる警察にも被害が出ない策を考えるコイツを見て、やっぱり優しい奴なのだと反省したことを覚えている。

「あの遊びを、もう一度やりたいんだ。柊木」

そうにこりと微笑んで見せると、全てを察した柊木はすっと表情を消して立ち上がるうとした。それを柊木の背後に立っていた景光がさつと押さえつける。

「まあまあ柊木、ほら遊びだから。ちよつとだけ付き合つてやつて?」「どう考へても遊びじやねえだろそれは。俺は警務部の人間だぞ、そつちの仕事はそつちでやれ。越権行為と情報漏洩も承服できない」「遊びだよ柊木、俺が警務部の人間を公安の事件に巻き込むわけないだろ?」

「その嘘くさい笑顔をやめる。……何だよ、作戦ならお前だつて立てるられるだろ」

「だがお前には劣る」

そうすっぱりと言うと、柊木は驚いたように瞬きをした。何だよ、俺が敗北を認めるのがそんなに珍しいか。悔しいが事実なんだから仕方がないだろう。

「これは遊びだ、柊木。お前はただ、これから俺が説明する作戦について、思つたことを言つてくれればいい。個人名や地名、詳細を言うつもりはないし、作戦 자체にお前を巻き込むことは決してない。フイクションの話だとでも思つてくれ」

そこまで言い切ると、柊木は苦虫をかみつぶしたような顔になつて、座りなおした。結局、柊木は俺たちの「お願ひ」に弱い。

ごめんな柊木、お前が断らないのを知つていて頼んでいる。

「……ファイクションの話なんだよな、降谷」

「ああ、ファイクションだよ」

柊木の背後でヒロが親指を立てる。

それに笑顔を返し、俺はあのいけ好かない赤井秀一確保の段取りを説明し始めた。

ゼロが作戦の流れを説明する間、柊木は遮ることなくじつと話を聞いていた。時折指が何かを辿るように動き、頭がゆっくりと左右に揺れる。柊木が考え方をするときの癖だ。

全ての説明が終わつたとき、柊木は十秒ほど目を閉じて考え、またゼロを見据えた。

「概要は把握した。敵組織とはまた別の、第三者的組織の一員である『対象』を確保したいってわけだな」

「ああ。この作戦、どう思う？」

「別に悪くはないんじやないか。作戦自体はシンプルだが、その方が動きやすいし。……ああ、一応大前提確認しどくけど」

「何だ？」

この作戦やお前が「対象」の変装に確信をもつたことを相手にバレている可能性は。そう問われ、ゼロが数秒考える。今までの行動を振り返つているのだろう。

「……そういうえば、バレている可能性もあるな」

「じゃあダメだその作戦、抜け道がある」

あっさりと柊木は切り返した。え、とゼロとふたりで硬直する。

「その変装がどれほどのもんのか知らねえけど、もとの『対象』の本來の姿とは全く違う、別人レベルなんだろ？」

「ああ、変装としては相当なレベルだと思う」

「完璧な変装であるという前提で考えて、正体がバレたことを悟つた『対象』はどうするか。俺なら中身を入れ替えるね」

時が止まつた。変装の「中身」の入れ替わり。赤井と別の死体をす

り替えて死亡偽装までやつてのけた奴らだ、有り得る。声も見た目も変えてしまう完璧な変装であるがゆえに、中身が入れ替わっていても気付かない。

しかもおそらく赤井の変装は赤井自身の技術によるものでなく、変声機や特殊なマスクに頼つたもの。それなら、他の誰にだつて「沖矢昴」になることは可能だ。

「中身に誰使うかは……微妙だな、同じ組織に属する仲間か、また別の協力者か。潜伏に外部の協力者の存在は不可欠だし、そこらへん調べてみればいいんじやねえの」

外部の協力者、そう言われて浮かぶのはやはりあの小さな探偵。いやしかし、彼では体格が違いすぎる。他の協力者と言われば――たとえば、あの家を貸している工藤家人間。

同じことを思い至つたのか、その瞬間ゼロと目が合つた。

「……ヒロ、彼らの所在を確認してくれ。出入国の記録も含めてだ」「了解」

スマホを取り出して連絡をまわした。確か息子である工藤新一は行方が知れないらしいが、工藤夫妻は海外に生活拠点があつたはず。最近の帰国の状況についても調べておこう。

「あとはそ娘娘だなー……お前本当にカーチェイス好きな」

「別に好きと言うわけでは」

「カーチェイスを追い込み漁的に使うのは悪くねえと思うけど、とどめと言うか保険は別に用意しておいた方がいいんじやねえか」

カーチェイスだけで何とかしようと思つたら、追いかける側だつて無茶しかねないだろ、大事故になるぞと呆れた様子で言われ、む、とゼロは黙つた。

「ちなみに保険つてたとえば?」

「お前自分の特技も忘れたの?」

ちよつと口を挟んでみると、柊木はさらに呆れた様子で、疑問に疑問を返された。えつ俺の特技つてまさか。

「地理的条件にもよるけど、ある程度カーチェイスの場所が絞り込めるとなら狙えるスポットはあるはずだ。数でこちらが勝るなら、足さえ

潰しちまえばこっちのもんだろ。自分たちの車ぶつけて止めるよりは平和的だし安全なんじやないか」

お前の言う「平和的」って何だろうと頭の片隅で思いながら、来葉峠の地理を頭の中に思い浮かべた。道は入り組んでいるが、確か途中でストレートの道がある。俺は赤井のようにロングレンジを正確に的に当てる技術はないが、そこの距離であればたとえ動く対象相手でも外さない自信はある。昼間のうちに下見しておけば、決して不可能な策じやない。

ゼロに向かつて頷いてみせると、同じように頷きを返された。

「ま、その辺踏まえて練り直せば何とかなるんじやないか」

「こき、と柊木は肩を鳴らす。めんどくさいと言わんばかりの顔に、思わず苦笑した。ゼロの策を受けてそれだけの指摘をさらりとできるのに、柊木的には大したこととしたつもりはないらしい。ゼロからすれば、そういうところも含めてなかなか柊木に勝てないのが悔しいのだろう。

「ああ、悪いな。『ファイクション』の話に付き合わせて」

「本当だよ。まあ、その『ファイクション』の作戦が成功するよう祈つておくよ。ようやくお前らにも手足ができるようで安心した」

その言葉にえ、とゼロは固まつた。柊木もきょとんとする。

この作戦の成功後については、ゼロと俺とでは意見が分かれていった。赤井を組織に売ることでより深く組織に食い込もうとするゼロに対し、それは早計ではないかと俺は止めていた。別に情で赤井を助けたいと思うわけではないが、F B IはどうやらC I Aからの潜入しているキールとコネクションを持つていてるようだし、赤井自身も相当に優秀な捜査官だ。みすみす餌にして捨てるには惜しくないかと、俺はそう主張していた。

「何、そいつ捕まえた後は使わねえの？」

「使うつて……」

「敵組織に売ろうとでもしてたか？ それも悪くはないけど、もつたいなくないか」

「もつたいない？」

焦りすぎるのはお前の悪い癖だぞ、と柊木はさらりと言つて、言葉を重ねた。

連日徹夜をしてしまうほど人手が足りてない現状で、わざわざ使えそうな手足をさっさと売ってしまうなど。情報収集なり荒事なり、使つて使つて使いつぶして、それ以外の使い道がなくなつたときに売ればいい。

そう笑顔で言い放つた柊木に、きっと悪魔はこういう顔で笑うんだろうな、と俺は思った。俺公安でわりとヤバイこともそれなりにやつてきたけど、コイツの発想の方が怖い。

「……なるほど」

そして確かに、という顔で頷かないでほしい。確かに、確かに理には適つてているけども。

とりあえず赤井を売ることはやめてくれたらしいので、もうそれだけでいいかと遠い目になつた。

感謝しろよ赤井、この悪魔のおかげでお前命拾いしたぞ。多分死んだ方がマシってくらい使いつぶされるけど。そこは違法捜査含め数々の犯罪行為を繰り返した代償として甘んじて受け入れてもらう。

「んじゃ、もういいか？」

「ああ、いきなり呼び出して悪かつたな、柊木」

「別にいいけど。もうこんな『遊び』は勘弁だぞ」

「ああ、もちろん」

柊木の言葉に、ゼロはにこりと笑顔を見せた。その笑顔に少し違和感を覚える。これは、何か隠している時の顔に見えるのだが。

「……降谷？」

柊木も何かを感じ取つたのか、少しけげんな顔でゼロを見つめた。ゼロは笑顔を崩さないまま、何だ、と軽く返事をする。

「……俺にできることなら手伝うし、言えないことは聞かないが」

「助かる」

「けど、何か企んでんなら俺が怒らない程度のレベルで頼むぞ」

「それはどの程度のレベルだ？」

「オイ真顔で返すな」

冗談だとゼロが笑い、柊木も苦笑を返す。

じやあな、と帰つていく柊木を見送り、俺たちもデスクに戻つた。「作戦を立て直す。諸伏は夜が明け次第、スポットの下見に行つてくれ。それまでは仮眠でいい、明日に向けて万全に体調を整えろ」

「了解」

「風見、工藤夫妻の所在は？」

「こちらに出入国の記録が」

渡された書類に、ざつと目を通す。一瞬でゼロの唇の端が上がつた。先に記録を見ていたのであろう風見さんが、不思議そうな顔で言う。

「明日は確かマカデミー賞の授賞式がアメリカであるはずです。もう出国していないと間に合わないはずですが……」

「間に合わせる気がないということだろう。当たりだな」「さすがあいつだな。じやあ俺は心置きなく仮眠してくる」

ひらりと手を振つて仮眠室へ足を向けた。

背後からはゼロが矢継ぎ早に指示を飛ばしているのが聞こえてくる。明日の作戦に向けて明らかに高揚している幼馴染に、ふと苦笑した。

「……しかし、何を企んでるんだ、あいつ」

さつきのゼロの顔は、確かに何かを企んでいる顔だった。しかも、柊木に対して。今回のこと以外でも、何か柊木に頼み事でもする予定なのだろうか、と首を傾げつつ、俺は仮眠室の狭いベッドにもぐりこんだ。

そして俺はそのちょうど二十四時間後、完全に柊木の読み通り、赤井の手にあつた拳銃を弾き飛ばし、その車のタイヤに鉛玉もぶち込むことになる。うんうん、最終的に誰も怪我していないんだから、これは「平和的」の範囲、のはず！
そう無理やり自分を納得させて、俺は肩にライフルケースを担ぎあげた。

初めて向かい合つた初老の捜査官は、到着した段階で覚悟を決めた顔をしていた。こちらが迎えをやつた理由も、到着した先が警察庁だつた理由も、もうとつくにわかつていいのだろう。

「……うちの捜査官のことはいい、協力してくれた彼は無事だろうか」彼と言うのは、コナン君のことだろう。おそらくこの捜査官は、この夜の詳細を知らない。工藤優作氏が関わっていることを知らないから、「彼ら」と言わず「彼」と言つたのだ。

開口一番に確認するのが協力者の無事だつたことには、素直に感心した。

「……心配なく。危害は加えていませんし、今後もそのつもりはあります。もちろん、罪に問うこともしないつもりです」

「……ご恩情に、感謝する」

すっと綺麗に頭を下げた彼に、国は違えど確かに「警察」なのだと実感した。だつたら最初から法に則つたやり方で動いてほしかつたものだが、それをしなかつた理由、できなかつた理由もだいたい察している。

「そちらの捜査官も、拘束はさせてもらつていますが無事ですよ。無傷です」

「……日本警察は、随分と優しいようだ」

「そうでしょう？……日本警察に捜査協力を求めなかつた理由は、こちらの内部に鼠がいる可能性を考えていたからですね？」

ジエイムズ・ブラックは一切の顔色を変えず、そつと目を伏せた。そして、ゆっくりと頷く。

「……FBIも長く例の組織を追つているが、未だに実態を掴み切れていない。ただわかつていいのは、世界各国にまたがる犯罪シンジケートであり、おそらく相當に地位の高い……たとえば資産家や政治家といつた、影響力の強い人物とつながりが考えられるということ。そして、何かと日本と言う国と縁があるということくらいでね」

日本にいる、「影響力の強い人物」が組織とつながっている可能性が、否めなかつた。その「人物」が、日本警察の動向や情報を得られる立場にいないと、保証がなかつた。

「だから日本警察を避けたんですね。こちらに捜査協力を持ち掛けることで、何らかの情報が組織へと伝わってしまうかもしないことを危惧した」

随分と舐められたものだ、と思う。しかし半面、組織と直接関わりのある人物ではなかつたにしろ、確かに日本警察にも鼠がいたのも事実だ。そのせいで景光の潜入は失敗に終わり、今だつて堂々と顔を晒せない生活が続いている。

「……しかし、そちらのしたことは違法捜査に他ならない」

「承知している。私のことも拘束し、FBIに正式に抗議を送つてもらつて構わない」

謝罪の言葉が出ないのは、間違つたことをしたとは思つていなからだろう。彼らの目的は、ただ「組織を壊滅させること」。その目的に向けて彼らは彼らの最善を尽くし、この国で捜査を続けた。そしておそらくはそれが発覚した時、どうなるかも理解していた。少なくともこの人は、その覚悟をもつて日本に来ていたのだ。

「……国が違えば文化が違い、主義が違う。正義や捜査に対する考え方も当然異なるでしょう。そういう意味で、貴方方のやり方を肯定こそできなくとも否定はしません」

そう言うと、彼は初めて驚いたように目を瞬かせた。どうやらこの展開は予想していなかつたらしい。少しだけ唇の端を上げて、微笑んで見せた。

「取引しましよう、Mr. ブラック。正式に日本警察と捜査協力の協定を結んでください。そうすれば貴方がたはFBIからお叱りを受けることもなく、今後も日本で捜査を続けることができる。捜査協力の協定開始の日付を誤魔化せば、今までのことも不問にできます」

本国への強制送還は、貴方も本意ではないでしょうか？

そう微笑むと、彼もまた数拍おいて苦笑し、肩をすくめてみせた。

「そちらの要求は？」

「FBIがもつ、組織に関わる全ての情報を。キールとの繋がりもあるでしよう、そちらから得た情報も共有していただきます。また、捜査における指揮権は我々がもちます」

「君たちの手足になれと」

「何か不服でも？　ここは我々の国だ、これ以上の好き勝手は許さない」

「ちなみに、断つた場合はどうなるのかね？」

面白そうに尋ねた彼に、そうですね、とあえてもつたいぶつて見せた。

「もちろんFBIからのお叱りは受けて頂きます。それから違法捜査の対価として、……『赤井秀一』の身柄を頂きましょうか」
びくり、と彼の肩が揺れた。ああ、動搖を見せたな。強がつてみせても、やはり仲間の身は心配らしい。交渉事において動搖を見せることは、急所を晒すことに等しい。

「彼を組織に売り渡します」

そして俺が組織での地位を固めるための、犠牲になつてもらう。もちろんそのあとは、責任をもつて組織を潰すのでは非安心していただきたい。

そういう気持ちを込めて笑つて見せると、彼はすつと両手を上げた。

「取引に応じよう。我々は君たちの指揮下に降りる」

「ご英断に感謝します」

ではさつそくその用意を、と腰を上げると、降参の意志を示した彼は苦笑した。

「君の話は赤井君から聞いていたが……話に聞くより、ずっと恐ろしいな」

ずっと有能で、ずっと冷徹だ。うちの捜査員たちにも、見習わせたいほどに。

そのまま賞賛に、僕は少し考えて、改めて笑つた。

「ええ、恐ろしいでしょう？　僕たちは」

優秀な人間は、決して僕ひとりではない。

FBIとの正式協定の話も終えて、そろそろ夜明けも過ぎ、朝の出勤ラッシュが始まるうかと言う時間になつた。ヒロや風見に少し休んではと勧められたが、そんな暇はない。というより、とんとん拍子に進む事態に高揚して眠れそうにはない。

FBI、そしてCIAの情報を得られるようになつたことは非常に大きい。しかも、かなりこちらに有利な条件での協定も結べた。何年もかけて進めてきた捜査がこれで一気に進むかも知れない。そう思うと、少々の疲労や睡眠不足など気にもならなかつた。

さて、次の仕事に取り掛かるとしよう。僕はノックをして面会室代わりに使つてゐる会議室の扉を開けた。

「おはようございます。その様子だと、あまりよく眠れなかつたようですね」

そこに座つていたのは、工藤優作氏、江戸川コナン君、そして阿笠博士と灰原哀さん。後者ふたりはコナン君たつての頼みで連れてきていた。彼女はひどく不安そうな顔でこちらを見ている。彼女を保護してほしいというその事情も、まだ聞けていなかつた。

「降谷さんこそ、寝てないんじゃないの？」

「仕事が詰まつていてね。……さて、先に君の懸念事項を片づけておこうか、コナン君」

椅子に腰かけながらそう言うと、ぴくりとコナン君の肩が震えた。少し不安げな瞳が、それでも精一杯強がりながら僕の顔を見る。

「赤井秀一を組織に売り渡すことはしないよ。FBIと正式に捜査協力をすることになつた」

そう言つた瞬間、コナン君は大きく安堵の息をついた。その様子を見て、工藤先生と阿笠博士が苦笑する。

「……ねえ」

しかしひとりだけ、彼女だけが不安そうな顔を一転させひどく険しい表情を浮かべていた。地を這うようなその声に、コナン君と阿笠博士はぎくりと肩を揺らす。

「確認させてもらおうけれど、『沖矢昴』は『赤井秀一』の変装だつたと
いうことで、間違いないのかしら？」

「？ そうだね。君は知らなかつたのかい？」

コナン君と一緒に来た時点で、彼女も共犯なのだろうと思つていた
のだが。そう思いつつ返事をすると、彼女は恐ろしい目つきでコナン
君たちを睨んだ。

「ええ、知らなかつたわ。隣の家にあの男が住んでいたことも、盗聴器
をしかけられたりスマホをハッキングされたりして逐一行動を監視
されていたこともね！」

「だ、だからそれはオメーの護衛のために仕方なく……」

「仕方なく？ 仕方なくって言つたの貴方。百歩譲らなくともストー
カー、犯罪よ！」

昨晩のうちに念のため、阿笠博士の許可をとつて一応彼の家を調べ
させてもらつたが、いくつもの盗聴器が見つかつた。事情を聞いてい
なくともコナン君が彼女を保護してほしいと言つた以上、彼女は組織
に狙われる何らかの理由があるのだと推測していた。

その彼女の家に盗聴器があつたのだから、もしや組織の手が、と考
えていたのだが、最悪な方向で違つたらしい。

「……これで赤井をいつでも逮捕できるな」

「被害届を出すわ！ 捕まえて頂戴！」

「落ち着け灰原！ 降谷さんもとりあえず待つて！」

これは確実に逮捕できる。赤井を脅す材料が増えたことに内心ほ
くほくとしながら、改めて俺は胸ポケットから警察手帳を取り出し
た。

これを出して自己紹介するなんてどれだけぶりだらうか。

「改めて、警察庁警備局警備企画課、通称『ゼロ』所属の降谷と申しま
す。これより皆さんのは身柄は公安で預からせていただく。指示に
従つていただけるようであれば手荒なこともなく、できる限り早く元
の生活に戻つて頂けるよう尽力することをお約束します。よろしい
ですね？」

一瞬で空気が切り替わる。

工藤先生はす、と目を閉じ、阿笠博士は驚きつつも真剣な顔で僕の言葉を受け止めた。灰原さんはきゅ、と唇を結び、コナン君は決意したように口を開く。

「俺たちにも自己紹介させてください、降谷さん」

「自己紹介？」

「俺の本当の名前は、工藤新一。ここにいる工藤優作の息子で、帝丹高校二年生、十七歳です。それと……」

「……私は宮野志保、組織でのコードネームは『シェリー』。貴方とはベルツリー急行で話したわね、バーボン」

「……詳しく話を聞こうか」

それが君の真実なら、僕はそれを信じよう。そんな決意と共に領くと、彼らはゆつくりと今までの経緯を話し始めた。一言も聞き漏らすことのないようじつと耳を傾け、僕は脳内の情報を整理していくた。

*

長い長い、話が終わる。概要だけかいつまむという話ではあつたが、概要だけでも優に数時間が必要とした。それだけのことを彼らは経験してきたのだ。

「……概要是理解したよ」

「……信じてくれるの？」

「そんな調べればすぐバレるような嘘をつくほど君は馬鹿じゃないだろう。形式上、指紋とDNAは提出してもらうけどね」

「DNAって……」

そう言い淀んだ灰原さん——宮野志保さんを、僕は正面から見据えた。確かに、よく似ている子どもだとは思っていた。明美にも、——エレーナ先生にも。

蘇る懐かしい思い出にそつと蓋をして、僕は「公安」の顔のまま続ける。

「宮野明美のDNAのデータがある。それと照合させてもらうよ」

「！ お姉ちゃんの……」

彼女の遺体は無縁仏として秘密裏に葬られた。もし、いつかそれを許されるときが来たら、お墓の場所くらいは教えてあげたいものだ。明美も、きっと妹に会いたがっている。

「そのデータも踏まえて、君たちの存在については機密情報という扱いで報告を上げる。この事件に関わる公安の人間、それから……まあ F B I にも共有することになるだろう。現状外に漏らすつもりはないから安心してほしい」

「現状、というのは？」

さつと工藤先生が口を開いた。こういった説明においてよく使われる「現状」という言葉だが、さすがに見逃さなかつたか。さすがにそのあたりは経験値が違う。

「現状と申し上げた理由は二つあります。一つは、『現状』外にもらす必要がないからしないというだけで、今後もしその必要が出ればその限りではないということ。もう一つは、『現状』私が実質この案件の指揮を執っていますが、今後もそうだという保証がないということです。もし別の人間が指揮を執り、その人間が必要だと判断すればその限りではありません」

特に感情を込めることもなくそう説明すると、工藤先生はまたも思案するように目を閉じ、阿笠博士は焦ったような表情を見せた。対象ふたりもぐ、と唇を噛む。

僕たちは公安だ。日本国家のために動くのであって、子どもふたりのためには動けない。彼らの犠牲で国が守れるのであれば、躊躇なくそれを実行しなくてはならない立場なのだ。

僕は一度立ち上がりてドアの外にいた風見に飲み物を頼み、また席に戻つた。

「では、ふたりの身柄は今後どうなる？」

「監視下に置くことにはなりますね。私としては我々の監視から逃げようなどと考えないこと、要請に対しても素直に応じることを確約頂けるのであれば、基本的には今まで通りの生活で構わないと思つています」

「あら、随分優しいのね」

犯罪者である私を捕まえないの、と皮肉気に笑つた彼女に、呆れた顔を返した。この子は自分の立場をそんな風に理解しているのか。

「勘違いをしているようだが、我々から見た君は『保護対象』だよ、宮野志保さん。君は確かにいくつかの法律に反してはいるが、そもそもの出生や育つてきた環境が悪すぎる。君の罪を問おうにも、『無理に犯罪に協力させられた被害者』として捉えられる可能性が高いだろうね」

この答えを想定していなかつたのか、彼女はその目を真ん丸にして呆けた。

ああ、その顔の方が子供らしくていいな。たとえ本来の年齢が十八歳であろうと、未成年であることには変わりはない。子どもは子どもらしくなんて言うつもりはないが、えてひねくれた視点で世の中を見る事もない。

そう教えてくれる人が、彼女にはいなかつたのだろう。

「ただ、君の持つている組織の情報は我々にとつて得難いものだ。その情報の提供を約束してくれるなら、という話にはなるが。そうすれば阿笠博士ともども、今まで通りに生活してもらつて構わない」

監視はつけるけど、赤井のように盗聴器をつけるつもりはない。そういう付け加えると、志保さんはきゅつと唇を結んで俯き、阿笠博士は苦笑してその頭に手を置いた。

今までの経緯を話してもらつた中で、阿笠博士の家が彼女にとつてどれだけ大切な場所なのかは察したつもりだ。できることなら、それを奪いたくはない。

「どうだろうか、宮野志保さん」

「……私の知っていることは全て話すわ。できる限りの協力も約束する。ただ、ひとつお願ひしたいのだけれど

「何だい？」

「アポトキシン4869の研究は続けさせて。何としても解毒薬を完成させなければならないの」

そう言つた彼女の瞳には、強い意志が浮かんでいた。これまで自分がしてきたことへの罪悪感、償い、そしてそれ以上に、研究者として

の意地だろうか。自分の決めたことを貫こうとするその姿勢は嫌いじゃない。

「許可しよう。解毒薬が完成した暁には、薬を必要とする人への投与も認める。もし投薬実験にモルモットが必要だつたら言つてくれ、赤井を派遣しよう」

「貴方が話の分かる人で本当に嬉しいわ。よろしくね降谷さん」

「ちょっと待つて！」

そう志保さんと握手をしたところでコナン君、もとい新一君が叫んだ。

もしかして赤井のこと素で嫌つていなかと新一君は言い募るが、仕事に私情は挟まないにしても僕だつて人間だ。

「特に理由なくこいつだけは無理つていう奴、いない？」

「わかるわ。生理的に無理なのよね」

「嫌いな理由もあげようと思えばあげられるけど、結局言葉にできない部分から無理なんだよ」

「お姉ちゃんの元彼でなくともあの人には無理」

もう一度志保さんと目を合わせて頷き、堅い握手をかわした。エレーナ先生の娘さんだと明美の妹だとそういうことを抜きにしても、彼女とは仲良くなれそうだ。

そんな僕たちを見て阿笠博士は苦笑し、新一君は頭を抱える。

「良かつたのう、哀君」

「……ええ」

安心したように笑う博士に、志保さんも淡く微笑んだ。その笑い方はエレーナ先生によく似ている。いつか彼女と、そんな昔話をする日が来れば嬉しい。

「工藤新一君、君が今後も毛利探偵事務所にいるつもりなら、それでも構わない。ただし工藤先生、貴方については……」

「わかっている。私も当分は生活拠点を日本に戻し、自宅で生活しよう。妻も明日には帰国するだろう、彼女にもそうしてもらうよ」「結構です。一応念押しさせて頂きますが、ご子息をつれて逃亡などとは考えないように」

公安警察の恐ろしさは理解しているつもりだよ、と工藤先生は苦笑した。正直なところ哀さんよりも、この人の方が何を考えているかわからないという点で面倒だ。今までが今までだけに、捜査に横やりを入れてきそうでつい警戒してしまう。

「私としても、一度と故国の人間が踏めなくなるようなことはしたくない。息子の身の保証さえ頂けるのなら、大人しく自宅で仕事をしているよ。この件に関して他言することもないと誓う。妻にもきちんと言い聞かせよう」

思つたよりも殊勝な返事が返ってきて拍子抜けした。はつきり言つて逆に胡散臭いが、今はとりあえずその言葉を信じるとしよう。彼も人の親だ、是非ご子息のためにも賢明な行動をとつて頂きたい。「今までが今までだから信用されてないのは理解しているさ。好きに監視をつけてくれて構わないよ。新一、お前はどうする？」

「俺は……」

少し考え込んだ新一君に、そつと目線を合わせた。彼の今後について話す前に、これだけは確認しておかなくてはならないと思つていた。

「新一君、君はベルモットと関わりがあるね？」

「え？ ええ、さつき話した通りです」

「ベルモットはなぜか、君と蘭さんには手を出すなどうるさくてね。心当たりはあるかな」

「ベルモットが？」

む、と彼は考え込むが、どうもピンと来ていらないらしい。あの魔女が君たち以外の人間に對してどれだけ非情で容赦がないのかを知らないのかもしれない。それだけベルモットにとつて、新一君と蘭さんは特別なのだ。

「……俺にも、よくわからないです。幼児化のことも知つていて、組織にバラしてもねえし……確かに母さんとは仲が良いみたいだけど」

「……なるほど？」

工藤有希子さんが帰国されたら、彼女からも話を聞く必要があるだ

ろう。できる限りの情報を集めること、情報を集める手段を増やして
おくこと、それが今、僕がやるべきことだ。

「——工藤新一君。君には我々の『協力者』になつてもらいたい」
すべては日本国家の安寧のために。そのためなら、何だつてしてみ
せる。

俺の言葉を聞いた新一君は目を丸くし、工藤先生は眉をひそめた。

昔から虫の知らせと言うのだろうか、嫌な予感は何となく当たる方だつた。

いつも通り目を覚まし、いつも通り朝食を食べ、いつも通り出勤する。嫌な予感が消えないくせにいつも通りに警視庁に到着してしまつたものだからむしろ気味が悪い。

抱えていた案件もある程度ひと段落したし、今そんなに危惧しなければならないような案件はないはずだ。それなのに首の後ろは何だかぞわぞわして油断するなど訴えてくる。仕事場のドアを開けようとした瞬間には、ぞつと寒気がした。

いつたい何だつてんだと、やけになつて勢いよくドアを開ける。

「……あれ、おはようございます」

そこに立つっていたのは、直属の上司である大河内さんだつた。いつも変わらないしかめつ面で、ああ、と言声を出す。いつも俺が一番乗りなのに、まさか大河内さんが先に来ているとは思わなかつた。本当に嫌な予感しかしない。

「……柊木くん」

それなりに親しく話せるようになつたこの人が俺を「くん」付けて呼ぶのは、決まつて仕事の話をする、それも改まつたとき。何だよ特に大きな失敗をした覚えはないんだけど。おそるおそる何でしようか、と答えると、大河内さんはぐつと眼鏡のブリッジを上げた。

「今すぐ最低限の荷物をもつて警察庁に向かいなさい。すでに警察庁のロビーに迎えがいるそうだ。そのあとは迎えの指示に従うように」「……大河内さん？」

「君には質問も拒否も許されていない。すぐに向かいたまえ」

切り捨てるような口調に、大河内さんよりさらに上からの命令であることを察した。今朝からの嫌な予感はどうやらこれだつたらしい。警察庁に呼び出されるなんて訳がわからないが、大河内さんに問い合わせ

ただしても困らせるだけで何も答えてはくれないだろう。ならば今は、従うしかない。

「……承知しました。すぐに向かいります」

最低限の荷物でいいと言うのなら、今持つている手荷物だけで十分だ。そもそもデスクには持ち出し禁止の資料と、本当に必要最低限のものしか置いていない。

大河内さんに一礼して背を向けると、背後から声が飛んできた。はい、と首だけ振り返ると、大河内さんもすでに俺に背を向けていた。

「……健闘を祈る」

そういうフラグ立てるの本当にやめてほしい。

そう内心で苦笑しながら、はい、と答えて俺は警視庁の隣の建物へと向かった。

*

警察庁のロビーに足を踏み入れると、まだ早い時間であるせいか閑散としている。迎えと言うのは誰のことかと周囲を見渡すと、こちらに向かつて歩いてくるスーツの男性が目に入った。

「失礼、柊木旭さんとお見受けいたします」

短髪に眼鏡をかけた少し神経質そうな男性。年は同じくらいだろうか。丁寧な物言いに頷くと、彼は懐から警察手帳を取り出した。

「警視庁公安部の風見と申します。どうぞこちらへ」

ああ、例の降谷の部下で毎日こき使われてる公安部の可哀想な人つてこの人か。確かに何か疲れた顔してるわ、お氣の毒に。そう遠い目で現実逃避をしながら、左手に持っていた鞄がみしりと音を立てた。この人が俺を迎えるということは、つまり。

連れられた先は、警察庁にいたころでもあまり来る機会のなかつたエリアにある小部屋だった。手前には簡単な応接用にテーブルとソファ、部屋の真ん中にデスクがあり、そこにはPC端末がひとつ。それから壁際にぎつしり分厚いファイルの詰まつた本棚がいくつか。誰かの個室だろうか。

「詳細の説明は明日、この時間にこの部屋で、とのことです。それまでにここにあるすべてのファイルの内容と、この端末に保存されているすべての情報を把握しておくように、と」

「……明日の、この時間」

「はい。ちょうど二十四時間後ですね」

端末にどれだけのデータが保存されているのかは見てみないとわからないが、少なくとも壁にあるファイルの資料だけでも相当な量だ。これを、二十四時間。とりあえず睡眠時間や休憩時間が考慮されていないことだけは確かだつた。

「先ほどの廊下の突き当りがトイレ、そちらの冷蔵庫には簡単ですが飲み物と食べ物を用意してあります。どうぞご自由に」

そのまま風見さんは静かに一礼して退室し、その小部屋には俺と大量の資料だけが残された。何が何だかよくわからんがとりあえず、しなければならないことだけはわかつた。

「——降谷を殴ろう」

そんな決意を胸に、俺は荒々しく鞄を投げ捨てた。

* * *

初めてゼロからその話を聞いたときは、さすがに冷静ではいられなかつた。

確かに、確かにあいつは有能だ。今回の案件もあいつのおかげで成功したと言つてもいい。群を抜いた作戦立案能力、それは俺たちに欠けていたものもある。喉から手が出るほどあいつの能力は欲しい。だけど。

「……向いて、ないだろ、どう考えても……！」

思わずゼロの胸倉をつかみ上げると、唸るような声が出た。ゼロは一切の抵抗をすることもなく、ただ静かな目で俺を見返した。

「そうだな。だが、必要だ」

そう静かに告げる。

わかっている。俺も痛いほどよくわかっている。俺たちは公安だ、

日本国家の秩序と安寧のためなら、何だつて。——そう、何だつて。

「……わかるよ。俺たちに、あいつは、必要だ」

けど、それでも。俺の脳裏に、へりりと笑うあいつの顔が浮かんだ。優しくて、努力家で、穏やかで、いつだつて迷いなく行動し、俺の命だつて救つてくれた。

本当に、いい奴だ。感謝もしてる。だから、日の当たる場所に、いてほしかつた。

「……ヒロ。お前にはアソツの補佐についてもらう」

ぽつ、と表情を変えずにゼロは言つた。首元にあつた俺の腕を外し、きゅつと手首を掴む。

その青みがかつた瞳がまつすぐ俺を捉えた。

「支えてやつてくれ」

その言葉は、懺悔のようにも聞こえた。

ちようどあれから、二十四時間。

あんな無茶ぶりを伝えたのは自分が、正直なところ普通に無理だと思う。あのファイルと端末に詰め込まれているのは、これまでの組織に関わる全ての検査の資料だ。数年どころじゃない、もつと長い時間をかけた検査のすべてがまとめられている。

壁の本棚のファイルだけでもすべてチェックするのには数日かかるし、さらに端末にはその数倍のデータが入つてているのだ。徹夜しそうが何だろうが無理なものは無理だろう。そう思いつつ、降谷さんと一緒に部屋に入る。すでに正体を聞いた工藤新一くん、宮野志保さん、そして赤井秀一も俺に続いた。傍から見れば何という不可思議な集団だろうか。

「入るぞ」

軽くノックをし、降谷さんがドアを開ける。そしてドアが開ききるか開ききらないかと言うその瞬間、中から飛び出してきたのは硬く握られた拳だった。

予測していたのか、すんでのところで降谷さんは顔面に向かつていた拳を止める。

「……そこは素直に殴られるところじゃねえのか降谷ア……！」

「何のことだかわからんな。おはよう柊木」

ぎりぎりと拳から力を抜かない柊木さんと、力負けすまいとこちらも腕を震わせつつ、それでもにつこりと笑顔で挨拶をしてみせる降谷さん。何だこれ。思わず顔を引きつらせたところで、後ろにいたFBIがヒュウと口笛を吹いてみせた。

「とりあえず部屋に入ってくれ。紹介したい人たちもいるんだ」

そう言われてちらりと自分を含む数名を見た柊木さんは、諦めたようく溜息をついて拳を下げた。がしがしと頭をかき、応接用のテーブルに積んでいたファイルを適当にどける。昨日よりも少し荒れた雰囲気の部屋は、柊木さんの努力を物語っていた。

「柊木、全て頭に入ってるな？」

「ああ」

おかげで久しぶりに徹夜した、と不機嫌そうに言う柊木さんに、えつと声が出そうになる。この部屋にあるすべての資料を読んだといふのか、たつた二十四時間で？ しかも全部暗記したと？ それをやつてのけたという柊木さんも、やつてのけることを確信していた降谷さんも、本当に人間なんだろうか。いや、おそらく違う。

「とりあえず降谷、何の説明よりまず俺に見せるべきもんがあんだろが」

「見せるべきもの？」

「工藤新一君、宮野志保さん、それからFBIの赤井秀一さんだろ。そつちにいるのはお前の部下の風見さん。俺は何て自己紹介すればいいんだよ」

本気で不機嫌そうに言い捨てた柊木さんに苦笑して、降谷さんは忘れるところだつたと懐から書類を出した。印鑑つきの、正式書類。そこに書かれていたのは。

「え、……異動、辞令……？」

思わず言葉を漏らしたのは工藤君だ。そう、そこには確かに、「異

動」の二文字が書かれている。異動先は警察庁警備局警備企画課、日付は昨日、そして名前は当然「柊木旭」。

警視庁警務部監察官室監察官だったのは一昨日まで、昨日からこの人は正式にゼロの一員となり、降谷さんの同僚となつたのだ。

「……という、ことらしいので、昨日から警察庁警備局警備企画課の人間になりました、柊木旭です。赤井さんは初めましてですね、どうぞよろしく」

眉間のしわを取り繕うこともせず、柊木さんは赤井に右手を差し出した。特に気を悪くした様子も見せず、いつそ面白そうに彼はその握手に応える。

「FBIの赤井秀一だ。よろしく頼む」

「どうも。随分と日本で好き勝手してくれたそうで」

「それについて言い訳はせんよ。かわりにどうぞ好きに使ってくれ」いい度胸です、とそう言つて柊木さんは視線を工藤くんにうつした。工藤くんはぎくりと肩を震わせつつ、覚悟したように頭を下げた。

「……すみませんでした」

「それは何について謝つてんだ、新一君」

「危ないことをする前に頼つて、相談しろつて言つてくれたのに、……俺は」

「そうだな」

そうため息交じりに柊木さんが同意すると、工藤くんはまたぎくりと肩を震わせる。

「俺がそう言つたときにはすでに、危ないことの渦中にいたんだろ」「それは……」

「しかも、降谷の……『安室透』の正体を半分しか知らなかつた。途中でうすうす察したのかもしけないけど、確証はなかつたんだろ。つまり君から見れば俺は組織の一員と繋がつてゐる可能性だつてあつたわけだ。そんな相手に他の事件のこととは相談できても組織絡みのことなんて相談出来ないだろ、当たり前だよ。むしろその状況で俺に相談してきたらもつとよく考えろつて説教するところだわ」

え、と工藤君は顔を上げた。柊木さんの顔は相変わらず不機嫌そ
だが、それでも工藤君を責めているような気配は見えない。むしろほ
んの少しだけ、その瞳には優しさの色があつた。

「君は匿っていたFBI捜査官を守ろうと最善を尽くした。確かに褒
められたもんじやないやり方だが、誰かを守ろうとするその姿勢を否
定は出来ないよ。命のかかった場面だ、必死にもなる。……前にも
言つたる」

君の正義を、否定するつもりはないよ。

柊木さんがそう言つた瞬間、じわりと工藤君の瞳に涙が浮かんだ。
それを何とか押しとどめようと、彼はぐ、と歯を噛みしめる。

「まあ今回もやり方が悪かつたのは事実だ。その辺はしつかり反省し
て今後繰り返さないように努めてくれ。見逃してもらえるのは今だ
けだと心に刻んでおくように」

「は、い……！」

「それはそうと、俺は君のおかげで降谷に巻き込まれたのでとりあえ
ずデコピンな。顔上げろ」

「え」

ガツといい音がした。いやこれデコピンでしていい音じゃない。

額をおさえて悶絶する工藤君をよそに、しつと柊木さんは言い
放つた。

「ガキが泣くの我慢してんなバーカ」

そしてその頭にティッシュの箱を落とす。工藤くんはうつむいた
まま、ティッシュを数枚掴んで鼻をかんだ。その様子を横目に見つ
つ、赤井が口を開いた。

「坊やのおかげで巻き込まれた、ということは、君が『ブレイン』か？」

「ブレイン？」

「俺たちを見事に捕まえてくれた、来葉咲の一件だよ。降谷君に助言
をした『ブレイン』が別にいると聞いていた。君じやないのか」

ああ、と柊木さんは思い出したように頷いた。そう、その件の成功
をもつて柊木さんはゼロへと引き抜かれた。降谷さんの強い推挙と、
その助言で例の計画を成功へと導いた功績によつて決まつた異動。

そうでなければ、さすがにここまで急な異動は有り得ない。

「俺はそんなつもりなかつたんですけどね」

やれやれと、柊木さんは首を振る。「俺は！ 越権行為を！ しない！」と言い張る柊木さんに説き伏せて話を聞いてもらつたと聞いている。いやいやでも話を聞いて、その結果これだけの成果をあげるのだから恐ろしい人だ。

「では俺を組織に売るのはやめるよう言つてくれたのも君だろう。おかげで命拾いをしたよ、感謝する」

「俺は売るのはいつでも出来るから他の使い道がなくなるまで使いつぶせと言つたんですが」

「使い道がなくなる前に組織を潰せるよう尽力するまでだ」「なるほどポジティブ。降谷と相性が悪いわけだ」

そういうものか、と不思議そうに言う赤井に、柊木さんは降谷ですからね、と頷く。話題の人物はひくりと頬を引きつらせた。

「柊木、おしゃべりはそこまでだ。……引き抜かれた理由はわかつてるな？」

「作戦たてるのが下手な降谷のせい」

「……ああ、もうそれでいい。この案件、例の組織に関わる全ての捜査の指揮を、お前に任せる」

部屋に沈黙が下りた。

その話はすでに降谷さんから聞いている。組織に潜入し最前線で戦う降谷さんには、全体を俯瞰で捉え指示を出す役割は物理的に難しい。特に今後、合衆国勢との合同捜査になるなかで、せつかく得た指揮権を潜入中の降谷さんは生かせない。

指揮官が必要だった。優秀で、F B Iとも渡り合いこき使う胆力があり、何より最前線を走る降谷さんが心から信頼できるような指揮官が。それを出来るのは、柊木さんをおいて他にいない。降谷さんはそう断言した。

「……お前は俺を買いかぶりすぎなんだよ」

「過小評価してるくらいだと思つてingが？」

しつと言い返されて、柊木さんはため息をつく。また髪をがしが

しとかいて、手近にあつたミネラルウォーターのペットボトルを煽つた。

「わかつてゐよ、正式な人事異動だ。拒否権はねえんだろ」

「そういうことだ」

「職務は果たす。仕事だからな」

事実上の敗北宣言に、降谷さんは満足そうに頷いた。

改めて降谷さんは笑顔で工藤君、宮野さん、赤井に向き直る。

「と言うわけで、本案件の指揮官になつた柊木だ。今後皆さんの身柄の一切は彼が持つので、柊木の言うことにはきちんと従うように。柊木、現状から何か変更は？」

「新一くん、宮野さんは今も普通に学校行つてるつて話だつたよな」「こくりとふたりは頷いた。必ず学校外では監視と言う名の警護をひとり付けている。今のところふたりは特に不審な行動はとつていなし、ふたりに近づく不審な人物もない」

「念には念をいれさせてもらおう。ふたりとも、宮野さんは降谷に、新一くんは俺に、家から出るとき、学校に到着した時、学校から出るとき、家に帰つたときに一言報告を寄せすこと。遊びに行くのも自由だが、どこか遠出する際にも必ず報告。なるべくこちらが居所を把握できるようにしてほしい。面倒だろうがサボらないでくれ」

ふたりは真剣な顔でまたひとつ頷いた。こちらから言わせてもらえばかなり甘いというか、自由度の高い生活を許している。それくらいの報告はしつかり行つてほしい。

「赤井さんについてはまた他のFBI捜査官とも交えて今後の話をしましよう。詳細は後程ということで」

「了解」

赤井が短く返すと、柊木さんはまたやれやれと頭をかいた。

「それ以外は特になし。……この後の予定は何かあるのか？」

「他の捜査官にお前の紹介をするつもりではあるが、何かあるなら柊木の意向優先で構わない」

それなら、と柊木さんはソファに座りなおす。

「新一くん、宮野さん、ふたりが組織とどんな接触があつたのか、おお

よそは降谷からの報告書で把握している。そのうえで申し訳ないんだが、もう一度話をしてほしい。どんなにわずかでも構わない、組織に関わったすべての事柄について話してくれ。君たちが受けた印象なんかも省略せずに、主観的な見方で構わない、思い出せる限り全部だ」

そのうえで、今後の捜査方針を考えたい。

そう言つた柊木さんは、すでに「指揮官」の顔をしていた。

するするとふたりの言葉が耳に入つてくる。寝不足の頭には少々堪えるが、それでも脳細胞を無理やり動かして思考をつなげていく。報告書の無機質な文字からは決してわからない、彼らが対峙した「組織」の姿。

組織とは言え、それに所属しているのはやはり人間だ。彼らをただの「犯罪者」としてみるのではなく、ひとりの「人間」として捉えれば見えてくるものもある。彼らには彼らの思想と、思考と、感情がある。策を練るならまずその部分を押さえなければ、彼らと言う「人間」を理解しなければ、肝心なところでしくじるというものだ。

ジン、ウォツカ、キヤンティ、コルン、ベルモット、そしてラムと、正体不明の組織のボス。彼らという人間を辿つていく。失敗は出来ない。

だから、現状における最適解を――最適解を？

思考がぴたりと止まり、目の前に文字の波が押し寄せた。脳内を流れしていく情報、これは丸一日かけて見た、これまでの組織に関わる全て。組織の情報だけではない、どうやつてその情報を手に入れたのか、その手法もすべて。

そこにあつたのは、公安警察の「正義」。時には倫理も道徳も踏みにじり、その罪の重さを知りながら、それでもなお日本国家の秩序と安寧のために。

その報告書の最後、最新の報告。来葉峠での一件、そこで結ばれた協定と新たに得た情報、そして「保護対象」と、「協力者」。

「……ごめん、新一くん、ちょっと待つて」

「え？」

「降谷」

記憶をたどりながら組織の話をしてくれていた新一くんを片手で制した。そう、報告書のその部分を読んだとき、俺は確かに疑問に思つた。そして後からちゃんと、降谷に確かめなければならないと、そう思つて。

ぐるぐるとめぐる思考に頭を押さえながら、視線を降谷にうつした。相変わらずそいつの瞳は一切の動搖を示さない。凧いだ海のようだ。

「宮野さんが『保護対象』で、——新一くんが『協力者』なのは、何故だ？」

そいつはいつもの笑みなど一切浮かべていない。ただただ無表情で、まるで俺がそう問うのをわかっていたかのように、あっさりと答えた。

「お前がどんな策を練るのかわからなかつたが、彼が必要になる可能性もあると踏んだからだ。本人の許可も取っている」

「？ 降谷さんにそう言われて、はい」

そうだろう、と降谷が新一くんに目線をやると、新一くんは特に考えた風もなく頷いた。

つい眉間を指で押さえた。落ち着け、ここで降谷を怒鳴りつけたところでどうにもならない。降谷はただ、公安捜査官として職務を果たしているだけ。そう、目的のためなら「何でもやる」、公安の正義を執行しているだけ。だから降谷を責めるのはお門違いだ。

いや、本来なら、俺だつて。ゼロに配属されたいま、——やるべきことは。

「……新一くん、最初で最後の忠告だ。協力者を降りろ」

強い声でそう言うと、まだまだ世の中を知らないその子供は、目を大きくした。本当にこれはわかっちゃいない。わかるはずもない、本來ならわからなくていいことだ。

公安の協力者になるということが、どういうことかなんて。

「保護対象ならまだいい。協力者になるのがどういうことか君はわかつていらない。今ならまだ引き返せる」

「……柊木さん、」

「ああ、こう言つても君は引かないだろうな。今までいろいろやらかした罪悪感も含め、協力者になることで少しでも役に立てるならと君は考える」

降谷がそう誘導したのだと、気づくこともなく。

何で誰も止めねえんだ、何で誰も指摘しなかったんだ。公安の人間はまだしも、彼の父親やFBIのアンタは何で止めない。この子どもは知恵を絞つて生命を救つた恩人じやねえのかよ。——わかつている。こんな思考、ただの八つ当たりだ。おそらくは協力者になるという意味を公安以外の人間はちゃんと理解していない。

何よりも俺が指揮を執る意味を、きっと降谷と諸伏くらいしか理解していない。

「……新一くん、俺はこの案件の指揮官になつたんだ。だから、組織壊滅に向けてあらゆる策を練り、手を打たなくてはならない。それも公安として、『ゼロ』としてだ。この意味、わかるか」

困惑した顔で新一くんは俺を見る。視界の端で赤井さんが少しだけ眉をひそめたのがわかつた。

「君が『協力者』であるなら、俺は君を使うぞ。君の存在もその身体の秘密も、君の周囲も含めて。最低な手段で『工藤新一』と『江戸川コナン』を利用する。一切の容赦なくだ」

それが公安の正義だ。日本国家の秩序と安寧のため、使えるものは躊躇なく、容赦なく、それでこの国が守れるのであれば。

初めて新一くんは少し顔色悪くし、それでも何とか口を開いた。

「……具体的には？」

「言えない」

「……俺のことは構いません。けど、俺の周囲はやめてほしい」

「聞けないね。相手は君の存在を知つた瞬間に君の周囲ごと始末するような奴らだ。君の存在を利用することは、君の周囲を利用することと同義だと考えてくれ。何より、君の大変な人も、とつくな存在を知られているんだろう？」

ベルモット、魔女と評される幹部に。

そう付け加えると、さつと新一くんの顔色が変わった。

「蘭に手を出すな！」

「だから協力者を降りろと言つてんだ！」

思わず声が大きくなる。ぐ、と拳を握りしめて平静を保つ。だから降りろと言つているんだよと、内心で同じ言葉を繰り返した。

公安は協力者を可能な限り守るが、それはつまり同じだけ、いやそれ以上に危険に晒すということだ。それでも守り抜くと約束して協力者になつてもらうのだ。

「……この事件に関わるからには、君ひとりのことでは済まない。極力守るつもりはあるが、当然危険にも晒すし、……胸糞悪い使われ方をすることも覚悟してもらうことになる」

引き返すなら、今のうちだ。そう言つて、俺は立ち上がつた。

未だ一切の感情を示さない降谷に向かつて言う。

「お前らよく徹夜で泊まり込みしてゐるならシャワールームくらいあるよな?」

「ああ。使うか?」

こくりと頷くと、降谷は風見さんを見た。風見さんは案内します、と言つてドアを指す。

「少し席を外すよ。一時間からず戻るから少し冷静になつて考えろ」

それだけ言つて、俺は風見さんの後に続いてその陰気な部屋を出た。

どうか、賢明な判断をしてほしい。俺に、君を使わせないでほしい。俺が祈るのはそれだけだった。

*

冷たいシャワーを浴びて頭を冷やす。わずかに残っていた眠気は消え去り、頭に残つたのはあの報告書の山にあつた組織の情報と、ふたりから得た組織の姿、「工藤新一」、そして「毛利蘭」。何度も考へてもはじき出される最適解は変わらない。

「さつぱりしたか?」

タオルで水気をぬぐつてゐる最中に聞こえたのは、姿が見えないと思つていた奴の声。

「何だお前、いたのか」

「酷い言われようだな。いたよ」

振り向いた先にいた諸伏は、いつぞや一緒に選んだネイビーのスリーブを着て、いつもと変わらない顔で笑っていた。そのままゆっくりとした歩みで、近づいてくる。

「本当なら俺もお前たちと一緒に話をする予定だつたんだけどな。降谷の雑務の片づけと、お前がこれから使うデスクの片づけしてたんだ」

「そりやご苦労さん」

「ああ。ちなみに新しい盗聴器の性能テストも兼ねてばつちり盗聴してた」

「盗聴が日常的に行われる職場とか本当に嫌なんだけど」

まあそう言うなよ、と諸伏は朗らかに笑う。

俺は構わず風見さんが用意してくれた着替えを身にまとい、短い髪をざつと乾かした。それを待っていたのか、諸伏はちよいちよいと手招き。

「何だよ」

「いーからいーから」

そう言つて連れてこられたのは、透明なガラスで囲まれた喫煙室だつた。シャワーを浴びたばかりだというのに、煙草の匂いが蔓延してそこに引きずりこまれる。

そのままほい、と渡されたのは煙草の箱と安っぽいライターだった。

「……俺吸わないんだけど」

「知つてる。……俺ももともと吸わなかつたんだけどさ、潜入決まってから吸うようになつた」

煙草つて、頭の切り替えにちょうどいいんだよな。

そう言つて、喫煙室の壁にとん、と寄りかかる。

「組織の一員『スコッチ』に頭を切り替えるのに重宝してた。ちゃんと切り替えないと精神やられちまいそうでさ。だからまあ、潜入が終わつてからは吸つてないんだ。使つてないし、そのライターあげるよ。あ、煙草はちゃんと買いなおしたから湿気つてないぞ」

頭を切り替えると暗に言われているのがわかる。

手の中にある小さな箱とライターを、まとめて握りしめた。

「珍しく私情を交えたな」

さつきの忠告は、私情だろ？

そう言つた諸伏は、これまでと何ら変わりのない笑顔だった。わかつてゐる。公安として職務を全うするのなら、あれは言う必要のない言葉だつた。彼が自分の意志で協力者になつたのだと思わせたまま、ただ利用してやればよかつた。降谷がそうしたように、本當はそうすべきだつた。

「……あが、最初で最後だ」

「ん、心配はしない。柊木はちゃんと職務を果たせる奴だから」

俺はその言葉に応えることなく、無言で煙草を一本取り出し、口にくわえる。煙草の残つた箱はポケットに入れ、ライターに火をともした。すつと息を吸いながら、煙草にその火を近づける。慣れない煙に少し咳き込んだ。

「……まずい」

「はは、俺もそう思う」

「よくこんなもん吸えるな」

「だよなあ」

けらけらと笑う諸伏は本当にいつも通りで、相変わらず取り繕いの上手い奴だと感心する。——心配をかけたことくらい、わかつていた。きっと諸伏だけでなく、降谷にも。あいつは誰より職務に忠実だが、根は本当に情に厚い奴だから。

「……諸伏」

「ん？」

「戻つたら、ちゃんと『指揮官』やるから」

「ああ、よろしく頼むよ」

これから俺がお前の補佐やるからよろしくなと笑う諸伏に、そりやこき使わせてもらおうと笑い返す。すつと真顔になつてお手柔らかにと宣つた諸伏に、そういうぞやこいつは俺を暴君と呼んだことがあつたなと思い出す。その期待には応えてやろう。

「そういうや柊木、シャワーの間にスマホ震えてたぞ」

先に行くわ、と喫煙室を出ようとした諸伏が思い出したように言う。

そういえば昨日から一度もスマホを確認してなかつたことを思い出し、すつと胸ポケットに手を入れた。

「今の状況について、あいつらには言つても大丈夫。それ以外はダメかな」

そう言つた諸伏を見送り、スマホの画面を見た。

案の定というか、メッセージをくれたのはあいつらだつた。

『急な出向だつて？ お疲れ〜』

『出向つてどこ行つてんだ？ 土産買つて来いよ』

『急すぎて驚いたわ 気を付けてな』

萩原、松田、伊達。

数日前に会つたばかりだつてのに、まるでもうずいぶんと会つていなかのようを感じられる。どうやら俺は表向きには出向ということになつてゐるらしい。土産と言われても、残念ながら俺がいるのは隣の建物だ。

『出向じやない 詳細は顔面詐欺ゴリラに聞いてくれ そしてあいつ殴つてくれ』

最早説明もめんどくさくて、全てを降谷に丸投げする。

話してもいいとは言われたが、どこまでセーフなのか俺には匙加減がわからない。それならわかっている奴からちちゃんと説明させた方がいい。

ぴろん、とメッセージが返つてきた。相変わらずこいつは誰よりも返信が早い。

『察した 自分で殴れ 鼻骨折つてイケメンを男前にしてやれ』

思わず喉の奥が揺れた。何とも松田らしい。

そうか、イケメンを男前に。最初の拳は読まっていたし、あいつの顔面に一発くれてやるにはさすがの俺も隙を狙わないと難しい。もう一度狙つてみよう。

『ありや〜 僕は奥歯もらつちやうのがおすすめ♡』

さらつと物騒な返信しやがつたのは萩原。こいつは地味に怒つて

いる。

前歯じゃないだけ優しいよね、とか言つてるけどどの辺が優しいんだそれは。そしてやつぱり自分で殴れつてか、お前ら加勢はしてくれねえのかよと思う。

『そういうことかよ…… あんまり無理するなよ とりあえず夜は寝ろ』

ごめん、もう徹夜したわ。唯一優しい言葉をくれる伊達に内心遠い目をしながら、今後の自分の生活を思うと寒気がした。俺も夜はちゃんと寝たい。作業効率が落ちる。せめて飯は食えよ、と言葉を続けられるが、そういやまともに飯も食つてねえ。この後ちゃんと食べよう。ありがとう伊達、俺の身体の心配してくれんのお前だけだわ。

『また連絡する』

そう一言だけ返して、俺はスマホを再度ポケットにしまい込んだ。ずっとくわえていた煙草の煙を最後にもう一度すつと吸い込むと、短くなつたそれを灰皿に押し付ける。舌に残る煙草の味は苦いし、吸い終わつた今でも何となく煙たくて肺と喉に違和感がある。吸い続ければ、いつか慣れる日も来るのだろうか。

まあ、——これに慣れることがいいことなのかはわからないけれど。そんなことを思いながら、俺は喫煙室を後にした。

*

「答えを聞こうか、新一くん」

部屋に戻ると、さつきよりも部屋の中はどことなく荒れた雰囲気だつた。丸一日かけて荒らしたのは俺だが、これは俺がいない間にひと悶着でもあつたのか。降谷も赤井さんもまるで表情は変わつていなが、宮野さんだけは眉間にくつきりとしわを寄せている。

新一くんは覚悟を決めた顔で、口を開いた。

「柊木さん、確認させてください。……柊木さんは、もしかしてすでに、俺や俺の周囲を利用する作戦、思いついているんじゃないですか？」

「……そうだね」

「その作戦において、俺や俺の周囲が実際に危険に巻き込まれるのは、柊木さんの策がうまくいかなかつた場合の話?」

「まあ、そうだな。ただし積極的に利用はする。胸糞悪い方向でな」嘘をつく必要もないでの、ありのまま答える。俺の思いついた策は、失敗に終われば彼が破滅すると言つていい。身体の安全こそ守ることは出来ても、彼は一生平穀な生活に戻れなくなる。彼も、おそらくは彼の周囲も。それだけのリスクのある策だ。

成功すれば問題ないといえばそうだが、最低のやり方には違いない。自覚している。

「……その作戦が失敗すれば危ないけど、得るものは大きい?」

「ああ。組織壊滅への大きな一步になる」

部屋にいた全員がびくりと反応した。別に大袈裟に言つたつもりはない。

何故今まで組織相手にここまで手こずつたのか。今までの捜査で欠けていたものは何なのか。組織を壊滅に追いやるために何が必要なのか。そう考えたとき、この策の意義は非常に大きい。

「柊木さん」

彼の瞳は、澄んでいた。

「俺は降りません。利用してください」

「……覚悟があつて言つてるね? 言つておくが、倫理と道徳投げ捨てた俺はひとでなしだぞ」

「俺たちを使うことが柊木さんの思う最良の選択なら、それで構いません」

俺は、俺より頭のいい警察官が、作戦を成功させてくれると信じます。

そう言つた彼の声に、表情に、瞳に、一切の迷いはなかつた。俺は洗つたばかりの髪をくしやりとかきあげる。

「……何てタチの悪い脅し方だ。脅迫罪でしょつぴいてやりたい」

「えへ僕子どもだからわかんない」

「クソガキ」

たぶん今日初めて、彼の前で笑みを見せる。苦い笑みだつただろうが、それでも彼は俺に笑い返してくれた。

「必ず成功させる」

「貴方を信じます」

俺はその小さな手と、堅い握手をかわした。

自分なりに正しくありたいと思つて生きてきた。正義を掲げる職を志すなら、その職に就いたなら、それに相応しい人間でないと。だから、罪悪感はないかと聞かれたらあると答える。こんな手段しか選べない自分の未熟さが恥ずかしい。手段を選ぶ余裕もないことが情けなくて仕方がない。

だけど、迷いがあるかと聞かれたらないと答える。こんな手段しか選べないけれど、それでも俺が思いつく中ではこれが最適解。だつたら、やるしかなかつた。

「じゃ、捜査員の紹介頼む」

新一くんと宮野さんの話を一通り聞き、状況と闘うべき敵の姿はとりあえず把握した。それなら次は、自分の持っている武器の確認だ。そう言うと降谷はひとつ頷いて口を開いた。

「公安の人間で、この件メインで動いているのは俺と風見と諸伏の三人。もちろん必要とあればそれに適した人間を公安または別部署から見繕つて動かすことになる。この件の重大さは上も理解してくれているから、ある程度の融通はきかせてくれる」

そこでああ、と思いついたように降谷が風見さんを見た。

「ちゃんと紹介してなかつたな。彼は風見警部補、警視庁公安部で直接俺と接触できる数少ない人員かつ、俺の直属の部下と言つていい」「風見裕也です。よろしくお願ひいたします」

「ああ、そうだつた」

さつと俺も立ち上がり、風見さんにまつすぐ向き合つた。昨日から会つて話しているのに、ちゃんと挨拶もしていない。正直それどころじやなかつた。

「柊木旭です。降谷や諸伏からお話は伺っています。よろしくお願ひします」

すっと頭を下げてみせると、風見さんは慌てたようになつた。

「あ、頭を上げてください！　自分は下の立場です、どうぞお気遣いな
ぐ」

「柊木、威厳というのも大事だぞ」

「そういうもん？ 今まで部下とかいなかつたから……そのうち慣れますので、風見さんも『容赦ください』

すると風見さんは何とも言えない顔をして、はい、と頷く。

威厳と言われてもどうやつて出せばいいのか。うーん、と首をかしげると、赤井さんは軽く笑つて言つた。

「随分と謙虚なんだな、君は」

日本人らしいというか、何というか。

そう言われて、きよとんと赤井さんを見返した。謙虚、俺が？ そしてようやく気付く。今まで監察官という地位こそあれどそんなに権限があつたわけでもないし、周囲から余計なやつかみが来ても面倒なのでトラブル回避のために猫をかぶつていた。だが、もうその必要はないのだ。

「……俺、猫かぶりが癖になつてたのか……」

「ああ、正直気持ち悪い」

「真顔で頷くな殴るぞ。言つておくが『安室透』のが数倍氣色悪いからな」

ペチペチと自分の頬を叩き、もとの調子を取り戻す。もう謙虚の仮面はいらぬ。自分の実力を隠すよりも示していかなければならぬ立場だ。特に赤井さんをはじめとするFBI捜査官の前では強気なくらいでちようどいい。

「ちなみにお前が鬼で魔王で暴君だというのはすでに公安内で広がっている。今更取り繕つても腹の底を疑われるだけだからやめておけ」「へえ、その噂の大元は誰だ？」

「諸伏だ」

「わかつた」

よし、やつぱり期待に応えて全力でこき使おう。

笑顔でそう決心すると、風見さんがそつと目を背け、頭の痛そうな顔をしていた。なるほど、彼も俺の噂は諸伏から聞いているらしい。「他の捜査官については今その諸伏が、」

降谷がそう言いかけたとき、こんこんとノックが響く。すぐに諸伏

です、失礼します、と聞きたれた声。何故かそのとき、赤井さんの肩がびくりと震えた。

入ってきたのは、諸伏と初老の紳士。初老とはいっても身のこなしは相当に鍛えられたもので、油断のない目線の配りからもその洞察力の高さが伺える。

「貴方が新しい指揮官だろうか。私はジェイムズ・ブラツク、FBIだ」

「ええ、柊木旭です。よろしくお願ひします」

顔に笑顔を乗せて、握手をかわす。

なるほど、彼がFBI捜査官のリーダーか。少しの隙も見せないその様子は、確かに歴戦の猛者というに相応しい。こんな人まで使わなくてはならないとは、ますます油断はできない。隙を見せた瞬間に指揮権を奪われそうだ。

「……降谷くん」

続けて話をしようとしたとき、口を挟んだのは赤井さんだつた。嬉しいような悔しいような、なんだか不思議な顔をしている。反対に、話しかけられた降谷はほんの少しだが、楽しそうに見えた。あれは多分、内心ざまあみろとか考えている。

「何か？」

「彼について、説明はもらえないのか？」

赤井さんが親指で指し示したのは俺の後ろに立つネイビーのスリーツ。諸伏自身も、顔を背けて肩を震わせていた。これはひょっとして。

「……生きてること知らなかつたんですか？」

俺がそういうと、赤井さんは押し黙る。

事情を知らないらしいM r. ブラックや新一くん、そして宮野さんがきよとんとしていて、風見さんはほんの少しだけ唇の端を上げていた。

その様子に、俺も苦笑して続ける。

「諸伏、改めて自己紹介したらどうだ」

「はいはい。初めてまして、警視庁公安部所属の諸伏景光です。三年前

まで組織に潜入していく、コードネームは『スコッチ』。『バーボン』や『ライ』と組んで仕事に当たつこともあります

面白そうに諸伏が言うと、新一くんはえつと声を上げた。その横で宮野さんが、貴方がと驚いた顔をしている。どうやら諸伏のことは知つても、「スコッチ」のことまでは聞かされていなかつたらしい。

「……そんな気はしていたが、本当に生きていたとはな。来葉峠のスナイプは君だろう。相変わらずいい腕だ」

「ライに言われると悪い気しないな。おつと、今は赤井か」

「……死ぬには惜しい男だと思つていたよ」

「光栄だ」

お前より死んだふり上手かつただろ、と諸伏がにやりと笑うと、赤井さんは降参と言わんばかりに両手を上げた。降谷は当然とでも言いたげな笑みを口の端に浮かべている。

「なるほど、降谷君以外にもコードネームをもらえるほど深く潜り、生き残った捜査官がいたということか。やはり日本警察は侮れんな」

いつそ感心したようにM r. ブラックは肩をすくめた。そう褒められれば悪い気はしないが、残念なことに談笑を続ける余裕はない。眠気が来ないうちに話を進めようと口を開いた。

「メインで動いているF B I 捜査官は四人のはずでは?」

「あとのふたりは目を付けていた組織の関係者に張り込ませている。ジョディ・スターリング捜査官とアンドレ・キャメル捜査官だ。申し訳ないが紹介はまた次の機会にさせていただきたい」

「なるほど」

必要とあればこちらも本国から追加の捜査官を派遣させると彼は続けるが、現状ではさほど手勢は必要ない。必要なのはただ、情報だ。「そちらの捜査資料も拝見したいのですが。出来ればC I A のも」「F B I のものに関しては今追加データを含めて送つてもらつている。C I A は難しいだろう、キールと協力関係を結んでいるとはいえ、C I A と組んでいるわけではないのでね。C I A 側は未だ大きく動くつもりはないということだろう」

「CIAは、この捜査協力のことをするに？」

「知つていると考えていい。FBI本部から情報が流れてもおかしくはない」

ふうん、と小さく息を漏らす。

全てが終わるまで静観していくならそれはそれで構わないが、こちらの捜査が俺の考えている通りに進んでいけば、捜査協力を持ち掛けてくる可能性もあるかもしれない。無視できる相手ではないだけに、面倒だ。

「それで、今後の方針をお聞かせ願いたい」

ソファに座り直したMr・ブラックの目が、すっと細められた。その様子に、もはや懐かしさすら覚える。これは、あの時と同じ。俺を呼び出し、監察官になることを持ちかけてきたときの大河内さんと、同じ。俺という人間を見定める目。

俺はひとつ微笑んで、まっすぐにその目に応えた。

「そう特別なことをするつもりはありません」

定石通りの手を使つていく。ひとつひとつを、確実に。

「組織の情報網の確認と、組織に所属するスナイパーの所在と顔の割り出しだす」

「定石だな」

「ご不満でも？」

「どんでもない」

俺が苦笑して言うと、赤井さんはさらりと返した。

情報網については言うまでもないだろう。こちらの動き、何よりも「バー・ボン」「キール」の素性だけは守らなくてはならない。どこにどんな鼠が紛れているのか、組織がどうやって情報を得ているのか、その確認がまず必要だ。

また、どんな手段で組織を潰すにしろ、スナイパーと言う存在は本当に厄介だ。日常の中でこちらが狙撃される可能性も否めないし、もし本当に彼ら相手に掃討作戦を仕掛けるようなことになつた場合、向こうに腕のいいスナイパーがいるというだけで危険度は跳ね上がる。邪魔な存在だからこそまず把握し、排除を考えたい。

「降谷、しばらくは組織の中核よりも情報網と腕のいいスナイパーの存在の洗い出しに注力してくれ。あえて幹部を探る必要はない」

「……情報網とスナイパーの確認が必要なのはわかるが、幹部を探る必要がない、というのは？」

組織のボスを探らなくていいのかと、青みがかつた瞳が問う。視界の隅で宮野さんの肩がびくりと震えた。どうやら彼女はボスのことを見つっているらしい。

とりあえず今は見なかつたことにして言葉を続ける。

「あらゆる諜報機関が長い年月をかけて幹部を探りをいれ、捜査を進めてきた。それでも尚、ボスの正体どころか側近のラムの正体も明らかにならないまま、今に至る」

「……何が言いたい」

「怒るなよ。潜入捜査官の腕が悪いと言つてんじやない、あまりにも用心深すぎる組織だつて話」

俺がそう言うと、降谷は少し眉を顰め、赤井さんはフム、と頬に手を当てた。Mr. ブラックは腕を組んだまま、じつと俺を見据えている。

「何故この組織がここまで危険視されるのか、それはその徹底した秘密主義故だ。日本警察が調べただけでも、あらゆる諜報機関が幾人も潜入捜査官を送り込み、失敗している。組織の実態は限られた古参の幹部のみが把握していて、許された者以外がその秘密に近づこうものなら即処分。潔癖が過ぎるな」

だからこそ。そう、だからこそだ。

「逆に言えば、組織の実態——ボスやラムの正体、それに組織の目的さえわかればほぼクリア。正体さえわかれば相手はただの物騒な反社会的組織だ。何も怖がる必要はない」

「……つまり？」

「回りくどい言い方はよせよ柊木、どういう手段をとる気なんだ？」

焦れた降谷は今にも噛みつきそうな様子で、困った顔の諸伏は続きを促した。FBIのふたりは静かな顔を崩さない。

「回りくどく調べてまわるから時間がかかるんだ。そんな面倒なこと

しなくとも、答えを知つてゐる奴に直接聞けばいい」

あつさりとそう言つた、部屋にいた全員が固まつた。

ああ、これはわかる、何言つてんだコイツつて目で見られている。あまりにも簡単なことだと思うのだが、俺はそんなにおかしなこと言つただろうか。

「……柊木……それは……いや、お前が冗談を言つわけないな……本気で言つてるんだよな……」

「ああ、わかるだろ降谷、俺は仕事で冗談は言わないし、負け戦には挑まないよ」

勝算があつて言つてる。

そうにつこりと笑うと、老練の捜査官の眼鏡の奥の瞳がきらりと光つた気がした。

「詳細を聞かせてもらいたい」

「申し訳ありませんが、それはそちらの捜査資料を拝見してからにさせてください。今はただ、情報が必要です。俺の策の成功率を上げるためにも」

この策を説明したところでFBIに実行できるとは思えないしきつとする氣にもならないだろうが、邪魔もされたくはない。

余裕の笑みを浮かべ、彼と数秒間にらみ合つた。先に折れたのは彼の方だった。

「……明日には捜査のデータが送られてくるはずだ。届き次第共有しよう」

「ええ、お待ちしています」

それからいくつか今後の確認をし、その場は解散とした。すぐに動けるものでもないのでとりあえず睡眠をとりたい。さすがに疲労を感じる。

ひとつあくびを漏らすと、真剣な顔をした降谷が話しかけてきた。「柊木。一応確認しておくが、お前の策で組織の正体がわかるから、俺はその次の段階……組織を探るのではなく潰すために、組織のスナイパーと情報網を探ると思つていいか」

「ああ」

「わかつた。そのつもりで調べる」

「よろしく」

ひとつ頷いた降谷は、そのまま風見さんを従えて会議室を後にした。さつそく捜査に向かったのだろう、相変わらず元気なやつだ。俺は眠い。Mr.ブラックも、一旦状況を本部に報告すると言つて席を立つが、赤井さんはソファに座つたままだつた。何か用でもあるのだろうか。

特に気にした風もない諸伏は、空気を変えようとしたのか、少し明るい声で言つた。

「柊木はどうする？」

「帰つて飯食つて寝る。明日またここ来ればいいか？」

「そうしてくれ。送るか？」

「車買つたの知つてるだろ、いいよ。……ああ、ふたりとも送つていこうか？」

じゃあお願ひしますと新一くんは頷き、居眠り運転はしないでねと宮野さんはさらりと言つた。

一晩の徹夜くらいで居眠り運転するほど柔ではないが、結局買つてしまつた降谷と萩原おすすめの車は油断するとスピードが出すぎる。同乗者もいることだしいつも以上に安全運転で帰ろう。

「じゃ、お先に」

「ああ、……柊木」

「うん？」

「これからよろしく頼むな、指揮官殿」

そう言つて、諸伏はにこりと微笑んだ。念押しのようにプレッシャーを掛けてくる諸伏には、もう笑うしかない。

「そつちこそよろしく頼むぞ補佐。こき使うから」

「もちろん」

笑顔の諸伏と紫煙をくゆらす赤井さんを残し、俺たちは会議室を後にした。

「……随分と、仲が良いんだな」

柊木たちを見送った後、ぽつりと赤井が言葉を漏らした。別に皮肉を言っている雰囲気ではない。本当に思つたままの感想なのだろう。

「そうだろ？　いい奴なんだ」

「ただの『いい奴』に指揮官が務まるとは思えんが」

「そりや、ただの『いい奴』じやないからさ」

お前だつてわかつただろ、と言ふと、赤井は唇の端だけで笑つた。どうやら異存はないらしい。

「本来は温和な人間なんだろうな。だが、仕事となるとどこまでも感情を排して冷徹になれる。そういう人間は珍しくもないが、彼はかなり極端なようだ」

「面白いだろ」

そう言ふと、赤井は少し黙つた。すうつと煙草の煙を吸つてから、そうだなど小さな声で呟いた。——ああ、やっぱり赤井は根が甘い。

「お察しの通り、あいつは公安に向いてないよ。工藤新一に忠告をしてしまくくらいにはね」

「それをわかつていて引き抜いたのか」

「それくらい、あいつの頭脳はずば抜けてるんだ」

俺たちに、どうしても必要な人材だった。

最初こそ俺も反発してしまつたが、わかつている。柊木は公安に全く向いていないのに、相応しすぎるくらい相応しい。

出来ることならここには来てほしくなかつたなんて、それは俺の私情に過ぎない。

「……付き合いは長いのか」

俺の言葉から何かを察したのか、赤井は軽い声になつてそう投げかけてきた。赤井なりに気を遣つて何でもない話題を振つたつもりらしい。

少し苦笑しつつ、珍しい気遣いなのでありがたく乗つておくことにした。別に秘密にすることでも何でもない。

「警察学校の同期だよ。降谷もな」

「なるほど、それであんなに親しいのか」

「ああ、すぐかつたんだぜあのふたり。入校当初から降谷と柊木ですさまじい首席争い繰り広げて、最初から最後までずーっとデツドヒート。お互い認め合ったライバルってわけ」

「それであのプライドの高い降谷くんが協力を求めたのか。……諸伏くん」

改めて赤井にそういう呼ばれ方をすると違和感がひどい。何、と聞き返すと、赤井は面白そうに言った。

「そのデツドヒートは、結局どちらが勝つんだ？」

おつと、そこを聞いてくれるのか。俺はにやりと笑って、続ける。

「……どっちだと思う？」

すると赤井もく、と笑って、どっちと答えるも痛い目を見そうだ、と煙草を灰皿に押し付けた。それに正解と答えつつ、俺はまた軽く笑つた。

最終的にどちらが首席だったのかは、是非本人たちに直接聞いて確かめてほしい。きっと面白いものが見られるだろう、尋ねるのが赤井ならなおさら。

その場面を想像しているうちに、ほんの少しだけ心が軽くなるのを感じた。

FBIの捜査資料が入ったメモリを持ち指示された通りに向かった部屋には、すでに修羅場の気配が漂っていた。いや、部屋にいるふたりのうち、ひとりはしつかりと睡眠をとつたのか昨日よりも幾分かすつきりした顔で書類をめくり、もうひとりは一心不乱に端末のキーボードを叩き続けている。修羅場の気配は主に後者だ。

「ああ、赤井さんおはようございます」

「おはよう。FBIの捜査資料を持つてきたんだが」「どうも」

ひどく顔の整った指揮官はメモリを受け取ると、良ければそつちのソファはどうぞと軽く言つた。またデスクに戻つた彼は端末でそのメモリを読み込み、ファイルを確認している。

ふーん、と特に感慨もなく画面を見つめ、何の気なしに傍のデスクにいる男に声をかけた。

「諸伏、終わつた？」

「終わるか！　お前な、確かにこき使えとは言つたけどこの量、普通に今日丸一日かかるから！」

「何だよ、いくつか追加捜査頼んだだけだろ。何でそんな時間かかつてんの？」

「人を動かすにも！　いろいろあるの！　雑務全部投げやがつて！」

補佐つてそういう役回りだろ、と不思議そうに言う彼に、諸伏くんはそりやそうだけどと叫んでいる。

なるほど、確か鬼で魔王で暴君だつたか、しつかりと期待には応えているらしい。

「赤井さん、他の捜査官は？」

「ジエイムズは本部とのやり取りで手が離せんらしい。ジョディとキヤメルは昨日と同じく張り込みだな。その張り込み対象のデータもメモリに入つていて」

「そうですか。赤井さんはこの後は？」

「君の指示があるなら従うが」

じやあ三十分で目を通すの待ちよつと待つてくださいと聞こえたが、その量を三十分とか正気だろうか。

「概要に目を通すだけなので。煙草吸つていいですよ、灰皿そこにありますから」

俺の内心を見透かしたように彼はさらりと言い、テーブルの端にあつた灰皿を指さした。すでに数本の吸い殻が乗っている。彼も喫煙者なのだろうか。

改めて視線を彼に戻すと、すでに彼は捜査資料に集中しているようだつた。スクロールの早さを見るに、なるほど相当なスピードで読んでいるらしい。どうやら三十分は誇張でも何でもなかつたようだ。

俺はその邪魔をしないよう、大人しく待つことにした。

*

三十分後、本当に読み終わつたという彼は俺の前に座つた。尋ねてきたのは捜査資料のいくつかについての確認のほか、組織のメンバーの人となりについて。ボウヤや志保に求めたように、客観的事実だけでなく主観的な印象もすべて話せという。事実のみを求められることが多いだけに、何となく不思議な気がしながら出来る限りの記憶をたどつた。

「君は随分と人柄を知ることにこだわるな」

「結局はそれぞれも人間ですからね。いざというときに彼らがどう判断して動くかは把握しておきたいんですよ」

それぞれの組織の構成員のデータを見つつ、彼は頭の中の情報を整理しているようだつた。

「リーダー格というか、やはり脅威なのはジンですかね」

「ああ。奴は頭も切れるし銃の扱いも相当で、何より組織への忠誠心と残忍さは他に類を見ない。幹部間に大きな上下関係はないが、そいつが中心になることは多いな」

「ふむ。諸伏」

目線を資料から話さずに、彼は背後のデスクに座つてゐる諸伏くん

に声をかけた。何だ、と彼は端末の後ろからひょっこりと顔を出す。

「降谷に追加で指示。情報網及びスナイパーを調べる際、それぞれの忠誠心の程度も見定めるように伝えてくれ。具体的に言うと、組織ないしボスがヤバくなつたときに助けるか逃げるか」

「了解……だけど追加の指示もいい加減にしないとそろそろ降谷も怒るぞ柊木……」

「あいつ目の前に仕事積まれると燃えるタイプだろ。まして俺からの指示なら負けず嫌いに火が付くから、文句は絶対に言わないし完璧にこなす」

「……言えるけどさ……」

どつちかかというと風見さんが苦しみそうだなとさらりと言った柊木くんに、わかつてんなら手加減してあげてくれよ……と諸伏くんは死んだ目をしていた。

どうやらどこの国でも補佐役が苦労するのは同じのようだ。

「赤井さんはジンと因縁でも？」

「因縁と言えるかはわからんが、潜入していたころから毛嫌いはされていた」

まあ、それは降谷君にもだが。自分自身、あまり人に気を遣える方でもないことは自覚しているし、嫌われる相手にはとことん嫌われることが多い。ジンにしろ降谷君にしろ、初対面時から妙に嫌われていた気がする。

「……ああ、なるほど」

じやあジンもそういうタイプか、と柊木くんはひとり納得したようだつた。ゆらりゆらりと頭を揺らす彼を見ながら、視線だけでその意味を問う。

それに気づいた柊木くんは、少し苦笑した。

「いえ、貴方と相性が悪いということは、ジンも降谷と似たようなタイプかなと」

「……そうか？」

何て言うのかな、と彼は首を傾げる。

印象だけで話しますけど、と前置きして彼は続けた。

「赤井さんつて、命令遵守とか無理なほうじゃありません？自分が納得する理由がないと従わないというか、命令より自分のやりたいことを優先するというか」

「……」

思わず沈黙し、耳だけ働かせていたであらう諸伏くんがぶふつと噴き出した。脳裏に任務終了後にはいつも大きなため息をついていたジェイムズの姿が浮かぶ。

「ああ別に、それが悪いとか責めてるわけじゃなくて。たとえば降谷は真逆なんですよ、自分の感情を殺してでも職務に徹し、命令は遵守する。公私をきつちり分けて、迷いなく『私』よりも『公』を優先する奴です」

でも、貴方は違う。貴方は多分、自分の正義と感情をもとに、いざというときは『公』よりも『私』を優先する。

柊木くんは全てを見透かしたような静かな目で、俺を見据えた。「だから、『公』に……命令遵守に拘るタイプには嫌われやすいんですよ。多分ですけどね」

「……その理屈で言うと、ジンも『公』を優先するタイプということか」「おそらくね。目の前に憎い貴方が現れても、たとえば組織のボスとやらが殺すなど言うなら殺さない、そういう人なんじやないかと思うだけです」

確かに、ジンはボスの命令には絶対に従っていた。多少不満があるとも、必ず。

そして俺は、確かに納得のいかない命令には従いたくない。もちろん妥協できる点は妥協するが、命令無視をして叱責を食らったことも多いにある。そもそも、FBIに入つたのもその力を利用して父の死について調べるためであり、別にFBIやアメリカのために働いているつもりはない。

「……まあ、否定は出来ないな。ジンのことも、俺のことも」

「再三言いますが別に責めちゃいませんし、悪いことだとも思いませんよ。主義の問題ですから」

「君の命令にも従わないかもしねないが？」

「従わない可能性があることをわかつてさえいればやりようはあります。貴方の命令違反も計算にいれればいいだけの話でしょう」

さらりと言つた彼に、思わず瞬きをした。彼は特に気になった風もなく、ぱらぱらと他の幹部の資料にも目を通している。

「……命令違反を許すと？」

「許しませんが、命令違反しそうだなと思つたときにはそれに対しても対策は考えておきます。俺、別に貴方を完全に信頼するつもりないですし」

俺を信頼しないことを隠し立てする氣もない彼に、思わず笑えてきた。なるほど、あらゆる可能性を排除しない彼は確かに優秀な指揮官だ。こうも感情を差しささまず、淡々と目的の達成だけを考えられる人間はそういうない。

肩を震わせた俺に、柊木くんは不思議そうな顔をして言つた。

「俺、何か変なこと言いました？」

しかも自分は特別なことを言つたつもりはないときた。これは相当に愉快な人間なのかも知れない。

思わず未だにキーボードを叩き続ける彼に声をかけた。

「諸伏くん、彼は確かに有力で、しかも面白い指揮官だな」

「だろ。だけど赤井、柊木は怒るとマジで怖いから、命令違反はおすすめしない。正座で三時間も説教聞きたくないだろ」

「三時間はなかなかだな、ジエイムズの叱責でも三十分が精々だぞ」笑いながら軽口の応酬をすると、柊木くんは微妙な顔。さすがの俺も自分より年上の相手に説教なんぞしたくないんですが、とぼそりと言つのでまた噴き出した。

「説教を受けたくはないが興味はあるな」

「そんな理由で命令違反やらかしたら即刻組織に売り渡しますからね」

「それは怖い」

くつくつと笑いつつそう言うと、やれやれと柊木くんはため息をつき、眺めていた組織幹部の資料をざつとまとめてテーブルに置いた。

「もういいのか？」

「ええ、俺の考えていた流れで問題なさそうなので」

「昨日は教えてくれなかつたな。詳細は教えてもらえないのか?」

「流れだけざつくり言うと、組織の秘密主義を叩き壊して、構成員のスナイパー捕まえて、残りをまとめて確保する感じです」

「秘密主義を叩き壊す、というのは?」

そう言うと、柊木くんはすっと表情を消し、まっすぐに俺を見据えた。その顔には何の感情も浮かんでおらず、整いすぎたその造形も相まってまるで人形のようだ。

「……」まで貴方も同じ情報を得たはずです。思いつきませんか?」

「……いえ、すいません。見下してるわけじゃないんです。ただ……」

やはり貴方は、優しい人だなど。

無表情で無感情にそう言つた彼は、それ以上何も答えてはくれなかつた。

考えた策の流れをざつと説明すると、三人はさすがに険しい顔をしていた。眉間にくつきりと大きなしわを寄せた降谷が先陣を切つて口を開く。

「柊木、工藤新一を容赦なく利用すると言つた理由はわかつた。だが、それはあまりにもお前のリスクが大きすぎる。引き入れたばかりの指揮官をこんなに早く失うわけにはいかない」

「この案件の指揮官が俺なら、つまり責任者も俺だろ。俺が行くのが一番効果的だし、筋つてもんだ」

「筋つてお前な……!」

なお言い募ろうとする降谷に苦笑しつつ、紫煙をくゆらせた。ここ数日で一気に煙草の数が増えた。俺もこれで松田や萩原に吸いすぎだと怒れない。

「失敗するつもりはねえよ。仮に失敗しても得るものはある。諸伏、準備を頼む」

「……」

「返事はどうした」

「……終木、そのやり方は潜入以上に危険だし、お前の周囲まで危ない。他に方法はないのか」

俺の周囲という言葉に、つい瞬きをした。俺をゼロに引き入れるときに身の上は全て調べ上げたものと思つていたが、そうでもなかつたのだろうか。

「俺、家族いなイぞ」

さらりとそう言うと、降谷と諸伏はえつと固まる。その様子を、むしろ風見さんが驚いたように見た。ああそうか、ふたりには父親のことを零したこと也有つたかな。そして詳細まで話したことはなかつた気がする。

「親類の話も聞いたことないし、お前らも知つての通り友達も少ない。現在交流があるのは、お前らを除けば刑事部の三人くらいだ。あいつらには悪いが、少々危険に晒したところで簡単にやられる奴らでもない。一応警告くらいしつければ大丈夫だろ」

軽くそう言うと、ふたりは戸惑つたように俺を見た。公私の両方で俺を心配してくれているのはわかつてゐる。だが、これは俺が弾きだした最適解だ。誰に何を言われようと、俺以上の良案を持つてきてくれない限り退くつもりはない。

「お前らが祭り上げた指揮官様のお言葉だ。俺以上の策がないなら大人しく従え。それとも何かな、お前ら」

俺を危険に晒す覚悟もなく、俺を指揮官に仰いだのか？

そう笑顔で言うと、ふたりはぐつと押し黙る。数秒沈黙が流れ、先に口を開いたのは諸伏だった。

「……わかつた。準備する」

「ああ」

その返事に満足げに頷くと、降谷も観念したように溜息をついた。そしてがしがしと頭をかき、いらだつたように言う。

「対象の動きを明日までに確認してくる。お前の策に必要な舞台は用意する」

「よろしく」

同期ふたりが観念したとき、それまで沈黙を守っていた風見さんが遠慮がちに口を開いた。その顔には、わかりやすく疑惑と不安が浮かんでいる。

「……柊木さんのお考えに異議を唱えるつもりはありませんが、……その、それは……」

「上手くいくのか、ですか？」

「いえ、その……」

風見さんは答えにくそうに言葉を濁す。俺はその素直な反応に少し笑つた。

言いたいことはわかっている、資料の上の組織幹部の情報だけを考えれば、この作戦は間違いなく失敗する。だが、直接彼らと対峙してきた、新一君や宮野さんに赤井さん、そして降谷の言葉から見えてきた、その「対象」の姿を考えれば。

「成功します。させてみせる」

最後にすっと煙草の煙を吸い込んで、吸い終わつた煙草を灰皿に押し付ける。舌に残る嫌な苦さに気づかないふりをして、俺は三人に笑いかけた。

ガラス張りの喫煙室の中で、煙草に火をつける前にスマホを取り出す。俺が連絡を取り合う人なんて限られているので、奴らの名前は常に目に付くところにあつた。詳細を説明する気はない。送信したのは、たつた一言。

『ごめん 巻き込むかもしれない』

いくら俺に親しい人間が少ないとはいえた人にまで手を伸ばしてくるかは微妙だが、可能性がないとは言えない。少々危険に巻き込まれたところでどうこうなる奴らじゃないことも知っているが、危険に晒すかもしれない事実は重かつた。

喫煙室の壁にとん、と寄りかかったとき、返信が届いた。

『好きにしろよ むしろ庇おうとしたらぶつ飛ばす』

『もともと旭ちゃんに助けられた命だし気にしなくていいよ 健闘を祈る♡』

『彼女は巻き込むなよ 僕のことは気にすんな』

相変わらずの返信の早さと、それぞれらしい返信に苦笑を漏らす。これで、言質をもらつたということにしておこう。お前らがいいと言つたんだ、今後何があつても文句は聞かない。そう自分に強がつて、俺は煙草に火をつけた。

「……感傷に浸るのはここまでだ」

思考を切り替え、そつと目を閉じる。

失敗は出来ない。失敗はしない。俺だけじやない、新一くんや、彼の周囲の平穏もかかっている。そして成功すれば組織の壊滅に一気に近づける。新たな潜入捜査官を考える必要もない。

「終木、時間だよ」

喫煙室に入ってきた諸伏に声をかけられる。その声にぱちりと目を開けた。

俺よりも諸伏の方が緊張した面持ちであることに少し笑う。

「……余裕だな。俺は胃が痛い」

「余裕じゃねえよ。行かなくていいなら本当に行きたくない」

「ああ……まあそりゃどううな」

俺の言いたいことをわかつてているのだろう、諸伏は遠い目をした。
言うなれば「対象」は、トラウマドストライクの年上の美女だ。策を考えたのは俺だけ逃げたい。

「まあ、やるんだけどな」

何だろう、全力で逃げたいのに全力で楽しくなってきた。くつくなと笑う俺を、諸伏が呆れたように見る。

「初めて知ったけど、俺、追い込まれると燃えるのかも」

そんなこと俺たちは警察学校の時から知つてたぞ、とぼやく諸伏の言葉に、俺はもうひとつ噴き出して煙草を灰皿に押し付けた。

*

さて、バー・ボンからの密告によるところの辺りのはずなんだが。くるりと周囲を見渡すと、綺麗なブロンドの髪が見えた。

まさか人生初のナンパがこれとは、と苦笑しつつその隣に追い付いて声をかけた。

「あれ、お姉さん、ハリウッド女優のクリス・ワインヤードさんによく似てますね。もしかしてご本人？」

「人違いよ」

こういう風に声をかけられるのには慣れているのだろうか、こちらを見もせずにその人はばつさりと切り捨てた。なるほど、ナンパってこうやつて断るのか。

「これは失礼、シャロン・ワインヤードさんの間違いでしたか」
ひるむことなく言葉を続ければ、彼女は僅かに肩を揺らす。

「それとも、ベルモットとお呼びした方が？」

そこで初めて、彼女は俺に視線を向けた。表情こそ変えていないがその瞳には明確な警戒心と敵意が見え隠れしている。俺はにつこりと微笑んで見せた。

「誘われていただけますか？　ふたりきりでお話したいのですが」

「……いいわ」

――さて、ここからだ。

*

「まずはこの席に座つてくださったことに感謝します、ベルモット」
「御託はいいわ。……随分見晴らしがいいのね、ここ」

彼女を案内したのは近くの大型の公園の四阿だつた。緑に囲まれて見晴らしも良く、人が近寄ればすぐにわかる。もちろん民間人も含め、誰も入つてこられないように手配済みだ。

「捜査員が近くにいないことを証明しようと思いまして。貴方の座っている位置は柱の死角でスナイプも無理ですし、こちらなりに貴方の身の安全を保証したまでです」

「でも、盗聴器はあるんでしょう？」

「よくおわかりで。これです」

ことりと身に着けていた盗聴器をテーブルの上に置いた。

あまりにあつさり取り出したことに驚いたのか、ベルモットは何も言わず俺を見据える。それにことりと笑顔を返して、俺は懐に手を入れた。

「……ふうん。それで、私に何の用かしら」

「率直に申し上げますと、こちらに寝返つてほしいんです。ちなみに俺はこういうものです」

取り出して見せたのは、正真正銘俺の警察手帳だ。本名も階級も嘘偽りなく、もちろん手帳の表紙には「警察庁」。もちろん本物ですよ、と微笑みかけると、さすがにベルモットもひとつ瞬きをした。

「……呆れた、本名と所属まで晒すなんて。よほど私を仲間に引き入れる自信があるのかしら」

「貴方が俺の思つている通りの人なら、おそらく」

「ふふ、いいわ、強気なバンビは嫌いじやなくてよ？ 話だけでも聞いてあげる」

誰がバンビだ。内心そう思つたがもちろん顔には出さない。

俺は警察手帳を懷にしまいなおし、改めて口を開いた。

「こちらが求めるのは貴方が持つ限りの組織についての情報、ならび

に作戦への協力です。見返りは、貴方の身の安全と今後の生活の保証と言つたところですかね。何かご希望があるようであれば交渉には乗ります」

「……それだけ？」

拍子抜けしたように言うベルモットに、ええ、と笑いかけた。そしてただし、と前置きして鞄からタブレットを取り出す。画面を照らし、ベルモットに向ける。

「この取引に乗つて頂けない場合、彼についての情報を公開します」
その画面の人物を見た瞬間、ベルモットの顔色が変わった。

「随分ご執心のようですね？ 貴方が陰ながら守つている江戸川コナン、——いえ、」

工藤新一。その名前を出した瞬間、額に黒く堅いものを押し付けられた。まつたく、銃がご法度のこの国でよくもまあこんな物騒なもんを持ち歩いてくれるものだ。

「ポーカーフェイスが崩れていますよ、貴方らしくもない」

「……日本警察も墮ちたものね。民間人を巻き込むなんて」

「自ら危険に飛び込んできたのは彼の方ですよ。今や彼は我々の『協力者』、どんな形で協力してもらおうとこちらの勝手というものです」
公安警察のやり方、少しあは存知でしょう？

そう薄く笑つて見せると、彼女は少しだけ眉間のしわを濃くした。やはり、彼女にとつて工藤新一は特別な存在らしい。友人の息子と言う以上の何があるように思えてならない。そしてそれは、工藤新一に対しても対してだけではない。

「彼の情報が組織に流れれば、真っ先に命を狙われるでしょうね。もちろん彼は『協力者』、その身の安全は全力で守らせていただきますよ？ まあ、今まで通りの普通の生活はもう無理でしようけれど。……ああ、でも貴方の所属する組織は、こういうとき新一くんの周囲ごと抹殺しようとするんでしたつけ？」

たとえば彼の家族。

たとえば「江戸川コナン」に関わつたすべての人々。

「たとえば、貴方の大切な『エンジエル』も」

突きつけられた拳銃の先が揺れた。

何故毛利蘭をエンジエルと呼んで守ろうとするのか、詳細は知らない。だが、バー・ボンにはふたりに手を出さないように釘を刺し、毛利蘭が宮野志保を庇つた際にはどけと叫びながら最後まで彼女に銃口は向けなかつたと聞いた。

ベルモットは非情な犯罪者だが、それでも確かに彼らに対して何らかの特別な感情を抱いている。それだけは確証があつた。

「……警察が民間人を人質に取つて犯罪者を脅すとは思わなかつたわ」

「秘密主義だと名高い貴方が見せてくれたせつかくの弱みです、利用しない方が失礼でしよう？」

芝居がかつたように両手を広げてみせると、彼女は動搖をしまい込んで余裕の笑みを浮かべてみせた。さすが世界的な銀幕のスター、取り繕いが上手いし早い。

「それでも私がこの取引に乗らないと言つたらどうするの？ 貴方、本名まで晒して、殺されるわよ。貴方の周囲ごとね」

「生憎と周囲と呼べるような人もいない身の上でしてね。もしこのまま貴方が引き金を引くというのなら殺人の現行犯で逮捕、逃亡しても国際指名手配をかける手筈は整っています。また、この場で貴方が手を下さないというのなら、つまり俺自身が組織の人員をおびき寄せる餌になれるわけですね？ 願つたりですよ」

そして俺を殺そうとのこのこやつてきた奴らを片つ端から捕まえ、どんな手段を用いてでも情報を吐かせる。仮に情報を持つていなくともいい、欠片でも組織と関わっているのならどんな末端でも使い道はある。無駄にするなんてそんなもつたいことはしない。

「ちなみに、工藤新一の情報を公にするというのもはつたりではありますん」

全世界に流すような真似はしませんが、と前置きをして笑顔のまま続けた。

「組織に情報を流すのはもちろんですが、そうですね、世界各国の諜報機関にも流しましよう。肉体の幼児化なんて不老長寿につながる人

類の夢だ、それがもたらす利益は計り知れない。多くの国々が幼児化する薬を作った天才的科学者と、その薬を服用したサンプルという切り札をもつ日本警察に協力を持ち掛けてくるでしょう」

だが、ただでこの案件には関わらせてやらない。それまで組織の捜査を行っていればその情報を提供してもらうし、行っていなければそれなりの情報を用意してもらう。そうでなければこの「美味しい話」には乗らせない。

「彼らと言う餌に釣られた各国の諜報機関は連携し、本気になつて貴方方の秘密を暴きにかかる」

容赦のない魔女狩りが始まるだろう、組織の構成員の居場所はこの世界のどこにもなくなる。それでも組織は、その秘密主義を守り抜けるだろうか？

「国益が絡んだ『国』は、それはそれは恐ろしいと思いますよ」

国のためにという大義名分は、時として人を狂わせる。それこそどんなことも、きっとやつてのけるだろう。俺たち公安警察のやり方すら生ぬるく思えるくらいに。

そこまで言つて、俺は少し肩の力を抜いた。すっと息を吐いた俺を警戒するように、ベルモットは少しだけ目を細める。

「まあ、出来ればそんなことはしたくないんですけどね」

苦笑してそういうと、ベルモットは鼻で笑つた。そりやそうだ、ここまで言つておいて「やりたくない」とかどの口が、ということだろう。俺もそう思う。

「俺たちの目的はあくまでもこの日本国家の秩序と安寧、そして国益です。だから本来は、宮野志保と工藤新一を確保した時点で貴方に取引なんぞ持ち掛けず、今言つたことをしても良かつた。そちらの方が手つ取り早いですね」

他国との連携は面倒だが、日本が有利に立ち回れるだけの材料は揃っている。組織の幹部に協力を求めるなんてリスキーなこともする必要はなかつた。

「ですが、俺の欠片程度の良心が、民間人を生贊にするような真似は避けたいと叫んでましてね。あえて自分の顔と本名を晒して、こうして

交渉の場を設けました。あ、ちなみに俺、公安警察におけるこの案件の責任者です」

「良心なんて笑わせるじゃない、単に他国にその薬の利益をわけてやるのが癪なだけでしょう？」

「ああさすがにバレてますか、否定しませんよ」

ははつと笑うと、彼女は撃鉄を起こした。それでも俺は笑顔を保つ。そして少しだけ声色を落とし、ゆっくりと彼女に言つた。

「守つてくれませんか？」

笑顔のまま、少しだけ首を傾ける。

脳裏に浮かんだ、俺を信じると言つた新一くんの顔。彼女が取引に乗らなければ、俺は今言つたことをそのまま実行する。俺自身の手で、彼と彼の周囲から平穏を奪う。それが、個人よりも国家を優先する俺の職務だ。

良心が痛まないかつて？ 痛むに決まつていて。それでも、やるんだ。

「ひとでなしの俺から、貴方の宝物を。貴方自身の手で、守つてくれませんか」

俺を悪魔と呼ぶなら呼べばいい。

*

ベルモットとの交渉を終え、俺はその足で警察庁に向かつた。

部屋に入つてすぐ、金髪を短くそろえた眼鏡の女性に掴みかかられる。ああ、この人がジョディ・スターリング捜査官か。後ろにはアンドレ・キヤメル捜査官もいる。まったく最悪なタイミングでの顔合わせだ。

「貴方……っ！」

怒りをにじませたその瞳に、無感情な視線を返す。

そういえば彼女は工藤新一やその周囲と親しいだけでなく、ベルモットとも因縁があつたはずだ。確か親の仇だつたつけ、冷静でいらっしゃないので無理はないかもしない。まあ、俺には関係のないこと

だ。

「やめたまえ、ジョディ君」
「ジョディ、その手を離せ」

M r. ブラックが制止し、赤井さんが彼女の手を掴んで離させた。
そのまま彼女をその腕で押しのけて下がらせる。

「すまない、柊木くん」

「お気になさらず」

気にした風もなく笑顔を返した。それを見て、赤井さんは何か言いたげに口を開いたが、そのまま口を閉ざした。本当は彼も同じことをやりたいのだろう。

「アンドレ・キャメル捜査官にジョディ・スターーリング捜査官ですね。改めて初めまして、柊木旭と申します。今後ともよろしく」

その挨拶に、案の定返事はない。そしてそのままF B I 捜査官の前を通り過ぎ、彼らの前に立つた。今日彼らを呼ぶように指示したのは俺だ。

「……新一くん」

俺がそう呼ぶと、彼はびくりと反応し、顔をあげた。彼の後ろには、工藤優作氏も静かな顔をして立っている。

「……さすが柊木さんですね！ ベルモットを寝返らせるなんて……これでベルモットから組織の情報をもらえれば、捜査は格段に進みますね！」

いつも通りの顔を取り繕つても、震えるその手は隠せていない。まあ、こういう反応してくるだろうとは思つたけど、やつぱりこの子はクソガキだ。

俺は下手な笑顔を浮かべる彼の脳天に、拳骨を叩き落した。

*

ごつといい音が部屋に響いた。

誰もが驚いた顔で息をのみ、当人は頭を抱えて悶絶している。一応手加減はしたが、それでも相当痛かつたと思う。俺の拳も痛い。

「いいか、俺がやつたことや言つたことを考えれば本当にお前が言うなつて感じだけど、誰も言つてくれないようだから全部棚に上げて俺が言つてやる。物わかりが良すぎんだよクソガキ」

ぶるぶると震えながら、涙目の新一くんが俺を見上げた。

何で拳骨食らつたのかまるでわかつていないう顔だ。本当にそう、何でこの子はこうもたやすく危険や恐怖を乗り越えようとするのか。

「俺は確かに君を利用すると言い、君はそれを承諾した。だがその詳細も伝えることなく俺は君を人質に使つたんだ、駒として物として扱つた。俺はそれに対し文句を言うなとまで言つたつもりはねえぞ」

「……え」

わかるか、と。そう言つてその瞳をまっすぐに見つめた。

俺はこの案件の責任者だ、だから他の捜査官に文句を言われる筋合いはない。俺が決めしたことだから従え、そうでなければもつと良い策を持つて来いと言うだけだ。

だが彼は違う。彼は「協力者」であつて俺の「部下」じゃない。まして彼は脅されて協力者になつたわけでもなく、ただ善意から俺たちに力を貸してくれる「協力者」だ。

俺に使われるにしてもせめて事前に詳細を教えてほしかつたど、もつと他の方法はなかつたのかと、そう喚いていい立場なのだ。

「たとえどんな状況であろうと、自分や自分の大切な人の平穏を脅かした相手を許すな。それらしい理屈に踊らされて仕方のないことだと諦めるな。弁えることが大人になることじやない、恐怖を乗り越えることが勇気じやない」

乗り越えちゃダメな恐怖だつて、あるんだ。

俺がそういうと、その大きな瞳から涙がひとつ零れた。

「そんな風に利口ぶつてるから俺みたいな奴に利用されるんだ。せつかく出来のいい頭持つてんだ、もつと賢く立ち回れ。状況がどう転んでも自分の守りたいもん守れるように頭使えよ。恐怖を乗り越えて危険に飛び込もうとするな、研ぎ澄ませて危険を回避するくらいして

みせろ」

怖がれ。怖がつて、その恐れる展開を避けられるように頭を使え。あえて危険に挑むな、挑むならその勝算を数えて最悪の事態を避けられる手を打つてからにしろ。

自分を、大切なものを、その行く末を、そう簡単に人に預けるな。「あんたもですよ、工藤先生。何てめえの息子を危険に晒されてすました顔してんだ。まず彼女よりもあんたが俺に掴みかかってくるべきだろ。頭が良かろうが所詮は十七のガキだぞ、自己責任求めるにはまだ早い未成年に、なんて事件に関わらせてんだ。あんたはもつと早く、この事態を避けられたはずじやねえのかよ」

本当に俺が言うことじやない。だけど俺の口は止まらなかつた。ずつと、言いたかった。

「息子さん、頭は切れるか知らんが少なくとも俺には及ばねえし、まだまだ大人の世界をわかっちゃいない。だから俺みたいなこずるい奴にいいように利用される。……ちゃんと近くで、見守つてやれよ」せめて、成人して独り立ちするくらいまでは。俺に子供はいなければ、それが親の役割だつてことくらい、わかる。少なくとも俺のクソ親父は、そうしてくれたから。

「……柊木くん」

そこで初めて工藤先生は、口を開いた。その声はあくまでも静かで、しかし何かを抑え込んでいるような圧があつた。

「今回の作戦を成功させてくれて、心から感謝する。息子を、『世界』から……『君』から守つてくれて、本当にありがとう」

そして、深く頭を下げた。まっすぐで、綺麗で、誠実だった。頭を下げたまま、言葉を続ける。

「この案件の指揮官が、君で、……本当に良かつた」

「……今その発言します？ 僕が言つてること伝わつてますかね」「伝わつてているとも。だからこそだ」

そつと工藤先生は頭を上げて、苦笑を漏らした。そして息子に目線をやる。

「新一」

励ますように、促すように声をかけた。

新一くんは涙にぬれた顔を袖でごしごしと拭き、真っ赤な目で俺を見た。

「……柊木さん、言つてることめちゃくちゃじやなかつたですか？」
「どうか俺、少し前に貴方を信じますつてかつこつけたんですけど」「まあ、俺も途中から自分が何言つてんのかわからなくなつたよね、ニュアンスで理解して。あの握手の時、もうこの子一回危険に晒してわからせるしかないなとは思つたよ。君を利用しますなんて言つてる相手を何で信じるんだよ馬鹿だろ」

あの雰囲気に流されるなんて君も大概口マンチストだなと鼻で笑つてやると、新一くんはむ、と頬を膨らませる。真っ赤な頬が大きく膨らんで林檎のようだ。

「一度とこんな大人を信用するんじやねーぞ」

そう言つて、涙で濡れた顔にハンカチを押し付けた。

*

工藤親子とFBI捜査官が部屋を出た後、実は同じくその部屋でじつと話を聞いていたそいつがようやく口を開いた。

「よし柊木お疲れ！　トイレ行く？　エチケット袋？　それともシャワー？　あ、ベッドも今空いてるよ」

「何を言つてるんだ諸伏」

は、と声を漏らした風見さんが諸伏を見たとき、ずるりと膝の力が抜けるのを感じた。あ、これ無理だ、久々に来た。倒れ込みそうになつたときすぐさま肩を支えてくれた、力強い腕。

「やつぱり限界來たか。よく堪えたよ」

「ふるや……」

「とりあえずソファに横になるか。吐き気は？」

「だいじょうぶ……」

もはや力も入らず、降谷に引きずられるままにソファに転がる。ぐるぐると視界が回り、手足が冷たくなつていいくのがわかる。ぶるりと

寒気に震えたとき、諸伏がばさりと毛布を掛けてくれた。手が届く位置にペットボトルを置かれる。

「ああ風見さん、話してませんでしたね。完全無欠に見える柊木ですが、唯一の弱点がありまして。何と女性全般アウト。特にベルモットみたいな年上美人は一番苦手。下手に接触するところなります」

「……は？」

「まつたく、ベルモットとの交渉中もいつ倒れるかとひやひやしてたぞ。さつき掴みかかられたのも実は危なかつただろ」

「おもいださせないでくれ……」

まだ世界が回っている。まだマシになつたとは言え、さすがにトラウマ直撃レベルのベルモットは無理だ。むしろ俺はよく堪えた。一応顔には出さなかつたつもりだが、隠し通せただろうか。

「……冗談では……ないんですよね……」

「お恥ずかしながら……」

今後ベルモットと接触を持つていくことを考えると真剣に気が重い。でも、あの役は俺にしか務まらない。まだ降谷のことはバラせないし、諸伏のことともちろんだ。風見さんは交渉役には向かない。そして合衆国勢には任せられない。

「そういうや、ベルモットが寝返つたことまだキールに伝えないよう念を押として……あと降谷もまだ正体バラさないでくれ……出来ることならお前のことは最後まで隠し通したい……」

「了解。わかつたからお前は一回休め。……まさか本当に、あの魔女を引き入れるとはな」

油断はできないが、本当に寝返つたなら大きすぎる収穫だ。

そう続けた降谷に、かすかに頷いた。ベルモットは多分、俺たちが知りたいことをほぼすべて知っている。ラムやボスの正体、組織の全体図、もしかしたらボスの目的も。まだ詳細は聞けていないが、約束だけは取り付けた。

脳裏に、彼女との最後の会話が蘇る。盗聴器では拾えない距離でかわされたあの会話は、たぶん誰にも聞こえていない。

その場を去ろうと俺に背を向けたベルモットは、首だけで俺のほう

を振り返つて言つた。自分が裏切るとは思わないのかと。それに対して俺はくるく首を振る。

彼女は裏切らない。何故なら彼女は、きっと俺と同じだと思うから。

『……これは本当に、俺個人としての勝手な想像ですけど』

闇の中で見つけた光は、眩しかつたでしよう？

そう言うと、ベルモットは初めてわかりやすく動搖した。

『貴方は裏切れませんよ。少なくとも、彼らを危険に晒すことはしない』

『……わかつたように言うじゃない』

『眩しいものなら俺も知っていますから』

貴方が言う「天使」のように、綺麗な奴らではないけれど。

『そういう存在つて、裏切れませんよね』

苦笑してそう言うと、ベルモットは何だか複雑な顔をした後、ひとつ溜息をついて、くるりと俺に背を向けた。

『変な子ね、貴方』

さつきと今と、どちらの顔が本物なのかしら。

その言葉に、くすりと俺は笑う。

『もちろんどちらも、俺ですよ』

また連絡しますね、とそう言った俺の言葉に、彼女は答えなかつた。あの反応はきっと図星だと思っていいだろう。彼女は絶対に、自分が見つけた光を守ろうとする。だから組織ではなく、こちらにつく。「……眩しいんだよなあ」

何か言つたかと聞き返した諸伏に何でもないと言つて俺は目を閉じた。

瞼の裏に浮かんだのは、底抜けに明るく笑うそれぞれの笑顔。今でも俺の部屋に飾られている、六人で撮ったあの記念写真だった。

今日は解散だと背中を押され、そろつて部屋を出る。一言では言えない感情と思考が頭をぐるぐると回った。煙草を吸いたい。

廊下に出た新一は一度立ち止まり、また涙をぬぐつた。柊木くんから押し付けられたハンカチには涙のシミが出来ている。

「涙は止まつたかい、新一」

「……うつせえ」

からかうように優作が言うと、拗ねたように新一は言つた。目は赤くなつていても涙の気配はない。

彼の涙を見るのはこれで二回目だ。そのどちらもトリガーハンコ君の言葉だ。それだけで、柊木くんの言葉が新一にどれだけ影響を与えているのか察せられる。

新一は唇をきゅっと結んでからジョディを見上げ、改めて口を開いた。

「……ジョディ先生、ありがとう」

「新一……」

「心配してくれたことはわかっています。ジョディ先生だけじゃなくて、皆さんも。……だけど、できればこの件で柊木さんを責めるのはやめてください」

柊木さんの言葉でわかつてくれたと思うけど、と前置きして新一は続けた。

「……柊木さんは、何度も忠告してくれた。この件だけじゃなくて、他のことについても、ずっと。それでも、——公安の仕事や、この事件に協力することの意味を今日まで理解しなかつたのは俺なんです。柊木さんに『俺』を使わせてしまつたのは、俺だから」

本当はすごく優しい人だから、あの作戦に罪悪感がなかつたはずがないのに。それでも職務を全うして、そのくせ俺がちゃんと自分や自分の守りたいものを守れるよう、俺の足りないところや甘いところまで教えてくれた。

そう言つた新一は、確かに微笑んでいた。

「……多分、こんなこと言つたら柊木さんに『お前馬鹿じゃないのか』ってまた説教食らう氣がするけど、やつぱり俺は、……柊木さんに感謝しかない」

言いそうだ、とつい内心で頷いた。何で自分を危険に晒した相手に感謝するんだと、心底呆れた顔をする柊木くんが容易に想像できて少し笑う。

今回の柊木くんの策は、やはり全面的な賛同は出来ない。得るもののがどれだけ大きかったとしても、結果的に誰も傷つかなかつたとしても、どうしても。だが、決して否定も出来なかつた。それが彼の職務であり、俺が思うよりずっと彼は考え、悩み、苦しみ、そのうえでの交渉に挑んだことくらいはわかる。

正しくないとわかっていても、やらなければならぬことはある。俺が明美を利用して組織に潜入したのも、そうだつた。

「……そうだな。彼の言葉には、私も身につまされたよ」

ぽつりと優作も言葉をもらす。少し目を伏せたその姿には確かに哀愁が感じられる。子どもを守るべき父として、大人として、思うところがあつたのだろう。新一が協力者になることを止めなかつたのは俺も同じだ。確かに軽率だつた。

「……ええ、私も冷静じやなかつたわ。明日、ちゃんと彼に謝罪する」「自分もです。……失礼な態度をとつてしまつた」

ジョディとキヤメルが言葉を漏らすと、ジェイムズも頷いた。俺たちの中で唯一、ジェイムズだけがあの交渉を最後まで落ち着いて聞いていた。

「彼は彼のやるべきことをやつたのだ、相応の信念と覚悟をもつて。だからこそ彼は、一言の言い訳も漏らさなかつた。そして君たちの態度を責めることもしなかつた」

何と批判されようとも、どれだけ責められようとも、やるべきだと思つたから断行したし、かと言つてそれを認められたいとも、正当化したいとも考えなかつたから。

長年あらゆる捜査に携わってきたジェイムズの言葉が、重く響く。「柊木くんの交渉もそうだが、私としては他の公安の捜査官たちも見

事だと思つたよ」

降谷くん、諸伏くん、風見くんも同じ部屋で交渉の内容を聞いていた。彼らは俺たちの動搖など気にすることもなく、交渉の流れを聞きたつ周围を見張る捜査員に指示を出し、必要とあらばベルモット確保のために動員する準備を完璧に整えて。友人として柊木くんを案ずる気持ちもあつただろうに、おくびにも見せなかつた。

彼らは柊木くんの覚悟に全力をもつて応えているように見えた。その姿勢に、敬意をもたずにはいられない。

「学ぶべき点は多そうだな。我々も、君も」

そうジエイムズが新一に笑いかけると、新一も苦笑して頷いた。
「俺はまだ、協力者なことに変わりないから……俺は俺のできることを考えて、……できることがないならそれはそれで今の俺の力量なんだと納得して、……できることを増やせるよう頑張ります」

いつか俺も、俺の頭で考えて、柊木さんや誰かの役に立てるように。ただ利用されるのではなくて、対等な立場で「協力」ができるように。そう言つた新一の瞳には、燃えるような決意が見えた。

「あの彼と対等か。なかなか大きく出たじやないか、新一」
からかうように言つてやると、新一は楽しそうに笑つた。
「目標は高い方が燃えるでしょ？」

「違ひない」

子どもがひとつ階段を上る姿を、目の当たりにした気がした。

* * *

翌日、出会い頭にFBIの捜査官たちに頭を下げられたことにはさすがに面食らつた。失礼な態度をとつてすまなかつたと言われても、別に俺は全く気にしていないし謝罪を求めたつもりもない。というかどういう心境の変化だ。

背後で予想外が過ぎて慌てる俺を笑つてゐる気配がする。諸伏、後で覚えてろ。

「……さてはあのガキなんか言いました?」

「どうかな。当面の新一の目標は君と対等になることだそうだ」

「何で止めないんですか」

目標にするならもつと健全なものがたくさんあるだろう。よりにもよつてこんなこざるい大人を引き合いに出すこともない。そう言つても赤井さんはただ唇を歪めるばかり。いや本当に止めてやつてほしい。

苦笑したM r. ブラックが、改めて尋ねる。

「それで、ベルモットとの今後の接触については？」

「数日後、直接会う手筈をつけました。さすがにいきなり核心を聞いても答えてくれないかもしないので、初回はボスやらムのことよりもスナイパーや情報網のことをデータにまとめてきてもらうつもりです」

ふむ、とM r. ブラックは思案するように目線を浮かせる。

何事にも段階というものは必要だ。重要度の高い情報を聞くのは回数を重ねてある程度こちらのことを知つてもらつた後の方がいい。距離感が定まらないうちから核心を聞くと、嘘は言わずとも真実を言わない可能性が高い。言葉遊びが上手い相手には特に用心がいる。

「ベルモットから得る情報にもよりますが、その後は組織に対する忠誠心の強いスナイパーを確保する作戦に進もうと思います」

おそらく対象はギャンティとコルンになるだろう。まずは彼らを確実に、捕まえる。

作戦の段取りの大枠は考へてある。あいつらは怒るかもしれないが、お叱りは甘んじて受けとしよう。何なら拳の少しくらいは受け入れるつもりでいる。と言つてもあいつらはあいつらで俺に甘いところがあるので、メシでも作つてやればそれで手を打つてくれるとも思う。ちよろくて助かる。

「ああ、降谷、ベルモットと会うとき、お前も同席してもらう。予定調整よろしく」

「構わないが……俺のことは最後まで隠したいと言つていなかつたか

？」

「だから『降谷』じゃなくて『バー・ボン』で来てくれ

「！」

察した降谷が驚いたように瞬きをしたあと、にやりと笑った。楽しい悪戯を思いついたような、「降谷」の笑い方だつた。

「つまり俺はベルモットと同じように、寝返った人間として動けばいいんだな？」

今後の作戦においてベルモットと降谷に協力してもらわなければならぬ場合もあるだろう。ベルモットへの信頼を示す意図も含め、バー・ボンがこちら側の人間であることは早めに伝えておいた方がいい。かと言って、情報のすべてを晒す必要はない。

万が一俺の策が崩れたとき、降谷が逃げのびる可能性をわずかでも上げるためにも、降谷が公安だということは極力漏らしたくなかった。これまでも、これからも、降谷以上に組織に深く潜り込める人間が現れるとは思えない。降谷を失うことだけは絶対に避けなければならぬのだ。

「バー・ボンがこっちに寝返った理由は適当に考えといてくれ。俺も適当に話を合わせる」

「了解」

楽しそうに降谷は笑つた。相手がかの大女優でも、嘘と本当を織り交ぜた降谷の言葉なら誤魔化せるだろう。

「言うまでもないことですが、皆さんも特に外で降谷と接するときは今まで以上に細心の注意を払ってください。決して降谷が公安の人間だということが露見しないように」

俺が皆を見まわしてそう言うと、皆はしつかりと頷いた。

「キールについては？」

ベルモットの寝がえりの話は指示通りまだ伝えていないがと続けられ、少し考える。

俺はまだ彼女に会つたことはないし、その特性もよくわからない。CIAからの潜入捜査官なら相応に優秀だということはわかるが、俺の指示に従つてくれるとも思わないでむしろその存在はある意味危険だ。

さすがに邪魔をしてくるとまでは思わないが、彼女は彼女の、CIAとしての思惑で動くだろう。いずれ協力を頼むことがあるとしても、今はまだ早い。

「……ええ、ベルモットの寝返りのことはまだ伝えないでください。もちろんバー・ボンのことです。他はこれまで通りで構いません。向こうが何か言つたら共有をお願いします」

「了解した」

じやあ後はそれぞれの捜査にと言いかけたところで、先ほど頭を下げてくれた実直な捜査官に声をかけた。

「そういえばキヤメル捜査官」

「はい！」

「確かFBIでも有数のドライビングテクニックの持ち主だと伺いましたが」

「は、そのように自負していますが」

下手な謙遜をしないあたり、逆に有難い。そう思いつつ、俺は満足げに頷いてみせた。なるほど、運転が得意。とても助かる。

「この辺を中心、出来る限りの道路情報を頭に入れておいてください。最近は工事も多いです、常に最新の情報を頭に入れておくようにお願いします。いつそのテクニックを発揮してもらうとも限りませんから」

「了解しました」

しつかり頷いてくれたのを確認し、笑顔を返す。

いつというか、すぐに發揮してもらうことになるのでは是非とも頑張ってほしい。次の作戦は楽しいことになりそうだなあと内心笑いつつ、俺は改めてそれに指示を飛ばした。

いつものように出勤してみると、昨日の夜「俺ももう帰るからお前も帰れ」と言つて俺を追い出したはずの同期兼上司が、昨日と同じスースで端末の画面を見つめていた。

「……徹夜したな？」

「……ああ、おはよう諸伏。次の作戦考へてたら止まらなくなつてな」
こきりと首を鳴らしたそいつの目の下には、薄く隈が出来ていた。
基本的に健康的な生活習慣を心掛けているはずだが、このところたまに隈を見かける。

「俺に帰れつて言つといて……全く、仮眠行つてきたら？」

「そうだな……あ、諸伏、それ今日の朝刊か？ 見せて」

「仮眠は？」

「新聞読んだら寝る」

やれやれと首を振りつつ、朝刊を投げ渡した。悠々と柊木はキヤツチして一面から目を通す。

「何か大きな事件あつたか？」

「いや、今日の朝刊はわりと平和だつたぞ」

「おい爆弾事件起きてるじやねーか、どこが平和だ」

「犯人捕まつてるなら平和の範囲内」

昨日パトカーがうるさかつたのはそれだろう。大きな事件だから多分萩原も臨場して頑張つたのではないだろうか。

出世して以降も我らが同期は優秀な検挙率を誇つていると聞いている。

「……この事件の規模なら萩原も多分徹夜だな」

同じことを考えていたのだろう柊木が、ぼそりと呟く。今頃萩原はくしやみでもしているかも、と少し笑つた。

「でも大きい刑事事件はそれくらいだな。後はまあ最近の政治云々の話と……ああ、前の法務大臣がやらかした不正の裁判の判決が出たとか、首都高のトラック横転事故の話とか、未発見だった歴史上の偉人の愛刀が見つかったとかかな。さしてめぼしいものはなかつたと思

うぞ

「……そ、うか」

今ほんの少し柊木に動搖があつた氣がしたが、瞬きする間にいつも通りの顔に戻ったから氣のせいだつたかもしれない。そのままぱらぱらと新聞をめくり、あつという間に最後のテレビ欄までたどり着いた。相変わらずすさまじい速読だ。

「じゃ、俺一時間くらい寝てくる。シャワー浴びてから戻るから」「了解。今日はデートの日だろ？ ちゃんと隈消して来なよ」

「かわりに行つてくれないか」

「真顔で言うな。ほら、おやすみ」

心底嫌そうな顔でおやすみ、と言つた柊木は仮眠室へと向かつて行つた。まあ、嫌がる気持ちもよくわかる。今日はベルモットとの約束の日なのだ。

ベルモットとバー・ボンを一度に相手にするなんて芸当、柊木くらいにしか出来ないだろう。

彼女に指定された先は、隠れた雰囲気のバーだった。

まだ早い時間なので営業している様子はなく、少し警戒しつつ扉を開けると、中にはベルモットがひとりカウンターに腰かけてグラスを傾けていた。

「遅いわ。レディを待たせるなんて男の風上にも置けないわね」

「おかしいな、俺の時計では時間ちょうどなんんですけど」

「待ち合わせの時間前にスタンバイしておくのが男の嗜みよ」

「それは失礼。覚えておきましょ」

苦笑して彼女の隣に腰かけた。カウンターの奥にはさまざまな種類の酒が並んでいる。

「飲みたいなら勝手にしたら」

「生憎と車で来てまして。強いわけでもないので遠慮しておきます」

見たことのない酒の種類も多く、興味本位でぼんやりとボトルを眺

める。

もっぱら飲むのはビールだし、洋酒も少し覚えたとはいえる詳しいとは言い難い。ああ、あれスコッチか。その隣にはバー・ボンもある。知つた名前の酒を何となく目で追つていると、カウンターを滑るようにな隣からメモリが飛んできた。

「……お望み通りの情報よ」

「ありがとうございます。中身拝見しますね」

持つてきていた小型の端末を取り出す。彼女が偽の情報を出すとは思っていないし、メモリに細工をしているとも思わないが、念には念を入れたい。

「……やはり忠誠心が強い腕利きのスナイパーはキャンティとコルンですか」

「そのふたりがダントツでしょうね。仲間意識も強いわ」

「へえ。……なるほど。さすがベルモット、欲しい情報がすべてまとめられていますね。これなら次の作戦も問題なさそうだ」

「……次のターゲットは、そのふたりつてことかしら」

そう言つたベルモットに、にこりと笑顔を返す。

「そうだと言つたら、邪魔をしますか？」

俺の顔を見て数秒沈黙したベルモットは唇の端だけで笑つて、まさか、と嘲るように言つた。どうやら彼女は仲間意識というものを持ち合わせていないらしい。

「私は貴方が約束を守るならそれでいいわ」

「もちろん、工藤新一の身柄も秘密も責任をもつて守りますよ。毛利蘭にも手出しさせません」

彼女から出された条件は、ただそれだけ。

ふたりのことを、その身の安全だけでなく、穏やかで普通の生活も含めて守ること。

むしろ、ベルモットがそう言つてくれるのは有り難かつた。その「約束」のおかげで、俺は公私の両方の理由で彼らを守ることが出来る。

「それじゃ、今日の話は終わりかしら」

「ああすみません、今日は紹介したい人もいるんです。ちょっと待つてください」

「紹介?」

ベルモットが眉をひそめたところで、また店のドアがゆっくりと開いた。適当な時間に来いとは言つたが、相変わらずタイミングのいい奴だ。

「失礼、遅くなりましたか?」

「バー・ボン……！」

余裕の笑みを浮かべた降谷を見て、ベルモットが顔色を変えた。

*

「……やはりNOCだつたというわけ?」

一瞬で落ち着きを取り戻したベルモットは、余裕の笑みを浮かべつつ降谷を見据えた。それに対して降谷は芝居がかつたように両腕を広げる。

「だから違うと何度も言つているじゃありませんか。僕はNOCじゃない、立場的には今の貴方と同じですよ。……大切な『宝物』を守るために組織を裏切り公安警察に寝返つた貴方とね」

その言葉に、ベルモットはかすかに眉をひそめた。

うわ、性格の悪い煽り方しやがる。内心そう呆れつつも表面ではため息をつくに留めた。

「……どういうことかしら」

「彼の言う通りですよ。彼は公安警察の人間ではありません。貴方と同じく、条件付きでこちらについてもらつて『協力者』です」「警察の情報を手に入れようと彼に近づいたんですが、話してみると結構話のわかる人としてね。それならと思って彼につくことにしたんですよ」

ふふ、とバー・ボンの顔で笑いながら、降谷はカウンターの中に入つた。どのがいいかな、と遠慮なく酒を物色する。オイお前飲む気か。

「……貴方が出した条件は?」

「ふふ、秘密です。でも、大したことじゃありませんよ。そうでしょう？」

もちろん条件内容など決めてないので軽くまあな、と話を合わせておく。バー・ボンはそもそも秘密主義で通していると聞いている。別に秘密のままでも違和感はないだろう。

お目当ての酒を見つけたのか、降谷はグラスを用意して緩やかに酒を注いだ。

「まあ、条件なんて適当でいいんです。ほら、せつかくできた友人とは仲良くしたいでしよう?」

「……えつ俺お前と友人だつたの?」

「ひどいな、友人のためと思つて危険を冒して情報を手に入れてきたのに……やっぱりこれはいらぬかな?」

「そういうえば俺、お前とはとても仲の良い友人だつた気がする」

芝居がかつたように泣きまねをしながら、懐から取り出したメモリを自分の酒に落とそうとするのをとりあえず止める。中に何の情報が入っているのかは知らないが、降谷がバー・ボンとして集めてきた情報なのだろう、こういうのは振りでも心臓に悪いからやめてほしい。

そんな俺の心中を察してか、またふふ、と笑つて俺にそのメモリを投げて寄越した。

「……随分親しいじゃない」

「友人ですから」

本当にNOCじやないのという疑いを隠すことなく、ベルモットは降谷を見つめた。そこで余裕で笑顔を返すあたり、さすが腕利きの潜入捜査官だと思う。やっぱりこういうところは真似出来ない。

とりあえずさっさと話を済ませてしまおうと俺は口を挟んだ。

「今後、ふたりに協力してもらうこともあるかと思いましてね、早めに顔合わせしておこうと思ったんです。秘密を共有できる相手がいるというのは気楽でしょう? お互に弱みを握り合うことにもなりますし」

「つまり、お互いに貴方を裏切らないよう見張つておけというわけね?」

「話が早くて助かりますね。その通りです」

もちろん、ベルモットの裏切り防止策のひとつでもあり、バー・ボンが窮地に陥つたときに助けるための策のひとつでもある。お互いがお互いを見張り合い、逆に言えばフォローできるというだけでそれぞれの生存率は跳ね上がる。もちろん、ふたりが協力することで作戦の幅が非常に広がるのも有難い。

この次の作戦はバー・ボンに動いてもらうが、いずれベルモットにも情報提供以外の形で手を貸してもらうことになるだろう。

「是非お互いに仲良くしてください。これまでと同じようにね」

俺がそう言うとバー・ボンはにつこりと笑みを返し、ベルモットは不快そうに眉をひそめた。その様子にまた笑いつつ、俺は立ち上がる。「もう帰るのかい？」

「忙しくてな。今日は車で来てるし、お前の酒に付き合うのはまた今度だ」

「それは残念」

「ベルモットも、また連絡します。次はちゃんと時間前に伺いますよ」

「一秒でも遅れたら帰るわよ」

心しておきますとだけ言葉を残し、俺はふたりに背を向けた。

最初の接触としてはこんなもんだろう、次の作戦に必要な情報はちゃんと手に入つたし、ふたりの顔合わせも完了した。あの様子なら多少疑われても降谷は軽く煙に巻く。

俺は振り返ることなくドアを開け、外に出て太陽の光を浴びてようやく息をついた。とにかく長居は無用、俺の女性苦手をベルモットに知られでもしたら絶対に面倒なことになる。

「……とりあえず、今は目の前のこと集中だな」

ベルモットと「核心」の話をするのは、次の作戦でこちらの本気を示してからでも遅くはない。ふたりから渡されたメモリをきゅつと握つて、俺は自分の車の方へ足を向けた。

そつと自分のグラスに入れたバー・ボンに口をつける。独特のほろ苦い甘みが口の中に広がった。

「……随分と気に入ってるようね？」

ベルモットの言葉に、唇の端を上げた。

気に入っている、そう見えただろうか。「安室透」「バー・ボン」として設定した性格は本来の俺とはまったく異なるもので、それぞれの立場にいるときは出来る限りその「顔」になり切って振舞う。そうすると不思議なもので、好き嫌いや感情までそれぞれの「顔」に合わせて感じるようになった。

「ええ。面白いでしょう？　彼」

降谷零にとつて、柊木旭はとても良い友人だ。そしてまた、異なる「顔」の自分も彼のことは気に入っている。「バー・ボン」とて例外ではない。

「彼は本来真っ白なんですよ。真っ白なのに、職務において黒として振舞うことを躊躇しない。血に塗れることも、泥で汚れることも厭わない。それなのに、やつぱり彼は白いままなんです。どんなに汚れても、芯までは染まらない」

茨の道を自ら選ぶんですよ、染まってしまった方が楽なのに。

公安の仕事は汚れ仕事も少なからずある。長く務めている者の中には、警察官になつた当初はもつていたはずの罪悪感を投げ捨ててしまっている者もいる。俺としてはそうなる前に別部署に異動すべきだと思うが、無理もないと思う。

確固たる信念をもつて日本のために働き、「本来やつてはいけないこと」だとわかりながら違法作業に勤しむのは、精神的に辛い。良心も痛む。その痛む良心を抱えながら、それに耐えながら、それでも職務を果たす。それが公安警察の務めだ。公安に来てそう日もたつていないので、柊木はそれをよくわかつていた。

罪悪感を捨てることなく、自分の「罪」を正当化することなく、痛む良心を正面から見据えながら、それでもなお為すべき」とを。

バー・ボンからすればそんなものは愚の骨頂だ。自分のことしか考えない「僕」にとつては、愚かとしか言いようがない。だからこそ、見

ているのは面白い。

「見てみたくなったんです、彼がどこまで『白』でいられるのか。いつまで彼が、自らの『心』を捨てないまま職務を果たせるのか」

最後まで「白」のままでいてほしいような、いつそ「黒」にも染まつてほしいような。どちらに転んでも見ているのは面白い。だから「バー・ボン」は柊木旭を気に入っているし、協力者になることを選んだ。

組織にいるよりも、彼の行く末を見る方がよっぽど愉快だと思ったのだ。

「NOCではなくともスパイだという現状は、とてもスリリングで刺激がありますしね」

「……貴方本当に性悪ね、バー・ボン」

「おや、ひどいな」

呆れたようにこちらを見るベルモットに、くつくつと笑う。

貴方だつて、彼に対しても思つところがあつたからおとなしく言うことを聞いているのだろうに。ただ脅されただけで素直に言うことを聞くほど、彼女は安くない。

「貴方、そ、どうして？ 彼らのことが心配なだけなら、やりようは他にもあつたでしよう」

それこそ、柊木旭をさつさと暗殺してしまえばいい。難しくはあるだろうが、彼女が本気になつて計画を練れば不可能ではないはずだ。

「……心からの言葉は、わかるからよ」

聞こえるか聞こえないかくらいの声で、ベルモットは呟いた。一瞬見せたその切なげな表情はすぐにかき消されたが、あの交渉の会話を聞いていた俺は、ベルモットが柊木のどの言葉を指しているのかはすぐにはわかつた。

『人でなしの俺から、貴方の宝物を。貴方自身の手で、守つてくれませんか』

あれは間違いない、柊木があの場で零した「本音」だった。公私両方で、心からそう願つて出た言葉だった。柊木の「甘さ」ともいえるその言葉は、どうやら魔女の心も溶かしたらしい。

俺はそつと、ベルモットに笑いかけた。

「手を組みましよう、ベルモット。どうせ彼に目をつけられた以上、この組織の崩壊は決まつたも同然です。沈むとわかっている泥舟に乗るよりも、泥舟の沈没を早める側にまわつた方が賢明でしよう?」

「……随分高く買つてるじゃない」

「事実ですよ」

彼は組織に終末を告げます。それも間違ひなく、近いうちに。

そう言うと、ベルモットは皮肉気に笑つた。

「まるでヘイムダルね?」

「北欧神話ですか。彼がヘイムダルだとしたら、今すでに終末を予感してギヤラルホルンをミーミルの泉に取りに走つているところでしよう」

ヘイムダル——「世界を照らす輝き」という名を持つ、北欧神話の「白き神」。ラグナロクが到来するとき、彼はそれを知らせるためにギヤラルホルンを吹き鳴らす。

「もつともヘイムダルとは違つて、彼がギヤラルホルンを吹くのは神々に危機を知らせるためでなく、本当に『終わり』を告げるためでしようけど」

お前らが好き勝手する時代は終わつたのだと、彼が自ら告げるのだ。

神々の中でもつとも容姿が美しく、暁の光の化身と呼ばれるヘイムダル。柊木のルツクスにも、その「旭」という名にも、よく似合つてゐる。

「彼の奏でる角笛の音色は、どれほど美しいのでしょうかね」

「……本当に悪趣味だわ、貴方」

にこにことそういう言つと、ベルモットは呆れたように手元のグラスに口を付けた。

* * *

ていた。疲れた顔をしていたのだろう、顔を合わせた瞬間にふたりは苦笑する。

「お疲れ」

「お疲れ様です」

風見さんに差し出されたペットボトルを有難く呷る。短時間で済ませた分、今日は倒れずに済みそうだ。心配そうに風見さんがこちらを見ている。申し訳ない。

「大丈夫です。資料は集めてもらいましたか」

「そちらが指定された近辺の道路地図、その中にある信号のサイクルのデータです」

「あとその近辺に店を構えている協力者のリスト。……それから、伊達と松田の、この先一ヶ月分の勤務予定。

それを差し出した諸伏は、隠してはいたが非常に微妙な顔をしていた。何に使うんだこのデータ、と表情が言っているのがわかる。俺は苦笑しつつそれを受け取った。

「助かる」

「……柊木」

「あいつらは俺たちの『協力者』で、非常に優秀な刑事だ。状況判断が正確で、少ない情報からでもきつと俺の意図を読み取ってくれる、頼りになる奴らだ。そういうだろ？」

だからこそ、手を借りる。だからこそ、使わせてもらう。

次の作戦には、どうしても「刑事部」、それも「捜査一課強行犯係」の手が必要だ。伊達も松田もメインは殺人や傷害の捜査だから今回の作戦的には少し畠は外れるかもしれないが、「人手が必要な捜査」になれば応援として呼ばれるだろう。

「あ、風見さん、公安部からドライブテクのある人間を……そうですね、五人ほど選んでおいてください。人数分の車の手配もお願ひします」

「了解しました」

さつと風見さんが部屋を出ると、もう一度俺は諸伏に向き直った。「そういえば諸伏、お前キャンティやコルンと面識はあつたって言つ

てたよな」

「え？　ああ。一応何回か話したことはある。あいつらスナイパー相手には特に仲間意識の強かつたから、わりと親し気に声をかけてきたよ」

それなら、と今まで得た情報から推測したことを尋ねた。これが合っているかどうかで作戦の危険度が全く違ってくる。外れているならもうひとつ対策を考えなければならない。

「……ああ、そういうえばそんなこと言つてゐるの聞いたことがあるな。こだわりがあるとか、スナイパーとしての美学とか、そういう感じのことと言つてたと思う。スコープ通して獲物を見るのが好きなんだよし、ビンゴ。それなら伊達や松田にそう危険はないはずだ。あとは俺が、きつちりと計算をしてタイミングを計るだけ。この作戦は全て、タイミングがものを言う。

満足げに頷いた俺を見て、諸伏は思わずといった感じで口を開いた。

「何を企んでるんだ？」

俺はその言葉にやりと笑つて、一言だけ。警察官として本来あるまじき言葉を、口にした。

「ちょっと強盗事件を起こそうと思つて」

その時の諸伏の顔ときたら、それは見ものだつたと言つておく。

「伊達」

「おう、松田か」

いつも通り登序して早々、よく知つたサングラスに声をかけられた。ちょうどいい、俺もこいつに会つたらまず聞こうと思つていたことがある。また連絡すると言つたきり、今朝までずっと何も言つてこなかつたあいつについて。

「柊木から意味不明なメッセージが来たんだが」

「お前もか?」

驚いてそう返すと、松田も驚いたようだつた。

あいつにしては珍しい、文章にもなつていなかつたメッセージ。忙しかつたのか、詳細を伝える気がないのか、俺のところにきたメッセージには意味不明な言葉だけ。

『青のダッジ・バイパー　トランク確認　深追い無用』

何のことやら。

車に興味のないあいつがそんな車種を知つていたことにも驚いたし、トランク確認つて何のことだ。少なくとも俺の知り合いにダッジ・バイパーに乗つてる奴はいない。メッセージを返しても返事がないどころか既読もないときた。

「……なんだそりや」

俺のところに届いたメッセージを覗き込んだ松田が、思わず言葉を漏らす。

お前のところには何てメッセージが来たんだと聞いてみれば、ん、と松田も画面を表示させて俺の目の前に突き出した。

『お目当ては廃倉庫　トランクを開けさせるな　容赦無用』

「……なんだこりや。ご丁寧に地図までつけて。ここ行つてみたか?」

「さすがにこれだけの情報で遅刻する気にはなれねえよ、すぐ向かえつてんならそう書くだろ。お目当てつてのも何のことだか……詳細聞いても返事もしやがらねえし」

わけわかんねえ、と松田はがしがしと頭をかく。

柊木は基本マメな奴だし、言葉をめんどくさがるようなことはしない。こんなにらしくないメッセージを送つてきたからには何か意図があるのだろうが、これだけでは全く意味がわからない。

「……萩原にも聞いてみるか」

「さつき会つたから聞いた。何もきてねーってよ」

松田曰く、先日の爆弾事件以来目の下に隈を作つている特殊犯係の同期は、「えつ俺には何も来てないんだけど！　旭ちゃんひどくない？」と事件の調書を片手に喚いたという。萩原に送つていなるのは、あいつが今死ぬほど忙しいことをわかっているからだろうか。

そう思つたとき、背筋に冷たいものが走つた。

「……松田、何か嫌な予感がしてきた」

「言うな。……俺もだ」

萩原と違つて今大きな事件を抱えていない俺たちに、あの柊木が意味深なメッセー‌ジを送つてきた理由。あいつは、無駄なことは絶対にしない。

柊木が「何か」を企んでいることを理解したちようどその瞬間、俺と松田のスマホが同時にメッセー‌ジの着信を告げた。松田と顔を見合させ、おそろおそろ画面を見る。そこにはやはり、柊木からのメッセー‌ジ。

『頼んだ』

だから何をだ。

そう叫びそうになつた時、捜査一課に強盗事件発生の一報が飛び込んできた。

＊＊＊

東都の地図が映し出された画面に、いくつかの点滅した光が走る。信号のサイクルも問題なし。これなら計算の修正はいらないだろう。悪いな伊達、松田。お前らならきつと、あのメッセー‌ジから俺の意図を読み取つて動いてくれるつて信じてるから。

そう内心にやりと笑うと、目の前のマイクに向けて口を開いた。
「作戦に変更はありません。皆さん事故のないように気を付けて」
イヤホンからそれぞれの返事と、車のエンジン音が聞こえた。あれ、聞こえなきやいけないはずの声が三人分聞こえなかつたなあ。
「返事が聞こえませんよ強盗犯さんたち？ 後処理が面倒なので間違つても捕まらないように」

俺のその一言に、後ろにいた風見さんと諸伏が噴き出した。ヘルプを頼んでいる公安の捜査員たちも、それぞれの前の端末から目を離さないまま、少しだけ面白そうに肩を震わせる。同時にイヤホンから、あいつの笑い声も聞こえた。

『本当にいい性格してますね、貴方。最高です』

『お前に言われるなんていつも光榮だよバーボン』

そちらの状況は、と尋ねると、随分と機嫌よく、問題ありません、の一言。

『いつでも行けますよ』

その頼もしい言葉に口角を上げ、俺は自分のスマホを取り出した。

伊達と松田の返信はうるさいが、今は無視させてもらう。おそらく奴らもすでに登庁し、お互いのスマホを見せ合っている頃だろう。そして、俺が「やる気」だということを悟った頃だ。

『頼んだ』

一言だけメッセージをふたりに送り付け、またスマホをポケットにしまった。頼りにしてるよ、ふたりとも。そう内心で呟き、口を開く。

「カウント始めます。今からジャスト一分後、作戦開始

この国で好き勝手をやつてくれた奴らへの反撃は、ここから始まる。

柊木との通信を切り、イヤホンの回線を切り替える。耳に飛び込んできたのは、ヒステリックな女の声だった。

『なんだいバーボン、任務の前に他の奴と連絡なんて余裕じやないか

！』

その声に、その女がいる向かいのビルの方に身体を向けて、笑つて見せた。道路を挟んでいて俺の目ではよく見えないが、きっとスコープ越しにこちらを見ているのだろう。

「すみません、情報提供者からの連絡だったもので。まあ、こちらには腕利きのスナイパーがふたりもいるんです。余裕があつて当たり前でしょう？」

『ふん、見え透いた世辞はいいよ。今のところ姿も形も見えないけど、そのターゲットが来る時間は間違いないんだろうねえ？』

「僕の情報は確かですよ、間もなくです。退屈だからって無関係な鬼を狩るようなことはしないでくださいね？」

後始末が面倒ですから、と僕が言うと、もうひとつ鼻を鳴らし、ようやく堪え性のないスナイパーは黙つてくれた。向かいのビルに身体を向けたまま、視線だけを下に落とす。

キャンティとコルンがいるのは向かいのビルの屋上、俺がいる場所より少し上に位置する。そのビルには、いくつかの小さな店が入っていた。そのうちのひとつ、一階にある小さな質屋。そしてちょうどその前に、古めかしい青い車が止まっている。

ああ、これから起ることを思うと楽しみで仕方がない。

『……バーボン』

「何ですか？ コルン」

珍しくコルンの方から話しかけてきた。

いつものごとくその声は無機質で何を考えているのかわからないうが、今の声は何となく不審そうな色を含んでいた。

『お前、楽しそう』

今の顔もスコープ越しに見られているのだろうか。そんなことありませんよ、と言おうとしたそのとき、空気を貫くような大きな銃声が響く。

一分経つた、スタートだ。

突如として耳に入つた銃声に身構える。

当然、アタイたちが撃つたものではない。こつちはまだターゲットの姿すら確認してないというのに、いったい何があつたつてんだ！

「バー・ボン、今の銃声は！」

『僕にも全く……貴方がたではないんですね？』

「俺たち、違う」

続いて聞こえてきたガラスの割れる音と、車の激しいエンジン音。下を見ると、すごい速さでぶつ飛んでいく車が見えた。

「あれは、」

『——キャンティ、コルン、すぐに離脱してください。作戦は中止です』

「バー・ボン？」

『どうやら貴方がたがいるビルの一階に、強盗が入つたようです』

「強盗？」

下の店からは店主だろうか、見るからに焦つた男が飛び出してきた。

このビルにはちんけな店しか構えていなかつたはず。そんな場所に、しかもこのタイミングで強盗だつて？

『今急発進した車が強盗犯のようです。この場所は警視庁からも遠くない、すぐにそこにも警察がやつてくるはず。付近にはすぐに検問が張られるでしょう。僕は拳銃しか持つていませんし何とでもなりますが、貴方がたのライフルは目立ちますよ？』

早く逃げた方がいいんじゃないですか？

この状況すら楽しむように言うバー・ボンに、盛大に舌打ちをする。こういう嫌味つたらしいところ、本当に気にくわない男だ！

「コルン、逃げるよ！」

こくつと頷いたコルンと共に、ライフルをケースにしまい込む。長居は無用だ、銃刀法なんぞで捕まるなんて冗談じやない！

「強盗犯逃走開始」

「刑事部への通達も予定通り、検問の指示も出ました」

公安の捜査官たちの報告が上がってくる。現状、予定通り。バーボンからも対象二名が逃走に入つたと報告もきた。

「検問の指示の詳細は?」

「検問の配置は想定通りです。被害者の証言より、強盗犯は『運転手を含め三名、実行犯はおそらく外国人の男性と女性。男性は長身で黒い帽子とサングラス、女性は短めの明るい茶髪が特徴。逃走に使われた車両は明るい青色であり見ない外国車』、それを踏まえて疑わしい車両があれば止めるように、とのこと』

よし、指示通り上手いこと証言してくれたようだ。

被害者は決して嘘を言つてない。そもそも強盗に入られてパニックに陥つてゐる被害者の証言なんて曖昧なものだ、これだけ覚えていればむしろ上等だと刑事部は考えるだろう。

「対象誘導班、準備をお願いします。それから強盗犯三名へ、逃走の指示と保護の用意を。重ねて言いますが、事故を起こさないように細心の注意を払つてください」

公安らしい統率された返事を聞いて、少し口元を緩めかける。それをきゆつと締め直し、東都の地図が映し出されたモニターを見据えた。

「全く、ついてないね!」

「俺、撃ちたかった」

愛車に乗り込んで東都の街を走る。他の車なんか吹つ飛ばしてこの場を離れたいところだが、サツがうようよしているこの状況ではそもそもいかない。

アクセルを踏み込みたい気持ちをぐつと抑え、緩やかに道を走つていく。

「とにかく隠れ家に戻るよ」

「ああ」

今日の任務は、バー・ボンが持ってきた情報が発端だつた。

あのいけ好かない情報屋が言うには、組織の情報がどこから漏れている様子があるという。今後行う任務の情報の内容などが主で、現状ではさほど影響は出ていないが、情報が洩れているというその事実そのものが問題だ。

『情報の送り先は特定できていませんが、鼠の行動はある程度調べがついています』

鼠が隠れ家のようを使つている場所というのが、バー・ボンが立つていたビルの一室だつた。書類上では空き部屋であり室内も家具ひとつない空き部屋だが、鼠が不定期に訪れていることが確認されているという。

『調べたところ、スパイはふたり組。ひとりが室内に入り、その間もうひとりはビルの入り口で見張りをしています』

投げて寄越された写真には、ふたりの男が写つていた。組織の構成員は数が多い上に、すぐ死んじまう奴も多いから入れ替わりが激しい。アタイには見覚えがないが、組織の下つ端にでも紛れ込んでいたのだろう。

『正確な身元はまだわかりません。ですが……』

『そいつらぶつ殺せばいいんだね?』

その通りですなんですが、とバー・ボンはうさんくさい笑みを浮かべた。とはいえる、とバー・ボンは言葉を続ける。

『一応、本人の口からお話を伺いたいので。次に彼らがこのビルに現れる日、待ち伏せをしようと思うんです。必要なら場所を変えて飼い主の名前を教えて頂こうかと』

『ハン、お上品な言い方をするじゃないか。待ち伏せして急襲、拉致つて拷問して口を割らせようつてんだろう?』

バー・ボンの笑みが深くなつた。

否定をしないその口元は、相変わらず胡散臭い笑みを形作つている。

『それが出来ればベストなんですけれど、抵抗される可能性も否めません。当然ながら、逃げられるくらいなら片づけてしまいたい。どちらにしろ生かしておくのはひとりで十分なので、見張り役は始末しないといけませんしね』

だから、おふたりの力を借りたくて。

平気な顔でそう宣う優男に、口元をゆがめた。

『いいよ、最近ぶつ放してなくて物足りなかつたんだ。コルンも乗るだろう?』

『撃てるなら、やる』

ただしアンタがしくじつたらアンタの脳天ごとぶち抜くよ、とそう言うと、バー・ボンは望むところです、と平気な顔で笑つた。

そんな風に話していたのに、まさかこんな形で失敗するだなんて。「全く、あんなちんけな店に、しかもこんな時間に強盗つて正氣じやないね!」

「キャンティ」

そう毒づいたところに助手席のコルンから声をかけられ、何だい、と腹立ちまぎれに返すと、長い付き合いのコルンは気にした様子もなく、あれと前を指さした。改めて正面を見ると、警察の検問が行われている。

遅かつたか、と舌打ちをした。

「コルン、ダッショボードにアタイたちの免許証が入つてる」

「わかつた」

当然、偽造したものだが、一見した限りでは偽物とはわからないほど精巧につくられている。今道を引き返しても却つて怪しまれるし、おそらく検問はここ一か所ではない。実際アタイたちは強盗犯でも何でもないのだ、堂々と通つてやればいい。

唯一見られたらヤバイ愛用のライフルはトランクに収まっている。さすがに検問でそこまで確認されることはないだろう。

「さつさと切り抜けるよ」

「ああ」

こんな状況に陥らせたバー・ボンの脳天に必ず鉛玉をぶち込んでや

ると心に決めながら、検問で渋滞している道をゆっくりと進んだ。

強盗事件の発生からすぐ、検問を敷くように命令が下りた。

被害者からもたらされた犯人や逃走車両の特徴を頭に叩き込む。青の外車というところにわずかなひつかりを覚えたが、とにかく部下とともに命令された配置に車を飛ばした。

「伊達警部補、お疲れ様です！」

「お疲れさん」

すでに先に到着していた班が検問の支度を終えていた。今のところ通過した中には不審な車両はなかつたという。

犯人は逃走後、姿をくらませている。どこまで入念に計画されたのか、自動車ナンバー自動読取装置、通称「Nシステム」の設置場所を上手く避けて逃走したらしい。目立つ車を使つているくせに、変なところで用意周到な犯人だ。車を乗り換えている可能性も否めないが、とりあえず青の車両は全チエックだな。

一台一台運転手に声をかけ、強盗事件発生の旨を伝え、念のため免許証の提示を求める。大人しく見せてくれる人もいるし、そうでない人もいる。まあこれだけ渋滞させてるんだ、急いでいる人にとってはいい迷惑だろう。しかしこちらも仕事なので、笑顔ですべて受け流す。刑事になつたばかりのとき、教育係だつた先輩刑事に一番に教えられたのは「刑事なんざ嫌われてなんぼだ」という言葉だつた。特にこういうときは「まさに」と思う。

懐かしい思いが胸をよぎつたそのとき、視界の端に鮮やかな青が見えた。

「……青の、ダッジ・バイパー……」

思わずそう呟くと、隣にいた部下にどうかしましたか、と声をかけられる。はつとして、目の前の車への対応に戻つた。

脳内に蘇る、柊木からのメツセージ。青のダッジ・バイパー、まさに逃走に使われた「明るい青色であまり見ない外国車」だ。もちろん確定ではない。確定ではないが、柊木のメツセージが、この状況を見越してのものだつたとしたら。

その車両の番になつたとき、さりげなく部下に目線をやつた。部下が無言で頷いたのを確認し、運転席側へ回り込む。

「すいません、警察です」

「見りやわかるよ、なんの騒ぎだい？　こつちは急いでるんだけどね！」

運転していたのは、左目の下にある蝶のタトゥーが印象的な、気の強そうな女だつた。そしてその奥には、瘦せた男。座つてはいるが、身長はかなり高い。どちらもカタギではなさそうだ。しかもなるほど「青い外車」だけでなく、「おそらく外国人」の「短めの明るい茶髪の女」と「黒い帽子にサングラスの長身の男」まで一致ときた。しかしひとり足りない。犯人は三人組のはず。

「この近くで強盗がありましてね、まだ逃走中なものでこうして車を確認させてもらつてるんです。いやしかしい車ですね、ダッジ・バイパー、しかも初代だ」

「お喋りは結構だよ。免許証でも見せりやいいのかい？」

「こりやどうも、拝見します」

差し出された免許証を受け取つて確認する。目立つて不審な点はないが、持ち主が怪しいせいか、どうも出来すぎているような違和感を覚える。――偽造か？

どちらにせよ、このまま通すわけにはいかない。

「おふたりさん、すいませんが一旦下りて頂けます？」

そう言うと、女は眉を吊り上げた。

「急いでるつて言つてるだろ!!　さつさと通しなよ!!」

「その強盗犯が逃走に使つた車が、ちようどこんな感じの外車でしてね。該当する車は一応確認させてもらつてるんですよ。なあに、座席やダッシュボード、トランクの中を見せてもらえれば構いません」

トランク、その一言を出した瞬間にその女は肩を揺らした。

柊木のメッセージにもあつた、「トランク確認」。どうやら本当に、そこに見られたくないものがあるらしい。人數誤魔化しに仲間をトランクに隠しているのか、それとも質屋から盗つた高級品の類か、はたまた脅すのに使つた拳銃か。

「確認、させていただけませんかね？」

そうにつっこりと笑つてみせた瞬間、目の前の青が急発進した。

「！」

とつさに車から離れ受け身を取る。伊達さん、と部下が叫んだが問題はない。あともう二年ほど、俺は意地でも怪我はできない。

そのまますぐに立ち上がり、部下に声をかけて車に乗り込む。他の奴らにはそのまま検問を続けるように指示を出し、部下の運転する車でダッジ・バイパーの後を追つた。

「こちら伊達、本部応答願います！」

『こちら本部、どうした』

「職質をかけた車両が検問を突破しました！ 乗っていたのは強盗の実行犯の特徴に該当する男女二名、ひとり足りませんでしたがトランクの確認を嫌がりましたので隠れている可能性もあります！ 現在追跡中！」

『何？ 車両の特徴は！』

「青の初代ダッジ・バイパー、こちらも特徴に該当します！」

続けて車のナンバーを告げると応援をすぐに向かわせる、絶対に逃がすな！と命令が飛んできた。了解、と返して一度無線を置く。そしてそのままポケットからスマホを飛び出し、別の場所で検問に当たつている同期を呼び出した。

『あんだけ伊達、お前今追跡中じゃねえのか』

「おうよ。松田、聞いたろ、青のダッジ・バイパーだ」

『……』

「よくわからんが、そういうことらしい。切るぞ」

それだけ言つて、電話を切つた。

伊達さん、呑気つすね、と目の色を変えて前の車を追う部下が叫ぶ。それに苦笑しつつ叫び返した。

「どんな時でも平常心！ 刑事としての心得だ憶えとけ！」

「ご指導ありがとうございます！ うわっと、」

「事故んなよ！」

「努力します！」

とは言つたものの、先ほどからかなり危ない。確か柊木からのメッセージは「深追い無用」だつたが、いつたいどこから先が「深追い」なのやら。犯人が逃走している方向的に、松田に届いていたメッセージの場所に向かつていてる可能性もある

つまり俺はここまでで、ここから先は松田にバトンタッチ? むしろいつたん逃がして油断させろってか?

そう思つたとき、全身に急ブレーキの衝撃を受けた。

伊達の連絡を受けてすぐ、俺はひとつ舌打ちをして車に戻り、無線をつないだ。

「こちら松田、本部応答願います」

『こちら本部、どうした』

「検問を突破したのは青のダッジ・バイパーだと伺いました。それにについて、気になることが」

『何だ』

「知人が零していた話ですが、今は使つていらないはずの廃倉庫の付近で最近珍しい車をよく見かけると。出来すぎた偶然ですが、確かに青いダッジ・バイパーという話でした。方向もあつています、もしかしたら

ら

『! 場所はわかるのか』

はい、と返事をして地図を頭に思い浮かべる。本当に伊達の追いかけている車がそこに向かつてているのだとしたら、今ならまだ先回りが出来る。

『松田、お前の班の者を連れてそこに向かえ。当たりだとしたら他に仲間がいる可能性もある。くれぐれも油断するな。状況によつては拳銃の発砲も許可する!』

了解、と告げて窓から顔を出し、部下たちを呼び戻した。簡潔に情報伝え、車を走らせる。

あの野郎、この状況をすべて把握していやがつたとしたら、俺や伊

達が配備される場所まで読んでいたことになる。いや、それも含めて指示をしていたのか。

つたく、人を使おうってんなきつちり作戦の詳細まで説明しろつてんだ、今度という今度は絶対にあの無駄にイケメンな顔殴つてやる！

背筋に冷たいものを感じて、ぶるりと身を震わせる。あつこれ多分伊達か松田のどつちかに殴られるフラグだな。いや絶対松田の方だ。ごめんて。

「A地点、通過しました」

「追っていた車の方は？」

「A地点にて急停止、妨害完了です。接触もなく、お互い被害はありません」

それは良かった。伊達に今怪我させたらまたあいつの結婚が遠のいてしまう。さすがにそれは申し訳ないので、早めに追跡を終えさせてもらつた。

無茶なカーチェイスは大事故のもと、キャンティたちにはさつさと伊達を振り切らせる。それでもしばらくは危険運転を続けるだろうから、その経路上で事故りやすそうな場所には公安の腕利きドライバーを配置。信号のサイクルを含めて計算し、どれだけの速度で走ればいいか指示を出した。これでダツジ・バイパーはどんな危険運転をしようとも、事故らず安全に隠れ家に帰れるというわけだ。

「B地点、無事通過しました」

「C地点、問題ありません」

どうやら彼らは順調にドライブを楽しんでいるらしい。後は松田の方か、と思つて後ろを向くと、真面目な顔の風見さんと楽しそうな諸伏がこちらを見た。

「松田刑事が本部に『知人からタレコミがあつた』という報告を上げました。例の廃倉庫に向かっています。この分なら先回りは間に合う

かと」

「ちゃんとパトランプもつけず目立たないように向かってるあたり、松田はわかつてるよなー。あとは松田次第じゃないか？　あ、強盗犯も無事保護したつてよ」

あとは松田次第、その状況にまで持つていければ九割方作戦の成功は見えている。が、最後の最後まで油断は出来ない。見逃していることはないかと改めて思考を巡らせながら、咥えた煙草に火をつけた。「何か不安要素でも？」

そんな俺を不思議に思ったのか、隣にいたMr. ブラックが言う。すっと煙を吐き出して、彼に苦笑を返した。

「作戦自体は順調です。俺が心配性なだけですよ」

「優れた指揮官は總じて心配性だと言うが、本当のようだな」

その言葉にさらに眉尻を下げる。

そりやそうだ、と思う。心配だから、不安だから、いくつものパターンを考えて、何重にも保険を作つて、少しでも安心できるように頭をひねるのだ。どれだけ頭をひねつても、俺は俺の作戦を完璧だとは思わない。思えない。ひとつ手を間違えばひとの命を奪つてしまふような作戦だ。どれだけ考えても考えすぎることはない。

「松田刑事、廃倉庫に到着。部下とともに倉庫を探索の上、待ち伏せるようです」

「対象車両、F地点通過。まもなく廃倉庫に到着します」

その声に、はつと意識を戻した。――ここまで来たら、本当にもう松田に任せられるだけだ。どうか無事に終わらせてくれよ、とただ祈る。

これが自分の考えた作戦だとわかつていても、祈ることしか出来ないことが歯がゆかった。

* * *

指定の倉庫に到着し、車を目立たない場所にとめる。
入口にまわつて拳銃を手に中を窺う。物音はしない。いつきに戸

を開けて、拳銃を構える。よし、誰もいない。さほど広くない中には、簡単なテーブルとイス、それに酒瓶とグラスがいくつか。誰か人がいたことは間違いなさそうだ。

数名の部下には外で身を隠すように指示を出し、倉庫の戸を一度閉める。幸いにも柱などの遮蔽物が多い、ここに残った数名くらいなら身を隠せるだろう。

「……来るでしょうか」

「……さあな」

部下の言葉に、俺自身も即答は出来なかつた。

正直なところ、確証はない。だが、決して無駄なことはしない奴が、しかも相手を出し抜く策を考えさせたら超一流の、とんでもなくえげつない奴が、わざわざ寄越してきたメッセージだ。これで何もないとは到底思えない。

あいつのメッセージにあつた、「トランクを開けさせるな」。伊達に「トランク確認」と言つておきながら俺に「開けさせるな」と言つたのは、この状況から考えればおそらく「トランクを開けさせると俺たちが危険だから開けさせるな」という意味。おかげた、トランクに入っているのは拳銃の類と言つたところだろうか。だから最初からわかるように書けつての、とは思うが、柊木の意図はわかっている。

あえて俺たちに余計な情報を与えないことで、俺たちが柊木の予想外の行動をとることを避けたのだろう。腹の立つことにあいつは俺たちがどういう状況で何を考えどう動くかを完全に把握している。どれだけの情報を与えれば想定通りに動くかと考えたうえで、あの不完全なメッセージだつたのだ。何とも腹立たしいが、柊木から追加の連絡が来ていないあたり、俺たちはあいつが思う「最適解」を辿つているはずだ。ならば、今は待つしかない。

小さくため息をついたその時、外から特徴的なエンジン音が聞こえてきた。皆の顔に緊張が走る。びくりと反応する部下たちに動くな、とサインを送り、息をひそめた。

エンジン音が、倉庫の前で止まる。車のドアが開く音がして、がらがらと倉庫の戸が開く音がした。また車が進み、倉庫の中に入り切つ

たとき、エンジンが切られた。

狙うべきは再度ドアが開き、車の外に足を踏み出した音がした、その一瞬。

「警察だ！ その場を動くな！」

俺の声を合図に一斉に飛び出し、拳銃を構える。倉庫の戸も勢いよく開き、外にいた部下も飛び込んできた。

驚いた顔でこちらを見るのは、運転席から降りようとしていた女と、その近くに立っていた男。ふたりは反射的にダッジ・バイパーの後ろにまわろうと走り出した。

「確保！ トランクを開けさせるな！」

いち早く倉庫の入り口付近にいた部下が先回りし、トランクの前に立ちふさがる。

どきな、と女は叫ぶが、そんなこと言われてどく馬鹿はない。確保しようとする部下を振り切ろうと、今度は入り口に向けて走り出した。男の方は走るのに慣れていないのか、すぐに部下が取り押さえた。コルン、と女が男の呼び名らしいものを叫ぶも、立ち止まる気配はない。

女相手に手荒にするのは趣味じやねえが、逃走を図ろうとする被疑者なら話は別だ。しかも、柊木のお墨付きも得ている。

頭をよぎつたのは、柊木からのメッセージの、最後の一言。

『容赦無用』

俺は逃げる女の背中に手加減せずタックルを決め、地面に押さえつけた。

キヤンティ、コルン確保の旨は、すぐに公安部にも連絡が来た。知らせを聞いた瞬間、ヘルプに来ていた公安捜査官たちからも歓声が上がる。逮捕にあたつた刑事も特に怪我はないとのこと。ということは松田も無事だ。思わず大きな安堵の息をついた。そんな俺を見て、諸伏は苦笑する。

「松田が丸腰の相手に負けるわけがないって言つたのはお前だろ？」

「……何事にも『もしも』つてもんがあるだろ」

作戦前、諸伏にキヤンティとコルンについてひとつ確認をした。それは、キヤンティとコルンはライフル以外の武器を持ち歩かないのではないかということ。

スナイパーであることにひどくこだわつてゐるという情報のほか、赤井さんの死亡を偽装してキールを組織に戻した際のキヤンティの行動。キールと同じ車に乗つていたキャメル捜査官を、大した距離もなかつたはずなのにわざわざスコープを覗き込み、ライフルで撃とうとしたという。

もしかして、と思つた。ベルモットから寄せられた情報を見ても、ふたりはスナイプ以外の任務を行つていない。それぞれの愛用のライフル以外の武器を使つたという記録が一切なかつた。

ならば、と思つた。ライフルさえ持てない状況に追い込めば、大したリスクもなく確保が出来るのではないか。体術に優れているなんて情報もないし、捜査一課に異動して以降も眞面目にトレーニングを重ね、犯人確保で非常に戦力になつてゐるというあの筋肉ダルマなら、余裕で捕まえられるのでは、と。

「一応病院行つたらしいけど、伊達も大丈夫だつてよ。むち打ちすらなさそうつて話だ」

「そうか」

もうひとつ、安堵の息。

刑事に必要な、ある種の図々しさと言うか、相手に何と思われようと職務を全うする岡太さと言うか、そういうものを伊達はちゃんと身に付けてゐる。そんなあいつがキヤンティ相手にビビるわけがないし、トランクを確認する流れにまで違和感なく持つていけると踏んで検問での煽り役を伊達に任せた。

無事トランクを確認できれば銃刀法違反、トランク確認を拒否して検問を突破すれば公務執行妨害。どちらにしろ罪状は出来る。実際は強盗犯でも何でもない彼らを刑事部に逮捕させるためには、何としてもここで何かしらの罪状を作つておく必要があつた。

「被疑者の連行は？」

「まもなく警視庁に到着するとのことです」

どこか満足げに言う風見さんの言葉に、ひとつ頷いた。ここまでくれば、後はこちらの仕事だ。下手に取り調べをされる前に、こちらで身柄は頂いておこう。

「風見さん、裏の理事官に話はつけてあります。キヤンティとコルンの身柄を引き取りに行つてもらえますか」

「了解しました」

そのときに、と一言付け加えると、珍しく風見さんが苦笑して言った。

「……それでよろしいんですか？」

「ええ。よろしくお願ひします」

再度風見さんは頷き、部屋を出て行つた。

俺は部屋にいたヘルプの捜査官たちに、笑顔を向ける。

「皆さんお疲れさまでした。お陰様でキヤンティ、コルンの確保は完了。この手柄は刑事部に譲ることになりますが、こちらが手柄を上げていくのはこれからです。とつても忙しくなりますので、今後もよろしくお願ひしますね」

そう言うと、やり切つた笑顔の捜査官たちが、また一斉に返事を返してくれた。音声だけ聞いていたであろう、無線の先の捜査官たちも、同様に。

そんな円満な雰囲気に水を差すように、勢いよくドアが開いた。

「Hey, こちらへの労りの言葉はないのかしら……？」

地を這うようなその低音に、俺はにつっこりと笑顔を返す。

「お疲れさまでしたお三方。最高の強盗役でしたよ」

「よく笑顔で言うわね貴方！」

真っ黒な服に身を包んだジョディ捜査官は、キヤンティによく似た明るい茶髪のウイッグを勢いよく取つた。その後ろでキヤメル捜査官はぐつたりと生氣のない顔をしており、赤井さんはサングラスを外して適当にしまつた。

「まさか日本に来て強盗に手を染めるとは思わなかつたよ」

「滅多にない経験が出来てよかったです。今後強盗事件を追うとき
にでも役に立つかもしませんよ」

「……いや、文句を言うつもりないさ、指揮官殿の『命令だ』」

そう言つて赤井さんは肩をすくめたが、まだジョディ検査官は怒つた顔をしているし、キャメル検査官はため息をついていた。

正直とても面白いし、少しばかりいい気味だと思わなくもない。

「雰囲気だけでもキャントイに似せるにはジョディ検査官にお願いするのが一番でしたし、キャメル検査官のドライブテクも是非拝見したくて。でも事前に店舗のオーナーに協力は依頼してありますから罪悪感を覚える必要もないですし、ちゃんと逃走経路と保護の段取りも組んで逃がしてあげたでしょう？」

ちなみに強盗に協力してもらつた質屋のオーナーは公安の「協力者」だ。少々窓ガラスを割つて店内を荒らしたが、もちろん実際は何も盗んではいないし、この強盗事件自体、適当なところで検査を打ち切るよう影の理事官に依頼をしてある。

強盗実行犯にはキャントイによく似た髪色のウイッグをかぶつたジョディ検査官と、帽子とサングラスを身に着けた赤井さんを。逃走の運転役にはキャメル検査官を起用した。こちらも信号のサイクルやNシステムの配置を考えて最短・最良の逃走ルートをちゃんと用意したのだから文句を言われる筋合いはない。日本警察とカーチェイオスなんてことにならないようにタイミングも考えた。

「……ひとついいだろか柊木君」

「何ですか？」

「実際のところ、キャントイ役のジョディと運転手のキャメルが必要なことはわかる。だがキャメルが運転手とコルン役を兼ねても良かったんじゃないのか？」

その方が人數の計算も合うだろう。

暗に自分は必要だつたのかと赤井さんに言われて、につこりと笑つて見せた。

「使い潰すつて、言つたでしよう？」

俺の言葉に、ほんの少しだけ赤井さんの口元が引きつった。俺の後

ろで諸伏が笑いを堪えているのが空氣でわかる。

「……なんて冗談ですよ、冗談！　日本に来て好き勝手してくれた報いをほんの少しばかり受けろなんて、全く思つてませんから！」

おや今度は誰かヘルプの捜査官が噴き出しかけたな。何をやつているんだ公安部、内心どれだけ愉快でもポーカーフェイスは保つてもらわないと。まあ多分この場に降谷がいたら盛大に爆笑してるだろうから、今回は何も言わないが。

「とにかくお疲れさまでしたお三方。今日はゆつくり休んでくださいね」

反論を許さないまま、俺は三人の無言の不満を笑顔で切り捨てた。ちなみにちゃんとその場にいたMr. ブラックは、最初から最後まで何も言わずに苦笑していた。

警視庁の刑事部に向かう途中の廊下に、伊達・松田両刑事は揃つてこちらを待ち構えていた。柊木さんが何かしらのメッセージを送っていたのは知っている。公安の者が手を出しに来るのを察していたらしい。

「公安部の風見と申します。先ほど確保された被疑者二名は、公安部で引き取らせていただく」

俺がそう言うと、伊達刑事は肩をすくめ、松田刑事は小さくため息をついた。

伊達刑事は黙つたまま手に持つていた書類を差し出した。なるほど、完全に準備万端で待つていたようだ。被疑者の身柄の移動に必要な書類はすでに記入され、あとはこちらで書き込むだけになつている。

「……アンタのことは噂だけ聞いている」

書類を受け取ると、静かな声で伊達刑事が話しうした。答えることなく無言を通すと、彼は苦笑して言葉を続けた。

「あいつらは元気か？　特にあいつは……あんまり『そこ』に、向いて

ねえだろうし

誰のことを言つているのかは、すぐにわかつた。伊達刑事の言葉には、ただ友人を心配する色だけが見えている。

「……その『彼』から、伝言を預かっている」

他の情報を伝えることは許されていない。だから俺の口から言えるのは、これだけだ。

『ごめんもありがとも、全部終わつたらちゃんと直接言いに行くから』

そう伝えると、伊達刑事はそつと目を閉じ、松田警部はまた少し息をついた。

「……つまり全部終わるまで会わねえつもりかよ」

「そうらしいな。全く、文句言えるのはいつになるんだか」

不機嫌を前面に出す松田刑事に伊達刑事は苦笑した。そして改めて俺の方を向き、言つた。

「風見さん、そいつに伝言頼むわ。『さっさと終わらせろよ』って

「ついでに、『ひとりだけ連絡なかつたから萩原が拗ねてる』もヨロシク

ク

何とも言えずまた無言でいると、気が向いたらでいいんで、と松田刑事に肩を叩かれる。そんじやあ後よろしく、とふたりは刑事部へと戻つていった。

その背中を見送り、改めて手元の書類に目をやると、裏に付箋が貼られているのに気付いた。走り書きの文字で、その筆跡は三人分。『無茶すんなよ ちゃんと食べて寝ろ』

『今回の協力の報酬、たらふく食わせろよ』

『俺だけ除け者ひどくない?』

本当に、いい友人なのだろう。立場に關係なく確かに繋がつていて、その関係に、どこか眩しさを覚えた。

キヤンティ、コルンの逮捕から一夜明け、俺は各社の朝刊を開いた。昨日の強盗事件について大々的に報道されている。いまだ犯人は逃走中、付近の住民は警戒を続けるように、と記事は締められていた。その記事から離れて随分と後半に、身元不明の男女、違法にライフルを所持していたため銃刀法違反で逮捕、とある。しつかりと新聞を読み込む人でなければきっと見逃してしまっただろう。それくらいさやかな記事だ。

俺はそれを見てひとつ笑みを漏らし、煙草に火をつけた。

ああ、愉快だ。

こちらに向いているベレッタの銃口にすら笑えてくる。

「ですから言っているでしょう？ 百歩譲つて任務の失敗までは責任を取りますよ。逃がした男たちの正体は僕が責任をもつて突き止め、始末しましょう。しかし、キヤンティとコルンの逮捕まで僕のせいにされでは困ります」

強盗事件という不測の事態に任務の続行を断念せざるを得なかつたその責任だつて、本来僕のものとは言い難い。そんなもの、誰にも予測などできないのだから。

「僕はちゃんと彼らにすぐ逃げるよう忠告しましたよ？ 僕も彼らも、逃走したタイミングは同じです。それでも僕は無事逃げおおせ、彼らは逃げられなかつた。それは他の誰でもない彼ら自身の責任でしょう」

それとも身を挺して彼らの逃走まで面倒を見るべきだったとでも？

そう笑つて見せると、ジンは舌打ちしてベレッタをおろした。その様子に、もうひとつすりと笑う。ジンとてわかっているのだろう。キヤンティとコルンの逮捕は、彼ら自身の失態だ。

そう見えるように、この作戦は立てられたのだから。

「……フン」

「あ、兄貴」

「あの二人ならそう簡単には口は割らねえ。捕まつたところで大した打撃にはならねえよ」

かわりのスナイパーならいくらでもいる、そうジンは吐き捨てたが、おそらくジンも気づいている。彼らは「最悪の形」で逮捕され、その逮捕には「幹部二人が捕まつた」以上の意味があるということを。

ジンの内心を思うだけで胸が躍つた。愉快で仕方がない。

「話は終わりですか？ それでは僕は引き続き、鼠の足取りを追います」

「バーボン」

「何ですか？」

氷のように冷たい視線が、僕を貫いた。

「二度目はねえ」

「それは怖い。では、頑張るとしましようか」

そう言つて僕は背を向けた。ふふ、と零れ落ちる笑みが止まらない。さて、存在もしない鼠の足取りでも適当に作るとしよう。

*

愛車に乗り込んだところでスマホが震える。誰からのメッセージかと確認すると、思わず口角があがる。終木に警察庁への登庁が遅れる旨を連絡し、車のエンジンを唸らせた。

指定された場所にたたずんでいたのは見知った。プラチナブロンド。

「ちょうど僕も連絡しようと思つていたんですよ、ベルモット」「キヤンティとコルン、あれは彼の仕業ね？」

僕の言葉に答えることなく、彼女は言い捨てた。

「もちろん。今、その件でジンに呼び出されていたところです。さすがのジンも、あれがすべて仕組まれていたものだとは考えていないよ

うですね」

「公安ではなく刑事に逮捕させたのは、そのため?」

「それも理由のひとつですが、それだけではありませんよ」

あまりに愉快で、つい喉の奥が揺れる。それが勘に障つたのか、ベルモットは不快そうにこちらを見た。

彼女の口が文句を紡ぐ前にと、僕は問い合わせた。

「この組織は非常に強大ですが、ベルモット。組織やあの方に心から忠誠を誓っている人間は、全体のどれだけいると思います?」

「……何よ急に」

「僕が見たところでは、多く見積もつて三割くらいかなと思うんですが」

ベルモットは不審そうに眉をひそめた。適当にドライブを続けながら、言葉を続けていく。

「では残りの七割は?——自らの目的や保身のために、組織に属することを選んだ者。脅されてやむを得ず従つている者。あとはただのし上がりたいだけの野心家や、自分の欲求のために人を殺したい者とかですかね。組織には従うけれど、従う必要がないなら従わない、従う相手は必ずしもこの組織である必要がない、そういう人たちでしょう」

彼らのことを、柊木は「邪魔」だと評した。ただでさえ巨大な敵を相手にするのに、いちいちそんな奴らまで相手にしていられない、と。「彼の目的は『組織の構成員を全員捕まえること』ではない。あくまでも『組織を崩壊させること』です。……ここまで言えば、聰明な貴方ならおわかりでは?」

ベルモットが息を呑むのがわかつた。どうやらようやく理解してくれたらしい。

あの「無駄なことはしない」柊木が、わざわざ強盗事件まで起こして刑事部を引きずり出し、殺人でも殺人未遂でもない、「銃刀法違反」なんて罪でキヤンティとコルンを捕まえた、その最大の意味は。

「組織の、——弱体化を狙つたっていうの?」

「ええ。逮捕すべき人間の選別を行つたと言つてもいいでしょ?」

脳裏に浮かぶのは、淡々と今回の説明をする柊木の姿。徹夜で策を練っていたのか、あくびを噛み殺しながら、作戦の概要をまとめた書類を片手に言葉を重ねる。

『逮捕だけなら簡単です。しかしどうせなら、その逮捕には逮捕以上の意味をもたらしたい。端的に言うと、キヤンティとコルンにはとても無様な形で捕まつてもらいます』

幹部が捕まると言うだけでも組織にとつては大きなニュースだが、たとえば公安やFBIと銃撃戦の末に捕まつたのであれば、ある意味組織にとつてもまだ予想の範囲内、下手をすれば名誉の負傷のような捉え方をされるかもしれない。

しかし、と柊木は続けた。

『任務に直接関係のないところで、その組織の存在すら知らないだろう刑事に公務執行妨害や銃刀法違反なんかの罪で逮捕されたとすれば、どうでしょう』

組織も結局は人の集まりだ。構成員それぞれに心はあるし、それはいくら統率しようとも強制できるものではない。柊木はそれをよくわかっていた。

『確固たる忠誠心をもつている構成員はとりあえず置いておきますが、たとえば何らかの、自身の目的のために組織に身を置いている構成員は、どう思うでしょう。はい、キヤメル捜査官』

『えつ……そりやあ……そんな組織について大丈夫か、と不安になるでしょうか……』

『俺もそう思います。財力だつたり保身だつたりそれ事情は異なるでしようが、その大前提にあるのは組織そのものの威信です。この組織に所属していれば自分は安全――』と語弊はありますが、それに近い感情は少なからずあるでしょう

その威信を、叩き壊す。

さらりと言いつ放たれたその言葉に、会議室の空気が変わった。

『何も知らねえ刑事相手に銃刀法なんてしけた罪で捕まるマヌケが幹部を務める組織なんて、俺なら絶対に嫌ですね。どう思うよバーボン、スコツチ、ライ』

『ええ、僕も絶対に嫌です』

『お断りかな』

『確かに有利得ねえ』

三人そろつて笑顔で切り捨てる。柊木は満足そうに頷いた。M

r. ブラックも興味深そうに頷いて同意する。

『有能で手強い者ほど引き際は心得ているものだ。組織が信用ならないと思えば、まず抜けることを考えるだろう』

『ええ。組織に脅されて協力させられていた者も同様です。諦めていた抵抗を改めて考えるかもしれない』

自力で抜けたならそれはそれ、その気配を察知すればバー・ボンやベルモットに秘密裏に補助させる。公安の保護や司法取引、FBIの証人保護プログラムをそれとなく示唆させるだけでも違つてくるだろう。情報さえ提供してくれるなら、こちらとしてもそれなりの待遇は用意できる。

そう説明した柊木に、諸伏は感心したように頷いた。

『それなら新たに情報を得られる可能性も出てくるな』

『ああ。だが組織への忠誠が薄くとも、組織を見限らない者もいるだろ。たとえば人を傷つけることそのものが目的だったり、組織でのし上がる事が目的の野心家だったり』

まあつまり、組織の先を考えられねえ馬鹿だということですが、とだんだん言葉を選べなくなつている柊木に少し笑つた。柊木は仲間内ではまだ言葉遣いが柔らかいほうだが、意識して直しているだけでは実はわりと口が悪い。

『そこはバー・ボンに誘導をかけてもらつて、まとめて逮捕します』
『どう誘導する?』

『キヤンティとコルンが逮捕されて幹部の席が空いた、狙うなら今だと煽つてくれ』

功を焦つた馬鹿は、我先にと任務に就くだろう。その矛先は、今回暗殺できなかつた居もしない「鼠」に向けられる。

柊木はそこで堪えきれずに欠伸をひとつ。

『……鼠が現れると見せかけるあのエリアが、俺たちにとつて絶好の

狩り場になるわけだな?』

『ああ、公安やFBIの捜査官をあのあたり一帯に張り込ませ、やつてきた馬鹿を一匹一匹捕まえる。狩り場が狩り場として機能する間はそれで地道に捕まえよう』

組織における「実働部隊」を削るという意味でもやる価値はあるし、もちろんその馬鹿のねぐらから得られる情報もあるだろう。キヤンティ、コルンの逮捕で表立った手柄を上げられなかつた公安捜査官たちにはここで活躍してもらおう。

そう言つた柊木の臉は半分ほど下りていた。

『キヤンティとコルンが捕まつた後なら、そのあたり一帯に捜査官がいることは不自然ではない。堂々逮捕しても、そこまで仕組まれたものだとは多分考えないでしょう。考えたとしても確証はもてないはずだ』

『……そうやつて組織の構成員を削れるだけ削り、確実に逮捕しないといけない忠誠心の高い者を見定めるってことね』

『はい。あんなでかい組織潰すのは面倒なので、できるだけ小さくなつてもらおうと思います』

ジョディ捜査官の言葉に頷き、眠気を誤魔化そうと思つたのか柊木は煙草に火をつけた。そろそろ柊木には煙草の数を控えるように言つた方がいいのかもしれない。

『ついでに、組織がそうやつて弱体化していくば、忠誠心の高い者たちも焦りだすでしよう。迂闊な行動が増えるかもしれないし、内部分裂や抗争が起きてもおかしくはない。それはそれで組織の弱体化につながるので、是非とも仲間内で潰し合つてもらおう』

そうやつて弱り切つたところで、王手をかける。

『とりあえずこの作戦の概要と意図はそんなもんですが、何かありますか』

その言葉に異議を唱える者は誰一人としておらず、次々と賛同の声が上がる。Mr.ブラックがとりあえず少し休んだらどうかね、と苦笑すると、柊木はそうさせてもらいます、と煙草を消した。

『それぞれの役割分担と指示はまとめといたんで読んでおいてください

い。異論は聞きます。必要な準備は各自済ませておくようにお願いします』

そしてさつさと柊木は退室し、その後役割分担を見たF B Iの三人は顔色を変えることになつたわけだ。今でもその時の赤井の顔を思い出すと笑つてしまう。ざまあみろ。

「……バー・ボン」

ベルモットの声に、はつと意識を戻した。

緩やかにドライブを続けながら、何ですか、と変わらない笑顔で問う。

「もしかしたら、彼は本当に、——」

囁くようなその言葉の続きを、愛車のエンジン音にかき消された。しかし、彼女が何を言おうとしたのかは、十分にわかる。

「やっぱり彼は、本当にヘイムダルなかもれませんね」

耳慣れない角笛の音色が、空に響いた気がした。

* * *

煙草の煙をくゆらせていると、バー・ボンの仕事を片づけた降谷が帰ってきた。組織の方は、と尋ねると、問題ないの一言。

「ジンも全て仕組まれたものとまでは考えていないようだ」

「お前もお咎めなし?」

「咎められる筋合いはないからな」

そう余裕で笑う降谷に、そうかと返した。とりあえず無事ならそれでいい。そういうえば、と降谷は持っていた珈琲を呷り、口を開いた。「キヤンティとコルンはどうだ?」

「キヤンティは罵詈雑言、コルンは黙秘」

公安で身柄を預かつた二人にさつそく取り調べをかけたが、今のところ碌な証言を得ることはできていない。まあもともとスナイパーとしてのし上がつた一人だ、大した情報を持つているとも思わないし、期待はしていない。

「とりあえず檻の中にいてくれればそれでいいよ。邪魔しないでくれ

るなら十分だ

「そうだな。……ベルモットに会つたぞ」

今回の作戦の意図は伝えた、とやけに楽しそうに言う降谷に、首をひねつた。

「それで遅くなつたのか。何でそんな楽しそうなの？」

「お前の策で度肝を抜かれる人の顔を見るのはなかなか愉快でな」

「性格悪い」

「お前が言うな」

軽口を投げながら顔を見合わせ、同時にくつと笑う。

「……正直なところ、本当にこの案件の終わりが見えてきて、驚いてる」

苦笑をしつつ言う降谷に、俺もひとつ頷いた。半世紀以上かけて育つてきた組織を相手にしているのだから無理もない。俺としても、本当ならもう少し時間をかけてことを進めても良かつたと思うところもある。だけど。

「……できるだけ早く終わらせたいんだ」

この案件を終わらせたら、やりたいことがたくさんある。帰りたいところがある。脳裏に浮かぶのは、やはりベッドサイドの写真立て。そんな自分に苦笑をしながら、できるだけ効率のいい策を考えるから協力よろしくと言うと、降谷は当然だ、と大きく頷いた。

順調が過ぎる、と思う。

狩り場には連日馬鹿のように獲物がつめかけ、尾行にも気づかないままねぐらまで案内してくれる。そしてそのねぐらには組織に関するもののみならず、長年公安が探し求めていた情報も結構にあつた。裏世界というのは案外世間が狭いのかもしれない。

おかげでこちらときたら毎日仕事仕事、休みが欲しいとまで言わないうから睡眠時間くらいは確保したいというのに、そもそもいかない。

「格木、これ追加の報告書」

「ん」

諸伏に渡された報告書に目を通していく。……ああ、例の指名手配犯捕まつたのか。

情報源は馬鹿な獲物だけではない、組織から逃亡を図つた者たちのなかにも重要な情報をもつている者は少なくなかった。バーボンとベルモットの誘導により保護された彼らは、組織の支配から逃れた解放感もあるのだろう、堰を切つたように持つている情報を吐き出してくれる。

組織の脅威はある秘密主義あつてこそ、そのベールさえ剥がしてしまえば攻略自体はそう小難しく策を立てる必要はない。そろそろ雪がちらつこうかという季節だが、できることならこの冬が終わるころには組織を片づけてしまいたかった。——そう、余計な横やりに入る前に。

「……ところで格木、お前最後に寝たのいつ？」

「時間は？」

「二時間」

「時間は？」

「今朝仮眠はとった」

溜息をつかれるが、これは仕方がないと言いたい。というかお前だって最後に寝たのいつだと聞くと、諸伏も遠い目をした。

「……昨日の夜」

「時間は？」

「時間は？」

「……三時間？」

「変わんねえよ」

そして同時に溜息をついた。

「……あの狩り場がこんなに盛況になるとは思わなかつたんだよ……組織の実働部隊、本当に馬鹿すぎだろ……他の奴らが捕まつてた聞いてたら警戒するのが普通じやねえのか……危ない橋と思えば避けろよ……狩り場が機能するのはせいぜいひと月そこらだと思つてたのに、もう三か月だぞ……」

「それに気づかない奴らだから下つ端なんだよ……バー・ボンやベルモットも相当うまく煽つてるらしいし……」

確かにあの二人が本気になつて人を扇動したらそりやあ馬鹿は簡単に引つかかるだろう。想定より上手くいきすぎてている状況に、こちらの対応もギリギリなのが実情だ。少々手加減をして頂きたい。

「組織の方も、自分から捕まりに行く下つ端に構つてる暇ないんだろ」組織から逃亡してきた者によると、組織の威信を保とうとした幹部はどうやら強硬手段に出でているらしい。

早い話が恐怖政治だ。少しでも組織に逆らう者は肅清され、死の恐怖で構成員を支配している。俺からすれば下策も下策だと思うが、今までの組織のやり方を考えればそうするほかなかつたのかもしれない。予想していなかつたわけではないが、残念ではある。

「……資金ばら巻いて構成員を引き留めることを期待してたんだけどな」

大きな金の流れができれば、その資金源を探ることでさらに情報を集めることもできたのに。金を持つてゐる奴がバツクにいることはわかっているのだ、できたらそちら側の情報も揃えておきたい。放つておいて後で面倒になるのは、絶対に下つ端よりスponサーだ。

やれやれと首を振ると、諸伏は疲れた顔で笑つた。

「まあ、そちら側の情報も少しずつ集まつてゐるじゃないか」「まあな」

探るうちに浮かび上がる、財界の大物だの政界の大物だの、めんどくさい相手がごろごろと。構成員というよりは本当にスponサーな

のだろう。半世紀分の歴史がある組織だ、どこかで協力関係になつたか、弱みでも握つたか。おそらく下手に手を出したら警察上層からのストップが来るレベルだ。

俺は組織を潰せればそれでいいので、報告だけ上げて後は勝手にやつてもらおうと思う。そんな面倒なもん相手にしてられない。

「……柊木」

「ん？」

少し声を改めた諸伏に、俺は報告書から顔を上げた。

「お前のことだからちゃんと考えがあるんだろうけど、まだ『核心』には迫らないのか？」

核心、つまりボスやラムの正体と、目的。

あれから何度もベルモットとは直接会つて情報のやり取りをしているが、いまだにその話をしたことはなかつた。宮野志保のこともあるて見逃してると指摘され、それはそうと素直に頷いた。彼女も十中八九ボスやラムの正体を知つている。

俺は何と言つたものかと少し考え、口を開く。

「もう少し組織を弱らせてからかな。王手の直前でもいいと思つてる」

「何で？」

「俺、そもそもボスやラムがそんなに脅威だとは思つてないんだよ」

そう言うと、諸伏はえつと目を見開いた。予測の域を出ないけど、と前置きして言葉を続ける。

「何度も言うが、あの組織の秘密主義は異常なレベルだ。相応の資金力や武力、人員を持つているにもかかわらず、ボスもラムも隠れすぎだと思わないか」

「……それは、まあ」

「顔や名前を隠さなきやいけない理由があるとしたら、それは何なんか。……俺は、正体さえわかれば逮捕はそんなに難しくないからだと思う」

早い話、本人やその周囲に警察の捜査をかわすだけの力がないのではないかと。すると諸伏はわずかに目を見開き、しかしすぐに表情を

改めた。

「……つまり？」

「たとえだ。ボスは病床にあつてろくに動けない」

「！」

「たとえば、な。そんな風に、それこそ資金だけはあつても、顔や名前がバレてしまえば所在が掴めてしまう、指名手配でも掛けられると逃げるのが難しくなってしまう、そんな相手なんじやないかと思うんだ。あとは表の世界で顔や名前がすでに売れてたりとか……正体がわかれれば目的も読めてしまうとか……そんな感じかな」

残念なことに、犯罪者は犯罪者でも、大物が過ぎればそれなりに堂々と世間を歩けてしまう時代だ。調べようと思えばヤクザやマフィアのトップくらい、顔も名前も経歴もすぐにわかる。それを考えれば、この組織のボスだつてもつと堂々としていても良かつたはずなのだ。大物すぎるが故に手を出せない、そういう存在になってしまつた方がむしろ自由に動ける。ただ用心深いだけだと言つてしまえばそれだけだが、そうしなかつた理由があるのでないかと考えていた。

「仮にその憶測が当たっていたとすれば、多分向こうはこつちが正体を知つたと察知した瞬間に何らかの手を打つてくる。どんな手を打つてくるにしろ多分厄介だ。いくら俺がボスの正体を知らない体でこれから動きを考えたとしても、やっぱり正体を知つてると無意識に余計なことをして察知されるかもしれない」

だつたら、いつそのことまだ知らない方がいい。知つていて知らないふりをするよりも、知らない今までいる方が俺としても気が楽だ。

「……俺の言つてることわかる？」

「……どうせボスもラムも正体さえわかれば捕まえるのは楽なはずだから、ぎりぎりまで正体知らない今までいても支障はなく、むしろこちらが正体を知つたことを察知されて警戒される方が面倒つてこと？」

「ああ、そういうこと」

そう言つて報告書に目を戻すと、諸伏が苦笑したのが気配でわかつ

た。

「……珈琲飲むか？」

「よろしく」

納得したらしい諸伏は、そのまま俺に背を向けた。

とにかく今は、ボスやラムより組織そのものの弱体化だ。削れるとここまで削りきつてしまわないと、とどめには進めない。最後のとどめをより安全に進めるためにも、そこを妥協するつもりはない。このままなら、そう難しくはなさそうだ。

そう思つたとき、報告書の最後の部分が目に留まつた。保護した元構成員から得た、組織の現状についての情報だ。

「……数名の幹部、ならびに有力構成員が行方不明……」

小さな咳きだつたが、諸伏の耳にはちゃんと入つていたらしい。諸伏はカップに珈琲を注ぎつつ、軽く答えた。

「……こんどこそ、幹部だの幹部候補だのが死んだり消えたりしてるらしいな」

「N.O.Cか」

「可能性はある。何か気になつたか？」

他国の潜入捜査官が、組織の崩壊に巻き込まれないように撤退した可能性はある。放つても勝手に崩壊すると見込んで母国に帰つたのかもしれない。それだけ内部から見ても組織の弱体化が進んでいいると考えれば、それは別に構わない。だが。

「……」

「柊木？」

はい、と珈琲の入つたカップを差し出され、ひとつ礼を言つて受け取つた。俺はブラック派だと言つているのに、このところ諸伏はいつもミルクを入れて渡してくる。ブラックだと胃に悪いからろくに休んでいない今くらいはせめてミルクを入れろとのこと。その通りなので最近はミルク入りで我慢している。

「……いや。やっぱり組織壊滅は急いだほうがいいな」

「今も十分早足だろ。何を懸念してるんだ？」

「他国からの横やりだ」

成り行きでFBIと手を組んでいるが、他国と連携するのはメリットもあればデメリットもある。引き上げたNOCから組織の崩壊が近いことを悟った各国が、利権目当てに日本警察に協力を持ち掛けてくれる可能性はゼロじゃない。組織で行われているアボトキン4869の研究データや、それ以外にも使い方によつては金になる研究データは相当にあるだろう。優れた知恵や技術はそれだけで価値がある。狙う国も多いだろう。

他国が捜査に加われば手も情報も増えるが、それ以上にめんどくさい。違法捜査と言う弱みがあるFBIとは話が違う。指揮権と利権の奪い合いになる。

だからこそ、できるだけ早く「他国の協力を必要としない」と傍から見ても明らかな段階まで捜査を進めてしまったかった。

「……今まで来たら組織を潰すことはそう難しくない。だけど俺は、あくまでも『日本にとつて利益になるよう』組織を潰さなきやならない」

組織に引導を渡すのは、日本警察でなければならないのだ。だからこそ、今何より恐れているのは組織の動向ではなく、他国の動向だつた。ここまできて他から口を出されたくはない。何より、宮野さんや新一くんの平穏な生活は何としても守らなくてはならない。指揮権を奪われれば、彼らの身柄だつてどうなるかわからない。

「……まだ他の国ならいいけど、特に……」

そう言葉を続けようとしたとき、ドアをノックする音が響いた。反射的にはい、と返事をすると、入ってきたのは降谷と風見さん。

「お疲れ」

「ああ、お疲れ。柊木、聞いたか」

「何を?」

嫌な予感が、首の後ろを伝つた。

険しい顔をした降谷が、後ろにいた風見さんに目配せをする。眉間にくつきりとしわを刻んだ風見さんが、俺に書類を差し出した。

ぞわりと、俺の中の何かが警報を鳴らし始める。

「CIAからの協力要請だ」

降谷の言葉に、思わず両手で顔を覆った。

確かに睡眠不足も相まって疲れた顔をしていることも多かつたが、ここまで死んだ目をしているのは久々に見たかもしれない。

無理もない、ここまで来て余計な横やりだ。特に、柊木にとつては指揮権の取り合いと言う大きな負担を強いることになつてしまつ。何でこんな要請を受けたのかと、僕としても上に全力で食らいついたい。

「……上手い手使うな、CIA……」

要請がまとめられた書類をめくりながら、相変わらず死んだ目で柊木は言う。上手い手って、とヒロが聞き返した。

「キールを自分のところの諜報員だと明かした上で、連絡の取れない自国の諜報員を救出したいから手を貸してほしいという体での要請だ。助けを求めてきてる以上、上も断る理由がねえ」

「ああ、これ以上手は必要ないなんて言い訳を使わせないようにそうしたんだろうな。まして相手が相手だ」

柊木と同時に溜息をついた。残念なことに、そもそもこの国は合衆国に弱いのだ。

「しかしその体なら、指揮権は柊木さんにあるまま……ですよね？」

「一応はね。ただし、隙あらば奪おうとはしてくるでしょう」

「キールの違法捜査は弱みにならないのか？」

「その辺はとっくにうちの警察上層丸め込んでるだろ。こつちが自力で拘束したFBIとは事情が違う。CIAが正式に申し込んできた以上、これは合衆国の意向だ。上でとっくに話がついてる」

間違いなく、柊木の言う通りだろう。正式に話が通つていて、CIAにはFBIのような弱みがない。向こうが救援を要請した形である以上、少なくとも最初は柊木の指示に従うだろうが、最後まで全面的に協力してくれるとは思えない。

「俺たちの目的は日本国家の秩序と安寧、FBIの目的は合衆国内に

おける犯罪者の逮捕と国内の治安維持、そしてCIAの目的は合衆国の国益だ。ぎりぎりFBIとの協力までは妥協できるけど、CIAとは明らかに目的が異なるだろ……馬鹿かよ上層……勝手に頷くなよ……」

さすがの柊木も愚痴っぽくなっている。無理もない。柊木は多分最初から、組織よりも他国のことを気にしていた。キールになるべく情報を渡さないようにしていたのもそのためだろう。「組織を壊滅させる」という「手段」よりも、「日本国家の秩序と安寧」という「目的」をずっと見据えてきたのだ。

「……で、CIAさんたちはいつ来るつて？」

ヒロの言葉に、柊木はまたちらりと書類に目をやつて、来週、と小さく答えた。しかも、対策を考える時間もほとんどないときだ。

「……知つてたけど上層つて現場のこと考えないよなあ」

「ああ、今更だな。……いや、うん、結局はちゃんと会つて話して向こうの出方を見ないと対策も何も決められねえな」

むしろ俺たちよりFBIの皆さんのが気の毒かもな。

柊木がそうぽつりとつぶやいたとき、部屋にノックの音が響いた。入ってきたのは、今ちょうど話をしていたMr.ブラックだつた。

「……お揃いと言うことは、CIAの話はすでにご存知かな」

ひどく冷静な声で、彼はそう言った。その表情には何の感情も浮かんでおらず、心のうちを全く読ませない。捜査官を束ねる者に相応しい見事なポーカーフェイスだ。

「ええ、たつた今聞きました。来週からいらつしやるそうですね」代表して柊木が答えると、彼は何か考えるように小さく頷いた。

「……柊木くん」

「お立場、お察しします。そちらの国にはそちらの国の思惑があるでしょう。貴方は今まで以上に自分の考えで動くことができなくなつた。そうですね？」

これまではある程度自分の判断で捜査を行つてきた彼も、今後はそもそもいかなくなるだろう。

ただの「犯罪事件の捜査」でなく「国益が絡んだ案件の捜査」になつ

てしまつた以上、彼も相当動きにくくなるはずだ。上に頭を悩ませて
いるという点では、僕たちも彼らも変わらない。

「……捜査にはこれまで通り全力を尽くそう。それを覆すつもりはない」

「十分です。俺も別に、貴方の立場を悪くしたいわけではありません
から」

「……柊木くん」

「はい」

どうか、油断をしないでくれ。そして私たちを含め、信用しないで
ほしい。

彼にとつてはそれが精一杯の誠意で、忠告だつたのだろう。重く響
くその言葉だけを残し、彼は退室した。

部屋に沈黙が流れる。口を開いたのは、やはりというか、柊木だつ
た。

「……まあ、俺が指揮権渡さなきや済む話だよな」

呑気そうな声でそう言つたが、その瞳には氣楽な色など欠片もない。
今まで以上の決意と覚悟で、彼の瞳は燃えている。本気になつた
柊木に、敵などいるはずがない。張り合えるのは自分くらいだと僕は
本気で思つて いる。

それなのに俺はどこか、かすかに見える不安の影を消せずにいた。

風見さんに案内されてやつてきたのは、ハンサムな顔立ちの男性だつた。屈強でいかにもエージェントという風の男性を二人引き連れ、その人はにこやかに笑つて自己紹介をする。日本語も堪能らしい。俺も笑顔で挨拶を返し、右手で軽く握手をした。とても感じの良い人だ。

こんな状況でなければ、きっと俺もこの人の腹の内を探ろうなんて思わないだろう。

「彼女——こちらではキールと呼んだ方が通りが良いでしょうか。キールとは長く連絡が取れていません。彼女も我々CIAにとつて非常に大切な仲間の一人です。どうか救出にご助力願いたい」

「ご心痛、お察しいたします。もちろん、でき得る限りの協力は惜しみません」

「有難い」

お互に笑顔で会話を進めていく。

正直なところ、Mr. ブラックのようなベテランが来るものと思つていたが、大きく外れた。おそらく歳はさほど変わらないのではないかだろうか、年上ではあるだろうが赤井さんくらい？ それでも握手した掌はタコやマメで硬くなつていたし、身のこなしに隙もなく、会話も淀みない。

何というか、これは——こんな言い方は非常に癪だが、おそらく彼は「同類」だ。

「——最近の日本警察の活躍ぶりは伺っていますよ、何でも例の組織の幹部を逮捕されたとか」

「お恥ずかしながら運が良かつた結果です。あれは我々の功績とは言い難いので、どうかそんな風に持ち上げないでください」

「なるほど、日本の方は謙遜がお得意だと聞いていますが、これですね？」

ははははは、と表面上和やかに会話を続ける。ああめんどくさい、本来俺は言葉遊びを楽しむタイプではない。にこにこと顔に笑顔を

貼り付けながら、内心で毒づいた。

「しかし、その日本警察で指揮を執つておられたのがこんなに若い方だとは。ああすみません、嫌味とかではなく受け取つて頂きたいのですが。若くしてそれだけの功績を上げられるのは、それだけ優秀だという証拠ですから」

「恐れ入ります。ご期待にそえられると良いのですが」

「その辣腕を拝見できるのが楽しみですよ。では、この後ほかの方にもご挨拶しなくてはならないので」

「これは引き留めて申し訳ありませんでした。ではまた、明日から」「ええ、よろしくお願ひいたします」

そしてまた、風見さんに案内を任せて彼らを見送つた。扉が閉まつて数秒、部屋に沈黙が流れる。彼らの足音が遠く離れていったのを確認し、同じ部屋で会話を聞いていた中のうちの一人に声をかけた。

「赤井さん、貴方が一番正直そうだからお伺いしますけど

「何だ?」

「俺、いくつに見えます?」

また部屋に沈黙が流れる。赤井さんは数秒黙つた後に、いつもと変わらない声を装つて口を開いた。この人は基本的に人を気遣うのが下手だが、下手なりに何とかしようとしているのは知つている。

「正直そうだという俺を選んだからには、正直に言つた方がいいんだな?」

「ええ。正直に、です」

「……着ているスーツと指揮官と言う地位を加算して二十五、六あたりかな。知つてゐるだらうが東洋人は基本的に若く見えるんだ」「なるほど。では、スーツと地位を差し引いたら?」

たとえば俺が適当な私服を着て、指揮官だということを言わなかつたらどうでしよう?

俺がそう言うと、赤井さんはまた数秒黙つた後に、真剣な顔で改めて確認した。

「……正直にと、言つたな?」

「言いましたよ」

「……二十そこそこ。ティーンでも通じるかもしねん」

赤井さんの言葉に、両手で顔を覆つて天を仰いだ。黙つて聞いていた諸伏がドン引いた顔で言葉を漏らす。

「何でお前そう自分から地雷を踏みに行くの……？ 馬鹿なの……？」

「うるつせえわ現実は現実として知つておきたかつたんだよ！ けど絶対お前らよりマシだからな！ 赤井さん、諸伏と降谷はいくつに見える!?」

「やめろ巻き込むな聞きたくない！」

「俺は童顔じゃない！」

くわっと問いを投げかけるとさすがに赤井さんも若干眉間にしわ寄せ始めた。俺に聞くなと言いたいんだろうがアンタの事情なんぞ知ったことか。かつて童顔を顎髷で隠していた諸伏は耳をふさぎ、全力で認めない降谷は叫ぶ。降谷お前はいい加減認めろ、俺から見てもお前は相当な童顔だから。

「……スースと地位から来る印象は偉大だという言葉で許してくれ」「ほれ見ろ！ ほれ見ろ！ 絶対俺だけじゃねえからな！」

「赤井イイイイイ！」

少し顔をそむけた赤井さんがそう言うと、ぱつと降谷が飛び掛かりに行こうとしたので羽交い絞めでおさえる。興奮してじたばたしているが、徹夜後の降谷の勢いくらいなら俺でも十分に止められる。

ちなみに俺は今日のファーストコンタクトに向けて隈を消せとう厳命が下つたので、久しぶりに八時間寝た。

「言わなくていいって……言つたのに……」

そして諸伏はさめざめと泣いていた。本気で気にしているのは知つているが、もう顎髷を蓄えることは絶対に許さない。俺の部下なら身なりはちゃんと整えろという名目のもと、徹夜明けだろうと毎日ちゃんと髷をそらせていた。本音？ ゴ想像にお任せする。

「ねえ、ここまで来たら聞くけど、貴方たち一体いくつなの？」

好奇心に負けたらしい勇者ジョディがおそるおそるそう尋ねると、大人しくなつた降谷とまだ泣いている諸伏がピクリと震えた。代表

して俺が答える。

「二十九ですよ。三人とも同じ」

そう言つたときのFBI勢の反応ときたら。

さすがのMr.ブラックはそつと目を閉じただけに見えたが、それでもびくりと肩が震えたのが見えたし、赤井さんからは「……ホオー」といつそ感心したような言葉が漏れた。ジョディ捜査官の口が小さく「嘘、年上……？」と動き、キヤメル捜査官は「これが東洋の神秘……」と頷いていた。キヤメル捜査官、多分それ違う。

俺たちの立場的にそれほど若いとは思つていなかつたが、いざちゃんと年齢を言われると何となく信じがたいと言つたところだろうか。身分証の生年月日でも見せてやろうかこの野郎。

「お二方聞こえてますからね。……俺に至つては春には三十路になるのに……」

「その顔で三十か。詐欺だな」

「いくら正直につたつて殴りますよ赤井さん」

反射的に叫ぶと赤井さんは肩をすくめた。そのまま数秒沈黙が続き、俺たちは三人そろつてため息をつく。

「柊木、俺やっぱ髭伸ばしたいんだけど」

「却下」

「パワーハラだ！」

「うるさい潜入時代とは違えんだよ、登序するなら身なりを整えろ」

「俺は……童顔じゃない……！」

「降谷、お前は気にはすぎな」

——ああ、少し気がまぎれた。たまにはこういう会話をしておかないと、精神の方が先にやられる。よし、と気合を入れ直して手を打つた。

「気を取り直して仕事もどるぞー」

「おー」

「柊木、俺は組織のほうに行つてくる。手筈変更なし」

「了解、気を付けてな」

さつさと仕事にとりかかるうと俺と諸伏はデスクに戻り、降谷は

「バー・ボン」となつて外に出て行つた。切り替えについてこれないのがジヨディ捜査官とキヤメル捜査官はぽかんとし、Mr. ブラックは苦笑、赤井さんはわずかに口角をあげて煙草に火をつけた。

くすりと笑つて Mr. ブラックは口を開く。

「素晴らしい切り替えだね」

「たまにアホな会話もしておかないと頭おかしくなりますからね」

「ははは、挨拶代わりだよなあ」

俺のすることは何も変わらない。だつたら氣負いすぎる必要はない。こんな気の抜けた会話をするくらいの余裕は持つていてるべきだ。俺は肩をこきりと鳴らし、改めて端末に向かい合つた。

*

それから、CIAも交えての捜査が始まる。

挨拶をしてくれた「彼」が完全な主力で、他二人はサポートあるいは実働部隊というチームであるらしい。彼は今までの捜査の流れを把握したうえで、合衆国やそのほかの国における情報の提供も熱心に行つてくれた。

さすがは世界一の大団の諜報機関、入つてくる情報の量も精度も桁が違う。俺自身は日本国外のことまで面倒を見るつもりはなかつたが、確かに海外にいる構成員にも必要ならば手を打たなければならぬ。そういう意味で彼の参入は非常に有益なものになりつつあつた。

「——なるほど！ 素晴らしい策です、これならば被害もなく逮捕できるでしょう」

「恐れ入ります。風見さん、諸伏、この方向で用意を」

「了解しました」

「ああ、間に合わせる」

いくつかの事案で俺が指揮を執る際も、意見は言うものの余計な手出しはせず、しかも素直に賞賛の姿勢を見せる。懸念があれば指摘もしてくれるし、彼自身の能力も相当であることが感じられるだけに、正直俺は拍子抜けしていた。もつとがつがつと指揮権を奪いに来る

ものと思つていたのに。

足を引っ張られるとまでは思つていなかつたが、隙を見せればすかさず突いてくるとは考えていた。あえて隙を作つてみせても不思議なほど乗つてこないし、乗る姿勢も見せやしない。最初は単純に警戒されているのかとも思つたが、さすがに悠長すぎる。腹の中が見えないその様子が、かえつて氣色悪かつた。

「……Mr. 格木」

「何でしよう？」

「正直なところ、貴方ほど優秀な方が日本警察にいらつしやるとは思つていませんでした」

決して甘く見ていたつもりはないのですけれど。

そう言つて淡く微笑んだ彼は、瞬きをする俺を気にすることなく言葉を続けた。

「貴方も、彼——Mr. 降谷も、そして貴方がたの部下の方も。非常に有能で、勤勉で、意識も高い。もちろん正義感も強い。長く誰にも尻尾を掴ませなかつた組織を追い込んでいる捜査官とはどんな方々なのだろうと思つていましたが、こうして目の当たりにすると納得するほかりません。共に捜査ができることを、心から嬉しく思います」

この笑顔とこの言葉を受け、それでも彼を疑える人間つてどれだけいるのだろうか。そう思えるほど、彼の瞳には善意と尊敬しか見えなかつた。

しかしそれでも尚、疑い続けなくてはならないのが俺の立場と言うもので。

「……そこまで持ち上げられると、かえつて恐縮してしまいますよ、ミスター」

油断はしない。初対面で直感した、彼は俺と同類だと。今の彼の台詞は、ともすれば心からの想いなのかもしれない。だが、心からの想いと、職務は別だ。相手のことをどれだけ賞賛しようと、尊敬しようと、「やるべきことはやる」。おそらく彼はそれができる人間だ。発する言葉の端々から、彼のプライドの高さを感じている。

「ひとつひとつ、捜査を積み重ねているだけです。貴方だつて同じ状況に立てば同じことをなさるでしょう」

「私は貴方ほどの作戦立案能力はありませんよ」

「おや、合衆国の方もご謙遜をなさるんですね？」

二人して談笑しているこの光景は、傍から見れば仲良く見えるのかもしれない。が、俺としてはひどく消耗する会話だった。相手を警戒しているということを悟られてはいけない。「バー・ボン」ならこの状況をスリルがあるといつて愉しむのかもしれないが、俺としては気疲れするだけだ。まったくめんどくさい。

「しかし、だいぶ作戦も終盤のように見えますが、とどめはいつ頃を想定されているのですか？ 焦るつもりはありませんが、長引かせれば長引かせるほどキールの救出も遠ざかる」

建前上バー・ボンやベルモットにキールの現状を探らせたが、どうも彼女は未だ監視が厳しい状況らしい。NOCの疑いを受けた点ではバー・ボンも同じはずだが、やはり一度FBIの手に落ちているというのは大きいのだろう。ヤンティ・コルン逮捕の際に捏造した「鼠」はFBI関係者の可能性が高いとバー・ボンに報告させたので、それもあつてのことかもしれない。

キールが自由に動けない以上、こちらとしても接触のリスクは犯せない。さっさとキールを組織から連れ出してCIAが捜査に関わる理由をなくしてやろうかとも思ったが、まあ無意味だろう。上手くキールを連れ出せたとしても、おそらく適当な言い訳をつくって居座り続ける可能性のほうが高い。組織の壊滅前に合衆国に追い返そうなんてことは考えない方が良いだろう。確率の低い賭けに出て余計な仕事を増やすこともない。

組織の弱体化はかなり進んだ。CIAからの情報もあり、さらに作戦の進みは加速している。今はもう年末だが、この分なら最後の作戦は――。

「年が明けて、もう少し……あとひと月か、ふた月。それくらいでしようか」

ボスとラムの特定と、確保。ジンとウォツカの逮捕。最後の作戦で

やるべきことはほとんどそれだけになるだろう。

目下の脅威はジンだが、作戦の大枠はできている。幸いにも、ジンをおびき寄せる最大のカードは手元にあるのだ、キャンティやコルンの逮捕のように面倒なことを考える必要はない。逮捕の際にいかにこちらの被害をなくすかは考えなくてはならないが、逆に言えば考へるべきはそれだけだ。さほど気を揉む必要はない。

だから本当に、警戒すべきは目の前で温和に笑う彼の腹の中だけなのだ。どう邪魔をしてくるか、それとも邪魔をしないのか、それすらもわからない。

「ひと月か、ふた月……そうですか。何とか彼女が、その間無事でいてくれればいいのですが」

「ええ、こちらとしてもできる限りのサポートをするように指示を出してあります」

「感謝します、M r. 栄木」

アンタの目的は何なんだ。

そんな本心をそつとしまい込み、俺はまた彼の握手に応えた。

* * *

デスクに突っ伏す栄木の頭の横に、そつと珈琲を置いてやる。さんきゅ、とか細い声がぽつりと聞こえた。その声に苦笑しつつ、俺は栄木のデスクに寄りかかる。

「栄木つて意外とああいうの苦手だよな」

「ああいうの？」
「腹の探り合い」

俺がそう言うと、栄木は少しだけ顔を上げて、弱弱しく俺を睨んだ。眉間にくつきりとしわが寄っている。残念ながら怖くもなんともない。

「……自覚してるよ。ああいうのは降谷やお前の方が上手い。どうあがいても経験値には負ける」

「怒るなよ。苦手って言つたのは悪かつたけど、できてないわけじや

ない。慣れてないし言葉遊びを楽しむ性質でもない分、得意でもないってだけだろ？」

「怒つてない。……一番彼と接するのは俺だ、もつと上手く探しを入れられればいいんだけど、全然何企んでるのかわからねえ」

頭の痛そうな顔をして、柊木はミルクたっぷりの珈琲に口を付けた。

別に柊木は腹の探り合いが下手なわけじゃない。それこそ監察官時代だつて似たようなことはやつっていたはずだ。だが、本人がそういうやり方をあまり好まない上に、今回は相手が悪い。世界一の大団の諜報機関の中でもおそらく生え抜きの諜報員。そりやあそう簡単に腹の内を読ませてはくれないだろう。

「どう考へても狙いは宮野さんなんだよなあ……」

ぶつぶつと柊木が言葉を漏らす。今ある情報から考へて、柊木の脳はやはり「CIAの目的はアポトキシン4869」だと弾き出してい るらしい。それに異論はないし、おそらく間違いない。問題は、どうやつて彼女を獲得するつもりなのかということだ。いくら日本の方が立場が弱いと言つても、合衆国も圧力をかけて宮野さんを奪うよう な真似はしないはずだ。何事にも建前や体裁というものがある。

だからこそ柊木は、彼がこの案件の指揮権を奪い取り彼女の今後を 決める権限を狙つてくると踏んでいた。

「確かに、傍から見てても指揮権奪いに來てる感じはしないな」「隙作つても食いついてもこねえ」

なら、どうやって。

ゆらゆらと頭を揺らしていた柊木が、突然びくりと止まる。そして忘れてた、と慌てだした。

「どうした？」

「いや、念のため新一君に警戒しろつて連絡しておこうと思つてたん だけど、なかなか時間作れなくて」

さすがにCIAの彼がどこで聞いているともわからない状況で連絡などできなかつたのだろう、今は彼もホテルに帰つてゐるし、一般家庭なら夕飯前の時間だ。

「……ああ、新一くんか？ 桜木だ」

幾分か優しい声で、桜木は話出した。なんやかんやで桜木はある小さな探偵をわりと気に入っているらしい。未成年だし、守らなくてはという義務感のようなものもあるのだろうが、少しばかり珍しいと思わなくもない。

こういう言い方をすると語弊があるが、狭い世界で生きてきた桜木には実は「好きなもの」は少ないし、本人的にあまり増やそうとう意識はないらしい。そんな奴が探偵少年を「気に入った」なんて、何か通じるものでもあつたのだろうか。

「……ああ、だから今まで以上に警戒をしてくれ。万が一CIAを名乗る人物が接触して来たらその場で俺に連絡を。今後どんな状況に陥つたとしても、俺は君たちとCIAが接触する際、絶対に公安の人間を同席させる。場合によつてはFBIにも警戒が必要かもしれない。……ああ、何せ相手は、……」

CIAだから。おそらくそう桜木の口が動こうとしたとき、その切れ長の目が見開いた。視線が忙しく動き、また頭が揺れ始める。どうした、と声をかけようとしたとき、さつと桜木が片手でそれを制した。

「……あ、ああ、いや、何でもない。そういうことだからこ両親や宮野さん、阿笠さんにも情報を共有して警戒を頼む。それじゃ、また」

それだけ早口で言つて、連絡を切つた。その指が、少し震えている。まだ視線は忙しく動いていて、顔はだんだんと青ざめてきた。

「桜木、どうした」

少し強い口調でそう言うと、真っ青になつたそいつがびくりと震えた。ようやく目が合う。こんなにひどい顔の桜木を見たのは、本当にいつぶりだろうか。

「……諸伏

「ああ」

「……悪い、ちょっとまだ混乱してる。ちゃんと話すから、ちょっと時間くれ」

考えて、もしそうなら、対策まで詰める。

随分と思いつめた様子に、さすがに問い合わせることまではできなくて、わかつた、と頷くほかなかった。こいつがここまで狼狽えるなんて、相当のことだ。こいつの出来のいい脳味噌は、いつたいどんな「答え」を弾き出したのだろう。

「……今日はもう急ぎの案件もないだろ？　帰つて休めよ、諸伏」「露骨に追い出そうとするなよ。……わかつた、でもお前もちゃんと休めよ？」

わかつて、と下手な笑い方をした柊木に溜息をつき、俺は荷物を取つた。ちゃんと話すと言つた以上、自分の言葉は守つてくれるだろう。思考をまとめてから話したいというのなら、今口を割らせるわけにもいかない。

「明日、聞くからな」

「……うん」

それだけ宣言をして、俺は柊木に背を向けた。背中に聞こえたかすかな咳きには霸気がなく、——不安しか、なかつた。

「……どうしたんだろ、柊木さん」

通話の切れたスマホを眺め、ひとりごちる。

いつもの俺の無事確認の報告はメッセージで行つていたから、柊木さんの声を聞いたのはもう数か月ぶりだ。組織壊滅に向けて忙しくしているだろうことは予測していたが、それにしても今の会話の切り方は不自然だ。途中で何か、思いついたような。

「どうした？ 新一」

後ろから話しかけられ、振り向く。今日はスケボーの調整がてら工藤家に帰つてきていた。変わらず俺は毛利探偵事務所で世話になつているが、お互いの無事確認も兼ねてちよくちよく両親がいる実家に顔を出すようにしていた。

「柊木さんから連絡があつて

「ほう？ 何か進展でも？」

「CIAとも捜査協力することになつたらしいんだ」

CIAが、父さんは俺の言葉にかすかに眉間にしわを寄せた。俺は軽く頷き、柊木さんに言われたことをそのまま繰り返した。

「念のため、今まで以上に警戒をするようについて。CIAの出方がいまいちわからないから、もしCIAが接触を図つたらすぐに連絡してくれってさ」

「……なるほど」

「でも話の途中でやけに慌てだして、すぐ切れた」

何か急用でもできたのか、それとも何か思いついたのか。柊木さんらしくない慌てぶりが少し気になる。いつたいどうしたのだろう。

「……新一」

「ん？」

「柊木君にもう一度連絡を取つてくれないか」

私の杞憂であればいいのだけどね。

何が、とは聞けないほどに、その時の父さんは真剣な顔をしていた。

柊木の様子が気になつていつもより少し早めに出勤してみると、やはりというか、昨日俺を早々に追い出した指揮官様は隈を作つていた。応接用のソファに座り、くつきりと眉間にしわを寄せて目を閉じている。煙草を咥え、頭がいつものようふらふら揺れていた。

確実に寝てない上に、何だこの部屋の煙たさは。即座に換気扇を「強」に切り替えた。

「柊木」

少々の怒りを含んだ声で名前を呼ぶと、ゆっくりと柊木は目を開けた。そして俺を見て、ぱちりと瞬きをひとつ。煙草を灰皿に落として、もうそんな時間か、と朝日がさしている窓を見た。灰皿の中はかつてないほど吸い殻でいっぱいになつていて。

煙草を勧めたのは俺だが、これはまずい。おそらく身体的にも、精神的にも。

「……柊木」

昨日、柊木はいつたい何に辿り着いたというのだろう。こいつがここまで考え込むほど事態は危ういということなのだろうか。残念ながら同じものを見ているはずの俺は状況を掴めていない。だからこそ柊木を巻き込んだし、だからこそ柊木を引き入れたのだが、こいつの優秀すぎる脳味噌が、柊木自身を傷つけることは重々承知していた。

それならせめて、支えるくらいのことはしてやりたいのに。

「……うん」

俺の言いたいことをわかつてているのだろう、柊木はそのまま少し俯いた。そしてまた顔を上げて、俺をまっすぐに見つめる。

「昨日の夜、最悪のシナリオが浮かんだ」

「ああ」

「けど、……ごめん」

最適解が。

そこまで言つて、柊木はまた俯いた。灰皿に山になつた吸い殻に、

よれたスーツ、乱れた髪に、よく見れば少し震えている指先。一晩ずっと、考え続けたのだろう。いつもなら大抵の策をひとつふたつと思いつく柊木が、ここまで追い込まれていてるなんて。

「……柊木、何もお前ひとりで全部考える必要はないだろ。情報を共有して、皆で考えれば、」

「ダメだ」

珍しく柊木が強い言葉で俺の言葉を遮った。こんな言い方をするのは本当に珍しい。俯いたままの後頭部が、それだけは許さないと告げている。何故、どうしくない友人に驚いた。柊木は人に頼ることをちゃんと知っている。人の手を借りたくないなんて考えはしない。

「……風見さんなら、いい。でも、降谷にはダメだ」

絞り出された声は、弱弱しかつた。

ゼロに言えない理由を聞いても、柊木は緩く首を振るだけで何も言わない。

「……俺には言える?」

「……うん」

でも、本当にちょっと待つて。

そう言つて柊木は両手で顔を覆い、天を仰いだ。まだその指先の震えも引いていない。俺はため息を一つついて、切り替えた。

「今日の予定は? C I A も F B I も情報収集で出払つてるよな。バー・ボンは組織の案件で遠方だから戻るのは早くても夕方、風見さんは警視庁で雑務処理だけど」

「……とりあえず午前は外出

「外出? 珍しいな、どこ行くんだ」

「工藤先生が話したいって」

探偵君を通して呼び出されたという。何の話だとうさんくさく思う反面、またまには外に出るのも気分転換になるだろうと前向きに考えることにした。探偵君や宮野さんの無事確認も、直接しておくに越したことはない。

「じゃあ俺も行く」

「え?」

「今のお前に運転させたら確実に事故る。一人で来いとは言われてないんだろう」

言われてはないけど、と柊木はひとつ瞬きをした。こいつ、どうやら今自分がどれだけ酷い顔をしているかわかつていないうらしい。とりあえず仮眠させ、シャワーに突っ込み、朝飯を口に突っ込もう。まだ早朝だ、それくらいの時間はある。

無理やり柊木を立たせると、でもまだ、と言い募ろうとするので、俺はにつっこりとでかい駄々つ子に笑いかけた。

「膝枕がご所望かな？ 今なら子守歌のサービス付き」「おやすみ」

いや、そこまで即答しなくてもいいと思うんだけど。

「ああ、彼らはCIAだ。私はむしろ、その『シナリオ』の方が自然だと思うね」

「……工藤先生、」

「新一の父として、伺いたい」

彼ら相手に、どう戦うつもりなのかを。

報告のために戻つてみると、いつもの執務室はもぬけの殻で、珍しいことがあるものだと首をひねつた。ヒロはまだしも、柊木はほとんど執務室を出ることはない。何か呼び出しでもあつたのだろうかとスマホを取り出したとき、ノックの音とほぼ同時にドアが開いた。

「あれ、戻つてたのか。お疲れさま」「ヒロ。一人か？」

「ああ、柊木なら阿笠さんの研究所だよ」「阿笠さんの？」

ヒロが言うには、引きこもつてばかりの柊木の気分転換のために志

保さんや新一くんの無事確認という建前で柊木を連れ出したのだと
いう。

最初は軽くお茶をして終わるはずだったのだが、柊木の隠し切れな
い隈と顔色の悪さに彼らはそれはそれは驚いたらしい。仕事に戻ろ
うする柊木を、もう少し休んでいいって、いやむしろ寝ていいってと引き
止め続け、最終的に隙をついて麻酔銃で落としたとか。

「昨日も考え方してたら徹夜したらしくてさ。ちようどいいからそのまま寝かせてきた」

いい笑顔でヒロは言うが、公安的には非常によろしくない。しかし
柊木の身体についてはさすがに僕も心配していた。怒るべきか褒め
るべきか悩んだ挙句、後者が勝る。

「いつそそのまま明日も休ませるか」

「ああ、さつき連絡来ただけど、CIAもFBIも一、三日は来れなさそ
うだと」

「それならうちようどいいな」

志保さんや新一くんにも連絡をまわしておけば、柊木が仕事をしな
いように見張つてくれるだろう。公安に来て以来、柊木はろくに
休んでいない。体力もあるし自己管理もちゃんとしている奴ではあ
るが、たまにはしつかり休ませないと。

「それにしても、相変わらず新一くんは勇氣があるな」

「麻酔銃のことか？ まあ柊木が起きたらばつちり説教されるだろ」

「他人事みたいに言つてるけどお前も共犯なんじゃないのか」

さすがの新一くんも、誰かの後押しがなければ柊木相手にそこまで
の強硬手段はとらないだろう。暗にお前が指示したんだると視線で
言えば、けろりとヒロは白目した。

「休めるときに休まなきやだろ？」

「それは同意するが、説教一時間は覚悟しろよ」

「俺正座弱いんだけどなあ」

ぼやく幼馴染に、ふつと笑う。

柊木が休みならヒロや風見にも休んでもらおう。雑務は片づけな
ければならないが、少しくらい休息の時間があつたつていいはずだ。

懸念事項は尽きないとは言え、この案件も終盤に差し掛かっている。最後の最後で倒れるなんてことになれば洒落にならない。

「……お前も少し休めよ、ヒロ」

「ああ、ゼロもな」

たまには風見さんも誘つて夕飯どつかで食べるかと笑つた幼馴染に、僕も笑顔を返した。

「あーはいはいそーゆーこと。そりやー俺にメッセージ送る必要はないですねえ」

ようやく仕事が落ち着き、三人で飲める時間を作ることができた。個室のある居酒屋で柊木が仕組んだと思われる強盗事件の顛末を、除け者にされたハギに説明する。

朝っぱらから送られて来た意味不明のメッセージに、突如発生した強盗事件、そして強盗犯ではないのに逮捕されたあきらかにカタギではない二人組、そしてその身柄を引き取りに来た降谷の部下。

話を聞いて案の定むくれたハギはぐいっとビールのジョッキを呷つた。

「そう拗ねるなよ。お前も忙しかつたし、遠慮したんだろ」

「いーや、単純に必要なかつたからだね絶対。旭ちゃんがそんなところで氣いつかうわけないじやん」

フォローにまわった伊達も同感なのか目をそらした。正直俺もう思う。普段の柊木ならともかく、仕事におけるあいつは合理主義の鬼なので、間違いなく必要がなかつたから連絡をしなかつたのだろう。

「つたく、文句のメッセージ送つても既読無視だしさー」

「しかし本当に連絡取れなくなつたな。諸伏や降谷は今まで通り遅いなりに返信くれるのに」

何となくの事情だけは一人の方から聞いている。柊木の作戦立案能力を見込んで公安に引き抜き、あの二人が長年抱えている案件の指

揮を執つていると。さすがというか、そのおかげで案件が終わりに近づいているとも。

確かにそのあたりの能力は警察学校時代からずば抜けていたが、大した経験もないのに相応の結果を示しているというのだから、あの暴君は恐ろしい。

「……旭ちゃん、精神やられてないといいけどねー」「何だよ、いきなり」

「だつて柊木だよ？ あの身内認定した奴には無自覚でクソ甘な柊木が、多分怪我とかしないように手エ回してたんだろうけど、それでも松田と伊達を巻き込んだわけじやん」

どうせそうするしかなかつた自分を力不足だつて責めて、馬鹿みたいに自己嫌悪してるよ。

ほんともー仕方ない奴、とハギはまたビールを呷る。俺と伊達はすつと目を合わせ、同時に肩を落とした。

「あり得る……ていうか間違いねえ……」

「あいつ本当にそういうどこあるよな……見えないけどプライド高えし完璧主義だし……その分無駄に自分追い込むんだよなあ……」

「相当ヤバいやつ相手にしてんだろうし、手段なんか拝ばずとつ捕まえりやいいのにねえ？」

俺だつて旭ちゃんが言うならちよつとの無茶くらい聞いてやるのにさうとハギはくだを巻く。ペースが早かつたせいか酒のまわりが早そうだ。潰れてもらつては困ると水をオーダーする。

「……そんな旭ちゃんだから、諸伏や降谷のことだつてなるべく危険に晒さない策を考えようとすんだろうね。それが命取りにならないといいけど

「何らしくねえこと言つてんだ、萩原」

酔いで思考がネガティブに走ったのか、縁起でもないこと言うハギの手からビールを奪う。あつと伸びてくる手を抑え込みジョツキを伊達に渡した。

「柊木が甘いのは否定しねえが、大丈夫だろうよ。そのための補佐だ」「ああ、確かに」

受け取ったジョッキをハギの手が届かないところに置き、伊達は苦笑して続けた。

「意外とその辺厳しいんだよな、諸伏ってやつはよ」

酷いことを言っているのはわかっている。

俺のことを嫌ってくれてもいい。憎んでくれてもいい。それでも俺は言うよ。

「お前が言つたことを、そのまま返すぞ」

俺たちを危険に晒す覚悟もなく、指揮官を務めていたのか？

びく、と柊木は叱られた子供のように震えた。

「俺に嘘が通用すると思うなよ。お前の頭にはあるはずだ、その最悪なシナリオを逆手に取る『最適解』が」

ただ、お前がその策を使いたくないだけなんだろう？

俺の言葉に、柊木はただ両手を握りしめた。

*

工藤先生に呼び出された日から一日おいて、その次の日。出勤すると、すでに柊木はデスクに座っていた。俺を顔を向け、いつもと変わらぬ笑顔でおはよう、と挨拶をする。よく休めたのか、その目の下から隈は消えていた。

「さて、諸伏」

綺麗すぎるほど綺麗な笑顔の柊木に、引きつった笑みを返す。ああ、スースで正座はしたくないな、しわになる。そんなことを思つていると、柊木はすっと俺のデスクを指さした。

「この一日で滞っていた分の仕事は片づけた。報告書の修正、足りてなかつた必要書類の提出、次の作戦で動かす人員および車両の手配と、それから捜査員が上げてきた情報のまとめ直し、ついでに共有用に英語翻訳。午前のうちに終わらせろ」

「……えつ」

「おかげさまでこの一日よーく休めたんでなあ、仕事が捲つてしまふがねえんだ」

午後には別の仕事があるからよろしくな?

ああ、いい笑顔をしている。二日前の追い詰められた顔が嘘のようだ。元の調子に戻つたことを喜べばいいのだろうか。いや無理、喜べない。だつてその量を昼までとか絶対無理だから。鬼か? 鬼のかな? あつ違つた暴君だつた。説教じやなくて仕事でやり返してくるとは思わなかつたちくしょう。これは完全に麻醉銃のことを持つてゐる。

「……よく休めただろ?」

「ああ、新一くんに一時間説教できるくらいには元気になつたよ。全く、恐ろしいもん作るよな、阿笠さんは」

「それは確かに」

けどアレ、いいな。

そう呟いた柊木は、完全に「指揮官」としての顔をしていて。

「……諸伏」

「ん?」

「とりあえず、今できる準備は昨日のうちに済ませた」

「!」

柊木はいつもと変わらない顔で、何でもないように言う。その無機質な声色に、何故か俺の背筋に冷たいものが走つた。何を、今更。そうしろと言つたのは俺なのだ。

「風見さんには協力を頼むが、絶対に降谷に悟られるな。C I A、F B Iも同様、他の公安捜査官たちにもだ。対組織の最後の作戦の目途が立ち次第、本格的に動く」

「……お前の言いたいことはわかつたけど、本当にゼロには秘密にしておくのか?」

「ああ」

降谷にはバー・ボンとして動くことに集中してもらう。

小気味いくらいにきつぱりと柊木は切り捨てた。秘密にするメ

リットについてはすでに聞いているが、俺としてはデメリットもそれなりにあるように思えた。

「異論があるのか？」

「まさか。従うよ、指揮官様」

だが、柊木がその方がいいと思うならそうなのだろう。今更柊木の言葉を疑うはずもない。肩をすくめて自分のデスクに座り、端末に向き合つた。

「柊木」

「うん？」

「……せめて十五時くらいまで締め切りのばしてくれない……？」

俺の心からの懇願を聞いた柊木は、語尾にハートマークをつけんばかりのノリで却下と切り捨てた。あまりに綺麗な笑顔に俺の口元がひくりと揺れる。

クリスマスも近い今日この頃、俺は近いうちに柊木を人の多い駅前あたりに放置することを心に決めた。せいぜい逆ナンする女の子に囲まれて情けない顔を晒せばいいと思う。

誰もいない廊下に、俺の声はよく響いた。

「——ええ、宮野志保は譲りません」

断固とした声で、スマホの向こうにいる相手に言い切った。俺がこれからやろうとしていることの大前提は、彼女の身柄を決して合衆国に譲らないこと。何としてもそれだけは認めさせておかなければならぬ。

「仰る通り、合衆国とことを構えないようにするためには彼女と工藤新一の身柄を引き渡すのが一番楽な手段です。少なくとも、日本にとつて損はない。一見ね」

そう、一見だ。彼らを他国に引き渡すことは、有能な人材と画期的な研究を合衆国に渡してしまうというだけではない。「保護対象」や「協力者」である彼らを他国に渡すということが何を意味するのか、この人にわからないはずがない。

「公安警察が保護対象及び協力者を他国に売り渡したなんて前例は、決して作るべきではありません」

公安警察の捜査に、協力者の存在は不可欠だ。彼らは我々の目となり耳となり足となり手となる。それゆえに確固たる信頼関係を築き、時にはともに危機を乗り越えることだってある。そしてその関係は、公安が彼らを守り抜くという前提があつてこそ成り立つものだ。

「特に今回はベルモットの存在があります。そんなことをすれば、彼女は容赦なく契約を破つた我々に牙をむき、そして公安警察の裏切りを声高に喧伝するでしょう」

公安警察は、協力者を裏切った、と。

そんなことになれば、今すでに存在する「協力者」は公安警察に不信感を抱くだろう。新たな協力者を得ることも難しくなる。それはつまり、公安警察の弱体化に他ならない。国家の治安維持を引き受け我々の弱体化は、すなわち国家の危機だ。一時の外交問題のためにこの国の将来を危機にさらすようなことは許されない。

「……彼らを引き渡すことを選択肢から消すつもりはありません。し

かし、それはあくまでも最終手段であるべきです」

『つまり、最終手段を取るまでもなく片付けられると言うんだな?』
低く、威圧感のある声が耳に響く。電話ということもあるが、ひどく無感情に聞こえた。できるかどうか、その事実のみを尋ねられる。

「ええ、できます」

俺は迷うことなく断言した。最終手段なんて使わせない。俺が指揮を執る以上は、絶対に。妥協した勝利だつて許すものか、俺が目指すのはいつだつて。

「完全勝利以外は、勝利ではありませんから」

俺の合格ラインは満点のみだ。その信条はずつと変わらない。

電話口で、低い声がふと笑つたのがわかつた。頬もしいな、と言葉を続ける。納得してもらえたかはわからないが、この人が基本的にこちらのやり方にあわせてくれる人だということは知っている。

『お前に任せる。抜かるなよ』

「もちろんです、理事官」

ぶつりと通話が切れる。さあ、これで上の許可は得た。

俺のやるべきことはもう決まっている。完全勝利に向けて、俺のもつありとあらゆるカードを使い、肃々と終わりに向けて駒を動かしていくだけだ。俺ならできる自信は、ある。そう、手段を沢ばなくていいくのなら。

スマホを床に投げ捨てたい思いを握りつぶして、俺は執務室へ足を向けた。

*

「……CIAが、そんな……？」

「可能性の域を出ませんが、対策は必要だと思っています」

眼鏡の奥の瞳は、驚愕と動搖で揺れていた。しかし、疑っている様子はない。そして数秒後には落ち着きを取り戻し、まっすぐに俺を見据えた。

「俺に、できることはあるでしょうか」

「もちろん。貴方の協力が必要不可欠です」

あいつを守るためにも、手を貸してください。

俺の言葉に、降谷の右腕であるその人は、力強く頷いた。

*

日々が過ぎていく。クリスマスも年越しもとうに過ぎ去ったが、仕事以外の何かをしていた覚えがない。まあ毎年何をするわけでもないだけに、特に感慨もなく終わつた。まあ降谷は餅が食べたいとしょんもりしていたので、せめてと思つて雑煮を差し入れたら泣かれた。お前疲れてるんだよ、こき使つてるの俺だけど。

CIAは相変わらず腹の底が読めないなりに情報提供に協力的だし、FBIも精力的に捜査に動いてくれている。徐々に組織の力を削いでいき、もはやかつての巨大シンジゲートは見る影もない。相変わらず資金は潤沢なようだが、潤沢なのは資金だけだ。

もう、そろそろいいだろうか。そう思つたとき、俺のスマホが着信を告げた。

「はい」

『例の件、終わったわよ』

「さすが、早いですね』

ベルモットに頼んでいたのは、ある製薬会社の機密情報の横流しだ。組織に関わる情報を抜き取り、その企業もとつとと潰すつもりでいる。それなりに大きい企業だ、弱体化した今の組織にとつて大きな痛手となるだろう。

『……ねえ』

「何ですか？」

『ヘイムダルは、いつギヤラルホルンを吹き鳴らすのかしら』

唐突な話題につい瞬きをした。そういうえば俺のことをそんな風に例えたとバーボンが言つていたような気がする。随分と気障なことを言うものだと少々呆れたり、だいたいヘイムダルは神々の黄昏の最

中、悪神ロキと相討ちになつて死んだとされているのだ。縁起でもないからやめてほしいと思う。

とりあえず、ベルモットが何を言いたいかはわかつた。

「……そろそろ、と思つていたところです。貴方に、一番大事なことを聞かなければならぬ」

『そうでしようね。……今夜』

「え？」

今夜二十時、いつものバーで。

一秒でも遅れたら許さないわよと言い捨てて、一方的に通話を切られた。思わず手の中にあるスマホを見つめる。何となく感慨深いものが込み上げた。そうか、とうとう。

核心の話は、なるべくなら向こうから切り出してほしいと思つていた。ベルモットが俺たちの動きを見て確實に組織を潰せると判断してくれるれば自分から話してくれるだろうと。そうなれば彼女はきっと、余計な言葉遊びをしたりもせず、偽りのない情報を提供してくれると信じて。

「……ベルモットか？」

自分のデスクで仕事を片づけていた諸伏が、こちらをまっすぐに見つめていた。何の話をしていたか、もう察しているのだろう。俺は緩やかに微笑んで、頷いた。

「今晩二十時、行つてくる」

「了解、気を付けてな」

「M r. 栄木？」

少し離れたテーブルで資料を手に話し合っていた他の捜査員たちも、こちらを見つめていた。C I A、F B I、そして公安捜査官。それぞれの思惑を隠した瞳が、俺に向かっている。

「終わりが見えてきましたね」

終わりを迎えたその瞬間、微笑んでいるのはどの顔なのだろう。

まあ俺は間違いなく笑つてるけどな、と弱氣を打ち消し、俺は手元の珈琲に口を付けた。

*

「あら、今日は飲んでるのね」

後ろから掛けられた声に振り向くことなく、俺はグラスを軽く持ち上げた。飲んでるも何も、営業中のバーに入つて何も頼まないでいるほど俺の神経は太くない。

静かだが品の良いジャズが流れる店内はほどよく薄暗く、他の客の会話も聞こえそうで聞こえない。マスターの顔すらはつきりとは見えないのでから、これはもう密談にはうつてつけの場所と言つていいだろう。

「何飲みます？」

「貴方は？」

「スコッチです」

「そう。……以前にそのコードネームの幹部がいたわね」

確かに、公安からのNOCだつたかしら。

彼女はそう言つてカウンターに腰かけ、適当にオーダーをした。

そういうえば彼女には諸伏のことは言つていない。バラす必要も会わせる必要もなかつたからだが、最後の作戦によつては伝える必要が出てくるだろう。

現状のままなら特に必要ではないが、正直CIAよりはベルモットの方が信用できるだけに、バーボンが降谷であることもバラさなくてはならないかもしね。注意深く計画を立てる必要がある。

「特に深い意味はないオーダーだつたんですが……彼のことはご存じで？」

「名前とスナイパーだつたつてことしか知らないわ」

軽く雑談を入れていてる間にベルモットがオーダーしたカクテルが差し出し、マスターはまたすつと身を引いて離れる。ここマスターはあまり客に話しかけるタイプではないようだ。

「身辺に変化は？」

「特にないわ。CIAの手出しありわね」

CIAが捜査協力していることはベルモットにも伝えてある。組

織側に余計な横やりを入れる可能性を考えてのことだが、どうやら本当にノータッチ。キールに連絡を取ろうとする姿勢くらい見せればいいものを、まずは組織の壊滅が最優先と言つて彼らは自分たちから組織に接触しようとはしなかつた。狙いは完全にこちらだということだろう。何ともわかりやすい。

「まあ、どうでもいいわ。……これが、貴方たちがずっと欲しがつていた情報よ」

差し出されたメモリを緩やかに受け取つて懐にしまう。ベルモットの手が震えていた気がするが、気のせいかもしれない。

これで、必要な情報は揃つた。確認次第、最後の作戦を考えなければならぬ。

「感謝します」

「必要ないわ」

改めて、彼女をまっすぐに見つめた。正直とても辛い。だが、俺は彼女に伝えなくてはならないと思う。

彼女にとつてこの組織の存在がどんなものだったのか、俺にはわからない。けれど、この核心の情報を差し出すことには相当な抵抗と決意があつたはずだ。それでも彼女は自分からそれを提供してくれた。彼女の、大切な宝物を守るために。

「――感謝をさせてください、ベルモット」

すっと目線を下げて、軽くだが礼をした。

必ずあなたとの契約は守り抜いてみせる、その意志を示すために。「……相変わらず、変な子ね」

そう言つてカクテルに口をつけるベルモットに苦笑を零しつつ、正面に向き直つた。椅子に座りなおし、スコッチで口を湿らせる。彼女に一言断り、煙草に火をつけた。

「それはそうとベルモット」

「何よ」

「今頂いた情報にもよるんですけど、おそらく最後の作戦には貴方の協力が必要になります」

ぴたり、と彼女は一瞬動きをとめた。

「その時は協力をお願いできますね？」

につっこりと微笑みかけると、ベルモットは眉間にくつきりとしわを寄せ、彼女もまた煙草に火をつけた。呆れたようなうさんくさそうな目線に、構わず微笑み続ける。

「……一瞬前の殊勝な態度はどこにいったわけ？」
「見間違いでは？」

そう切り返すと彼女は数秒だまり、ふと不敵に笑った。

足を組みなおし、肩にかかつた。プラチナブロンドは払いのける。その表情、その仕草は、俺の目から見ても魅力的に思えた。ちつとも心は惹かれないし、できることなら今すぐにでも走つて逃げたいけれど、それでも彼女は美しい。

「お手並み拝見、させてもらおうかしら」

「ご期待に沿えるよう努力しましよう」

やはり彼女には、その笑顔がよく似合う。

*

警察庁に戻る前に、スマホの画面をタップした。
着歴、メール、メッセージ、そしてSNSをチェックする。流れ
る文字を目で追つた。よし、特に異常なし。

「……熱いな」

久々に飲んだせいか、いつもより酒のまわりが早い。熱く火照る顔
をぱたぱたとあおぎながら、酔い覚ましに少し歩く。

「……ダメだなあ」

アルコールで正直になつた俺の思考回路は、自己嫌悪で埋まつてい
く。頬が冬の冷たい空気で冷やされるにつれ、だんだんと暗いものが
胸の中に渦巻いた。

決意も覚悟も、したつもりなのに。まだ俺は、こんなにも甘いのか。
「……こんなんじや、また叱られるな」

これではいけないと軽く頭を振り、先ほどまでより早足で駅へと向
かつた。

今はもう、落ち込んでいる暇すら惜しいのだ。自己嫌悪など、時間の無駄でしかない。そう自分に言い聞かせて、俺は思考を切り替えた。

*

ベルモットからもたらされたデータを、覗き込む。

ボスの正体、ラムの正体、そして目的、組織のこれまでの変遷。十分すぎるデータが、これまで数多くの捜査員が求め続けた情報が、そこにはあつた。情報を吟味するに、決して嘘とは思えない。ボスの正体も、予想していたとは言えないまでも驚愕するほどの人物ではなかつた。しかし、とんでもない大物には違いない。

逮捕自体は簡単でも、捕まえた後のほうが厄介な気がしなくもない。が、それは俺が考えることじゃない。

「……情報はすぐに共有します。まずは裏取りからですね」

まずはすぐに宮野さんに情報を共有し、確証を得る。視線を降谷に移すと、万事理解したとばかりに大きく頷いた。

これまで捜査に関わってきた捜査員が、真剣な顔で俺のデスクの前にずらりと並んでいる。とうとう、ここまで来た。皆の顔がそう言つていた。

「一ヶ月」

ひとつ呼吸を置いて、言葉を声に乗せる。

「本日よりおよそ一ヶ月後を目安に、最後の作戦を執行します。組織のボス、その腹心であるラム、今だ凶行を続けるジン、それに従うウォツカ。彼ら全員の逮捕をもつて、組織に引導を渡します」

緩慢な動作でデスク前の椅子から立ち上がる。迷うことは何もない。

絶対に、やり遂げてみせる。ここまで来たら、完全勝利以外の結末は許さない。

「終わらせましょう、全て」

執務室に、全員の力強い返事が響いた。

「君はきっと、あらゆる手段を用いて彼女や息子を守ろうとしてくれるだろう？ 向こうからすれば、それは邪魔で仕方がないはずだ。彼らが君を高く評価すればするほど、ね」

「……ええ」

「邪魔をされないように、より確実な手段をとつてくると、私も思うよ」

何せ彼らは、合衆国の国益を第一とするCIAだからね。工藤先生のその言葉に、俺はそつと目を伏せた。

*

まずは、確実に潰す。油断をするつもりはない。反撃の隙も与えず、一気に全てを終わらせる。執務室には緊迫した空気が流れている。

「ラムは定期的にバスのいる館に通っているようです。二人揃う日に仕掛けましょう。その同日同時にジンとウォッカも誘き出し、逮捕します」

「二箇所同時か。君が両方指揮を執るつもりかね？」

Mr. ブラックの心配そうな言葉に、苦笑して首を振った。さすがの俺も、両方に目と耳を配れるほど自分を過信はしていない。

「ボス側の指揮を、Mr. ブラック。貴方にお任せしたい」

すると彼を始めFBIの捜査員たちが揃って驚いた顔をした。何をそんなに驚いているのだろう、俺は決して彼を軽んじてきたつもりはないのだが。

「そちらの作戦は、難易度こそそう高くはないですが、バス所有の館——アジトの制圧戦になります。ジン・ウォッカ逮捕は少数精銳での短期決戦になるでしょうが、バス・ラム逮捕は大人数を動かすことになるでしょう。長期戦も考えられる」

大人数を動かしたこと、長期戦の指揮をとつたことも、俺にはな

い。おそらくは諜報員であり歳もそう俺と変わらないCIAの彼も同様だろう。

「貴方の経験を、買います。俺よりずっと長く捜査の指揮を執つてきただろう貴方の方が、きっとその作戦の指揮官に相応しい。そう考えました」

CIAが来たあとも、彼は全く変わらなかつた。心のうちで思うことがあつたとしても、決して表には出さなかつた。何も変わらず、肅々と彼の部下を動かし、時には自ら動き、捜査に貢献してきた。目立つた功績こそないけれど、彼がいたから上手くいった作戦が多い。

俺は決して、Mr.ブラックを過小評価するつもりはない。そんな俺の考えを汲み取つてか、彼はきりりと表情を改め、頷いた。

「引き受けよう」

「よろしくお願ひします」

それを確認して、俺も笑みを返す。ラムの相手は面倒かもしれないが、こちらの動きを気取られなければ問題はないはずだ。情報の管理を徹底すればいい。

「では、ボス・ラム側をMr.ブラックが、ジン・ウォッカ側をMr.柊木が指揮を執るということですね？ チーム分けはどうしましようか」

「ジョディ捜査官とキヤメル捜査官はMr.ブラックの補佐についてください。他のメンツは俺の方にもらいます。Mr.ブラック、かわりにFBIの他の捜査員や公安の人間をそちらに投入しますので。必要な人数を揃えさせます」

「ああ、ジンとウォッカが相手だ、少数精鋭を考えるならその方がいいだろう」

人数の偏りが激しいが、こればかりは仕方がない。制圧戦はそれなりの人数が必要だが、個人の能力以上に指揮と統率がものを言う。彼ほどの指揮があれば、現場の人間は一定以上のレベルがあれば特出した能力は必要ない。

「ボス側はこちらから仕掛けばいいが、問題はジンの方だな。だいぶ気が立つていてる上に警戒心が強くなっている。俺やベルモットが

呼び出したとしても応じてくれるかわからないぞ？」

「そこは問題ないよ」

恰好の餌があるだろ？

そう言つてにつこりと笑うと、察した降谷はぱつと輝く笑顔を見せ、諸伏は思い切り口元を引きつらせた。

「恰好の餌、というと？」

彼らの因縁を知らないミスターが不思議そうに言う。

それにまたにこりと笑みを返し、「恰好の餌」に向かつて微笑みかけた。

「貴方の存在があれば、きっとジンも喜んできてくれると思いませんか？」

ねえ、赤井さん？

当の本人はすっと肩をすくめ、手を開いた。

「もちろん従おう」

「ありがとうございます。バー・ボン、やることわかつてんな」

「ええ、喜んで。ところでひとつ提案なのですが」

「何だ？」

こきり、と降谷はいい笑顔で指を鳴らした。その音に諸伏はそつと頸垂れ、風見さんはさりげなく目をそらす。

「僕が赤井の存在を暴き出し、捕まえたことにするんでしよう？ それなら赤井が無傷のままではリアリティがないと思いませんか？ さすがに原型がわからなくなつてしまふのは問題ですが、少々流血するくらいが妥当だと思うんですが」

「建前はいい、本音は？」

「いい機会だから一発くらい殴らせろ」

構わないだろと緩く首を傾ける降谷に、仕方ないと頭をかいた。実際、確かに無傷のままではリアリティがない。適当にメイクでもしてもらおうかと思っていたが、まあ実際に怪我をさせる方が手つ取り早いのは事実だ。

「正直なのは嫌いじゃない。許可するから作戦の直前まで待て。まだ早い」

「了解した」

「ちよつと待つてくれ柊木くん。それは俺に大人しく殴られると言う意味か?」

「別に大人しくしてなくていいですよ。ちよつとくらい反撃食らつた方がバー・ボン側にもリアリティ出るし」

「やれるもんならやつてみろ。ただし赤井、この一発は志保さんから託されたものだ、その意味はわかるな?」

びたりと赤井さんが動きをとめた。その頬にたらりと汗が流れる。いくらその身辺を護るためとは言え、盗聴だのハッキングだの、中身が十八歳の女性相手にやる行為ではない。どうやら降谷は宮野さんに「私のかわりに一発殴つておいて」と依頼されていたらしい。なるほど、なおさら止める理由はない。

「……甘んじて受けよう」

「当然だ」

ふふんと笑つた降谷に苦笑する。

氣を取り直して作戦の説明に戻つた。

「バー・ボンからジンに『赤井を捕まえた』と連絡を入れさせます。降谷、お前がいまだに追つていることにしてる『鼠』の件、ちゃんとFBIの関係者だつてことにしてあるんだよな?」

「ああ、お前の指示通りだ。なるほど、そこから赤井が釣れたことにするのか」

「組織の情報を流出させた『FBIの関係者』を探るうちに赤井さんの生存がわかり、捕獲したという体にする。それだけでジンは釣れるだろうが、キールのことにも触れておこう」

ぴくり、とCIAの彼が反応した。

一応彼らの建前は「キールの救出」だ。そのあたりも考慮に入れておかなければならぬ。どちらにしろ赤井さんの生存が発覚した時点でキールは肅清の対象となるだろう。一応は救済の手が必要だ。

「ジンから連絡を入れさせて、キールも同様に呼び出してくれ。どうせ赤井さんを殺すならキールの目の前で、とでも言えばいいだろ」

「組織からすればキールは命を懸けて赤井を救つたことになるわけだ

からな。わかつた、そのあたりは上手くやる」

「そしてジン・ウォッカの逮捕と同時にキールを救出するわけですね？ その流れで行けば作戦当日までキールの無事は保証される。ああ、ありがとうございますMr. 桜木！」

「当然のことですよ」

感激したように握手を求められ、さらりと返す。

俺は彼の腹の底には気づいていない、そういう振りを貫かなければならぬ。もつとも、俺の頭の中にあるものが正解かどうかは未だにわからないわけだけれど。

とにかく、極力警戒をされずに、俺が反撃しやすい状況にもつていいこと。そして彼の話の中から、彼の真意を探っていくこと。

すべての作戦が完了するまで、決して気は抜いてはいけない。

「当日の流れについては？」

「それはまたおいおい。まずは舞台づくりに注力しましよう。どんな作戦も、事前の準備がものを言いますからね」

最後まで気を抜かずに行きましょう。

様々な意味を含んだその言葉に、それぞれが力強く頷いた。

*

『あ、桜木さん？ 今大丈夫？』

「ああ、大丈夫だよ。どうした？」

『父さんが一応これまで作ったものを確認してもらえって。データ送つておいたので、時間あるときに見てもらつていいですか？』

『了解、今日中には確認して返事するよ。順調？』

『今のところは、多分』

「心強いな」

珍しく少し時間があいたので、俺はゼロと休憩をとつていた。

と言つても、いつもと変わらない執務室で珈琲を飲んでいるだけ。仕事は山積みでろくに休みも取れていないが、作戦まであとひと月たらざと思えば少々のことは堪えられる。

「なあ、ヒロ」

「何だ？」

柊木はちょっと過去の資料を確認してくると言つて席を外している。

おそらく実際のところは、自分が立てた作戦のためにあらゆる手を打つてているのだろうが、それはゼロの知らなくていいことらしい。「どうでもいいことなんだが、最近柊木がやけにスマホを気にしないか？」

おつと、鋭い。俺は素知らぬ顔でそとかなと返すが、まあ確かに増えたよな、と思う。さすがというかこの幼馴染、気づかなくていいところまでしつかり気づいてしまう。優秀。

「いや、もしかしたら上層からの連絡とか、余計な仕事が増えてるんじゃないかと思つて」

「それはないと思うけど。理事官には話をつけたつて言つてたし」

裏の理事官からは好きなようにやつていいという許可をすでに得たらしい。今の理事官は確かにあまり口うるさい人ではないが、それでも軽く言質を取ってきたというのだから相変わらずうちの指揮官様は世渡りが上手い。

「……そうだよな。柊木に何か負担がかかっているわけじゃないならいいんだ」

「大丈夫だろ。案外、仕事の合間に猫の動画でも見て癒されてるのかもしれないぜ？」

「……もしそうだつたらあいつ相変わらず可愛いな？」

真顔で言うゼロに噴き出しつつ、そうだな、と二人で笑う。

まだ本当のことが言えなくてごめん。でも、柊木の言う「完全勝利」に繋げるためだから。

内心でほんの少しだけ罪悪感をくゆらせつつ、俺はいつも通りに笑つて見せた。

「M r. 桜木！ よろしいですか？」

「はい」

彼に差し出された資料にあつたのは、今は使われていない廃ビルだつた。ふむ、周囲の建造物もほぼ無人、大きな窓もあつて見通しもいい。

「作戦の舞台ですが、そのビルが条件に沿つてゐるかと思いまして」「確かに、良さそうです。決定は周囲の状況を確認してからですが、第一候補にしておきましょう。ありがとうございます、ミスター」

「何よりです。では周囲の状況確認に行かせましょう、私はこのビルや周辺建造物の所有者を確認しておきます」

「よろしくお願ひします」

すぐさま彼は補佐たちに指示を飛ばし始めた。相変わらず有能で、仕事が早い。

着々と準備は進んでいた。ベルモットとバーボンの報告を聞く限りこちらの動きが悟られている様子はないし、順調と言つていいいだろう。

あとは当日の詳細を詰め、ベルモットにも協力を仰ぎ、ボスの館がある鳥取県警にも応援要請入れ、——それから、俺がやつておかなければならぬことも、もう少し。工藤先生の方は進捗を見る限り問題はなさそうだ。

「おつと、時間か」

「桜木？」

「悪い、俺よつと人に会う用があるから行つてくる」

「わかつた。戻りは？」

「一時間せずに戻るよ」

ばさりとジャケットを羽織る。さすがに相手が相手だ、身なりはちゃんとしておかないと。そう思いながら歪んでいたネクタイも直す。

そんな俺を、赤井さんが不思議そうな顔で見た。

「君がそう身なりを気遣うのは珍しいな」

「お偉いさんに会う時くらいはね。この国はそういうところ厳しいんですよ」

「柊木君にも苦労があるようだ」

ふ、と微笑んだ赤井さんに、苦笑を返す。

これから会う人は多分そんなに気にする人ではないけれど、こちらの誠意を示すためにも身なりと言うのは重要なツールだ。気に入られたいとは全く思わないが、少なくとも敵に回したくない人ではある。そして、今回は何としても協力を取り付けなければならない。

すっと息を吐いて、肩をひとつ鳴らした。

「それじゃ、すぐ戻るから」

「ああ」

俺にとつては、因縁の相手でもあつた。

そう思うと浮かび上がる、心の奥底の黒いもの。今までとは違い、そのこみ上げてくる黒いものを見据えても冷静でいられる自分に気づく。

これは俺が大人になつたということなのか、どうなのか。そんな自分で少し苦笑しながら、俺は執務室を後にした。

俺以外の人員が調査や報告で外に出たころ、柊木が戻ってきた。少し疲れた顔をしているが、どこかやり切ったような表情だ。この表情なら、上手くいったとみていいだろう。

「お疲れさん」

「ああ」

ばさりとジャケットを投げ捨てて、柊木は大きく伸びをした。肩が凝つた、と愚痴を漏らす。そんな指揮官様に苦笑をしつつ、俺は温かい珈琲を淹れて渡してやつた。

「サンキュー」

「ああ。……成果は？」

「上々」

「何より」

柊木が話をつけてきた相手について、詳細を聞いているわけではない。しかし、柊木の表情から察するに思うところがある人物だというのは予想がついていた。

それでも、必要だから、と。それ以外に手段がないから、と。

腹を決めた柊木は、本当にありとあらゆるものを使い、準備を整えている。今までの柊木なら絶対に選ばなかつた道を、余所見もせずに突き進んでいた。

そんなお前に、俺がしてあげられることは何なのだろうか。

「柊木」

「うん？」

「夕飯、どうせここで食べるんだろう？ 買つてきてやるよ、何がいい

？」

「ゼリー飲料」

「焼肉弁当な、わかつた」

「聞けよ」

そんな夕飯を俺が許すわけないだろと返せば、柊木もまあそうだよなど苦笑した。

俺は、お前を支えるためにここにいる。お前が全てをもつて俺たちを守ろうするなら、俺だつてちゃんとその覚悟に応えてみせる。

全員で笑う、完全なハッピーエンドに繋げるために。

「ちゃんと食つて、力つけてくれよ」

お前は俺が守つてみせるから。

スマホを開き、アプリを開く。

いつも通りチェックしていくと、あるひとつだけが目に留まつた。

「……諸伏、風見さん」

「うん？」

「どうしました？」

二人に、気になつたその画像を見せる。

俺のスマホを覗き込んだ二人は、すつと目を細めた。

「もうひとつ、手を打つた方がいいかもしないな」

俺の言葉に、二人は同時に頷いた。

とあるアドレスにその画像を送りつける。

ああ、なんて愉快な画像だろう。勝手に口角が上がる。珍しく降谷とバー・ボンの感情が一致した。まあそれも仕方がない。それだけ無様で愉快な画像なのだから。

貴方もそう思うでしよう、と送りつけたアドレスの持ち主に内心で語りかける。それに応えるかのように、スマホが着信を告げた。

「——はい。メールは見ていただけましたか？」

ねえ、ジン。

今も不機嫌な顔で煙草でも吸っているであろう彼の姿が目に浮かぶ。今の画像は何だという、あまりにも答えのわかりきつた問い。

余裕の欠けた早口に、どうしたって笑いが込み上げてきた。

「見た通りですよ。いくら貴方でも、彼の顔は覚えているでしよう？」「憎い憎い、あの男。の方が「シルバーブレッド」と呼んで恐れた、あの。

どういうことだ、と響く低い声には隠しきれていらない動搖がうかがえる。それはそうだ、確かに奴はキールが殺した。ジンもその瞬間を見ていたし、日本警察もその死を確認した。だというのに、奴は生きている。

ジンに送りつけたのは、顔に大きな痣をつくり椅子に縛り上げられた赤井の姿だった。

「例の情報漏洩の件、FBIが絡んでいるという話はしたでしよう？不思議だったんですよ、調べれば調べるほど、彼らの手際が良すぎて。あまりにも、我々の手口を理解しすぎていた」

僕も調べあげるのには苦労しましたよ、とあえてゆっくりした口調で笑つてみせる。電話口でフンと鼻を鳴らされた。

「当然ですよね、——組織に潜入経験のある者が手引きをしていたのですから」

探りに探った結果、浮かび上がったのは死んだはずの男。かつてこの組織で『ライ』と呼ばれ、裏切り者として肅正されたはずの赤井秀

一だつた。

もう一度、愉快で仕方がないというように笑つてみせる。憎い憎いあの男のあんな無様な恰好を見ることができたのだ、バー・ボンなら全力でせせら笑うだろう。

「まだ生かしてあります。貴方も彼の死ぬところが見たいかと思いましてね」

『場所は』

「これから送りますよ。そこでお願ひなのですがジン、貴方からその場所にキールを呼び出してくれませんか」

一瞬だけ間をあけて、クク、と低い笑い声が聞こえた。察しのいい彼のことだ、それだけでこちらの意図を理解してくれたのだろう。幾分か機嫌のいい声で続ける。

『最期の逢瀬でもさせてやろうってのか?』

「キールがF B I かどうかはさておいても、命をかけて赤井を守つたことに違いはありません。せめて最期くらい、会わせてあげたいじやありませんか』

もしかしたら、深い仲だつたのがもしそれないでしよう?

そう言うとまた喉の奥を揺らし、相変わらず悪趣味な野郎だとジンは言う。お前だつて笑つているじゃないかと思つたが言葉には出さず、そうでしようか、ととぼけてみせた。

「僕はあまりキールと親しくありませんから、僕が呼び出しても応じてくれない可能性があります。ですが、貴方が任務だとでも言つて呼び出せば、彼女は間違いなく来てくれるでしょう。彼女もこれ以上、疑いの種を増やしたくはないはずですからね」

『感動の再会を演出してやると?』

「ええ、きっと感激でむせび泣くことでしょう。もつとも、流すのは真つ赤な涙かもしませんがね」

ジンの性格はわかっている。あの男は、裏切り者を惨めに死なせるためと言えば断らない。予想通り、いいだろうと軽く返した。

『お前の悪趣味なショリーに乗つてやる』

「ありがとうございます。確かキールは日本にいるはずですね?』

では明日の正午、指定の場所に』

通話を切り、目の前にいた男に笑いかけた。これで準備は整った。ジンが来るとなればウォッカも共に来る。後は目の前の彼が立てた策のままに動くだけ。

通話を切つたのを確認し、柊木はひとつ頷いた。柊木もまたその顔に笑みを浮かべる。

『明日の正午だ』

『ああ、手筈通りだな』

そして柊木も、その手に持ったスマホに目を落として口を開いた。先ほどから通話をつなげ、スピーカーの状態になつていて。

『聞こえましたか、Mr.ブラック。こちらも予定通りです』

『ああ、聞こえたよ。まずは第一段階クリアといつたところかな』

『ええ。そちらも予定通り進めてください』

『了解した』

明日の正午、こちらが作戦に動くと同時に、鳥取にいる彼らもバスの館へと乗り込むことになつていて。同時に仕掛け、同時に片付ける。ふたつの作戦が終われば、長い長い組織との戦いは幕を閉じる。もう少し。もう、少しだ。

『次に話をするのは、お互いの勝利報告になるだろう』

『心強い。まあ、どう考えてもこちらのほうが先に終わりますからね、大人しく貴方の報告を待つっていますよ』

ジンとウォッカの両手に手錠をかけて。

そう柊木が軽く応じると、Mr.ブラックも愉快そうに笑つたのが聞こえた。

『では、互いに健闘を祈るとしよう』

『はい。——良い報告を、お待ちしています』

ジエイムズ、と、柊木が彼のファーストネームを呼んだのを初めて聞いた。電波の向こうで、歴戦の捜査官が軽く息をのんだ気配がある。少し嬉しそうな様子で彼も応えた。

『……ああ、必ず。私に任せてくれたことを感謝するよ、アサヒ』

その言葉で通話は切れた。柊木は一瞬だけスマホに目をやり、その

ままポケットにしまい込む。こきり、とひとつ首をならし、周囲を見渡す。

その瞳はただ静かに凧いでいて、少しの気負いも感じさせない。ただ、いつも通り。いつも通り、なすべきことをなすだけだと、その瞳は無言で語っていた。

「では、予定通り明日の正午、作戦を開始します。カメラのチエツクも兼ねて、対象のビルとその付近を交代で監視しましよう」

肅々と指示を出していく姿には、いっそ貫禄すら感じた。

柊木を公安に引きずり込んでからたった数ヶ月、されど数ヶ月。当初と比べても、やはり雰囲気が違う。彼の言葉に従つておけば間違いない、そう心から思える指揮官のどれだけ得がたいことか。柊木を引き抜いた俺の判断は間違つていなかつた。

そんなことを考えていると、ぱちりと目が合つた。

「降谷、お前はちゃんと仮眠とつといて」

「そんなにヤワじやないぞ？」

「知つてるけど、明日はお前がしくつたら全部崩れるんだよ。万が一、億が一がないように休んどいて」

かわりに明日は、絶対に、気を抜くな。思考を止めるな。迷いなくその場の最善を遂行しろ。

「俺が作戦終了を宣言するまで、な」

そう真っ直ぐに俺を見つめる視線に、当たり前だろうと首を傾げる。これは気が昂っているのを咎められているのだろうか。

この数ヶ月間、先走るな、焦るな、冷静になれ、と、柊木からそればかり言われてきた気がする。お前の数少ない欠点だから心して改善しようと、何度も言われたかわからない。

ひとつ深呼吸をし、改めてその視線に応えた。

「わかった」

「ならない。じゃ、また明日な」

ひら、と手を振った柊木は、すぐに俺から視線を外して他に指示を出し始めた。

その横顔に何となく違和感を覚えなくもなかつたが、態度に出さな

いだけできつと柊木も緊張しているのだろう。そう自分を納得させてその場を後にした。

＊＊＊

「おや、貴方も監視に加わるのですか？　Mr. 柊木」

「どうせ眠れませんからね」

驚いたように言う彼に、苦笑を作つて返してみせた。

不確定要素が紛れ込まないよう、作戦の舞台となるビルには交代で監視をつける。といつても、すでに設置してある監視カメラの映像を見続けるというだけのこと。何かあつた時に指示を仰いでもらえばいいだけで、別に俺が見張る必要はない。だが、どうせ眠れそうでないのだ。それなら何かしていた方がいい。

「お気持ちはわかりますが……横になるだけでも休息になるでしょう。貴方こそ明日の作戦の要なのでしょうか？」

「もちろん、ずっと見張っているつもりはありませんよ。ちゃんと交代してもらいます」

「……OK、わかりました。ではMr. 柊木、私にも参加させてください」

え、と瞬きをすると、温和な顔に苦笑を浮かべた彼は小さく肩を竦めてみせた。やれやれ仕方のない人だ、と言いたげだ。

「私は明日、貴方の補佐という形にはなりますが、実際そう仕事がある訳でもない。少しくらい仕事をさせてください、貴方にばかり仕事をさせているのはさすがに心苦しい」

「それは……わかりました、ではお願ひします、ミスター」

「はい、おまかせを。では早速私が見張りますので、どうぞ貴方はお休みになつてください」

そのまま作戦の時間まで寝坊してくださつても構いませんよ、とおどけて言う彼に、ちゃんと交代の時間には起きますよ、と笑つて返して背を向けた。

部屋を出てしばらく廊下を歩くと、諸伏と風見さんが待つていた。

諸伏の手にはスマホが握られている。

「貴方がこちらにいらしたということは、懸念が当たっていたということですか」

「どうも、その可能性が高いですね。あいつらに連絡は？」

「問題なし。プロに任せとけってよ」

諸伏の言葉に、「元」プロのくせに、と笑った。とはいえ、かつてベテランすら軽く押しのけた具術を鈍らせるほど、プライドの低い奴らではないことは知っている。

「細心の注意を払え、とだけは伝えておいてくれ。余計なお世話だろうけど」

「はは、わかつた」

「では、こちらも手筈通りに」

「ええ。風見さんも、よろしくお願ひします」

「もちろんです」

いつも通り生真面目に頷く風見さんに微笑んで、ぐるりと大きく首を回した。ごき、と鈍い音が響く。

泣いても笑つても、明日決着がつく。いや、泣くような結果には絶対にさせない。明日のこの時間には勝利を得て笑つていなければ。

「柊木？」

黙り込んだ俺に、諸伏は心配そうに声をかけた。ひとつ苦笑をこぼして、ずっと俺たちを支えてくれている二人に目線を戻す。

これまでありがとう、そして最後までよろしく。そんな気持ちを込めて、言つた。

「俺たちの命、二人に預けるよ」

俺たちを、守ってくれ。

それは、信頼という名の脅迫であり、脅迫という名の信頼。

この二人にだからこそ、言えた言葉だつた。

*

「柊木くん」

仮眠室に向かつていたところを思わぬ人に呼び止められた。返事をして振り向く。同時に口元をおさえた。ダメだ、やつぱり笑う。

「……いい加減、人の顔を見て笑うのはやめてもらえるか」

「すいません、無理です」

左頬を大きく腫れさせた赤井さんの顔は、それはもう面白い。元がいいだけに尚更破壊力があつた。おもに腹筋的な意味で。

見た目はあれだが、それでも骨や歯は無事だというのだから、降谷にしてはちゃんと加減をして上手く殴つたらしい。

あんなに全力の笑顔の降谷は久しぶりだ。ストレス発散にもなったのなら何よりだと思うことにした。

「……少し話さないかと思つたんだが、もう休むところだつたかな」

「いえ、大丈夫ですよ。煙草でもご一緒しましようか」

「ああ」

そして揃つて喫煙室へ。すっかり俺の肺も汚れたもんだ、と変な風に感慨深い。ニコチンがないと落ち着かないなんてことはないが、精神安定剤のひとつになつていることは否めなかつた。

二人で並んで煙草の煙を燻らせる。

「……柊木くん」

「なんですか？」

「何を企んでいる？」

視線を合わせないまま煙を吐き出した。

企んでいるとは、まったくひどい言われようだ。

「……赤井さん」

「何だ」

「俺はね、これでも警察官なんですよ」

そりや今は公安なので手段を選ばないところはあります、がと付け加え、改めて口を開く。

「だから、正しいと思うことしかしません」

これは、強がりか。自分で言つておいて、少し首を捻る。上手く言葉にできない。

「とは言え、」

言葉を選びつつ、自分の内心に近いものを組み立てていく。

どうも昔からこういうものの説明は苦手だつた。自分のことなんて自分が一番わかつていないのでかもしれない。最近になつて特にそう思うようになつた。

「正しいにも、いろいろあるでしょ?」

「……そうだな」

「たくさんの中でも、今俺は……そう、多分、私情だらけの『正しい』を選んでます」

「……ホー?」

それは珍しいな、と言われるが、実はそうでもないことを自覚していた。いつだつて俺は、私情を公の事情で覆い隠してきた気がする。公の自分を説得できるだけの理屈と証拠を用意して、自分の気持ちを優先してきたような。

仕事に私情は差し挟まない、そうずっと自分に言い聞かせてきたけれど、効果はあつたのかなかつたのか。

「……まあ、悪いようにはしませんよ。多分ね」

「そうか」

「そういえば赤井さん」

「何だ?」

前に言つたことを撤回します。

そう言うと、赤井さんは何の話だ、と不思議そうな顔。また大きな癌が目に入り、少し笑つた。

「貴方を完全に信頼するつもりがないと言つたことをです」

俺は、貴方を信頼する。

赤井さんはすつと煙草の煙を吸い込み、大きく吐き出した。

「……光栄だ、と言つておこう」

さあ、果たして喜ぶべきことだろうか。俺の信頼はきつと軽くはないし、裏切ることを許さない。喉の奥で少し笑つて、灰皿に煙草を押し付けた。

「明日、よろしくお願ひしますね」

貴方は貴方の、思うように。貴方が「赤井秀一」である限り、俺の

策は崩れない。

*

薄暗いビルの一室。目を閉じてその時を待っていた。カツ、カツと二人分の革靴の音が聞こえてきた。念のために手にしつかりと手入れをした銃をもつ。

扉が開いたその瞬間、拳銃を向けた。

「……バー・ボン」

「どうも。失礼、念の為ですよ」

ジンとウォッカの姿を確認し、すぐに拳銃を下ろす。そして、すっと横にずれて、後ろに座らせていた「彼」を示した。

「では、感動の再会をどうぞ」

両手を後ろに回して椅子に座る、憎い憎いその顔。ぐつとジンの口角が上がり、ずかずかとその前に立つた。

「久しぶりじゃねえか。まさか本当に生きてやがるとはな」

「……」

銃口で頬を持ち上げられるが、無言を貫く。癌ができる頬を見て、ジンはまたクク、と笑つた。ウォッカも愉快そうにその様子を見守る。

「キールは？」

「今こちらに向かつているらしい。五分もせずに着くだろうぜ」

ウォッカの言葉に、こちらも口元に笑みをのせる。

大事なのは位置取りとタイミング。特に、位置取りは重要だ。悟られず、怪しまれず、そつとその椅子の隣に立つ。

「まだ殺さないでくださいよ？」

「ああ、かつてお前を守った女神に礼を言う時間はくれてやるさ。
……（到着か）

銃口をそらさないまま、ジンが振り返る。その先にいたのは、真っ青な顔で冷や汗を流すキールだった。

「つ……！」

咄嗟に身を翻そととする彼女に、ウォツカが拳銃の銃口を押し付ける。ぎくりとキールが動きを止めた。

「せつかくの再会に挨拶もなしとは、ちつとばかり冷たいんじゃねえか？」

「ウォツカ……！　どういうことなの!!」

「それはこちらの台詞だぜ、キール」

なぜ、お前が殺したはずの男が生きている？

ジンの言葉に、キールは奥歯を噛み締め、叫んだ。

「知るはずがないでしょ!!　赤井秀一は確かに私が殺したし、貴方もそれを見ていた！　日本警察に確認だつて取らせたのよ!!」

「ああ、からくりは知らねえよ。だが、事実としてこいつは生きている。なあ？」

キール、と拘束されたその人の口が動いた。ジンは笑みを深め、キールは信じられないものを見たように身体を震わせる。

傍から見れば、まるで救いを求める哀れな男とそれを振り払う冷酷な女の図と言つたところだろうか。何と愉快で無様な悲劇だろう、愉悦の笑みは止まらない。

「どうやら女神にも見放されたらしいですね。薄汚いFBIの犬には相応しい末路でしょう」

「ああ、どうやら挨拶も必要ねえらしい」

ジンは、改めて椅子に拘束されたその人の頭に銃口を押しつける。少し身体をずらし、正面にいるキールにもその様がよく見えるようだ。

「今度こそ、命運も尽きたな」

ゆっくりと、見せつけるように撃鉄を起こした。

「赤井、秀一……！」

一発の銃声が響く。ただし、その音を奏でたのはジン愛用のベレッタではなく。

窓ガラスの破片が飛び散る。ベレッタが宙を舞い、ジンが左手を押さえた。アニキ、とウォツカの叫びが響く。その隙をつき、キールはウォツカの腕を蹴りあげその銃を弾き飛ばした。

「！」

勢いよく扉が開き、風見が、C I Aの二人の捜査官が飛び込む。体勢を立て直す隙も与えないまま風見はウォツカに向けて引き金を引いた。飛び出すのは鉛玉ではなく、阿笠博士特製の麻酔弾。時計型麻酔銃をもとにしてさらに薬の効果を高めたものを銃の形に直してもらつた。さすがというかその威力は素晴らしく、少々薬物に耐性があるくらいではこの薬には耐えられない。

ウォツカは音もなく倒れ、改めてその場にいる全ての捜査員の銃口がジンに向けられた。キールはC I Aの捜査員に見覚えがあつたのか、その顔を見て目を見開いている。

「ぐ、……！」

顔を憤怒に歪ませたジンが、割れた窓の先を見る。このビルより少し低い、無人の建物。その屋上で今もライフルをこちらに向けているのは――。

「……赤井、秀一、だと……!?」

そう、本物の赤井秀一だ。ジンの眩きに、椅子に拘束された振りをしていたその人はふっと笑い、立ち上がった。ベリッと勢いよくその変装を剥ぐ。

「ごめんなさいね、ジン」

「ベルモット……！　てめえ、裏切りやがったか！」

「ええ、組織はもう終わりよ」

手負いの獣は手が付けられないと言うが、まさに今のジンはそれだつた。怒りという怒りがその全身に逆り、その顔はまさに鬼か獸か。

そんなジンに、ベルモットは少しだけ切なげな表情を見せ、そして。

「……さよならね」

その手にあつた銃を向け、麻醉弾を撃ち込んだ。

ゆらりとジンの身体が揺れる。まさか、この薬が効かないはずがない。二歩、三歩とよろめき、それでもなお弾き飛ばされたベレッタの方へ向かおうとするが、やはりジンも人間だった。

「……ろして、やる……！」

呪いのような言葉を吐いて、ジンは倒れた。長い銀髪が床に広がる。——これでようやく。ようやく、ジンを捕まえられる。

その光景に息をつこうとした瞬間、脳裏に我らが指揮官の声が蘇つた。

『明日は、絶対に、気を抜くな。思考を止めるな。迷いなくその場の最善を遂行しろ』

『俺が作戦終了を宣言するまで、な』

まだ、作戦終了の宣言を聞いていない。密かに右耳に付けられていたイヤホンに手をやる。この光景を監視カメラで見てているはずの柊木から、通信が来ない。

何気なく目線を前にやると、——何故かひとつつの銃口が、僕のほうを向いているような。はつと目を見開いた、その瞬間。

俺の右耳と左耳の両方が、銃声を捉えた。

彼は、俺が尊敬する年下の上司の同期で、友人で、最大のライバルだ。その能力は確かに桁違いで、次々と作戦を立てては成功させていく。降谷さんからの指示がなくとも、彼の言葉には従うべきだと疑い無く動けるほど、優れた人だつた。

そんな人が、俺に、任してくれた。

「よろしくお願ひします、風見さん」

「……はい」

「あれ、不安そうですね」

思わず歯切れが悪くなつてしまつた返事に、柊木さんは苦笑した。いえそんなことは、と言葉を続けるが、その先が出てこない。

この人や、俺の上司は、有能だ。俺なんかより、ずっとずっと。そして、いま俺に任せたことは、本当に失敗が許されることではなく。もし俺が、失敗すれば。——裏切れば、あるいは怖気付けば。

「……柊木さん」

「何でしよう」

「貴方は、」

どうしてそんなにも俺を信じてくれるんですか。

口にしてから、言うべきではなかつたと後悔した。これはただのコンプレックスだ。俺だつてそれなりに仕事ができる自負はある。ただ、どうしたつて彼らには敵わない。劣等感がないと言つたら嘘になる。

柊木さんと共に働いた数ヶ月、ひたすらサポートに徹したことでもつて手柄のひとつも立てられてはいない。俺が柊木さんの信頼を勝ち得ているとは思えなかつた。

俯きかけた視界の端で、柊木さんがふうんと首を傾けたのが見える。

「……風見さん」

「……はい」

「公安警察としての、日本を守る一人としての貴方に問います」

降谷零は、この国に必要な人間ですか？

は、と息が出た。そんなもの、考えるまでもなく決まっている。
「必要です。間違いなく」

これまでずっと、その背中を追つてきた。その働きを、その覚悟を、
その誇りを、ずっと見てきたのだ。

知つていて。あの人があれだけ恐ろしくて、どれだけこの国を愛し
ているのか。そればかりはきっと、柊木さんだつて敵いやしない。
柊木さんは、俺の答えを聞いてにつこりと微笑んだ。

「俺もそう思います」

そして、彼は言葉を続けた。

「それ以外に、貴方を信頼する理由が必要ですか？」

その言葉に、息を詰まらせる。

柊木さんは俺の様子など気にもせず、俺はいるないとと思うんですけどねと朗らかに宣つた。壯麗な顔に、作り笑いでない楽しそうな笑みを乗せて彼は言う。

「貴方は降谷の右腕でしょう。降谷は、信頼できない人間を傍には置かないし、使えない人間を補佐にはしません」

その笑顔が、言いたいことはわかるでしょうと語りかけてくる。そんな顔をされては領く以外の選択肢がない。

俺は、降谷さんの右腕なのだから。

「……弱音を吐きました。申し訳ありません」

「いえ。それで？」

「必ず、遂行してみせます」

守つてみせる。その両肩にこの国を背負う、彼を。

ジンが倒れ伏すと同時に、CIAのひとりが持つていた拳銃の銃口が降谷さんを捉える。彼が引き金を引こうとしたその瞬間、俺は彼に全力で当て身を食らわせた。

銃声と一緒に、顔の横を弾丸が通り過ぎる。いくらか髪が散つたの

か、わずかに焦げ臭い。——何が起こつた。当て身を食らわせた風見はすぐに体勢を整え、彼に麻酔弾を撃ち込む。それを見たもうひとりのCIAも即座に俺に向けて銃を構えるが、引き金を引くことは叶わない。窓の外から飛んできた弾丸によつて弾き飛ばされた。

『……どういうことだ』

彼には珍しい、焦りと困惑を含んだ声がイヤホンから聞こえてくる。

『なぜCIAが降谷君を狙う?』

俺が、狙われている。何故、疑問がぐるぐると脳を巡る。何より、先ほどの銃声。確かに俺は両耳でその音を捉えた。素のままの左耳からだけでなく、イヤホンをつけている右耳からも。それの、意味することは——まさか。

脳裏でまた彼の声が蘇る。この数か月、言われ続けてきたこと。先走るな、焦るな、冷静になれ。俺が今、すべきことはなんだ。なすべきことをなせと、そう言われたじやないか。

ほとんど反射的に隠し持つていた麻酔銃を取り出し、赤井に拳銃を弾き飛ばされた彼に弾を打ち込んだ。ほぼ同時に、ベルモットが驚愕した顔のキールに麻酔弾を撃ち込む。

「……そういうことね」

嫌悪に顔を歪ませた彼女に構うことなく、俺は立ち上がった風見に叫んだ。

「風見、ジンとウォツカは予定通り拘束し連行! そしてCIA捜査官二名は殺人未遂容疑で緊急逮捕だ! キールもその共犯の疑いがある、同様に拘束しろ! 確実に監視のもとに置き、一瞬たりとも目を離すな!」

「はい! 連行するためには待機させていた人員を増員し手配します!」

取り急ぎジンとウォツカには俺と風見が持っていた手錠を後ろ手にかける。ガムテープでもあればCIAの拘束もしたかつたところだが、手持ちがない以上はしばらく目を覚まさないことに賭けるしかない。後は、連行するための追加の人員が到着するのを待つだけ。

これで、いいんだよな？ 焦る気持ちを押さえながら、マイクに向かつて叫ぶ。

「柊木、追加の指示はあるか？ 応答しろ！」

とにかく声が聞きたかった。さつき聞こえた銃声は気のせいだと、無事だと言つてほしい。祈りに似た気持ちでイヤホンを耳に押し付けた。

「柊木！」

『……そんなに叫ばなくとも聞こえてるよ、降谷』

穏やかな声が、鼓膜を揺らした。

ジンとウォッカが、ビル内部に入つたことを確認した。各所に仕掛けられた監視カメラの映像が、ビルから少し離れた場所に停められた車内のモニターに映る。

「映像、音声ともにクリア。ジン、ウォッカ、まもなく対象の部屋に到着します。キールはまだのようですね」

「ええ」

モニター車には俺とミスターの二人だけ。先程まで諸伏がいたが、作戦中は車の周囲を警戒してもらうため、外に出ていった。その諸伏から、キール到着、と無線が入った。その数秒後、監視カメラに彼女が映り込む。

「キール……！」

「とりあえずは元気そうですね」

「ありがとうございます、Mr. 柊木」

仲間の無事を喜ぶ彼に笑顔を返して、目線をモニターに戻した。

ここからはもう、俺にできることはない。できることは、全でした。本当に、全て。人事を尽くしたのなら、あとは——天命を待つのみ。「キール、接触しました」

「始まりましたね」

これで、ようやく終わる。そう時間のかかる作戦ではない、決着ま

で数分だろう。

同時に、俺にとつての戦いはそこからだ。高鳴る鼓動を呼吸でおさえ、成り行きを見守った。

「……M r. 栄木」

「はい」

モニターからは目を逸らさない。隣にいた彼が少し身を引き、俺の背後に立つたことがわかる。彼の静かな声には何の感情も乗つておらず、ただただ無機質に響いた。

「貴方は本当に優れた方だ。貴方と共に任務にあたつたこの数ヶ月は、私にとつて非常に有意義な時間でした。貴方から学び得ることもとても多かった」

「……お互い様ですよ、ミスター。貴方はとても良い仕事相手で、いいライバルでもありました」

「光栄です」

モニターに映る、ほぼ一瞬の銃撃戦。——片が付いた。ジンすら騙し通したベルモットの変装は見事で、風見さんの冷静な対応も素晴らしい。

ジンとウォッカが、倒れ伏した。

「……とても……残念です。M r. 栄木」

貴方は、優秀すぎた。

後頭部の近くで、かちりと金属の音が聞こえる。それが何を意味するのか、彼が何をしようとしているのか、俺にはわかつていた。そつと目を閉じ、口元を緩める。

ただ、その銃声を受け入れた。

*

銃声は背後からではなく、モニター車の入口付近と、イヤホンから響く。

そつと目を開けると、目の前の画面に映つているのは困惑した表情の降谷に、やり切った顔の風見さん。直後に響いた銃声と赤井さんの

焦った声は、彼が迷うことなく降谷を守ってくれたことを証明している。

「ぐ……！」

「……動かないでくれよ。次は当てる」

俺の背後には右手を押さえるミスター、モニター車の入口近くには拳銃を構えた諸伏が立っていた。その顔は冷静に見えて確かに怒りが宿つており、その言葉が脅しでないことを物語っている。

『柊木！』

必死な顔で降谷が俺を呼んでいる。この状況でもちゃんと冷静に動いて指示を出せるなんて降谷も成長したものだ。そんなことを思う自分に、笑つた。

さあ、これから先は俺の舞台。勝者は俺で、今起きている全ては俺の思惑通りでなければならない。この先の全ても、俺が描いたままに進む。そう思つてもらわなければ。

不安を殺せ、安堵を殺せ。このうるさい鼓動を、掌の汗を、決して悟られてはならない。ひたすら余裕に、傲慢に、全てはお見通しだと笑つてみせろ。俺に弱みなど存在しない、俺に勝てるわけがないのだと思いつませろ。

俺は何事も無かつたかのように、マイクに顔を近づけて話しかけた。

「……そんなに呼ばなくても聞こえてるよ、降谷」

『！ 柊木！』

「増援が来るまでその場に待機、赤井さんも万が一彼らが早く目を覚ましてしまったときのために警戒を続けて下さい。ベルモット、もう少しお付き合いを」

『……了解した』

『仕方ないわね。それで？ そちらからも銃声が聞こえたような気がしたのだけれど？』

「ああ、聞こえましたか」

マイクの感度を高めて、この場の会話がすべて伝わるように設定を

いじる。ゆつくりと立ち上がり、いまだ右手をおさえる彼に向き合つた。

「……俺の杞憂であればいいと思つていましたよ、ミスター」

「……ここまで読まれてゐるとは思つていませんでした」

さすが貴方は優秀だ、そう言つた彼はうつすらと冷や汗をかきつとも笑つていた。そしてさらに言葉を続ける。いつたいいつから気づいていたのかと問われ、さていつからだつたかな、と考える。

「最初から違和感はありました。どう考へても貴方たちの目的は『宮野志保』であるはずなのに、捜査の指揮権を奪いに来る様子も、彼女に接触しようとするとする様子もありませんでしたから」

いくら合衆国からの圧力があろうとも、ただ彼女を寄越せと言われて領く日本警察ではない。何事にも体裁と道理は必要で、合衆国とてそれくらい弁えている。だからこそ、うやむやのうちにこの捜査の指揮権を奪われ、事後処理の主導権まで握られることを恐れていた。しかし、その様子が全くない。

「こちらを見定めているのは感じていましたが、手は出してこない。しかし、このまま大人しくキールの身柄だけを救出して帰つてくれるとは到底思えない。だから、考えました。指揮権を奪う以外の、この案件の主導権を握る方法を」

彼らはCIAだと、そう口にしたときに気づいた。そう、彼らはCIA、合衆国の国益を第一とする組織。彼らの詳細な活動内容は明かされていないが、かつて暗殺禁止という大統領令を出され、しかも今はそれを撤回された事実がある。合衆国のために、職務として人を殺すことがあり得る組織なのだ。

その発想に至つたとき、俺は背筋に冷たいものを感じた。日本警察でこの案件に深くかかわっているのは、俺を含めて四人と少ない。特例で指揮を執つてゐる俺と、潜入任務に就いている降谷を「排除」てしまえば、残るのは風見さんと諸伏の二人。サポートメインで動いている彼らが中心になつて捜査を続けられるとは考えにくい。かといつて、今から他の指揮官を連れてきて何とかなる案件でもない。

彼らが「暗殺」という選択肢をとることは十分にあり得る。だが確

証があるわけではなかつたし、ただ暗殺を失敗させるだけでは意味がなかつた。二度目三度目と狙われることがないよう、暗殺を完璧に防いだ上でCIAに「暗殺は不可能」あるいは「メリットよりデメリットが大きい」と思われる必要がある。端的に言えば、とりあえずミスターの心はへし折らなければならない。正直、不可能だと思った。

案自体は浮かばないわけではなかつたが、どう考へても俺には手札が足りず、何より降谷を危険に晒すことになる。それを策に数えたくなかつた。

「……正直なところ、本当に降谷と俺の暗殺を狙いに来るかは可能性でしかありませんでした」

確証をもつたのは今朝のことだ。あいつらのおかげでそれがはつきりした。まさかまた助けられるなんて、と頬もしくなりすぎた彼らを思う。

たくさんひとに手を借りた。使えるものは全部使つた。だからこそ俺は、絶対に負けられない。この自信満々な笑顔を、崩すことは許されない。

「しかし、可能性があることだけでもわかつていれば十分。おかげで、俺たちは今も生きている」

「……それはどうでしょう」

彼はそつと左手をポケットに入れる。その様子に銃を構えなおした諸伏を片手で制した。彼の切り札はとつくにわかっている。

「このモニター車にひとつ、そして彼らがいるビルにふたつ」

ぴたり、と彼の動きが止まる。まさか、とその顔は物語つていた。ポケットから覗く左手に握られていたのは、赤いボタンのついたいにもなスイッチ。この反応からして数と配置に間違はないらしい。

つまり、何の問題もない。

「昨晩は見張りを代わつていただいてありがとうございました。その間に貴方の部下の方々が仕掛けてくれた爆弾は解除させていただきましたよ。わりと単純なつくりだつたそうですね、解体には五分とかからなかつたそうです。貴方が見張りをしていた短い時間で仕掛けたせいか、隠し場所も安直で見つけ出すのもそう難しくなかつたと」

彼と見張りを交代した、今日の早朝。俺がモニターを覗き込んでいたその間に、風見さんと諸伏、そしてあいつらが走ってくれた。裏の理事官に連絡をまわしてあいつらを動けるようにしてもらい、ただひとことだけメッセージを送つて。

『たすけてくれ』

すぐに既読がつき、メッセージが返ってきた。ずっとあいつらからのメッセージを無視し続け数か月ぶりに俺からメッセージを送つたというのに、そんなことを一切感じさせない返事だった。

『何すりやいいんだよ。日時と場所と詳細教える。あと報酬もな』

『やつと研二くんの出番？ 今度は除け者なしだからな！』

『お前の珍しいSOSに俺たちが動かないわけねえだろ？』

改めて諸伏から連絡をしてもらい、指示を出した。俺が見張りをしていたその数時間のうちに、ビルとモニター車を徹底的に洗つてもらつた。俺と降谷が死ななければ意味がないのだから、ある程度場所と威力の見当はつく。捜索されることを前提としていない以上、そう難しいトラップが仕掛けられているはずもない。

優秀な警察官が五人もそろつて本気で捜索を行えば、元爆処のエースが二人も揃つていれば、爆弾を見つけ出してばらばらにすることくらい造作もなかつた。

『……口を挟んでもまないが柊木くん、つまり彼らは自爆するつもりだつたということか？』

不意に赤井さんの声が届く。

そう、この場を爆破すれば、俺たちだけではない、彼ら自身も巻き添えとなる。爆弾の威力を考えれば、生き残れたのはせいぜいスナイプのために距離をとつていた赤井さんくらいだつただろう。

「ええ。対外的にはその爆弾は組織の最後の抵抗とでも判断されるでしょう。そうなればむしろ、日本の捜査員だけが死んでいる状況は違和感が残る。だから彼らもまとめて死ぬつもりだつた」

『だが、それでは』

「ええ、そうなれば生き残るのはFBIだけです」

赤井さんが息をのむ。

そう、鳥取にいる三人と赤井さんが生き残る。そうなれば当然指揮を執るのはMr.ブラック、つまり合衆国側になるだろう。まして彼は今ボスを捕まえるべく動いており、おそらく成功させる。そうなれば彼がこの案件の主導権を握るのは何らおかしいことではない。

そしてMr.ブラックは当然、合衆国に逆らえない。

「彼らは合衆国のためにある。そのためなら少々の命が散つても構わない。日本警察の命も、……CIAの命もね」

その覚悟はいつそ立派だと言つてやろう。公安だって、状況によつてはそれに近い判断をするかもしれない。決して肯定はしないが、それが彼らの職務で存在意義なのだから。

「……本当に、貴方は恐ろしい人だ。Mr. 桜木」

爆弾のスイッチを床に落としたミスターは、静かな声で言つた。今までの温和な顔を投げ捨て、その瞳に鋭さを、その口元に酷薄な笑みを宿している。

「だからこそ、貴方だけでも手段を択ばず殺しておくべきでした」

合衆国のために。

彼にとつてはこれ以上ない賞賛の言葉なのだろう、素直に受け取つておくことにする。そう考えて笑みを返した。彼は言葉を続ける。「それで？ 私たちをどうされるおつもりですか？」

逮捕でも、何でも、どうぞお好きなように。

彼は余裕を崩さないまま両腕を開いてみせた。まあ、どうするかって、逮捕はするのだけれど。その先の流れがどうなるかなんて、だいたい予想はつく。こちらにとつてそれは決して悪い展開ではなかつた。

「……まあこの映像も撮れてますし、殺人未遂の現行犯逮捕ですよね。キールについては微妙ですが、貴方の部下のお二人も同様に逮捕。CIAの捜査員が功を焦つて暴走し、殺人を図るも失敗という筋書きがあてがわれて、CIAが日本警察に謝罪。まあ力関係考えたら表沙汰にすらならないかもしませんが、とりあえず案件の主導権は渡さずに済みそうですね」

今後の展開なんて、まあそんなもんだろう。宮野さん、新一くんの

身柄を渡さずに済むのならとりあえず問題はない。ミスターは俺の言葉に満足そうに頷いた。

「ええ、仰る通りになるでしょうね。残念です、例の薬の研究者をこちらにもらえないのは」

「言葉と表情が一致してないんですけどねえ」

「おや、そう見えますか？」

しらじらしい。任務の失敗をしておきながら呑気なものだ。まあ、その理由もわかる。この任務に失敗したところで、CIAにとつては少々日本警察に謝罪をするだけ。得るものこそなくとも、失うものはほとんどない。

宮野さんの身柄が得られずとも、薬のデータやそれ以外の怪しい研究のデータはまだ手に入れられる可能性はまだ残っている。彼自身は相応の処罰を受けるかもしれないが、彼ほど狂信的に任務に忠実な人間であれば合衆国に被害がなければそれでいいと考えているのだろう。

「ところでミスター、ひとつお伺いしたいことがあるのですが」

「ほう、なんでしょう？」

「貴方には協力者がいるはずだ。それも、日本警察の上層に」

彼の笑顔は揺らがない。

そう簡単に口を割つてくれないことを承知で、俺は構わず続けた。「CIAがこの案件に参加しやすいように根回しを行い、暗殺が成功した際にはそれを『殉職』として処理することができるほどのお偉いさんと、繋がつてますね？」

その人の事、教えてくれませんか？

笑顔のミスターは、なんの事だかわからないというように首を傾げてみせた。

CIAが世界各国、それも要人に協力者を持つてているのはもはや周知の事実だ。そうやって合衆国に都合のいいように他国を動かしていくのがCIAの常套手段。実際に過去、CIAと関係があつたとされる日本の要人も多い。

今回もその存在があるのは確信していた。何しろ、あまりにもCIA

Aの行動が大胆すぎる。しかし、その正体を暴くことはできていな
い。どこでどう情報が漏れるかわからない状況で捜査員を動かし、こ
ちらが暗殺に気づいていることを悟られるわけにはいかなかつた。
だからこそ、何としてもここで口を割らせる必要がある。上層に合
衆国と繋がっている人間がいるのはこの際どうでもいい。ただし、合
衆国と日本の国益を両立できるのであれば、だ。今回の件は明らかに
やりすぎだ。

彼は、口を開く気配を見せない。

「……ま、教えてくれませんよね」

地位の高い協力者というものはいくらでも使い道がある。こんな
ところで失いたくはないだろう。ならばやはり、こちらも切り札を出
さねばならない。妥協した勝利は決して完全勝利とは言えないのだ
から。

俺はミスターから視線を外すことなく、ポケットの中のスマホに手
を伸ばした。

スマホに手をやり、該当の人物にコールする。きっと首を長くして待っていたであろう彼女は、すぐ電話に出てくれた。

『出番かしら』

「ああ。用意は?』

『あとはエンターキーを押すだけよ』

「さすがだね』

短い言葉を交わし、スピーカーモードに切り替える。俺は改めてミスターに向き直った。

「もう一度お伺いします。快く協力者の名前を教えてくれませんか?』

「いつたい何の話ですか?』

につっこりと微笑む彼に、苦笑する。アンタがそのつもりなら、もう仕方がない。公安得意の違法作業、それもとつておきのやつをご覧頂こう。

車内のキーボードをいじり、モニター画面を片つ端から切り替えた。そして同時に流れる、動画、画像、音声。ああ、何度見ても素晴らしい出来!

「……な、』

さすがの彼も、今度ばかりは度肝を抜かれたようだつた。大口を開けて放心するその様子に愉快でたまらないというように笑い、それぞれのモニターを指示示す。

「どうですか? 何が見えます?』

そこに映っていたのは、例えばCIAから諜報員に向けた正式な任務の指令書。その詳細。例えば、ミスターがCIAに対して暗殺任務について報告している電話の様子。そしてその音声データや、やりとりしていたメッセージの文面。

その全てが示すのは、「CIAが彼に日本警察の捜査官を暗殺するように命じた」という事実。

「馬鹿な……! 有り得ない!』

「ええ、仰る通り。有り得ません」

につっこりとそう言うと、まさか、と彼の口が動いた。

そう、貴方が考へてゐる通り。この映像、画像、音声、その全ては。「よく『できて』いるでしょ？」

*

工藤先生に呼び出されてお邪魔した阿笠博士の研究所。そこには工藤先生と新一くんだけではなく、当然のように宮野さんと阿笠博士も同席していた。

暗殺という「最悪のシナリオ」の「打開策」を諸伏に吐かされ、俺は頃垂れていた。降谷を囮になんかしたくない、その気持ちがあつただけではない。この作戦を進めるには、足りないカードがふたつある。片方は――俺がいらぬプライドを捨てればまだ何とかなるかも知れない。問題はもうひとつ。

CIAの口を割らせるための、明白な交渉材料を得ること。言うことを聞かせるだけの、弱みを握ること。

「……現行犯逮捕だけじゃダメなんですか？」

「仕掛けてくるとは思えない」

新一くんの言葉をすぱりと否定し、二人の安全確保だけを考えるならそこで満足してもいいんだけど、とひとりごちる。そこでダメですよ、と叫んだのはやはり新一くんだった。

「柊木さんたちを売るような人を見逃すなんて！　しかも、警察官なのに！」

新一くんらしい、正義に燃える言葉に苦笑する。全ての警察官が正義のために動いていたら、きっと監察官なんて職務は必要なかつただろう。

「……確かに、彼女と息子の身の安全以上の話になるのなら、それは私たちが口を出すことではないが」

一呼吸置いて、工藤先生は続けた。

「君たちはそれでいいのかい？」

「良くないですよ」

「良い訳がない」

即座に俺と諸伏の声が続いた。その即答ぶりに工藤先生は苦笑する。

ああ、ちつとも良くはない。妥協した勝利なんて負けも同然、今後の俺たちの身の安全や仕事への影響を考えても、是非とも逃がさず締め上げたい。

そう、必要な手札さえ、揃えば。

「……そうだね、現行犯逮捕だけではカードが足りないだろう。せめて、その暗殺が個人の暴走でなくCIAの命令だという体にできればいいんだがね」

それについては俺も同感だし、先生が何を考えているかもわかつているつもりでいる。証拠なんて、ないなら作ればいい。だが。

「しかし、公安の捜査官は動かせません。ただでさえ、それをするためには相当に特殊な知識と技術をもつ人間が必要で、……え、」

「そうだとも柊木くん。相当の特殊な知識と技術をもつ人間が必要だ。ところでここに、海外事情に詳しい上に交友も広く、しかも英語も堪能な人間がいると思うんだが」

泰然と微笑むその人は、長い足を組み替えてくるりと周囲を見回す。

「小説家というのは便利な職業でね、友人たちに少々妙な質問をしても取材だといえば快く教えてもらえるんだよ。おっと、加えてここにはあらゆる科学技術に精通した天才的科学者がふたりもいるし、それから隣の家には天才的な変装術と変声術、演技力を備えた元女優もいるね」

「……俺もいるんだけど」

「ああもちろん、うちの息子も英語は堪能だし、機械にも強い。君との連絡係としても相応しいだろう」

ぶすぐれる新一くんの頭を、ぽすぽすと工藤先生が撫てる。確かに、彼らほどの能力があれば可能かもしれない。そうは思うが、しか

し。

「何故、という顔をしているね」

「……先生」

「今まで君たちには多大なる迷惑を掛けてきたと思う。だからこそ、わずかなりとも力になれればと思うよ。そう思うのはおかしいことかな？」

「……」

「よしわかつた、本音を言おう。ひとつ頼みを聞いて欲しいんだよ、柊木くん」

初めから素直にそう言えばいいものを。先生以外の全員が半眼になつてじとりと彼を睨めつける。はははと乾いた笑いを零して、先生は続けた。

「君をモデルにして、小説を書きたい」

「……は」

「もちろん、名前や他にもフェイクをいれて、そうだと知る人にしか君がモデルだとわからないようにすると約束しよう」

俺を、モデルに。

目立つことがそもそも嫌いな俺は、多分ものすごく正直にとても嫌な顔をしたと思う。バレるとかバレないとかそういう話ではない。生理的な嫌悪感すら覚える。だが、たったそれだけで、手を貸してもらえると言うのなら。

「……そもそも先生以外の人はいいのか？」

俺の様子に苦笑した諸伏が、さつと口を挟んだ。しかし新一くんはそもそも乗り気だし、母さんも絶対ノリノリでやるよ、と一言。阿笠博士もわしにできることなら、と力強く頷いた。あとは、もうひとり。

「……やるわよ」

やらないわけ、ないじやない。

そう言つた彼女の瞳は、こんな言葉では足りないほどに燃えていた。こんな目を、こんな表情をする子だつただろうか。彼女の相手は専ら降谷に任せていたから、そもそもそんなに彼女のことを知つている訳ではないけれど。それでも何だか、意外だつた。

「全員一致だね。さて柊木くん、あとは君の答えひとつだ」

私たちを「協力者」として使う気はあるかな？」

朗らかに笑う工藤先生の顔に拳を叩き込みたい気持ちを抑えつつ、俺は頬の引き攣りをおさえ、頷いた。

「……よろしく……お願ひします……。……でも俺絶対その作品読みませんからね」

「あ、俺読みたいです」

「ありがとう諸伏くん、是非君たちには（）意見を伺いたいな」

「おうコラ諸伏」

わかっている。工藤先生は、こちらがあまり良い印象を抱いてないことを理解した上で、俺が領きやすいように交換条件を出してくれたのだということを。どうもこの人に対してはガキっぽい反感で動きやすい。反省しよう。

そんな自分にため息をついた時、宮野さんが一步前に進み出た。

「柊木さん」

「……どうしたの？」

彼女の瞳は、相変わらず燃えていた。何となく気圧され、少し身をひく。すると彼女はもう一步前に出た。

「貴方が何をしようとしているのか、私たちが何をするのか、理解したうえで言うわ。それ、私の存在を使えばもつと強力なカードになるわよね？」

一瞬考え、確かに、と頷きかけたが、いやいやと慌てて首を振った。何を言っているんだこの子は、何もここまでリスクを負う必要はない。公安の力を駆使して彼女の存在や秘密は守つてみせるし、もしその方法をとるならできる限りの対策は打つてもらうが、それでも彼女のことが公になってしまふ可能性はゼロじゃない。

「宮野さ、」

「リスクが大きいって言いたいんでしよう？ わかつてるわよ」

わかつて言つてゐる、とぐいぐい前に出てくる彼女に、瞬きをする。どうしたのだろう、彼女は常に冷静であつたし、基本的により安全な道を選択するほうだと思っていた。

「……見てわかるでしょ？ 私は怒っているの」

キツと睨みつけられ、俺が何をしたというんだと言いそうになつて気づいた。彼女が怒りの矛先を向けているのは、俺たちではない。彼らなのだと。

「……公安に私のことをバラしてから、これからどうなるのかずっと不安だつたわ」

工藤くんは大丈夫だと言つたけど、私があの組織に属していたのは事実だし、作つてはいけない薬を作つていたのも事実。良くて監視付きの軟禁生活を送らされるか、国家で飼われて指示された研究を行うことになるか。それでも、あの組織から守つてもらえるなら、他の人を危険にさらさずに済むのなら、それでもいいと諦めていた。なのに。

そう語りだす彼女の声には真摯なものが感じられ、口を挟むことを許されない雰囲気があつた。

「……外を歩く時に警護がついているとは言つていたけど、私が窮屈に思わないように気を配つてくれて。外出を制限することも、誰かと会うことも制限することもなく、学校にも普通に行けるよう配慮してくれたわね」

「……そりや普通のことでは
普通じやないから言つてるのよ！」

「アッハイ」

そつと口を挟んでみたが、その剣幕におされて黙る。

彼女は犯罪組織に属さざるを得なかつた立場なのだし、こちらの要請にも非常に素直に従つてくれた。しかも情報提供にも協力的なのだから、さすがの公安もそんな子に非道を働く必要はない。いや、手段を選ばないとはいへ一応これでも警察なので。

いろいろと言葉が浮かんだが、とりあえず黙つておくことにする。感情的になつた女の子の扱いなど俺にわかるわけもない。

「……しかも、公安に協力し始めてすぐ、ベルモットが寝返つたと聞いて！」

「キヤンティとコルンが逮捕されたのも新聞で見たわ。……不自由ない生活を許してもらえるだけで十分と思つていたけど、初めて……希望をもつた」

もしかしたら本当に、組織がなくなるかもしれない。お姉ちゃんをあんな目に合わせた奴らが、捕まるかもしれない。

「……そう思つて、数ヶ月よ。……捕まるんでしよう？ ジンもウオツカもラムも、……あの方も」

「……ああ、必ず捕まえる。組織も潰すよ」

「それを聞いて、……私がどれだけ喜んだか、わからないでしようね」どれだけ貴方達に感謝したか、わからないでしよう？

そう言つた彼女の大きな瞳には、涙が滲んでいた。

「宮野さん、」

「なのに！」

突然の剣幕に、部屋にいた全員がぎくりと身を震わせる。君、そんな大きい声出せたのか。

「何なのよそいつら突然割り込んできて！ どうしてこのまま平和的に話を終わらせてくれないのよ！ 何なの合衆国、大人しくキールだけ回収して帰ればいいじゃない！ 何で余計なこと企むのよ！ —

——私を、なんだと思っているのよ！」

はいごもつとも。ソウダネと頷く以外に何ができるだろう。彼女の勢いは止まらない。

「私をまるで、研究をするだけのモノみたいに！ ……私を合衆国に連れ去つて研究を続けさせようとするなら、CIAは私にとつて組織と何も変わらない！」

そんなの、絶対に嫌。——嫌だと、言えるようになつたの。

肩を震わせ、両手を握りしめて彼女はそう言葉を絞り出した。そつか、とその顔を見て思う。彼女はようやく自分の望みを、望みとて口にできるようになつたのだと。

それが俺たちの働きによるものであるなら、何よりも誇らしい。

「……貴方たちはまた私を守ってくれようとしてる。私が合衆国に行かずに済むように、手を打つてくれている。国家の関係を考えたら、

私を売り渡す方が楽に進むことだつてあつたはずなのに」

「……」

「だから、私は、——感謝をしているの。だから、自分にできることはやりたいの。だから、貴方に『お願ひ』をしているのよ。手を貸してあげてもいいと言つてるんじゃない。守られているだけじゃなくて、私にも貴方達とともに戦う手段があるのなら戦わせてほしい。CIAに意趣返しをできる手段があるなら協力させてほしい。——私は、守られるだけで満足するような、お姫様じやないの」

その真摯な言葉に、ひとつ呼吸をする。

彼女が考えなしに言つてゐるわけじゃないのはわかつた。そこに明確な覚悟と決意があることも。

そういうのに弱いんだよな、と自分に苦笑しながらソファから立ち上がり、彼女の前でしゃがんで目線を合わせた。負けたと言うように苦笑を向ける。わかつたよと『言えば、彼女の瞳が輝いた。

「同期の悪友ども曰く、俺は鬼で惡魔で魔王で暴君らしいからな。君が俺に武器をくれるなら、俺は全力をもつてCIAの心をへし折ると約束する」

君をモノ扱いした奴らを、完膚なきまでに叩きのめしてみせると約束しよう。

「君の願いと覚悟を聞き入れる。是非力を貸して欲しい」

「……ええ、」

完璧な武器を、用意してみせるわ。

怒りと決意に燃える彼女は、ひどく苛烈に輝いていた。

*

彼らの知識と技術の結晶である数々の証拠が流れた後、ひとつの画面に顔を隠した女の子の姿が映される。彼女はおもむろに口を開いた。

『助けて、ください。せつかく外に出られるようになつたのに、また、どこかに連れ去られる。私を助けてくれた人たちが、殺されてしま

う。……助けて、ください』

音声を変えてはあるが、それは見る人が見ればはつきりとわかる。宮野さんだ。涙まじりの喋り方は、大いに見た人の同情を買ってくれるだろう。何て見事な演技力。もともと器用な子というのもあるが、今回は元大女優の演技指導も受けたそうだ。これを見ていつたい誰が嘘泣きだなんて思うのだろう。まったくもつて、吹っ切れた女の子というのは恐ろしい。

それを見てまた目を見開いた彼に向かつて、口を開いた。

「筋書きはこうです、ミスター」

映像の少女は、その類まれな天才的能力故にある犯罪組織によつて囲われていた。その犯罪組織に目を付けていた日本警察は、CIAやFBIの協力を得つつ捜査を行い彼女を救出、そして犯罪組織の壊滅まであと一歩というところまで追い込んでいた。しかし、その彼女の能力に目をつけたCIAは、捜査にあたつていた日本警察の捜査官を暗殺し、彼女の身柄を横取りすることを自論んでいた。それに気づいてしまった彼女は、何とか阻止しようと奮闘するが、やはり自分の力では限界がある。そこでこうしてできる限りの情報を集め、外部に情報を探し、救いの手を求めようとした。

「今、この全てを世界中に発信する準備が完了しています」

引き金を握る彼女が、この会話を聞いている。

今度こそ本当に冷や汗をかいている彼の肩が、揺れた。本来、この手の情報戦はCIAの十八番。だからこそ、彼にはわかるはずだ。今自分が置かれているその状況。このカードがもつ、その重みを。

「……作られた情報ということはすぐにバレる!」

「仰る通り。すぐにCIAは虚偽だという証拠を揃えて反論に出るでしょう。しかし、そのころにはすでに、この情報は世界中に広まっている」

情報戦と言うのは難しいもので、有利な状況をつくるためにはいくつか鉄則がある。まずは、確実に先手を打つこと。それも、相手側に悟られて対策を取られる前に発信し世界に情報を信じ込ませること。「情報の真偽なんてどうでもいいんですよ。貴方たちの方がよくご存

じのはずだ。眞実なんてものは必要ないんですよ。世界の大多数が信じさえすれば、嘘であつても本当になる」

世界なんて、所詮は人間の集まり。人間はいつだつて、自分たちにとつて都合のいいものを信じる。そうやつて世論の操作は行われてきたし、そうやつて人心というものは利用してきた。もはや世界の真理と言つていい。

「後からCIAが確たる証拠を揃えて反論してきたところで、誰がそれを信じます？あれは嘘だ、作られたものだなんて言つて、誰が心から納得してくれますかね？世界は信じたいものを信じるし、少女の涙が強いのは万国共通。しかも世界一の大國の諜報機関の一大スキンandalだ、どれだけ合衆国が躍起になつて火消しをしてもそう簡単にこの疑惑の火は消せませんよ。CIAのトップの首程度で足りるかどうか……ああ、この場合、首を差し出すトップはどうやらになるんでしょうね？」

CIA、つまり中央情報局長官の首か、それとも。

「貴方達つて、合衆国の大統領直属の監督下にあるんですね」

CIAのスキンandalとはすなわち、大統領、そして国家のスキンandalそのもの。

そうひとりごとを言いながらにつこりと微笑んでみせると、彼の顔色は青を通り越して白くなつた。その白い肌に、青白い血管まで浮いて見える。

彼は、自分自身のことに関心がない。逮捕されようが、命を落とそ
うが、合衆国になるのなら。ならば、その心意氣を大いに評価し、全力で合衆国に喧嘩を売つてやろうじやないか。合衆国を人質にして、脅迫という名の交渉を持ち掛けてやる。何せ俺は鬼で惡魔で魔王で暴君、情け容赦など必要ない。この俺に喧嘩を売つた浅慮な自分を恥じるといい。

「さて、そろそろ増援が到着するころです。貴方を連行しないといけない」

猶予などくれてやらない。考える必要などないはずだ。他国にいる協力者たつた一人の身柄と、世界一の大國たる自国のメンツ。秤が

どちらに傾くかなんて明白も明白。

そうでしよう、と最高の笑顔を作る。

「どう、しますか？」

脱力した彼は膝をつき、両腕をだらりと落とす。紫に近い色になつたその唇が、ゆつくりと開いた。

*

「協力感謝するよ宮野さん。少しは気が晴れたかな」

『ええ、お陰様で。それじゃ私は紅茶でも飲んで、貴方達の完全勝利の報告を待つことにするわ』

いつもの調子でそう言う彼女に少し笑つて、そのまま通話を切つた。

同時に、ビル内部を映していたモニターに、公安の増員が映つていいことに気づく。よし、増援が到着した。あとは彼らを連行し、裏切り者の横っ面を殴りに行くだけ。

「諸伏、彼の拘束と連行を頼む」

「了解」

完全なる敗北を享受した彼に、もう抵抗の様子はない。諸伏に任せておけばとりあえず問題はないだろう。続けてマイクに向けて話しかける。

『風見さん、そのまま彼らの連行の指揮をとつてください』

『はい！』

「赤井さん、Mr. ブラックに報告と、向こうの状況の確認をお願いします。必要であれば俺に報告を」

『……了解した』

「ベルモット、これで貴方との契約は完了です。貴方を協力者から解放する。報酬や貴方の今後については改めて場を設けます」

『はいはい、わかつたわよ』

そのあとに一瞬間をおいて、ずっと呆けていたそいつに笑いながら音声を飛ばす。

「降谷」

『……ああ』

「お前はどうする？」

俺はこれから警察庁に戻るけど、お前もいくか？

そう言うと、正気に戻つたらしい降谷が心底腹立たしいという顔になつて、叫んだ。

『俺も行く！　すぐにそつちに行くから待つてろ！　いいか、待つてろよ！　俺に秘密で話を進めやがつて、全部説明してもらうからな！』

そう叫ぶと同時に降谷がモニターから消えた。これは全力疾走しているに違いない。思わず吹き出すと、後ろから忌々しそうな小さな声が聞こえる。

「……呑気なものだ。本当に見事ですよ、Mr. 杉木」

「お褒めに預かり光栄ですね、ミスター」

「しかし、何も知らない友人を囮に使うなんて、さすがなかなか冷徹ですね？　しかも、憤り憎む様子すら見せないと」

せせら笑うように言う彼は、どう見ても負け犬の遠吠えだつた。そんな彼に苦笑をひとつ零す。

そういう風に見えたのだとしたら、俺の猫かぶりも大したものだ。そう思つたとき、俺はほとんど無意識のうちに左足に重心を乗せ、浮いた右足をまつすぐ前に叩きつけていた。

ミスターの顔の横にあつたキーボードのキーがいくつか吹っ飛ぶ。同時に後ろ手でマイクのスイッチを切つた。

「公安の捜査官として、指揮官としては、貴方に憎しみやそれに類する感情は持つてはいません。貴方達は職務に必要な行為を行つたにすぎず、そこに『暗殺』という事項があつただけ。そう考えます」

だがもちろん、俺個人としてはまた別問題だ。

「……でも俺はね、本当は自分の縄張りに手を出されるの、死ぬほど嫌いなんですよ」

思いのほか、低い声が出た。獰猛な感情が表に出ようとするのを、押し込める。

「日本を土足で荒らしたばかりか、日本警察にまで手を出しやがつて怒らないわけがない。憤らないわけがない。状況が許すなら、たかが殺人未遂の現行犯程度で手を打つはずがなかつた。

アンタは職務に忠実な俺に、心から感謝をするべきだ。

「この程度で済ますのは今回限りだ。次はありとあらゆる手を使つて、テメエの飼い主こと潰す。世界一の大國だろうが諜報機関だろうが、この俺を敵に回したらどうなるか思い知らせてやるよ」

これが脅しじやねえこと、アンタならわかってくれるよな？

また蒼白になつた彼にそれだけを言い残し、諸伏に任せて外に出た。モニター車に背を預けて、降谷が来るのを待つ。

その間にと、スマホをコールしてある人物に繋げた。

「柊木です。内通者が判明しました。これから警察庁に戻りますので、お約束通りご助力をお願いします」

CIAに叩きつける証拠についての話をした後、思い出したように工藤先生は言つた。

「それはそうと、この作戦にはもう一枚カードが必要だろう。そちらは大丈夫かい？」

さすがにそちらは私たちではどうすることもできないが、と言う工藤先生に苦笑した。多分大丈夫です、と返すと、宮野さんが不思議そうな顔でこちらを見る。

「まだ何か必要なものがあるの？」

「まあね。けど、これは権力とコネクションの問題だから」

「……ああ、そつちのことか。けどお前、今までさんざん上層に喧嘩売つとして味方とかいるのか？」

心底意外そうな顔をする諸伏にも、苦笑を返すしかない。

まあ監察官の時に喧嘩を売りまくつた自覚はあるが、それでもそれなりに目をかけられたりもしてたんだけど内心だけで反論するが、今回頼れそうな味方がいないのは事実だ。

「……俺のツテじゃねえよ」

「ん？ 違うのか？」

じやあ誰だよと問い合わせる諸伏に、ちょっと眉尻を下げ、言いたくないなと思いながら口を動かした。

「……親父の」

「え？」

「親父のツテに、そういうのを紹介してくれそうな人がいるんだ」

できれば、もう会うつもりはなかつたのだけど。

*

俺の姿を見つけた途端突進してきたと思つたら、即行で腕を掴まれてRX-7に放り込まれた。パトランプ付けないなら安全運転など言つたらすぐい目で睨まれる。

「法定速度は守る」

「安全運転と法定速度遵守はイコールじゃないんだよ」

「うるさいその話はいいんだよ」

「いや警察官としてはとてもよろしくない、」

「柊木」

「……はいはい」

軽いノリに付き合つてくれる気はないらしい降谷は、そのままアクセルを踏んだ。一応思つたよりは安全運転。

それで、とさつそく話を切り出される。

「CIAの暗殺のこと、いつから気づいてた」

「……いつだつたかな……年末くらいか」

随分前だな、と降谷の頬がひくりと引きつった。それには気づかなかつたふりをして窓の外で流れる景色を眺める。随分前と言うほど前でもないとと思うんだけどナーと内心言い訳めいたことを呟いた。

第一そのときも可能性に思い至つたというだけで、確信を持つたのは本当に今朝だ。

「今朝、あいつらが爆弾を見つけてくれるまでは推測の域を出なかつたよ」

「……まさか爆弾まで持ち出してくるとはな」

「ああ、予防線張つといて良かつた。正直危なかつた」

予防線、と降谷が繰り返す。できる限りCIAから目を離したくなくて、俺は「街の目」を使う決断をした。「協力者」たちの顔が次々と頭に浮かび、思わずため息をつく。

もう数年の付き合いになる奴もいるが、いつのまにあんなに頼りになるようになつたのかと、嬉しいような申し訳ないような不思議な気持ちになる。彼らの力を借りたくはなかつたが、借りずにはいられないほど優秀なネットワークに育つてしまつた。

「……俺のベイカーストリートイレギュラーズは優秀なんだよ」

今もこの辺に溶け込んで生きる悪ガキたち。そこを卒業し、もう働いているような奴らにも声をかけ、恥を忍んで頭を下げた。お前らを利用するつもりはないと言つておきながら頼つてすまない、これが

最初で最後だから、どうか助けてほしいと。

『何すりやいいの？』

一番最初に返事をくれたのは今や大学卒業を目前に控えた幸人だった。

CIAの三人の顔と車両の情報を送り、彼らを見かけたら片つ端からその様子を報告してほしいと頼んだ。すると幸人は、全員分のメッセージ受け取つてたらスマホの通知死ぬよ、とSNSを勧めてくれた。

『全員に鍵つきアカウント作らせるからフォローしといて。ダミー混ぜながら報告流させるから、あとはひーらぎさんの方で判断よろしく』

しかも、その報告の仕方と言つたら。

キツチンカーの前でクレープをアップにした画像を上げたと思ったら、そのサイドミラーにはミスターの顔がうつっていたり。久々の再会、とか言って肩を組んでいる画像を上げたと思ったら、その後ろでCIAの車両が信号待ちをしていたり。何だお前ら優秀か。というか将来何になるつもりなんだと、正直本気で頭を抱えた。

そしていつたいどこでこんなやり方学んだんだよ……と愚痴を投げれば、速攻で「ひーらぎさんの悪影響」と山のような返信が届く。そんな英才教育をした覚えはないと言い返しても、「ひーらぎさん、英語わからねえって言つた俺たちに何見せたか覚えてる？」の一言。

そういえばスペイものの洋画を勧めたこともありましたね。何でもいいから英語に興味もてばいいと思つただけなんだよ。その内容じゃなくて英会話に注目してほしかつたんだよ。閑話休題。
「流してもらつた画像の中に、気になるものがあつたんだ」

「それは？」

「二週間前、宿泊しているホテルに戻る彼らの手に、銀のジェラルミンケースがあつた」

そう大きなものではない。ただ、今までそんなものを持っているところは見たことがなかつたし、少なくともその日の朝、警察庁に向かう途中と思われる画像には写つていなかつた。つまり、警察庁からの

帰り道に、どこかに立ち寄つて、手に入ってきたことになる。

「彼らは何か購入する時、基本的に宅配を頼んでいたみたいなんだ。金持ちと言うか何というか、荷物をあんまり持ちたくないタイプらしいんだよな。なのにそのケースだけは後生大事に持つて帰った」

「しかも一週間前と言つたら……今回の作戦の詳細を煮詰めたころか？」

「ああ、タイミングが良すぎたのもあって邪推せざるを得なかつた。仮に彼らが本気で暗殺を企てていて、仮にそのケースがそのために用意したものであるなら、その中身は何なのか？」

そう思つたときにふと浮かんだのは、何故か一度吹つ飛ばされた経験のある萩原の顔。まさかと思いつつも、ミスターの思想と思考を考えれば「有り得る」と判断した。むしろ、その方が「手つ取り早い」とも。

そう思つたときにはすでに、あいつらにSOSのメッセージを送りつけ、あえて「それ」を仕掛けさせる隙を与えた上で、こちらがそれを探し出し解体するだけの時間を作る算段を立てていた。

「運が味方したと言わざるを得ないな」

それが爆弾であるという確たる証拠はなかつた。もちろん、本当に彼らが俺たちを殺そうとしているという確証も。

いくつか可能性を考えた中で、一番可能性が高いと思うものから対策を打つていつたが、たまたまそれが当たつていたというだけに過ぎない。本当に、運が良かつた。

「……経緯はわかつた。それで？」

「何だよ」

「本題だ。何故俺に黙つていた？」

流れる景色をぼんやり見つめていた目を、数秒閉じた。まあ聞くよな、と思う反面、こいつ本当に自覚ないんだな、と内心溜息をつく。なるべく何気ない口調を装つて、俺は言つた。

「諸伏がNOCだとバレた時のことを覚えてるか」

「？ ああ」

「あの時お前、どれだけミスを重ねた？」

降谷が息を呑む。さすがに心当たりはあるらしい。

あの日の降谷との通話やうちに飛び込んできたときの様子からいろいろやらかしている気はしていたが、当時の捜査資料を見たときは本当に愕然とした。冷静でないときの降谷が相応にポンコツのは知っていたが、職務中っこまでポンコツになるとは。本当に心底呆れだし、肝が冷えた。

「はつきり言う。お前があの後も潜入を続けていられたのは、単純に運が良かつたからだ」

あの時の降谷は、組織の誰かに見つかる可能性のある状況で、「バーボンらしくない行動」を取りすぎていた。見つからなかつたのは、NOCの「疑いがある」程度で今日まで潜入を続けられたのは、実力じゃない。運の問題だ。

「お前の強みで弱みだよ。職務中でも身近な人間の危機に過敏に反応する」

そう言うと、降谷はきゅつと唇を噛み締めた。

俺だつてある程度のことは予測できるし、計算外だつて計算に入れて策を考えてみせる。だが、降谷ほどの奴の「暴走」を読み切れるかは怪しいと思つた。俺の策を乱すだけの能力が、降谷にはある。

特に今回の作戦は、ギャンブル的な側面も強かつた。風見さんと諸伏に任せたとはいえ、降谷が死んでもおかしくなかつたし、もちろん俺が死んでもおかしくなかつたのだ。

確かにお前にも情報を共有して自分の身を守つてもらうことも考えた。反面、お前の甘さと日頃の暴走具合、それから対組織の作戦の肝はバー・ボンになるだろうことを考えたら教えない方がいいとも考えた。で、結局後者に軍配が上がつたわけだ。その程度には俺、お前に好かれてる自覚もあつたしな」

「……」

「反論があるなら聞いてやる」

「……お前のそういうとこ本当に腹が立つ……！」

歯噛みするようなその言葉を、事実上の敗北宣言だと捉えた。とはいえ、今日の降谷は俺の危機かもしれない状況でも、やることはやつ

てのけた。降谷も成長したということで、その辺の評価は改めておこう。

「……それで！」

「今度はなんだ」

「内通者がわかつたのはいい！ だがそもそもCIAの証言だけじゃ何もできないぞ！ 裏も取れてないし、俺たちには身内を締め上げる権限がない！ 階級も向こうの方が上すぎる！」

「とりあえず声のボリュームを落とせうるさい」

しかし、降谷の言った通り。俺はもう監察官じゃないし、そもそも警察庁には警察庁の監察業務を行う人たちがいる。そして特殊な部署にいるとはいっても、警部程度の俺たちには限界がある。

だから、カードが必要だった。俺たちの言葉を肯定し、動いてくれるだけの権力の後ろ盾が。

「……助つ人は呼んである」

「助つ人？」

「ああ」

腹の中が真っ黒な、とつておきの権力者たぬきを。

*

阿笠博士の研究所を訪ねた次の日、俺はある場所に足を運んだ。平穩に生きる大半の人々にとつては縁のない、罪を犯した者を反省させるための施設——刑務所だ。

無機質な面会室の椅子に座つて、その人を待つ。時計の音が、やけに耳にまとわりついた。透明な壁の向こうでがちやりとドアが開く。俺は反射的に立ち上がりつて礼をした。

「お久しぶりです、先生」

「お、旭くんじやねえか。久しぶりだなあ」

まあ座んな、と言つたその人は今も服役中の犯罪者であり、元法務大臣という経歴を持つ政治家であり、——俺の父が、命を懸けて守つたひと。

父さんは警視庁警備部警護課で要人警護を担当する、いわゆるS.P.だつた。特にこの人に高く評価されていたらしく、よく指名されでは先生の警護についていたと聞いている。俺が初めて先生に会つたのは父さんの葬儀だったが、俺の過去のことも何やらと詳しく知つて、父さんが相當にこの人の事を信頼して慕つていたことはわかつていた。

「……来てくれるとは、思わなかつたんだがな」

「ええ。俺も来るつもりは、ありませんでした」

その日も、いつも通り父さんはこの人の警護についていた。政治家というものは難儀なもので、どれだけ眞面目に働くが命を狙われる可能性がなくならない職業である。

この人を狙つたのは、過激な思想をもつた人間だつた。どこかから拳銃を手に入れて、それを先生に向け——その弾丸を受けたのは、父さんだつた。

命にかえても対象を守る、それがS.P.だ。俺は父さんがいつも机の引き出しに遺書をいれているのを知つていたし、葬儀でこの人に深く深く頭を下げられても恨む気持ちなど微塵も起きなかつた。あれこれと世話をしてくれたこの人に感謝をしつつも、葬儀や遺産について一区切りする頃にはそれも断つた。俺は警察官になるつもりだから、貴方との関係はここまでにしたいと。

『貴方と縁があると言うだけで、そのつもりはなくとも何かしらの特別待遇があるかもしません。俺はそれを望まない』

自分の力で這い上りたいから、とこれまでの感謝と共に告げる。と、先生はわかつたと領き、しつかりやんなど俺の肩を叩いてくれた。だからもう会うつもりはなかつた。汚職で逮捕されて尚絶大な影響力を誇る、この人には。

しかし、今回はそうも言つていられない。

「今更どの口が、とお思いになるかもしませんが、お手をお借りしたくて」

ほう、と先生は面白そうに笑つた。言つてみな、と視線だけで促される。

「ご存知かもしぬませんが、無事、警察官として働いています。今は警察庁で、特殊な部署に配属されておりまして、非常に厄介な案件に関わっています」

何から説明すべきか、何まで説明していいのか。頭の中で綱渡りをしながら、言葉を辿っていく。

「FBIや、CIAも絡んでいる案件で、」

どう伝えればいいのだろう。何を説明すればこの人は協力してくれるのだろう。この人はこの人でとんでもない古狸だ、政治家と言うのはそういう生き物だ。

今更にして実感するが、実は俺も相当テンパっていたし緊張していらっしゃい。上手くこの人を説得する言葉が出てこない。どんなに言葉を飾つたって、老練の狸には見抜かれると思った。

それならきっと、ただ俺は率直に伝えるしかないと。

「——友達の命がかかっています」

あれ、おかしいな。何で俺、泣きそうな声を出しているんだ。

「今、もしかしたら、俺の大事な友達の命が危機にさらされているかもしれないんです。絶対に、死なせたくない。そのために今、策を練っています。それに俺の友達を売った人間も、何としても捕まえてやりたい。そいつが、警察上層でふんぞり返っている奴の可能性が高いのなら、なおさら」

目の前のその人は、ただただ静かな瞳で俺を見返した。

「そのためなら、何だつてします。誰にだつて頭を下げるし、何だつて利用する。貴方はあのとき、俺に言つたでしよう。俺には、俺の父には、大きな借りがあると。できることなら、何でもすると。それを今、返してください。俺に今必要なのは、権力者の後ろ盾です。それも、金だ利権だで左右されない、信用のできる後ろ盾だ。元法務大臣で警察官僚にも知り合いが多いだろう貴方なら、そういう人を知っているんじやないかと思つて、ここにきました」

どうか、手を貸してください。

俺がそう言うと、先生は数秒間黙り、そして微笑んだ。政治家らしい、見た人を安心させる笑顔だった。

「いい顔するようになつたじやねえか、旭君」

「……最後にお会いしてから十年近く経つんですよ、俺だつて成長します」

「はは、そうさなあ、立派になりやがつて。……人の命がかかつてるとなれば、俺も一肌脱がねえとなあ。これでも元坊主、無益な殺生は嫌いなんだ」

実家がお寺で人命を何より尊ぶこの人は、法務大臣在任中も死刑執行命令書への署名は一切しなかつた。そして一流の政治家と言う生き物は、言葉を「まかしはしても嘘の類は言わない。言質を取られるのを嫌がるからだ。

「話せる範囲で詳しく話してみな」

紹介できる當てがあるかどうか、考えてやる。

にやりと笑つたその人に、俺は改めて口を開いた。できる限りに端的に、今の状況を説明する。一通り話を聞いたその人は、静かな目で改めて言つた。

「……旭君よ、『誰にだつて頭を下げる』と言つたな？」

「言いました」

「それが例え、てめえと因縁のある奴でもかい」

警察上層で、俺と因縁のある奴。そんな人は限られている。しかも先生は、かつて俺の身に起こつたことを知つている。つまり、先生が言つて いるのは。

「だが、そんなことはどうでもいい。」

「もちろんです、先生」

俺にとつて大事なのは過去じやない。今、この時だ。

そう言い切つた俺に、先生は満足そうに頷いた。

「なら、あいつに話を通しておこう。だが、俺にできるのはお前さんの話を聞いてやれと言うことだけだ。説得するのは自分でやんな」

「十分です」

「お前さんのことだから杉下にはもう挨拶したんだろ?」

「特命係の杉下さんですか？　はい」

なら、杉下にも連絡をしておこう、と先生は微笑んだ。どうやらそ

のひとと杉下さんには直通のパイプがあるらしい。

手ははずを整える約束をしてくれた先生に、俺は深々と頭を下げた。

「……旭君よ」

「はい」

「ますます親父さんに似てきたな」

イイ男になりやがつて、とからからと笑うその人に、つい苦笑した。

「やめてください、あんなクソ親父」

「言うねえ、若造が」

*

警察庁に到着し、まっすぐにその内通者の執務室を目指す。自然と足早になり、足音が大きくなつていった。俺は、怒っている。職務で俺たちを殺そうとしたCIAも許せるものではないが、お前のそれは私欲に過ぎない。私欲で人の命を売り、その罪を隠蔽しようとしたことは絶対に許さない。許してはならない。

形だけのノックをして、返事も聞かずにその部屋に足を踏み入れた。部屋の中央にある机を前に、そいつはふんぞり返つていた。

「何だお前たちは」

不快そうな顔を隠しもせず、俺たちを見てそう言う。おや、俺たちのことは知らないらしい。なるほど、ろくに調べることもせずCIAの要請に乗つたというわけか。いっそ笑えてくる。

「つれないことを仰いますね。せめて顔と名前くらいは知つておいて頂けませんか」

貴方がCIAに売り払つた、捜査官のことくらい。

俺がそう言うと、彼はすつと目を見開いた。この反応はあたりだと確信をもつ。たとえ暗殺が失敗したところで、自分の名前が出ることはないと高をくくつっていたのだろう。随分と、舐められたものだ。

「いつたい何の話をしている？ 無礼にも程がある、出ていけ！」

「しらばつくれますか」

「だから何の話をしているというんだ！ もういい、所属と名前を言

え！」

まあ、認めるはずもない。罪を認めた先にあるのはその身の破滅だ。

何人かの足音が開いたままのドアから聞こえてくる。来てくれた、と少し目を伏せた。

「失礼しますよ。やあ松木君、早かつたんですね」

後ろに何人ものお付きを連れて執務室に入ってきた那人。その人を見た瞬間、彼だけでなく降谷までその顔色を変えた。警察に身を置く人間なら、まあどこかで見たことはあるだろう。

大物も大物、この警察組織全体でトップから数えて五指に入るほど の権力者。

「官房長……！」

警察庁長官官房室長という、もはや「とにかくどんでもなく偉い人」としか言えない立場のこの人。

虎の威を借りて申し訳ないが、これもまた戦略のうちと主張する。

*

杉下さんを通して顔をつないでもらうと、ひと気の少ない公園を指定された。この寒い時期に、と思いながらベンチに座つてその人を待つ。約束の時間から少しして、背中合わせになつていた反対側のベンチに人が座つた。

「会つてやれつて言われたから来たけど、まさか君だつたの」

「あれ、光榮です。俺のことをご存じなんですか？」

「一時期、僕のこと喰ぎまわつてたでしょ」

ああ、バレている。そりやそうか、と苦笑しながら頷いた。バレても構わないと思いながら探つてはいたのだが、やはりお見通しだったらしい。

「大河内くんがとんでもないのを引き抜いてきたつて噂も聞いていました。若手の快進撃はなかなか見ものでしたよ」「恐れ入ります」

「まさか、かつて警察の不正の犠牲になつた子どもが警察官になつて
いるとは思いもよらなかつたけどね」

直球で言われて小さく息を飲んだ。そう、それこそが俺とこの人の
因縁。

今も俺の深くに刻まれた忌まわしい記憶。このひとは、かつて俺を
「家出少年」に仕立て上げたうちのひとりだつた。

「僕のことを嗅ぎまわつてたのも、その関連でしょ？」

「ええ。あの時の事件に関わっていた人で今の警察にいる人は少ない
ですから。……どんな人なのかなと」

「そう。で、僕のことを調べた感想は？」

「……納得、でしようか」

「へえ？」

監察官になつたばかりのころ、その権限を利用して事件に関わつた
人々のことを調べた。その当時の警察の状況なんかも含め、できる限
り。

するとそこから、見えてきたものがある。

「当時の警察は、だいぶ不安定だつたんですね」

権力の集中の仕方も、派閥の在り方も危なかつた。どこかのバランス
が崩れれば、警察組織そのものが傾いてしまいそうなほどに。もし
俺が「家出少年」でなく、「誘拐事件の被害者」になつていたら、いつ
たいどうなつっていたか。

もちろん、だからといって罪が隠蔽されていいわけではない。どん
な理由があろうと罪は罪で、それを隠そうとするのは決して正しくな
い。

きつと少し前の俺なら、どんな理由があろうと許せないと、そう
言つたと思う。だけど、今の俺には何故か。

「……不思議と、恨む気持ちはないんです」

ずっと抱えていた黒いものは今も消えていない。だけどちゃんと、
直視はできるようになつた。今こうして因縁の相手のひとりである
この人と話していくても、黒いものは浮上することもなく大人しいま
ま。自分でも少し、驚いている。

少なくとも、警察学校に入った頃の俺だったら、こんなことは言えなかつた。あの頃の俺と今の俺の違うところ。それが何なのかと聞かれれば。

「警察官になつて、……いろんな形の正義を見ました」

ルール破りは嫌いだつた。ルールに則つていれば正しいのだと思つていた。けど、世間は、正義は、そんなに簡単じやなかつた。警察官になつてたくさんの人と出逢つた。たくさんの人と話をした。

どこまでも真実だけを追い求める新一君の正義。

組織の壊滅のために国境やルールを飛び越えたF B I の正義。

自国の利益のためなら命すら切り捨てるC I A の正義。

事件解決のためなら民間人の手を借りることも良しとした目暮班の正義。

捜査権がなからうと事件が起きれば捜査を断行する杉下さんの正義。

恵まれない子供たちのために汚職に手を染めた先生の正義。

そして、この国の秩序のためなら何だつてやつてみせる、公安の正義。

全肯定できるものはひとつもない。だが、全否定できるものもひとつもないと思つた。だつて彼らは、自分が正しいと思うことを貫いているだけなのだ。そこにあるのは私欲よりも使命感、そして正義感。信条の違いこそあれど、どうしてそれを否定できるだろう。この世に絶対的な正義などありはしないのに。

「……調べた限り、貴方は私欲で動くような人ではない。俺を『家出少年』に仕立て上げたのも、貴方なりの正義があつてのことでしょう。だつたら、俺は貴方を責められません」

だつてきつと、俺が貴方の立場であれば同じことをするから。少なぐともこの人はただ、日本警察を守ろうとしただけだつたのだと思うから。すでに公安としてたくさんの法を踏みにじつてている俺がこの人を責めるなんて、それこそお門違いだ。

そう少し笑うと、その人はふうんと感情を感じさせない声で呟いた。

「まあ昔の話はいいんですよ。俺は今の話がしたくてお呼びしたんです」

「今君が指揮を執つてる例の組織の話?」

「ご存知なんですね」

僕も公安に関わっていたことがあるからね、とその人は何の気なしに言つた。それは話が早くて助かる。

「ではCIAのことも?」

「わざわざ捜査協力とかよくやるよね」

「ええ、本当に。まだ可能性の段階なんですが、そのCIAが公安の保護対象の身柄欲しさに俺たちを殺しにかかるかもしれません」

官房長は数秒押し黙り、少し低い声で、ない話じやないねと呟いた。続けて、なるほど、とも。

「誰か内通者がいるんだ? それも警察上層に」

「おそらく。CIAにその名前を吐かせます」

その内通者の締め上げを、貴方にお願いしたいんです。貴方が決して、利権や保身で動く人ではないと見込んだうえで。

そう言葉を続けると、官房長はゆっくり足を組み替えた。

「見込んでくれるね」

「俺が調べた限り、貴方は日本警察のために大局を見て動ける方ですから」

「日本警察のために、君たちよりその内通者の方を取るとは考えないの?」

その言葉につい肩が揺れる。俺はそこまで自分たちを軽く見てはいない。

「利権ほしさに自國の人間を売り渡すような輩と秤にかけられて負けるなら俺たちもその程度の存在だつたということですね。とりあえず俺は若くしてゼロに引き抜かれたうえに、世界的犯罪シンジゲートをものの数か月で壊滅寸前にまで追い込んでるんですけど」

加えてその世界的犯罪シンジゲートに潜入して幹部にまで上り詰め、今も尚内側からその組織を探りを入れている優秀な捜査官と、天才的な頭脳で新種の毒薬を開発したこれまた優秀な科学者の存在も

ある。

これで内通者の方を取るなら馬鹿と言うほかない。

「……いいでしょ、そのどどめは僕が請け負います」

「ありがとうございます」

「かわりに、合衆国との交渉は僕に任せてくれる？　CIAの落とし前も」

「どうぞ」自由に。逮捕後の組織員の身柄を交渉材料に含めて頂いても文句は言いませんよ。ただし、俺たちの身の安全と保護対象及び協力者の身柄は絶対に譲りません」

「はいはい、わかっていますよ。しかし随分と大盤振る舞いだね」

「警察の仕事は悪い奴らの存在を暴いて捕まえるところまででしょ。悪い奴らをどこでどう裁くかは職務外なので興味がありません」

面白いことを言うね、と少し官房長が笑ったような気がした。

「杉下が紹介してきたからあいつに似てるのかと思つたけど、そうでなさそうだ」

「杉下さんには恩義もありますし尊敬していますが……そういうえば杉下さんみたいになりたいと思つたことはありませんね」

「なるほど、君は人を見る目があるみたいだ」

それじゃ、とその人はベンチから立ち上がり、ぱたぱたとスーツについた埃を払つた。

「その時がきたら連絡してください。どどめは受け持つけど、そこに

至るまでに失敗しないようにね」

「ええ、こちらも命が懸かっていますから。よろしくお願ひいたします」

ベンチに座つたまま、その人の背を見ることなく礼をした。大局的な正義を見るこの人は、俺たちが日本警察のために働く存在である限り切り捨てはしないだろう。せいぜい役に立つ駒であるように、心掛けていくだけだ。

気に入られたいとも思わないが、できることなら敵に回したくはない相手。そして今回は、何としても協力を取り付けなければならなかつた相手。何て心の内が読めない人だろうか。先生といい、全く煮

ても焼いても食えなそうな古狸というのは恐ろしい。

官房長の気配が完全に消えたあと、俺は大きく安堵の息をついた。

*

「な、何故貴方がここに……！」

「内通者の名前がわかつたつて柊木君から連絡をもらつたんですよ。彼？」

「はい。CIAには合衆国を盾にして吐かせたので間違いないかと」「そのあたりもあとで報告して頂戴ね。じゃあ、とりあえず来てもらおうかな」

音もなく前に出るのは、官房長の後ろにいた人たち。びしつとスリツを決めたその人たちはおそらく警察庁の監察官だろう。うわあ本物のエリート様たち。

さつとそいつの両側に立ち、椅子から立ち上がりせて部屋の外へ引きずり出した。他の人たちはこの執務室にあるものをがさがさと段ボールに詰め始めた。これは彼の存在を丸ごと洗うつもりらしい。

「が、官房長、違う、違います！ 私はそんな……！」

「うん、ちゃんと話は彼らに聞いてもらうから。間違いだつたらその時はその時、もしも合つていたら」

この部屋の持ち主は、警察にいられなくなるだろうね。
特に変わらない調子で言つた官房長に、彼は真つ青な顔でこちらを見みつけた。

「このまま終わると思うなよ！」

うーん、既視感。いつだつたか、確か査問会でお見送りした誰かが同じようなことを言つていた気がする。そういえばあのはどうなつたんだつけ。いつどんな仕返しをしてくれるかと楽しみにしていたのに、結局何も起きていないような気がする。俺に喧嘩を売るからにはしっかりと有言実行してほしいものだなと思いながら、笑顔で彼を見送った。やれるもんならやってみろ、今度は官房長の力を借りずに潰してみせる。

連行していくその人たちの姿が見えなくなつたところで、改めて俺は官房長に向き直つた。

「ご助力ありがとうございました」

「いえいえ。君も降谷くんも無事で何よりです」

唐突に名前を呼ばれた降谷はびしつと姿勢を正した。さすがの降谷も恐縮した様子で、恐れ入ります、と少し震えた声を上げる。目上に対して緊張する纖細さは持つていたらしい。

「裏の理事官からもいろいろと話は聞きましたよ。組織の壊滅までもう少しだつて？」

「ええ、鳥取でボス逮捕に当たつているFBIの作戦が成功すれば、無事」

「そう、お疲れ様。最後までしつかりお願ひしますね」

「はい、と二人そろつて敬礼を返すと、官房長はひとつ頷いて部屋を出て行つた。騒がしかつたその部屋がいつきに静まり返る。どつと疲労がやつてきた俺たちは、ほとんど同時に壁に背を付けた。

「……いつたいどういうコネクションなんだよ官房長つて……大物すぎるだろ……」

「そのあたりの説明は後でな……おつと」

ポケットの中でスマホが暴れだす。画面に表示された名前を見て口角が上がつた。

「はい、柊木です。……ええ、……いえ、それは。……はい。わかりました、ありがとうございます」

簡単な報告を聞き、通話を終える。俺の隣で、降谷が期待を込めた目で俺を見ている。そう、今の電話はお前が思つてゐる通り。さすが彼は優秀だ、こんなに早く向こうの作戦を終えてくるとは思つていなかつた。

「降谷」

「ああ」

「ただ今をもつて本案件におけるすべての作戦の終了と、――完全

勝利を宣言する」

俺たちの勝利だ。

ぶつけ合った拳は、痛みを感じないくらい爽快だった。

事実上、組織が壊滅した。長い、長い戦いだつた、らしい。

俺にとつては数か月のことであつたが、思うところのある人は多かつたようだ。どこから情報が漏れたのか、こつそりとお褒めの言葉や、差し入れを賜ることがあつた。それだけ組織に煮え湯を飲まれた人が多かつたということなのだろう。有難く受け取りつつ、今日も今日とて事後処理に精を出している。

「いやあ本当、案件の本番は逮捕じやなくて事後処理だよな」

「わかる。刑事ドラマで描かれない部分が一番きつい」

執務室に響くタイプ音。カタカタカタカタ、そろそろ気が狂いそうだ。

作戦だ交渉だよりは頭を使わなくていいので楽と言えば楽なのが、如何せん量が多い。俺と諸伏だけでなく、降谷と風見さんも端末を持ち込んで作業をしている。止まることのない四人分のタイプ音はそこそこ精神を削っていた。

「降谷、珍しいな、誤字あるぞ」

「本当か、すまない。すぐ修正する」

「ああ」

誤字にチェックを入れて降谷に送り返す。その様子に、諸伏が苦笑して口を挟んだ。

「格木つて、事務作業強いよなあ。ミスもないし」

「もともと俺はデスクワークの人間だから。監察官業務だつて仕事の八割は書類だぞ。前の上司はそういうミスにやたら厳しい人だったしな」

ふと、脳裏にあのしかめつ面が浮かんだ。監察官の業務そのものはまだ半人前でもいい、だが誰でも防げるミスはするなど最初に俺に言つたあの人はお元気だろうか。なんだかんだといい人であつたら、心配してくれているかもしれない。こちらが落ち着いたら顔を見せに行きたいものだ。

「ついでに言うと、心底めんどくさかつた仕事をやらずに済んでとて

も気分がいい

思わず本音を漏らすと、三人は揃つて苦笑した。降谷の苦笑だけ少し苦みが強い。またお前はそういうことを、と言わんばかりの表情だ。

「……手柄を取られたも同然だぞ？」

「手柄と心の平穏どっち取る？俺は後者だね」

「……ある意味柊木さんらしいというか」

「あ、風見さんもわかつてきましたね、そうです柊木は合理主義という名のめんどくさがりです」

笑顔のまま諸伏に追加の仕事を送りつける。それに気づいた諸伏はうわっと悲鳴をあげた。この暴君、と呼ばれるがそれがどうした、暴君相手に喧嘩を売る方が悪い。

一番面倒な他国との交渉という仕事を官房長が担つてくれている。これはある意味案件の責任者の仕事なので、これを官房長に任せるとということは官房長がこの案件の最終的な責任を担うということだ。そして案件の手柄というものは、基本的に責任者のものになる。

しかし別に手柄目的でこの案件に飛び込んだわけではない俺としては、はつきり言つてどうでもいいことだつた。合衆国のお偉いさん相手に腹芸やるくらいなら手柄のひとつふたつ喜んで捧げるというのだ。

その交渉の結果がどうなるかはまだわからない。捕まえた組織の構成員がどう裁かれるのかも。だがそれも、俺にとつてはどうでもいいことだ。

俺はただ、俺の手にあるものが守れればそれでいい。

「だいたいボス逮捕の花形であるMr.ブラックを見てみろ、完全なる気疲れでげつそりしてただろうが」

俺がそう付け加えると、三人は確かに……と揃つて遠い目をした。もちろんFBIのリーダーとして交渉の舞台にも立つてゐる彼は、合衆国に背中を蹴つ飛ばされながら官房長と対峙するという地獄を強いられている。あの海千山千の官房長を相手にするというだけで氣の毒なのに、そこに「CIAの暴走」という弱みまであるときた。

CIAの暴走は直接Mr.ブラックに関係しているわけではないが、それでも同じ国に属する組織がやらかした不祥事にかわりはない。官房長のことだからそれも上手く使つてちくちくと彼を苛めていることだろう。本当に気の毒というほかない。

作戦を終えた後、東都に戻ってきたMr.ブラックは、作戦の報告をするよりも先に口を開いた。

『何を言うよりまち、言わせてほしい。……無事でよかつた……!』

FBIの面々も、誰一人としてCIAの企みを知らなかつた。共謀の可能性も考えなかつたわけではないが、その可能性は限りなく低いと判断して思考から消した。俺がミスターの立場なら、間違いなく彼らを巻き込むことはしない。

彼らは彼らの、いや、彼ら「個人」の正義で動く傾向が強いからだ。Mr.ブラックだつて基本的には私情を殺して任務にあたる人ではあるけれど、それでもやはり己自身の正義で動く人であるように思う。だから彼らはきっと、俺たちを殺す作戦に賛同などしない。そんな命令には従わない。他の手はないのかと、最後まで訴え続ける場合によつては己の正義に従つて俺たちに警告をし、守ろうさえするだろう。そんな敵か味方かもわからない不確定な駒は、最初から計算に入れない方がいい。俺ならそう考えるし、きっとミスターもそうだろうと踏んだ。

だからこそ俺は、赤井さんを「こちら側の人間」として計算に入れたのだ。

『彼らは彼らの職務を果たし、俺達は俺達の職務を果たしました。それだけのことです』

『柊木くん、』

『実際、かすり傷ひとつありません』

日本警察、舐めてもらっちゃ困ります。

そう言つて無事を証明するよう両手を開くと、Mr.ブラックは苦笑した。その後ろにいるFBIの面々も、これだからこの人は、と言わんばかりの表情で。

『赤井さんにはいい仕事をして頂きましたし、FBIにどうこうとい

う気持ちはありませんよ。むしろ感謝しています。赤井さん、貴方を信頼して良かった』

『……まさか君の言う信頼がそういう意味だとは思わなかつたぞ』
『諸伏曰く、俺の言う信頼は脅迫と同義らしいです』

違いない、と赤井さんはニビルに口元を歪めた。

あの状況ならこの人は間違なく降谷を守つてくれると確信していた。たとえ合衆国が降谷を殺そうとしても、絶対に彼はその指示に従わない。何せこの人は公より私を優先する命令違反の常習犯なのだから。

『……もし君の信頼を裏切つていたらと思うとゾツとするな』

『やだなあそんな』

俺の信頼を裏切つていたら、なんて。

『せいぜい赤井秀』という存在をFBIごと消すくらいですよ』

場の空気が凍つた。後ろから諸伏のため息が聞こえる。にこにこと笑いながら冗談ですよと続ければ、そういうことにしておこうと赤井さんはゆるく首を振つた。

俺の信頼を裏切るということは、降谷を見捨てるということだ。その時はまあ、俺だってそれなりのことをさせてもらうだろう。

『まあ所詮イフの話です。貴方が降谷を見捨てるはずがないとわかつていましたから。ほら降谷、命を助けてもらつたんだ、ちゃんと礼を言え』

『……』

『構わんよ。降谷くんの口から礼なんて聞いた日には地球が終わつてしまいそうだ』

そう笑う赤井さんに、ぐぬぬと降谷は歯噛みする。やれやれ、この二人が和解する日は遠そ.udと、苦笑した。同じことを考えていたらしいMr.ブラックと目が合い、互いに肩を竦める。

別に仲良くなれとは言わないが、この二人はこの二人でいいライバルになると思うのだが。

『改めて柊木くん、任務は達成したよ』

『ええ。ボスとラムの逮捕、お見事です』

ありがとうございました、と彼は微笑み、そつと右手を差し出された。その手のひらを見て俺は微笑み、そして。

「……あの時本当に終木さんは鬼だと思いました」

回想の最中に口を挟んできたのは胃が痛そうな風見さん。いやだなあ鬼だなんて、もはや今更だろうに。

「俺はナイスだと思った」

「俺は愉快と同情が半々かな」

別に大したことはしていない。差し出された手のひらに、ごつそりと隠し持っていたものを乗せただけだ。とんでもない桁の数字が印刷された、請求書の束を。

『何もう大団円みたいな空気出してるんですか』

大団円は、やつぱり遺恨をなくしてからでしょう？

そういうと、すっとMr・ブラックの頬に冷や汗が伝う。
『いえ、別に違法捜査のことはもういいんですよ、もちろん。書類上貴方がたは正式に捜査協力を依頼したことになつてますし、その辺のことを今更ぐちぐち言うようなことはしません。けど、ちょっとはしあぎすぎましたよね？　たくさんものを壊して損害を与えましたよね？　それ全部誰が頭下げたと思います？　日本警察なんだな、これが。いや本当に今から頭下げろだなんてそんな一銭にもならないことは言いませんよ。でもね、』

払うものは払つて、誠意を見せてもらわないと。

そう続けたあと彼らの顔は、それはそれは見ものだつた。

「鬼だと思いました」

「いやほら、舐められちゃダメだと思つて。一度と日本で好き勝手やる気が起きないように、心だけは折つておこうと思つて」

「鬼だと思いました」

「……風見さん本当に言うようになりましたね」

失礼しました、と眼鏡のブリッジをあげるその人が欠片も悪いと思つてないことはよくわかる。この人俺に遠慮しなくなつたな。いいけど。

「……後から交渉の場で官房長に言われるよりはいいと思うんだけど

なあ

「ゼロならどつちがマシ？ 僕はどつちも嫌だ」

「そりゃあヒロ、どつちも嫌だろ」

「やつた俺官房長と同列だ、ちつとも嬉しくねえ」

はははははと三人で笑う。その水面下では仕事の押し付け合いと
いう攻防が繰り広げられたが、まあ俺に勝てるはずもない。降谷はひ
とつ舌打ちをし、諸伏はまたも顔を引き攣らせた。

「……天敵呼ぶか……？」

「殺すぞ」

降谷の言葉に思わず物騒な言葉が出た。イケメンが壊れてるぞと
諸伏に笑われるが余計なお世話だ。

降谷の言う天敵。いや前から十分に天敵だったのだけれど、それが
明確になつたと言うか。

そう、ベルモットである。

『それで？ まずは言い訳から聞こうかしら』

作戦終了から数日後、俺は降谷と諸伏を連れてベルモットに会いに行
つた。相変わらず例のバーの椅子に座り、ベルモットだけがその手
にグラスを持つて居る。営業時間前なので他に人は居ない。

『何の話ですか？』

『やつぱりN O Cだつたんじゃないの。それに貴方、スコツチね？
リストの写真を見たわよ』

『ああ、そのことですか』

そういえば結局言わないまま作戦に突入したんだつた、と笑つた。
降谷も「降谷」として不敵に笑い、諸伏は誤魔化すように苦笑してい
る。

『嘘はついていませんよ』

『へえ？』

『バーボン、そして安室透は協力者ですが、ここにいるのは俺の同僚で
ある降谷零です。あとスコツチとかいう奴は死んだらしいですが、彼
は諸伏景光と言いまして』

『改めて初めてまして、安室透でもバーボンでもない降谷零だ』

『どーも、もうスコッチじゃない諸伏景光です』

『……それが通用すると思つてゐるの?』

にこ、と笑つて答えない。ベルモットは忌々しそうに眉をひそめた。まあ細かいことは言わないでもらおう、どちらにしろベルモットにとつてはさして関係のないことだ。

『貴方は約束を果たしてくれました。貴方の宝物の身柄は、今後も含めて守り通します。例の薬のデータも宮野志保に渡され、今解毒薬の開発を進めて いるそうですよ』

そう、とベルモットは小さく呟いた。すぐには言わなくても、そう遠くない未来に新一くんは元の身体を取り戻すだろう。そして元通りの、大切な人と共に過ごす平穏な生活に戻るのだ。

『貴方のこれまでの罪も不問とします。好きなように生きればいい。ただし、あくまでも見逃すのはこの国と合衆国における今までの罪についてのみ。その他の国の対処は保証しませんし、どちらにしろ今後貴方が問題行動を起こせば、』

『捕まえるの? この私を?』

不敵に笑う彼女に、俺も笑顔を返した。そんなもの、答えは決まつて いる。

『捕まえますよ。俺たちの手で、必ず』

俺の後ろで、二人も笑つて いるのが気配でわかる。ああ、決して逃がしはしないとも。俺たちの国を荒らす輩は、例外なく捕まえるべき敵なのだから。

彼女はふつと微笑み、右手を差し出した。意外だ、彼女がこういうことを求めてくるとは。うわ正直やめて欲しい無理と心底思つたけれど、ここで断るのも無粋というもの。

手の震えをおさえつけ、握手に応える。きゅつと握られただけでも怖気がたつたというのに、あれ、引っ張られて、え?

『あ、』

『うわ、』

後ろの二人からそんな声が聞こえたのと同時に、彼女の顔が間近に迫り、口元に柔らかい感触。そう、ちょうど頸の左横、小さな黒子が

ある辺り。女性ものの香水がかすかに鼻腔をくすぐり、さらりとプラチナブロンドが流れる音が聞こえた。——え？

『……う、』

視界が揺れる。涙が込み上げ、脚の力が抜けた。胃からものが逆流しようとするのを感じ、必死に口元をおさえつける。背中を支えてくれたのは諸伏だろうか。俺の半歩前で、庇うように立つ降谷の背中が見える。

『あら、本当だつたのね、女性恐怖症！』

愉快そうに笑つた彼女は、まさしく魔女というに相応しい。今の俺にはこの世のどんな化け物より恐ろしい生き物に見える。

確かに俺の事を少々調べればわかることだが、それをここで持ち出してくるとは思わなかつた。

『美人のキスで卒倒なんてとんだバンビね？ 可愛いじゃない』

『……ク、ソババア……！』

『あーら言うわね、次は唇にキスが欲しいのかしら？』

『その顔で俺の吐瀉物を受け止めたいと？ とんだ悪趣味だな！』

女性に対してこんな口を聞いたのは生まれて初めてかもしない。だが構わない、この悪趣味なクソババアはたつた今俺にとつて人生の天敵になつた。その罪を不問にすると言つた過去の俺を殴つてやつた。ムショニに叩き込んだ方が絶対に世のためで俺のためだ。

『ふふ、唇へのキスは再会の挨拶にとつておくことにするわね』

『せつたいにもうあわないにほんからでてけくそばばあ』

『柊木、どうどう、口が回つてないぞ』

『……失神しないだけマシになつたな、柊木』

諸伏はともかく、本気で感心したように言う降谷、てめーは後で殴る。何でお前はそう、たまに変なところで天然な台詞をかますのだろうか。

涙目の俺をくすくすと笑いながら、美しくも性悪な魔女はするりと背を向ける。

『グツドランク、可愛いバンビたち』

そう言つて彼女は、振り向くことなく去つて行つた。コツコツと品

良くヒールの音を響かせて、颯爽と。

その背を見送った俺達はとりあえず。

『……お前らもバンビだつてよ』

『嘘だろ……』

『俺は童顔じゃない!』

そんな、彼女との別れだつた。できれば本当にもう会いたくないが、何となく彼女の連絡先を消せずにいる。いや本当にもう絶対に会いたくないのだが。

そんな思い出したくもない回想に胃を痛めていると、唐突にノックの音が響く。反射的にはい、と返事をすると、入ってきたのは案件の責任者になつたその人だつた。

「官房長……！」

ざつと全員が立ち上がり敬礼をする。楽にして、と言われて右手を下ろした。

「一応、この件も片付いてきたから話をしておこうと思つてね。事後処理はどう？」

「進捗で言うなら七割といったところです」

「そう、それなら問題ないかな」

問題ない、その言葉に少しだけ眉をひそめるが、官房長は特に気にした風もなく言葉を続けた。世間話でもするように、声の調子は全く変わらない。

「合衆国との交渉も大筋は合意が得られてね。まあ細かいことは省くけど、日本警察としてはそう悪くない落とし所に落ち着いたと僕は考えています。君がうるさかつた協力者たちについても、他国に口を出されることはありません」

「ありがとうございます」

「ただし」

きた、と思わず身構える。約束を反故されるとは思っていないが、何かしらの条件を出されるとは思つていた。下手なことは言えない。少し身構えて官房長を見た。

「そんなに構えないでよ。僕だつて鬼じやありません、そんなにひど

いことを要求するつもりはありませんよ」「……」

「君、結構顔が正直だね。……宮野志保さんには、どこか国立の研究所に所属してもらえるよう伝えといってくれる？」

研究内容は問わないし、別に住み込みで研究しろとも言わないらしい。

条件としては悪くはないが、何せ相手は古狸。一応と思い念を押しておく。

「所属さえすればいいんですね？」

「うん」

「彼女の行動や交友を制限するようなことは？」

「そんなことしたら君たち怒るでしょ」

当たり前だ。俺はもちろん、彼女に対しても思っているところが多大にあるらしい降谷が決して黙つていなかろう。

そつと降谷に目をやると、目線が交わる。こくりと降谷が頷くのを確認して、俺は官房長に目線を戻した。

「わかりました。そのように」

「よろしく。あとは君たちについてだけど」

ぐるり、と官房長は改めて俺たちを見渡した。

「正式なことはもう少し先になるけど、まあ大きい案件を片付けてくれたからね。それぞれ階級はひとつずつ昇進。降谷くん、君は課長補佐あたりのポストで、前線よりは人を動かす立場に行つてもらうから

「！　はい！」

「風見くんは引き続きゼロとの繋ぎ役」「はい！」

「諸伏くん、君もサポート側ね。柊木くんの補佐役、評価されていますよ」

「ありがとうございます！」

「それで、柊木くん」

はい、と答えた。何で俺一番最後、と少し首を捻りつつ、腹の底を

読ませてくれない狸と向かい合った。

「君の今後についてはね、それは揉めました。頭使える人間はどこも足りてないからね。人気者だよ、君」

「……はあ、光栄です」

「困っちゃつたから、とりあえず僕が一番困つてることに行つてもらうことになりました」

つまり、また異動か。

そう思つたとき、心の中の何かがきしりと音を立てる。——あれ、なんだ、これ。

官房長はそのままの調子で続けた。

「ちょっと監察官戻つて、警視庁の掃除をしてきてくれる?」

「……はい?」

「君がいなくなつたあと、また叩けば埃がでる輩が大きい顔をするようになつてね。大河内くんたちも頑張つてくれてるんだけど、人手が足りないらしくて」

それも、どんな妨害にも屈せず、あらゆる不正を暴き立てて上層にも平氣で喧嘩を売つちやうような問題児が足りないと。

官房長の言葉に一瞬考えた。もしかしなくともそれは俺のことなのだろうか。そつと俺以外の三人が視線を外す。お前ら笑いを堪えてるのバレてるからな。

「僕も、警察官の不正には思うところがないわけではなくてね。彼らがいるとやりにくいうことがたくさんあるんですよ。だからちよつと片付けをお願いします」

「部屋の掃除のように言わないんで欲しいんですけど」

「君にとつては大して変わらないんじゃない?」

この人、俺をなんだ。さらに言い返しそうになるのをぐつと抑えて、はい、と頷いた。どうせ人事に口を出す権利なんか俺にはない。もうなるようになればいい。

「数年である程度綺麗にしてね。またすぐ異動になるかもしれない

し」

「……というと?」

「君、目立つし有名になつちやつたから。どこかの人事が動く度に引き抜きを虎視眈々と狙われるよ。公安はもちろんだけど、刑事部とかもね」

なるほど、便利屋と認識されたらしい。内心で遠い目をする。どの部署に配属されようがベストを尽くすだけだが、なんだらうこの複雑な気持ち。いや、職務はちゃんと果たすけども。

「とりあえず、来月付で戻すから。それまでに後処理片付けてね」「はい」

来月なら事後処理もぎりぎり何とかなるだろう。改めて敬礼を返すと、官房長はよろしく、と一言だけ置いて去つて行つた。

一気に執務室の空気が緩み、それぞれ自分の椅子に座り込む。俺の椅子もぎしりと音を立てた。息を吐く。身体の力が抜ける。ああ、俺もう公安じゃなくなるのか。

「……これはとりあえず昇進を喜ぶべき？」

「まあ、そうだな。おめでとう、風見、ヒロも」

「ありがとうございます降谷さん。そちらこそ課長補佐とはおめでたいですね」

「何がいいんだ風見、現場に出られなくなる」

「お前は柊木を見習つて人を使うことを覚えろよ。……柊木？」

どこか遠くに聞こえていた三人の会話。諸伏に名前を呼ばれてようやく、現実に引き戻される。

「え？」

大きな感情のうねりが、静かに襲いかかる。頬に、冷たい水が流れるのでを感じた。

* * *

柊木さんの陶器のような頬に、涙が伝つた。当の本人はその事実に気づいていないのか、不思議そうな顔をしている。俺たちの視線に気づき頬に手をやつて、ようやく自覚したらしい。

気づいた瞬間に何かが溢れ出たのか、顔を歪めて思い切り机を殴つ

た。

「ひ、柊木？」

諸伏の叫びなど聞こえていないかのように、柊木さんはああくそ、と悪態をつき頭を搔きむしる。ちらりと見えたその右手は赤く腫れていた。

「何どうした監察官戻りたくなかつたか？」

「うるせえそこはどうでもいいんだよ！」

「落ち着け柊木」

あわあわと諸伏が駆け寄り、思わずと言つたように降谷さんも立ち上がる。俺はどうすることもできず、腰を浮かせたところで固まつた。

「俺は、……俺は！」

「柊木？」

自分でも混乱しているらしい柊木さんの口からは、次の言葉が出てこない。言葉を探すように、涙で濡れた瞳が忙しく動く。

この人がこんな風に取り乱すところは初めて見た。自分に拳銃を向けられた時だつて平気な顔をしていたと聞いていたのに、いつたい何が琴線に触れたというのか。

「……くやしい、んだ」

絞り出した言葉は、あまりにも弱々しい。ひくり、と小さい嗚咽が追いかけてくる。

悔しい、と彼は言うが腑に落ちない。柊木さんは十二分にその職務を果たし、完全な勝利を掴んだはずだ。降谷さんや諸伏も同じことを考えたのか、怪訝な顔をしている。

「……何が悔しいんだ。完全な勝利だつただろう」

戸惑つたように降谷さんが言うと、柊木さんはきっと降谷さんを睨みつける。その勢いにおされたのか、降谷さんは珍しくぎくりと肩を揺らした。

「お前を危険に晒した！」

「……は？」

「お前を凹にした！ 他にもたくさん、やつちやいけないことを、」

「待て待て柊木、」

「俺は！」

お前たちを、完璧に守りたかったんだ！

そう叫んだ柊木さんは、まるで駄々をこねる子どものようだ。

「手段を選ばず完全勝利なんか当たり前なんだよちくしょう！ だつて何やつたつていいし反則とかねえんだからな！ 僕は、『手段を選んだ上で』完全勝利に繋げたかつたんだ！ 僕が俺に許せる方法の中で策を考え、そんで完璧に勝ちたかつたんだよ！ 僕ならそれができたはずなんだ！」

——できなかつたけど。

ズビ、と鼻を啜りながら彼は傲慢を言葉に乗せる。

「……は、」

思わず、息の音が漏れた。

何を唐突に泣き出したのかと思つたら、全くこの人は。 そう続けてしまいそうな言葉を呑み込む。 しかし口の端に浮かんだ苦笑までは呑み込めない。

その気持ちはどうやらふたりも同じらしく、俺よりもずつとこの人を知る同期で悪友のふたりも仕方ないなど言いたげな顔で苦笑していた。

「お前、あいつかわらず馬鹿だなあ」

「ああ、それも特大のな。全く、俺よりずっと傲慢で自信家だ」

「うつせえ実力が伴つてりやいいんだ!!」

ぐすぐすと涙を流す彼は、——何と表現したらいいのだろう、本当にただの子どもに見えた。 純粹で、傲慢な綺麗事を吐き、俺ならそれができたはずだと本気で悔しがるその様は、ひどく滑稽で人間的だ。

かみさまのように多くを思い通りに転がしてきたこの人の、こんな姿が拌めるとは。

「風見さんまで笑つて！ ……ああくそ、諸伏！」

「つと」

スーツのポケットを探つた柊木さんは、そのまま小さな何かを諸伏

の顔目がけて投げつける。すんでのところでキヤツチした諸伏は、掴んだ手を開いて呟いた。

「……ライター？」

「それはお前に預ける！ いいか、やるんでも返すんでもねえ、『預ける』からな！ お前の判断で必要だとthoughtたら俺に返せ！ そしたら、そんときは、」

またぐつと息を飲み込んで、傲慢な子どもは勢いのままに叫んだ。
「そんときは絶対、誰のことも危険に晒さない、無関係なやつを巻き込んだりしない、安心安全で効率の良い、労力を最低限ですます作戦考えてやる！ いいか、絶対に誰も傷つけたりしねえし、その可能性だつて許さねえ作戦考えてやるからな！！」

高らかで優しい叫びは、執務室に吸い込まれて消えた。ぜいぜいと肩で息をする柊木さんに、堪えきれなくなつた降谷さんと諸伏が同時に噴き出す。

「あつお前ら、何を笑つて、わ、」

「よーしよしよーし、お前は相変わらず可愛いなあ。知つてた知つてた、お前しつかりしてゐるのに一番精神年齢低くて弟氣質なんだよなあ」

「だれが、ぶ、こら、やめ、」

わしゃわしゃと両手で上司の頭を撫でる諸伏。その顔はにやけきつていて、全く、公安らしさの欠片もない。

降谷さんもやれやれという様子で彼の横に立ち、ぽんぽんとその肩を叩いた。

「次も期待してるので、指揮官殿」

「何で上からなんだよ、こら、いい加減やめろ諸伏！」

柊木さんは楽しそうに笑う諸伏の手を払い除ける。完全に拗ねた子どもといふか、むしろ三人まとめてじやれ合う小動物のよう。そういえばこの三人は全員歳下なのだと唐突に思い出した。

何だかおかしくなつてきた俺は、柊木さんに近づいてハンカチを差し出した。

「ひどい顔してますよ。三歳の子どもよりひどい泣き方だ」

「本当に言うようになりましたね風見さん」

いいけど、と盛大に拗ねてしまつた彼は、俺の愛用のハンカチを荒っぽく奪い取る。涙はともかく鼻をかむのは勘弁して頂きたいのだが、聞いてもらえないだろうか。

この廊下を歩くのも久しぶりだつた。

無機質な廊下は冷えていて、俺の足音がよく響く。もう春も近いとはいえ日当たりの悪いそこは冷気が強い。少し腕をさすりながら慣れた廊下を進んだ。目当ての部屋に到着し、軽くノックをして中に入る。

「お久しぶりです、大河内さん」

「……君か」

変わらないしかめつ面で俺を迎えたその人は、端末に向けていた目をこちらに向けた。キーボードから手を離す。仕事の邪魔をしてしまつただろうか、申し訳ない。

「来週からこちらに戻るということで、ご挨拶に。行くのも急なら戻つてくるのも急で申し訳ありません」

「君のせいではないだろう。……君は表向き、法務省に出向していることになつていて。話をあわせておきなさい」

「法務省。わかりました」

法律の勉強してましたとでも言えばいいのだろうか。少し自分で笑いつつ、頷いた。

そこで改めて大河内さんは俺を見つめ、瘦せたな、と呟いた。
「何分激務でして。すぐ元に戻しますよ」

「まあ、体調に問題がないのならいいが、疲労は蓄積しているだろう」
そう言つて差し出された書類には、「有給届」の文字。相変わらず怖い顔してクソ甘いというか、変なところで気をつかう人だ。

「一週間ほど休みをとりたまえ」

「しかし、」

「こちらも受け入れの体勢が整っていない。来週すぐに来られても引き継げる案件がないから手持無沙汰になるだけだ。それに」

デスクにあつたカレンダーの「ある日付」を、とんとんと指で叩く。
気づいていないとでも思つていたのか、とでも言いたげに睨まれた。
「君は毎年この日、有休を取つていただろう」

「……よく覚えておられますね」

「バレンタインとこの日くらいだからな、君が何としても休みを取ろうとするのは」

「ははは……」

「その日も含めて一週間、それだけあれば疲労もいくらか取れるだろう。そのあとはこの数か月を取り戻すつもりで働いてもらう。そのつもりでいるように」

もちろんです、と敬礼を返した。そんな俺を見て、大河内さんは満足そうに頷く。そしてさつと立ち上がって、俺の前に立つた。ぽん、と肩を緩くたたかれる。

「詳細は聞いていないが、明確な成果を残したことだけは聞いている。……よくやった」

その珍しいお褒めの言葉がくすぐつた。へへへと笑うと大河内さんも少しだけ唇の端を上げた。

改めてまっすぐに大河内さんの目を見て、言う。

「今後とも、**ご指導**、鞭撻のほど、よろしくお願ひいたします」

「ああ。——期待している」

*

とりあえず挨拶を済ませ、さてどうするかと警視庁の廊下を歩く。顔だけ知ってる顔見知りに何人か声をかけられたが、適当に流した。この調子だとおそらく明日には俺が本庁に戻っていることを知られているだろう。なんとまあ、本当に顔が売れてしまつたものだ。せつかだからあの人にも挨拶していくと決めたところで、廊下の先に見知った顔が見えた。向こうもまた、俺の顔を見てぴたりと動きを止め、同時に敬礼する。俺は苦笑し、その二人に近寄った。

「お久しぶりですね、佐藤さん、高木さん」

「お、お久しぶりです！」

「しゅ、出向中だと伺つておりましたが……！」

「来週からまた監察官に復帰しますので、**ご挨拶**に」

お疲れ様です、と揃つて言われてまた苦笑。そういうれば虐めるだけ虐めて、こここのリカバリーはしていなかつたと今更ながら思い至る。

伊達と松田にもしつかり締め上げられたらしい彼らは、その後きちんと弁えて職務に当たつていると聞いていた。

「……」活躍の噂は伺っていますよ

二人はぴくりと肩を揺らす。

「日暮警部や他の皆さんにもどうぞよろしくお伝えください」

なるべく柔らかい声でそう言うと、二人は戸惑つたように、そして少し嬉しそうに敬礼した。それにひとつ微笑んで、彼らの前を通り過ぎる。

少々の失敗なんて誰にもあることで、問題はそれを如何に反省し、今後に繋げていくかだ。彼らが彼らなりの答えを出して職務にあたつているというのなら、それで十分。捜査一課を締め上げるなんて面倒なことは極力したくないのだ、反省してくれてよかつた。

少し通り過ぎた先で、背後からよかつたと小さく零す声が聞こえる。俺もそう思うよ、と内心で呟き、目当ての小部屋へ足を進めた。

*

お久しぶりです、と言つて入つたその部屋の二人は、相変わらず暇なようだつた。

紅茶を淹れていたらしいその人に、君も飲みますか、と尋ねられる。紅茶はあまり嗜まないが、せつかくなので頂いておこう。

「ろくに説明もできなかつたのに、官房長に連絡を取つて頂いてありがとうございましたがどうぞ」

「いえいえ。お役に立てたなら何よりです」

「助かりました。本当に」

香りのよい紅茶を受け取りながらそう言うと、杉下さんはにつっこりと微笑んでくれた。その後ろで神戸さんが苦笑している。

官房長を巻き込まなきやいけないような案件に関わつてたんだ、とぼそりと言われ、誤魔化すように手を開いた。ええ、言えないけど大

変だったんですね本当に。

「来週から監察官復帰だつて？」

「ええ。また大河内さんの下で働くことになります」

「腕が鳴る？」

「そりやもう。聞けばまた大きな顔してる方がいるらしいじゃないですか」

監察官として頑張らないといけませんよね、と笑顔で言うと、神戸さんも愉快そうに笑つた。変わつていなくて何より、とその笑顔が言つている気がした。

「……ところで柊木さん」

「はい？」

「以前からお伺いしたかつたことがあります。この機会にひとつ、よろしいでしようか」

その真摯な口調に、思わずカップをおいて姿勢を正す。何となく、聞かれることはわかつていた。その視線にひとつ苦笑をして、こちらから口を開く。

「……俺が警察官を志した理由、ですか？」

「いや。先に言わせてしました」

かつて大河内さんに同じことを尋ねられ、適当に言葉を濁したこともあった。同期たちも聞いたそうにしていたが、俺に気をつかつて聞こうとはしなかつた。

警察の不正の被害を受けながら、それでも警察官を志した理由。きっと、杉下さんもずっと気になつていたのだろう。

「——かつて俺が被害者となつた誘拐事件は、犯人が有力な警察官僚の娘であつたために証拠はすべて握りつぶされ、事件のあつた事実そのものが隠蔽されました。俺は誘拐事件の被害者ではなく、人騒がせな家出少年として扱われた」

えつと神戸さんが息を呑む。そういうえば誘拐事件のことは話しても、事件の隠蔽については話していなかつたかもしれない。俺としても警察組織の中で大きな声で言えることではなかつた。これを喧伝していたら、とつぐに俺も警察上層に潰されていただろう。

「俺の父が警察官だつたことも大きかつたんでしょう。男手一つで俺を育ててくれていた父は、警察上層からの圧力に逆らえなかつた。……父の涙を見たのは、あの時が最初で最後です」

幼い俺を抱きしめて、泣きながら謝り続ける父。幼き故にその理由も俺にはわからなかつたけれど、いつも笑顔で強いひとだと思つていた父のそんな姿は強く印象に残つていて、今でも鮮明に思い出すことができる。

「杉下さんも事件の後に一度俺に会いに来てくれましたよね。そして、頭を下してくれた。あの時は本当に驚いたんですよ、俺にはあんなに優しくしてくれたひとが、悔しさ全開、怒り心頭な顔してて」

「それは失礼しました」

杉下さんは緩く苦笑するが、本当にあの時の杉下さんは怖かつた。俺に対して怒つているわけではないとわかつていても委縮してしまうくらいには。

あの優しい手と優しい声の人気がこんな顔をするのかと、本当にびっくりしたことを覚えている。

「少し後になつて、ようやくその意味を理解しました。あの事件がなかつたことにされたという事実、そして父や杉下さんの言葉の理由も。それで……何て言うんでしようね、俺は……知りたいと、思いました」

どうして、警察官なのに正しいことができないのか。

どうして、正義を執行する機関において正義が行われないのか。

どうして、正しいことをしたはずのひとたちが苦しまなければならぬのか。

今にして思う、俺は本当にただ知りたかつたのだと。ずっと俺は警察を——いや、警察に身を置きながら正義を行わない人々を恨んでいるのだと思つていた。だから復讐に行くのだと、中身のない復讐心を秘めていた。だけど、その復讐心もしつかりと見つめてみれば中はからっぽ、そこにあつたのはただの疑問。

俺は多分、最初から恨んでなんかいなかつた。憎んでなんかいなかつた。復讐なんてめんどくさいこと考えてもいなかつた。

「ただ、正義がどんなものなのか知りたかった」

正義を謳いながらそれを踏みにじつた警察に行けば、何か見えてくるものがあるんじやないかと思つた。他の人に言わせれば、多分「それだけ?」と言われてしまうような理由。でも俺は、きっと本当にそのためだけに、警察官を志した。

——今気づいた、俺が新一くんに何となく厳しく言えないのは、彼の中に俺と似たものを見たからかもしれない。

真実を求め、そのために突っ走つてしまう彼。

正義を求め、そのためこれまでの人生を費してきた俺。

求めるものや手段の違いこそあれど、他が見えてないという意味では同じというか、むしろ俺のほうが極端かもしれない。

そんな自分に少々苦笑しつつ、俺は言葉を続けた。

「……結局今でもよくわからないんですけどね。警察官としてあるまじきとは思いますが、まあ定年くらいまでに何か見つかるといいなと思っています」

「……なるほど」

「すいません、ちゃんとした答えを返せなくて」

とんでもありません、と杉下さんはどこか穏やかな顔をしている。今の答えで腑に落ちてくれたのだろうか。俺ですらわかつていないうのに、さすが杉下さんは頭のいい人だ。

「立ち入った質問をしました。申し訳ありません」

「いえ。……杉下さん、覚えてますか?」

事件の後、頭を下げに来てくれた貴方が俺に言つたこと。

そう言うと、杉下さんはひとつ瞬きをして、ええ、と少し言いにくそうに頷いた。その様子にふふっと笑い、あの時の杉下さんの言葉を譲りじてみせた。

『今は意味が分からなくても構いません。けれど、どうか覚えていてください。世の中は理不尽です。どれだけ努力を重ねても、どうにもならないことはあります。しかし、努力次第で、変わることも確かにあります。それだけはどうか、忘れないでください』

この言葉を聞いたときは、よく意味が分からなかつた。だが幼心に

忘れてはいけないのだと思い、何度も反芻した。その結果、今でもさらりと譲んじられるくらい、俺の深いところに刻まれる言葉になつている。

「この言葉の意味を理解したとき、——警察官になることを決めたとき、俺は決めたんです。俺が飛び込もうとしている世界がどれだけ面倒でどれだけ理不尽であつたとしても、その中で生き残れる人間になろうと。そのためはずつと、できる努力は片つ端からしてきたつもりでいます」

理不尽に立ち向かえるような。理不尽を受け流せるような。俺が俺らしい今まで、突き進んでいけるだけの能力を手に入れる、そのためだけに頑張つてきた。

「だから、今の俺があるのは杉下さんのおかげなんです。本当はずつとそう言いたかったんですけど、機会を逃し続けて今になつてしましました。——ありがとうございました。世の中やこの組織がどれだけ理不尽だろうが、俺は闘い抜いてみせます。絶対に」

深く深く頭を下げた。見えないところから、ぐつと息を呑む音が聞こえる。頭をあげてください、と小さな声が落ちる。

そつと頭を上げると、杉下さんは変わらない笑顔で微笑んでいた。「貴方なら、きっとできます。いいえ、きっとではありますね。——一間違いく、できます」

心から敬愛するその人の言葉に笑顔を返し、俺はきつちりと敬礼をして見せた。

* * *

「これはもう怒つていいと思うんだよね」

佐藤ちゃんや高木君には顔見せたくせに何で俺たちのところには寄らないんだと、いの一番に俺たちに会いに来て頭下げるべきじやないのかと、さすがの萩原も頭にきているようだつた。松田の運転する車という狭い密室でわめくなと言いつつも、内心では俺も大きく頷く。

そこの廊下でお会いしましたと興奮する高木に聞いて初めて、柊木が監察官として戻つてくることを知つた。その当人はどこに行つたと三人で高木を締め上げにかかつたところで特命係の神戸さんが通りすがり、彼ならさつき特命係に寄つてつたよの一言。

刑事部のすぐ近くに来てんじやねえかと三人そろつて憤慨したタイミングで送られてきたのが、頑張つてはいるがまだまだ人付き合いの経験値が足りない馬鹿からのメッセージ。

『今日、うち来れる?』

そういう経緯で俺たちは片つ端から仕事を片づけ、こうして三人で柊木の家に向かっているというわけである。

「とりあえず出会い頭に一発殴る」

眉間にくつきりとしわを寄せた松田の物騒な決心に、さすがにやめろとは言えなかつた。本当にまともに顔を見るのはどれだけぶりだろう。さんざん心配させた拳句、意味深なメッセージだけ投げて協力までさせたのだ。その案件が終わつたのなら、せめてまず頭を下げにくるべきだらうと思う。

柊木の住むマンションに到着し、足早にその部屋へと向かう。部屋の前のインターホンを押し、返事も待たずに乗り込んだ。案の定鍵はかかっていない。見慣れた靴があつたので降谷と諸伏も来ているのだろう。リビングにつながるドアを開けると、そこに座つていたのは数か月ぶりのイケメン。

そいつは俺たちを確認すると綺麗な所作で座りなおし、そつと床に手をついて頭を下げた。

「ろくに説明もせずにこき使つてごめんなさい。本当に助かりましたありがとう」

それはそれは、ひどく折り目正しい土下座だつた。出鼻をくじかれた俺たちはもはや脱力してその場にしやがみ込む。

「めっちゃ素直……」

「知つてた……」

「さすが柊木……」

怒るとか殴るとか言う気力を奪われた俺たちを見て、柊木の両側に

座っていたそいつらも面白そうに笑つた。いやお前らも土下座する側だろーが何笑つてんだと思う。

「久しぶりだな」

「悪いね、終わるまで随分かかっちゃつて」

すがすがしい顔をした一人の顔に、もはや陰りも険しい色もなく。本当に片づけたんだなど、一目見てわかるような笑顔だつた。特に降谷の何も考えてない顔というのは、随分と久しぶりに見たような気がする。

「……松木、来週から本庁で監察官復帰だつて？」

「ん？　ああ。でも来週は大河内さんの温情で休みもらつたから、正しくは再来週からだな」

頭を下げたまま言う松木に、いい加減頭あげればと萩原が言うが、意外とこの姿勢は楽とか言つて松木は頭をあげようとしない。よく見ればゆつたりと脱力してストレッチのような体勢になつている。こいつ土下座の意味知つてゐるのだろうか。

「……本当に全部終わつたのか？」

怒るのも馬鹿らしくなつてそう言うと、ああ、と降谷が頷く。

「事後処理も含めてほぼ終わり。残つてゐるのは他国との交渉部分で、そこは上の仕事だからな。俺たちがやるべき仕事はとりあえず終わつた」

「その上で昇進と異動だよ。俺たち一個ずつ上がつたんだ。悪いな三人とも、もう俺の方が上だぞ」

「えつそれはおめでとう」

「ありがとう。俺も、これで現場に出ることは減るだらうな」

やれやれと降谷が溜息をついているが、さすがにお前はそろそろ落ち着いた方がいいと思う。降谷は実働として優秀だが、何でも自分でこなしてしまいがちだ。下を育てていくためにも、人を動かすことを覚えていくべきだろう。

「ん？　じゃあ諸伏、お前もう普通に外出できんのか？」

思いついたように松田が聞くと、諸伏はそれは嬉しそうに笑つた。

「ああ！　もちろん多少の警戒は必要だけど、相手してた奴らもいな

くなつたし、俺も今後は潜入よりはサポートメインの仕事になるから顔も名前も隠す必要がない。いやあ自由に外歩けるつていうのはいいな！」

「そりやあ良かつたなあ！ つまり、外でお前らの名前を大声で呼んでもよくなつたわけだ？」

俺がそう言うと、二人はにつと笑う。

つまりまた、六人で気兼ねなく外出ができるようになつたというわけだ。こいつらがどれだけプライベートを犠牲にして職務に当たつていたのかよく知つていてるだけに、その報告は嬉しかつた。

今後は暇を見つけて、こいつらも外に連れ出すようにしよう。陽の光を浴びながら呑気に笑うこいつらの顔をもう一度見られるというのなら、それは本当に嬉しいことだ。

「じゃあいいタイミングだしそろそろ花見とか……ん？ 旭ちゃん？」

頭を下げたまま反応を返さない柊木に、そつと萩原が近寄る。降谷と諸伏もまさか、という顔で柊木の様子を伺つた。聞こえてきたのは安らかな寝息、そしてゆつたりと上下しているその背中。

「……え、柊木？」

改めて諸伏がその呼吸を確認したが、そのまま諦めたように首を振る。

残念ですが、爆睡ですつて手遅れみたいな言い方すんなそいつ生きてんだろうが、と言おうとしたところで盛大に萩原が噴き出した。

「ちよ、マジで寝てんの？ その姿勢で？ 何それごめん寝じやんさすが旭ちゃん素で可愛い！」

確かにすげえなこいつ、と松田はさつとスマホを取り出して連写する。

あの柊木のごめん寝画像なんて貴重も貴重というか、よし、俺も撮ろう。そしてナタリーに見せて、こんな奴なんだと一緒に笑おう。さつとスマホを取り出して連写した。悪いな柊木、でも話の途中で寝る方が悪い。

「……まあ確かにここ数か月めちゃくちゃな生活送つてたからな

……

「寝落ちも無理ない、か。とりあえずベッドに運んでやろう。ちょうどいい、ちょっと柊木に秘密でお前らに話したい」ともあつたんだ」秘密で、と聞き返すが、柊木を運んだら相談させてくれ、と降谷が笑う。どうやら悪い話ではなさそうだ。公安組が柊木を寝室へと運んでいく。その途中で萩原があつと声を出し、近くにあつたチエストの引き出しを遠慮なく開けた。

「えーと、確かこの辺に……」

「お前いくら勝手知つたる家でも引き出し普通に開けんなよ……」

「旭ちゃんはそんなこと気にしませんー。あ、あつた」

萩原が取り出したのは、黒マジック。まさか、と呆れと悪戯心が同時に湧き上がる。

「話の途中で寝る方が悪くない?」

そのときの萩原の笑顔は、ここ数か月で一番と言つて良いくらい輝いていた。

ふと、目が覚める。部屋が暗い。慣れたベッドで寝ていたようだが、ベッドに入つた記憶がなかつた。確かに数か月ぶりに六人で揃つたような気がしていたのだが、夢だつたのだろうか。

時間を確認しようとスマホを探す。枕元にあつたそれを手に取ると、メッセージが来ていた。萩原からのようだが、画像が添付されている。働かない頭を無理やり動かしながら、メッセージをタップした。

画面いっぱいに表示されたそれを見て、反射的に洗面所に駆け込んだ。

「……うわつマジでやりやがった……」

左頬いっぱいに大きく豪快に書かれた「おかーり！」。

右頬には繋がりがちで勢いのある「お疲れさん」。

額には角ばつた小さな文字で「遅いんだよ」。

そして届いた画像では、落書きされた顔で爆睡している俺のまわりで馬鹿三人がピースをしていた。全く、やつてくれる。ただただおかしくなつて、鏡の前でひとり笑つた。帰ってきたんだなど、その文字に触れて思う。

触れた瞬間に、気づいた。

「……つてこれ油性じやねえか何してくれんだあいつらあああああ！」

よく晴れた空に流れる春一番。午前に吹く風はまだ少し冷たいが、今日はいい天気になると天気予報では言っていた。もう少し日が高くなる頃には暖かくなり、春の訪れを実感させてくれるだろう。

俺は朝早く起きて拵えたお弁当を片手に下げて、朝の挨拶をしにそこへ訪れていた。

「……おはよう」

家からそう遠くないところにある墓地で二人は眠っている。この日だけは毎年必ず墓参りをしている。父さんが生きていたときから、一度も欠かしたことはない。

母さんは、あまり身体の強いひとではなかつたらしい。俺を身ごもつたときも、出産による危険を医者から伝えられていた。それでも産みたいと強く押し通し、俺を産んでくれたと聞いている。俺の誕生と引き換えに、母さんは亡くなつた。

それから父さんは男手ひとつで俺を育ててくれた。俺の知る限り、再婚を考えたことはなかつたと思う。どんなに忙しくても必ずこの日にはここに連れてきてくれて、旭はこんなにでつかくなつたぞ、とお墓に報告をしていた。

外面ばかりいいくせに本当は口より先に手が出るタイプだつた父さんは、そりやあ何度も殴り合いの喧嘩をしたけれど、それでもやつぱり大切に育ててくれたと思う。俺がひとりで無茶をしようとするとき、自分で責任も取れねえ未成年^{ガキ}の分際で勝手をするなどよく拳骨を食らつたものだ。

関西の大学に行つて父さんの元を離れても、ちゃんと気にかけてくれていた。死ぬほど忙しいくせに、と悪態をつきつつも、そんな父さんが好きだつたし尊敬もしていたと思う。

俺の二十歳の誕生日が近くなつて、せつかくだから晩酌するかと誘われたときは嬉しかつた。ちゃんと自分の責任を自分で持てるようになつて、ようやく父さんと対等に話ができるのだと。

俺は自分の誕生日のその日、新幹線に飛び込んで久しぶりに家に

帰つた。けど、何時になつても父さんは帰つてこなかつた。

殉職されました、という知らせを受けたときはあまり覚えていない。けれど、哀しいとか寂しいとかそれ以上に、父さんらしいと思つたとは誰にも言えなかつた。

対象を守る仕事に誇りを持つていた。それに、子どもは大人に守られるべきという考え方の人だつた。だから、俺が未成年でなくなつたらから、仕事に殉じ、母さんに会いに行つたのだと。

父さんのパスケースにはいつも母さんの写真が入つていた。俺が笑うと、笑い方が一緒だと少し寂しそうに言つた。父さんは、確かに母さんを愛していた。それをよく知つてからかもしない。父さんにとって、殉職は誇りを貫いた結果であり、母さんとの再会と同義なのだと、そう思えてならなかつた。

泣きもしねえでしつかり挨拶して偉いじやねえか、と葬儀のあと先生に背中を叩かれたけれど、そう思つていたからきっと独りになつても正氣でいられたのだと思う。

——父さんは、やるべきことをやつて母さんに会いに行つたのだ。

「……父さんが死んで、十年か」

今日、俺は誕生日を迎えた。俺にとつては俺が生まれた日以上に、二人が亡くなつた日だ。

「掃除は昨日済ませたからいいよな。お花もお線香もちやんとやつたし」

今日という日に予定が入つてしまつたから、昨日のうちにやるべきことはやつてしまつた。だから今日は、顔見せだけ。作法的にダメなのかもしれないがそこは許してほしい、毎年來てるだけ褒めてくれ。

「今日さ、予定が入つちゃつたんだよ。悪いけどそつち優先させていいだろ?」

だつて、友達との約束なんだ。

まるで言い訳をする小学生のような物言いに、自分で笑つた。本当に小学生だつたときは友達もいなかつたから、こんなこと言うのは初めてだ。三十路にして初つて自分で笑うわ、本当に何言つてんだろ

う、俺。

「なあ、父さん、母さん、」

俺、父さんが大反対した警察官になつちやつたけど。警察つて本つ當にクソめんどくせえ組織だなと思うけれど。それでも俺は警察官になつて良かつたし、今後も絶対に後悔なんてしないと思う。たとえ今後、何が起こつたとしても。――だつて、

「俺、友達を守れたんだ」

少々納得の行かない部分はあるが、それでも皆、五体満足で無傷だ。「反省点は多大にあるけど、結果だけ見ればとりあえず及第点だろ」

そう言うと風が強く吹き、それで満足すんな馬鹿野郎と父さんに頭を叩かれた気がした。相変わらず手厳しい。しかし、その通りだ。

「次はもつと上手くやってみせるよ」

そう言うと今度は優しい風が吹き、知らない手に頭を撫でられた気がした。まるで頑張つて、と言うように。

俺はふ、と微笑んで、手に提げていた弁当入りのバッグを握り直す。「じゃ、ちょっと遊びに行つてくるよ。来年、また来るな」

いつてきますと言つて両親に背を向ける。背中を押してくれた風に紛れ、誰かの声が聞こえたような気がしたが、――まあ、気のせいだろう。

そんな自分に苦笑し、俺は振り向かずに足を進めた。

*

「お、旭ちゃんこつちこつちー！」

「遅かつたな」

「悪い悪い」

時間に少し遅れてしまつたせいか、俺以外の五人はとつぐに集まつていた。

近くの公園の、茂みをいくつか抜けた場所。そこには大きな桜の木が一本だけあつて、知る人ぞ知る花見の穴場になつていたらしい。俺もこんな場所があるのは知らなかつた。

「見事な満開だな」

「ああ、いい日に当たつたな。それはそれとして弁当寄越せ」「はいはい勿体ぶつてたヒロくんたちもお弁当出そうね〜」

「本当に花より団子だな、お前らは」

松田によつて俺の手から弁当が奪い取られ、萩原につつかれた降谷がやれやれと背に隠すように置いていた包みを取り出す。

今日の弁当係は俺と諸伏降谷ペアだ。いつもの如くとも言う。

「お、さすが美味そうだ」

色とりどりの諸伏降谷コンビの洋食中心お弁当と、地味だけどとりあえずこいつらの好物を詰め込んだ俺の弁当。中身が被らないようだけ打ち合わせをして、あとは適当に作つた。

どうせこいつらは味より量だ、数さえあればいいだろう。いつもより少しくらいは気合いを入れたが、どうせ凝つたものを作つたところで次の瞬間には消えている、とはいえる。

「……足りるかな」

「いいんだよ、メインは夜だからな」

降谷の言葉に夜、と聞き返すと、諸伏にさつと紙コップを持たされ、お茶を注がれた。珍しくビールじゃないのかと不思議そうな俺に気づいたのか、伊達がやりと笑つた。

「何だ聞いてねえのか？ 昼間の花見は前哨戦、本番は夕飯だ」

「はーいここで今日のスケジュールを発表しまーす。まずはここで花見しつつ弁当を食います。食いつくして一服したら腹ごなしに買い物に出かけて夕飯の材料を買います。当然旭ちゃんの奢りです。そんで旭ちゃんとこ行つてごろごろして、お好み焼きとたこ焼きを食べまアす！」

「待てツツコミどころが複数あつた」

「すべて却下します！」

ばつさりと切り捨てた萩原はいい笑顔だ。俺は今日花見としか聞いていないし、夕飯の予定なんて完全なる初耳だ。

「どうか何で俺の奢りなんだよ」

「俺らをこき使つた分だ、お前が払うのは当然だろ」

「……わかつた俺が払うのはこの際いい、だけど降谷と諸伏の分まで俺がもつのは納得いかない」

「ん？ 確かにそうか」

「いや、異議を申し立てる」

伊達が納得しかけたところを、さつと降谷が遮った。

「詳しく述べは言えないが、今回の案件において僕は非常に重要な事実を柊木に秘密にされていた。釈明は聞いたが謝罪はもらっていない。よつて僕も柊木に奢つてもらう権利があると主張する」

「あれ、謝つて……なかつたな。なかつたけどお前も納得してただろ」「僕は傷ついた」

「よし判決、降谷は奢つてもらう権利がある」

松田の判決に伊達と萩原も異議なし、と続く。いやまず裁判員の選出に疑問を呈したい。チエンジだチエンジ、俺に不利すぎる。じやあ俺も、と諸伏も楽しそうに手を上げた。

「上司になつた柊木はパワハラ三昧で大変でした。慰謝料として奢つてくれても罰は当たらないと思います」

「判決、やつぱり今日は全部柊木の奢り」

「控訴」

「棄却」

「理不尽だ……」

「諦めろ」

今日俺たちは倒れるまで食うし、お前は倒れるまで飯を作る。だから特に酒に弱いお前はビールも夜まで禁止、俺たちも夜まで飲まねえ。

いつになく真剣な表情でそう言う松田に、たまにこいつ真顔の使い所間違つてんだよなど思いつつももうどうにでもなれとハイハイと頷いた。ここまで来たら俺の意見など通るはずもない。

「ま、だから昼間はお茶で我慢な」

「別にいいだろ、楽しみは取つておくもんだ」

諸伏の言葉に、伊達が楽しそうに頷く。

それじやあとおりあえず、と降谷が紙コップを掲げた。それぞれも紙

コップを持ち上げた。

「お疲れ。乾杯！」

乾杯、とそれぞれの声が綺麗に揃つた。

*

腹ペコたちが弁当箱を空にする作業を始めてまもなくのこと。がさりと茂みが動き、ひょっこりと顔を出す意外な顔があつた。

「ああ良かつた、やつぱりいたね」

「え、神戸さん！」

ハンサムな顔に笑顔を乗せたその人は、やあ、と言いつつ俺たちのところに歩いてきた。いつものスースーなところを見ると、どうやら今日はお休みではないようだ。

「あ、神戸さん、この場所教えてくれてどうもでした！」

「いえいえ。このメンツを見る限り、人目の多いところで花見なんてしたら大変なことになりそうだしね」

「神戸さんがこの場所教えてくれたんですか」

刑事部通りかかつたら花見の穴場の話をしてたからついね、と笑うその人は、どうやら同期たちと比較的いい関係を築いているようだ。特命係とはいろいろと複雑な関係のようだつたが、まあ神戸さんは気のいい人だ。なんだかんだで気が合つたのかもしれない。

「で、どうしてここに？」

不思議そうに松田が聞くと、神戸さんはにつこりと笑つて手に持つた紙袋を掲げてみせた。

「君たちが花見の計画を立ててるつてちょっと口を滑らせちゃって。不思議なことに今朝出勤してみたら特命係の机の上にメモとこの近くの駅のコインロッカーのカギがあつたんだよ」

ひらりと見せられたメモには、俺にとつてはよく見慣れた角ばった字。名前は書いていないが、さすがに自分の上司の筆跡は間違えない。

『どうせ特命係は今日も暇だろう。この鍵のロッカーに入っているも

のの処分を頼む。昼までには確認するように。もらいものだが、俺の好みではない』

それがこれ、と渡された中身は、相応の値段がしそうな日本酒の瓶。これはいい酒だ、と降谷がぼそりと呟いた。

「それで、そのロツカーを見に行こうとしたときに僕の上司も声をかけてきてね」

『神戸君、ついでに花の里にも寄つてください』

花の里は杉下さん行きつけの小料理屋さんなんだよ、と差し出されたのはずしりと重い重箱。黒い蓋を開けてみると、中には美しく彩られたちらし寿司が入っていた。美味そう、と歓声があがる。

「最後におまけ、これは僕からの差し入れ」

確かにビールよく飲むつて言つてたよね。最後に渡された紙袋には、いつもよりちょっとお高めのビールが何本か入っていた。俺の好きな奴、と諸伏が嬉しそうな顔をする。

「けどごめん、もしかして今日は酒飲まない日? お茶ばっかりだね」「大丈夫です、夜は酒飲む予定なんで!」

ありがとうございます、と笑顔で礼を言う萩原に皆が続く。神戸さんも笑顔を返して、どういたしまして、と楽しそうに言つた。

「ちなみにこれ、賄賂じやないからね」

「念押されなくともわかっていますよ。特命係が何かやらかしたら容赦はしません」

「そのへんは少し手加減してほしいかな……」

「聞こえませんね。……また、こつそり特命係に遊びに行きますね」

「バレないようになよ、大河内さんはいい顔しないから」

うまくりますよと返すと、まあ君ならそうだろうけどと軽く返される。

ハメを外しすぎないようにだけ気をつけて、と言つてその人は帰つていった。こういうことがさらりとできるあの人は、やはりスマートな大人だと改めて思う。

「お前、相変わらず上司にも杉下警部に気に入られてんな」

「否定はしないけど、俺だけじやなくてお前らもだよ。大河内さんも

杉下さんも褒めてたから」

マジで、と驚いた顔をする刑事部組に領き、有難く頂こうと笑った。

お酒の類は夜にまわすとしても、弁当が食いつくされそうな今、重箱のちらし寿司はありがたい。美しく盛り付けられたそれも一瞬で崩されるんだろうなと少し遠い目をしつつ、登庁したら一番にお札を言いに行こうと心に決めた。

*

桜吹雪が流れ、美しいちらし寿司も消えそうな頃。またひよっこりと茂みから顔を出したのは、ふたつの小さな影。

「あれ、コナンくんと灰原さん？」

驚いたように萩原が声を上げると、大きな荷物を抱えた二人はこちらに駆け寄ってきた。新一くんは笑顔で、宮野さんはいつも通りの無表情。

しかし、少し得意そうな色が二人の顔からは見て取れた。

「良かつた、間に合って」

「二人とも、どうしてここに？」

「……差し入れに来たのよ。お世話になつたし」

私たち、もうすぐ引越しするから。

その言葉に、わずかに目を瞠る。そうか、薬の完成が近いのか。思わず二人の顔をまじまじと見ると、新一くんはにつと笑い、宮野さんもふつと小さく微笑んだ。

はい、と二人が差し出したのは、見覚えのあるサンドイッチと珈琲入りのポット。そういえばしばらく行けてない、とたいした時間も経っていないのに何だか懐かしくなる。

「ポアロで用意してもらつたの。珈琲とハムサンド」

「梓姉ちゃんから伝言だよ。『安室さんが辞めちゃつた後も、ハムサンドの味はちゃんと守つてます。良かつたらまた来てくださいね！』だつて」

差し出されたそれらを受け取り、ありがとうと笑つた。それにしても

も何で花見のことを知つてたのかを尋ねると、安室さんから聞いたのと宮野さんが言つた。

「スーパーで安室さんに偶然会つて、立ち話をしたときに」

お酒は飲まないつて聞いたから珈琲を持つてきたのよ、という灰原さんに、降谷はそうだつたかなと固い声。なるほど、嘘だ。降谷は今も定期的に阿笠博士の研究所に訪問して彼女の様子を見ているはすだから、そのときにでも口を滑らせたのだろう。本人も失敗した、と苦笑気味だ。

「そうか、わざわざありがとな。引っ越しても元氣でやれよ」

「どこ行つてもちゃんと大人しくしてるんだよコナンくん。灰原さんも元氣でね」

「もう事件に飛び込むんじやねーぞ」

二人の正体を知らない刑事部三人はそう言つて笑う。松田はそつけない口振りだつたが、それでも笑つて新一くんの頭をぐしゃぐしゃと搔き回した。

俺が知らない間にも、何度か事件に巻き込まれたということは小耳に挟んでいた。だが話を聞く限り、新一くんは確かに変わつたと思う。きっと元の身体に戻つても、前のような「日本警察の救世主」は現れない。彼のファンには申し訳ないが、彼や彼の周囲のためを思えばきつと、その方がいい。

「元氣でな、『コナンくん』、『灰原さん』

「また会えるのを楽しみにしているよ」

俺と降谷の声が続き、諸伏もにこりと笑つた。諸伏は『江戸川コナン』と『灰原哀』を知らない。そして俺たちは、二人とまた会えることを知つている。

「うん。またね！」

「ええ。また、ね」

そう笑つて走つていく二人の後ろ姿を、皆で見守つた。もう事件に巻き込まれないといいけどね、と萩原が言うと、そうだなあと伊達が苦笑した。

「巻き込まれねえのが一番だが、まあ巻き込まれても大丈夫だろ」

さらりという松田に、そうなのかと相槌を打つと、そいつは面白そうに続けた。

「自分の手に負える範囲を理解できる程度には、ガキじゃなくなつたからな」

どこかの誰かの説教、相當に効いたらしいぜ。

そう言われてつい苦笑する。偉そうなことを言つた自覚はある。彼と自分が似た者同士と気づいてからは、少々いたたまれない気持ちもある。

第一、きつかけは俺の言葉だつたとしても、結局は彼が自分でちゃんと考へて出した答えた。それは俺が何を言つたとかは関係なく、そして正しかろうが正しくなかろうが、きつと尊いものだと思うわけである。

「……そうだな。きっと、元気にやつてくれる」

考へて、行動して、反省して、また行動して。それができる人といふのはたいてい強いし、何よりもつと強くなれる。俺と対等になるだなんて妙な目標を持ち出さなくとも、きっと彼は彼としていい男に育つていいくだろう。それこそ俺が、頼りにしたくなるくらいに。

「……嬉しそうだな？ 榎木」

面白そうに俺の顔を覗き込む降谷に、誤魔化すように笑顔を返した。

「さて、お前のつくるハムサンドとどつちが美味いんだろうな？」

「馬鹿言え、僕がつくる方が美味しいに決まってる」

お手並み拝見、と皆でハムサンドを頬張つた。

なるべく近いうちに、ポアロの彼女にも味の感想を言いに行ければいいと思う。

*

「……それにしても遅えな」

ハムサンドの八割が消えたころ、伊達が腕時計を見て呟いた。何があるのかと瞬きをする。俺の視線に気づいた伊達は、ちよつとなと誤

魔化すように笑つた。誰かほかに呼んでいるのかと首をひねつたとき、本日三回目の唐突なお客人が現れた。

「す、すいません遅くなりました！」

「もう、高木君！ 傾けないように気を付けて！」

頭に葉っぱを乗せ何やら箱の入った袋を下げる彼と、そんな彼を叱咤する彼女。つい先日顔を合わせて話をした高木くんと佐藤さんだつた。

何で彼らがここにいるのかと思うのと同時に、遅えぞと声が飛んだ。松田だ。

「す、すいません……！」

「もう、仕事関係ないおつかい頼んだのそっちでしょ？」

「あはは、ごめんって佐藤ちやん。高木君も悪いね！」

「い、いえ！ つて、え、安室さん？」

お久しぶりです、とそう言葉を続けた高木君に、降谷はぎろりと目線と向けた。

「安室？ 誰だそれは」

「えつ」

「警察庁警備局警備企画課の降谷だ。お前たちの部下か？ 指導はちゃんとしたよ」

警察手帳を取り出しつつ「降谷」の顔でそう言うと、「警察庁」の文字に目を真ん丸にした二人は、蒼白になつて敬礼する。

「し、失礼いたしました！ あ、あまりに知人に似ていらしたもので！」

「どういう知人かは知らないが、別人だな。以後、気をつけるように」しつとした顔をでそういう降谷に、皆こつそり笑いを堪える。そういう体で話を進めるというのなら、話はあわせておかなくてはならない。

そんな俺たちの様子を見て思うところがあつたのか、何かに気づいた顔をした佐藤さんはへし、と高木くんの肩をはたいた。

「いたつ、何ですか佐藤さん！」

「ほら高木くん、頼まれたもの」

「あ、そうでした！　はい！」

そう言つて高木君が差し出した袋を、悪いな、と伊達が受け取る。紙袋から取り出された箱にはこの近くにあるケーキ屋の名前がプリントされていた。

「それにしても可愛いですねコレ。てつきりどなたか女性か親戚のお子さんがいらっしゃるのかと、……え？　あれ、すみません、確かに柊木監察官のフルネームつて……」

「……柊木旭ですが、何か」

もう嫌な予感しかしなくて、額をおさえる。

にやりと笑つた伊達の手には、どう見ても子供用の、非常に可愛いしくデコレーションされたホールケーキ。果物と一緒に飾られたホワイトチョコのプレートには、「あさひちゃん　おたんじょうびおめでとう」の文字があつた。

「……俺は幼稚園児か？」

あまりに可愛らしいそれに思わずそう言うと、同期の連中は一斉に噴き出した。はいはいそれ持つて、と萩原にケーキを持たされ、さすが旭ちゃんよく似合うね、と親指を立てられ写真を撮られた。

その親指は景気よく折つてやりたいし、そのスマホも心から叩き割つてやりたい。祝おうという心意気は嬉しいのだけれど、どうしてこの悪友どもは素直に喜ばせてくれないのだろう。

「これ、柊木監察官のためのケーキだつたんですね……」

「今日は誕生日なんですか！　おめでとうございます！」

「はは……ありがとうございます……」

少し同情したような佐藤さんと素直に祝つてくれる高木君に堅い笑顔を返すと、じゃあ次これな、と諸伏に綺麗にラッピングされた箱を差し出された。とりあえずケーキを一旦置いてそれを受け取る。

「三十路一番乗りおめでとさん

「うるせえありがとう」

「これは俺たち皆から。まあ開けてみろよ」

促されて丁寧に包みをはがす。中から出てきたのは、質のいい木目の写真立てだつた。まだ写真は入つておらず、綺麗にデザインされた

カードが入っている。

「定番のプレゼントで悪いけどな。そんでその中身はこれからだ。高木くんだけ、悪いんだけど写真頼める?」

「!　はい、もちろんです!」

諸伏が取り出したデジカメを受け取り、察した高木くんは少し距離を取つた。佐藤さんも同じように離れる。

完全に展開に置いて行かれている俺は瞬きしかできない。

「え、写真?」

「そうだよ、むしろ本命はこっち」

はいもつかいケーキ持つてと萩原に促され、ケーキを持ち直す。いつの間にか俺を中心になんと皆が集まつて来ていた。ほらちゃんとカメラの方向いて、と戸惑う俺の肩を萩原が叩く。

「俺たちのことがだーいすきな旭ちゃんのために、写真のプレゼントつてわけ」

とろりと優しい目尻をさらに下げ、満面の笑顔でそいつは楽しそうに言つた。いつだつて周囲を気遣つて笑うそいつの言葉に、その親友が続く。

「嬉しいだろ?　お前未だに警察学校卒業したときの写真飾つてるもんな」

真面目で頑固で、いつだつて真っ直ぐに突き進むそいつは、カメラを意識してか愛用のサングラスを外して仕舞つた。

「その隣で、いつも頼りになる太陽みたいなそいつもにかつと笑う。『その隣にでも並べといてくれよ、この写真』

何故か今日に限つて、俺の脳の処理速度が落ちている。うまく言葉に応えられない。何だろうこの気持ちは。胸の中に渦巻く感情をうまく表現できず、頬の筋肉も上手く動かせない。

「何難しく考えてるんだよ、柊木」

ここ数か月ずっと俺を支えてくれた、俺を守つてくれた力強い腕が、肩にかかる。

そういうときは「ありがとう」つて言えばいいんだよ、と優しい声が耳元で響き、言われた通りに口が動く。

ありがとう、拙く紡いだ言葉に、皆がまた笑った。

「全く、何をまだ呆けてるんだ。ほら、笑え」

卒業式の時みたいに、馬鹿みたいに笑え。

ずっと競い合ってきたライバル、肩を並べてくれたそいつも、そう言つて不敵に笑う。その顔を見るとなんだか気が抜けてきて、ふはつと子どもみたいに噴き出した。

そのままカメラに目を向けると、俺を見たふたりが何だか驚いた顔をした気がする。けれどまあいやと、気にせず流した。忘れかけていたけど、今日は俺の誕生日だ。少しくらい羽目を外したつていいだろう。

「撮りますよー！」

空の蒼さ、頬を叩く春一番、桜の香り、視界にちらつく桜の花びら。そして近くに感じる宝物の気配。

俺はきっと今日という日を、こんなに幸せな誕生日を、生涯忘れることはない。

六花、咲き誇る。

寝室のベッドサイド、卒業式の写真の隣。

年甲斐もない馬鹿みたいな笑顔で、ひとりも欠けることなく、今も尚。

——そしてきっと、いつまでも。

蛇足 桜木旭という男

むかしむかし、それはそれはかわいらしい少年がおりました。

少年のかぞくはおとうさんひとりだけでしたが、少年はおとうさんのがだいすきだったの、まいにちしあわせにたのしくべらしておりました。

あるひ、少年はおとうさんにたずねました。

「おとうさんは、まいにちなにをしているの？」

おとうさんはまいにちあさはやくでかけて、よくおそらくにかえつてきます。

「おとうさんは、おじぎとをしているんだよ。けいさつかんなんだ」「けいさつかん？」

「ひとをまもるおじぎ」とだよ。せいぎのみかただ

「わあ、かつこいい！」

ぼくのおとうさんは、ヒーローなんだ！

少年は、うれしそうにわらいました。

そしてまいにち、こういつておとうさんをみおくるようになりました。

「いつてらつしやい、きょうもせいぎのみかたがんばってね！」

おとうさんは、少年のじまんでした。

ところが、少年がすこしおとなになつたころ、じけんがおこりました。

少年があまりにかわいかつたので、おんなのひとにつれさられてしまつたのです！

おとうさんはひつしにさがしました。

おとうさんのなかまもいつしょにさがしてくれました。

すぎしたさんというとてもあたまのいいけいさつかんが、さがしだしてくれました。

少年は、やつぱりけいさつかんはせいぎのみかたなんだ、とおもいました。

しかし、少年がいえにかえつても、おとうさんはないています。

ないて、少年にくくりかえしきりかえしゃります。

「どうしておとうさんがあやまるの？」

「おとうさんはけいさつかんだからだよ」

少年がおとうさんのなみだをみたのは、あとにもやぎにものときだけでした。

そして、すぎしたさんもまた少年にあいにきて、あたまをさげました。

「どうしてすぎしたさんがあやまるの？」

「ぼくがむりよくだからです」

すぎしたさんは、とつてもくやしそうなかおをしていました。

少年はたくさんかんがえました。

かんがえてかんがえて、ようやくふたりがあやまつたりゆうがわかりました。

でも、やつぱりわかりませんでした。

「どうしてせいぎのみかたなのに、ただしいことができないんだろう」

そうかんがえて少年は、いや、なんかちがうな、とおもいなおしました。そもそも。

「せいぎつて、なんなんだろう」

わからない。わからないけど、わかるようになりたい。

そうおもつた少年は、とりあえずけいさつかんになることにしました。

すくなくともまわりのおとなは、けいさつをせいぎだといつたからです。

「よし、たくさんべんきょうしてからだをきたえよう」

どんなりふじんにもまけないような、つよいひとにならなくちゃ。

少年は、たくさんべんきょうしました。たくさんからだをきたえました。

おんなのひととかかわるのはこわかつたけれど、なんとかがつこうにもいきました。

うまくともだちもつくれなくてさみしかつたけれど、それでもがんばりました。

がつこうというせかいにいると、たくさんのるーるをおそわります。

るーるはまもらなければならぬもので、やぶつてはいけないもの。

じやあ、るーるをまもつていればせいぎなのかな？

少年は、よくわからないなりにるーるをまることにしました。けいさつかんになるには、ぜつたいにほうりつをまもらなければなりません。

これはそのれんしゅうだと、少年はすべてのるーるをまもりました。

少年は、けいさつかんになるためのがつこうにいきました。

うまれてはじめて、ともだちができました。それも、「」にんも。とてもとてもうれしくて、ずっとなかよしでいたいなあとおもいました。

みんなといふときだけは、せいぎのことをかんがえませんでした。

みんなといふときだけは、むかしじやなくていまをいきていられました。

少年は、けいさつかんになりました。

たくさん、たくさんいろんなことがありました。

たくさん、たくさんいろんなひとにであります。

たくさん、たくさんせいぎのかたちをみたのです。

せいぎを、ぶきにつかうひともいました。

せいぎを、たてにするひともいました。

せいぎを、こわだかにさけぶひともいました。

せいぎを、ふみにじつてもまもろうとするひともいました。

少年も、いつしかせいぎを「つかう」とをおぼえました。

かたちのないそれを、ふりかざしました。

かたちのないそれを、たてにしました。

かたちのないそれを、ふみにじりました。

しようじき少年は、あまりふかくかんがえていませんでした。

ただ、みんなのことをまもるのにつかえそだからつかつただけなのです。

それをわるいことだともおもえなかつたのです。

ほかのひとがつかつていたせいぎもそうでした。

だつてぜんぶ、なにかをまもろうとしたのでしょうか？

だつてぜんぶ、なにかをすぐおうとしたのでしょうか？

そのきもちをひていすることは、きっとかみさまにだつてできません。

そもそも、かみさまがさきにせいぎをつくつておかなかつたのがわるいのです。

しごとをさぼつたかみさまに、もんくをいわれるすじあいはあります。せん。

ぜんぶただしくてまちがつていて、それがせいぎなのだとおもうことにしました。

ただかんがえるのがめんどくくなつただけなのかもしれません。

だつてきつと、こたえなんてずっとでないのです。

たつたひとつせいぎがあるのなら、きつとこんなになやんだりはしないのでしょう。

おとなになつてけいさつかんになつた少年は、おもいました。

せいぎとかけいさつとかけつきよくよくわからない。

そんなもののせいでとつてもめんどくさいじけんにもまきこまれしまつた。

そんなもののせいでとつてもめんどくさいじけんにもまきこまれてしまつた。

けれど、それでもやつぱり、けいさつかんになつてよかつたなあと。

よなかだというのにさわがしいみんなのこえがあると、そうおもうのです。

*

「ビールも小麦粉も豚肉もタコもなくなつたので今日はここまで！」
「うつそだるまだまだ足りねえぞ俺ア！」

「文句があるなら材料買つてこい」

「よしハギ、スーパー行け。近くのは二十四時間営業してる」

「え、俺なの？」

「全く、仕方ないな……」

「そういうてスマホを取り出すなよゼロまさか風見さん使う気じやないよな？」

「……わかつたわかつた、俺が行つてきてやるよ」

「ヒュー！さすが班長！」

「あ、つまみの追加もよろしく。俺チータラ」

「へいへい、家主様が言うんじや仕方ねえ。他は？」

「さきいか！」

「ナツツ！」

「洋酒も適当に頼む」

「あ、俺からあげ食べたい」

「ひとりで持てるわけねえだろうがせめてもうひとり来い！」

「じゃあハギ」

「ハギだな」

「何かごめんな」

「よろしく萩原」

「だから何で俺。ジャンケンしよ？」

「家主様の言つことは？」

「旭ちゃん酔つてるね？ んもくはいはい行つてきますよ～」

「つたく、大人しく待つてろよ」

*

彼は、万が一にも殉職してほしくなかつたから友達を叱りました。
彼は、殉職の危険を冒していた友達を止めなかつたその上司を叱りました。

彼は、私欲から情報を流して友達を窮地に追い込んだ警察官を締め上げました。

彼は、友達が妄執から解放されるよう、ルールを無視して好きなようにさせました。

彼は、友達を処罰なんかしたくなかったので、その原因たちに説教をしました。

彼は、友達に頼られたのが嬉しくて、いやいや言いながらもその案件に挑みました。

彼は、友達に頼られたその案件を完璧に解決したくて、関係者に釘を刺しました。

彼は、友達を危険に晒すその組織も、横やりをいれてくる奴らも許せませんでした。

彼は、また六人で笑うために、組織を潰し、他国に喧嘩を売り、勝利しました。

そこには正義感も使命感もありません。一から十まで完璧に「私情」でした。

全て開き直った彼は、平気な顔でこう宣います。

「公私混同の何が悪いんだ？ それらしい建前をつくるだけの能力と権力があるかどうか、結局のところそれだけだろ？」

番外（時系列関係なし、ifあり）

門出

あの人に会う前の俺が今の俺を見たら、いつたい何と思うのだろう。

未だに着慣れないスーツに身を包み、卒業証書の入った筒で自分の肩を叩きながら、通つていた校舎を見上げた。多分信じられないって顔をするんだろうなと自分で笑う。もしかしたらこんな俺じやねえつて怒鳴り散らすかもしれない。

そこまで考えてようやく、俺も少しばかりになれたのかななんてらしくもないことを思つた。反面、大学卒業くらいで大人になれたら苦労しねえのに、と自嘲する。

珍しく感傷に浸つていたそのとき、スマホが震えた。画面に表示された名前を見て、うえつと変な声が出る。

『裏門』

たつた一言のメッセージに、すでにいろいろとバレていることを察した。メッセージのやり取りはしていたが、顔を見るのは軽く数年ぶりだつたりする。

俺はあの人に今日が卒業式だということを伝えた覚えはない。余計なことを吹き込んだのは誰だと悪態をつきつつ、裏門に足を進めた。

相変わらず、立つてゐるだけで絵になる人だ。久しぶりなのに全く顔が変わつてない。

「ああ、幸人」

柊木さんはいつも通りの柔らかい笑顔と声で俺を迎えた。

久しぶり、と軽く応じた後、めんどくさそうな顔を作つて言う。

「卒業式のこと知つてたの？」

「ああ。お前な、あいつらに『卒業式のこと言うな』なんて言つたら面白がつて逆に喋るに決まつてんだろうが。結構な人数から連絡來たぞ、今日顔出してやつてくれつて」

「あいつら……！」

どうやらかつての仲間たちが余計な気を回したらしい。

別に、卒業式のことを知られたくなかったわけじゃない。ただ、卒業式に柊木さんが来たら、きっと尋ねるだろうことがあると思つただけ。

「おおかた、卒業どうこうよりも俺に進路を知られるのが嫌だつたんだろう？」

あつさりと言ひ当てられて、思わず不貞腐れる。ここまでわかつてゐるならもうすべてあいつらが喋つてしまつてゐるのだろう。別に後ろ暗いわけではないが、何となくの気まずさと恥ずかしさが頭の中で暴れだす。

「良かつたじやねえか、公務員試験通つて」

「……全部知つてんならさつさとどどめ刺してよ」

「どどめとは何だ。別にからかつたりしねえつて」

なあ、未来の警察官？

柊木さんは面白そうに笑つた。からかつたりしないと言つておきながら、その声には明らかにからかいの色が含まれている。

「……別にひーらぎさんがどうとかは関係ねえからな！」

「はいはい」

「聞けよ！俺はただ、」

「うん」

俺はただ、と繰り返すと、柊木さんはからかいの色を消してゆつたりと俺を見た。

昔からこの人は、こういう目で俺たちの言葉を聞いてくれる人だった。疑いも見せず、遮りもせず、ちゃんと最後まで言葉を聞いてくれた。そういう人だから俺たちにとつては数少ない、心の内を明かすことが出来る人だつた。

誰にも言わずにいた本心を、その瞳に促されて言葉にする。

「……昔の……あの、リンチの事件。あの後、あの被害に遭つた奴から、手紙もらつたんだ。伊達さんを通して」

高校生の時に遭遇した、例の事件。傷害事件も冤罪も、全てテレビ

の向こうの話だと思つていたが、たやすく覆された。柊木さんや伊達さんがいなかつたら、俺は本当に逮捕されていたかもしない。今でも思い出すだけで背筋がぞつとする。

だが、俺以上に怖い思いをしていた人がいたのだとその手紙で知つた。

「明らかに震えた手で書いた文字でさ、……すつげえ何回もごめんなさいつて書いてあんの。俺がやつたつて証言したつて聞いたときはマジでムカついたけど、本当にそうとしか証言できなくくらい心折られてたんだなって」

嘘の証言をしてしまつたことへの後悔、しかし本当のことと言うことが出来ないことへの謝罪。犯人への恐怖が痛いほどに伝わつてきて、彼を恨むことなど出来なくなつてしまつた。

涙の跡が残つたその手紙は、今でも大事に取つてある。俺の、決意の証として。

「……あの事件の犯人、捕まつてないんだよね？」

「ああ」

「で、被害者は転校してどつかいつたつて」

「そうらしいな」

「おかしいじやん」

何でやつた方が捕まんなくて、やられた方が逃げちゃうの。

俺の言葉に、柊木さんは笑顔を崩さないまま少しだけ眉根を寄せた。柊木さんや伊達さんが精一杯のことをしてくれたのはわかっている。それでも、納得なんてしたくなかった。この際俺のことはどうでもいい、だけど。

「何で悪いことしてない奴が、やられた方が、泣き寝入りしなきやいけないんだ」

もしかしたら今でも、彼は怯えているかもしれない。いつ犯人に見つかるのか、どこかで遭遇しないか、また殴られるんじやないかって震えているかもしれない。犯人が刑務所にでも入らない限り、その恐怖はきつと消えない。

そう思つたら、俺の進路はもう決まつっていた。

「悪いことをした奴を、ちゃんと捕まえたい。悪いことしてない人が安心して暮らせるようにしたい。だから俺、警察官になる」

普通の人が、普通のまま暮らしていくように。

そう言うと柊木さんは優しく瞳を細めた。それでいい、と言うように。

「……ガキくせえって笑わねえの」

「笑わねえよ」

俺よりずっと立派な理由だ、と笑う柊木さんに、思わず聞き返す。

「ひーらぎさんは何で警察になつたの？」

「ヒミツ」

さらつと誤魔化されてえーっと声を上げると、柊木さんも声を上げて笑つた。これは本当に言うつもりがないらしい。柊木さんが警察になつた理由、聞いてみたい気もするが無理に聞き出すことでもない。

どんな理由があつて警察になつたにしろ、柊木さんはしつかりと務めを果たしている。と、伊達さんから聞いたことがある。俺にとつてはそれで十分だ。

別に柊木さんに憧れて警察官になるわけではないけれど、——間違いなく、柊木さんは俺にとつて憧れの警察官のひとりなのだから。

「警察学校無事卒業出来たら俺の名刺やるよ」

「舐めんな、絶対逃げたりしねえから」

「ああ、だろうな」

柊木さんは改めて、俺を頭からつま先までじっくり見て領いた。走り込みと筋トレでもやつてんのか、とこれまたさらつと当てられて何だか悔しい。

「幸人」

俺より少しだけ背の高いその人の顔を見上げると、柊木さんはいつものように笑っていた。出逢ったころから全く変わらない、本当に変わらぬ過ぎてこの人実は歳を取らねえんじやないかと疑つてしまふ、いつも通りの笑顔。

「ほら、手エ出せ」

手を出す前に腕を取られて何かを押し付けられた。握られたのは、新書サイズの黒い手帳。新品ではなく、中にはたくさんの書き込みが残っている。よく見慣れた柊木さんの字だつた。

「俺が警察学校にいたときにいろいろメモつてた手帳。あそこはここで面倒な世界だからな、まあ読みたかつたら読めよ。丸腰で挑みたいつてんならそれはそれで止めねえけど」

「……いいの、もらつて」

「いいよ、何となく取つといただけだから」

書き込んだ内容を見るに、そこにあつたのは警察学校の情報だけではない。伊達、という文字や、他にも苗字らしき名前が見える。日記というほどではなくとも、柊木さんが日々感じたことや思い出も書き込まれているようだ。そんなものをもらつていいのだろうか。

俺の迷いを見て取つたのか、柊木さんは苦笑していいから持つとけ、と軽く言つた。

「書いたことは全部覚えてるし、もう思い出に浸る必要もないからな」「え？」

「今俺にはいらねえもんつてことだよ」

何かの役に立つかもしれないし、持つてろ。

そう言われては、受け取るしかなく。小さくありがと、と呟いた俺に、柊木さんは満足そうに頷いた。

もう一度幸人、と名前を呼ばれる。

「改めて、大学卒業おめでとう」

そして死ぬほどめんどくさい組織の入り口へようこそ。

悪戯っぽく笑つた俺の憧れの警察官は、ひどく綺麗な敬礼をしてみせた。

*

いつかの数年後、あるかもしれない未来。

「本日より捜査一課に異動になりました、相良幸人と申します。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひいたします!」

「教育係の松田だ。まあよろしくな」

春を待つ

珍しい人からの連絡というものは、たいてい面倒ごとである。

スマホの画面に表示されたその人の名前を見て、俺は思わず眉根を寄せた。

*

俺にとつては初めての長野という土地、東都とは違う空気の匂いに少し首を傾げた。

待ち合わせの駅の駐車場に車を停め、外に出てひとつ伸びをする。さすがに長時間の運転は身体が強張った。肩を回しつつ改めて駅へ向かおうとしたとき、背後から見知った声が聞こえた。

「よ、柊木」

につっこりといい笑顔で俺を迎えてくれたその人の名前は白樺正樹。警察学校のひとつ年上の先輩で、俺たちの前の代の首席だった優秀な人だ。

何かと面白がりながら俺たちの面倒を見てくれて……と言えば聞こえはいいが、警察組織における上下関係は絶対である。面倒をみてもらった以上にこき使われた覚えが多大にある。悪い人ではないのだが、多分いい人でもない。

「お久しぶりです、先輩」

「よく来てくれたな。本当に車で来たのか」

「新幹線苦手で」

毎日地下鉄で通勤してリハビリをしているとはい、長時間女性もいるだろう密室に閉じ込められるのは俺にとつて非常に苦痛である。せっかく指定席を取つても、隣や近くの席が女性だつたら座つてはいられない。

俺の女性苦手を知つてゐる先輩は相変わらずか、と面白そうに笑つた。そう、俺の深刻な悩みをさらつと見抜いた上に指さして笑うような素敵な性格の先輩なのだ。

「結局いつまで長野にいられるんだ？」

「二泊三日のつもりでいます」

「そつか。むしろよく休みもらえたな」

「……上司に恵まれまして」

行くからには得られるものは得てこい、と言った大河内さんは本当に抜け目のない人だと思う。人脈をつくる機会を捨てるものではない、と会うべき人のリストをその場で渡された。一応有給をとつて長野に向かうというのに、どこまでもうちの上司は仕事人間だ。

「今日はさすがに疲れたる。県警に顔出すのは明日にするか？」

「いえ、言うほど時間もありませんし、先輩さえよろしければ今日のうちに」

「お、やる気だな」

「呼び出した本人がよく言いますね」

とびきりの面倒ごとを持ち込んだのはアンタだろうに。

呆れ顔でそう返すと、先輩は警察学校の時と何ら変わりのない悪戯っぽい笑顔で笑つた。ペシペシと俺の肩を叩き、朗らかに言う。「頼りにしてるぜ、後輩♡」

この人は降谷や俺のことを色眼鏡で見るようなことはなく、他の先輩が少なからず見せたような嫉妬や羨望の色を示したこともない。ただただにこにこと他の奴らと同じように俺たちを扱い、しげしげ、世話を焼いてくれた。

素直な伊達なんかは先輩のそういうところを見て「いい人だな」なんて零していたが、当事者だった俺たちはよくわかっている。この人はただ、先々役に立つてくれそうな後輩に恩を売つていただけなのだとということを。

いい笑顔の先輩に、俺は引きつった笑顔で頷くことしか出来なかつた。

*

ホテルに荷物を置き、仕方なしにスーツに着替えた。オフとはい

え、挨拶まわりをするのに私服では行く勇気はない。

助手席に乗った先輩のナビに従いながら、長野県警に向かう。

「お前の上司抜け目ないな。紹介しようと思つてた人全員リストに載つてるわ」

「そういう人なので」

「とりあえずこの人たちは紹介するよ。あとそれからもう一人、ついでに」

「ついで？」

「ああ、と先輩は楽しそうに笑つた。出世云々には関係ないけど、と前置きして続ける。

「一目でわかつたよ。そつくりでな」

「誰がですか」

「会えばわかるつて。向こうも挨拶したいって言つてたよ」

「？」

もつたいたぶつた物言いに、少し眉を顰める。まあまあ気にするなど笑う先輩に、はあ、とため息まじりに頷く。
ところで、と横目で先輩を見た。

「本題の方は？」

先輩は笑顔を崩すことなく、しかしほんの少しだけ声のトーンを下げて、挨拶まわりの後でな、と呟いた。

*

白樺先輩が長野県警に出向してきたのは数ヶ月前だという。所属は刑事部捜査三課、おもに窃盗事件を扱う部署で指揮を執っているらしい。

「特に大した仕事はしていないけどな。三課にはベテランが揃つてるし、勝手に成果はあげてくれる。有難いよ」

しつと先輩は言うが、県警の廊下を歩くだけで方々からお声がかかるところを見ると、相当に上手くやっているのだろう。よく馴染んでいることが見て取れる。

「……さすが人心掌握はお手の物ですか」

「人聞きが悪いな柊木。まるで俺が打算で動いているような言い方をするなよ」

打算以外の何でアンタが動くというのか。

そんな言葉を丁寧にしまい込み、失礼しましたと棒読みを返す。

先輩の後ろに続いて県警の廊下を歩きつつ、挨拶すべきと言われた人に笑顔と名刺を置いていった。しちめんどくさい作業だが、やれと言われた以上は仕方がない。

どこかで役に立てばいいけどと思いつつ、ここが最後だと連れてこられたのは捜査一課。特有のぴりりとした空気が肌を刺す。

「白樺か」

「すみません黒田捜査一課長。お取り込み中でしたかね？」

構わん、と書類を片手に立っていたのは大柄な隻眼の男性。なるほど、事故の後遺症がどうとは伺っていたがそういうことか。

「ちようどヤマがひとつ片付いたところだ。何かあつたか？」

「警察学校の後輩が長野観光に来てまして。どうせならと思って挨拶に連れ回してくるんです。柊木」

「職務中に恐れ入ります。警視庁警務部監察官室監察官の柊木と申します」

監察官、というと部屋の空気が一瞬止まつた気がした。監察官という立場上珍しいことではないが、どうも過剰反応する人が多い気がしている。穿った見方をしているだけなら良いのだが。

そんな気持ちを微塵も見せず、俺は笑って名刺を差し出した。

「ああ、聞いた覚えがある。若くして監察官に引き抜かれ、警視庁で派手にやつてているとか」

「これでも随分大人しくしてゐつもりなんですがね」

面白そうに言う黒田捜査一課長に、軽口を返した。それでも彼は、俺を警戒する様子もなければ気を悪くした様子もない。なるほど、外見よりずつと柔らかい方のようだ。

「黒田兵衛だ。うちの悪事でも暴きに来たのか、監察官」

「長野県警には長野県警の監察の方がおられるでしょう。本当に観光

ですよ、……いえ、観光のつもりだったんですよ、先輩にスーツを持つてこいと言われるまでは

「せつかく来るならいろんな人を紹介してやろうという先輩の優しさに何という言い草かな、柊木クン」

大変失礼致しました、と目を逸らすと捜査一課長はまた面白そうに笑つた。周囲にいた刑事たちにもどこか気の毒そうな苦笑を向けられる。

「それに、諸伏警部にも是非挨拶をと」

「諸伏に？」

「白樺管理官、そちらが？」

すつと前に出た、涼やかな眼差しの細身の男性。綺麗に手入れをされた口髭に品を感じる。何よりその顔の造形、見覚えがあつた。

「ええ。柊木、わかるか？」

「……恐れ入りますが『諸伏景光』という名前に聞き覚えは……？」

「実の弟です」

つまり諸伏のお兄さん。

驚きに目を見開いた俺に先輩は企みが成功したように笑い、諸伏警部もまた口元に笑みを浮かべた。

「改めまして、長野県警捜査一課の諸伏高明と申します。弟とは警察学校の同期で同班と伺いましたが」

「ええ。諸伏にはお世話になりました。本当によく似ておられますね」

そうですかと彼は首をひねるが、その仕草すら諸伏によく似ている。長野県警に兄がいるとは確かに言つていたが、こんなによく似ているとは。わざわざ挨拶をと言つてくれるくらいだ、仲の悪い兄弟ではないのだろう。

とはいって、諸伏警部が「今」の諸伏の状況を知つているとは思えない。

「……今も、弟とは連絡を？」

ほら、来た。

おそらくそれを尋ねたかったのだろう、警部の瞳には心配と探りの

色が見えた。彼には申し訳ないが、諸伏には諸伏の事情がある。俺がそれを漏らすわけにはいかない。

「いえ、それが……警察学校を出て以来、連絡が取れていなくて。諸伏、元気にしていますか？」

俺は知らないけど貴方の方こそ家族なら知っているでしょう、とそんな風に受け取つてもらえるように、少し心配げな笑顔を作る。

信じてくれたかはわからないが、諸伏警部は少し残念そうに眉尻を下げた。

「……実は、警察学校の卒業の直後から私も連絡が取れなくなっています。風の噂で警察を辞めたと聞いたのですが、今もどこで何をしているやら」

「！……そうだつたんですか」

「あれも子供ではありません。どこかで元氣にしているだろうとは思うのですが、些か心配でして」

本当ですねと頷くと、彼は何か弟の噂を聞いたらご連絡頂けませんか、と名刺を差し出してきた。有難く交換して、名刺入れにそつとします。

嘘をつくのは心苦しいが、俺が諸伏の邪魔をする訳にはいかない。ほかの同期にも話を聞いてみると口にすれば、諸伏警部は少し申し訳なさそうにお気遣いなく、と微笑んだ。

「失礼、話し込んでしまいましたね」

「いえ、こちらこそ職務中に大変失礼いたしました」

その場はそれで終わつたが、気のせいでなければ最後まで諸伏警部の瞳の探る色は消えなかつた気がする。余計なことは言わなかつたつもりだが、俺はそんなに嘘が下手なのだろうか。

捜査一課を離れ、先輩について廊下を進んでいく。何の気なしと言つた風に先輩は口を開いた。

「お前本当に諸伏のこと知らねえの？」

「メール送つたりはしてるんですけどね。一向に返信が来ないんですよ」

エラーにはなつてないので届いてはいると思うのですが、と一言付

け加える。俺の前を歩く先輩の顔は見えないが、ふーん、といつも通りの返事が聞こえてきた。

さて、信じてくれたか、どうか。腹芸に關してはどうあがいても先輩の方が上だ。その心の内を読む努力すら放棄し、俺は窓の外に目をやる。長野についたときには真上近くにあつた太陽が、少し傾いていた。

「……挨拶まわりは終わりですね？ 先輩」

「ああ」

かちやりとノックもせずに先輩は扉を開ける。

小さなその部屋には真ん中にテーブルがひとつ。その上にはいくつかのファイルが乗っていた。

「それじやあ、本題といこうか」

にこやかだつたその笑みが、瞬時に消えた。

* * *

本庁の監察官だというその優男。白樺管理官は「観光のついで」と言つたが、どこまで本当なのか。

気になつて聞けば、本庁では上層相手だろうと何であろうと、不正という不正を暴き出している怖いもの知らずなのだと言う。やはり、楽観視すべきではない。

もし、彼が長野県警の闇を暴きにここまで来たのだとしたら。

「……邪魔はさせない」

計画の実行を、早めなくては。

* * *

先輩がひそかに集めたというその証拠の数々。

軽く振舞うこの人も、一皮むけば俺たちの前の代の首席、しかもすでに多方面から高い評価を得ている非常に優秀な人だ。そんな人が揃えたそれらに、不備などあるはずもなく。

「……眞っ黒じやないですか」

「やっぱそうかー」

だよなー、と先輩はあつけらかんと言つた。

感心したくなるほどに資料も報告書も隙が無い。これが公になれば、監察は動かざるを得ないだろう。あまりにも明白な不正の証拠があるのに、それをわざわざ俺に見せた理由は何なのか。おおよそ見当はついた。

先輩が揃えたこれらは、「不正があつたという事実」こそ明確になっているが、「誰が」の部分については決定打に欠けている。組織的に行われた不正であるがゆえに、実行犯が不明瞭だ。

「根が深すぎますね。もはや県警全体の不正と言つていいレベルだ」「そうなんだよなー。もちろん全員じゃないが、これを公にするのを阻止できるレベルのお偉いさんは絡んでるらしい。残念なことに監察にもな」

「つまり、俺は伝令役ですか？」

この証拠を、警察厅あるいは警視庁の、信頼のできる人に流すために。

とりあえず不正があつたという事実さえ明るみに出れば、本格的な監査が入る。誰がどう不正に関わったかは、その調査の中で明確になっていくだろう。

俺がそう言うと、先輩はにこにこと変わらぬ笑みを浮かべた。明確な返事はなかつたが、その笑みは答えを物語つている。

「うちの上司は話のわかる人ですし、お偉方にも顔が利きます。動いてくれると思いますよ」

そうか、とその人は一言だけ呴いた。何となくまだ何があるような気がして、先輩の様子を伺いつつまた資料に目を通す。

不正の実態、関連する事件の捜査資料。それに関わった警察関係者のリスト。ひとつひとつ情報を探ぎ合わせながら、見落としがないか頭を働かせた。

そして気づく、リストにあつた警察関係者のひとりに付け加えられた注意書き。加えて捜査資料にあつた、不幸にも巻き込まれた一般人

の名前。

「……先輩」

「ん？」

「この拳銃乱射事件の被害者」

「お前にしては気づくのが遅かつたな」

まさか、と先輩の顔を見る。その笑顔に変化はない。

「先輩、このやり方は」

「俺はお前に説教されるつもりはねえよ」

笑顔のまま、言い募ろうとした俺の言葉をばつさりと切り捨てる。
ぐ、と黙ると、いつそ楽しそうに先輩は口を開いた。

「柊木、お前まだアレ言えるか」

「アレ？」

「警察の服務の宣誓」

突然の話題に瞬きをひとつ。

警察学校に通つた者なら、必ず暗記したであろうその心得。促されるままに、俺の口は動いた。

「——私は、日本国憲法及び法律を忠実に擁護し、命令を遵守し、警察職務に優先してその規律に従うべきことを要求する団体又は組織に入加入せず、何ものにもどらわれず、何ものとも恐れず、何ものもも憎まず、良心のみに従い、不偏不党且つ公平中正に警察職務の遂行に当ることを固く誓います」

はいよく出来ました、と先輩は笑つた。

そして言う。俺、結構これ大事だと思つてゐるんだよな、と。

「警察官だつて人間だ、憎しみをもつなとは言わねえよ」

だが、その感情をもつて動こうとしてしまつた時点で、俺はそいつを警察官として認めない。

「相手が一般人であつたなら俺もこんな手段は択ばない。だがそいつは警察官だ。どんな理由があろうとそいつがその道を選ぶなら、俺はとつとと刑務所にぶち込んで頭を冷やさせるべきだと考える」

犯罪に立ち向かう職務に就く以上、警察官は人を守る術を教え込まれる。それは同時に、人を傷つける術を知つてしまうということでも

あつた。そんな立場だからこそ、犯罪に手を染めることなどあつてはならない。罪を犯すという発想すら、持つてはならない。

「それを、警察官になつたときに俺たちは誓う。だろ？」

先輩がそう言つたとき、スマホの着信音が響く。

俺に構うことなく電話に出ると、先輩は二、三会話をしてすぐに通話を終えた。そして改めて俺の方を見て、笑う。

「柊木、お前はもうホテル帰れ。また改めて連絡する」

「……動いてしまつたんですか、そいつ」

「残念なことにな」

全く残念ではなさそうに言つた先輩に、言いたいことが腹の底からせりあがつてくる。しかし、そのすべてを呑み込んだ。

先輩のやつたことを全否定は出来ない。しかし全否定も出来ない。そして、現状俺に出来ることは何もない。ならば俺は、せめて最悪の事態に陥らないよう祈るだけだ。

「……ちゃんと止めてくださいよ」

そう絞り出した俺に、一瞬だけ先輩は申し訳なさそうな顔をした、気がした。しかし、そんな殊勝な顔をするところを見たことがないので気のせいだつたのかもしれない。

「当然だろ」

そう言つた先輩の顔には、やはり迷いは見られなかつた。

* * *

「例の本庁の監察官、随分長いこと白樺と話してたようだ」

挨拶回りだけが目的なら、会議室にあれほど長く居座る必要はない。しかも、普段から腹の底が読めない白樺が突然連れてきたのだ。そこに何も意味がないとは到底思えない。そして、この長野県警に、監察官を呼ぶ意味があるとすれば。

「……あのふたりが話していた会議室にP.C端末はない。白樺も持ち込んだのはいくらかの紙の資料だけのようだ。あの監察官も、会議室に入る前は持つていなかつた資料ケースを持って出て来たらしい」

「そうか、そりやあ好都合だ」

その資料を頂くついでに、少しばかり痛い目を見てもらえばいい。

「相手は現場も知らねえエリート様だ。それで十分だろうぜ」

まずは、そいつが泊っているというホテルを特定しなければ。

こういうとき、警察官という肩書は何とも便利なものだ。内ポケツトに入っている警察官の証を取り出して、皮肉気に笑つた。

監察官である柊木の存在をちらつかせればきっと動くだろうと思つていた。しかし、こんなに早く動いてくれるとは。

柊木と別れた俺は、再びその部屋に足を踏み入れる。

「……何だ、今度はひとりか、白樺」

たびたび失礼します、と礼をする。

隻眼の捜査一課長は、何かの捜査資料を片手にデスクで仕事をしていた。最近出向してきたばかりのこの人は、どう考へても例の不正には無関係だ。そして、相手が誰であろうとその言葉に耳を傾けてくれる人だということは知つてゐる。

そのうえで、口を開いた。

「貴方の部下が、罪を犯そうとしているかもしません」

片方だけの瞳が、鋭く細められた。

今関わっている強盗事件について重要な証言があつたという体で、俺はその人を連れて妻女山に來ていた。

日も暮れつつあるこの時間、わざわざ山中に入るような馬鹿はいない。誰にも見られずにことを為すには最適な状況だ。

「本当なんだろうな油川、ここに強盗犯が潜伏してるのでタレコミがあつたのは」

「本当ですよ、もう少し先です。それから油川じゃなくて秋山だつて

言つてるじゃないですか」

細かいことをぐちぐち言うなとぼやかれるが、俺にとつては細かいことではなかつた。両親の離婚で姓が「秋山」になつたからこそ、俺は「啄木鳥会」の真実を知ることが出来たのだから。

「……竹田班長」

「あん？」

「九年前にあつた拳銃乱射事件、覚えています？」

「九年前……？」

突然なんだ、とでも言いたげな表情で班長は記憶を探つてゐる。数秒経つてああ、と思い出した。

「あれか、ヤクでラリつた野郎が街中で拳銃を乱射した事件」

「ええ。あれつて啄木鳥会が流した拳銃ですよね」

「そうちだつたかもな。それがどうした」

「それがどうした、と。

自分たちが金目当てで売り払つた拳銃によつて事件が起きたというのに、そんな一言で済ませるのか。良心の呵責というものを欠片も持ち合わせていないというのか。ならばやはり、こうするしかない。

「妹です」

「……あ？」

「その事件で命を落としたのは、当時中学生だった、俺の妹です」

懐から取り出したのは、押収物からくすね、これから啄木鳥会が壳りさばくはずだつた拳銃。それを見た班長がさつと顔色を変える。見せつけるようにゆつくりと、その銃口を班長へと向けた。

おい、冗談はやめろ、と私腹を肥やし続けた罪人は後ずさる。

「冗談だと思いますか？」

艶子、今、仇を取つてやる。

脳裏に浮かんだのは、額から血を流して地面に横たわる、可愛い妹の姿だつた。

警察手帳をチラつかせて証言を得た。

あのエリートの優男が泊まつてゐるホテルの部屋。何故かは知らないが、本人はひと氣の少ない場所にある静かな部屋を希望したらしい。これは好都合だ。決行は深夜まで待つつもりでいたが、この分ならその必要もあるまい。

フロントのスタッフに適当な口実を作つて奴が泊つてゐる部屋に電話を掛けさせ、部屋にいることを確認させる。

「……お部屋におられるようですが」

「こりやどうも、捜査にご協力感謝します。すいませんね、急に変なこと頼んじまつて」

へりりと笑つてフロントを後にする。

刑事として何年も務めていれば、捜査令状がなくとも人を一般市民を言いくるめて言うことを聞かせることくらい出来る。警察手帳にはそれだけの威力があるのだ。そのうえ甘い汁も吸えるとあつては、これだから警察は辞められない。

「三枝さん、部屋わかつたぞ」

「そうか」

では行こう、と同班の細身の警部補は言う。

その手に持つバッグには、押収品からくすねてきたスタンガンが入つていた。

* * *

引き金に指をかけたその時、どこかからその声が聞こえた。

「では、現行犯で確保」

はつとしたその瞬間、拳銃を持った腕をひねりあげられる。肩と腕に鈍い痛みが走り、思わず拳銃を取り落とした。ばつと顔を上げると、俺の腕をひねりあげていたのは。

「……何で、三課の……!?」

「おうクソガキ、あぶねーことしやがるじゃねえか」

その傍でやれやれと拳銃を拾い上げたのもまた、長野県警捜査三課

のベテラン刑事。何故、彼らがここに。

はつとして声が聞こえた方に顔を向けると、そこにいたのは、やはり。

「白樺管理官……！」

「はいどうも。しかし、俺だけじゃありませんよ」

次々と顔を出す、捜査一課の面々。それぞれ怒りと無念さを露わにした表情を示す中、無表情のその人はすっと前に進み出て、口を開いた。

「竹田にも手錠を掛けろ。みつちりと事情聴取をせねばならん」

「黒田捜査一課長……！」

捜査一課長の指示で竹田の腕にも手錠が掛けられる。

放心していたそいつは、その手錠の重みでようやく我に返つたらしい。逆上して一課長に食つて掛けられた。

「課長、俺は被害者です！ 何で俺にまで手錠を……！」

「竹田ア、いい加減年貢を納めろ、みつともねえ」

口を開こうとした一課長に先じてそう言つたのは、手の中で俺が持つていた拳銃を弄ぶ三課のベテランだつた。相変わらずの皮肉気な笑みをたたえながら、その瞳には明確な侮蔑が見える。

「何かやつてるだろうとは思つてたんだよ、何せ刑事の安月給の割にやけに派手に遊んでたしなア？ しかも大した手柄もねえのにとつとと昇進しちまうと來たもんだ。どうせ繫がつてるお上に口でも利いてもらつてたんだろ？」

「お前のいる、『啄木鳥会』だつたか？ もう終わりだぜ、証拠は全部揃つてんだそうだ」

なあ管理官、と俺の腕をひねりあげる刑事は白樺管理官に顔を向けた。そこでようやく管理官はその無表情にいつもの笑顔を乗せる。しかしあまり、目は少しも笑つていなかつた。

「もう、さんざん甘い汁は吸つたでしよう？」

その報いを受ける時が来ただけですよ、とさらりと宣う。そして、と俺のほうにも顔を向ける。視線が絡んだその瞬間、背筋にぞくりと冷たいものが走つた。

「どんな理由があろうが、憎しみに負けた貴方に警察官たる資格はありません」

何の感情も含まれていない言葉だつた。ただ事実を、淡々と述べるような。俺に、何の興味もないとそれだけでわかるような。何故か、俺は何も言えなかつた。その言葉以外の何も、俺の耳には入らなかつた。何かが、壊れたような気がした。

ひどく遠い場所で、連行しろ、という声が聞こえたような気がした。

「いやあすみませんね、身内を張らせるような真似させて」

そう朗らかに言う少し前に来たばかりの若い上司は、どうやら少しも悪いとは思つていなさそうだった。

全責任は自分がとるから油川——秋山をマークしてほしいと言われた時には、何を考えているのだろうと思つたが。ケチな泥棒を追いかけるのが仕事の俺たちにまっすぐに頭を下げるその姿勢は、認めてもいいと思つた。上層から駒扱いされるのにはとつぶに慣れっこの俺たちも、貴方方の力が必要ですなんて言われたら、そりやあ若造の言うことでも少しばかり聞いてやるかという気にはなるわけで。

「俺たちは上司の命令に従つただけなんですね」

そう言うと、白樺管理官はまた人好きのする笑みを見せた。この笑顔に騙されではないといつても、なんだかんだで三課の刑事は皆、最終的には彼の言うことに従つてゐる。お偉いエリートのくせに、変な奴だ。

「そういうや管理官、別の奴らの方は大丈夫なんです?」

思い出したように、今回タッグを組んで秋山を張つっていたそいつが言う。

「管理官の後輩とかいうの、見張らせいたんでしよう?」

「ああ、そつちの方は……つと、ナイスタイミング」

鳴り響いたスマホは、どうやらその後輩くんからのようだつた。随分と顔のいい優男だつたが、見るからにこの管理官に振り回されてい

るよう見えた。警察学校における上下関係が絶対なことを知つて
いるだけに、同情しかない。どうせこの男に会つたときからこき使わ
れているのだろう。気の毒に。

はい、と笑顔で電話に出た腹黒管理官は、終わつたかの一言。電話
口からは氣の毒な彼の声が漏れ聞こえる。

『はいはい終わりましたよ、というか俺が狙われるのも読んでたで
しょ。一言くらい心配の声があつてもいいと思いません?』

「俺の自慢の後輩ならきっと大丈夫だろうと思って。どうせ傷一つな
いんだろう?』

そうですが、と不満げな声が聞こえる。

柊木さんに何か、と諸伏が口を挟んだ。すると管理官はそれに応え
るように通話をスピーカーモードに切り替える。

「三枝警部、鹿野警部補両名がホテルに乗り込んで柊木を襲撃したよ
うです」

そう言うと、その場に残つていた捜査一課の連中が息をのむ。あい
つら、そこまで腐つてやがったか、と大和が言い捨てた。

そのまま一課長がスマホに向けて話しかけた。

「柊木君、黒田だ。本当に怪我はないのか」

『ああ、黒田一課長、恐れ入ります。ええ、予想はしていましたし、無
傷です。ホテルの部屋のドアを開けたところを襲い掛けられましたが
が、取り押さえました。鹿野警部補がスタンガンを持しておりまし
たので、気絶させてどこかに連れ去るつもりだつたようです』
「……取り押さえた?』

思わずと言つたように一課長が繰り返す。俺を含めた皆も目を丸
くしていた。まるで鍛えているように見えない優男だつたが、歳を
重ねたとはいえ現場を走る刑事二人を相手に「取り押さえた」とは。
それを察したのか、管理官は面白そうに言う。

「あいつ細身に見えますが、脱いだらすごいんですよ
『ちよつと言ひ方考えてもらえますか、先輩』

『本当のことだろ。投げ飛ばしでもしたのか?』
『投げ飛ばしついでに肘鉄入れて氣を失つてもらいました』

さすがだな」と管理官はさらりと言い、後輩君は警察関係者なら自分の身くらい守れて当然でしょと当たり前のよう宣う。なるほど、管理官が便利に使いたくなるくらいには優秀な後輩のようだと苦笑する。何にせよ、怪我がないならそれに越したことはない。

『とりあえず俺を見張つてくれた三課の方々に引き渡しましたので』

「ああ、無事でよかつたよ」

『よく言いますね、人を餌にしておいて』

秋山巡回部長が動かなかつた場合のこと考へて俺という「監察官」を連れまわして喧伝し、啄木鳥会の「誰か」をあぶり出そうとしたんでしょう？

そう言われても、管理官の笑顔は揺らがない。むしろさらに濃くなつた。

『そう拗ねるなよ柊木、ちゃんと警護つけといてやつただろ?』

『俺を張つてた三課の皆さん、俺が危なくとも手を出すなど厳命されてたつて話なんですけど』

『いやあ持つべきものは有能な後輩だよな！　じゃ、また聴取でな！』

さつと言い捨て、管理官はふつつと通話を切つた。

数秒の沈黙が流れた後、大和がアンタなあ、と口火を切つた。

「啄木鳥会のあぶりだしにしたつて、もつと方法があつたんじやねえのか！　わざわざ東都から後輩連れてきて危険に晒す必要まであつたのか!?」

何より、と勢いのまま大和は管理官に詰め寄る。

「確かに秋山のしたことは許されることじやねえ！　だが、監察官を連れまわして今回の犯行を煽つたのはアンタだろ！　罪を犯させる前に秋山を止めることがだつてできたんじやねえのか！　なあ、エリー！　トの管理官さんよ、違エのか!?」

よせ大和、と一課長が大和を制する。

鼻息の荒い大和を前にしても、管理官は一切の顔色を変えなかつた。ただ、いつも通りの口調で言う。

『何と思っていたいても結構です。認められたいとも思いません。

俺は啄木鳥会に入り押収した拳銃を横流しして私腹を肥やした罪だけではなく、

警察官でありながらその心に殺意を抱いたという罪を、見逃したくなかつただけです。

そう言つた管理官の声には、言葉に表現できない重みがあつたような気がした。

さんざんな長野旅行だつたと、旅行鞄を車に詰め込む。いやもうこれは旅行じやねえか、と一人ため息をついた。

「何だお前、やけに辛氣臭い顔してるな」

と、思つたら後ろから聞こえてきた、その元凶の声。心底嫌な顔を作つて振り向いた。

「……先輩、どうも」

「おう。何だよお前、見送りに来てやつた先輩に対してその顔は」「むしろ何で笑顔で迎えられると思つたんですか」

お陰様でさんざんな長野でしたよ、と恨み言を吐けば、長野に罪はないだろと正論を返された。そうですね罪があるのは貴方です、とうも言えずに、ハイハイと適当に流した。

先輩は俺のそんな態度にも構わず、ほい、と紙袋を差し出す。

「何ですか？」

「俺と、三課の人たちと、それに一課の人たちから土産。それぞれおすすめの長野の特産入れてくれたらしいから期待できると思うぞ」

紙袋を覗き込むと、ぎつしりと地元名産であろうお菓子や総菜、お酒が詰め込まれていた。もはや紙袋が破れそうなほどに詰めこまれたそれはさすがに重い。この分だと用意してくれたのはひとりやふたりではないのだろう。有難く受け取りつつお礼を言つた。

「皆さんにもよろしくお伝えください」

「ああ。……柊木」

「はい？」

改めて顔を上げると、先輩は警察学校時代から変わらない、いつも通りの笑みを浮かべていた。

「これに懲りずにせいぜい俺の役に立つてくれよ、後輩♡」

その分、俺もお前らを助けてやるから。

相変わらずの言葉の裏にそんな意味を感じて、苦笑する。

本当に、この人は。

「……何で警察学校の上下関係って、こんなに面倒なんでしょうね」

次にこき使うのは俺以外の奴でお願いします。

そう言うと、先輩は声を上げて笑った。

襲撃のあと県警に向かい、ようやく一通りの聴取がひと段落したとき。やれやれと聴取室を後にすると、諸伏さんが声を掛けてきた。

「お疲れさまでした、柊木さん」

「諸伏さん。お疲れ様です」

さすがに眠そうですね、と言われ、隈でも出来ているのだろうかと目元をこする。

早朝から車を飛ばして長野に入り、そこから県警の挨拶回りを終えて今度は「啄木鳥会」について。そして最終的に闇討ちされかけて擊退し、事情聴取を終えればもう夜が明けている。確かにさすがに寝たい。もともと俺は朝型の人間で徹夜は得意ではないのだ。

「ええ、お許しが出たのでホテルに戻つて仮眠を取ろうかと」

「そうでしたか。……そのあとは、すぐ東都に？」

「いえ、もう一泊してから帰る予定です」

そのつもりで予定も組んでいる。日程に余裕があるのに体調を万

全に整えることもなく長時間運転には挑みたくない。

俺の言葉を聞き、では、と彼は口を開いた。

「今夜、一杯付き合つていただけませんか」

*

指定された先は、少々お高めに見える個室のある飲み屋だつた。飲み屋といつても小料理屋や料亭と言つた方が近いかも知れない。諸伏さんがいても何ら違和感のないほど、上品で落ち着いた店だつた。

「お酒は?」

「では、少し」

日本酒は平氣ですか、と聞かれ、大丈夫ですと頷く。

運ばれてきたのは長野の地酒らしい。どうぞ、と諸伏さんのおちよこに注ぎいれると、貴方も、とお酌を返された。

「ここは地元の特産品を使つた料理が美味しいんです。これも長野の地酒ですよ」

「そうだつたんですか。お気遣いありがとうございます」

はるばる東都から来た俺に気を遣つてくれたのだろう。長野に来てから慌ただしくてろくに観光も出来ていない。せめて近場の名所や美味しいものくらいは食べて帰ろうと思つていたのでその心遣いが嬉しい。

喉を流れる地酒は爽やかで、飲みなれない俺でも美味しく感じた。料理との相性もとてもいい。これは飲みすぎないように気をつけなければ。旅先で、しかも友人のお兄さんの前で酔いつぶれるような醜態は晒せない。

「今回の件はお疲れさまでした。貴方は長野に呼ばれてから詳細を聞かされたと伺いましたが」

「ええ」

事前に聞かされていたのは、長野県警で監査すら巻き込んだ不正が行われている可能性があるということだけだつた。可能な限り証拠資料を揃えるから監察官としての意見を聞かせてほしい、そう言われて長野まで来了。

データでやり取りすればいいのではとも思ったが、先輩は「とにかく来い」の一点張り。思えばその時点でもつと警戒すべきだつた。白樺先輩の傍若無人に慣れすぎて違和感すら持たなかつた自分が悔しい。

「体よく利用された形になりましたね。まさか餌にされるとまでは思つていませんでしたが」

あの人のことですからもう諦めますけど、と溜息とともに言うと、諸伏さんは苦笑と共に言つた。

「白樺管理官は昔からその調子なのですか？」

「ええ。それはもう理不尽に振り回されこき使われ……俺のいた班は特にですね。そのくせ、他の人が俺たちを理不尽に扱うのは許さなかつたんですが」

俺たちに向けられた嫌味は先輩が百にして返していた。

俺たちに向けられた嫉妬は先輩が鼻で笑つて切り捨てていた。

俺たちに向けられた悪意は、俺たちが知らないうちにその芽を摘まれていた。

否応なしに目立つ立ち位置にいた俺たちを、少なからず守つていてくれたことはわかつている。たとえその理由が「将来的に自分のため」という先輩の言葉通りであつたとしても。

確かに俺たちは、助けられていた。

「良い人ではないですが、悪い人でもないんですよ。多分」
多分とつくるのが哀しいところ。

だが、きっとあの人に声を掛けられて動くのは俺だけではない。少なくとも同班だった連中は皆、先輩から声を掛けられたらなんだかんだ言いながらも動くのだろう。まーたあの人か、と諦めてその言葉に従つてしまふ程度には、俺たちも手懐けられている。

諸伏さんは小さく笑い、わかる気がしますと頷いた。

「ベテラン揃いの三課の皆さんをまとめあげた手腕は見事と言うほかありません」

「昔つから人を使うのが上手い人なんですよ」

ぱつぱつと世間話を続けながら目の前の皿を空にしていく。

ときどき美味しい、と言葉を漏らすと諸伏さんによる地元の食べ物事情の解説が飛んできたり。地元愛というのもあるのだろうが、もともとが博識な人なのだろう。節々にその広く深い知性が感じられて、ただの世間話でも興味深い。

物静かな人かと思つたけど結構喋るなこの人、と思つたとき、空の
おちよこに気づいた諸伏さんはまた徳利を掲げた。

「いかがですか？」

「恐縮です」

大丈夫だ、まだいける。自分の酒量を計算しつつ、俺もおちよこを手に取つた。

ゆつくりと酒を注ぎながら、おもむろに諸伏さんが口を開いた。
「君に勧む金屈卮

満酌辞するを須いず

花発けば風雨多し

——人生別離足る」

聞き覚えがあつた。日本でも非常に有名な、于武陵による漢詩「勧酒」。

別れをテーマにしたこの詩は、井伏鱒二が現代語訳をしたことでも知られている。むしろ日本では、その現代語訳の方が有名かもしいれない。

つい、諸伏さんに応えるように俺の口をついて出た。
「この杯を受けてくれ、

どうぞなみなみ注がしておくれ。

花に嵐の例えもあるぞ、
さよならだけが人生だ」

特に最後の「さよならだけが人生だ」、この文句は一度くらい聞いたことがあるだろう。俺も詳しい方ではないが、多分学校の授業か何かでも聞いたような気がする。今でも譖んじられる程度には気に入っていたのかもしれない。

「失礼、ふと思い出しただけなのですぐ」

少しだけ瞳に寂しさを滲ませた諸伏さんは、苦笑して言つた。いえ、と相槌を打つと、少し重い沈黙が流れる。

この食事が始まつてから一度も、諸伏さんの口から諸伏のことは出てこない。何となく諸伏のことを出そうとした雰囲気は何度か感じ取つたが、そのたびに彼は別の話題を口にした。その複雑な胸中は、

俺にはわからない。

もしかしたら彼は、諸伏の状況を察しているのかもしれない。「警察を辞めた」という風の噂、不自然な音信不通、それ以外にもきつと得られる情報はわずかながらにあつただろう。これだけ頭の良い人なら、それらを繋ぎ合わせて「潜入」という答えを導き出してもおかしくはない。それを確かめる術が存在しないということもまた、わかるはずだ。

仮に俺が諸伏の現状を知っていても、決してそれを口に出来ないということも。

「……さよならだけが人生だ、というのは、何とも的を射た訳ですね」その一言には、いつたいどれだけの想いが込められているのだろうか。

何と返したらいいのかわからなかつた俺は、少し黙つた後、少し躊躇いつつ口を開いた。

「……確かに、さよならだけが人生ならばまた来る春は何だろう、と書いた人もいましたよね」

「寺山修司ですね」

さすがは博識、さらりと答えが返ってきた。俺はそういうものに詳しくないので、解釈がどうのと議論することは出来ない。

だがまあ、詩や言葉というものはそもそも解釈など自由だろう。

「……さよなら、という言葉は『左様なら』から来ていると聞いたことがあります」

「そう言われていますね。左様なら、つまり、『そういうことなら』別れましよう、というところでしょうか」

「ええ。『そういうことなら』別れましよう、残念ですね、と言つてるようで、さよならという言葉自体に別れを惜しむ感情が込められていて、俺は解釈しています。日本語って面白いなどこれを知つた時は思つたんですけど」

浅学を晒しているようで、自分が詳しくない話は正直あまりしたくない。その気持ちを上手く隠せず、何となくしどろもどろな話し方になる。

しかし諸伏さんは、笑うことなくじつと俺の言葉に耳を傾けてくれた。

「……個人的に、この解釈にはもうひとつ言葉を添えたいなと」

「どういと？」

「さよなら……『そういうことなら』、残念ですがお別れしましょう。でもきっと、」

いつかまた、再会を。

そこまで言うと、諸伏さんの手が一瞬止まった。

「別れを惜しみ、再会を願う……いえ、もしかしたら、再会を『誓う』。俺はさよならを、そういう言葉だと思ってるんです」

さよならだけが人生かもしれない。別れを積み重ね、それでも生きていくのが人間なのかもしれない。だけどその別れはきっと、辛いだけのものでも、苦しいだけのものでもない。またきっとどこかで出会いましょうと、希望を積み重ねて生きていくのだと。俺はそう思ったい。

つまり俺が何を言いたいのかと言うと。

「さよならしたからって、もう会えないとは限らないでしよう？」

どうか、再会を諦めないで欲しい。

貴方の弟は、五体満足で生きている。危険を乗り越え、立派に職務を果たしている。今はまだ、貴方にそれを知らせることは出来ないけれど。聰いこの人ならきっと言葉にしなくともわかつてくれると信じて、俺はじつと諸伏さんの瞳を見つめた。

じつとこちらを見つめていた、猫目がやわく細められる。

「……ええ、そうですね」

僕としたことが、少々感傷的になりました。

彼はそう言つて手元のお猪口に口をつける。一息に飲み干し、微笑んだ。

「では僕は、また来る春を待つとしましょう」

せめてそう遠くないことを祈りますよと言つたその人の笑い方は、やはり例の同期にそつくりだつた。

*

長野から戻り、その事件がすっかり思い出になつたころ。

珍しく、諸伏から集合のメッセージが飛んできた。しかもどうも飲み会ではなく、もらひものの消費を手伝つてほしいらしい。珍しいこともあるものだといつも通りの五人を迎えてみれば、諸伏の手には何やら大きな箱入りの紙袋。

「調理が必要なものか?」

「ああ、湯がかないといけないから鍋貸してくれ」

「湯がく?」

諸伏はやけに嬉しそうに箱をあけて、じゃーんと俺たちに見せた。お、これは。

「長野特産高級蕎麦セット六人前!」

おおつと歓声が上がる。特に食に対して貪欲なグラサンと和食が大好きなガングロは子どものように目を輝かせた。いや、これは正直俺も嬉しい。以前長野で食べた信州蕎麦は本当に美味しかった。

「えつこれどうしたの、貰い物つて」

「ほら、長野に兄がいるつて話はしたことあつただろ? 潜入してからはずつと連絡とつてなかつたんだけど、全部片付いたし久しぶりに電話してみたんだ」

少し恥ずかしそうにしつつも嬉しさを隠せていない諸伏。実を言うと、気を遣わせるだけになるだろうと思つて諸伏さんと会つたことは諸伏に話していない。心配していたと伝えたところでどうするともできない諸伏にとつては負担になるだけだろうと思つたし、その時が来たら諸伏が自分から連絡を取るだろうと思つたからだ。

きつと諸伏さんも喜んでいるだろう。嬉しそうな顔の諸伏が微笑ましい。

「そんで話の中で、久々に蕎麦が食べたいって言つたら送られてきたさ。お前らの話もしたから六人前なんだと思うんだ。だから皆で食おう」

そう満面の笑みで言う諸伏に、よつしや湯がくか、と袖をまくつた。

いただきます、といつも通り三十路の集まりとは思えない声が響く
柊木の家。続いて「なにこれ美味しい」「蕎麦の味が濃い……」「えつ蕎
麦ってこんな美味しいの?」「このつゆも美味しいな……」そんな声がぽん
ぽんと飛んでくる。そして止まらない景気のいい蕎麦をすする音に、
不思議なくらい笑えてきた。

俺はさつとスマホを取り出しカメラを起動する。そして全員の顔
と蕎麦が入るようにスマホを構えた。

「はい一旦スマホ見てー。いやちよつとスマホ見ろつて言つてるだろ
松田。あつコラ隠れるな柊、ほら、ちゃんと全員入つて」
かしやりと音を立てて、そんな一場面を記録する。相変わらず馬鹿
面で、何人かは蕎麦をすする途中のまま。あまりにもいつも通りの俺
たちだが、いつも通りだからこれでいい。

「何だよいきなり写真撮つて」

「そりや蕎麦の送り主にちゃんと美味しく頂きましたつてお礼言わな
きやだろ?」

メール画面を起動し、写真を添付。そして何か一言——何がいい
だろう。

ただお礼を言うだけでは、何か違うような気がした。少し考えたと
き、ふと幼いころの記憶がよみがえる。そういうえば東都に引越しし
て、ゼロと友達になつて、それが嬉しくて兄さんに電話をしたことが
あつた。

ああ、そうだ。確かにあの時、兄さんにこう言つたんだ。兄さん、覚
えてるかな。

『高明兄さん 僕、東京で友達ができたよ』
ゼロだけじゃなくて、こんなにも。ずっと俺と一緒に笑ってくれ
る、友達が。

スマホがメールの着信を告げる。

ポケットに手を伸ばして届いたメールを確認すると、最近数年ぶりに連絡をしてきた弟からだつた。一言のメッセージと、送った蕎麦を頬張る彼ら。

思わず少しだけ笑みを漏らして、そつと携帯をしまう。今は勤務中だ、私用のメールの返信は後でゆっくりするとしよう。

「……んだよコウメイ、何かあつたか？」

「何ですか？ 何もありませんが」

もはや腐れ縁の男は、失礼にも不審そうに私の顔をまじまじと見る。

「やけに浮かれてるじゃねえか」

そう指摘され、少々面食らう。浮かれてなどいだらうか。そんなつもりはなかつたのだが、改めて表情を引き締め直す。

「何でもありません。……が、そうですね」

「あん？」

「管鮑の交わり」

「……あ？」

この数年、弟に何があつたのかは知らない。ある程度の予測がつかないこともないが、それは兄として、警察官として、尋ねるべきではないことだ。そして、その予測が正しければこの数年相当に苦労をしただろう弟が、友人に囲まれてあんなにも気の抜けた顔で笑つている。それはきっと、彼らの存在のおかげなのだろう。

立場も関係のない親しい友人というものは、非常に得難いものだ。それを景光が得ているという事実。それが何よりも、喜ばしい。

「……いえ、ひとりごとです」

今度はおやきの詰め合わせでも送つてやるとしようか。

そう思つたとき、再度スマホがメールの着信を告げる。今度は何だと画面を見ると、先ほどの写真には隠れるようにひつそりと映つていた彼から、ひとことだけ。

『春、來たでしょ？』

ええ、来ましたよ。

待っていた甲斐があつたというものです。

六花、紡ぐ

それは珍しい、降谷^{ゼロ}からのメッセージだつた。

深夜ちかくに送り付けてきて、何かと思えばその早朝に集合しろとのこと。

相変わらずの傍若無人に何だコイツと思いつつ、あまりに美味そうな餌をぶら下げられては向かわざるを得なかつた。そしてそれを、俺は今心底後悔している。

「……俺は朝イチとれたての美味しい魚が食えると聞いて、この早朝に眠い身体引きずつてきたんだが？」

当直の徹夜明けに、海面の照り返しは辛い。愛用のサングラスをかけていても目がびりびりと痛かった。

なのに呼び出した当の本人と来たら、わざわざ用意してやつたぞ感謝しろと言わんばかりの表情で釣り竿を差し出している。いや間違いないなくこいつはそう思つてる。

傍若無人が服を着て歩いているようなそいつは、しつとした顔で言い放つた。

「釣れたらちゃんと捌いてやるよ」

なら釣つてから呼べ。

心底そう思つたが俺が口でこいつに勝てるはずもなく、ゼロがただ俺たちに魚を食わせてくれるような生易しい性格でないことを考えていいなかつた俺も悪い。コイツからの連絡だつた時点で予測すべきだつた。反省。

「てつきり朝イチ獲れたての魚買つてきて料理してくれるもんだと……そんな甘い話あるわけないのにね……降谷ちゃんだもんね……」

ゼロの後ろで、遠い目をした萩原が手の中でウキを弄んでいた。

その傍で、傍若無人に慣れきつてもはや楽しんでいる猫目が笑う。

「ははは、まあそう言うなつて。釣りも楽しいよ」

やつたことあるかと聞かれて力なく首を振ると、じゃあ初挑戦だなと諸伏から元気な声を掛けられた。

もうどうにでもなれという気になり、とりあえずゼロから釣り竿を

受け取る。

「松田も初心者か。じゃあ俺が面倒を見よう」

「初心者と経験者がちょうど三人ずつで良かつたな」

「三人ずつ？」

「おう、俺も経験者だ」

しゃがんで竿の用意をしていた伊達が、首だけこちらに向けて言う。

その傍でしゃがみこんでいる奴も初心者らしい。まあ、正直したことないだろうとは思つた。聞くだけで泣けてくる寂しい青春を送つていた超絶イケメンは、お前何歳だという顔をしてきらきらと目を輝かせている。

「伊達、これでいいのか？」

「お、ちゃんと結べたな」

そうだ、こいつたまに精神年齢五歳になるんだつた。

幼児もかくやというほどに目を輝かせた柊木は、手元でちまちまと釣り糸を結んでいたらしい。出来栄えを伊達に確認してもらうその姿は、もはや親子のようだつた。いや二人は同じ年だし、むしろ伊達より柊木の方が誕生日は早いのだが、もう雰囲気的に仕方がない。「見てないでお前も準備しろ、松田。来るのが遅かつたから竿の用意は済んでる」

「……おう」

「ハギも用意出来たな。じゃあ餌つけるか」

「はいはー、て、……え、餌つて……」

ばかりと諸伏が開けた小箱に入つていたのは、——名状しがたい、いや名状したくない感じの、まあ、小さな虫だつた。

中を見たハギがあつと顔色を変える。

「うえつきもい！や、ちょっと待つて俺そういう虫は無理!!」

「何だ、情けないな」

呆れたようにゼロは言うが、かく言う俺も好んで触りたくない。ゼロが付けてくれるほど心優しい奴ではないことくらいわかっているので、仕方なく覚悟を決める。

にここにこ笑顔の愉快犯は、楽しそうに小箱をハギの顔に寄せて遊んでいた。鬼か。

「まあ普段見ない類の虫だからな。柊木は大丈夫か?」

苦笑する伊達にそう言われて柊木も小箱を覗き見る。

どんな反応をするかと思ったが、うーんと首をひねり、まあ平氣と答えた。

「毒持つてたり噛んだりしないなら、別に」

「相変わらず旭ちゃんたら判断基準が理性的……」

「所詮虫だし。松田も苦手?」

「……好んで触りたくはねえな」

やるけど、と言葉を付け加えると、満足そうにゼロは頷いた。やっぱりお前付けてくれる気なしかよちくしよう。

その様子に伊達と柊木は苦笑している。

「まあ、とにかく美味しい魚食うために頑張ろうぜ」

せつからく早朝に集まつたんじよ、と笑う伊達に、溜息を返すしかなかつた。

* * *

とにかく、眠い。

いつもの早朝のトレーニングよりさらに早く起きたこともあり、気を抜けば瞼が下りてきそうだ。すぐに釣れてくれれば眠気もまぎれるのだろうが、さすがにそう都合よく釣れるわけもない。

「ふあ……、

思わずあくびを漏らすと、隣にいたヒロくんが眠そだなと苦笑する。

「そつちは眠くない感じ?」

「眠気のコントロールはわりと得意だから。よく叩き起されたり連日徹夜してたりしたからな!」

その言葉にかつての上司その一はそつと目を逸らし、かつての上司その二は特に気にした様子もなく鼻歌を口ずさんでいた。

ちなみに柊木の鼻歌は音痴ではないが、どこか微妙にリズムがズレている。俺たちといふときしか鼻歌を歌うことはないので知られていないが、実は旭ちゃん、リズム感が微妙らしい。

「それについてコメントは？」

「……すまなかつたとは……」

面白そうに松田が聞くと、降谷がぼそぼそと答える。柊木はと話を振ると、そういうときは悪びれない旭ちゃんはしれっと答えた。

「こき使えって言つたのは諸伏だ」

「さすが暴君だなオイ」

苦笑する伊達に、もう柊木の部下は「めんだな……と遠い目をする諸伏。

詳細は知らないが結構な暴君ぶりだつたと聞いている。俺も旭ちゃんの部下になるのは御遠慮したい。絶対「え、これくらいお前ならできるだろ?」ってぎりぎりの死線を走らされるのは目に見えている。

そのとき眠い目を擦っていた松田が、ふと思いついたように口を開いた。

「お前ら柊木の腹黒さに気づいたのいつ?」

その言葉に、特に考えることもなく四人揃つて即答した。

「初めて説教されたとき」と、俺。

「運動会のマジ切れのとき」と、伊達。

「教官言いくるめて全員の外泊許可奪い取つたとき」と、諸伏。

「深夜の模擬パトロール訓練で先輩達を返り討ちにしたとき」と、降谷。

当の本人は平気な顔ではははと笑つた。

「全部警察学校入学してふた月も経つてないときの話だな。ところで話題のチョイスと即答ぶりに悪意を感じるんだが」

気のせいだろ、と松田はさらりと流す。

変わらずけらけら笑う諸伏が、松田はいつなのと話を返せば、いまだ眠そうなグラサンヤンキーもまた即答で返す。

「大人しく言うこと聞くふりしながら、いびつてきた先輩の靴ひも踏

んで転ばせたのを見かけたとき」

「え、松田見てたの？」

思わずと言つたふうに言葉を漏らした柊木に、揃つて噴き出す。
やつぱあれわざとかと松田が笑うと、柊木はおつと、と自分の口を
塞いだ。

「しかもお前、わざと地面がぬかるんでるところ狙つて転ばせたろ。
あの頃はまだお前大人しかつたから半信半疑だつたけど」

「めんどくさかつたから早く終わらせたかつたんだよ。ドロだらけの
服でいたら教官に叱られるだろ、だから早く着替えに行つてくれると思つて」

さつすが旭ちゃん、と笑うと、見られてるとは思わなかつたと当
の本人はボヤいていた。

「あとから仕返しとか大丈夫だつたのか？」

「そのままあとに白樺先輩に目玉付けられたから」

あー、と全員が納得した声を揃えた。

白樺先輩というのは、なんだかんだで俺たちの面倒を見ててくれた、
これまたとても頭のいい先輩だ。柊木がそれ以上絡まれないようには
適当に釘をさしてくれたのだろう。あの奥底の見えないにこやかな
顔が脳裏に浮かんでぞつとする。

「やつぱりいい先輩だな、あの人は」

「いや、自分が存分に俺で遊ぶために邪魔だつただけだと思う」

うんうんと伊達が言つたのを、眉間に皺を寄せた柊木が即座に否定
した。多分旭ちゃんが正解。あの人はそういう人だ。

長野県警に出向していると噂で聞いたが、あの腹黒性悪愉快犯な愛
すべき先輩はお元気だろうか。こき使われそうだから会いたくはない。
いやあなつつかしいねえ。もうそこそこ前になるのに覚えてるもん
だな」

「何ジジくさいこと言つてんだ萩原。たかが十年くらいだろ」

「たかがつて何よ陣平ちゃん。十年つて結構なもんよ？」

不思議と鮮明に思い出せる、こいつらとの時間。

それだけ強烈で、退屈しない時間を過ごしてきたということだろうか。十年後にも同じように思い出せそうだから不思議なものだ。

「……つまり俺らの付き合いも十年くらいか」

「はは、切れそうもない腐れ縁だな」

「全くだ」

感心したような伊達に、さらっと笑う諸伏、そして苦笑する降谷。

松田と柊木の口元にも、穏やかな微笑みが浮かんでいる。

「……その腐れ縁のよしみで頼みがあんだけどよ、お前ら」

少しの沈黙が流れたあと、伊達が声を改めた。

視線をやると、自分の釣竿を見つめたままの伊達の横顔は、少し緊張した面持ちで言つた。

「ちよつと改めて時間つくつてくんねえか？」

「……今じゃだめなのか？」

同じく声を改めた降谷が、聞く。

伊達は少し口元を綻ばせ、答えた。

「あー、えつとな。……せつかくだから、二人揃つて話してえんだよ」

「まず、彼女を紹介させてくれ。

そう言われて思い出す。ああ確かに、あれからもう三年だ。

緊張した空気が解け、また皆で笑つた。

「とりあえず柊木、覚悟決めとけよ」

「さすがに初対面で卒倒はちよつとね〜」

「そうだ聞いてくれ、先日ようやく梓さんと笑顔で会話することに成功したらしい」

「お、リハビリの成果だな！そつかこの前の赤飯はそれか」

「柊木……一応彼女には事情説明しとくからな……」

「はははお前らマジでうるせえ」

いつもの軽口が戻ってきたとき、ぽちやりと伊達のウキが音を立てた。

六花、言祝ぐ

こんなに緊張した顔をした柊木を、かつて見たことがあつただろうか。

公安に引き抜いて例の案件の指揮官を任せたときですら、ここまでがちがちに緊張はしていなかつたようだ。まあ、原因がわかつているだけに何とも言えない。

居酒屋の個室に集合し、今日初めて「彼女」と顔を合わせた。事情を聞いているという彼女は、距離を取つた方がいいと考えたからだろう、伊達に半分隠れるようにして口を開いた。

「あの、……この距離なら大丈夫かしら。ナタリーです、初めまして」「あー……柊木？ 大丈夫か？」

伊達も続いて声を掛ける。二人の声を聞き、一瞬柊木が固まつた。すぐには返事をせず、ひとつ呼吸をする。深く息を吐いたとき、一緒に柊木の力が抜けたような気がした。表情がほぐれ、わずかに余裕が生まれている。

その顔を見た同期たちも、お、という顔をしたのが見えた。

「……初めまして、柊木旭です。お気遣いありがとう」

そしてなんと柊木は、緩く微笑んでさえ見せたのだ！

あら、と少し驚いたようにナタリーさんがつぶやくが、もはやそれどころではない。一瞬で顔色を変えたのは俺たちの方だつた。

「どしたの旭ちゃん、何か悪いもんでも食べた？」

「飲んでないのに酔つたのか？ どこまで下戸なんだよ」

「いやもしかして熱でも……体調悪いか？ 帰つて休むか？」

「まだ飲んでないから今なら送つてやれるぞ」

「悪かつたな、体調悪いのに無理してきてくれたのか」

「お前らちよつと正座しろ」

ごきりと柊木の指がいい音を立てる。気にせずその額に手を当てると叩き落とされた。どうやら熱はなさそうだ。といふことは。

「さては誰かの変装か……？」

「いい加減マジで殴るぞ降谷」

柊木の顔が本当に怖くなってきたところで、紅一点が噴き出した。ごめんなさい、と小さく零しながら、肩を震わせている。

「本当に仲が良いのね。聞いていた通りだわ」

目尻に浮かんだ涙を拭いながらナタリーサンが言う。何を言つたんだよと松田がつっこむと、伊達は苦笑して誤魔化した。

「で、大丈夫なの？旭ちゃん」

萩原の言葉に、柊木はナタリーさんを見つめながらうーんと首を傾げ、大丈夫っぽいと軽く言つた。確かにその顔にもう緊張は見られず、いつも通りの呑気な顔をしている。

「……柊木が女性の前でこんなに平気な顔をしてるなんて……」

「諸伏うるさい」

口元をひん曲げた柊木に、本当のことだと皆で笑う。
少し安心した顔のナタリーサンが、改めて柊木に話しかけた。

「普通にお話しても大丈夫かしら？」

「ああ、大丈夫だと思う。気を遣わせて悪いね」

「いいえ、大丈夫なら良かつたわ。航くんからよく話は聞いていたから、できれば仲良くしてもらいたかったの」

よろしくねと笑う彼女に、よろしくと笑う柊木。微笑ましい光景なのに違和感しかないのが何ともはや。全面的に柊木のせい。

自己紹介と世間話をしつつ、酒と肴を片づけていく。ナタリーサンは控えめだがノリは良く気遣いも上手で、時間は和やかに進んでいた。

二人の出会いの話を聞いてはひやかして、伊達の黒歴史の話をしてもナタリーさんを笑わせて。伊達の事故の話になつたときには、彼女が深々と萩原に頭を下げて慌てさせていた。女性相手に慌てる萩原というのはなかなか珍しいので面白い。柊木も自然にナタリーサンと会話をしていく、実は女性苦手が治つたのではないかと疑つたが、店員の女性にはビビっていたのでそうでもないらしい。いつたい柊木は何を感じ取っているのだろうか。

話をしているうちに、数か月後に予定しているという結婚式に話題がうつる。

「んじゃ、式の日取りもほぼ決定なんだ?」

「ああ。招待状は改めて送るからよろしくな」

「ご祝儀は期待すんなよ、お前もよく知つての安月給だ」

「端から期待してねえから安心しろ。……そのかわりじやねえが、お前らに頼みがあんだよ」

お、とそれぞれの手が止まる。頼みごとがあるという話は今日呼び出される前から聞いていた。少し改まつた様子で、伊達とナタリーさんが姿勢を正す。

「仕事で忙しいのはよくよくわかつてから断つてくれても全く構わないんだが、披露宴の余興、お前らに頼めねえか?」

突如落とされた爆弾に、俺たちは揃つて瞬きをした。

日を改めて、伊達以外の五人で集合した。例のごとく柊木の家だが、今日は酒ではない。伊達とナタリーさんから受けた依頼についてだ。

「引き受けたはいいが、何をするかだな」

む、とゼロが難しい顔をして言う。

二人の依頼を、俺たちは二つ返事で受け入れた。そりやあ仕事は忙しいが、腐れ縁の同期のめでたい席のことだ。できる限りのことはしてやりたい。俺以外の皆も同じ気持ちだつたのだろう。期待するなよと口では言いながら、その日解散してすぐ、この打ち合わせの日取りを決めていた。

だからこうして皆で集まり、難しい顔をしているわけである。それなりに器用な人間が集まっているが、だからといって人に見せられる特技があるわけでもない。

が、ひとりだけにんまりと笑つてゐる奴がいた。

「俺、ひとつ思いついてるんだけど、いい?」

そう言つて萩原が取り出したのは、スマホだつた。用意していたらしい動画を、俺たちに見せる。

画面にうつっていたのは、国民的人気を誇る男性アイドルグループのライブ映像だつた。笑顔とファンサービスを振りまく五人のアイドルに、女性ファンからの黄色い悲鳴が響いている。

「これやんない？ ドラマの主題歌やつた曲だからたいていの人知ってるし、テーマとしてもあつてると思うんだよね」

確かに歌詞から察するに、彼らが歌つているのはどうやら友の新しい一步を応援する曲だろうか。そのドラマも確か友情色の強いストーリーだったので、俺たちが伊達とナタリーさんに贈る曲としては悪くない。

それでもどうも弱腰になつてしまふのは、目立つことに対する消極的だからだろうか。いい歳して、という考えも正直なくはない。

「……つまり、歌つて踊れと？」

「小難しいこと考えるよりは手軽でよくない？」

「これ、手軽か？ おそらくそう思つたのは俺だけではない。誰でもダンスまで楽しめる曲として売れているだけあり、その振り付けはほとんどなく難易度が高いというわけではなさそうだが、一曲を踊り切るのであれば相当に練習も必要だろう。」

「……」の歳になつて歌つて踊るつてお前な……？」

「そうは言うけど陣平ちゃん、このアイドルさんたち俺らより年上よ？」

「アイドルとパンピーを同じ土俵で考えるお前がすげえわ」

「大丈夫自信もつて、俺たちちゃんとイケメンだから。特にれーくんと旭ちゃん見てみ？ ぶつちやけアイドルよりかつこよくない？」

「否定しにくいところ持つてくるのやめる」

漫才を繰り広げる萩原と松田をよそに、ゼロはまじまじと映像を見ながらふむ、と頷いた。

「……ダンスや歌の技術はさておくが、コピーする分には何とかなるんじやないか？」

「マジかよゼロ……」

思わず言葉を漏らすと、ゼロは平気な顔で続けた。

「実際、手つ取り早く盛り上げるという意味ではいいと思うぞ。ヒロ

だつて歌はうまいじやないか」

ゼロはそう言うが、うまいというほどのレベルでもない。そしてダンスなどやつたこともない。

しかし口ではあーだこーだ言つている松田も真剣な顔で映像を見ついて、一応乗り気でいることはわかる。そして確かに、無理に笑いを取つて盛り上げに行くよりはやりやすい手段であることも事実だ。とにかく練習するしかないか、と小さくため息をつく。

と、ふと先ほどから黙つたままの奴が一名いることに気付いた。他の奴も気づいたのか、そろつてそいつの方へ目線をやる。

「……………」

そこには、青い顔をして冷や汗を流す柊木の姿があつた。

＊＊＊

どんなものであれ、余興をすれば少なからず人の注目を集めるものだ。それは柊木も覚悟していたのだろうが、まさか全力で笑顔を振りまくアイドルの真似事、進んで視線を集めに行くことをするまでは予想していなかつたのだろう。

青い顔で若干震えている旭ちゃんに、発案しておいて何だがこれはまずいかと慌てて口を開きかける。別に思いついたから言ってみただけで、他の案を考えたつて構わないのだ。

そう思つて別のに、と言いかけたところで遮つたのは当の本人だった。

「やる」

え、と全員が固まる。

「皆でやれば多少は視線も分散されるだろうし、リハビリにもちようどいい。他に案があるわけでもないし……何より、」

俺だつて、ちゃんと二人の結婚を祝いたい。

どう見てもただの強がりだ。けれど、覚悟だけは伝わつた。嫌だろうが苦手だろうが、やると言つたら聞かないのが柊木なのだ。やめるとかと聞いたところで絶対に頷くはずがない。やだ旭ちゃんマジ頑固

う。

そんな旭ちゃんに皆で笑い、じゃあ軽くやつてみるかと、近くの公園に場所を変えた。そして、別の意味で旭ちゃんには驚かされることになる。

「……なあ柊木、お前ふざけてやつてんじやないんだよな？」

「……松田、わかつて言つてるだろ？ 僕はいたつて真面目だよ」

「……だよな、悪い」

真顔で言つた柊木に、思わず松田の方が謝つた。

簡単にパートを決めて、わかりやすいサビ部分から動いてみる。さすがそれぞれ運動神経も覚えも悪くない。腕はこうか、ステップはどうだと言いながら動きを確認し、実際に合わせてみた。

が、音楽が入ると不思議なほど揃わない。原因はわかっている。柊木だ。

「……自覚あるけど俺リズム感ないんだ」

「そうみたいだな。動き 자체はあつてるのに致命的にリズムが外れる」

「こら降谷」

冷静にばつさりと言つた風に諸伏がフオローに入るが、特に気にした様子もなくもう一度じつと見本の映像を見つめる。

何をやつても人より成果を出す姿しか見たことがなかつたせいか、旭ちゃんが何かに躊躇つて見本を見つめたところを初めて見た気がする。思わずそう口に出すと、柊木は画面から目を離すことなく答えた。

「日常生活と仕事に必要なことはだいたいできいいんだよ、俺。リズム感つていうのもそうだけど、そもそも飲み込みも良くな」
「いやそんなことはないだろ」

思わずと言つた風に諸伏がフオローに入るが、特に気にした様子もなく柊木はさらりと言つた。

「良くないんだよ。ものによつては人の五倍十倍練習がいる。自覚してるから落ち込んでも拗ねてもないよ。その分練習するだけだから」本当に本心を言つているらしい柊木は、気になった風もない。そしてまたスマホを置いて、動きを確かめるように練習を始める。その後ろ

姿を見て、思わず四人で目を合わせた。何を言うでもなく揃つて小さく笑い、ひたすら練習するその背中に続く。

「はいはい旭ちゃんまたリズムずれてるー。右手上げるところが一拍遅いんだよ」

「左足も違うんじやねえか？そこは手と足一緒に動くんだ」

俺と松田でその両肩を叩き、そして降谷が柊木の前に立つ。

「俺が前で一緒にやるから真似してみろ」

「じゃあ音楽もう一回流すぞー？」

なんやかんやと世話を焼き始める俺たちに苦笑しつつ、柊木はよろしく、と言つて真剣な顔で練習を再開した。

「……お前前回一番できてなかつたのに何で二回目になると完璧なんだよ……！」

「練習したからだよ。松田そこステップ違う」

努力に関して加減というものを知らないこいつは、しれっと俺の動きにまで指摘をしてみせた。前回の練習から数週間、いつたいどれだけ練習をしたのかと想像するだけで頭が痛くなる。クソ真面目もここまでくると病気だと思う。

「何というかさすがだな、柊木」

「足引つ張りたいわけじやないからな」

感心したようなゼロに、歌も一応歌詞と音は覚えたと柊木はさらりと返した。頭が痛い。別に何が悪いというわけではないが、ここまであつさりと追い抜かれると悔しいものがある。くそ、俺も次までには完璧にしてやる。降谷ほど病的な負けず嫌いではないが、俺にだつてプライドくらいはある。

その後も何度も動きを合わせ、歌のパートを確認した。たまにミスはあるものの何とか形にはなつてきていて、このままあと数度練習を重ねればとりあえず見せられるものにはなるだろう。

しかし発案のハギと来たら、何故かそれでは満足しないようで。

「アイドルやるからにはファンサも義務じゃん?」

「義務なの?」

「信じるな柊木。だいたい俺たちはアイドルをやるんじゃない、披露宴の余興をやるんだ」

え、と真顔で繰り返した柊木を降谷がさつと止める。まーたハギが何か言い出したと呆れた目をやる俺たちに、ハギは何故だか妙に熱弁した。

「何言つてるの降谷らしくもない! やるからには全力! やるからには徹底的に! それが降谷だと思つてたけど俺の見込み違いだつたのかね! まさかファンサくらいでビビるなんて!」

「……何だと?」

「こら、ゼロ、そんな挑発に乗るなってば」

ヒロが暴走癖のある幼馴染を止めにかかるが時すでに遅し。ゼロの目には完全に火がついていた。お前こんなに乗せられやすくてどうやつて潜入とかしてたんだよと思う。

「アイドルをやるつてことはつまり、ひとに夢を見せること! 希望をあげること! そして笑顔になつてもらえるよう頑張ること! ファンサだつてその一環!」

やるからにはそこまで徹底的にやんなきやでしょ!!

萩原が高らかにそう宣う。ふと、隣にいたヒロと目が合つた。なあ、萩原疲れてるのか、と視線で聞かれた気がしたが、俺は黙つて首を振る。

疲れていようがいまいがハギの頭の壊れ具合はいつものこんなものだ。俺の心を察してくれただろうヒロは、黙つて空を仰いだ。

残念なことに、ここまで来てしまつたら大抵やらざるを得ないのが俺たちなのだ。

「やるなら徹底的に、というのはわかつた。しかしファンサというのは具体的にどんなものがあるんだ?」

「さすがれーくん、そこなくちや! ライブ映像見て研究しよ! ほら三人も早く!」

未だよくわかつていらない様子の柊木と、ため息をつくしかない俺と

ヒロも、仕方なくハギに続く。

やるからには徹底的にやらなければ、というのはわかる。中途半端なことをして場を盛り下げるのも避けたい。ここまで来てうだうだとごねるなんてガキくさいこともしたくなかった。となればもう、腹をくくるしかないわけで。もう一度ヒロと目を合わせて互いに苦笑し、この先十年分くらいの恥を投げ捨てる覚悟を決めた。

余談だが、せつかくダンスと歌をマスターしてきた柊木も、今度はファンサのウインクができずに苦しむことになる。

本日はお日柄もよく。その言葉で始まるスピーチを聞いていると、今日という日が来たことを実感する。

慣れない礼服を身にまとい、隣にはドレスで着飾ったナタリーがいて。ふと目が合うと、幸せそうに微笑んでくれる。こんな幸せが、他にあるものか。ようやくこぎつけた彼女との結婚に、頬が緩むのは止められなかつた。

披露宴は和やかに進んでいく。時折目頭が熱くなつたりはしたがそこは意地で抑え込む。無理しなくていいのに、と隣の彼女は笑うが、俺にも一応プライドというものはある。部下も来てくれている手前、涙を見せたくはない。

そんな俺の我慢すら見越してか、にやにやと同期どもは笑つていた。この野郎、と思いつつ改めてやつらのテーブルに目をやると、気づいた。柊木の顔のこわばりがひどく、たまに震えている。

実のところ、何やら歌つて踊るとは聞いていたが詳細は聞いてない。リハーサルに立ち会つたプランナーのひと曰く、「本当にプロじゃなくて警察の方ですか？ 絶対盛り上がりりますよ！」だそうだが、いつたいどれだけ気合いを入れたのだろう。それに柊木、そんな顔するなら無理しなくて良かつたんだぞと本気で心配になる。他の四人に関してはいつも通りというか、むしろどこか吹つ切れた顔をしていた。本気で何をやるつもりなんだお前ら。

そうこうしているうちにやつてきた、余興の時間。さつと五人が立ち上がりマイクを受け取り、前に出た。組み合わせが意外なのか、会場がどよめく。何故かいそいそと手荷物をもつて前に出てくる数人の女性が見えた。筆頭の宮本がひどく楽しそうな笑顔だが、何か聞いているのだろうか。まあ、あの柊木が前に出ると言うだけで喜ぶのはわかるが。

すつと前に出た萩原が、人好きのする笑顔を見せて口を開く。

「えー、本日の余興を務めさせていただきます、新郎の同期、萩原と申します」

そのままテンポよく松田です、柊木ですと自己紹介を重ねていく。どうやら仕切り役は萩原が行うらしい。

「航さん、ナタリーさん、ご結婚おめでとうございます。さて、今回余興をとおふたりに頼まれたわけですが、何せ特に芸もないアラサー警察官五人組、実は何をするか非常に頭を悩ませました。しかしそんな俺たちに天啓を与えてくれたのは、他でもない新婦ナタリーさんの一言でした」

え、とナタリーと目を見合わせる。

萩原はにやりと笑つて、下手なものまねをしてみせた。

『航くんにも聞いていたけれど、貴方たちアイドルみたいにかつこいいのね』

そういうえば、確かに顔合わせの飲み会でナタリーがそんなことを言つた気がする。

「と、言うわけで」

萩原の言葉を引き継ぐように、その肩に手を置いた降谷が不敵に笑う。

「歌つて踊ります」

その言葉を合図に、音楽が流れだす。

ぱっと最初のポーズを取つてみせたそいつらは、確かに本職かと言ふほどに決まっていた。イントロで曲を察した女性陣は黄色い声を上げ、先頭を陣取つていた宮本たちはさつと荷物を取りだす。その手に持つていたのはペンライトとうちわだった。か、完全にアイドルの

ステージ……！

スタートは、諸伏のソロだつた。伸びやかな声が会場を包み、一瞬で空気を作り上げる。いい声をしているとは前々から思つていたが、歌もうまいらしい。

音楽の盛り上がりに合わせて動き始めるそれぞれ。お前ら何でそんなにキレあるんだよ、いや揃いすぎだろ、どんだけ練習したんだよ、仕事だつて相当忙しかつたはずなのに。頭の中でそんな言葉が次々と浮かんでくる程度には、完成度が高い。

いくら運動神経の良いやつらとは言え、一朝一夕でこのクオリティには仕上がるなかつただろう。この余興のためにどれだけ時間を割いてくれたのかと思うと、また目頭が熱くなる。

「……す、いわね、皆さん」

小さくナタリーに耳打ちされ、ただ無言で頷く。

諸伏と降谷が楽器をやるという話は聞いたことがあるが、それでも音楽に造詣のあるやつらではなかつたはずだ。しかも特に諸伏と柊木は目立つのを好まない。それでも盛り上げる余興を考えて、きつととても練習して、披露してくれたのだ。

会場で盛り上がっているのは女性陣だけではない。ヒットした曲だけに知つてゐる人も多かつたようで、男性陣も音楽に合わせて揺れているし、あまりのクオリティに感心している人もいる。いや待て高木、何でお前は女性陣並みに目を輝かせているんだ。お前どんだけ柊木のファンなんだ。いや見なかつたことにしよう。

ばつと五人が揃えてポーズを決めたところで、さつと松田が前に出る。今日は当然サングラスもなしで、その強気な目で笑つてマイクに口を寄せる。勢いのある声で刻まれるラップは、男の俺が聞いていても恰好良い。女性陣の歓声が天井を突く。

と、何かに気付いたらしい松田が歌いながら隣にいた諸伏の肩を叩いた。ん、と二人で正面を見て、そして笑い、マイクを持っていない方の手で一点を指さす。

そして同時に、口パクで「ばん！」。

うちわを持った女性がひとりへたり込んだ。そして歓声がさらに

黄色くなり、自分も自分もとそれそれがうちわをかざします。ファンサービスまで仕込んできやがつたらしい。

その後も続々と、ピースを作る降谷に、ひらひらと手を振る萩原、少し恥ずかしげにウインクをする柊木。松田と萩原はふたりでハートを作つてみせ、あるうちわを見た柊木はさすがにひとりではきつかつたのか諸伏を引きずつてきて一緒に投げキス。そしてファンサービスもこれが最後と、ステージ中央で堂々のバク転を決めた降谷！

そこまでやりきったやつらを見ていて、思う。余興を頼んだことは全く後悔していないし、ここまで盛り上げてくれて本当に有難く思う。思うのだが。
完璧主義が二人と、**愉快犯**、**やるときはやるやつ**、そして**趣味・悪ノリ**。

こいつらに頼んだ時点でとんでもないことになることくらいは考えておくべきだつた。いや違う、ちゃんと感謝している。しているが、「えつお前らそこまでやるか……？」と思つてしまつただけだ。さすが自慢の同期、やるとなつたときの徹底具合がすごい。

会場が最高潮に盛り上がり、きつと誰もがここをアイドルのライブ会場だと錯覚したあたりで、曲はフイニッシュを迎える。歓声と拍手に惜しまれたそいつらは、汗を軽く拭いながらやり切つた顔。いや本当すげえよお前らは……と拍手をしていたところに、さつとマイクを渡される。

「好きなように突っ込みを入れろ、だそうです」

楽しそうに笑つて言つたスタッフさんに首を傾げつつ、受け取つた。まだ続きがあるのかと目線を戻すと、含み笑いの萩原と目が合つた。お前何企んでやがる。

「一緒に盛り上がつてくださつた皆さん、ありがとうございます！ アラサーでもこんだけやれるんだぞつてところをお見せできたでしようか！」

楽し気に手を振る萩原に、松田が近づいて呆れたように笑う。

「まさかこの歳になつてアイドルの真似事をやるとはな……」

「まーたそんなこと言つて陣平ちゃんつたら！ 大丈夫自信もつて、

ラップすげー恰好良かつたし、何よりちゃんとイケメンだから！　自信もつて！」

「うるせえ知ってるわ」

真剣な顔で言う萩原に、堂々と「イケメン」を認める松田。興奮冷めやらない会場に笑いが漏れる。そんなふたりに、いやいやと近づいたのは諸伏だつた。

「結構頑張つて盛り上げたけどさ、まだちょっとイケメン具合足りなかつたんじやないか？　練習が足りなかつたかな」

だつてほら、と俺たちの方をちらりと見て続ける。

「こんなに恰好良くキメてるのに、俺たちが歌つて踊つてる間もナタリーサンはずつと伊達に寄り添つてたんだぜ？」

あら、と少し照れたようなナタリーの声が漏れる。

そうだそりだと、降谷と柊木も乗ってきた。

「あんなにファンサービスも研究したのにな。俺はバク転だつてしつかり決めたし、柊木に至つてはこのところずつとウインクの練習をしてたんだぞ」

「そ、うそ……つてお前それ言わなくていいところだろ……！」

練習したのか柊木。健気に鏡の前で練習したのか柊木。悪い、想像するだけで笑える。柊木に完璧のイメージを持つていたやつらは「えーっ」と声を上げていた。

氣を取り直した柊木が、コホンと咳払いをして改めて言う。

「でもほら、伊達……航さんはいいやつだから」

いつも通りの柔らかな笑顔、柔らかな声で続けた。

「俺たちにとつても頼りがいのある自慢の同期じやないか。ゴリラなだけで」

おい気のせいか、今余計な言葉が付かなかつたか。にやりと同じ顔で笑いやがつた四人も、乗つかつていく。

「まあそうだな、優しいよな。ゴリラだけど」と諸伏。

「頭もいいし仕事も出来るよな。ゴリラのくせに」と松田。

「腕つぶしもあるしね。あ、ゴリラだから？」と萩原。

「包容力もあるんじやないか？　ゴリラだしな」と降谷。

あまりに息の揃つた言いように、思わず手元のマイクにスイッチを入れる。

「言いたい放題だなオイ！　というかお前らも十分ゴリラだろうが！」

思わず叫ぶと、ええっと大袈裟に驚いてみせるそいつら。完全につものの飲み会のノリ、ただのおふざけで悪ノリだ。幸いにも、会場も笑いに包まれる。

「俺たちのどこがゴリラに見えると？」

「顔が綺麗なだけのゴリラじやねえか。松木お前林檎片手で握りつぶせるだろ」

しつと暴露した松木の特技に、会場が騒然とする。にこりと対外用の笑みを作つてみせた松木は、いやだなあと軽く言う。

「左手ではできないよ」

「つまり右手なら余裕なんだろうが」

そんな俺たちの会話にけらけらと笑う萩原がまあまと松木の肩に腕を回した。

「こーんなイケメン五人がちよーかっこいいところ見せても揺らがないくらい、ナタリーさんが伊達にべた惚れだつていう話なんですよねえこれが」

「ナタリーさんだけじゃねえだろ。新郎だつて結婚が決まった後の飲み会で俺ら相手に五時間惚氣やがつたんだから」

松田の言葉にうつと詰まる。ナタリーが目を輝かせて本当なのと聞いてくるが聞かないでほしい。あの日は自分でもどうかと思うくらい浮かれていたのだ。

「俺が作つたつまみを食べて『ナタリーが作つたやつの方が美味しい！』って言つたことは未だに根に持つてる」

「そこは諦めろ松木、愛情の差だ。お前の料理はただのストレス発散だろ」

拗ねてみせた松木に苦笑しながら降谷が言う。俺はそんなことまで言つただろうか、結構に酔つていたので何を口走ったのかあまり覚えていない。

「まあつまり、びっくりするくらい相思相愛の二人なんですよってことです。な？」

「そーだな。もう末永い幸せとか祈らなくとも勝手に幸せになるだろ」

雑にまとめた諸伏に、呆れた顔を作つてみせた松田が引き継ぐ。そして不敵な笑みを口元に浮かべたまま、降谷が続けた。

「ええ、だから俺たちも『お幸せに』なんて絶対言つてやりません」「そこは独身貴族のひがみとして許して！」

楽しそうに萩原が口を挟むと、会場がまたどつと笑う。

そして穏やかな顔に戻った柊木が、改めて口を開いた。

「そういうわけなので、俺たちから贈る言葉はこれくらいです」

そこでひとつだけ呼吸をして、合図も何もなしにそいつらは全員で声を揃えた。

『結婚、おめでとう！』

今度こそ堪えきれなくなつた涙がひとつ、頬を伝うのを感じた。

冷たいタオルが身に染みる。

余興を終えて一旦ロビーに出た俺たちは、とりあえず水を片手に休憩をしていた。情けないことに堪え切れなくなつた俺は、ソファに倒れ込むように座っている。さつと冷やしたタオルを顔にかけられた。諸伏だろうか、準備が良すぎていつそ腹立つ。

「よく最後までもつたね旭ちゃん」

「最後の方、手エ震えてたけどな」

「うるせえ……」

必死で堪えていたが松田には見抜かれていたらしい。悔しい。けられらといつものように笑う諸伏がつん、と俺の頭をつつく。

「つたく、投げキスに俺を巻き込むなよな〜やるけどさ〜」「ひとりはむり……」

「何ガキみたいなこと言つてんだお前」

松田にからかわれるも、今は言い返す気力もない。あとで一発殴つてやると心に決めると、降谷が伊達、と言つたのが聞こえた。

少し離れた場所から靴音がひとつ近づいていてくるのが聞こえる。

「おう、皆お疲れさん。本当にありがとな。で、柊木は無事か？」

「……あいさつがわりにかくにんすんのやめろ」

思わずそう言うと、悪い悪いと笑う声が聞こえた。伊達がひとりでいるということは、ナタリーサンはお色直しだろうか。

「……いや、本当にありがとな。あんなに気合い入れてくれるとは思わなかつたよ。盛り上がりもすごかつた」

むしろすごすぎだろ、とぼやく声も聞こえ、皆で軽く笑う。俺たちに任せたんだから当然だろと降谷が言うと、思い知つたわと伊達も笑つた。

「おかげさんで最後まで良い披露宴で終わるそうだよ。お前ら本当に二次会来ないのか？」

「お誘いは有り難いが、柊木もこの調子だしな。今日は披露宴までにしておくよ」

「あんなに目立つちやつたら二次会もすごいことになりそうだしね」と

降谷と萩原の言葉に続いて、諸伏が伊達に聞こえないようにぼそつと明日仕事だしな……と呟く。この一日の休みをもぎ取るのにどれだけ苦労したのか、考えるだけで泣けてくる。

「そうか……じゃあ、また改めて新居に呼ばせてくな。柊木、ナタリーゲお前に唐揚げの作り方習いたいってよ」

「りよーかい……レシピとかないから勘で覚えてつて伝えといて……」

わかつた、と幸せそうな声色で伊達が言う。いや、幸せ「そうな」ではないか。こんなに嬉しげな声をしておいて、幸せでないなど有り得ない。

「……伊達」

ようやく少し眩暈がおさまってきた。顔からタオルを外して、伊達の方に目線をやる。眩しさに負けて目が上手く開かない。

何だ、という声を頼りに、そちらに向けて笑いかけた。

「俺、お前とナタリーさん見て、初めて結婚つていいかもって思ったよ」

あんなにも幸せそうに寄り添う、ふたりを見ていたら。

愛する誰か、信頼する誰かと、一生を共にする約束をしたふたりを見ていたら。

結婚は確かにそれはふたりが選んだ「幸せ」の形で、たくさんある幸福のなかのひとつだと思うから。それをほんの少しだけ、羨ましいと。

生まれて初めて、そう思つたのだ。

「……えつどうしよう旭ちゃんこれバグつてない？ 壊れない？」

「やっぱ人前で歌つて踊るなんて無茶するから……とりあえず俺、タオルもう一度冷やしてくるな」

「ついでに水と氷も頼んできてくれ、ヒロ。薬もいるかもしれない」

「いつそ救急車呼ぶか？ 絶対頭やべえだろ」

「俺たちの披露宴のために無理させて本当にすまねえ終木……！」

目が慣れてようやく愛すべき同期たちの顔が見えるようになつた俺は、とりあえず手近にいる松田から順番に殴つていこうと拳を握りしめた。

「六花」

この物語の主人公には、モデルがいることをまず明記しておきたい。彼と交わした言葉の全ては、今でも鮮明に思い出すことが出来る。それだけ彼は、私にとつて非常に衝撃的で、非常に魅力的な人物であつた。そう、彼の物語を紡いでみたいと思うほどに。

そして書いたのがこの物語の原案であるが、残念ながらモデルである彼は「自分が主役の物語なんて照れくさくて読めない」と言って原稿を読んではくれない。それならばと、私は彼の友人たちに手を借りることにした。

彼の五人の友人たちは、傍から見ても非常に仲が良く、お互のことをよくわかっている。きっと良い意見をくれるだろうと思い原稿を渡したのだが、結果は惨敗だった。

「まだまだですね、先生」

彼らは異口同音にそう言つて、笑つた。あいつはこんなもんじやありませんよと、得意げな顔をして。

サングラスがよく似合う彼は、言う。

「あいつはもつと、冷徹だ」

こんなまだるっこしいことはしない、最短の道をいつだつて選ぶ合理主義の鬼ですよ、と。

豪快に笑う彼は、言う。

「あいつはもつと、優しい」

人を否定することが苦手なんですよ、仕事外には限りますがね、と。人懐っこい猫目が印象的な彼は、言う。

「あいつはもつと、容赦がない」

特に俺たちのことはもつと雑に扱うし、何なら徹底的にこき使います、と。

緩く下がる目尻が優しげな彼は、言う。

「あいつはもつと、素直だ」

素の時は思つたことをそのまま口にしちゃうし、人の言葉も抵抗なく受け入れる子供みたいな奴です、と。

ずっと彼と競い合ってきた彼は、言う。

「あいつはもつと、プライドが高い」

謙虚なように見えて、自分が積み重ねてきた努力を決して軽視はしません、と。

彼らの口から語られる「彼」の姿は一層魅力的で、私はそれからまた大幅な書き直しを余儀なくされた。幾度となく書き直し、幾度となく彼らから意見をもらい、ようやく完成したのがこの物語である。彼の友人たちには本当にお世話になつた。この場を借りて謝辞を伝えたい。彼らの協力なくしてこの物語は成立しなかつた。本当にありがとうございました。

もちろん、モデルになることを嫌々ながらも許してくれた彼にも、心からの感謝を。この話をした時の心底嫌そうな彼の顔は、今でも思い出すと笑ってしまう。それでも了承してくれて、本当にありがとうございます。

この物語は私にとつて傑作のひとつであると同時に、筆力不足を痛感させるものとなつた。どれだけ言葉を尽くしても、主人公よりもモデルである彼の方が魅力的なのである。気高く、優しく、職務に忠実で、それでいて人間的な彼をどうにか表現しようと努めたが、今の私にはこれが限界らしい。

誰よりも桜が似合う彼の正義を、わずかでも伝えられればと願うばかりである。

*

と、いうのが当初書いていた物語の前書きである。そう、最初は、そんな物語を書くはずだつた。しかしやはり、どうにも納得のいく作品が書けない。どうしても、主人公が「彼」になつてくれないので。

締切も迫り、どうしたものかと頭を抱えていたところ、助け舟をくれたのはまさかの息子だった。「彼」やその友人たちのことも知っている息子は、こつそりと原稿を読んでいたらしい。それを私が咎めるより先に、愚息はさらりと言つた。これではだめだと。

「あの人、こんなに『ひとり』じゃねーよ」

恥ずかしながら、衝撃が走つた。その時書いていた物語の主人公は

確かに「ひとり」だった。しかし、現実の彼は？もちろん「ひとり」であるわけがない、あれほどまでに互いを理解した友がいるというのに！

それに気付いてからは早かつた。登場するキャラクターを追加し、構成を練り直し、エンディングも書き換えて。結局、当初考えていた物語とは全く違うものになつた。しかし、絶対にこちらの方がいい。そう思えるだけの出来になつたと自負している。そして、タイトルも変えた。物語が変わったのだから、当然といえば当然である。

全く新しい物語になつたこれを、改めて彼の友人たちに見てもらつた。五人とも、氣恥しそうな顔で及第点をくれた。ガツツポーズなど何年ぶりにしただろうか。

そうして完成したのが、この物語である。改めて言おう。誰よりも桜が似合う「彼ら」の正義を、その辯を、わずかでも伝えられればと願うばかりである。

六つの花の生き様を、どうか感じて欲しい。

——工藤優作著『六花』前書きより抜粋。

この作品は作者たつての希望で日本のみで出版され、今後も含め翻訳の予定はないという。すでに続編の執筆にも取り掛かっており、その作品には同作者の作品『緋色の捜査官』の主人公も登場すると明言されている。

＊＊＊

「お、皆ニュース見ろよ」

いつものごとくビール缶を傾けながら、伊達はテレビを指した。特に意味のない雑談に花を咲かせていた醉っ払いたちも、その声に釣られて画面に目を向ける。そこには、見覚えのあるハンサムな男性が映っていた。

「工藤先生じゃん」

「へえ、何か賞とつたのか、『六花』

画面の中で多くのフラッシュに照らされる工藤氏は、マイクを向ける記者たちに笑顔を返していた。

今回工藤氏が受賞したのは、一般大衆向けの娯楽小説に与えられる賞である。これまでも数々の賞を受賞してきた工藤氏だが、普段は本格ミステリを専門としていたこともあり、この賞を受賞したのは初めてだとテロップが流れた。

「へ～初めての受賞なんだ。意外」

「工藤先生と言えば本格ミステリだからな。畠が違つたんだろう」

「俺も工藤先生の他の本読んだことあるけど、『六花』は毛色が違うもんな」

諸伏がどこか愉快そうに言う。

対CIAの作戦において手を借りるかわりに、小説の主人公のモデルとなることを許可した柊木。そして当初はモデルとなるのは柊木だけだつたが、いつのまにやらその主人公の周囲の登場人物にも、どこか覚えのある人間が揃つっていた。

「いや～かつこよく書いてもらつたよねえ俺たちも」

「ま、一番いいところは主人公が持つてつたけどな？」

にやりと口角をあげた降谷の言葉に、視線は柊木に集まる。当の本人は、何も聞いていないように素知らぬ顔でビール缶を傾けていた。

「結局お前は読んだんだつけ？ なあ主人公サン」

からかうように松田が言うと、ようやく「主人公」はめんどくさそに眉を顰める。そして口元に缶を寄せたまま、そろりと逃げるよう目に線をそらした。その反応に、驚いたように諸伏は瞬きする。

「えつ読んだの柊木。あんなに嫌がつてたくせに」

「何も言つてないだろ」

「いやその顔は読んでるだろ。わかるよ」

さらりと言い返され、眉間にしわを深めた。なかなか口を開こうとしない柊木に、にやにやと笑いながら萩原はその肩に腕を回す。

「なーに旭ちゃん照れてんの～？ いやいや誰だつて自分をモデルに小説書かれたら気になるつて。読んじゃうつて。照れなくていいよつていででででで旭ちゃんギブギブ指が抜けん!!」

「萩原マジでうるせえ」

指離して、と喚かれてようやく柊木は肩に回っていた手の指を離す。渾身の力で引っ張られて赤くなつた中指に、萩原はふうふうと息を吹きかけていた。その姿に苦笑しつつ、伊達は柔らかい声で問いただす。

「読んだのか？」

からかいの色が消えたことを察してか、ようやく柊木は幾分か気まずそうに口を開いた。

「……お前らがモデルになつたキャラクターも出てるつて新一くんから聞いて、興味湧いたから。献本も貰つてたし」「なるほどな。それで？」

「何だよ」

「感想は？」

降谷に言われ、柊木は一瞬考える素振りを見せる。形のいい瞳がゆるく細められ、そしてまた開いてテレビ画面を見る。そこにはインタビューに答える工藤氏の姿があつた。

『本にも書いたのですが、この主人公たちにはモデルがいるんです。この受賞も彼らあつてのことですから、改めてお礼を伝えたいですね。彼ら自身の信条やキャラクターが魅力的だつたからこそ、こうして多くの方に楽しんで頂ける物語になりました』

そのコメントに続けて、アナウンサーが言葉を続ける。この「六花」はベストセラーとして増刷に増刷を重ね、既存のファンだけでなく、新規の読者にも広く受け入れられているらしい。モデルが実在すると明記されていることから、近年イメージダウンを危惧されていた警察の株が上がつているとかいないとか。

これを読んで警察を目指すことを決めました、と答えていた若い読者への街頭インタビューの様子も放送された。

「……あんなに持ち上げられると複雑だなど……」

思わずと言つたように漏れた柊木の言葉に、確かに、とほかの面々も苦笑を漏らす。良いように書かれることは照れくさくも嬉しいことだが、綺麗なだけの仕事でないことはよく知つていて。

「……面白かつたし、誰が誰のモデルかつてのもちやんとわかつたし、まあかつこいいキャラクターだつたと思うよ、皆。ただなんて言うか……そんないいことばつかりしてゐるわけでもないだろ、俺もお前らも」

「はは、言いたいことはわかるよ」

リアルにしては泥臭さが足りないよな、あの話。

そう言つて諸伏は新しいビールのプルタブを開け、柊木のもつビールにこつりとぶつける。

まあそこはねえ、と萩原は自分の口にさきいかを放り込んだ。

「全部が全部は書けないつしょ。たとえば陣平ちゃんが聞き込み下手すぎて逆に不審者として通報されちゃつた話とかさ」

「そうだな、聞き込みした相手に惚れられてプレゼント渡されそうになつたところを断つたら本庁前で大泣きされた萩原の話とかな」

「お前らは本当に何やつてんの?」

俺達は大真面目に仕事してたんだ、と真顔で言う馬鹿ふたりに柊木は天を仰ぐ。本当に同期を查問にかける日も近いのではないだろうか。

まあまあ、と伊達は柊木の肩を叩きながら手持ちのビールの最後の一滴を飲み干した。

「かつこよく書いてくれたんだし良いじゃねえか。警察のイメージが良くなることは上層も喜んでるんだろ?」

この小説のことは警察内でも評判にはなつていた。巷の名探偵たちのために下がつていた評価も見直されつつあると好意的に受け止められ、また単純に警察小説として面白い、と警視総監が絶賛したとの噂も流れている。

警察のイメージアップの施策として広告塔にされそうになつたことのある柊木としては大変有難い話だつた。そこだけは感謝してもいいと柊木も思つてゐるが、警察の株を上げることも考えて書いたのではないか、とも少し思つていて。「日本警察の救世主」が奪つてしまつた警察への信頼を少しでも取り戻そうという、工藤氏のいらぬお節介なのかもしない。

「まあ俺たちは下書き段階というか、あのストーリーになる前のものから読んでるからなおさらそう思うんだろうが、『六花』はよく書けてると思うぞ。特に主人公についてにはな」

面白そうに口を挟んだ降谷の手にはピーナッツ。それをぽりぽりと咀嚼する降谷に、そうだったか、と柊木は首を捻った。自分のことであるせいか、いまいち腑に落ちていらないらしい。そんな彼に笑いながら頷き、降谷は長年のライバルにこう告げた。

「ああお前そつくりだつたよ、最終的には僕たちを頼る可愛いところとかな」

その言葉に周囲はあー、と納得したように深く頷き、「主人公」は盛大に口角をひん曲げて拗ねることになる。

柊木旭は勇者ではない

俺は知っている。柊木旭は、決して勇敢ではないということを。どちらかと言えば臆病で、心配性で、悲観的で、一番最悪の状況を想定して動くやつだということを。

だから、わかる。強く握られた手は震えを隠すため、強気な言葉は動搖を悟らせないため。ここですべてを終わらせて、後顧の憂いを断つために。

「……俺の杞憂であればいいと思つていましたよ、ミスター」

零^{ゼロ}を危険にさらすこの作戦を、誰より嫌がっていたのは柊木だった。どれだけ予防線を張ろうとも、それだけは、と言いたがらない柊木にこの作戦を吐かせたのは俺自身。作戦の断行を決断させたのも俺だった。今でも、それを間違つていたとは思えない。CIAを前に不敵なほど堂々と笑つてみせる柊木を見て、間違いだつたなんて誰が言えるだろうか。これを強がりだと見抜ける人間なんて、本性を知つてゐる俺たちくらいだ。

切り札を出そうとポケットに手を入れたミスターにも、柊木は嫌味なほど余裕な顔で笑つてみせる。

「昨晩は見張りを代わつていただきありがとうございました。その間に貴方の部下の方々が仕掛けてくれた爆弾は解除させていただきましたよ。わりと単純なつくりだつたそうですね、解体には五分とかからなかつたそうです。貴方が見張りをしていた短い時間で仕掛けたせいか、隠し場所も安直で見つけ出すのもそう難しくなかつたと」暗殺の可能性に気づき、あいつらに助けを求めた柊木。たつたひとこと「たすけてくれ」だけのメッセージだつたが、心の底からの声だったのだろうと思う。それだけ、柊木は追い込まれていた。零^{ゼロ}が、組織が、ミスターが、俺が、柊木を追い込んだ。

公安に来て以降柊木ができる限りあいつらとの連絡を絶つたのは、あいつらと話をするとき弱音や甘さが顔を出す自覚があつたからだと思う。公安として、その指揮官として、冷徹に徹するためには、切り捨てるを得なかつた。

あの寂しがりには、本当に辛かつただろう。

『旭ちゃん寂しくて死んでない？ 大丈夫？』

『いやあいつ兎じやねえから。言いたいことはわかるけどよ』

『そんだけきつい事件^{ヤマ}なんだろなあ。ああ、詳細はいいぞ』

柊木からのヘルプに飛んできたそいつらも、そんなことを言つて笑つていた。よくわかっている、と苦笑すると、三人そろつて柊木だからな、と声をそろえる。風見さんですら、少し呆れたように笑つていた。

爆弾のことを説明すれば、一瞬で険しい顔になる伊達と、目を輝かせる馬鹿ふたり。ねえお前ら状況わかってる？ この案件、かなりの佳境なんだけどわかつてる？

『まつかせろ腕は鈍らせてねえ！』

『じゃじやーん、なんと工具を持ち歩いてる超熱心な俺たちです！』

『諸伏、本当にこのふたりに任せて大丈夫なんだろうな？』

すいません風見さん腕だけは確かなんです頭に問題があるだけで。何も言えず両手で顔を覆う俺をよそに、まあまあと慌てた伊達が真顔の風見さんを必死に取りなしていた。

しかしさば爆弾を前にすれば迷いのない手つきでそれを解体していくのだから、本当に何ともまあ。爆処も惜しい人材を手放したものだ。いや自業自得だけど。綺麗に解体した部品をひとつ残らず回収し、それ以上仕掛けられたものがないことを確認して、三人に礼を言つた。何を今更、と予想通りの言葉が返つてくる。

『爆弾関係ならまた呼んで良いぞ、強盗騒ぎはもうごめんだがな』

『今回は除け者にしなかったから許す！』

『事件^{ヤマ}もう終盤なんだろ？ 朗報待つてるぞー』

その様子をモニターしていた柊木には、音声までは届いていない。けれど、爆弾解体の報告をしたときの柊木の顔にはわずかに優しい微笑みが乗つっていた。そうか、と答えた瞬間には、それも消えてしまつていたけれど。

きっと、「そこ」に戻るために、柊木は堪えている。自分でではなく、俺と、零^{ゼロ}と一緒に「帰る」ために。それがわかつてゐるからこそ

「公安」に徹しきるそいつは見ていてどこか苦しくて、だけど目を背けることが許されないのはわかつていた。

策を弄し、目の前の相手を嘲笑う柊木をつくったのは、俺たちだ。 「もう一度お伺いします。快く協力者の名前を教えてもらえませんか？」

自身の勝利を確信している人間の顔に見えるだろう、内心では震えているくせに。どれだけ完璧な切り札を作つて対策したとして、想定外がないとは限らない。ここまで手を尽くしてこの展開に持つてきたのなら、ほほほほ結末は見えているというのに、それでも。

工藤先生や探偵少年、そして宮野志保さん今まで全面協力頂いて作り上げた「違法作業」。まったく、とんでもないものを作つてくれたものだ。本当にこれが全世界に発表されたら、俺たちだって、特に全責任を負っている柊木だつてただでは済まないというのに。全部わかつた上で、交渉が決裂したときは本当に自分が全責任をとる覚悟をもつて。

顔色を急激に悪くしていくミスターから、それでも銃口はずらさない。追い込まれた人間は何をするかわからないことくらい骨身にしみてわかっている。いざというときは、その脳幹に向けて引き金を引く覚悟はあつた。柊木には止められていたが、この状況で柊木を喪うことだけはあつてはならない。殺人の罪を背負うこととも、俺にとつては今更だ。

と、思つていたが、どうやらミスターは逆上するタイプではなかつたらしい。

「……さて、そろそろ増援が到着する頃です。貴方を連行しないといけない」

最後の選択を迫られたミスターは、膝をついた。

内心でだけ、気を抜かない程度に小さく息をつく。青白い口からこぼれ落ちた名前を脳に刻み、視線だけで柊木を見た。

「諸伏、彼の拘束と連行を頼む」

了解、と答えて一步二歩とふたりに近づいた。片手で拳銃を構えたまま、逆の手で懐の手錠を探る。

これで柊木と零^{ゼロ}が警察庁のそいつを捕まえればとりあえずは一段落。ずいぶんと恐ろしい助つ人に協力を取り付けてあると聞いたときには、お前本当に何者だよと思ったものだが、事情を聞いたときにはもつと驚いた。自分の深いところに刻まれている因縁まで巻き込んできた柊木には、本当に頭が上がらない。

ミスターを拘束しようとしたとき、やめておけばいいものを、彼はまた顔を上で言い募る。負け犬の遠吠えほど見苦しいものはないが、よりもよつて死ぬほどキレているやつの地雷に飛び込むのだから、さすがに本気で馬鹿だなと思つた。

柊木は、少なくとも俺ほどは怒りを殺すことに慣れていないのに。「何も知らない友人を囮に使うなんて、さすがになかなか冷徹ですね？」しかも。憤り憎む様子すら見せないとは

柊木の擬態がなかなかのレベルとはい、その腹の中を見抜けない自分の度量を差し置いてこの言い草。困ったように苦笑した柊木を、さすがに止める気にはなれなかつた。

がしゃ、とキーボードが吹つ飛ぶと盛大な音を聞きつつ、モニター車の修理費用つて結構高いんだけどな、とすっかり器物損壊に慣れた俺はそんなことを思う。マイクのスイッチを切つたのは、冷静さに欠いたところをほかに聞かれたくなかったからだろうか。

「……公安の捜査官として、そして指揮官としては、貴方に憎しみやそれに類する感情は持つてはいません。貴方たちは職務に必要な行為を行つたにすぎず、そこに『暗殺』という項目があつただけ、そう考えます」

そんな風に割り切れる柊木だったら、きつとここまで苦しまなかつた。

「でも俺はね、本当は自分の縄張りに手を出されるの、死ぬほど嫌いなんですよ」

柊木のこんな低い声、多分初めて聞いた。こんなに瞳孔が開いているのも、多分初めて見た。基本的に、怒らない人間なのだ、柊木旭といふやつは。怒つて見せてても、適当に自分の怒りをいなして消化できる人間なのだ、本当に。

少なくとも暴力なんて安直な手に出ることは今まで一度もなかつた。きっと、これが最初で最後であるように思う。今の柊木の表情を見ると、そう願わざるを得ない。

「日本を土足で荒らしたばかりか、日本警察にまで手を出しやがつて大きく出たな、と思いつつ、本心なんだろ、と内心で苦笑する。そういうえばどこかの誰かも「俺の日本」なんて大きなことを言つていた。ふたりの見ているものはきっと全然違うのに、それでも同じようなことを言うのだから不思議なものだ。

「この程度で済ますのは、今回限りだ。……次はありとあらゆる手を使つて、テメエの飼い主^{ごし}と潰す。世界一の大國だろうが諜報機関だろうが、この俺を敵に回したらどうなるか思い知らせてやるよ」

ああ、この言葉に嘘はない。本当にやめてやつてくれよ、とすでに心の折れているミスターを横目で見て内心でつぶやく。

柊木のように、その手にあるものが少ないやつほど振り切つたときは怖いのだ。少ないからこそ、ひとつでもその手からこぼれ落ちることを許さない。奪おうとする相手には誰だろうと牙をむく。普段が温厚ぶつてるだけにそのあたりの落差がかなり極端であることを、柊木自身も自覚しているのかどうか。

柊木が腹の中で飼つて いるこの獰猛さ。さつきまで内心で震えていたはずの柊木に、その気持ちすら忘れさせてしまうほどの激情。どうか、もう発揮されることがなければいいと思う。いつか、柊木自身を傷つけてしまう前に。

ふ、と柊木だけに聞こえるように小さく息を吐く。ぴた、と柊木が動きを止め、その瞳から怒りが引いた。突き出していた脚を下ろし、いつも通りの顔を見せる。

「じゃあ諸伏、よろしくな」

その笑顔を見て、安堵の息をついたことは悟られてしまつただろうか。

*

「なあ柊木、今回のいろいろで思つたんだけどさ」

「何だよ」

「柊木つて実は結構びびりだしチキンだしネガティブだし、そのくせキレると怖いのな？」

「喧嘩売つてんなら買うぞ」

違う違う、と俺は口元をひん曲げる指揮官殿に笑顔を向ける。

「やっぱお前は物語に出てくるような完璧な勇者じやないよなと思つてさ」

「当たり前だろ。俺もお前もせいぜい村人AとBだ」

「ははは！ そうだよな、いや俺が言いたいのはさ、」

剣を持つた自信満々な勇者に助けられるよりも、木の棒しか持つてないびびつて震える村人Aに助けられる方が感動的でありがたみがあるなつてこと。

俺がそう言うと、柊木は三秒ほど考え、それでも困惑した顔で俺の方を向いた。

「……つまりどういうこと？」

「うん、だからつまりな、」

勇者じゃないのに助けてくれてありがとうつてことだよ。

そう言うと、ぱちぱちと長い睫を揺らして瞬きした柊木は、困ったように笑つたのだつた。

太閤名人との出逢い

俺はどうしたらいいんだ。そんな言葉ばかりが、頭の中でぐるぐると巡る。

いや、わかっている。結局のところ、俺にとれる選択肢は限られていて、いつだって最終的にこいつらに話を聞いてもらうしかないのだ。

「いや久々にマジで顔色悪いね？　どうしたのよ」

「どうせ女絡みだろ。今度はどんな質の悪いのひっかけたんだよ」

「今回は違う」

松田の言葉を受けて反射的にそう返すと、全員が驚いたように一瞬固まる。違うのか、と伊達が心配そうな顔で言つた。

「となると本当に何があつたんだ？　お前が女性関係以外でそんな顔したこと初めて見たかもしけねえぞ」

「……今日は男なんだよ」

「……ん？」

「だから男にストーカーされてんだよどういうことだよちくしょう！」

こいつらのこんなに間抜けな顔久々に見た、なんて思う余裕も俺にはなかつた。

*

「……おとこ」

「確かなのか？」

降谷に問われて頷く。

そして周囲に漂う「あ、こいつとうとう……」というこの雰囲気。全員ぶつ飛ばしてやりたい。その心底哀れんだ目をやめろ。

「気づいたのは二週間くらい前……警視庁ちかくで視線を感じるようになつて。視線の主はすぐに見つけられたけどどう見ても男なんだよ……というか俺の目が間違つてなければ結構な有名人でしかも既

婚のはずなんだよ……」

「有名人でしかも既婚」

「お前魔性にもほどがあるだろ」

「うるつせえ!!」

じわりじわりとにじんできた視界。とりあえず落ち着けと諸伏に肩を叩かれる。それで、と宥めるように続きを促された。

「つまり被疑者の身元まで特定できるんだろう？ そいつの名前は？」

脳裏に浮かぶ、その「ストーカー」の顔。テレビにもちよくちよく出ていて、その顔は前から知っていた。俺としてはそれなりに好印象をもつていたし、結婚の報道がでたときだつてめでたいくらいの感想はもつたのだ。かなりの愛妻家であると言われているのに、何故。絞り出すように、その名前を告げる。

「……プロ棋士の、羽田秀吉……」

*

まさかこんなところに繋がりがあるとは。

初めて聞いたその血縁関係に、俺は即座にスマホを取り出し時差も何も考えないままその人物にコールする。

数回のコール音の後に、彼はいつも通りの低い声で応えた。

『君から連絡をくれるなんて珍しいな』

『どうもこうもねえわ今すぐ日本に来やがれこの野郎』

『……何があつたんだ？』

よしよしといったん落ち着け、と苦笑して（いる振りをして内心絶対面白がつて）いる諸伏は俺の肩を叩き、スマホを抜き取る。通話をスピーカーの設定にして海の向こうにいる彼に話しかけた。

「赤井か？ 俺、諸伏。久しぶり」

『ああ、諸伏くん、久しぶりだな。それで、柊木くんは何を荒れているんだ？』

俺にはまったく心当たりがないんだが、という不思議そうな声に叫

び返しそうになるのを萩原に押さえ込まれる。話進まないから
ちよつとおとなしくしてよう、と宥められ、それをはずそうとした腕
は松田に押さえられた。ちくしょうこの「ゴリラ」ども。

「羽田秀吉さん、知つてるよな」

『弟だが』

「うん。その弟さんがな、柊木のストーカーしてるっぽいんだよ」

数秒、電話口で沈黙がおりた。

『……冗談だろ？』

「冗談じや、！」

「おつとつと、はいはい旭ちゃんおとなしくして！ 気持ちはわかる
から！」

『秀吉はクレイジーなレベルの愛妻家だぞ。柊木くんがどれだけ魔性
の男であつても、秀吉が妻を裏切つて男に走ることは絶対あり得な
い』

だれが魔性の男だ!!

全力の叫びは萩原の手の中に飲み込まれる。とうとう伊達にいい
子だから落ち着けな、と頭を撫でられ始めた。いつたいお前らは俺を
何歳児だと思つてるんだ！

そんな俺を見ながらため息をついた降谷が、嫌そうな顔をしながら
スマホに話しかける。

『だが実際、複数回に渡つて自分の後をつける彼の姿を柊木が確認し
ている。柊木はこの手の被害者としてプロの域だぞ。偶然や間違
とは思えない』

『ああ、降谷くんか。……その手の被害者のプロという言葉にはとり
あえず言及しないでおくが、もし本当に弟が柊木くんをつけ回してい
るんだとしたら、それはストーカーというより何か誤解があるんじゃ
ないか』

「誤解だと？」

「ああ、と赤井さんは落ち着いた声のまま続ける。ふるやはあとでな
ぐる。」

『秀吉はもともと頭が切れるし、常識的な感性を持ち合わせていてる。

その秀吉がそんな馬鹿をやっているんだとしたら、考えられる理由はひとつだろう』

彼女に事情を聞くなら俺よりも君たちの方が話が早いと思うが、どう聞いても「俺は関わりたくない」という本音が透けて見える赤井さんのことには、宮野さんにでも協力してもらつて絶対に何らかの形で嫌がらせをしてやろうと決めた。

*

「ほんつとうにすみませんでした!!」

夫の頭と一緒に押し下げながら頭を下げる彼女。結婚後も変わらず仕事を続けているという、警視庁交通部交通課の宮本由美警部補だ。噂は聞いたことがあつたし、伊達の結婚式では間接的に世話になつたが、面と向かつて話をするのはこれが初めてだ。

警視庁から少し離れたところにある公園のひとけのないエリアとはいえ、この光景を誰かに見られてはいかと少しヒヤヒヤする。「宮本さん、とりあえず頭を上げてください。羽田さんも」「でも……！」

「誤解がとけたなら俺としては十分なので」

「す、すみません……」

ようやく頭を上げることを許された太閤名人。いつもと変わらぬ寝ぐせがぴょこんとはねているのを見て、あの寝ぐせつてキャラ作りじゃなくて本当に素なんだなと全く関係ないことを思つた。

「まさか、柊木監察官を追いかけ回すなんて……！」

伊達や松田を通して彼女にコンタクトを取り事情を説明すると、彼女はその日のうちに太閤名人を締め上げて吐かせたらしい。日頃から妻に弱い彼はすぐに全面的に容疑を認め、供述を始めたという。そして、その内容がまた。

「ゆ、由美タンが不倫なんかするわけないってわかつてはいたのですが……」

そう、俺は話したことなかつた彼女との不倫を疑われていたらし

い。何でそんな誤解に至ったんだと聞いたときには、今も俺の後ろにいる伊達が天を仰いだ。

「由美タンが同僚の方の結婚式に出席して以降、何度も柊木さんの映像や写真を見直してペンライトとうちわを振つてかつこいいかっこいいって連呼をするから、もしかしたらと思つて……！」

「だからあれはアイドルに憧れるようなもんだつて言つたでしょーが

！」

「ははは……」

笑う以外に俺に何が出来るというのか。

そういうわけで彼は俺と彼女の間に何かあるのではと勘ぐり、俺の後をつけ回していたのだという。今でもたまに車ではなく公共交通機関で出勤をしていたので、俺のことは警視庁付近を張つていて見つけたのだろう。いや太閤名人つて相当忙しいと思ってたんだが、もしかして実は暇なのではないだろうか。愛妻家は愛妻家でも、妻のこととなると周囲が全く見えなくなるタイプの愛妻家だったらしい。

「とにかく、ご理解いただけたと思いますが、宮本警部補とは直接お話をしたのも今日が初めてです。誓つて特別な関係ではありません」

「はい……本当に……迷惑をおかけしました……」

そうもう一度頭を下げられて、ひとつ息を吐く。とりあえずこれで解決だろうか。

急に両肩が重くなつたと思つたら、後ろにいたはずの松田と萩原がいつのまにか隣に来ていた。そして面白そうに笑いながら口を開く。「いやあ良かつたよねえほかにバレる前に片がついてさ」

「お互いにな。太閤名人が妻の不倫疑つてストーカーなんてどんでもねえスキヤンダルだし、柊木だつて不倫なんて疑惑だけでアウトだろ。まして、相手が身内ならな」

「そ、そんな……！」

「いや、俺は別に、」

「そーゆーチュウ吉！ 本当に反省しなさいよ、警察官の不倫とか普通に懲戒なんだからね!!」

いや否定はしないけど片付いたんだからそんなにいじめなくても。

みると、うちに太閤名人は蒼白になつていき、もはや涙目になつている。

「本当に、申し訳ありませんでした……！」

「いや、ですから。俺は解決したならそれで十分なので……」

「そうはいきません！ 先ほど兄からも連絡が来ましたが、兄も貴方にはお世話になつていると申していました。そんな方にご迷惑を掛けてしまふなんて……！」

どうやら赤井さんも一応連絡はしてくれたらしい。

深々と頭を下げ続ける彼に、これじやらちがあかねえと内心で舌打ちをする。宮本さんにはその披露宴での余興について情報統制をしてもらつたという借りもあるし、俺としてはもうしないでくれるならそれで十分。だがそれだけじや引いてれそくうにない様子に、俺は苦笑して彼の肩を叩いた。

「じゃあ羽田さん、ひとつお願ひをしてもいいでしようか」

「！ 僕に出来ることなら！」

ぱつと頭を上げた彼と、目が合う。ああこのひと、目元が赤井さんにそつくりだ。

「本当に時間があるときでいいんです。将棋、教えていただけませんか」

「え」

「駒の動かし方くらいはわかるんですけど、ちゃんと将棋を指したことが、今までなくて。一度ちゃんとやってみたかったんです。太閤名人に教えを請うなんて贅沢すぎるかもせんけど」

いかがでしよう、と笑うと、ようやく彼の顔に少し色味が戻った。きらりと目が輝き、口元に笑みが戻る。身体を起こした彼と、同じ高さで目線が交わる。

「もちろん、是非！」

「よろしくお願ひします」

そして交わした握手に、彼とは仲良くやつていけるような気がした。

*

「柊木さんは本当に筋がいいですね。これなら多分兄に勝りますよ」

「マジで？ 今度来日したら挑んでみよう」

「待ってくれ秀吉さん、赤井も将棋が出来るのか？ なら僕も勉強する」

「……降谷さんは兄と何かあつたんですか？」

「話が長くなるから聞かない方がいいよ。あ、王手？」

「おや、いい手ですね」

その鏡が映すもの

「チエスを、ご教授いただけないかなと」

久しぶりに特命係でひとりの時間を楽しんでいた、昼下がり。正午を告げる鐘が鳴ると同時に、彼はひよっこりと顔を出した。その顔は少しばかり恥ずかしげな色があり、人見知りをする子どもが話しかけてきたような微笑ましさを覚える。

幼いころを知っているとはいえ、彼ももう三十路をすぎた成人男性だというのに。そんな自分に苦笑をしながら、かまいませんよ、と席を勧めた。

*

「今日は神戸さんおやすみですか？」

「ええ、今日は僕だけです」

彼は有給を取つていましてね、とローンをひとつ進めた。そうなんですか、と生返事をしながらも彼はむつと眉間にしわを寄せる。

駒の動かし方を知つていてるだけでゲームをしたことはないという彼だが、なかなか筋のいい駒運びを見せてくれていた。もともと理屈だてて物事を考えられる彼だ、こういったゲームは得意なのだろう。ゆっくり考えていいですよ、と僕が言うよりも早く、柊木くんはナイトを動かす。なるほど、やはり筋がいい。

「柊木くんは本当にチエスは初めてですか？　ずいぶん手慣れているよう見えますが」

「チエスは初めてです。あ、でも最近将棋はやつてます」

ほう、と相づちをうつと、柊木君は顔をあげて楽しそうに続けた。「最近すゞいひとと知り合つたんですよ。ご存じでしょう？　将棋の太閤名人！」

「それはそれは！　では彼に指南を？」

「贅沢なことに。忙しいひとなので滅多にないんですが、たまーに一局打つてもらうんです。これでもようやくちよつと褒められるよう

になつたんですよ」

少しだけ自慢げにいう彼が微笑ましい。それは名人に褒められたことの自慢なのか、かのひとと知り合いだという事実への自慢なのか。それとも、――純粹に新しい友人が出来たことへの自慢だろうか。楽しそうな彼を見て、僕もひとつ頷きを返す。

「駒こそ違えど、ゲーム自体はよく似ていますからね。なるほど、君が手慣れているように見えたのはそういうことでしたか」「どいつても、今かなり必死なんですけど。やつぱり勝手も違いますし……あつ」

僕がビショップを動かすと、柊木君はしまつたと言わんばかりに声を上げる。につこりと笑いかけると、その顔が悔しそうにしかめられた。気を抜いているときの彼の表情筋はわりと素直だと言つたのは、彼の同期のなかの誰だつたか。

「……じゃあ、こう」

「では、こうしましよう」

さらにナイトを動かした彼の手が終わると同時に、こちらのナイトも一手進める。

うつ、とまた声が漏れた。むむむ、と彼は長考する姿勢にはいる。その眉間のしわを眺めながら、手元に置いておいたティーカップに口をつけた。少しづるくなってしまった紅茶に、おつと、と立ち上がる。改めて湯を沸かしながら、おかわりはどうですか、と尋ねると、今いいです、と食い気味に返された。その返事にふふ、と笑いながら、ティーポットを温める。

「……次の手考えるのにちょっと時間もらつてもいいですか、杉下さん」

「かまいませんよ。ごゆつくり」

そう返すと、彼は大きく息をついて椅子に座り直す。五手前が失敗だつたかな、と小さくつぶやきながら、虚空のチエス盤をたどつていだ。残念ながら悪手だつたのはその前だ、と指摘してやるのはこのゲームを終えてからにしておこうか。

そう思いながら、紅茶の用意を進めていく。

「あー……杉下さん」

「ええ、君の分のおかわりも今淹れているところですよ」「……ありがとうございます」

その恥ずかしそうな顔にまた笑みを返して、それで、と僕は続けた。
「何か心境の変化でもあつたのですか?」

「……というと?」

「君、わかつていて言つていいでしよう」

さらにそう重ねると、少し視線をうろつかせた彼は、諦めたように肩を落とした。

「……別に、心境の変化というほどのことでは

「そうですか? 少し前までの君なら、将棋やチエスを楽しむようにはあまり見えなかつたのですがねえ」

目的をもつて、覚悟をもつて、そして今までの人生のすべてをかけて警察という道を志した彼。それもかなり極端というか、『警察』に必要なものは極力切り捨ててきたかのような。彼の今までの言動からの予測に過ぎないが、おそらくそう間違つてはいないだろう。

いつだつたか、特殊犯係の彼が笑顔で堂々と言つていたのが思い出される。

『旭ちゃん、俺らしかまともに友達いないんで!』

そんな本当のことをと松田刑事は笑い、おまえらなあと伊達刑事は苦笑した。

『いやだから俺たちがいろいろ連れ出してやらなきゃじやん? 俺聞くだけで泣いちゃつたよあのさみしすぎる青春時代』
『あの顔面で生まれたばかりにな……。いや絶対アイツの性格もあるだろうけど』

『友達はほしいけど勉強やトレーニングが最優先って感じで生きてたんだろうしなあ……誰か止めてやれつてんだよ全くいや旭ちゃんは止めてもどまんない、と萩原刑事は手を軽く振り、それな、と松田刑事は頷いた。

『杉下さんくらいのひとが言わないと止まんなかったんじゃない?』

おやおや、と僕が言うと、ほんとですよ、と萩原刑事は笑った。

『あいつ、杉下さんのこと大好きですかね』

その言葉に、僕は何て言葉を返したのだつたか。思わず、小さな笑みが漏れる。

「……杉下さん？」

「何ですか？」

「いえ、ぼうっとされてたので。もしかしてお疲れでした？」

大丈夫ですよ、と言いながら、彼に新しいカップを差し出した。礼を言つてそれを受け取つた彼は、湯気の立つ紅茶にそつと口をつけた。そのまま、吐息とともに言葉を落とした。

「……ちよつと、最近、身辺が落ち着いたというか、心情的に一区切りつきまして」

「ほう？」

「警察官という職務については、まあそれはそれとして、今後も考え続けるんですけど。……少し、別のものにも目を向けてみたくなつて」ちよつと息をついたら、ずいぶんとまあ、取りこぼしてきたことに気づきまして。

そういつた彼は、何故だかひどく幼い子どものように見えた。幼い子どもが、世界の広さを知つたような顔をしていた。

「俺、今までとにかく警察官になることと生きていくことに必要なものの以外は触れてこなかつたんですよ。趣味といえる読書も、そもそもも知識の吸收と読解力の向上、……あとコミュニケーションの参考にとか……とにかく、そういう理由で始めたものなので」

好きとか嫌いとか、楽しいとか楽しくないとか、そういうことを考えないまま生きてきたのだと、彼は言う。

「だから俺、たとえば食事の好みとかないんですよ。栄養バランスさえ整つて、食べられる程度にまづくなればいいというか……今までそれで別に不便はなかつたんですけど、……もうちよつといろいろ目を向けてもいいんじやないかつて」

とりあえず手近なものから挑戦してみることにしたのだ、と。少し照れくさそうに言う彼は、再会したときよりもずいぶんと肩の力が抜けたようだ。しばらく前の『出向』を際に雰囲気が変わつたような気

はしていたが、理由は尋ねまい。どんな理由であろうと、ようやく彼が彼自身のために生きることを考え始めたのだ。それは彼にとつて、ひどく喜ばしいことであるように思う。

ひとつ頷いて、改めて彼に問うた。

「まだゲームの途中ですが、どうですか？ チエスは」

君にとつて好ましいものになりそうですか、と尋ねると、彼は笑つて大きく頷く。

「将棋もそうですが、頭を使うゲームは好きみたいです。良さそういう手を見つけられたうれしいですし」

「それは何よりです」

好ましいものと、そうでないもの。楽しいと感じるものと、そうでないもの。そして、大切だと思うこと、そうでないこと。人生を歩んでいれば、おのずとそういうものを見つけ、他者と比較し、『自分』を見つけていく。自分が出逢うものすべて、そこから得た経験や感情は、自己を映し出す鏡のようなものだ。

ひとつの目的のみを見つめ、脇目もふらずに人生を走ってきた彼は、今まさにようやく、『鏡』に触れて自己を見つめようとしている。「……チエスや将棋のほかにも、何か始めるご予定が？」

「うーん、まあ、いろいろ考えてはいるんですけど。……何がいいかなと思つて同期たちに話してみたら、そりやもうろくでもない案ばかり出されまして」

爆弾処理とか……と小声で柊木君が零したのを聞き、僕としたことが思わず笑いそうになつたので、咳き込んだふりをしてごまかした。それを言つたのは松田刑事か、それとも萩原刑事か。ある意味いざというときに役立つ技術ではあるのだが、せめて機械いじりくらいの言いい方は出来なかつたものか。

「とりあえずまだましな案だつたお菓子作りを、次にやつてみようかと。仲間にそういうのが得意なやつがいるので、今度ケーキの作り方を教わることになりました」

「嗚呼、それはいいですね。……では、柊木君」

次に特命係に来たときには、紅茶の入れ方を教えてあげましよう

か。

え、とひとつ瞬きをした彼に、小さく笑いかける。

「手作りのケーキに、紅茶を添えてみるはどうでしょう。紅茶も茶葉の種類から入れ方、もちろん茶器も含めて非常に奥が深いものです。試しに嗜んでみるのも、面白いかもしませんよ」

ぱあつと顔を輝かせた彼は、是非、と明るく声を上げた。僕もひとつ頷き、しかしその前にチエスですね、と言葉を付け加えると、柊木君はにやりと笑つて自陣のローンを手に取る。

「これでどうです？」

「……おや、」

良い手ですね、と思わず零すと、また彼は自慢げに笑う。しかし、と

僕はひとつ指を振つて、駒を手に取つた。

「まだ、詰めが甘い」

チエック、と駒を進めると、あつと声をあげた柊木君は、拗ねたよう口元を歪める。

杉下さんに勝つまではチエスにハマりそうです、と悔しげに呟いた彼に、思わず吹き出した。

遠慮のかたまり

遠慮のかたまり、という言葉がある。おもに関西圏で使われる言葉だそうで、大皿料理や箱入りお菓子なんかをわけたとき、最後の一個が残つてしまふことを言うそうだ。俺にどつては日常的に使う言葉ではないが、皿の上にぽつんと残つた最後のたこ焼きを見てその言葉が浮かんだ。

といつても、この状況でこれを『遠慮』と称するのは限りなく間違つているのだろうけれど。

「誰が今日のために人数分の材料買い込んできたと思つてんだよ。どう考えてもこれを食う権利は俺にある」

熱弁する松田の手にはいつもの銀色の缶。さて今日何本目だつか、と俺も同じ色の缶を傾けながらぼんやりと考える。俺はスーパー ドライよりクリアユウヒ派なんだけどな、と思いつつもそれを喉に流し込んだ。ビールの選択権は買い物をした奴があるので仕方がないが、少しは家主に気を遣えと思わなくもない。

いやいや何言つてんの、松田の言葉に首を振つたのは萩原だ。新しい缶を手に取り、ぷしゅ、とそのプルタブを開ける。

「旭ちゃんに頼み込んで今日という日をセツティングしたのは俺よ？ お好み焼きたこ焼きとそれはそれはしつこく言い続けたのは俺。つまり今日粉ものが食べられたのは俺のおかげで、だからこそこれは俺が食うべき」

ほんとにしつこかつたな、こいつ。いつもは「粉もの！」「今度な」で終わる会話が、「お好み焼き」「たこ焼き」「粉もの」「食べたい」「ねえ」「食べたい」こんなメッセージがそれはもう毎日。お前は粘着系ストーカーかと。積極的にトラウマ抉りに入る萩原にちよつと本気でブロックしてやろうとかと思いましたが折れてやつた俺は優しい。

いやいやそもそもだな、と萩原の頭を押さえ込んで、伊達が新しい缶を手に取る。

「今日は俺が大きい事件を片づけた祝いって建前の飲み会だろ？ だつたらここはやっぱり、俺を立てるべきじやねえのか？」

建前と本人が言つてるあたりどうなんだとは思うが、確かに今日は、伊達が世間を騒がせていた連續殺人事件を解決した祝いという体の飲み会だ。一応最初の乾杯までは皆覚えていたと思う。ちなみに俺は今の今まで忘れてました。そういうえばそうだったね。ビール美味しい。この手のことには珍しいのだが、今日は結構に酔っているらしい。

いやいやちょっと待てって、と伊達のビール缶に自分のをぶつけたのは諸伏だ。

「確かに今日の主役は伊達だけど、山積みの書類片づけてお祝いに駆け付けた俺のこともちよつとは勞つてくれないか？　ていうか俺が来た時には皆食べ始めてたし、お前らはもう腹いっぱい食べただろ？」

俺まだ全然食べてない、とか口元に青のりをくつづけて言われても、と正直思つた。諸伏が仕事の関係で途中からの参加になつたのは本当だが、その分かなりのハイペースで食べて飲んでいたのを俺は知つてゐる。あと、松田や萩原の取り皿からこつそりたこ焼きをかすめ取つていたのも知つてゐる。公安ではスリも必要スキルなんだろうか。公安すげえ。今の顔色から諸伏が酔つているのかどうかは判別できないが、この状況を全力で面白がつてゐることだけは明白だつた。ミスター愉快犯。

そして、いやいや待つてくれ、と口を挟むやつがもうひとり。まさかこいつまで、と思つたが、その顔は真剣だつた。

「俺は食べたい」

「……ゼロ？　酔つてるか？」

「俺は食べたい」

「わかつた、まず降谷は水飲め、な？」

「俺は食べたい」

「え、どしたのれーくん、いつもはこの程度じゃ酔わないのに」

「俺は食べたい！」

「アウトだな。柊木、水くれ」

松田に言われ、同じ言葉しか繰り返さない真顔に、とりあえずミネ

ラルウォーターのペットボトルを投げつけた。可愛げのない酔っ払いはゆうゆうとそれを受け止め、キヤップを捻つてそれを喉に流し込む。一息ついて、また一言。

「俺は食べたい」

「降谷、もう寝ろよ」

泊まつてつていいから、と仕方なく声をかけるが、それでも降谷はたこ焼きから意識を離さない。お前そんなに食い意地張ったやつだつたつけ、と思ったが、多分これはいつもの負けず嫌いが発動しているだけだろう。ここで引いたら負けとでも思つていいようだ。

まつたく、たかがたこ焼きひとつで何をやつてるんだか。もうめんどくさいのでお前らジャンケンでもしろと言えば、何故だか馬鹿たちはまためらめらと闘志を燃やしだす。

「後出しは反則だからな」

「そんなことしなくても研一くん勝つし?」

「知ってるか? ジャンケンにも勝利の法則つてのがあるらしいぞ」

「あはは、心理戦とか付き物だよな。ちなみに俺はパーを出します」

「おれがかつ」

いやほんと、遠慮のかたまりとは何だつたのか。

ところで、たいていの人間は、特に意識しない限り利き手でじんけんをすることが多いように思う。たとえ利き手に何かを持つていたとしても、わざわざそれを置いてジャンケンに挑むことが多い気がする。いや俺の気のせいかもしれないが、実際に今こいつらは何故だか箸を置き、互いを牽制するように睨みあつた。そう、さつきまで凝視をしていた降谷ですら、目的のブツから目を離して。

つまり俺が何を言いたいかといいますと、遠慮のかたまりどころか争いの火種になり果ててしまつた『危険物』は、制作者として責任をもつて処理しないとな、という話です。

ジャンケン、と俺以外の全員が利き手を出すと同時に、争いの火種は俺の口に消える。ちょうどよく冷めたたこ焼きが美味しい。よく咀嚼して、ビールと一緒に喉に流し込む。

男五人分のうるさい悲鳴が、深夜の部屋に響いた。

桜木旭襲撃事件

俺が通り魔に襲われたと知るや駆けつけてくれる悪友たちには、申し訳なくもありがたいと感じる。いや本当にそう思うのだが。

「何だ、顔は無事か。不幸中の幸いだな」

「うんうん、とつさに腕でかばつたって？　顔はキレーなままだね」

「しかし顔目掛けて劇物とは、本当に悪質だな」

心配されているはずなのになんとなく素直にうなずけない言葉に、じくじくと痛む腕の火傷に堪えながらため息をつく。同時に俺のスマホが通知を告げた。メッセージが二件、公安にいる悪友たちからだ。

『話は聞いた。顔は無事で何より』

『軽傷って聞いてとりあえず安心したよ。顔に傷がつかなくて良かつたな』

いや、だから。

『何でお前ら基本顔の心配なわけ？』

『旭ちゃんの国宝級のイケメンに傷とか許されないじゃん？』

素で言い返してきた萩原に苦い顔をすると、まあまあと伊達が苦笑する。

『悪い悪い、これでも安心したんだよ。通り魔に襲われて病院に搬送されたっていうからどんな大怪我だと思つたのに、とりあえず腕の軽い火傷で済んだってんだから』

『にしてもお前、たるんでんじやねえの？　視線だの殺氣だの、普段ならすぐ気づくくせに』

松田にそう言われ、言い返せずに黙る。正直なところ、俺もそのあたりの察知能力にはそれなりの自信を持つていた。数々のストーカー被害によつて磨かれたスキルだが、これのおかげで危険から逃れられたことも多い。それが今回は全く役に立たなかつた。気が抜けていたと言わればそれまでだが、なんとなく腑に落ちない。

『んー、と首をひねりながら萩原が口を開く。

『背後から声をかけられて、振り向いた瞬間を狙つた犯行だつたんだ

よね？」

「ああ、男の声だつたと思う。一瞬だつたし暗かつたから相手の姿はあんまり見えなかつたけど、いつのまにか背後に立つてて、振り向いた瞬間に瓶が目に入つた」

「で、ぶつかけようとしてきたからとっさに瓶ごと振り払つて、腕に少
量かかる程度で済んだと」

このところは犯罪被害も落ち着いていただけに、久しぶりに被害者になつてしまつたことにうんざりした。慣れたなんて言葉は使いたくはないが、劇物かけられても「めんどくさい」という感想になるあたり俺もかなり毒されている。

とはいへ、ここまで殺傷能力のある被害は久しぶりだ。

「ま、傷害事件には違いねえからな、多分うちの班が担当することにな
る」

「松田のとこか。そりやよろしく」

「おう」

部下が来たらまた詳しく話を聞くからな、と言われて頷く。俺のいろいろと面倒な事情を知つているやつ相手なら話もしやすい。そう思つて少しほつとした。

対して松田は心底嫌そうな顔で、とりあえず、と盛大にため息をついて言つた。

「……しばらくしつこい女とすでに振つた女の顔と名前、思い出して
おけよ」

「…………えつ俺それをお前や幸人の前で言うの……？」

「あのな、居たたまれねえのはこっちだわ馬鹿野郎。大人しく吐け」

背筋がぞつとした俺と即座に言い返した松田の様子に、伊達と萩原は盛大に肩をふるわせていた。

深夜パトロール実習の話

少し古い話をしよう。僕たちが警察学校に通っていた頃の話だ。

今もあるのかわからないけれど、当時警察学校には夜間のパトロール実習があつてね。拳銃をはじめ危険なものも多く保管している警察学校に不審者が侵入することのないよう、実習も兼ねて校内をパトロールするんだ。基本的に二人ひと組でペアを組み、深夜の学校をぐるりと一周することになっている。

そう、それで僕は柊木とペアを組むことになつたんだ。たぶんこれも恒例なんだろうけど、僕らが担当だと知つた先輩たちにはさんざん脅かされたよ。「こここの倉庫ではかつて訓練について行けなかつた者が自殺をしてそれ以来幽霊が！」とか「あそこの角は不審者が隠れやすいからかつて刃物をもつた暴漢が！」とか、よくある怪談話みたいなものだね。パトロールのルートを指示した教官にまで脅かされて、これはむしろ怖がつて見せた方がいいのかな、なんて柊木と笑つたりしたものさ。

深夜になつて校内のパトロールを始めても、もちろん気を抜いたりはしなかつたけど、平和な散歩くらいの調子だつたんだ。そう、開始十数分の間くらいはね。

最初は僅かな物音だつた。ほとんどの者が寝静まつているはずなのに、僕らの背後から確かに足音がしてね。それもひとりやふたりじゃなく、しかも明らかに声を押し殺していた。

とつさに、隣の柊木と視線を合わせたよ。

『……柊木』

『三秒な』

一、二、三、と呼吸を合わせて走り出すと、背後からいくつもの足音が追つてきた。不審者かと身構えたけど、少し重めの動きにくそうな足音が気になつてね、走りながら後ろを向いたら——まあ驚いたよ。

『……先輩か？』

『ああ、訓練の一環なのか嫌がらせなのかどつちだらうな』

そう柊木も走りながら疲れた顔をしていたね。いや身体的でなく精神的疲労の方の。

僕たちの背後に迫っていたのは、逮捕術の防具をつけてソフト警棒をもつた集団だつたんだ。防具と暗闇で顔は見えなかつたけど、隠さなくなつたそれぞれの声に聞き覚えがあつた。

『イケメン ニクイ』

『イケメン 優等生 ニクイ』

『エリート キライ』

『ブットバス』

『ヤツチマエ』

いや、どこの森の猩々たちかなと。とつさに森に帰れと叫ばなかつた僕らは偉かつたと思う。

もちろん先輩たちもただのノリだつたと思うよ？ 社会正義の要たる警察官の卵が、まさかそんな私怨というか嫉妬で後輩をボコリにくるわけがないじやないか。ただ、そんな異様な殺氣をまき散らす集団に追いかけられるこちらの身にもなれというかね。

もつとも、訓練であれ嫌がらせであれ大人しくやられる気はなかつた。建物の隙間を縫うように走りながら、とりあえず僕は広い場所に出来るべきだと柊木に言つたんだ。校庭あたりで迎え撃とうと。けど、一瞬考えた柊木は笑顔で首を振つてね。

『いや、倉庫裏に行こう』

『倉庫？ あそこは狭いし、何より行き止まりだぞ？』

『ああ、袋小路だな。その方がいい』

いいから、といつになく柊木は強気に言うから僕はそれに従つた。行き止まりについた僕らは、防具でかためた集団に追い詰められた形になつたんだ。

行き先を誤つたなどせせら笑う先輩たちを前に、柊木ときたらいつになく満面の笑みを浮かべていてね。そう、寒氣がするくらいに。

『ああ、追い詰められてしまつたナア。武器をもつた集団相手に追い込まれたんだから、まあ、普通に抵抗しても許されますよね？』
ぎく、と先輩方が一気に硬直したのが面白かつた。

『そして少しばかり力が入りすぎても、致し方ありませんよね？』

『ごき、と柊木の指から景気のいい音が鳴る。』

『ところで、まさか警察官を志す方々が自身の後輩を多数で追い込み、武器を持つてボコるなんて、さすがにやりすぎだつて教官も怒るんじゃないですかね？ええ、卑怯にもほどがあるというか、もはやりんチで暴行罪ですし？あ、これはただの独り言ですよ、だつて俺は皆さんのが正体なんて気づいてませんし』

ざ、と片足を引いた柊木は完全に臨戦態勢。満面の笑みの目だけは笑つていなくて、顔には完全に「全員潰す」と書いてあつたな。

その後の詳細は柊木の名誉のために伏せるけれど、まあ僕の率直の感想としては、柊木こいつ訓練よりルール無用の殴り合いのほうが強いんだなとか、いつも適当に流してたけどやつぱり先輩たちのやつかみや嫉妬には苛立つてたんだなとか、心理的に自分たちのほうが全力で暴れられる状況を作りにいくなんて相当な策士だなとか、それから、そう。

——柊木って、実は相当かなり性格悪いんだな、と。

* * *

「つまり僕が何を言いたいかというと、例の件でCIAを全力で脅したのも柊木の一面に違いないから、君が柊木に無理をさせたなんて心配をする必要はないということだよ、志保さん。大丈夫、柊木はいいやつだけど聖人君子ではないから」

「ええ、いま心から安心したわ」

「自分もノリノリだつたことを意図的に省略した説明はどうかと思う。……ちょっと待つて宮野さんそんな目で見ないで、絶対降谷のが全力で暴れてたから。備品壊しまくつて教官にやりすぎつて怒られてたから」

「ははは、柊木とふたりで正座させられたのは後にも先にもあのときだけだつたな」

ちなみに白樺先輩は僕たちが倉庫の方へ向かいだした途端に離脱

して高みの見物を決め込んでいたらしい。「教官の指示で襲撃に行つただけなのに悪役に仕立てられるとかごめんだから」と笑っていた。あのひとつはそういうところがある、とふたりしてため息をついた。

泣き虫の鬼

そこそこ長い付き合いのこいつは、はたから見れば「完璧」に見えるらしい。

まあ確かにルックスはどんでもねえレベルだし、頭もよければ腕もたつ。しかもそとづらは徹底的に取り繕つていて、品行方正で穏やかな好青年も演じられる。まあ本性を知らなければ完璧な人間だと思つてしまふのも無理はないのかもしれない。しかし俺としては、そんな柊木が見せるこんなめんどくせえ姿の方をわりと気に入つてゐるわけで。

「……柊木君も落ち込むことあるんだね？」

特命係の小部屋にある机、そこを陣取つた柊木は盛大に影を背負つてぶつぶつと呪詛を吐いている。年に一回あるかないかくらいの頻度でこの姿をさらす柊木だが、神戸さんが見たのは初めてだつたようだ。隠しきれないドン引き具合に俺は笑つてサングラスを外した。

「面白えでしょ」

いや面白いって君ね、と困つたように神戸さんは繰り返す。その後ろで苦笑をしていた杉下さんは、上品なティーカップに紅茶を注いでいた。

「柊木君、きみ、飲みますか？」

「……いただきます……」

のろのろと顔を上げて、ひどく情けない顔を俺たちに向ける柊木。ここで噴出さなかつた俺は褒められていい。たぶん笑つていたら冗談抜きで柊木の本気の拳が飛んできていただろう。それはそれで面白そうだが、さすがに本庁で暴力沙汰はまずい。

「失礼しまーす松田いますかーつてあれ、旭ちゃんもいるじやん。どうしたの？」

「おう萩原、なんか用か」

「さつき自分のタバコなくなつたからつて俺のまるごと持つてつたつしよ。返して」

「ああ、悪い悪い。お前のまざいな」

「ひとの奪つといてこの言い草だよ全く」

投げ返したタバコを軽くキヤツチすると、萩原はそれで、と柊木の前の椅子に座った。

「何落ち込んでんの旭ちゃん。最近その呪詛言うのも減つたと思つたのに」

「はぎわら……」

「交通とこの女の子の件は俺がうまいことしてあげたじやん？　あ、警察庁の同期の女の子の話がこじれた？　それともまた変なラブレターでももらつたの？　いい加減恥を忍んで生安に相談いつたら？」
「何で女性関係限定なんだよ、あと交通部の件は片付きましたお世話になりました！」

涙目の柊木には内心抱腹絶倒。相変わらず女関係でもめそうになるたびに萩原にヘルプを頼んでいるらしい。しようがないなあと言いながら萩原も断らないのだから、結構柊木に頼られるのがうれしかつたりするのだろう。

もはやその現状に慣れ切った俺はまたそんだけトラブルに巻き込まれていやがつたのかといつそ感心するだけだが、横で聞いていた杉下さんと神戸さんはさすがに何ともいいがたい顔をしている。

「旭ちゃんが巻き込まれるトラブルなんて九割九分女性関係っしょ。それとも今回は違工の？」

「ち、……がつてて、ほしかつたというか、でも実際ちょっと違うとうか……」

またもやがつくりと肩を落とす柊木に、思わず、く、と喉の奥を鳴らす。案の定ぎろりとひとのひとりくらい殺しそうな目線が飛んできただが、今さらそれを気にするほど細い神経はしていない。

仕方がないので、なかなか口を開かない柊木にかわつて事情を説明してやることにした。別に、面白いから教えてやるわけではない。あくまで親切心だと念をおしておく。

「監察官の仕事の一環として、事故起こしたり道交法違反したやつら集めた安全運転講習つてのがあるんだが知つてつか？」

「ん？　ああ、うん、聞いたことがあるけど。何、旭ちゃんそれで失敗で

もしたの?」

「俺は仕事で失敗なんてしない」

おーおー、落ち込んでても。プライドの高さは健在ときた。実際、講習だけならば柊木にとつては何の問題もなかつただろう。もともと法律の知識は豊富だし、大勢の前に立つことも、誰にとつてもわかりやすい説明をすることも柊木にとつては得意分野だ。そう、だから油断していたのだろう。まさか、そんな落とし穴があるなんて。

「いつも通りの『控えめなにこにこ笑顔の監察官』で講習やつたら最前列から順に女性陣で埋め尽くされたうえに、休憩時間になるたびに講習の対象じやないやつまで紛れ込んでどんどん人数が増えてつたんだと」

「しかも『今後の講習も是非柊木監察官に!』っていう陳情が監察官室には山のように届いてるって」

「くわえて講習を受けたいがためなのかはわかりませんが、女性警察官の交通違反が増えているそうです。本当に、警察官としていかがなものかと思いますが」

俺の言葉に神戸さんが続き、杉下さんがとどめをさした。ぶわっと涙腺が刺激されたらしい柊木は今にも涙が零れそうで、いやお前三十路にもなつてその涙腺の弱さどうなんだとは思うが、いかんせん顔がいいために涙目さえも似合ってしまう。この顔を画像に残したら俺はひと財産稼げるだろう。殺されるだろうからやらねえけど。

事情を理解した萩原はあー……と頬杖をついて視線を迷わせる。
「いや、うん、でも旭ちゃんはちゃんと自分の仕事を果たしたんでしょ?」

「したはしたけど、俺の仕事は規律を破つた警察官を反省させて同じ過ちを繰り返させないことだ。これじゃ意味がない」

「けど、こればっかりは旭ちゃんのせいじゃないでしょ。そんなお馬鹿さんたちのために柊木が落ち込むことないよ。つーかそれ警察官としてあるまじきだし?」

「ええ、萩原刑事の仰る通りかと思いますよ。道路交通法違反もまた確かに犯罪です。それをあえて行う精神は、決して警察官に相応しい

とは言えないでしよう」

すび、と涙目の三十路は鼻をすすつた。どう見てもガキにしか見えないその顔に、その辺にあつたティッシュの箱を投げつける。こんなときまで可愛くないそいつは、軽々と顔の前でそれを受け止めた。

「三十路にもなつて泣いてんじやねえよ泣き虫」

「泣いてねえ」

「鼻すすつといで何言つてやがる。だいたいな、お前に失策があるとすればその『品行方正』保つたまま講習やつたところだろ」

そう言つてやると、ぱちり、と柊木はひとつ瞬きをした。

そして無言のままティッシュをとり、ず、と景気よく鼻をかむ。丸めたティッシュをゴミ箱に放り入れたころには、柊木の目はすっかり据わっていた。

「講習会つてのはつまり悪いことやつた奴らにその罪の重さを思い知らせてやる、一種の『査問会』だ。そうだろ？」

そう言つてにやりと笑つてやれば、調子を取り戻したらしい柊木は、それはそれは人形染みた美しい微笑みを浮かべた。

長い付き合いの俺たちは、知つている。柊木がこの顔をする意味を。その後に、何が起こるかということも。

「おつ調子戻つたね旭ちゃん！」

「しつかり絞めてこいよ、柊木監察官」

うん、と素直に頷いた柊木に、神戸さんは頭が痛そうに額をおさえ、杉下さんは微笑ましそうに大きく頷いていた。

*

余談だが、そのしばらく後に開かれたという安全運転講習では、阿鼻叫喚の悲鳴が響いたという。柊木旭がやり切つた笑顔で監察官室に戻ってきたと、その上司が零していたとか何とか。
しかしその講習会で柊木が何をやつたのか、詳しいことは誰も知らない。

次なる事件

スマホに表示された連絡先に、おや、とひとつ瞬きをした。

実を言うと、このひとから連絡をもらうことは別に珍しくない。合衆国アレルギー持ちの悪友にバレると後がうるさいので余所で言うことはないが、何故だか数ヶ月に一度程度は電話を寄越すひとではあつた。

たいていは世間話と生存確認だが、たまに日本が絡む厄介な事件の情報なんかも横流してくれている。本人曰く「FBIにいる目的は達したからいつ辞めさせられても構わない」ので、自分が必要だと思うことは遠慮なくすることにしたらしい。降谷と合わないのはそういうところなんだよなあと思いつつ、もらえるものは有り難くもらうことにしていた。

しかし、今回は時間が珍しい。時差を数えれば、いま合衆国は早朝のはずだ。深夜ならまだしも、朝という時間帯にあまりに似つかわしくないひとだけに、何となくひつかかるものがある。とはいっても、まあ、仕事が仕事なだけに徹夜くらいはしてもおかしくはない。とりあえず通話をタップすれば、慣れた低い声が鼓膜を叩いた。

『おはよう柊木くん、良い朝だな』

「赤井さんてびっくりするくらい朝が似合いませんよね。こつちは夕方です」

軽口を返せば、電波の向こうで喉を揺らす音がする。ふ、と息を吐いたのが聞こえたから、おそらくは一服の最中というところだろうか。

『この時間は珍しいですね。仕事ですか?』

『そんなところだ。何かと立て込んでいたところに、少し一悶着あつてな』

『一悶着?』

ああ、と少し低い声が落ちる。赤井さんらしくもなく、言葉を選んでいる様子だつた。どうやら今日は雑談をかわす余裕はないらしい。『ジンを覚えているか』

「……それは、まあ」

唐突に出た名前に、かつての記憶が蘇る。

無理矢理引きずり込まれ、指揮を任せられた例の件。半世紀掛けて世界の闇に根を張った犯罪シンジケート。そして、その中核に在った狂犬。

まあ最後はあつけないものではあつたが、彼の存在がなければ組織を潰すのはもう少し楽だつただろう。それだけの実力のある犯罪者だつたと言える。

「貴方の宿敵こいびとが、何か？」

『君に会わせろと言つてきた』

「……は？」

ジンは今、合衆国にある特別な刑務所に収監されていると聞いていい。逮捕後の被疑者の扱いなど俺の知つたことではないので詳しいことは聞き流していたが、確かにそこそこ大人しくしており、脱獄を画策しているような様子はないという話だつたはずだ。

そもそもジンは、俺の存在などほぼ知らないはずなのに。

『正しく言うと、あの最後の逮捕劇の指揮を執つた人間との面会を希望している。俺も気になつてジンの面会に行つたんだが、それ以外のことと言おうとしなくてな』

自分に引導を渡したやつのツラくらい拌ませろ、ただそう言つて笑つていたのだと言う。

『こちらとしてはジンの要求など聞く必要はないんだが、君相手ならこれまで黙秘してきた情報を喋つても構わない、と』

『……。……何か企んでるんですかね』

『今の状況では手がかりが少なすぎてな』

どうだろう、と赤井さんは静かに言つた。

『少し休暇を取つて、合衆国でバカンスを過ごしてみないか』

「嫌ですけど」

『少しは検討してくれ』

愉快そうに笑う赤井さんの声を聞きながら、窓の外に目を向けた。

陽が沈んでいく西の空は、不気味なほど真つ赤に染まつている。

あ、これ何かまた変なもんに巻き込まれる気がするな、と首の後ろにちくちくしたものを感じた。同時に、今抱えている仕事の引き継ぎの段取りが脳内を駆け巡っていく。

「……いや、赤井さん、俺今公安所属じゃないんですよ」

『知っているとも。まあいいさ、ゆっくり考えててくれ』

君の平穏を祈っている、と少しも心のこもっていない一言とともに、通話は途切れた。つい、はは、と硬い笑い声が口から漏れる。

「……降谷と諸伏に連絡いれと……」

頼むからもう巻き込まないでほしい。

六花、惚氣る

このひとの辞書に、社交辞令という言葉はなかつたらしい。相変わらずどう見ても堅気には見えないそのひとを見て、改めて思う。

どう見ても犯罪者側だよなあ、と決して口にはできない感想を浮かべつつも、あつだから潜入捜査できたのか、と変な風に納得をした。

「俺の顔に何かついているか？」

冷えたお茶で一息ついたそのひとは、不思議そうに首をかしげた。

「イケメンな目と鼻と口が」

「なるほど、他でもない君にそう言つてもらえるとは光榮だ」

「はははうるさいんですけど」

唇をゆがめて笑うそのひとが連絡をよこしてきたのはほんの数日前のことだった。いきなりスマホを鳴らしてきたと思えば「日本に行く。会えないか」という何とも簡潔なメッセージ。降谷でも諸伏でもなく俺に連絡をよこしてきたことがなんとなく意外だったが、確かにいつか呑もうという話をしていたな、と思い出してOKをした。呑もうと言つてきたのは確かに赤井さんからだつたが、本気だつたらしい。物好きなんだ。

しかし俺としては、正直こんなに目立つ人とは外でなんぞ会いたくないわけで。

「すいませんね、こっちの都合で場所決めちゃつて」

「俺が構わんが、むしろ君こそ良かつたのか？まさか自宅に招待してもらえるとは思わなかつたよ」

「あんまり外出をしないので、ひと呼ぶのは慣れてるんです」

ホー、と軽く赤井さんは相槌を打ち、ちらりと俺の顔に目を向けた。「そのルックスにその性格でその能力なのに女性が苦手だつたか、君も難儀だな」

「おい待て誰だ口割つたのは」

また俺から目線を外したその人は、煙草を取り出してさあな、とつぶやく。

別に隠してはいな。隠してはいなが、自分の知らないところで

話が広がるのはさすがにいい気がしない。眉間にしわを寄せた俺を見て赤井さんは苦笑する。

「心配するな、俺以外の捜査官は知らない」

「……別に知られることは構いません。が、もし職務中にそれを取り繕えていなかつたら、それは俺としては大問題なんですけど」

「ふむ……そうだな、うすうすと感じるところがあつたのは事実だが、ある人物に鎌を掛けるまでは俺も確信は持てなかつたよ」

「……いいでしよう、その人物が誰かは聞かないでおきます」

おおかた新一くん、次点で宮野さん、大穴で風見さんといったところだろう。いや、風見さんならたぶん馬鹿正直に申告してくるだろうから、前者ふたりのどちらかか。とつぐに赤井さんも知つていると思つて認めてしまつた可能性が高い。

知られてどうということでは決してないのだが、何となく気まずい思いが捨てきれない。そんな俺に構うことなく、赤井さんは白煙を吐き出した。

「……ああ、断りもなく吸つてしまつたが構わなかつたか？」

「構いませんが、この部屋灰皿ないですよ。携帯灰皿ありますね？」

「ああ。……ないのか？ 灰皿」

その意外そうな顔に、そういうえば、とふと思う。あのときはそれはもう、ヘビースモーカーと言われても仕方がないほどの本数を吸っていた。赤井さんは煙草を吸う俺しか知らないのかと思うと、なんだか妙な気分になる。俺が吸つていたことを知つている人はむしろ少數派だ。

「もう吸つてないんです。というかもともと吸わない人間で」

「ホー？ あれだけ吸つていたというのに、やめられたのか」

「意外とあつけなかつたですよ。特に抵抗なく」

赤井さんも止めたらどうですか、と無理を承知で言うと、無理だとやはり一蹴された。きっともうその肺はその服と同じくらい真っ黒なのだろう。いくらトレードカラーとはいえ、肺の色まで徹底することはあるまいに。

「どれくらい日本にいるんです？」

「二週間ほどを予定している」

「一応聞きますが、休暇ですね？」

「正真正銘、休暇だ。ライフルもないぞ、身体検査でもするか？」

両手を広げてみせた赤井さんに、それなら結構、と俺も自分のコップに口をつけた。

FBI捜査官の「休暇」と言われるとどうも印象がよろしくないが、同じことをしてくるほど馬鹿ではないだろう。何より、俺や官房長が出来る限りのいやがらせをしてむしり取れるだけむしり取つてやつたのだ。懲りてもらわなくては困る。

「しばらくジエイムズは日本と聞くだけで震えていたぞ」

「それは重畠、……いえさすがに気の毒と言つておきますよ。俺だって官房長は相手にしたくありません」

「日本には怪物が多すぎないか？」

「官房長が怪物なのは同意しますが、多すぎるってのはどういう意味ですか？」

にこつと笑つて見せると、赤井さんは無言で目をそらした。言いたいことがあるならばつきり言えばいいものを。

「怪物にわざわざ声を掛けて会いに来るとは、貴方も醉狂ですね。せつかくの休暇なのに」

「わかつた、怪物と言つたこと謝ろう」

「はは、別に構いませんよ」

「ほん、と赤井さんはひとつ咳ばらいをして、改めて続ける。

「君に声を掛けたのは、……ひとつ聞きたいことがあつたんだ」

「へえ、なんですか？」

これは間違いなくしたいしたことじやないな、と変な風に面白がりつつ、赤井さんの次の言葉を待つ。意を決した顔で口を開いた赤井さんの口から出たのは、想像以上にくだらないものだつた。

「君と降谷君、警察学校の首席だつたのはどちらなんだ？」

口の中にお茶が残つていなくて良かつた。思わず口元に手をやり噴き出すまいと抑えたが、結局ぶふつと間抜けな音が漏れた。いや無

理だろう堪えられるか。無駄にシリアスやハードボイルドが似合う
その顔でそんなどうでもいいこと聞かないでほしい。

ああ、うすうす察してはいた。このひとは相当に有能で頭が切れる
捜査官なのに、私生活ではとんだポンコツ、しかも結構天然。何だこ
のひと面白い。

「それを、聞くために、わざわざ、俺に……？」

「いや、ただ話をしてみたかったというのもあるんだが」

きつと首席のことを聞いたかったのも、ただ話をしてみたかったと
いうのも本当なのだろう。いや、もしかしたら話をしたかった、とい
うのが一番なのかもしれない。

ふと思つた。このひと、雑談というものが得意なようでそうではな
い。気遣いができるようで苦手。多分、人付き合い全般が出来るよう
でそうでもないのだろう。そんなひとが、わざわざ俺に声を掛けて、
こんなくだらない質問を持ちかけて。そこには確かにおさえきれな
かつた好奇心もあるのだろうが、もしかしたら別の意図もあつたりす
るのだろうか。たとえば、そう、たとえば。
これをきつかけに、もつと親しくなりに来た、とか。

「……っ！」

「柊木君？」

再度噴き出しそうになるのを堪える。思わず俯くと、心配そうな赤
井さんの声が聞こえてきた。待て待ておさえろ、この想像があつてい
ようが違つていようが笑うのは失礼だ。というか人付き合いのこと
でひとつを笑えるほど器用でもないだろ俺も。俺の寂しい青春時代と
友人の少なさは自覚している。

俺はそう、きっと、……この質問に、ただ答えればいい。今までよ
りも、小さじ一杯分くらいの親しみを加えて。多分、そういう感じで
いいんだろう。たとえ赤井さんにそんな意図がなかつたとしても、
きっと俺の心境に何かしらの変化があつたのだと軽く受け止めてく
れる。それくらいの器はあるひどだ。

「……いえすみません、首席の話でしたね。諸伏にでも何か聞いたん
ですか？」

「ああ、それは熾烈なデッドヒートを繰り広げていた。だが最終的にどつちが勝ったのかと聞いたらはぐらかされてな。本人たちに聞くけど、面白そうに」

「ああ、目に浮かぶ。そういうところが愉快犯なのだ。どうせこう聞き返してほしくて、わざわざ答えをはぐらかしたのだろう。」

「で、赤井さんはどつちだと思つてるんです？」

沈黙が流れる。そして数秒後、赤井さんはさつと両手を上げる。俺はその姿にまたひとつ噴き出した。意地悪なことをしてしまった。

「ははは、俺赤井さんのそういうとこ嫌いじゃないですよ」

「……柊木君」

じとりと睨まれ、はいはいすみませんとまた笑う。

かつての懐かしい記憶、もう十年近くも前になるのか。まわりから茶々入れされながらも、降谷と張り合うのを楽しんでいたあの頃。結局今も昔も、俺と降谷の関係性は変わっていない。

「……そういえば赤井さん、俺ちょっと前に久しぶりにゲーセンに行つたんですよ」

いきなりの話題転換に、赤井さんはきよとんとする。いやいや話を誤魔化したわけではなくちゃんと関係のある話なので聞いてほしい。あの日のことを思い出して笑いながら、言葉を続けた。

「降谷の提案だつたんですけどね。たまには柊木の願いを叶えてやるなんて上から目線で言うから何かと思ったら、連れられた先がゲーセンで。警察学校にいたときにも行つたことがあつたんですが、そのとき俺、降谷とエアホッケーで勝負したんです」

あ、エアホッケーってわかります?と振ると、赤井さんはどこか戸惑つた顔のまま頷いた。

「警察学校の時は、俺が初めてだつたつてこともあつて負けちゃつたんですよ。僅差でしたけど。で、ふざけ半分でいつかりベンジしたいつて言つたのを覚えてたんでしょうね。降谷の奴、リベンジのチャンスをやるよって。チャンスだけなつて笑うんですよ」

「……ああ、それを言つた顔が容易に目に浮かぶな」

「ええ、降谷らしいあの顔です。はははすげえムカつきましたね」

強気で不敵な、負けてやるつもりはさらさらないと語る笑顔。しかし負け通しというのは面白くない。今回は勝たせてもらう、と俺も笑って返した。相手が簡単に勝てる相手ではないと知っているからこそ、そのぴりりとした空気が心地いい。降谷と何かで張り合うときは、それがいつも嬉しかった。

『何点マッチだつたかな。いやあ白熱しましてね、普通たぶん数分で片が付くゲームだと思うんですけど、これがまた終わらない終わらない。結局數十分打ち合つてたんじやないかな。頭フル回転だし瞬きできないし全力で打ち合つしで、もう汗だくになりましたよ。一緒にゲーセンきてた他数名も、最初のうちは声援くれてたのに途中で飽きたしましてね』

どつちの勝ちでもいいからお前らしい加減蹴りつける、と腹減り松田が騒ぎ出したのはゲームがようやく終盤に差し掛かつたころだつたか。相変わらずの負けず嫌いだねえと萩原すら苦笑して。まあお前ららしいけどなあと伊達は面白がり、いつの間にか諸伏は俺たちへの差し入れに飲み物をふたつ手に持つていた。俺も言葉のうえでは悪い悪いと言いつつも、やつぱりそう簡単に勝ちを譲つてやる気にはなれず。度を超えた負けず嫌いの降谷についても言うまでもない。

俺が全力で遊べるゲームはそう多くないので。勝つにしろ負けるにしろ、愉しまない手はない。滲む汗をぬぐつていると、降谷に声をかけられた。

『なんだ、ずいぶんと疲れているようだな? デスクワークばかりで鈍つたんじゃないのか』

俺と同じように汗をにじませているくせに、よく言う。愉快そうに煽る降谷に、俺も言い返した。

『デスクワークで鈍つてる俺と接戦だなんて、お前こそ鈍つたのか? ああ、今は前線に出させてもらえないんだつたか』

じやあ仕方ないよな、と言葉を付け加えると、ひくりと降谷の片頬が引きつる。何人かが噴き出したのを気配で感じた。

正しく言うと前線に出させてもらえないのではなく、出世したから立場的にあまり出られないだけなのだが、基本的に最前線に出たがる

性分の降谷には刺さつたらしい。降谷の持つマレットがみしりと音を立てたのを覚えている。

「そこからまた白熱。お互いまッチポイントになつたときは燃えましたね」

「ゲーム器具は壊れなかつたのか？」

「赤井さん俺たちを『ゴリラか何かだと思つてるでしょ』

「降谷君に限つては間違つてないと思うが」

それは同感、と言うと認めるのか、と赤井さんも笑つた。仕事中に見せるニヒルな笑みではなく、本当に面白がつてているような笑い方だつた。このひとこんな風に笑うのか、と少し意外に思つたが、口には出さない。指摘するのも野暮というものだろう。

「最後の一点のラリーがいちばん長かつたんじやないかな。もう負けたたまるかの意地の張り合い。お前らガキかつてさすがに後でからかわれました」

「君たち相手にガキ扱いか。親しいんだな」

「それなりに長い付き合いでして。……いやー、あれは我ながらいい勝負でした」

負けたんですけどね。

そう一言付け加えて、もうひとつ微笑む。気遣いも気兼ねも不要だ。だつて俺は、本当に楽しかつたんだから。

「ど、つまり何が言いたいかと言うとですね。俺、結構降谷には勝てるないんですよ」

警察学校で首席を取つたのは、降谷です。

そう言うと、赤井さんはそつと煙を吐き出した。細く白い線を描いたそれは、ゆらりと天井に上つて消える。

「……君の場合、勝敗という結果よりもその過程を重視しているからというのもありそうだな」

「はは、そうですね、降谷ほど負けず嫌いではないので、それはあると思います。でも別に、手は抜いてませんよ。本気で勝ちに行くから楽しいんですし」

「ああ、だろうな。……そつか、首席は降谷君だつたか」

予想は当たつていましたか？と振ると、そのあたりの話は勘弁してくれ、と流される。別に予想通りだと言つても怒るつもりはないのだが。

「……つと、そろそろいい時間ですね。すいません、飯の支度します」「ああ、もうこんな時間が。何か手伝うか？」

「……煮込み料理以外のものつくれるようになつたんですか？」

「レパートリーは増えていないが野菜くらいは切れるぞ」

「アンタは料理を舐めすぎです」

これはひとりでやつたほうが早そうだと判断し、立ち上がりかけた赤井さんを押し戻す。キャベツの千切りくらいは任せようかと思ったが、この人にやらせるとどんなでもない厚さのキャベツになりかねない。お好み焼きはキャベツの食感も重要なのだ、適当なことをしてもらつては困る。

と、そのとき、ちようどいいタイミングで玄関のチャイムが鳴った。
「赤井さん、あいつらだと思うんで出でもらつていいですか」

「了解した」

赤井さんが軽く頷いて立ち上がり廊下に出る。その間も近所迷惑の馬鹿どもはチャイムを鳴らし続けていた。いや止めてくれよ伊達、お前だけが頼りなんだぞ。

今日赤井さんがいることは、あいつらには言つていない。さて、俺ではなくあの人が出迎えたら、あいつらはどんな反応を示すのか。考えるまでもなく予想がつく。

ピンポンの連打が止まり、がちやりとドアの開く音がした。想定通りの叫びがキッチンまで響く。

「何でお前がいるんだ赤井イイイイイ！」

「うわつ何だどうした降谷落ち着け!! よしよしどうどう!!」

「あれ赤井、何だ来てたんなら連絡くらい寄こせよな。久しぶり〜」

「んだよ、この悪人ヅラお前らの知り合いか？」

「陣平ちゃん、さすがにもうちよい言葉選ぼつか？」

その場にいなくてもそれぞれの表情が簡単に想像できる。いつにも増して賑やかになりそうな予感に、俺は頬がゆるむのを止められな

かつた。

髪を切る話

少し休ませてくれ、と降谷がうちに乗り込んでくるのは別に珍しいことではなかった。立地的にちようどいい場所にあるこのマンションは、土日を問わず忙しい同期たちの休憩所としても使われている。カレンダー通りの休みが与えられている内勤の俺は、仕方ないと言いながら悪友どもを迎えて寝かせてやつたり餌をやつたりするのが常なのだが、今日もそだつた。

もたれかかるようにソファに座り込んだ灰色のスース。少しパサついた金糸はその忙しさを物語つているように思う。

「あ、枝毛」

「……何をしてるんだ、柊木」

ぶちりと一本引っこ抜いてゴミ箱に捨てれば、恨みがましい目線を向けられる。ふと目に入つた金の後頭部、ついでに枝毛を見つけた故の特に意味のない行動だったが、そんな顔を向けられればむしろ笑顔を返したくなるというものだ。

「降谷に枝毛って何か意外だな。ストレス？」

「ストレスを溜めるほど自己管理ができてないように見えるのか」「疲れ切つた顔で休みにきた野郎の台詞じやねえな」

ソファの後ろから冷たいお茶の入つたグラスを差し出せば、少しぐてくされたような顔で受け取る。この機嫌の悪さ、珍しく本当に疲れているらしい。近頃仕事が詰まっているという噂は聞いていたが、降谷ほどの処理能力の高いやつがこれほどの疲労を見せるとは。

本当に暇がないのだろう、少し見ないうちにもともと長めの髪が深く目に掛かっている。

ソファの背もたれに腕をおいたまま、降谷がグラスを空にするのをぼんやりと眺めていた。

「のびたな、髪」

さらりと揺れる金糸は綺麗だと思う。だが、降谷が外見以上に合理性を重視する人間だとすることは知っていた。

ああ、と降谷は今気づいたように前髪をつまんだ。

「そういえば邪魔だな。柊木、ハサミないか」

「……え、今切んの？」

「切つた髪は自分で片付ける」

「それは別にいいけど。……もしかして降谷って普段から自分で切つてる？」

「ああ」

「後ろも？」

「理髪のプロでも扱いにくい毛質らしい。面倒だから自分で切つてる」

なるほど、さすが天元突破レベルで器用な男。

それはそれは、と半ば呆れてハサミを取りに戸棚に向かおうとする
と、自分の前髪が目に入った。そういうえば俺もそろそろ切らないとい
けない。

「……降谷、俺もそろそろ髪切りに行くけど、一緒に行かない？」

「一緒に？ 確か柊木は元『不良少年ネットワーク』の子に切つても
らつてるんだったか」

かつて面倒を見た不良少年のうちのひとりが、今では立派に夢を叶
えて美容師として働いている。まだまだ新人だったころにカットの
実験台になっていたのだが、営業時間外に切つてもらえるのがありが
たくて結局今も頼んでしまっていた。ちなみにちゃんと正規の料金
を支払っている。

「もう見習いは脱したらしいけどな。他の客に騒がれることもない
し、結構有名だつていう店長さんに同席してもらうからその面倒な毛
質も相談できるかもよ」

「ほー？」

「俺はよく知らないけど、その店長さん界隈では知れたひとなんだ。
各方面に顧客を抱えててかなり交友が広いらしい」

「ならお願ひしようかな」

につっこり。交わされた笑顔の意味は、まあ、そういうことだ。

取り出そうとしたハサミを戸棚に戻し、じゃあ適当に連絡入れとく
よとスマホを手に取った。今はもう俺の手を離れた『不良少年ネット

ワーク』だが、それでも残つた繫がりは俺なりに大事にしていた。俺にとつては数少ない、気安い会話のできる相手だ。

「ただし変なことに巻き込むなよ。民間人だぞ」

「当たり前だろう。柊木の友人を巻き込むなんて恐ろしくてできないさ」

お前が本気でキレると意地悪く笑つた降谷の頭を、当たり前だとペシリとはいた。

*

「……ねえひーらぎさん、ひょつとしてイケメンのダチつていケメンしかいねえの？」

「……確かに皆なぜだか顔はいいけど、別に顔で選んではない」

「柊木に言われると何となく複雑」

いつか、その隣に並ぶ日まで

正直なところ、まさか俺がここに配属になるとは夢にも思っていなかつた。

多くの一般人が「警察といえば」と聞かれれば想像する部署であり、ドラマや小説にもよく出てくる定番中の定番、そして警察の花形、捜査一課。しかも警視庁の捜査一課とか、聞き違いかと思つて聞きなおすぎで怒られた。抜擢といえば聞こえはいいが、どつかで誰かの思惑が働いた結果なんだろうなど冷めた目で見ている。

とはいえるが、俺がやることに変わりはない。

「本日より配属になりました、相良幸人です。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひいたします！」

指導係の先輩は、何か複雑そうな顔をしていた。

*

どこかで見たことのあるひとだと思っていたが、通りがかりついでに肩を叩いてくれた伊達さんを見て思い出した。そうだ、ひーらぎさんの家で見た写真。ということは、このひともひーらぎさんの。

ちよつとついてこいと言われた先は、警視庁の各階にある休憩エリア。無造作に缶コーヒーを投げつけられて、慌てて受け取った。とりあえず座れ、と言われて、おとなしく缶を両手に持つてベンチに座る。安っぽいそれが、ぎしりと音を立てた。

「まず、最初に言つておくことがある」

「はい！」

壁に背を預けて立つ松田さんの顔は、ひどく苦い。メモのために手帳を取り出そうとしたが、それはいい、と止められた。

「仕事に関わる話じやねえ。……相良お前、柊木旭、知つてるな？」

「……はい」

その名前を出されて、おとなしく頷く。やっぱり、松田さんはあの写真のひとりだ。

「じゃあ、柊木の立場については?」

言われて、はたと気付く。警察学校を卒業したら名刺をもらう約束だつたが、ひーらぎさんも俺も忙しくて会う暇が作れず、連絡すら取る暇もなかなかなくて、結局もらえずじまいだつた。それなりに偉いだろうことは察しているが、所属や階級については聞いたことがない。

知らないです、と答えると、松田さんは深いため息をついた。

「……本当に説明してねえのかよあの野郎……」

「ま、松田さん?」

「あいつそういうところ抜けてるつつーか変に楽天的つつーか……どうせどつかで誰かが説明するからいいだろとか思つて頭から抜けてんだろうあいつ。腹立つわ」

あくと項垂れる松田さんに、どうしていいかわからない。思わず零れ落ちた謝罪の言葉に、いやお前は別に悪くねえだろ、とそつけない言葉が返ってきた。癖のある髪をぐしゃぐしゃと搔いて、めんどくさそうに松田さんは口を開く。

「警視庁警務部人事第一課監察官、階級は警視。順調に上役蹴落しながら出世街道三段跳びで駆け上つて、そとづら完璧のキャリアのエリートだよ」

「え、……え? ……はああ監察官!?

「声がでけえ!」

反射的にすみません、と叫ぶが、……監察官? あのひとが? 多分偉いとか言うレベルじゃないし、松田さんの言葉にもいくつか突っ込みどころがあつた。何から聞いていいかわからず口を開けては閉じていると、松田さんはまたも深い深いため息をつく。

「監察官の仕事くらい、説明しなくてもわかるよな」

「それは、はい」

警察の警察とも言われる、身内の不正や怠慢を罰する部署。出世が約束されたひとが通る道だと聞いたことがある。何かやらかさない限り縁のない部署だと思っていたが、まさかあのひとがそこに。

「だから、言つておく。柊木と知り合いだつてことは、誰にも言うな

力を込めるでもなく、抜くでもなく、平坦な声だった。俺は、ひとつ息をついて言葉を返す。

「……それは、ひーらぎさんのために、てことですか」

松田さんは少し目線をあげ、考える様子を見せた。それから眉間に皺を寄せて、首をかしげる。そして改めて俺を見て、言つた。

「……柊木は仕事中完全に猫かぶつてるからな、人間関係は上手くやつてるほうだと思うが、それでも敵は多い。ただでさえ嫌われ者の監察官つて立場にくわえて、あいつ上層に喧嘩売りまくつてるからな。柊木と知り合いだなんてばれてみろ、お前も目を付けられるぞ。それがひとつ」

ページ一の段階で上層に敵なんか作りたくねえだろ、と松田さんは言う。ちよつと待つて喧嘩売りまくつてるつて何。怖くて聞けない。「何でお前がうちに抜擢されたのかは知らねえけど、まあ異例は異例だ。それを柊木の口添えがあつたなんてありえねえ噂を立てられたくねえだろ、お互い。これもひとつ」

実際ひーらぎさんてそういうことできるくらい権力あるんですか、と余計な口を挟むと、ぎろりと怖い目で睨まれた。権力関係なく、やろうと思えばあいつは大概のことはできると返されたが、権力関係なくつてのはどういう意味だろうか。

「それにあいつは、良くも悪くも目立つ。本庁でも多分知らねえ奴はほとんどいねえくらいの有名人だ。そんなやつの知り合いが捜査一課で新米やつてるなんて知られたら、お前も相当の注目を集めむ」

誰もが、お前を通して柊木を見、柊木を通してお前を見る。

そう言う松田さんは、めんどくさそうな様子を見せながらも声は真摯だった。

「お前はお前としてこれから経験と実績を重ねていかなきやならねえんだ、余計な先入観を周囲に与える必要はねえ。お前だつて、柊木の知り合いなら優秀で当たり前とか言われたくねえだろ」

それは正直きつつい。俺は自分が凡人なことも、むしろ要領がいい方ではないこともよくわかっている。あんたは本当に人間ですかレベルで有能なひーらぎさん並みの働きを求められたら潰れてしまう

自信がある。

確かに、と頷いて気付いた。ひーらぎさんとの繋がりを他言するな、というの。

「ひーらぎさんとのことを誰にも言うなつてのは、……俺のためですか？」

「正確には俺のためだな。お前が変に目立つたら俺まで目立つだろうが、めんどくせえ」

ただでさえ柊木の同期つてバレたときはうるさかったのに、松田さんは本気で嫌そうな顔をしている。それが本音なのか建前なのかは俺にはわからなかつたが、とりあえず自分に都合の良いほうで判断しておこう。思わず、頬が緩む。多分このひと、素直じやないだけでいいひとだ。

それを見咎めてか、松田さんはさらに嫌そうな顔になつて続けた。「あのな、本当にシャレにならねえんだぞ柊木と繋がりがあるのバレたら。上層のあーだこーだもそうだが何より女どもだな。群がられて今彼女いるかだの好きなタイプはどんなだの、延々柊木について質問攻めされんだとぞ」

「……やっぱひーらぎさんてモテるんですね」

「モテるどころじゃねえよ。仕事にならねえからつて毎年バレンタインに有給とするようなやつだからな」

そういうえば毎年二月ごろになると憂鬱そうな顔をしていたようないやちよつと待つて本当にどういうレベルでモテるんだあのひと。そりやあの顔にあのスタイルにあの頭の良さにあの性格……つて並べてみたら本当にモテる要素しかねえ。やっぱりあのひと人間じゃない。

わかつたか、と松田さんは心底嫌そうな顔で言う。

「俺や伊達、あと特殊犯にいる萩原つてやつは事情を知つてるからいいが、他で口を滑らせるなよ。あとどつかで柊木の猫かぶり見ても笑つたりすんな。どれだけ面白くともだ」

「どれだけ……面白くとも……？」

「お前、常に敬語でここにこ笑顔の柊木想像できるか」

「無理です」

「そういうことだ」

うわあ。声というより音が口から零れ出た。いやだつてそれ……うわあ。

気持ちはわかると言わんばかりに松田さんに肩を叩かれる。でもそれが本庁での柊木なんだと言われ、欠片も想像できないながらに頷いた。俺の知つてゐるひーらぎさんは、品行方正を千切りにしてお好み焼きに入れてこんがり焼くようなひとなんだけど。あのひとの作るお好み焼きはめっちゃ美味しい。思い出したら腹減つてきた。閑話休題。

「……きっと偉いんだろうとは思つてましたけど、いろいろ想像以上で驚いてます」

今までだつてひーらぎさんのことあまり大声で言うようなことはなかつたし、これからもそのつもりはなかつたけれど。やっぱりあのひとはすごいんだなあと、そんなことをしみじみと思う。今まで身近な存在だったひとが、急に雲の上の存在になつてしまつたような。そんな俺を見て、初めて松田さんは少しだけ口元を緩めた。苦みの強い笑みだつたが、笑うと少し幼い印象を受ける。

「ほかで話すなどは言つたが距離を取れとは言つてねえからな、その辺勘違いすんなよ」

「そう言われても……」

「拗ねた柊木はそれはそれで面倒だからな、適当に構つてやれ」

あいつ寂しさで死ぬタイプだぞ、と面白そうに笑う松田さんに、俺もつられて笑つた。

わかつていたけど、このひと本当に柊木さんの友達なんだ、と強く実感する。それも、俺のように頼り切りの関係じゃなくて、きつともつと対等な。

「今の台詞ひーらぎさんに伝えていいですか？」

「やめろ馬鹿」

わかつたんなら戻るぞ、と俺に背を向けたその姿は、どこかひーらぎさんと似ているような気がした。

『へー松田が教育係か。運が良いな、お前』

「そう思う?」

その夜に、何となくひーらぎさんに電話を掛けた。すでに帰宅しているというひーらぎさんは特に気にした風もなく電話に出てくれ、今までと変わりない態度で接してくれる。

松田さんのこと話をしても、特に驚いた様子は見せなかつた。

『松田は理屈でものを考えるやつだから。精神論振りかざすタイプとは違つて、ああでこうでつて順序だてて説明するだろ。本人はめんどくさそうにするだろうけど、指導には向いてるやつだと思うよ。少しばかり気は短いかもしだれねえけど、筋は通すやつだし』

それは確かに、と思わず頷く。ひーらぎさんのこと以外もいろいろと説明や指導を受けたが、理屈を通して話してくれるので理解がしやすかつた。質問にもひとつひとつちゃんと説明をくわえて答えてくれたし、面倒見のいいひとなのだろうと思う。

説明わかりやすかつた、と言うと、そうだろ、と少し自慢げに返された。

「……それはそうとひーらぎさん」

『ん?』

『俺、今日初めてひーらぎさんの所属とか聞いたんだけど』

柊木監察官、とあえてそう呼ぶと、電話口に沈黙が落ちた。これはどういう無言だ、と少し焦りつつ次の言葉を待つ。数秒後に返つてきたのは、あまりに呑気な声だつた。

『……言つてなかつたつけ?』

ああそういう名刺渡しそびれてたか、と何でもないことのように。このひと本当にこういうとこ、と思わず大きなため息が出る。

まあまあ、とあくまでも軽い声でひーらぎさんは続けた。

『公の場で会うことがあれば相応の態度で接してくれよ新米刑事。それ以外は別にいいけど』

「いいの？」

『本当はあんまりよくねえから他で言うなよ。俺は別にいい』

いいのかよ、と続けそうになるのをぐつと堪えた。正直、今更ひーらぎさんに敬語なんてくすぐつたくて仕方がないというのが本音だ。人前では弁えるにしても、それ以外でくらい今まで通りでいさせてほしい。

それにしても、とひーらぎさんはしみじみと言う。

『そういうこと言われると、幸人もおとなになつたんだって思うな』
「ねえ俺成人して随分経つたんだけど？　ひーらぎさんより酒も強い
んだけど？」

『酒の強さは関係ねえだろーが。……いや、まあ』

そろそろ子ども扱いもやめてやらねえとな、と。

そういうひーらぎさんの声は、温かくもあり、冷たくもあった。ひやりと、ほんの少しだけ背筋に冷たいものを感じた。しかし不思議と、それを嫌だとは思わない。

『おおかた松田に、俺との繫がりは公言すんなつて釘刺されただろ』

「……うん」

『俺はどつちでもいいけど、お前の立場を考えたらそつちの方がいいかもな。その辺はお前の判断に任せる。とはいえ、せつかくある繫がりを使わないのも損だ』

だから、と続けるひーらぎさんの声は、今まで聞いたことがないような雰囲気を纏っていた。

『どうしても助けが必要だと思つたら連絡してきてもいい。俺に出来る範囲でだが、手は貸してやる。……ただし、』

その内容如何によつては、俺はお前を見限るからな。

ぞわりと、背筋に悪寒が走る。ふと腕を見ると鳥肌が立つていた。ぞくぞくするその感覚は気持ち悪いのに、不思議と俺の口角は上がっていく。ようやく、と達成感に似たものすら覚える。

そんな自分に笑えてきて、肩が震えだす。額に手を当てて、自室の天井を仰いだ。見慣れた天井の灯りに向けて、手を伸ばす。届くはない光なのに、何故か今なら届くような気がした。

「……ひーらぎさん」

『ん』

「俺、ようやく『おとな』になれた気がするよ」

ひーらぎさんは、未成年ガキを見捨てるようなことは絶対にしない。子どもは大人が守るもんだって、そういう主義のひとだ。そして今まで与えられてきた庇護はとても心地よいもので、俺たちにとつては救いでもあつた。本当に、感謝は尽きない。けれど。

いつまでも護られているわけにはいかないと思つていたのも、また、事実だ。

「……よつぽどのことがあつたら頼らせてもらうけど、ちゃんと俺は俺でやつてくれるから。松田さんや伊達さんもいるし、大丈夫」

そう言うと、ひーらぎさんも少し笑つた気配がした。そして、いつも通りの声に戻つて、そとか、と小さな声が落とされる。その音の温度を察して、考えナシの俺と来たら思わず言つてしまつた。

「あ、もしかしてひーらぎさん寂しい？ そういうや松田さんがひーらぎさんは寂しさで死ぬタイプだつて、」

『へえ？』

あつと口をおさえたがもう遅い。

後で松田に連絡いれておくよ、と恐ろしいほどに穏やかな声が聞こえてくる。これ俺明日松田さんに殺されるんじやないだろうか。ははは、と温度のない声で笑うひーらぎさんに、さつきとは全く違う悪寒が背筋を這う。

『口は禍の元だつて、いい勉強になつたな？ 幸人』

今後留意するように、と事務的な口調で電話は切られた。

*

この翌日、自分は何も怒つてないしパワハラだの何だのうるさい昨日にくそ長い説教や罰を与えるつもりは全くなないと宣う松田さんに、書類の束を手渡された。それは過去にあつた事件の捜査資料で、これはと尋ねると、松田さんは不気味なほどの笑顔を作る。

「今日使う資料だよ。これをもとに、供述調書を始めとする捜査資料全般の書き方と読み方を叩き込んでやる。ちなみに今日中に全部覚えてもらうから」

その台詞はパワハラじゃないんですかなんてとても言えなかつた俺は、引きつった笑顔でよろしくお願ひしますと言うほかなく。遠い目をした視界の端で、伊達さんが苦笑しているのが見えた。あ、でも助けてはくれないのね、いやわかつてたけどな!!

その夜には知恵熱が出たし死ぬかと思つたけど、最後に「根性あるじやねえか」と褒めてくれたあたり、松田さんもずるいひとだと思う。

宵の一幕

シャワーを済ませ、適当にひつつかんだ部屋着を手に取る。そこでようやくそれを確認し、あ、と小さく声を漏らした。三秒ほど考え、まあいいかととりあえずそれを着る。まだ湿っている髪をタオルで拭きながら、リビングにいたそいつらに声をかけた。

「ごめん、これ誰のTシャツだっけ？」

いつもの五人の目線が俺の着ているTシャツに集まる。俺く、と手を挙げたのはやつぱりというか、萩原だった。

「ああ、萩原のだつたか。着替えるの面倒だし借りるよ」

「いいよ、置きっぱにしてたの俺だし」

うちに集まるのが定番になつていてることもあり、我が家にはいつのまにかそれぞれの私物が結構紛れ込んでいる。着替えに関してはわけて置いていたつもりだつたが、いつの間にか混ざってしまったのだろう。

体格も似ているのでサイズも問題なく、そもそもその程度のことを気にするような間柄でもないので、俺はそのまま髪を乾かそうと洗面所に戻ろうとした、のだが。

Tシャツを見た瞬間に顔色を変えた降谷は、そのままさつと立ち上がりつて裾を掴む。

「柊木、着替えろ」

「え？」

「いいから着替えろ！」

「うわついきなり何⁈」

がばつと裾を持ち上げる降谷の目は本気で、シャツがのびるどころか破れてしまいそうだ。訳が分からずとにかくその腕を抑え込む。

その後ろであちやー、という顔で眉を下げたのが諸伏だ。

「ゼロく、いくらなんでも大人げないぞ」

「きや、やだれーくんたら旭ちゃんが俺の着てるからつて嫉妬く？」

「ハギは黙れ！」

「俺ちよつとお前のことはそういう風に見れないからごめん！」

「柊木も乗るな！」

ぐいぐいと引つ張られるのを押さえながら、自分の着てているTシャツが目に入る。こいつ、もしかして。

「まさか『あめりか』が気に入らないから脱げつて言つてんの？」

「だつたら悪いか！」

何のネタなのか、俺が来ているのは真っ白の生地にただ『あめりか』と書いた文字だけがプリントされているTシャツだ。どんな悪いふざけの産物なのかは知らないが、萩原の私物であることを考へてもどうせ大した意味のないTシャツだろう。それにまでこうも過剰反応を示すとは、全くこいつの合衆国アレルギーはひどすぎる。

「わかつた、着替えてくるからやめろ、のびる！」

そういうと降谷はぱつと手を離した。全く、頑固にもほどというものがいる。溜息をつきながらシャツの皺をのばすと、降谷が鼻を鳴らすのが聞こえた。

「お前そのアレルギーほんと治した方がいいぞ……」

「別にアレルギーじゃない」

「どの口が言うんだか。萩原、ちょっとのびたかも」

「あはは、いーよ。何かでもらったネタTだし」

部屋着にしかしてないし別にいいって」とへらりと笑う萩原。その横で松田が諸伏に何であいつ合衆国そんな嫌いなんだ、と聞き、諸伏は苦笑しながら首をゆるく振つた。まあ降谷のアレルギーには原因こそあつても理由はない。強いて言うなら「嫌いなやつがいるから」それだけだろう。

しかしさかTシャツごときでここまで過剰反応されると、とやれやれとため息をつく。面倒だが着替えるか、と背を向けかけたところでそれにしても、と伊達に感心したような目を向けられる。

「お前今もちゃんと鍛えてるんだな。しつかり腹筋割れてるじやねえか」

「そうか？」

何となく改めて裾をめくりあげると、確かに割れた腹筋が目に入る。おお、と気の抜けた歓声が上がった。

警察学校を卒業して以来、身体を動かすことは目に見えて減った。

無論、俺はそういうことがあまり必要ない立場だからなのだが、俺としては以前出来たことが出来なくなるのは面白い。とても面白くない。なので定期的にトレーニングをこなし、自分の身体が思うように動くかどうかは確認するようにしていた。

「まあでも、お前らだつて普通に割れてるだろ」

「そりや第一線で走つてりやな」

「デスクメインの旭ちゃんがそこまで鍛える必要はないのに、全くプライド高いんだから。どうせ同じくデスクのれーくんも割れてるんだろうけど」

「当然だろ」

ふふんと笑つた降谷も、ペラリと自分のシャツをめくる。もちろんというか、がつりと割れた褐色の腹が露わになつた。うーん、俺よりも筋肉量多そう。

「何で俺より重そうなのに俺より脚はやいんだろうな、お前」

「鍛え方が違うんだよ」

「言いやがつたな」

「はいはいストップな。そういうやまた二人で勝負したんだつて？」

ビールの缶を揺らしながら、諸伏はけらけらと笑う。

少し前、ちょうど桜が満開だったころ、降谷にたまにはとトレーニングに誘われた。軽く走つて済ませるつもりだったが、やはりとか勝負になり、短距離走で何回かタイムを競つた。何度かは勝てたが、それ以上に負けた。おかげで昼飯を奢らされたのでちょっと悔しい。確かに警察学校の時から降谷の方がちょっとだけ速かつたのだが、今もその微妙な差は埋められていなかつたようだ。

その話をすると、お前ら相変わらずだと呆れたように松田に言われる。

「昔つからゼロが一番早かつたんだつたか」

「つつても旭ちゃんもほとんど変わんないくらいはやかつたけどね。その次が陣平ちゃんかヒロくんだつたつけ」

「あー……でも筋肉ついて体重増えたから今は多分もつとタイム落ち

てんな。今は諸伏のがはやいだろ」

「んー、俺もどうかなあ」

俺と班長は長距離派だもんねと伊達の肩を叩く萩原に、持久走なら負けねえよと笑う伊達。

あの頃から十年、さすがにコンディションも変わつてくる。どれだけ鍛えようとも身体に衰えは出てくるし、それと上手く付き合いながら身体を動かしていくしかないのだろう。そろそろ健康に気を遣わないといけない齢にもなってきたしなあ、とそんな年寄り染みたことを思つて、苦笑した。

まだまだ若いつもりでいるが、確実に年月は流れている。

「……トレーニング増やすかな」

「何だ、またタイム競うか？」

小さく言葉を漏らすと、耳聴い降谷がにやりと俺の顔を覗き込む。それにまたひとつ笑つて、言葉を返した。

「さすがに俺も負けっぱなしは面白くない」

「柊木、いい加減お前も結構な負けず嫌いだつて認めた方がいいぞ」「降谷ほどじゃない」

というか降谷の悪影響だ。

そう断言すると、降谷以外の四人がなるほどと大きく頷く。ひとのせいにするなど喚く降谷を尻目に、じゃあ着替えてくるわと自室に足を向けた。

「あ、ちょっと待つて柊木！」

「何？」

「いーからちよつと、こっち向いて、はいポーズ」

諸伏に言われて訳の分からぬままピースをつくった。同時に、かしゃりという軽いシャツタ一音。いつのまにか諸伏の左手にはスマホがある。

「……何？」

「いや、ただの記念」

「記念つて」

「いいからいいから。ほら、着替えて来いよ」

いい笑顔で手を振る諸伏に何となく薄気味悪く思いながら、俺はそのまま部屋に戻つて適当な部屋着に着替える。

諸伏の意図を理解したのは、そのすぐあとのことだつた。

『アメリカに来るなら歓迎するぞ』

海の外からのそんなメッセージに降谷は憤慨してスマホに向けて喚き、俺たちは呆れ、諸伏ひとりがけらけらと笑っていた。

諸伏曰く、これだからゼロをからかうのはやめられない、らしい。

今を生きる

確かに、ふとしたきつかけで脳裏に浮かぶ影はある。別に忘れているつもりはないが常に意識しているかと言わればそうではないしさすがに幼少時の記憶など少しずつぼやけているのを感じる。十年も経てば心の整理だつてついているし、俺としてはさして気にしないというのが本音なのだが、まあ他からすればそりゃ気も使うというものなのだろう。

俺が促したわけでもないのに自主的に土下座を決めてみせたそいつは、いつになく本気で落ち込んでいるようだつた。

「本当にごめん」

「……いや、俺は別に」

別に怒つてもいないのに土下座をされても。

助けを求めるように悪友たちに目をやれば、諸伏はごめんとばかりに手を合わせ、あの三人は当然だという顔で萩原を見下ろしている。

今日はいつもの飲み会ということでうちに集まっていたのだが、俺が皿の用意をしているうちに諸伏が何やら口を滑らせたことが事の発端らしい。

「いや、ごめん、何かもうすっかり皆知ってる気になつてオレが余計なことを」

「それは別にいいけど。正直俺も誰にどこまで喋つたか曖昧だし……けど、そつか、言つてなかつたか」

俺の父が警察関係者であり、すでに殉職しているということを。

記憶を辿るが、確かに警察関係者であることしか言つていなかつたかもしれない。諸伏には組織壊滅作戦で父の伝手を使うという話をしたときに言つたのだつたか。俺としては特に隠していたつもりはなく、言う必要がなかつただけのこと。

だいたい、父さんのことと萩原の過去の悪癖についてはまつたくの別問題だ。

「……防護服のことでお前に説教したのは、別に父親のことがあつた

からじやない

「わかつてる。……けど、たぶん、……思い出させただろ」

頭を下げたままの萩原の表情は見えない。しかし、きっとひどくらしくない顔をしているのだろう。いつも軽く見せてはいるが、萩原は本来誰よりも他者を慮る性質だ。しかも滅多にその手のことで失敗をしないだけに、今回のこととは堪えたらしい。

当事者である俺が気にしてないんだからそれがすべてだと思うのだが、さて、どうやつてこの硬くて重い頭を上げさせたものか。

少し考え、そうだな、とその後頭部に改めて目をやる。

「確かに思い出しましたよ。……警察官の職務には多かれ少なかれ命の危険が伴う。うちのクソ親父はそれをわかつてたからいつも引き出しに遺書入れてたし、きっと自分の身を守るためにあらゆる対策をしてたと思う。それでも殉職した」

「……ああ」

「だからお前の悪癖を知ったときはふざけんなって思つた。死んで欲しくなかつたから防護服着ろつて言つた。で、お前はちゃんとわかつてくれただろ」

萩原は改めてくれた。松田がうるさかつたからとか、俺の説教が恐かつたからとか、別に理由は何でもいい。萩原は防護服を装着して爆弾の解体に当たるようになり、結果的にこうして今も無事に息をしている。

「死ぬ前に改善してくれた。お前は生きてる。それでいい」

べし、と軽くはたくようにその肩に手を置いた。びくりと肩が揺れ、のろのろと頭が上がる。案の定、萩原は似合いもしない情けない顔をしていた。何つて顔してんだ、と小さく笑つた。

俺が説教をするのは改めてほしいからだ。考えてほしいからだ。だから、それでいい。

「それでいいよ、萩原」

謝らせたかつたわけでも、そんな顔をさせたかつたわけでもないのだ。

俺の言いたいことを理解してくれたのか、萩原はちよつとばつの悪

そうな顔でぎこちなく笑う。指先で頬を搔く仕草にはいまだ戸惑いが見えたが、いつもの調子を取り戻そうと努力しているのはわかつた。

あーあ、と黙つて聞いていた松田が声を上げる。

「あいつかわらず変なところで前は甘エな柊木」

「済んだことでとやかく言うほど暇じやないよ。ほら、お好み焼きの用意するから手伝ってくれ」

「ああ、ホットプレート出すぞ。柊木」

「うん?」

「一応お前の意志は理解したし納得もしたが、何か気に障ることがあつたらちやんと報告するように。飲み込んで終わらせるなよ」「降谷の目には俺がそんなに遠慮してるように見えんの? 普通に言うよ」

「勝手に言つて本当にごめんな、柊木」

「だから気にしなくていいって」

はい支度の続き、と身体を起こしたところでぽんと伊達に背を叩かれた。まつたく、どいつもこいつも気にしすぎだと思う。のろのろと立ち上がった萩原も、まだ何となく眉尻が下がつていた。

「……長い付き合いで、やつぱり知らないことはあるもんだね。旭ちゃん、もしかしてまだ俺らが知らない重い過去とかある?」

「ん? そうだな、母さんは俺を産んだときに亡くなつて、父さんが殉職したのも俺の二十歳の誕生日つてこととか?」

え、と部屋の空気が凍つたような気がしたが、まあここまで来たら気にすることもないだろう。あえて明るい声で、構わず続ける。

「だから俺にとつては誕生日は両親の命日で墓参り。もう恒例行事なんだよな」

「待つて待つて待つて、俺が本当に悪かつたからそんな軽く言わないで!!」

ぐらぐらと萩原に揺さぶられながら、俺はそれでもただ笑う。

両親の死は俺にとつてすでに受け入れたことで、今や「日常」になつ

たこと。それをわざわざ「傷」として嘆くつもりはなかつた。何故つて俺は、それでもわりと結構幸せだと笑つて言える自信があるからだ。

俺が大事にすべきは、今、このとき。その信条は、これからも変えるつもりはなかつた。

答えなき問い

その日、俺は珍しくポアロのボックス席に座つていた。

漂う珈琲の香りはいつもと同じく心地よいのに、どことなく緊張した空気が漂つてゐる。原因はわかつてゐる。俺の前に座つてゐる、真剣な顔をした彼女だ。その隣に座る新一君もどことなく居づらそうな顔をしている。

その彼女、毛利蘭さんは、意を決したように口を開いた。
「お忙しいのにお呼びだしてしまつて申し訳ありません」
「……それは別に構わないけど」

ただ何故俺を、と思つただけで。

俺と彼女の接点は以前にこのポアロで顔を合わせ、そして俺のリハビリにもなるからと新一君が紹介してくれたという程度のものだ。テーブルを挟んで会話するくらいなら問題こそないものの、それほど気軽に話ができる関係とは言いがたい。なのに今日は俺に用があるからと、新一君を通して呼び出しを受けていた。

カップを傾ける俺を前に、彼女は緊張した面持ちをしている。

「今日はその、お伺いしたいことがあります……」

「うん」

「柊木さんは、私の父のことはご存じでしょうか」

それはもちろん、と軽く頷いた。今でこそメディアに出ることはなくなつたものの、少し前に一世を風靡した名探偵「眠りの小五郎」。警察関係者でなくとも知らなかつたらニュースを見ろという程度の有名人だ。俺は直接顔を合わせたことはないが、そのひとが今いる店の上に事務所を構えていることも知つてゐるし、彼の刑事時代の経歴も調べたことがある。

「探偵になる前は警察官だつたことも？」

「知つてるよ。……ああ、もしかして毛利さんが聞きたいのは警察官を辞めるきっかけになつた事件のことかな」

はい、と頷いたあと、彼女ははつと気づいて慌てたように首を振る。「あの、父が警察を辞めることになつたことについてどうこうという

わけではないんです！　それに納得がいっていないとか、そういうことではなくて！」

「うん」

「その、……何でいつたらいののか、わかりませんが……いえ、本當は納得していないのかかもしれません。父が母を助けるためにやつたことですから、全部が全部間違っているとは、どうしても思えなくて。でも、正しいことではないというのもわかつているんです」

ただ、とうつむきかけていた彼女は前を向いた。その瞳に浮かんでいるのは確かに決意。ああ、これと同じ目を俺はどこかで見たことがある気がする。さて、誰だつたか。

「私、大学で法律を学びたいと思つています。具体的な職業はまだ決めていませんが、その関係で働きたいとも。だから、……だから、このもやもやに区切りをつけたくて」

ルールと感情の間で揺れ動いてしまつている自分をどうにかしたいのだと、彼女は言つた。自分なりの答えを見つけ、けじめをつけて今後の学びにつなげたいのだと。

「そのために、現役の監察官でいらっしゃる柊木さんのお話も伺つてみたいと思つたんです。当時、父がその責任をとつて依願退職したという事実に対して、柊木さんはどのようにお考えでしようか」

なるほど、と俺は頷いた。もうひとくち、カップに口をつける。

十年以上前に起きたその事件については知つている。毛利探偵の経歴を調べたときについでに調べたし、立場的に過去の査問会についてはおおよその内容は頭に入れてある。

当時、取調べ中の被疑者が署内で彼の妻を人質にとり、毛利探偵は人質に構わず拳銃を発砲。その弾丸は人質の脚をかすめた。この発砲が妻を救い、被疑者の逃亡を許さないためだということはわかつているし、毛利探偵が優れた射撃の腕をもつていたこともまた事実。しかし、俺が監察官としてこの案件を見たとき思うのは、そりやまあ。

「……監察官としての俺の意見は、甘くないけど」

「お気遣いなく。覚悟しています」

「なら言うよ。俺なら依願退職も許さない。懲戒免職を求める」

あつさりと言うと、彼女の隣で新一君が目元を覆った。彼女が覚悟して俺の見解を聞きに来たというのなら、俺はそれに応えるのが筋というものだろう。

毛利さんの瞳は、揺らがなかつた。

「毛利探偵が発砲した理由も聞いてる。犯人の逃走において、まともに歩けない人質なんて邪魔なだけだ。あえて人質の足を狙うことでの解放を狙つたんだろう」

「……それでも、懲戒免職」

「動機を考慮しないとは言わない。だがそれ以上に事実を事実として見なくてはいけない」

それだけ、毛利探偵のしたことは重い。彼は査問会で、事実の証言はしてもそれ以上を言い募ることはしなかつたと聞いている。おそらくは彼自身もその重みを理解しているからだろう。

「毛利探偵は人質にされた妻を助けるためにあえて軽傷を負わせ、犯人を確保した」

「はい」

「言い方を変えよう。当時、取り調べに当たつていた刑事は人質をとつて逃走をはかつた被疑者に対し、近くにいた上官の指示を仰ぐことなく拳銃を発砲。発砲は二度。その一発目は意図的に人質を狙つていた」

そう言うと、目の前のふたりは顔色を変える。

先入観を排除し、事実のみを並べ立てるだけで印象はずいぶん変わる。それも、悪い方に。残念なことに、重要視されるのはその「事実」なのだ。

「……まあ、百歩譲つて上官に指示を仰がず発砲したことまではいいかな。急を要する事態であり、どちらにしろ許可された可能性が高い。指示を仰いでおけばその発砲は上官の責任になるわけだから、賢い選択ではなかつたと思うけどね」

「……そゆとこ汚い大人ですね、柊木さん」

「大人つてのは汚いもんだよ、処世術つてやつだ」

さらりと言つてみせると、まだまだおとなの世界を知らない彼はう

へえと苦い顔をする。もし彼が今後何らかの組織に属するようになれば、いやでも実感することだろう。上司や部下、その間を行き来する責任という死ぬほどめんどくさいもの、そしてその利用の仕方を。もつとも、私立探偵として開業するのであればさほど必要のない技能かもしれないけれど。

おつと、話がそれた。だいぶ温くなってしまった珈琲に口をつけた。

「刑事が一般市民に怪我をさせたという事実は重い」

「……それが、母を救うためだつたとしても？」

「むしろ何で救うためだつたら傷つけてもいいんだ？ 無傷で人質を解放させるよう目指すのが警察の鉄則だよ。俺からすれば、人質との親密な関係性に甘えて無茶を選んだようにしか見えないけど」

毛利さんは真剣な顔のまま、口を開かない。強がりなのか、覚悟のうえだったのか、俺にはわからない。俺はただ、聞かれたことに答えるだけだ。

とはいって、これ以上は酷だろうか。

「……もうやめとく？」

「、いえ！ 最後まで聞かせてください」

いい覚悟だ、と少し笑った。泣かせてしまうかなと少し心配していただけれど、彼女の瞳にはその気配も見えない。

「それから、法という観点でみるともうひとつ、考えなきやいけないことがある」

「それは？」

「前提条件はどうあれ、毛利探偵は人質を傷つけることで解放させた。それを不問にしてしまうと、それは『前例』になるんだ」

「前例……」

「……それ以後似たようなことが起こつた場合も、許されてしまうってことですか」

難しい顔で言つた新一君の言葉に、頷く。

ルールというのは、扱いが難しい。だから、どのように意義を定め、どのように解釈するか、たいていは「前例」から判断するのだ。プロ

の法律家だつて、公判に挑む際はまず判例から調べ上げる。

「人質を傷つけることで解放させた警察官を、警察が許すことはできない。今後一般市民が人質にとられるような事件が起きた際に同じ対処をさせないために。何で毛利探偵のときは良くて自分のときはだめなんだとか言うような馬鹿を生まないためにもね」

そういう馬鹿に限つて、前提条件が違うんだと説明しても納得しないんだこれが。これまで対峙してきた馬鹿たちが思考の端をよぎる。監察官として面倒な案件にも対処してきたなかで、そういう馬鹿たちに有無を言わせないように職務を果たすことが重要なのはよくよく理解させられた。

まあ、逆の立場になれば俺も間違いなくその詰めの甘さをつくの

で、あまり馬鹿だ馬鹿だともいえないのだが。

「そんなわけで、俺なら一番重い罰を言い渡す」

「……はい」

「……けど、実際に毛利探偵に下されたのは懲戒免職じやなくて依頼退職だつた」

え、とうつむきかけていた毛利さんが再び顔を上げる。

理屈だけを言えば毛利探偵がしたことにはそれだけの重みがある。けれど、理屈だけで査問が進むわけではないのもまた、事実なのだ。「懲戒免職はあくまでも俺個人の意見で、情状酌量を限りなく排した意見だよ。実際の査問ではきっとそつちの方もちゃんと議論されたんだろうね。犯人の逃走を許さず早期に再度確保したという功績もあるし」

当時の査問会のメンバーも半数くらいは想像がつくが、さて、毛利探偵をかばつたのは誰だつたのか。予想がつくようなつかないような、なんとなく面白い。

「さつきは厳しい方向にこの案件を言い換えたけど、――愛する妻を人質にとられた刑事は一刻も早く妻を解放するため、最短・最効率の手段を選択。少々無茶な手段ではあつたが、刑事の確かな拳銃の腕と、妻との間にある確固たる信頼関係により断行した。これもまた、事実には違いない」

依願退職という判断は、毛利探偵を許すこともできないが、その決断のすべてを否定することもできないという葛藤の上で結論だつたのだろう。俺がその査問を担当したとしても、結局は同じ結論に達したような気がする。

「理屈と感情、両方の面で起きた事実を解釈し、その間で揺れながら落としどころを見つけていくしかないんじゃないのかって思うよ。君のお父さんが受けた罰は、そういう意味で妥当だつたと思う」

これで答えになつてゐるか、と彼女の顔を見ると、どこかすつきりした表情をしてゐた。そして、ありがとうございます、と深く頭を下げられる。

「自分でも、……もつと考えてみます。もつと勉強して、きつと何度も」

「いい心掛けだと思うよ。この手の問題に正答なんてないからね」

正答がないからこそ、考えることに意義がある。考えることを放棄したときに、ひとの成長は終わつてしまふのだから。

毛利さんの顔を見て、新一君もまた安堵した顔をしていた。俺の容赦のなさを知つてゐるからこそその顔だと思うと、少々苦笑してしまう。

と、そのとき、ポアロのベルが来店を告げた。

「あれ、毛利さんいらっしゃいます」

「おう梓ちゃん、珈琲頼む……つて何だ蘭、お前も来てたのか。探偵坊主に、……そちらは？」

「お父さん！」

何というタイミングか。焦った顔の毛利さんにもつと焦つた顔の新一君。二人が何か言おうとする前に、俺はソファから立ち上がつた。懷から黒い手帳を取り出す。

「毛利小五郎さんですね、ご高名はかねがね伺つております。警視庁警務部人事第一課所属の監察官、柊木と申します」

「けい、……監察官?」

警察手帳に印刷された警視の文字を見て敬礼しかけたその手が、止まつた。しかし、一瞬の硬直のあと、改めて綺麗な敬礼がこちらに向

けられる。

「警視の方とは知らず、大変失礼いたしました」

「お気になさらず。敬礼も結構ですよ、毛利さんほどの方に畏まられては私も恐縮してしまいます」

「恐れ入ります。……娘と、その友人が、何か？」

硬い表情で敬礼を解いた彼に、にこりと仕事用の笑みを向ける。

「新一君とは個人的に知り合いで、娘さんとも彼を通して知り合いました。大学進学を前に進路を悩んでいらっしゃることで、少し話を聞かせてほしいと頼まれたんです。それで大学のことや仕事の話を、簡単にですがさせて頂いておりました。……しかし、未成年のお嬢さんとお話しする以上、まず保護者の方にご挨拶させて頂くべきでしたね。配慮がたりず申し訳ありません」

誓つて申し上げますが、娘さんとふたりで会つたことは一度たりともありません、と付け加えると、新一君と毛利さんもこくこくと頷いた。

毛利探偵は特に疑う様子もなく、そうでしたか、と頷いた。

「お忙しいところを娘のためにお時間を割いて頂いて申し訳ない」

「どんでもないですよ。私のような若輩の言葉でも、何かの参考になれば幸いです」

「その若さで監察官を務められる方が何を。……柊木監察官」

「何でしょう」

唐突で申し訳ありませんが、と一呼吸置いて、目の前の彼は真剣な表情のまま続けた。

「大河内春樹さんという方をご存知でしょうか」

かつて監察官を務めていらした方なのですが、と言葉を添えられる。俺は、表情を変えなかつた。彼の口からその名前が出るとは思つていなかつたが、その因縁は知つてる。

「ええ、今は主席監察官を務めておられます。私の直属の上司にありますね」

当時毛利探偵の查問を担当したのは、大河内さんだつた。情け容赦のかけらもなく事実という事実をすべてあぶり出し、依頼退職の処分

を言い渡した、当の本人である。

俺の言葉を聞いて毛利探偵は、そうでしたか、と小さく言葉を漏らし、そして続けた。

「⁽³⁾無礼は承知のうえですが、大河内監察官に⁽³⁾伝言をお願いできないでしようが」

ほう、と意外そうな声が漏れそうになるのを、すんでのところで堪えた。構いませんよ、と言葉を返すと、毛利探偵はひとつ呼吸をおき、口を開く。

「……いえ。やはりやめておきます」

「よろしいんですか？」

「はい。申し訳ない、こちらから言つておきながら」「お気になさらず」

残念、などと思つてしまふのは下世話な好奇心だろうか。恨み言だつたのか、はたまた感謝の言葉だつたのか、それともまた別の言葉だつたのか。さすがに突つ込んで聞くのは失礼というものだろう。

「お時間をとらせまして失礼いたしました。私はこれで失礼します。蘭、新一、失礼のないようにな」

それだけ言葉を残して、毛利探偵は俺たちに背を向けた。珈琲はまたにする、と榎本さんに一言断つてポアロを後にする。

妙に緊張していたらしいふたりは、心底安堵したように息をついた。

「何だよ大袈裟だな」

「あんまりおっちゃんと関わりたくないって言つたの榎木さんでしょ」

「んなこと言つてないよ。毛利探偵が気を悪くするかもしれないって言つたんだ」

「父はそういう態度に出ちやう人なので……あの、大河内さんと言うのは？」

「うん、俺の上司。そんで毛利探偵の查問を担当した監察官だよ」

ぴたり、とふたりが動きを止める。

「何を伝えたかつたんだろうな、大河内さんに」

当時の話を、大河内さんに聞いたことがある。記録からわかるレベルのことはあつさりと教えてくれたが、それ以上のことはあまり教えてくれなかつた。妙に話したがらない大河内さんの態度が気になつて、それとなく当時を知つてゐるひとから話を聞いたところ、わかつたことがある。

人質の足を撃つたことについて、毛利探偵は言い訳をしようとはしなかつた。潔くないとでも思つたのだろうか、何故撃つたのか、わざと当てたのか、そのあたりの説明をあまりしようとはしなかつたらしい。そのまま当人が口を閉ざしたままであれば、おそらく本当に毛利探偵は懲戒処分を受けていただろう。その重い口を割らせ眞実を吐かせたひとつこそ、当時の担当監察官、つまり大河内さんだつたらしい。どんな取り調べを行つたのかは知らないが、それなりの攻防があつたことだろう。是非とも見て勉強したかつたものだ。

「まあ、見た感じ恨み言ではなさそうだ」

あらゆる情報を集め、適正な処罰を与える。きっと大河内さんも當時、それだけのために尽力をしたのだろう。私情を挟まず、理屈と感情の双方からその罪の重さを見極め、依願退職を申し渡したのだ。

苦笑した新一くんが、言う。

「……おつちゃんは逆恨みするタイプじゃないですよ」

「そうみたいだな。変に勘ぐつて申し訳なかつた、反省するよ」

「……柊木さん」

「うん？」

改めて、毛利さんの方に顔を向けた。

父親の態度を見て、また何か思うことがあつたのだろうか。先ほどまでとはまだどこか違う笑顔を浮かべている。その瞳には、いくらかの誇らしげな色が見えた。

「今日はお話を聞かせて頂いてありがとうございました」

「いいえ」

「いつか、……いつか、父とも話をして頂けませんか」

え、とひとつ瞬きをする。

毛利さんはそんな俺にまた笑つて、続けた。

「いつか、機会があれば」

「……そうだね。いつか、機会があれば」

本当にそんな日が来るのだろうか、とは思うが、とりあえず頷いておいた。

査問を受けた元刑事と監察官が個人的に話すなんてとんでもない話だなと思いつつも、もしそんなことが実現するのなら、と脳裏にあの仏頂面が浮かぶ。それはきっと、担当の監察官が徹底的にその案件に向き合った結果なのだろう。

俺は良い上司に恵まれたものだ、と改めて思った。

担当していた事件もようやく一区切りがつき、やれやれとデスクに戻る。口うるさい同僚に見つかると面倒だと思つて欠伸は我慢していたが、どうやらすでに大半の同僚は帰宅したらしい。珍しく今日は落ち着いてたな、と俺は堂々と大きく欠伸をした。

「お、戻ったか松田。お疲れさん」

「伊達か」

そんな俺の肩を叩いたのは、同期で悪友の伊達だった。こいつも今抱えている事件はなかつたはずだが、後ろで高木が何やら資料を片手に難しい顔をしている。何か指導でもしていたのだろうか。定時で帰れる職ではないとはいえ、もうとっぷりと夜も更けている。

「事件がなかつたときくらいさつさと帰してやれよ」

「あ、いえ伊達さんは自分のために残つてくださつたんです。ちょっと勉強を……」

「勉強？」

そうそうそれでお前に聞きたかったんだ、と伊達が頷いた。

「今年、高木が巡査部長の試験受けるんだよ。それでほら、俺たちの代で裏取引されてたあの資料、お前持つてないか？」

「あー……」

巡査部長の昇任試験では実務のほか、憲法や行政法といった法学の知識も問われる。まんべんなく勉強しろと言わればそれまでだが、何分激務の警察官、出来る限り勉強は効率的に行いたい。そういうときに重宝されるのが、簡単に言うと頭がいいやつが作った勉強用の資料だ。勉強する内容なんて毎年そう変わりはないので、出来のいい資料は何年も受け継がれたりすることもある。

まあ俺たちの場合、無駄にそういうのが得意な奴らが警察学校時代に試験対策用に作ってくれたものがあった。言わずもがな、首席と次席、そして三席までが手と口を出して作り上げた完璧なレジュメで、担当教官も「これを見れば昇任試験まで完璧」と言わしめた出来である。実際、同期の間でうちうちに取引され共有されたそのおかげ

で、うちの代の試験突破率は目覚ましいものがあるらしい。

もちろん俺も大いに活用した。しかし、試験後はどこにやつたんだつたか。

「捨てた覚えはねえからうちのどつかにはあると思うが……お前は持つてねえの？」

「元データはあるが、ほら、手書きで補足書き込んだりしてただろ。それもあつた方がわかりやすいかと思つてな」

「なるほどな。多分探せば出てくるからコピーさせてやるよ」

「ありがとうございます！」

真面目に勉強しろよ、と軽口を叩くと、もちろんですと真面目な顔を返された。高木の性格上クソ真面目に机に向かうだろうし、あの資料を丸暗記すれば法学で点を落とすことはまずない。この分だと近く高木巡査部長が誕生するなど小さく笑つた。

「伊達さんも作成に関わった資料なんですね？」

「俺はちょっと口出したくらいだけだ。まとめたのはほとんど首席と次席だよ。悔しいが法学であいつらに勝つたことなくてなあ」

「常にほとんど満点叩き出すあいつらがおかしいんだよ」

「満点!」

そんな簡単なテストじゃないですよね、と言われて俺と伊達は同時に頷く。しかし本当に毎回そんな点数叩き出していたのだからあいつらの頭はおかしい。

はははと伊達も乾いた声で笑う。

「懐かしいな、座学の苦手なやつらが揃つてそいつらに頭下げて頼み込んだんだよ。片方は苦笑しながら、片方は渋々の様子だったが結局一晩で形にして、どうせなら完璧なものを作るから意見くれって俺んとこに持つてきたんだよな」

苦笑したのはまだ人見知りと猫かぶりの取り切れていいなかつた柊木で、渋々だったのは樂をしようという魂胆があるようで氣に食わなかつた降谷だろう。自分たちの勉強にもなるからいいじゃないか、それとも自信がないのかと柊木が降谷を煽つていたのを覚えている。

それだけ聞いたまるで柊木がいい奴のようだが、ちよくちよくこ

の資料を盾に周囲を脅しつけていたので騙されてはいけない。何だつたかでハギの馬鹿が桜木の怒りに触れたとき、あの野郎、ハギ用に書き込みを追加したその資料をシュレッダーにかけようとしたやがつた。

『世へかく作った資料だけと……これでお別れだ哀しくとも』

は!!
『

『ほかに話うことは?』

『一度とやりません申し訳ございませんでしたア!!!』

ならばよし、といい笑顔をした柊木は本当に悪魔だつた。いや確か
あればハギが全面的に悪かつたのだが、でもやっぱり悪魔の笑みだつ
たと思う。

そういえば高木にとつて柊木はすでに「憧れの人」であるらしいが、いつかその夢をぶつ壊してやりたいものだ。握手まで求めた相手が鬼で悪魔で魔王で暴君だと知ったときにはどんな反応をするのだろう。正直めちゃくちや面白そうなので、柊木も早く職場での猫かぶりをやめればいいと思う。閑話休題。とりあえずこれを作成したひとりが柊木であることとは言わない方がいいな。勉強に使うどころか神棚に飾りかねない。

思い出から高木に目を戻せば、すでに気合い十分の様子で目に炎を燃やしていた。

「そんなすごい資料を頂けるなら何としても合格しないとですね……！」

「んな重く考へるこたねエよ。お前が落ちても伊達が指導責任を問わ
れるくらいだ」

「ヤ、ヤアにプレッシャーかけないでくださいよー。」

「こらこら松田。まあお前なら大丈夫だろ。質問あつたら聞きに来いよ」

そんでお前の後輩が試験受けることになつた資料渡してやれと伊達が付け加えると、高木はもぢろんですと嬉しそうに笑つた。

ポケモンクロス①

「はじめましてイーブイ、ぼくはあさひ！ 今日からよろしくね！」

おひさまみたいなこだ。

そうおもつたのを、よくおぼえている。

あさひのおとうさんにだっこされて、ぼくははじめてあさひにあつた。あさひはまだちいかくて、ちいさかつたぼくをすこしおもそくにうけとめてくれた。

いつもきらきらわらう、とてもやさしいあさひのことはすぐにだいすきになつた。

なでてくれるてはあたかくて、まなざしはやわらかくて、ぼくのことによぶこえはここちよかつた。

「あさひはね、朝のおひさまの光のことだよ。ほら、あれがぼくのなまえ」

こつそりよあけのじかんにおきて、おひさまがかおをだしたときにはあさひはおしえてくれた。ぼくはあさひにぴつたりのなまえだとおもつた。あさひは、あたなかくて、やわらかくて、ここちいい。

あさは、あさひのじかんだ。

そんなあさひが、なんにちかかえつてこなかつたひがある。

おとうさんはいつしようけんめいさがして、ぼくもいつしようけんめいさがして、それでもみつかなくて、こわかつた。すぐくすぐくこわかつた。

かえつててくれたときにはほんとうにあんしんしたんだ。でも、あさひはすごくおびえたようすで、ぼくをぎゅつとして、ひとばんじゅうないた。おとうさんもずつとぼく」とあさひをぎゅつとしていたけど、それでもあさひはずつとふるえてた。こわかつたんだね、つらかつたんだね、いつしょにいてあげられなくてごめんね。

そのひからずつと、あさひはよるにうなされる。ふるえて、ひどいあせをかいて、いやだ、こつちをみるなつてねむりながらなくんだ。そのたびにおこしたり、そのたびによりそつたり、ぼくにはそんなことしかできないけれど。

ぼくはあさひをまもれるようにつよくなろうとおもつた。

あさひはバトルがあまりすきじゃないみたいだつた。

「イーブイがいたいのはいやだなあ」

ぼくがバトルをねだと、そういうてちよつとこまつたようにわらうんだ。だけど、ぼくはつよくならなくちやいけないから、バトルのれんしゅうがしたい。いたいのなんてへいきだよ、だつてあさひをまもりたいんだ。

「……うん、わかつた。じゃあぼくもバトルの勉強をするよ」

ぼくのおねがいごとをきいてくれたあさひは、それからいつしうけんめいべんきようしてた。ほんをよんなり、ほかのひとのバトルをみたり、おとうさんはなしをきいたり。あさひはとつてもあたまがいいから、どんどんくれるしじがよくなつていつたとおもう。だつてぼく、ぜんぜんまけないしぜんぜんいたくない。

あさひはほんとうにすごいんだ。

どんどんあさひのしんちようがのびて、おとなにちかづいていつて。

それでもやつぱりあさひはあさひのまま、ぼくのことをだいじにしてくれるのがうれしかつた。

おおきくなつてもまだおんなのひとのことはこわそうだけど、でもなんとかこくふくしようどがんばつてる。すこしずつだけどだいじょうぶになつてる。こわくともにげたくとも、それでもまえにすすもうとするあさひは、つよいこだよ。ずっといつしょにいるぼくがいうんだから、まちがいない。

けいさつかんになるんだつて、いつしそうけんめいがんばるあさひは、かつこいい。

だいぶあさひがうなされるのもへつたころ、こんどはおとうさんがいなくなつた。

あさひのときとちがつたのは、もうかえつてこないつていうこと。まつくりなふくをきたあさひは、たくさんひとにあたまをさげて、たくさんのひとにあたまをさげられていた。

とつてもやさしい、とつてもかつこいいおとうさんだつた。もうあ

えないつてきいて、なみだがでた。あさひもつらかつたはずなのに、あさひはなかなくて、やさしくぼくのなみだをぬぐってくれた。

「……イーブイ、俺は」

おとうさんがねむつているおはかのまえで、あさひはかみしめるようについた。

「俺は、警察官になるよ。さい（）まで父さんのことは説得できなかつたけど」

もつとがんばらないとなつてなきそうにわらつたあさひのかおをみて、ぼくはじぶんのなみだをふりはらつて、ひとこえないと。あさひがもつとがんばるなら、ぼくももつとがんばる。いつしょに、がんばる。

それから、かんがえた。ぼくはあさひのためにになにをしてあげられるだろう。

つよくなれると、おもう。バトルでまけることはぜんぜんない。だけど、もつと、あさひのちからになりたい。

なかなかおもいつかなくてこまつていたけれど、またひさしぶりにうなされているあさひにきづいて、おもいついた。

あさひがないてしまう、よる。あさひのじかんがくるまえの、このくらやみ。

ぼくが、まもつてあげる。

つきのひかりにつつまれる。ぞわりと、からだのなかのすべてがしんどうして、かわっていく。

つよくなりたい。まもつてあげたい。やさしくてつよいあさひの、ちからになりたい。

ちやいろだつたけなみがくろくなる。てあしがのびて、からだがおおきくなる。つきのひかりがここちいい。よやみのなかでもあさひのかおがはつきりとみえるようになつた。

あさひのまくらもとにのると、いつもよりおおきなおとでベッドがきしんだ。

いまのぼくには、ぼくのきもちをきみにつたえるちからがある。ぼくのきもちと、きみのきもちをいつしょにするちからがある。

どうか、まけないで。だいじょうぶ、あさひはつよいこだ。じぶんのつよさをおもいだせれば、あくまんてこわくないよ。ほら、まけないで。

あさひのひたいにはなきをよせて、ぼくのきもちをのせる。

「ふ、……ぶい……？」

あさひのくちからそうこえがもれて、あさひのふるえがとまつた。「きゆうがおだやかになつて、しづかにふかいねむりにおちていく。ああ、うまくいった。おもいだしてくれたんだね、あさひがとてもつよいこだつてこと。

でもぼく、もうイーブイじゃないよ。まちがえないでね。

これではよのはぼくのじかんになつたから、これからよのはぼくがまもつてあげる。

あさひのじかんがやつてくるまで、ぼくがなんだつて「あさひはつよいんだよ」つておしえてあげる。

ぼくのすがたをみておどろきみのかおがみたいな。

はやく、あさひのじかんがくればいい。

そうおもいながら、ぼくもあさひのまくらもとでまるくなつた。

おもつたとおり、めをきましたあさひはとつてもおどろいていた。

そしてすぐくしゃしがつていた。

「進化の瞬間を見逃すなんて!! なんで起こしてくれなかつたんだよ
イーブイ、ちがつたブラッキー!!」

おまえつてやつは、といいながらあたらしいぼくのけなみをわっしやわつしやとなれるあさひ。

あくむをみたつぎのひにはかならずあつたくまが、きょうはない。ぼくはけなみをぐしゃぐしゃにされながら、ただわらつた。あとでちゃんとブラッシングしてね。

それからあさひは、けいさつかんになつた。
にんげんのともだちもてきて、たのしそうで、まいにちがんばつておじごとしてる。

ぼくもずっと、そのそばにいた。

たまにバトルをしたりもするけれど、あいかわらずあさひのさいはいにくるいはない。

「お前のブラッキー強すぎじゃねえ……？」

「かくとうタイプ相手でも余裕つてどういうこと……？」

「こうかばつぐんのこうげきも、あたらなければ問題ない。そういう

トレーニングしてきたもんな？ ブラッキー」

じまんげにいうあさひに、ぼくもはなたかだかでひとつ見えなく。あさひのじまんがぼくで、ぼくのじまんがあさひのが、なによりうれしい。

「さてじゃあもう一戦、いけるか？ ブラッキー」

おひさまみたいにわらうじまんのともだちのことばに、ぼくはたからかにへんじをした。

あさと、よるのおはなし。
あさひのじかんと、ぼくのじかん。

ポケモンクロス②

ぱち、ぱちと焚火がゆつくり燃える音は、ひどく心を落ち着かせた。木陰で柔らかな太陽を受けながら、手元の文字を読み進める。隣では相棒が時折大きな口を開けて欠伸をする。そのたびに腕を伸ばして首元をくすぐつてやれば、また気持ちよさそうに目を閉じた。この静けさのなかの穏やかな時間もまた、キャンプの醍醐味というものだろう。

ぱらり、とまた一枚ページをめくった時、ブラツキーがざつと立ち上がる。

「どうした？」

声をかけると、その鼻先は上空を示した。見上げると、そこには晴天に美しく輝く緑の竜。その背には、いつの間にか長い付き合いになっている年下の友人がいる。

「おついたいた！」

騒がしくなりそうな気配に、葉を手に取った。持っていた本に挟み込み、鞄の中にしまう。相棒はやれやれと言わんばかりに黒い尻尾を振つた。

「よーアサヒさん久しぶり！ ブラツキーも元気そうだな」
「久しぶりってほどでもないだろ」

キバナ、と彼の名前を呼ぶと、褐色肌の青年は嬉しそうにまなじりを下げた。青年というよりは少年というほうがよく似合うその笑い方に、昔から変わらないな、と年寄りじみたことを思う。

俺は彼が少年と呼べるころ、ジムリーダーでもなくチャレンジャーとして旅を続けていたころから彼を知っている。仕事上の成り行きといえる出会いだったが、キバナは妙に俺たちを慕い、こうしてたまに会いに来てくれた。

「フライゴンも元気そうで何より。で、わざわざ俺を探しに来たのか
？ 用があるなら連絡くれれば良かつたのに」

「探しに来たっていうか、最近この辺でよく超絶イケメンがキャンプしてるってSNSに流れてたからさ、アサヒさんかなと思つて確かめ

に来た

「まじかよ」

ここはワイルドエリアの中でもレベルの高いポケモンの多い、あまりひとが来ないエリアだ。こんな場所にいてなお、噂になつてしまつたは。こういうとき、情報社会というものは恨めしい。うんざりしたようになつて息をつくと、キバナは楽しそうに笑つた。

「そうやつてこそそしてから噂になるんだつて。アサヒさんもS NSデビューしたら？」

「写真嫌いなんだよ。ロトム、カメラ向けるな」

「ひどいロトム」

くるくるとキバナのまわりとまわるスマホロトムまで楽し氣だ。まつたく、こつちは死活問題だというのに。慰めるように、ブラッキーの鼻先が俺の手のひらにすり寄る。そのまま緩くなつてやると、もつと撫でろというように耳を倒す。そして再び鼻先を上げて、俺の手のひらをちよん、とつつく。ああ、わかつてるよブラッキー、俺だつて気づいてる。

「……ところでキバナ、お前ここに来るまでに不審な集団を見かけなかつたか？」

「不審な集団？」

そう繰り返して、ようやくキバナははつとした顔で俺を見る。

「……あー……オレさまひよつとして、仕事の邪魔してる感じ……？」

につこりと笑顔を作つてやると、実は「仕事」というものに対しても非常に真面目な彼はぱんつと景気のいい音を立てて両手を合わせた。「ごめん！ やっぱ帰るわ、次はちゃんと連絡してから来るから！」

「うん、次はそうしてくれ。けど今回は大丈夫、むしろお前が派手に来てくれたおかげで早く片付きそうだ」

遙か遠くから飛んできた高レベルのフライゴン、そしてその背に乗るガラルでも有数のポケモントレーナー。徹底して身を隠してきたやつらも、その姿を見てさすがに驚いたのだろう。キバナに気付かれたトルにでもなれば敵うわけはないし、そうでなくともキバナという存在はいるだけで目立つ。そんな彼の来襲を見て、後ろ暗い事情のあ

る奴らはどうするか？

決まつてはいる。安全な巣を捨てて、逃亡を図るのだ。

いつの間にか、辺りが霧に包まれる。ワイルドエリアで霧が出ること自体は珍しくもないが、これは自然に発生した霧ではない。異変に気付いたキバナが周囲を見渡す。フライゴンも臨戦態勢に入つた。

「キバナ、フライゴン、大丈夫」

「アサヒさん、」

「俺たちだけで十分だ。ブラッキー、位置はわかるか？」

「当然」と言わんばかりにブラッキーはきゅう、と鳴いた。その赤い瞳は、揺らぐことなくある一点を見つめている。好戦的な口もとから、ちらりと犬歯が覗いた。

ブラッキーに見えてはいるなら、逃すことはない。結果を期待していなかつた仕事半分オフ半分の張り込みだったが、思わず収穫だった。知らず、自分の口角が上がっていることに気付く。

相棒の名前をもう一度呼んで、続けた。

「黒い眼差し」

しろいきりが徐々に晴れていく。

*

「……で、あいつら結局何だつたわけ？」

「詳細は言えないが、まあ密猟団だ。行動パターンを分析した限り、この辺にアジトがあると踏んだんだが正確な位置まで掴めなくてな。キャンプついでに張つてみたんだよ」

連行されていく黒服の集団を見送る。逮捕と同時に呼んだ仲間に、後の処理を任せていた。得ずして仕事をしてしまつたわけだが休みは休みなので、面倒ことは任せてもこう。

「まさか洞窟掘つて隠れてるとは思わなかつたな。しかも移動するときには抜かりなく『しろいきり』をつかつて徹底的に姿を隠していたらしい。道理でなかなか見つからないわけだ」

「……ひよつとしてむしろオレさまお手柄？」

「調子にのんな。普段のバトルとは勝手が違うんだ、首突つ込んでまつたことを反省しろ」

「……へーい」

トップジムリーダーを務めるキバナは強い。強いが、正々堂々ルールの中で行われる公式バトルとこういうものは話が違う。迂闊に首を突つ込めば、彼自身にだつて危険が及ぶかもしれないのだ。犯罪なんでものには、関わらないに越したことはない。

「アサヒさん、お疲れ様です！」

「ああ、お疲れ様」

ガラルの警察組織の中でも特殊な部署、この広大なワイルドエリアを取り仕切るW.A警備隊。その証である青い勲章から、俺たちは『ブルーガラル』と呼ばれる。まだ真新しい青いリボンを胸に飾つた彼は、畏まつた態度で俺に敬礼を向けた。

「小隊長より伝言を承つております！ 仔細の報告は次回出勤時に書面にて提出、それから、……その……」

「はは、どうせ嫌味でも言つてたんだろ。言いにくになら明日にでも本人から聞いとくけど」

「……『休めと言つても休まない馬鹿につける薬があればいいのにな』とのことです……」

「ん、伝言確かに受け取つた。言いにくいこと言わせて悪かつたな」

いえ、と恐縮した態度を見せる肩をひとつ叩くと、彼はそのままそくさと仕事に戻つていった。全く、あいつも少しは伝達する部下のことを考えてやればいいのに。

「……小隊長つてレイさんだよな？」

「ああ。我が身棚に上げてよく言うよなあいつ」

「いや絶対どつちもどつちだつて」

「少なくとも俺はあいつより休み多いぞ」

ただ、休みの日にいろいろ遭遇することが多いだけで。

それが働きすぎだと言つてるんだ、と大きくため息をつく『小隊長』殿の顔が脳裏に浮かんだが、知らぬふりをしてかき消した。休みの日まで制服持ち歩いて出動に備えてるお前に言われたくねえんだよ。

「……そういうや初めてアサヒさんに会つたときも、アサヒさんだけ私服だつたような」

「よく覚えてるな。あのときはお前らのおかげでせつかくのオフにワイルドエリア大搜索に駆り出されたんだよな」

「お前らつてまとめないでもらえます？　あればダンデのせいだろ」

「泣きべそかきながら通報してきたやつがよく言うよ」

そう言つてやると、かつて泣きべそをかいていたガキは表情筋の全部を使つて遺憾の意を表明する。二十歳を超えたとは到底思えない表情に、思わず吹き出した。

もう十年ほど前になるだろうか、あれはまだ俺もブルーガラルに配属されて間もなかつたころ、数少ないオフの日にワイルドエリアの地理を覚えようと散歩をしていたときのことだつた。急なスマホの着信に出てみれば、同じくブルーガラルに配属された同期が切羽詰まつた声で言う。

『アサヒちゃん今どー？　……ハシノマ？　オツケー近いね！　緊急招集、まだルーキーのジムチャレンジャーが高レベル地域に迷い込んでやつたらしいんだけど、今日に限つて案件重なつちゃつて捜索の人員が全つ然足りない！　そういうわけで大至急巨人の鏡池集合でヨロシク！』

そして向かつてみれば、そこには涙ながらに友人の捜索を訴えるキバナがいたというわけだ。度を過ぎる方向音痴のライバルが、どうやら今の自分たちの手には負えないようなレベルのポケモンたちが生息するエリアに迷い込んでしまつたらしい、と。助けに行こうとも思つたが、今の自分では一緒に遭難してしまいかねない、と。

随分と取り乱しているくせに、自ら助けに行くという無謀を選ばなかつたキバナ。なるほど、ピンチでも最善を選択できるというのはトレーナーとして有望だ、と同期とともに感心したのを覚えている。

『だから、ダンデを……っ』

『とりあえず君、落ち付こうな』

『、』

猫目の同期が、ライバルの救助を訴え続けるその肩をぽん、と叩いた。まっすぐに、そのターコイズの瞳をじつと覗き込む。視線に射すくめられて怯んだキバナにこりと笑つて、続けた。

『よく焦つて友だちを追いかけなかつたな。いい判断だよ』

『ああ、心配だつたろうによく堪えたもんだ。偉いぞ坊主』

同期の中でも一番体格に恵まれた彼が、オレンジのバンダナごとキバナの頭をぐしやぐしやと撫でる。何すんだ、と抵抗されてもものともせず、豪快に笑つた。

『心配すんな。すぐ見つけてやるよ』

『そうそう、おにーさんたちこれでもすごいから！ 青いリボンは伊達じやないよ～？』

癖の強い髪の同期がニヒルに笑い、その肩に腕をのせた垂れ目の同期が安心させるように茶々を入れる。

そして、いつも自信満々の態度を崩さない、金の髪に褐色の肌をもつ同期がモンスター・ボールを取り、笑つた。

『大丈夫だ。絶対、助ける』

だからここで、待つていてくれと。その言葉を噛みしめたキバナは、涙拭つて、勢いよく頭を下げた。

『よろしくお願ひします……！』

そしてまあ、その後すぐに超絶方向音痴ことダンデは無事救助されたわけなのだが。何せダンデはダンデなものだから、遭難していた自覚すらなかつたうえに相棒が道中で進化したことを嬉々として話し、キバナの逆鱗に触れることになる。片やキレて飛び掛かろうするキバナを押さえ込んで宥め、片や呑氣が過ぎるダンデに説教をするというよくわからない事態になつた。正直なところ捜索よりもこちらの方が大変だったような気がする。

それからもちょくちょくとワイルドエリアで顔を合わせ、個人的な交流をもつようになつた。そんな縁で出会つた少年たちが、今やトツプジムリーダーとガラルのチャンピオン。全く世の中わからないものだ。

未だ拗ねた顔のキバナに、また笑つて今日は時間あるのかと尋ね

る。今日はオフ、と聞いて、それならばと袖をまくった。

「カレー作るけど、キバナ、食つてくれ?」

「食う! アサヒさん俺辛口がいい!」

「はいはい、向こうにマトマがなつてたからいくつか採ってきて。……ん、ブラッキー? ああ、お前相変わらずモーモーチーズ好きな。わかつたよ、トッピングはチーズにしよう」

カレーと言つた瞬間にモーモーチーズを探り出して俺に押し付けてくる相棒に苦笑しながら、鍋を用意する。同時に、スマホロトムがくるくるとまわりながらメッセージを告げた。

「メッセージきたロトよ。『カレー五人分追加』ロト!」

「何あいつら俺の監視でもしてんの? 真面目に仕事しろよつて返事しといて」

「ロト! 即レスロト! 『昼休憩! 腹が減つては戦は出来ぬ!』

「くつそ、きのみ献上しなきや食わせねえつて返信!」

そうロトムに叫んだところでキバナが帰ってきた。が、おかしなことに足音がふたつに増えている。

「アサヒさんごめん、ダンデ拾つた!」

「お久しぶりです! アサヒさんのカレーが食べられると聞いて!」

「お前方向音痴のくせに何でこういうときだけ鼻が利くんだよ! キバナ、ダンデ、そのまま回れ右して追加のきのみ収穫してこい! クラボとオツカを探し出せ! 出来ればモモンとザロクも追加!」

了解、と昔のように無邪気に笑つたふたりはまた走り出し、俺は大きくため息をついて鍋に水を追加した。軽い昼飯にするつもりが、こうなつたら彼ら全員の腹を満足させるまで終われない。足りない分の材料くらいは同期が調達してくるだろうが、少しは俺の労力というものを考えてほしいものだ。というかオフは休めつつたの誰だあの野郎。

「……密猟団捕まえるより骨が折れるよな、ブラッキー」

思わず傍らの相棒に愚痴を落とすと、ブラッキーは少し首を傾げて考え、そしてまた荷物のところに戻つて鞄を漁り、また上機嫌で俺の元にすり寄る。その口には、かぼそいホネのたくさん入つた大袋。

「……チーズの次は、ボーンカレーを『所望かな……？』

きゅう、とそれはそれは可愛らしい声を出して、満面の笑みを見せ
るブラッキー。欲しいものをねだるときだけは日頃のプライドをか
なぐり捨てて全力で甘えてみせるこの相棒は、こういうときにはくタ
イプなのだと知る。

「作ればいいんだろ作れば……！」

「きゅう♡」

身内に甘い自分の性質を心底恨みつつ、俺はホネの袋を咥えたまま
のブラッキーの両頬を柔らかくひつぱつた。

個性 《柊木旭》

俺の事情を知るひとに、よく正氣を保つていられるな、と言われたことがある。普通なら精神が崩壊してもおかしくないぞ、と。

メンタルケアに携わるひとの言葉だつただけに、重みはあつた。が、そのときにはすでに《柊木旭》を受け入れていた俺の口は、そうですかねえという呑気な言葉が漏れるだけだ。

結局のところ、これが《個性》だろうが《妄想》だろうが、もつと違う超常現象的な何かだろうが、俺は結局《柊木旭》として生きるしかないのだ。俺のスーツの内ポケットには、いつだつて警察手帳が仕舞われている。

「お、柊木クンやん！」

「ファットか。遠路はるばるご苦労さん」

今日は捜査協力のためにサー・ナイトアイの事務所に訪れていた。どうも好き勝手始めているらしい死穢八斎會、当然その捜査には俺たち警察も関わっている。

過去、このプロヒーロー《ファットガム》とともに違法薬物関わりの案件を潰しまわった経験を買われ、今は部署的に畠違いの俺もこうして捜査に駆り出されていた。ファットガムとはその捜査以来の付き合いで、齡が同じということもあり、それなりに親しく話す仲だ。「ホンマ大阪から東京は遠いわー。見てこのスリム具合、移動だけで痩せてもうた」

「どこが痩せたってんだよBMIヒーロー。どうせ移動中も駅弁山ほど食つてんだろ、プラマイゼロどころかむしろプラスだわ」

「いやつ柊木クンたらノリ悪い！ そこは《痩せて綺麗になつたな》くらい言うてくれんとファットさん泣くで!?」

「相変わらず口の回るやつだな……死穢八斎會の件で來たんだろ？」

その名を出すと、ぴたりとファットは動きを止める。すっと真剣な目を向けられ、俺もひとつ頷いた。

「俺もその関係で今日は來たんだよ。今はクスリ関係の担当じやないんだが、そのときの経験を買われてな。警察の方の指揮を執つてる」

「せやつたんか。柊木クンの指揮があるなら捜査の進展も早そうやな」

「だといいけどな。……ファット」

「なん？」

死穢八斎會に、個性を消すクスリ、そこに関わるひとりの少女。そして、そこにちらつく敵連合の影。サー・ナイトアイや警察としての見解では、死穢八斎會と敵連合の結託の線は薄いとみているが、さて。どうも俺の目には死穢八斎會を潰して終わりの案件には見えなかつたが、とはいえ証拠も何もない状態で前線にたつヒーローを振り回すこともない。

相変わらずトトロか最高級クッショーンかと思えるような腹に軽く拳をいれて、俺は誤魔化すように笑つた。

「しつかりメシ食つとけよ」

ひとが聞けば、それは何の変哲もない、ただの挨拶のような言葉。けれど、ファットにはそれで十分に通じる。それなりに危ない案件に、ともに立ち向かってきた経験があるからこそ。

俺の『警告』に一瞬目を見開いたファットは、委細承知という様子でいつものように笑う。

「ほな東京でも食い倒れしてこかな！ ところで柊木クン今日の夜時間ある？」

「今日は無理。仕事が詰まつててな」

「えええタイミング悪う…東京で食い倒れるならまず柊木クンの粉もん食べな始まらんのに。何で関西出身やないくせにあんなに美味しいねんやつぱキミ関西人やろ」

「残念ながら東京生まれの東京育ちだな。この案件片付いて時間が取れたら作つてやるよ」

腕壊れるまで焼いてもらうわ、と楽しそうに言うファットに、洒落にならねえよと苦笑する。

今ではかつてほど作ることがなくなつてしまつた俺の得意料理。作るたびにわずかな切なさと懐かしさを覚えるが、食いつくしてもらえるのはやはり嬉しかつた。

それじゃあ俺はサー・ナイトアイに会つて来るから、とその横を通り過ぎようとする、ほな、とまんまるトトロも手を挙げた。

「久々に顔面国宝見て安心したわ。相変わらずええ『個性』やな」「誰が顔面国宝だ。この顔は個性だけど『個性』じやねえつつの」相変わらず口の回るこの男は、余計な一言を残すのを忘れない。いつも通りの俺の返しを聞いて、陽気な関西人はからかうと笑った。

*

「もうその顔は『個性』でしょ。魅了とか催眠とかそういう『しばくぞ』

サー・ナイトアイとの話を終え仕事場に戻つてみれば、何故か俺の執務室のソファでごろごろしている赤い羽。もう長い付き合いになる彼は、いつも通りの顔でへらりと笑う。

「いやーモテますもんねえ旭さん。会うひと会うひとみーんな目がハート。よつ世界一のイケメン！ 国宝級の男前！」

「俺で遊びにきたならとつと帰れクソガキ」

「あれ、今日機嫌悪い？」

仕事が山積みなんだよ、と赤い羽をもつプロヒーロー『ホーカス』に構わずデスクに鞄を投げ置いた。今日得た情報を資料にまとめ、明日以降の捜査計画も組みなおさなくてはならない。年端もいかない少女を虐待して違法薬物を精製している可能性がある以上、一刻も早くその娘を保護してあげなくては。

パソコンを立ち上げた俺を見て、ホーカスは他人事のように口を開く。

「相変わらず仕事熱心ですねえ旭さん。もう定時過ぎてんでしょう？」「昼夜問わず働いてるプロヒーローに言われたくねーよ。というか

ホーカス、お前東京まで仕事か？」

「協会に呼ばれましてね。まあもう終わつたんで、先生の顔でも見てこうかと。あわよくば夕飯でもたかろうかと」

「少しほ本音を隠せ」

あと先生はやめろ、と言うとだつて先生ですし、とかつて面倒を見ていた優秀な生徒はいつもの笑顔を崩さない。

「旭さんは俺の先生ですよ」

腹の内が見えないその笑顔に、俺の教育が間違っていたのだろうか、と小さくため息をつく。俺の真似だとホーカスは言うが、そんなところ真似すんなと思う。

何故か生まれたときから『終木旭』という『誰か』の一生分の記憶をもつて生まれた俺は、この個性豊かな世界ですら奇人変人の類として扱われた。当然と言えば当然だろう、この『身体』に与えられた別の名前を受け入れることも出来ず、教わったことのない知識を俺は『記憶』としてすでに持っていた。

しかもこの顔、その『終木旭』と同じくどんなにもなく整つていて、しかも両親には全く似ていないというおまけつき。魔性と表現するしかないこの顔は、それはそれは多くのひとを犯罪へと導いた。

決してそれは俺のせいじゃない。俺のせいじやないが、一般人でしかなかつた両親は惑つた。苦しんで、俺を手放す選択をした。当然だと思うし、同情こそすれ恨む気にもならない。

あのふたりは、決して俺を傷つけたり疎んだりはしなかつた。ただ、受け入れられなかつただけ。それは決して、罪ではない。俺が『終木旭』なんて『個性』をもつて生まれたせいだ。

結果として俺は公的機関が管理する施設に預けられ、『終木旭』と名乗つて生きていくことになつたわけである。そして、一生を警察官として生き抜いた記憶を買われ、何故だか公安が面倒を見ていたヒーローの卵の世話を任せられた。

俺のあとをついてまわつていたちまちました小鳥が、いつのまにやら大きくふてぶてしく育ち、今やこの国でも有数のプロヒーロー。とつくな立ちして生まれ故郷の福岡でヒーロー活動に勤しんでいるくせに、東京に来るときには必ず俺のところに顔を出すのだから、変なところで律儀なやつである。

「ホーカス、そこにいるのは勝手だけど俺しばらく仕事するぞ」

「旭さんは晩飯どうすんです？」

「一時間で片付けてそのあと食べる。作る気力はないから何か買うよ」

「久しぶりの旭さんのメシ……」

「今日は諦めろ。事前に連絡しなかつた方が悪い」

ちえー、とちつとも残念がつてているように見えない鷹は口をとがらせる。いつ福岡に帰るんだと聞けば、明日の昼には東京を出るという。さすがは忙しいプロヒーロー、と思いながら、家の冷蔵庫の中身を思い浮かべた。確か、鶏肉はまだ残っていた。

「……鶏のから揚げ」

「！」

「今晚のうちに仕込んで明日の朝揚げてやるよ。好きだろ」「やつた！　あ、今日旭さんと泊まっていいですよね？」

「はいはい。じゃあ俺仕事するから」

「じゃ、俺ちよつと外出してきますねー。一時間したら戻るんで！」

さつと羽ばたいた赤い翼に、珈琲、と投げかけると、了解、と楽しそうな声とともに一羽の鷹が窓から飛び立つ。一時間後に彼が戻ってくるときには、その手には珈琲とふたりぶんの夕飯が握られていることだろう。先の先まで読めと教え込んだ可愛い生徒は、抜け目なく俺の教えを実践してくれる。

「…個人的には生徒っーか家族なんだが」

お互い家族に関してはデリケートなところがあるので本人の前で言わないが、俺の感覚としては生徒というより家族に近く、弟や息子のように思っているところがあつた。甘やかしてはならないと思いつつも、ついつい甘くなってしまうのは反省している。まあそこは幼少から面倒を見ていたやつの欲目と、——どこかかつてのライバルに似て育つてしまつたせいだろうから、大目に見てほしいと思うところだ。

改めて時計を見る。やるべきことを頭の中で整理し、優先順位と効率を考慮して片付ける順序を決めた。こきりとひとつ肩をならして、パソコンに向かう。一時間と区切つたからには、時間通りに仕事を終わらせなくては。

なんだかんだで親しい顔によく出会う一日だつたことを喜びながら、俺は集中してキーボードに指を走らせた。

本当は、わかっている。

柊木旭と名乗つてはいるが、俺の名前はちゃんと別にあることを。柊木旭は、俺とは別の《誰か》であるということを。

けれど、俺はそれでも《柊木旭》を名乗り続ける。

「いつまで《柊木旭》やるつもりや、自分。……ホンマはちゃんと、わかつとるんやろ。それで、ええんか」

いつのまにか付き合いが長くなりつつある悪友は、少し硬い口調でそう言う。本当に《俺》のことを中心してそう言つてくれているのはわかっているが、俺は苦笑を返すしかない。

だつて、仕方がないんだ。《柊木旭》は俺の目から見ても有能な警察官で、とても頼りになる存在なのだ。俺が《柊木旭》でいる間は、きっと《俺》でいるよりもたくさんのものを守れるから。

「……いつか、教えてくださいよ。《旭さん》の、本当の名前」

幼少から面倒を見てきた、弟のような、息子のような彼は、そう言って少しちなげに笑う。俺だつてお前の本当の名前は知らないんだが、とは言えなかつた。彼に知識や振る舞いを教えてきたのは《柊木旭》の方なのに、どうして《柊木旭》じゃなくて《俺》を知ろうとするのだろう。

別に、知らなくていいと思うんだ。《柊木旭》がいなきや、何もできない《俺》のことなんて。

「素晴らしい《個性》だよ。僕でも見たことのない、非常にリアな《個性》だ」

目の前に立つ巨悪は嗤う。ニイ、と口角を上げ、芝居がかつたように両手を広げた。

「おそらくはその遺伝子のどこかに刻まれた、過去の《誰か》の記憶と人格をそのまま受け継ぐ《個性》！ あえて名前をつけるなら

記録保存^{メモリーストック}と言つたところかな？ 嘴呼、素晴らしいよ。その《個性》はまさに、」

転生や永久の命に限りなく近いものだ。

これを奪われるわけにはいかない、と一步下がる。《個性》を失つてただの《俺》になるのも大打撃だが、それ以上に、こいつにだけはこの《個性》を渡してはいけない。この巨悪の思考と思想を、後世に遺させてはならない。

「さあ、くん。僕から逃げ切れると思うかい？」

どこで知ったのか、久しぶりに《俺》の名を聞いた。暗に諦めろと言われて、思わず口角が上がる。残念ながら、《俺》にも《柊木旭》にも、諦めるという選択肢だけは存在しない。

まっすぐに、その存在を見据えた。

「俺は、柊木旭だ」

だから俺は、逃げもしないし負けもしない。

《柊木旭》の結末は、いつだつて完全勝利しかありえないのだから。

たすけろください

『たすけろください』

一斉に送られてきた日本語になつていらない文章に、メールを受け取つた五人は同時に同じことを思つた。

——また、女絡みか。

*

「で、今回はどういう事案なんだ？」

「……偶然、ある警察上層のお偉いさんの家族に出くわしたんだよ」
例のごとく柊木の家に集まつた僕たちは、すでに半泣き状態の本人を前にしていた。急なことでも全員集まれたのは奇跡的としか言いようがない。こればかりは柊木の日頃の行いか、それとも全員招集することは滅多にない柊木のために全員が時間をむしり取つてきたか。おそらくは両方だろう。

たいていのことは笑つてこなす柊木がここまで取り乱すのは女性関係だけ。しかも少々のことならいつもハギに相談して話を片付けているはずだ。わざわざ全員に連絡を飛ばしたからには、いつも以上の面倒な理由があるのだろう。

しかしこんな情けない顔をしていてもイケメンはイケメンだなど逆に感心する。つい口に出したらお前が言うなと松田に頭をはたかれた。後でやり返す。

それに一生懸命笑つてみせようとしたが表情を取り繕う余裕も残つていらない柊木が零したところによると、たまに挨拶をかわすレベルに親しいお偉いさんの家族と仕事帰りに偶然鉢合させ、そのご令嬢に一目惚れされてしまったとか。

「そのお偉いさん自身は普通にホワイトでいい人なんだよ……少々思い込みが激しくて娘さんを溺愛してるくらいで……俺のことも評価してくれてて……『君になら可愛い一人娘を任せられる』って……」

そう言葉を続ける柊木の長い睫毛に、そろそろ水滴が乗りそうだ。柊木に目を付けたことについては見る目があると言つてやりたいが、本人の意向もちゃんと確認してやつてほしい。まあ柊木も義理が

あつた分はつきりとは言えなかつたんだろうが。

やれやれと僕は口を開いた。

「それで、その『令嬢は？』

「連絡先を交換させられてメールのやり取りしてる……返信しなくても一時間に一回くらいの頻度でメールが来てて」

「返信しなくても？」

「一時間に一回？」

「それでも我慢してゐ方らしい……一応仕事中にスマホ見れないことは伝えてるんだけど……」

全力で遠慮しても昼に弁当を作ろうとしてくるわ、帰りの時間や家の場所、休みの予定を聞き出そうとしてくるわ、果ては誰のとは言わないが結婚後の人生設計の話まで持ち出されているらしい。

これは完全に柊木の地雷案件、とふと隣に目をやれば、うわあと言う顔をしたヒロと目が合つた。ふるふると首を振るヒロに思わず頷く。

とはいゝ、警察という立場から考えるとこれは難しい。

「……だが、そのレベルだとストーカーで訴えるのはまだ難しいな。警察官僚の娘なら誰も手を出したくないだろうし、柊木の立場もある」

お前もあまり表沙汰にしたくないんだろうと言えば、柊木はこくりと頷いた。

「となると、その『令嬢さん』に柊木のこと諦めてもらうしかないってこと？」

「無理じやねーの？」相手が相手だけに猫かぶりも外せないだろ」

松田の言葉に柊木の瞳がまた一層潤んだ。それに気づいた松田が慌てて頬杖を外し、身を乗り出した。

「おま、本気で泣きそうになんなよ！」

「せんせー、じんpeiいちやんがあさひちやんを泣かせてまゝす」「俺は泣いてねえ！」

いろいろ我慢ができなくなってきたのであらう柊木がぴるぴると震えだした。いやしかしお前、何でそんな情けない顔になつてもイケ

メンなんだ、おかしいだろ。

「い、一応言うけど、多分悪い子じゃないんだ。ストーカーというより、その、ちょっと押しが強すぎるって感じで、向こうも俺がその気がないのはわかつてて、でも諦めきれない感じというか、何が何でも欲しいモノは手に入れたいというか……」

「なあ柊木、それを世間一般ではストーカーって言うんだぞ」

「暗いジメジメした粘着質な感じがないだけ俺としてはだいぶマシなんだよ伊達！ 盗撮盗聴尾行妙な贈り物もないし周囲に対する嫌がらせもない！ だけど無理!!」

つまり今まで経験したストーカーの中ではマシな部類ではあるけれど、だからと言つて堪え切れるレベルでは決してないと。いや堪える必要はないんだがな。というかお前本当に今までどんな目にあってきたんだ。

つたく、と頭をがしがしと書いた松田が、ん、と柊木に彼のスマホを差し出した。

「まつだ……？」

「つまり一応は話し合いの余地がありそうな相手なんだろ？ ならすっぱり断りの連絡いれろよ。本気で外堀埋められる前に手を打つた方がいい」

「ん、確かにね。ほら旭ちゃん、今なら俺たちもいてやるから、勇気出して頑張つてみよ～？」

「俺何歳児だよ……」

ぶちぶちと文句を言いつつ、萩原に頭を撫でられても柊木は抵抗しない。伊達も苦笑してそれに続いた。

「何にせよ、ちゃんと拒否の意志を伝えることは大事だと思うぞ？ お前のことだから、相手の気持ちとかそのお偉いさんへの義理とか気にして、あんまりはつきりとは伝えられてねえんじやねえか？」

「……」

そつと口を閉じた柊木は、どうやら岡星だったらしい。

意外とというか、柊木は女性相手にもなるべく傷つけないように立ち回る。あくまでも仕事外の、悪意のない相手に限った話だが、根本

的に人を拒否するのが苦手な性質なのだ。

「何とかお相手さんに拒否の意志を伝えて、出来るだけ早くそのお偉いさんにも頭下げればまだ何となるんじやないか？ 正式な見合いでもないし、そのお偉いさんも話が通じない人ではないんだろ？」

言い聞かせるように優しくヒロが言うと、柊木は唇を横一文字に結んだままこくりと頷いた。

よし、柊木の震えが止まつた。

「仕事に集中したいから今は私生活のことは考えられない、そう伝えただけだ。多少ごねられても折れるんじゃないぞ」

そうして一番誕生日が早いくせに一番末っ子気質の甘つたのは、僕たち全員に励まされてようやくスマホの画面に指を滑らせたのだった。

こういうところが可愛いと思うのだが、それを知っているのが僕たちだけだという事実が、何となくすぐつたい。

* * *

「……何でこうなつたんだろうな」

「陣平ちゃん、それは言わないお約束」

はは、と乾いた笑みを零すハギも、さすがに遠い目をしていた。

何が悲しくてカップルばかりのプールに男一人で来なくてはならないのだろうか。

*

数日前、俺たちの前で柊木は意を決し、そのご令嬢とやらに連絡をした。丁寧に丁寧に断りの言葉を並べ、申し訳ないと伝えるアソツの対応に、聞く限り不備はなかつたと思う。

しかし、相手が悪かつた。辛抱強く言葉を重ねる柊木にもめげず折れず、漏れ聞こえた言葉は『諦めきれない』。なるほど、声の調子からしてかなり気の強い女らしい。時間がたつにつれ、柊木の顔色が青を通り越して白くなつていく。

「——わかりました」

そろそろまずい、と思つたところで、案の定もはや完全に目が死んでいる柊木がとうとう根を上げた。諦めに満ちた声は、もはやもの悲しい。

「では、一度だけです。それでも私の意志が変わらなければ、このお話はなかつたことに」

その一言を絞り出した柊木はそつと通話を切り、そのまま——まつすぐ後ろに倒れた。

*

女性との会話に堪え切れず卒倒した柊木がぼそぼそ話し出したところによると、彼女は「こんな電話での言葉で諦められるわけがない、せめて一度ちゃんと会つて話したい」「チャンスが欲しい、それでも無理なら諦める」と言つて譲らなかつたとか。

それ以上会話を続けることに堪え切れなくなつた柊木は根負けして妥協、一度だけデートをすることに。行き先は、彼女の要望で夏らしくプールだ。

「水着で悩殺しよう的な発想かな？　旭ちゃんにはマジで逆効果だけど」

「……まあある意味良かつたんじゃねえか」

「何で？」

「泣いてもプールの中なら目立たねえし、卒倒しても熱中症だと誤魔化せる」

「あ、なるほど」

デートの約束を取り付けられた柊木はなりふり構わず俺たちに泣きついた。

「頼むから誰か付いてきてくれ、マジで無理」と、あんなに真剣な顔の柊木を見たのはもしかしたら初めてだつたかもしれない。どこまで必死だつたのか、掴まれた肩が手の形に赤くなつていた。お前よくそれで普段俺らのことゴリラとか言えるなと思う。

それで何とか時間の融通がつけられた俺とハギは、仕方なく男二人でプールに乗り込み、対象二人を見守る羽目になつたというわけだ。「しかしさすがというか、……目立つてるな」

シンプルなサーフパンツにパークーを合わせただけの柊木だが、そこに立っているだけでモデルのように様になる。言うまでもなく周囲の女性の視線を一身に浴びていた。

本人は我関せずという顔をしているが、それなりに付き合いのある俺たちにはわかる。あれは、出来ることならすぐにでもその場から走り去りたいと考えている顔だ。

「あらー……旭ちゃん、今日生きて帰れるかな？」

「死なせたら俺たちが殺されるぞ、柊木のモンペに」

「あいつら本当に旭ちゃんのこと好きだよね〜」

何が何でも守り切るんだぞと念を押してきたクソ真面目のゼロに、オレたちも行ければよかつたんだけどとしょんぼりしていた諸伏、悪イが頼むぜと肩を叩いてきた伊達。

普通ならいい歳した野郎相手に心配しすぎだろと言うところだが、何せ対象が柊木だ。本人に事情がありすぎるというのもそうだが、本來たいていのことは自分で片付けてしまう性質のやつに全力で頼られたなら、そりやあ応えてやりたくなるというものだろう。

頑張らないとね、と軽く言うハギもまた、抜かりなく周囲の気配を探りながら柊木を視界に捉え続けている。オフなのにやつてることは完全に張り込しごみなんだよなど内心でため息をつきつつも、しつかり同じことをしている自分が笑えた。

「あ、来たみたい」

柊木に向かって大きく手を振る女性、おそらく彼女が例のご令嬢なのだろう。

いくらか年下だという彼女は、まあそれなりに美人と言つていい。華やかな水着を身にまとい、一生懸命柊木のために着飾つてきたのが見て取れる。相手が柊木でさえなければ、その努力を微笑ましく思えたかもしれない。そういう意味ではあの子も気の毒かもな、と思つた矢先、彼女は躊躇なく柊木の腕に抱き着いた。

「ありや」

一瞬硬直しても笑顔を崩さなかつた柊木はさすがと言つておこう。

あれは泣くのを我慢している。偉いぞ柊木、そのまま堪える。さすがに往来で泣くアラサー同期は見たたくない。

「……あー、積極的だね、肉食系女子つて奴?」

「やっぱ今日柊木死ぬかもな」

「どうしよう俺たちも殺されちゃうねえそれ。おっと、移動し始めた」「よし、追うぞ」

ある程度距離をとつて尾行する旨は柊木に伝えてある。よほどのことがない限りは特に手を出すつもりもないが、一応いるというだけでアイツは安心するらしい。どうやら俺たちの存在にはすでに気づいていたようで、一瞬だけこちらに目線を送つてきた。

ほんの少し素の情けない笑顔をこちらに向か、すぐに顔を戻す。

「……相変わらず人の視線には敏感だなアイツ」

「歴代のストーカーのおかげで磨かれたスキルだと思うと切ないよね」

「」

やめろ萩原、本当に泣けてくる。

*

そのあとのデートは、まあ順調だつたと言つていいくのではないだろうか。

ウオータースライダーに乗つたり（二人乗りで密着するのが無理だつたんだろう、それぞれ一人で乗っていた）、流れるプールに浮かんでいたり（抱き着こうとしてくる彼女を必死にかわしていた）、彼女が作ってきたお弁当を食べたり（まずいわけではないと思うが、噛まずに呑み込んでいた）、よくあるストローが二つ刺さっているジュースを飲んだり（ストローに口を付けてはいたがあれは絶対飲んでないと、深く考えなければ微笑ましいデートに見えると思う。……絶対に笑顔を崩さない柊木の努力が涙ぐましい）。

たまに声をかけてくる逆ナンをかわしつつ、俺たちもずっと後を追つていた。ハギがちょこちょこスマホをいじつていると思つたら、来ていない三人に実況中継をしていたらしい。

「あいつら、なんて？」

「降谷ちゃんが、さすがに夕方くらいで限界だろうから解散する様子

がなかつたら仕事の呼び出し装つて帰らせてやれつて「妥当なところだな」

「あとヒロくんが、エチケット袋の用意はいいかって」

「ああ、絶対後で昼飯の弁当分吐くからな」

「それから伊達班長が仕事終わりに差し入れ届けに柊木の家行くってさ。ゼリーとアイスどつちがいいかって」

「もはや扱いが病人」

まあ十中八九ぶつ倒れるのであながち間違いとは言えないが。ぼちぼち日も傾き、帰る客も増えてきた。柊木も意を決したのか、

彼女に向き合つて真剣な顔を作つてゐる。

「……萩原、もう少し近づくぞ」

「はいはい」

そつと二人の声が聞こえる位置まで距離を詰めた。

「……私の気持ちは変わりません。お気持ちは本当に嬉しく思います
が、お付き合いをすることは出来ませんし、今後こうしてお会いすることも出来ません。貴方のお父様には私の方からきちんとお話をさせていただきます」

「そんな、旭さん……！ 確かに今の私はまだまだ至らない点は多いかもしません、けれど、絶対に貴方に相応しい女性になつてみせます！」

「そんな風に仰つていただけることは身に余る光榮です。しかし、どうぞそのままの貴方を受け入れてくださる方をお選びください」

貴方の隣に相応しいのは、私ではないでしよう。

きつぱりと言い切つた柊木に、少し感心した。お前、女相手でもちゃんとと言う」と言えるじやねえか。

「そんな……！」

その言葉に、彼女は目を潤ませた。ドラマのヒロインさながら口元に手をやり、流れる涙をぬぐうことなく。

一瞬の隙をつき、柊木に抱き着いた。

「あ、」

俺と萩原の声が揃う。

当然その声も聞こえていない彼女は、柊木の胸元に頬を擦り寄せ、そしてそのまま背伸びをし、顔が近づいた——ところで柊木はばつと彼女を引き離す。

「旭、さん……？」

柊木の頬に涙が伝う。表情はもはや笑顔を作れず、目が虚ろになりかけていた。

完全にキヤパオーバーしたのだろう、ふらりとゆらぎながらも、二歩、三歩と下がり、何とか倒れないよう踏ん張っている。

——これはまずい。

「あ、旭さ、……私、……つごめんなさい……！」

彼女がその場を走り去ると同時に、俺たちは柊木に駆け寄った。目の前にいるのに視線が合わない。その肩を掴んで揺さぶる。

「オイ柊木！ 柊木！」

「旭ちゃん？ 俺たちのことわかるー？」

「あ、……」

未だ目線が合わないながらも、その口がはくりと動く。

しかし言葉が紡がれることはなく、俺たちの言葉も届いてないようだつた。

「ハギ、俺が柊木に肩貸すから荷物頼む」

「了解」

柊木がこうなるところを見たのはまだ数回だが、しばらく戻つてこられないことは知っている。

俺たちは柊木を半ば抱えるようにしてすぐにその場から撤収した。

* *

結局、柊木が会話できるほどに復活したのは、俺の車に乗り込んだ後だつた。

俺がハンドルを握り、萩原が後部座席でぐらぐら揺れる柊木の面倒を見る。荷物も積み込んでエンジンをかけたとき、柊木ははつと我に返つた。

「……はぎわら？」

「お、戻ってきた。だいじよぶ？」

「ようやく起きたか

「……まつだ」

「おう」

三秒ほど固まつた柊木は、そのままぶわっと音が出そうなほど涙を溢れさせる。そして隣にいた勢いよく萩原に飛びついた。

「うおっ!?」

「あああああ怖かったああああああ!!」

「いつ……！ わかつた旭ちゃん怖かったのわかつたからちよつと腕緩めて!! マジで締めてる!! 肘骨きしんでるからホント!!!」

突如として始まつたやり取りに、不謹慎とわかりながら噴き出した。

「あつこら、何笑つてんの！ あいてて本当痛い、痛いってば柊木!!」

「いやこれお前笑うだろ。おーい柊木、聞こえてつかー」「きこえてる……」

「よし、萩原は好きにしていいが俺の方には来んなよ、運転中だからな」

「…………うん…………」

「さては柊木テンパリすぎて精神年齢幼児レベルまで落ちてるね!? いたつ締め上げるなつてば柊木!! マジでお前の腕力洒落になんねえんだから!!」

柊木の家について車から降りるまで萩原から離れることはなく、その間ずっとえぐえぐと泣き続けた。

絵面が面白すぎて運転中ひらすら爆笑をこらえ続けたが、どう考えても俺は悪くない。柊木が萩原に泣きついて締め上げる図つてお前、笑う以外の選択肢がないだろと思う。

* * *

家に帰つて即行胃の中のものを吐き戻し、軽くシャワーを浴びなおしたころには、今日仕事だつた三人もうちに乗り込んできていた。

まだ早い時間なのに急いできてくれたのだろうか。さすがに申し訳ない。

「あ、旭ちゃん適当に服借りたよ？」

「ああ、うん……（めん）萩原」

いーよ、と軽く笑った萩原が着ていた服は、俺の涙で見事にぐつしより濡れているはずだ。車の中での騒動を思い出したらしい松田は、また小さく肩を揺らしている。

「松田……さすがの俺も傷つく……」

「ふ、くく、ああ、悪かったよ、面白すぎてな」

真剣に同情されるよりは笑い飛ばされる方が気持ち的に楽なのは確かだが、そう全力で笑わなくてもいいと思う。確かにさつきまでの自分のことは俺自身忘れてしまいたいけれど。

「柊木、俺らのことはいいから少し横になつたらどうだ？」

「ああ、まだ顔色が悪いぞ」

伊達と降谷の言葉に甘えてそのままソファに転がった。
諸伏がばさりとタオルケットをかけてくれて、傍に飲み物を置いてくれた。

「サンキュー」

「どういたしまして。ま、デートが終わって良かつたね」

無事に終わつたとは言い難いけど、と小さく言うと、諸伏も困つたようにははと頬を搔きながら笑顔を作る。

「彼女、走つて逃げちゃつたんだつて？」

「柊木が泣いたの見てすぐ一動搖してたな」

『そこまで私のこと嫌なの!?』つて感じ？ うーん、拒否っていうのは伝わつたと思うけど、どうなるかなあ』

もはや彼女の最後の表情を覚えてもない俺は頭を抱えるしかない。

どう考へても気を悪くさせてしまつたのは事実だろうが、謝罪の連絡をした方がいいのか、それともこのまま連絡を絶つべきなのか。ぐるぐると思考が堂々巡りをしていたところに、俺のスマホから走る一瞬のバイブ音。

部屋に沈黙が流れ、視線がスマホに集まつた。

「……まさか?」

「いや、でもまさか」

「さすがに早くない?」

「でもタイミング的に……」

「とにかく、確認するしかないだろう」

ほら、降谷が俺にスマホを差し出す。

明るくなつた画面にぐくりとつばを飲む。若干震える手でスマホを受け取り、メッセージを開いた。

「…………ん?」

「何その反応」

「……その彼女からの、メッセージなんだけど
やつぱりか。彼女は何て?」

「……諦めては、くれたらしいんだけど……?」

「良かつたじやないか。何だよ、その歯切れの悪さ」

どう反応していいかわからないまま、降谷にそのスマホを投げ渡した。五人が一斉に画面を覗き込み、揃つて目を点にする。

『逃げてしまつて本当にごめんなさい』

『貴方の涙に、私では到底貴方の隣は務まらないと理解してしまいました』

『……涙を流す姿すらあんなに美しい貴方の隣には、立てない……?』

『まるで芸術品……一枚の絵画のようで……?』

『その美しさに堪え切れず逃げてしまつた私をお許しください……?』

『まさに創造主のつくつた美しさ……?』

『地上に舞い降りた天使に、私ごとき下界の人間が手を触れてはならないのです……?』

父には私からきちんとお話しておきます、という一言でメッセージは締められていた。綴られていた文章はまるでポエムのようで、何と いうか、……何というか。

何もないとわかっていても、俺の手はつい自分の肩甲骨に伸びる。

硬い骨の感触だけが手のひらに残り、当たり前のことががら羽など生えているはずもなく。

俺はどう反応していいかわからないまま、とりあえず口を開く。この顔で今までいろんな評価をされてきたけど、と自分で思うよりずっと戸惑つた声が零れた。

「……天使扱いされたのは初めてだなあ」

一瞬の沈黙が流れた後、まるで爆発したかのような笑い声が部屋に響いた。

のこされたもの

ひとりぶんしか気配のないこの家にも、すっかり慣れてしまつた。ひとつ晩酌でもと適当なグラスと酒瓶を取り出す。つまみはまあいだろう、そんなに飲むつもりもない。少しだけ、浸りたいだけだ。食卓のテーブルに写真立てをそつと置いて、椅子を引いた。見慣れた彼女の笑顔に、少し口角を上げる。

「……来月で旭の奴、成人だよ。あつという間だなあ」

なあ、汐里^{しおり}。語りかけた笑顔は動かず、言葉も発しない。写真なのだから当たり前なのだが、そんな当たり前がちくりと胸を刺した。

俺たちの息子は来月、二十歳の誕生日を迎える。つまりそれは、彼女がこの世を去つてから二十年という月日が流れることを意味していた。

汐里は、もともと身体の強い方ではなかつた。出産に堪え切れるかは五分五分だと医者からも言われていた。だから俺は子どもをつくることにも躊躇があつたが、彼女自身が強く望んだ。

『貴方と私の血が混ざつた子を、この腕に抱きたいの』

身体は弱くても決して意志は弱くなかった彼女は、繰り返しそう言つた。もちろん子どもが欲しかつたのは俺も同じ。何度も話し合つて、健康には気を遣つていこうと二人で決めて、そうして授かつたのが旭だつた。

しかし努力の甲斐なく、汐里は旭をその腕に抱き、微笑みを遺してこの世を去つた。私のお願ひごとを叶えてくれてありがとうと、いつも通りの優しい笑顔だつた。その笑顔もその声も、俺の脳に深く深刻み込まれている。人の記憶は声から薄れていくと言うが、20年たつた今でもはつきりと思い出せた。

グラスに酒を注ぎ、軽く呷つた。

彼女を喪つてからは随分と目まぐるしかつた。初めての子育ては失敗ばかりで、働きながらの育児には随分と頭を悩ませた。自分で言葉を話せるようになつてからは旭の賢さに助けられたが、今度は別の問題で悩まされる。あのクソガキときたら俺と汐里の顔を完璧に

いいところどりしてくれたものだから、それはそれは見事なほどに美少年だったのだ。

——何度も思い出しても、情けなさで死にたくなる。

あの事件のこと、俺の無力さ、そして、旭に残つてしまつたトラウマ。旭の前で涙なんぞ流してしまつたのはあの時だけだ。自分の身に起きたこと、その顛末を理解していない旭はただ目を丸くしているだけだったが、それもまた俺の心を抉つた。まだ幼い、何もわからぬ旭のことは、俺が守らなくてはならなかつたのに。

「……俺が死んでそつちに行つたら、まずその説教から始まるんだろうな」

いや、その前に旭の心の傷を思つて泣くのだろうか。傍にいられなかつた自分を責めるのだろうか。一通り自分を責め終えたら、あの女に全力で呪いでもかけるかもしれない。いや、もうかけている可能性の方が高い。汐里はそういう奴だつた。大人しい顔をして内心では結構に過激なことも考える、決して温厚とは言えない強い女性だつた。その辺り、どこか旭にも受け継がれているようで頭が痛い。

「血つていうのは恐ろしいよなあ……旭の奴、やつぱりお前に似てるぞ」

顔立ちだけの話ではない。普段は隠れているその苛烈さ、自分の意志を貫き通す強さ。そしてその、笑い方。見え隠れする汐里の面影に、嬉しさと切なさを覚える。

「……二十年、か」

長いような、短いような。

旭はすくすくと大きくなつて、小学校中学校高校、そして関西の大学へ通うために家を出ていった。立派に育つてくれていると思う。成績は驚くほど優秀だし、台所にひとりで立てるようになつてからは家事の類も覚え、今や料理の腕など敵わない。性格も……まあひねくれた生意気なガキではあるが、性根までひねっているわけではない。何を思つたが警察官になるなどとほざいていていることを除けば、胸を張つて自慢の息子だと言えるだろう。そんな旭が成人して、本当に俺の手を離れていく。

嬉しいかつて？ そりや嬉しいさ。我が子の成長を喜ばない親がどこにいる。

寂しいかつて？ そうだな、そうかもしない。たつたひとりの我が子、彼女の最期の贈り物。唯一残った「家族」だ。寂しさくらいはある。

——どこか、安心したんじやないかつて？

グラスの酒をまたひとつくち呷つた。

「……心配すんな、馬鹿は考えちゃいねえよ」

彼女の笑顔に、改めて語りかける。

この二十年、再婚なんて一度も考えなかつた。言い寄つてきた相手もいないわけではなかつたのだろうが、俺の眼中には入つていなかつた。

俺の唯一は今も昔も、これからもずっと。

「……汐里」

彼女を喪つたときの苦しみは、哀しみは、とても言葉で表現できるものではなかつた。それだけ愛していた。それだけ愛されていた。俺にとつて、本当に唯一の存在。旭がいてくれなかつたら俺は生きることをやめていたかもしれない。

「……旭が俺の手を離れるからって、俺のやることが終わつたわけじゃねえからな」

あのクソガキが本当に警察官にならないように見張らなきやならねえし、女性恐怖症もまだ治つてねえ。随分と狭い世界で生きてきた分、まだまだ世間というのもわかつちやいない。教えることはたくさんある。まだまだ導き手が必要だ。

「……当分、面倒見てやるさ」

成人したくらいで投げ出すような真似は、しねえよ。

グラスに残つた酒をいつきに呷る。空になつたグラスをテーブルに置くと、かたりと軽い音を立てた。

「俺と、お前の、大事な息子だ」

俺はお前を、その笑顔、声、思い出、喪失の苦しみも、哀しみも、寂しささえも全てひつくるめて、愛してゐる。あんまり口に出しては言つ

てやれなかつたけど、本当に、それだけ愛している。

そんなお前と俺の息子なんだ、何よりも愛おしくて当然だろう？
たかが成人したくらいでほつぽり出して、自分だけ楽になる道を選ぶ
わけがないだろう？

「お前が遺してくれた俺たちの『旭』だ。出来るだけ面倒見て、……い
つか本当にもう大丈夫だと確信できる日が来たら、」

あのどこか危なつかしいクソガキだ、きっと俺が寿命を迎えるその
時までそんな日は来ないだろうけど。

「……その時は、」

続きを言葉にしようとして、やめた。どうせ何十年か後の話だ、口
にするほどのことでもない。

晩酌はここまでにしようと、グラスを持つて立ち上がった。

「片づけて寝るわ。付き合つてくれてありがとな。アイツに誕生日は
帰つてくるように連絡したから、今度は三人で飲もう」
旭の酒癖はどうちに似ているのか、確かめるのが樂しみだ。

大晦日

自他ともに認める情緒に欠ける人間性故か、別に年を越すからと言つて大した感慨があるわけではなかつた。強いて言うなら今年は何があつたつけとか、そんなことを炬燼でぬくぬくと考えるくらいである。

現場に出るわけでもない俺なので、有難くも年末年始はきちんと休みをもらえる。口に出したら殺されてしまいそうだが、別に休みをもらつても本を読むくらいしかすることがないのでいつそ書類のひとつでも片付けたいものだと思つている。

『貴方も立派なワーカホリックなのね』

飛んできたメッセージに、即座に返した。

『きみの旦那ほどじゃないよ』

すると一分とかからず涙を流すキャラクターのスタンプが返つてくる。気の毒だと思いつつ、ちょっと笑つてしまつた。仕事に理解のある彼女だから本氣で泣いたり落ち込んだりしているわけではないだろうが、こうも返事が早いということは本当に暇なのだろう。ナタリーさんは、こうして時折メッセージをかわす程度の間柄になつていた。世間一般で言う女友達というもののなのだろうと思う。俺に女友達とか感慨深くて泣けてくる。

年末の挨拶ついでに、特に意味のない雑談を続けていた。

『知つていたつもりだつたけれど、警察官つて本当に忙しいのね』

『部署にもよるけどね。特に伊達たちは花形の捜査一課だから』

『身体壊さないのが不思議だわ』

『そんな柔なやつは捜査一課とか配属されないよ』

事件とあれば東奔西走、時も場合も選ばない犯罪事件に立ち向かう警察官は、どうしてもプライベートを犠牲にしなければならないときがある。たとえ新婚であろうと年末年始だろうと、なかなか家でゆっくりなど許されないので。残念なことに肩代わりしてやれる立場ではない俺は、大人しく炬燼に籠るしかない。

『せつかくお節作ったのに、食べてもらえるのは先になりそうね。仕

方ないけど残念』

実を言うと、少し前にナタリーさんからお節やお雑煮の作り方にアドバイスを求められていた。

と言つても俺も毎年眞面目に作つていたわけではないので、とりあえず欠食児童どもがリクエストしてきたときに作つたもののレシピを渡した程度なのだが、それなりに気合いをいれて作ったという話は聞いている。日持ちがするものとは言え、出来ることなら元日に食べてもらいたいという気持ちはわからなくもない。

それなら、とスマホの画面に指を滑らせた。

『届けに行こうか』

『え?』

『車出すよ。どうせろくなもの食つてないだろうし、着替えと一緒に渡してやつたら。手が離せないようだつたら俺が捜査一課に置いてくるよ』

ついでに俺も差し入れを適当に置いてこよう。捜査一課と、特命係と、あと公安は……どうだろう。先に連絡してお伺いを立てておけばいい。

『でも、いいの?』

いいも何も、どうせ俺も暇なのだ。休みの俺が顔を出したら嫌味かと言われそうだが、まあそこはそれ。俺が渡すやつらは文句言いつつも差し入れを残さず平らげるだろうし、それ以外のやつにどう思われようが今さら特に気になどしない。

『俺も適当に差し入れの準備するから、一時間後でいい?』

『もちろん大丈夫! ありがとう旭くん!』

じやあ後で、と返信して、もぞもぞと炬燵から脱出する。

さすがにスウェットで本庁に行つたら卒倒される気がするので適当に着替えるとして、あとは差し入れを何にするか。彼女のように眞面目にお節など用意していない。

面倒なのでもうおにぎりくらいにしておこう。塩気を強めにしておかずを少しほつけておけば腹にも溜まる。

俺の仕事は職務を怠る警察官を締め上げることだが、まあ眞面目に

働く警察官相手なら応援をすることがあつてもいいだろう。年の瀬でも関係なく汗を流しているだろう悪友たちの顔を思い浮かべ、キツチンに立つた。

さて、おにぎりの具は何にしようか。

どうか、貴方に幸福を

彼はよく図書室の中でも一番奥の、あまり日当たりのよくない席に座つて本を開いていた。

その精巧すぎる横顔を見たときは思わず三度見してしまったし、美を愛する芸術家の理想という理想を詰め込んだ人形が座つているようだと本当に思った。それはきらびやかで華美な美しさではなく、どちらかというと素数や数列のような均整の取れた美しさ。調和がとれているという言葉がこれほどまでにしつくりくるひとがいるなんて、と思わず感嘆してしまつたほどだ。

その胸元にあつた名札を見るに、どうやら彼はひとつ下の後輩らしい。そういうえば、とんでもなくかつこいい後輩が入つてきたと友人が騒いでいたような気がする。確か名前は、そう、柊木くん。柊木、旭くんだ。

少し興味がわいて、情報通の友人に彼のことを尋ねてみる。アンタが興味を示すなんて珍しい、なんて言いながら、彼女は堰を切つたようになに話し始めた。見目麗しく、成績も優秀で運動神経もよく、それでいて常に孤独である彼のことを。

「別に愛想がないとかそういうわけじゃないんだよ、クラスの男子と話してるのも見たことあるし。でも女子には絶対近づこうとしないし、話しかけられたるとにかく逃げるんだよね。まゝあれだけモテてたら嫌になつてもしようがないんじゃない？」

いつ見かけてもだいたい独りで、ぼうっと外を見つめているか、本を開いているのかなのだと彼女は教えてくれた。他とつるむのを好まない、ミステリアスな人間なのだと。

そういうもののなのだろうか、と内心で少し首を捻つたが、私とて彼のことを知っているわけではない。表向きは小さく頷いて、話を聞かせてくれてありがとう、と礼を言うと、別にいいよと言うように軽く手を振つた彼女は、にんまりと笑つた。

「本にしか興味がないアンタから見ても、柊木くんはかつこよかつたんだ？」

からかいを含んだ声に苦笑して、どうかな、とだけ返した。私は彼を見てかつこいいというより美しいと思つたわけなのだが、それうまく説明できそうになかった。彼に抱いたこの感情は、どちらかというと小説に登場するキャラクターを知りたいという気持ちに近い。あるいは、美術館に飾られた絵画を見て、それを描いた画家の想いを知りたいと思うようだ。

何となく、私は彼を目で追うようになった。放課後や昼休みには図書委員という体で図書室の受付を陣取り、彼が来るのを待つ。ストーカーをしたいわけではなかったので、なるべく彼を見ないようには気を配つた。ひとの視線というものは案外当人に伝わってしまうものだ。私は彼の読書の邪魔をしたいわけではない。彼に関わりたいわけでも、なかつた。

彼が図書室に通い始めたのは、私が二年生の時の初夏。それから丸一年と、少し。受験勉強が本格化して私が図書委員をやめるまで、彼が図書室の片隅で本のページをめくるのを感じていた。彼は本を借りることはなかつたので一度も言葉を交わすことはなかつたし、目が合つたこともなかつた。きっと彼は、いつも私が図書室のカウンターに座っていることも知らない。彼に恋情を抱いているつもりは全くないのに、まるで片思いでもしているかのような心地だつた。

受験を終えて卒業式を迎える。久しぶりに私は図書室を訪れた。別れと涙で騒がしい教室から少し離れたこの場所は、いつものように静かだ。卒業式にわざわざ図書室に訪れるもの好きなど私くらいで、誰もいない図書室を悠々と歩く。そしてふと、何となく気まぐれで、いつも彼が座っている一番奥の席に座つてみた。ぎぎ、とくたびれた椅子が鈍い音を立てる。

教室のざわめきは遠く、目の前の窓から見えるポプラの木が風に揺られる微かな音のほうが大きく聴こえた。やはり日当たりはあまりよくないし、天井の蛍光灯もちよど自分の体が影になつて手元を照らしてはくれない。読書を楽しむにはどう考えても不向きな席だ。けれど、彼はずつとこの席で本を開いていた。ただひたすらに、ページをめくつていた。

なぜ、と思った。彼はずつとこの席を選んで座っていた。ほかの席が空いていても、必ず。どうしてだろう、とぼんやりとポプラの葉が風に流されるのを見つめる。どうして彼はこんなにはしつこの、寂しい席に座っていたのだろう。

話したこともない彼の気持ちなど私にはわからないが、何となく、この席で読書を楽しんでいたわけではないよう気がした。

「……さみしい」

やはり、寂しい席だ。孤独で、温かみのない場所だ。そういえば私は、彼が読書の合間に感情を見せたり、まして読書後の満足げな表情を見せたりすることもなかつたような気がする。そういうつた感情を表に出すひとばかりではないけれど、その気配すらも感じたことがなかつた。これまで彼は、相当な冊数をここで開いていたはずなのに。ふと、思った。ひよつとして彼は、読書が目的ではなかつたのではないか、と。

にわかに強い風がポプラを揺らした。ばさり、とその大きな枝がしなる。幾枚かの葉は枝を離れ、地面に打ち付けられた。私は、何となく葉が地面を這つていくのを目で追つていた。地面を離れまいとする葉を、強い風が容赦なく吹き飛ばしていく。

「……さみしかつたんだね」

特に何を思うでもなく、そんな言葉が口をついた。自分で自分の言葉に少し驚いて、思わず指先で口をおさえる。何となく決まりが悪くて、誰にも聞かれていないだろうかと周囲を見渡した。相変わらず、私以外の気配はない。それに安堵して、私は立ち上がる。

彼は、寂しかつたのかもしれない。寂しくて、寂しいからこそ此処に来た。独りがつらかつたから、一人でいられる場所にあえて逃げてきたのだ。——なんて、すべて私の空想にすぎないけれど。

小さく息をついて、その机をなせる。冷たい木目を、指でなぞつた。脳裏に、彼の調子すぎた横顔が浮かぶ。

もしもまたどこかで会えるのなら、彼が幸福に包まれている姿を見てみたい。たとえば彼の寂しさなんてはねのけてくれる「誰か」と、笑つて歩いてほしい。人形のような静謐で調べられた様子は確

かに美しかつたけれど、日当たりの良い場所で心を許せる誰かと笑う
彼の姿も、きっと人間的で美しいことだろう。

いや、それを見たいなどと烏滌がましいことは言うまい。ただ、彼
にそんな日々が訪れればいい。ただ、そう願つてはいる。

墓参り I F

秋も深まつたこの季節、晴れているのに冷たい風が線香の煙を揺らしている。

両手を合わせるとじやらりと数珠が軽い音を立てた。そのままを両目を閉じる。いつもこのとき、何を思つたらいいのかわからない。伝えたい言葉は山とあるが、そのほとんどが説教と罵詈雑言だ。さすがに気が引ける。

それならどうしてわざわざ命日に墓参りをするのかと言われば、このタイミングでなければ会えないやつがいるからだ。

「早いな、柊木」

ざ、とじやりを踏みしめて近づく足音。

久し振りに聞く声は、少しも変わつていなかつた。

そつと目を開け、声の方へ顔を向ける。

「お前が遅いんだよ、降谷」

かつて肩を並べ、競い合つた同期。

あまり顔をさらせない職務に就いていっているという、公安の捜査官。

もう、唯一と言つていいい存在になつてしまつた友人だつた。

「……少し痩せたか？」

「俺は健康そのもの。目の下に隈つくつてるやつには言われたくないな」

「たまたま仕事が詰まつていただけだ。僕だつて健康だよ」

降谷は萩原の墓の前でかがみ、腕に抱えていた花束を供える。そのまま立ち上がりつて数珠を取り出し、両手をあわせた。

墓前に沈黙が流れる。強く吹いた風が近くの落ち葉を攫つていつた。

「……降谷」

風に紛れて俺の言葉がぽつりと落ちる。

手を合わせていた降谷が、少しだけ顔を上げた。

「……皆、死んだ」

出逢えて良かつたと本氣で思つていた。

生まれて初めてできた認めあえる友人たちだった。

一生、大事にしたい縁だつた。

「……死んだんだな、」

何年経つても、ちゃんと受け入れることはできそうになかった。だつて、何でこうも次々と亡くなつていくんだ。日本警察の殉職者数がどれだけ少ないと思つているんだ。

何でお前たちばかり、一一何で俺の大事なひとばかり、

「……どうしたら、恨まずにいられる?」

それぞれ死に至つた事情は違う。原因も違う。その結果に至つた想いもきっと違う。

だけど、俺は、ただ、もう、何もかも。

この先は言葉にしてはならない。すべきではない。警察に身を置く者として、一一皆の友人として。

そうわかっているのに、俺と来たら、

「どうしたら、」

次の言葉を口にしようとした、その一瞬。

俺より重い体重をしつかり掛けて踏みつけられた足先に、声を上げるもより先に蹲つた。

ぼやけてしまつた視界の端で、情け容赦という言葉を都合良く忘れたらしい友人は素知らぬ顔で息をついていた。まったく、とか言いながら腕組みをしているこのゴリラ、そろそろ本気で殴らせて欲しい。ふるや、とようやく絞り出した俺に、迷いのない蒼が向けられる。

「俺は死はない」

空氣を断ち切るような、きつぱりとした声だつた。

「俺は死なないぞ、柊木」

表に顔を出すことすらできないような職務に就いているくせに。

常に拳銃を携帯する程度には危険の中を生きて いるくせに。

どこにそんな根拠があるんだよと、そんな反論すら許さないような声。

「……降谷、」

「お前は僕のライバルだろう。だつたらそんな情けない顔をさらす

な

相変わらずの寂しがりめ、とからかうように落とされた声に、視界の滲みが酷くなる。ぐつと噛みしめた奥で、音になれなかつた言葉が渦巻いていた。

足先の痛みを堪え、ゆっくりと立ち上がる。

「……これ、絶対腫れてるぞ。加減しろよお前」

「つい力が入った。悪い」

「少しも悪いと思つてないよな」

「お前を正氣に戻すためだ。加減なんてしてられないだろう」

確かに、脳内に渦巻いていた重苦しい霧が晴れたようだ。

本当にひどい顔だつたぞと投げられた軽口にうるさいと声を返し、肺を空にするくらいに息を吐ききる。再び息を吸う頃には、頭の中はずいぶんと冷静になつていた。

「……降谷」

「ああ」

「自分が言つたことは守れよ」

「当然だ」

また息を吐いて、吸う。ゆっくりと呼吸を続けていく。

隣からもかすかに呼吸をしている音が聞こえる。当然だ、降谷も生きている。

冷たい風が吹き抜けていくが、かぜよけ降谷のおかげで寒くはなかつた。

「……柊木」

「なに？」

「大丈夫だ」

降谷の言葉はいつも唐突だ。

何が、とは聞かなかつた。ただ、そうか、と。

俺にはそれだけで十分だつた。

そこで一步分身を引いた降谷に、時間が来てしまつたことを理解する。

「寝る時間は確保しろよ。効率落ちるぞ」

「心配ない。お前こそ栄養をきちんと摂れ、いざというときに力が出

ないぞ

「必要量は食べてんだよ」

いつもの不遜な笑顔が向けられる。

俺もきつと、いつも通りの顔で笑っている。

もう、大丈夫だ。

「すまない、時間だからもう行く。松田の墓は夜にでも行くつもりだ」

「ああ、俺はもう済ませたから。気を付けてな」

じやあまた、と軽い言葉を交わす。

そして何の余韻も残すことなく、さっさと降谷は去つて行つた。まるで明日明後日にはまた会うくらいの気安さだが、今はそれが嬉しかつた。

改めて萩原の名前が刻まれた墓石に目をやり、ひとつ息をつく。

「じゃあ、……また来年」

らしくないと思いながら、萩原に向けて言葉を残す。

ずっと手に持っていた数珠が、少しだけ温かくなつたように感じた。

運命の王子様

王子様を、夢見て いた。

ごきげんようと微笑んで見せるだけの毎日から、私を連れ出してく
れるような。

エリート警察官僚の父、良家の母、家は裕福で、それなりに頭脳も
外見も恵まれて生まれてきたと思う。他所から見ればどれだけ恵ま
れているのかと羨ましがられる生活なのだろう。実際、羨ましいと言
われたことも、嫉妬を受けたことだつて何度もある。そのたびに私は
「良家のお嬢様」らしく、困つたように微笑んで見せるのだ。

大学からの帰り道、夏の暑さが落ち着いてようやく半そででは辛く
なってきた。うすいカーディガンに包まれた二の腕をきゅっと握る。
この道を歩くのも、大学卒業までのあと一年と少し。

卒業したら私は、父が決めた相手と結婚をする。私を外見通りの
「オジョウサマ」だと信じて疑わない、父の部下である人と。

『初めまして』

どんな人だつたのか、正直あまり覚えていない。優しそうな人だつ
たとは思う。顔はあまり見なかつたけれど、その声は穏やかだつた。
父だつてさすがに問題のある人に私を嫁がせるような真似はしな
いだろう。あの男は世間体をとても気にするから、問題のある人を義
理の息子になんて迎えたくないはずだ。きつと、あの人は私のことを
大切にしてくれる。愛や恋以前に、とりあえず「妻」として。

それで、十分。今までだつて、父や母の勧めを無下にしたことなん
てなかつたし、そうして上手く生きてきたのだから。

秋めいた冷たい風が頬を撫でた。そろそろ本格的に秋物の服を出
すよう言つておくべきかもしれない。陽が隠れて風が吹くと少し肌
寒い。そう思つたとき、ふと近くの公園のベンチが目に入つた。

子供たちが楽しそうに遊ぶ公園の、少し外れたところにあるベン
チ。雲の切れ間なのか、そこだけ優しい陽だまりが出来ている。引き
寄せられるように足を進めた。普段は寄り道なんてしないけれど、今
日だけ。少しだけだから、と自分に言い訳をしてベンチに腰掛ける。

あたたかい。そのぬくもりに目を細める。

寄り道をしたのが久しぶりなら、公園という場所に足を踏み入れたのも久しぶりだ。こういう場所で気軽に遊ぶことさえ、私には許されなかつた。というより、その選択肢なんて始めから用意されていなかつた。それがどれだけ息苦しい生活だつたかなんて渦中にいる私は気づけない。気づいたのはいつだらう、ここ数年のうちのことだつた。

後悔しているわけでも、嘆いているわけでもない。不幸だとも思わない。だつてそれが私の当たり前で、そのかわりに得たものがあることも理解している。対価のある不自由を嘆くほど、子どもではなかつた。

ただ、そう、——何というのだろう。夢を見てしまうことくらいは、あつた。

『きつとお嬢様も、王子様と出逢えますよ』

かつて私の面倒を見てくれていたばあやは、王子様が出てくる絵本に目を輝かせる私にそう言つた。その瞳は優しくて、声は温かくて、何度もせがんぐ絵本を読み聞かせてもらつたのを覚えている。

思いもよらないところで王子様と出逢い、新しい世界に連れ出され幸せになる、よくあるシンデレラ・ストーリー。現実に有り得ないのはわかっていても、それへの憧れはいまだにこの胸に燃つてゐる。自嘲せずにいられない。そんな夢を見たところでむなしいだけ。私に許されるのは、せめて父が連れてきた未来の夫が本当に「まとも」な人であることを祈ることくらいだ。

ふと足元にボールが転がつてきた。続いてごめんなさい、とボーグラノが響く。何気なくボールを手に取つた。走つてくる子どもの足音に、返してあげようと顔を上げる。

——呼吸の仕方を、忘れた。

五歳くらいだらうか、さらりとした黒髪に、子供らしい愛くるしい色の頬。きらきらと輝く瞳を嬉しそうに細めていた。

「ボール、ぼくの、です」

えへへつと上機嫌で笑う彼。

自分でも訳がわからない感情が膨らんでいく。

同時に頭の中で警鐘が鳴る。声が響く。

生まれたときからずっと、私を「私」にするために律してきた理性の声。

『だめ』

『わかるでしよう?』

『気づいてはだめ』

そう、気づいてはいけない。

あまりに可愛い男の子、だから少し驚いてしまつただけ。

震える手でボールを差し出すと、ありがとうございます、と少し言いにくそうに彼は言つた。敬語、頑張つて使つているのかしら。そのいじらしさに少しだけ安堵する。そう、微笑ましいと思うのが「正しい」。

ボールを受け取つた彼は、何かに気づいたように瞬きをする。少しだけ首をひねつて私の顔を覗き込んだ。

「おねえちゃん、いたい?」

「え……?」

その感情から目をそらす私の必死の努力を嘲笑うように、彼は言った。

「ないちやいそななお顔してる」

どうして貴方は、そんな顔で、そんな言葉を口にするの。

どうして気づいてしまうの。

そう零れ落ちそうになる言葉を、残つた理性をかき集めて押し込め る。

「……なんでもないの」

ほら、戻らないと、お父さんが待つて いるわよ。

視界の端で少し心配そうにこちらを見ている影が見えた。遠目だけれどよく似ている。きっと彼のお父さんだろう。

彼は少し困つたようにお父さんと私を見比べる。本当に大丈夫よ、と念を置くと、こくりを頷いてお父さんのもとへ走つていった。

その背中を見送り、彼のお父さんもこちらに向かつて軽く頭を下げる。

る。私もひとつ会釈を返して立ち上がった。

そのまま彼らの姿を振り返ることなく、いつものようにゆつたりと歩を進め、公園を後にした。歩き方ひとつとっても品位が表れる。そう躊躇られて、ゆつくりと品良く歩くよう癖づいていた。なのに今は公園から離れるにつれ、だんだんと歩みが早くなるのを止められない。

頬をつたう零になんて、気づきたくなかった。気づかざるを得なかつた。どうして、どうして、とただただ内心叫びながら風を切る。とうとう小走りから全力疾走になつて、家の門を勢よく開けた。家政婦の声になんて気づかないふりをして、自分の部屋に飛び込んで鍵をかける。

ああ、これは。

これは、——恋だ。

私の心は、奪われてしまつた。十五は年下だろう、幼い彼に。

何て愚かな。何て馬鹿な。自嘲する余裕さえない。私の心を奪つてくれる、夢にまで見た王子様。そのベールをはがしてみれば、まさか。——まさか。

その運命の残酷さに、私はただ嗚咽をあげることしか出来なかつた。

どうして私の王子様は、幼い彼だつたのだろう。

どうして私の王子様は、愛の意味さえ知らないような、彼だつたのだろう。

どうして私の王子様は、応えてもくれないのに私の心を返してくれないのだろう。

わかっているの。
苦しくともこの初めての恋にしがみついているのは、私の方だつてこと。

わかっているの。

王子様にとつて、私はお姫様でも何でもないつてこと。

だつて勇気を振り絞つてもう一度彼に声をかけたとき、——彼は私のことを見てすらいなかつたのだから。

桜木本丸① どうらぶクロス

とにもかくにも気が重い。

自分は仕事ならばたいていのことは割り切つて実行できる人間だと自負していたが、何せ本丸に籠もつていると対人ストレスが皆無なので耐性が薄れているのかもしれない。男士しか周囲にいない環境があんなに楽だとは思わなかつた。警察学校よりさらに気が楽つてどういうことだ快適すぎる。

ひたすらに野郎としか接触のない審神者生活のなか、数少ない苦痛な任務がこの会議だ。わざわざ時の政府の施設に足を運び、多くの政府関係者や審神者の前で戦績を発表する。

いや、会議の必要性はわかる。戦果の報告は当たり前のことだし、それに対する評価は当然必要だ。審神者同士で戦果を共有することで切磋琢磨させる狙いもあるだろう。強いて言うならリモートでやればいいじやねえかとは思うが、まあ対面のほうが不正を見抜きやすいとか一応の利点もある。だから審神者会議への出席に納得しないわけではない。嫌だろうが気が重かろうが、やらなければならぬ「職務」なのだから。

仕立てのいいスーツの袖をさすりながら、俺は大きく溜息をついた。

「主つてば溜息もう何回目く？ 大丈夫だつて、今日もめちゃくちや格好いいから」

俺も負けずに可愛いし、と紅く輝く爪を見せながらにつこりと笑う。長く俺を支えてくれてはじまりの刀が可愛いことに異論はないのだが、俺が必要以上に着飾つてることについては不安しかない。

「……俺は目立たたくないんだよ」

「だから言つてるつしよ、主が目立たないとそもそも無理」

この前の竪手切の反応も面白かつたよね、と言われて思わず口をキュッと噤む。

面白かった、というのは顕現時、つまり刀剣との初めての対面のこと

とだ。審神者の祈りを道しるべに依り代に降りた彼らはひとの身を得、名乗りをあげる。それに審神者が応えることで主従の契りとなる。そうだが、俺の場合、何故だかまともに名乗りを上げてくれる刀のほうが少なかつた。

『私は籠手ぎ、……是非一緒にすていじのれっすんを!!』つてもうね、笑うしかないって

「歌つて踊るのは……もういい……」

「え、やつたことあんの？ 主がアイドルやるなら俺ばつちりプロデュースしちゃうけど」

「冗談でもやめて」

自分の顔が整っている部類であることは自覚している。何なら三日月が「ほう、これは……」と感心するレベルであるらしい。

しかし残念なことに、石切をして「……苦労したんだね」と涙させ、青江に強ばつた笑顔で「気休めにしかならないけれど、少し綺麗にしておこうか。何をつて、……聞きたいのかい？」と刀を抜かせた程度には面倒な顔面なのだ。

幼い頃に誘拐されたことに始まり、まあ、うん、それはそれは苦労した。今では完全なる女性苦手に発展し、触れるほどに近づかれれば失神し、何なら過度な視線を受けただけで貧血を起こすほどである。一応リハビリの甲斐あつてだいぶマシになつたが、いまだに完治とは言ひがたい。

だから女性の審神者も多く出席するこの会議は、俺にとつてひたすらに苦痛だった。初めてそれを清光に打ち明けたときは、もう何も言わなくていいと寄り添つてくれた。「主の顔を考えれば納得すぎて何も驚けない」という言葉は聞こえなかつたふりをした。

こんのすけとも相談し、会議の欠席も提案されたが、それは俺のプライドが許さなかつた。仕事は仕事、夢だつた警察官という職を辞してまで審神者として在ると決めたのだ。中途半端にしていては、背中を押してくれた悪友たちにも顔向けができない。

頭を仕事モードに切り替えていれば問題ない、女性の審神者や政府職員とはなるべく距離をとる、だいたい刀剣男士の容姿を見慣れてい

る彼女たちがそんなに騒ぐわけがない、そう思つて俺は堪えた。堪えてきた。

だというのに、——まさか魅了や洗脳効果のある呪具だのまじないだのを差し向けられるとは思わないだろ。

どうやら「人間」で「刀剣男士に並ぶ容姿」、ついでに「審神者としての戦績も良好」は大いに彼女たちを刺激してしまったらしい。

会議の会場に向かえば道中から帰路まであれこれと理由をつけては話しかけられ、戦績の報告中には黄色い声が飛び、文や贈り物を押しつけられる。しかも少しでも対応を間違えようものなら彼女たちの背後に控える刀剣男士が殺気立つ。いや俺にどうしろってんだお前らも少しばかり諫めろそれでも臣下か。清光のフォローがなければ俺は殺されていたかもしれない。

毎回満身創痍で会議から帰つてはぶつ倒れる俺を見て、さすがにまずいと刀たちは話し合つたらしい。どうにかして彼女たちを近づかせない方法はないだろうか、と。

その結果が、厳正なるくじ引きの結果選ばれた、本丸きつての伊達男、燭台切光忠が選んだフルオーダーの細身のスーツ。どういう理屈だよと。「絶つつつ対これが一番似合うから!!」と熱弁されて仕方なく大枚をはたいたブランドものだが、カフスボタンまでこだわりぬいたそれは、俺が着るには少々派手なような。

髪を整えられ香水まで振りかけられた俺は歓声をあげる刀剣たちの盛大な拍手で繰り出されたのだが、まだ誰に見られているわけでもないのにひどく落ち着かない。

「……こんな作戦上手く行くのか……？」

「ま、そこは燭台切を信じとこーよ。大丈夫、文句なしに俺の主は格好いい」

「知つてる」

「主はさ、それこそボロを着たつて絶対目立っちゃうんだつて。主が着たらすり切れてヨレヨレのデニムもヴィンテージに見えるんだから」

「それも知つてる」

「だから逆に、とことん格好良くキメて誰も近寄れないくらいの存在感を出せばいいんだよ」

「それがちょっとよくワカラナイ」

疑わしく思いながらも大人しく勧められるままに袖を通したのは、光忠があまりにも楽しそうに支度を手伝ってくれたからだ。着物を推していた歌仙や「これお前が参考に見てたアイドルの衣装では」と思われるものを掲げていた籠手切は少し悔しそうだったが、それでも俺の身支度を整える誰もがとにかくひたすらに楽しそうだった。

支度の間には代わる代わる刀剣たちが部屋を覗きにきては「よつ色男！ いいじやねえか！」「これは驚きだな……三日月、きみ、負けるんじやないか」「はつはつは、主はいけめんだからなあ」「本当によくお似合いですよ、主君」「会場の女の子たちの方が倒れちゃわないかな」「むしろその方がいいのでは？」「写真集……これは売れるたい」なんて言葉を残していく。博多の言葉は聞き捨てならなかつたので一期に無言で目を向けた。頭が痛そうに頷いてくれたので何とかしてくれることだろう。

童話の王子が着るような衣装を推していった清光の次に付き合いの長い彼も、にこにこと俺を見つめ、言った。

『どんな格好しててもあるじさんはあるじさんだし、ずーっと格好いいけど！ おめかししたあるじさんも、やっぱり世界で一番格好いいから！』

ボクも一緒に行けないのが残念だな」とはしゃぐように腕に抱きついた乱。その横で、衣装が乱れるだろーと笑つて諫める清光。皆が笑顔だった。

いつも俺の指揮で前線を走ってくれる彼らがこんなに喜んでくれるのなら。まあ、どうなるかわからないけど、一回試してみるくらいはいいか、と。

あれこれと考えている間に転移装置が到着を告げる。この扉が開けばそこは時の政府。廊下にも会場にも多くの人間がいて、うるさいほどの視線を身に受けることになる。

ふつと息を吐いた。清光と目が合う。大丈夫、と清光は頷いた。

「じゃ、始めよっか」

愛刀を傍らに、俺は戦場へと臨む。

*

「……いやめっちゃくちゃ絡まれたんだけど……！」

「いやホントごめんデコリたりなかつたかくくく！ 次こそ絶対、絶対に皆ひれ伏すくらい格好よくしようね!! もう後光差すくらい狙つてこ!!」